巻き込まれ異世界召喚記

結城ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
巻き込まれ異世界召喚記

【Ｎコード】
Ｎ５８８３Ｔ

【作者名】
結城ヒロ

【あらすじ】
楽しみにしていたスキー旅行に向かっていた優斗たち４人組。
夜行バスで白銀世界に向かっていたはずが、気付いたらお城の庭園に。
異世界に飛ばされた優斗はそこで魔法学院に通いながら様々なことに巻き込まれていく。

巻き込まれました、異世界召喚（前書き）

異世界召喚もので、半チートもいるファンタジーです。
恋愛あり学園ものなんで気を張らずの読んでいただけると幸いです。

巻き込まれました、異世界召喚

目の前に荘厳な城がある。
自分たちはそれを確認できる庭園に立っている。

「これって……あれかな？」

優斗は友人たちに同意を求める。

「まあ、そーじゃね？」

「た、たたた、た、たぶん！！」

「そうだろう」

修、卓也、和泉の同意を得て優斗は軽くため息をついた。

「どうしてこうなったのかな？」

「知るか」

「し、し、知るはずがないだろ！」

「みなに同じ」

誰も彼も返ってくる言葉は同じ。

「とりあえずはこうするか」

修はそう言うと、両手をあげた。
優斗ほか3人も彼に習って手をあげる。
そう、彼らの今の状況は――

剣や槍を持った兵士たちに囲まれていた。

巻き込まれ異世界召喚記

1話

『巻き込まれました、異世界召喚』

高校2年の冬休み、優斗たちはスキー旅行を予定していた。
優斗や修の部活が少し長い休みに入ったということもあるし、高校

生なのだから友人だけで旅行に行きたい、といった願望もあった。
そうして優斗、修、卓也、和泉の４人は休みを合わせてスキー旅行に出ることにしたのだ。
夜行バスに乗り、友達４人だけで行く初めての旅行。
全員が図らずもテンションがあがった。
とはいえ、次の日の朝から迎える銀世界に向けて遅くまで起きているわけにもいかない。
他の乗客にも騒いでは迷惑だ。
夜中の１２時を過ぎたころには全員、静かに寝静まった。
そしてバスがあと１０分ほどでパーキングエリアに入り休憩を取る、というアナウンスがあったあとだった。
大音量ではないにしろ、その声は確かに優斗には聞こえていて、薄っすらと耳に残っているのは覚えている。
そして数十秒後、だっただろうか。
大きな揺れを感じた。

何だ？　と思ったときにはすでに目の前が真っ白な光に覆い尽くされていた。

そして……今へと至る。
取り合えず全員で手を上げると、彼らは無言で僕らを城の中へと導いていった。
自分たちを連れて行っている兵士たちは注意を４人に向けながらも戸惑った表情を浮かべている。
耳を傾けてみれば、何を喋っているのかがわかった。
なぜかはわからないが、彼らの言葉を『理解できる』という事実があったのが幸いだ。
兵士たちからは『まさか！？』とか『本物か？』などといった言葉が聞こえた。

「なんかあいつらの言葉が理解できんの、俺だけ？」
修が訊いてくる。
「いや、皆分かるのではないか？」
「僕もわかるけど……」
「オ、オレも」
まだビクビクしながら卓也がうなずいた。
修が呆れる。
「お前、いい加減落ち着けって」
「い、いや、だっておかしいでしょ！？　スキーに来たはずなのに広場にいるし……っていうか城が目の前にあるなんて！　しかも明らかに日本人じゃないのにオレら言葉わかるし！」
卓也が落ち着かないのもわかる。
兵士が口を挟みはしないものの、自分たちを見ている。
どうやら会話をするのは許されているようだ。
「異世界召喚ものってそういうものだろう」
和泉が何事もないように言った。
「いや、そんなあっさり言うなよ」
「そういうもんだろ」

「修も同意しないで」

「でもそれ以外ねーし」

「まあ、そうなんだけどさ」

否定はできない。

「それに“一つなぎの大秘宝”にもあっただろ。『人が想像できるすべての事は起こりうる現実だ』ってさ」

有名な漫画に書かれてある台詞の一つを抜き出す修。

「そ、そんなんで納得していいのか？」

卓也が優斗を見る。

「んー、一応はあれ実際いる有名な学者の台詞だし。実際にここにいるんだからしょうがなくないかな？」

自分以外の3人が落ち着いているのを見て卓也は大きくため息をついた。

「……お前ら見てると、慌てるのが馬鹿らしくなってくる」

「修や和泉はともかくとして、これでも僕は驚いてるよ」

「顔に出せ！」

「無茶を言うな」

武器に囲まれているというのに、気付いたら変な場所にいるというのに、随分と余裕のある会話をしていると優斗は思う。
もちろん、それは友人たちが一緒だからなのだろう。
さすがに自分一人だけでこの状況だったのなら、卓也と同じになっていたのではないだろうか。

「さて、と。卓也も落ち着いたことだし、状況を考えよう」

優斗はまとめるように切り出す。

「たぶん、というよりほぼ絶対に僕らは異世界に飛ばされました。
理由はいくつかあるけど、確実なのは気候が違いすぎる」

雪国を目指していたのに、今の自分たちがいるのは温暖な気候。冬用の格好がことさら暑さを助長させている。
時計を確かめてみても、自分達が眠ってから1時間と経ってない。
さすがにこれでは何と言おうと国外説は無い。さらに外にいるから屋内でもない。いきなり逆の半球に行かないかぎりこうはならない。

「オレらが眠っているあいだにドッキリで――」

「それはねえよ」

修が否定する。

「なぜ!?」

「ロマンがない」

「……」

さすがにその返答はないだろ、と優斗は心の中でツッコミを入れる。

「それにギャルゲでもＲＰＧでもあるだろ。こういうの」

「いや、まあ……あるけどさ」

修の言葉に否定はできない卓也。

「お前、オタクが二次元設定を否定したら終了だろ」

「だからって自分の身にそれが起こると思わないじゃん！」

アニメはアニメ、ゲームはゲームだろ、と言いたい。

「そうなったときの想像ぐらいはしろよ」

「そうだ」

修の言葉に和泉が同意する。

と、ここで兵士たちが止まった。

厳かな扉がゆっくりと開かれ、玉座が見えてくる。

「謁見の間というやつか」

「だろうね」

和泉の言葉にうなずく優斗。

「ということはデフォルトな異世界召喚から考えると、罪人か勇者認定かのどっちかだろう」

「で、できれば後者がいいんですが」

「僕も卓也に同意」

「まあ、話せばわかんじゃん」

卓也、優斗、修も流れはテンプレに沿ってるな、と思う。

はてさて、どうなることか。

玉座のすぐ近くまで通される。

そこには威厳ある王様、傍らには王妃、そして――お姫様がいた。

王が口を開く。

「君たちが異世界のものかね？」

威圧するわけではないが、聞いただけで『ああ、王様だな』などと思う声が４人の耳を通り抜けていく。

そして王の言葉によってここが異世界であることを確信する。

「おそらくは」

返答は優斗がした。

こういう、キッチリとした場面のときは基本的に優斗に任せるのが彼らの中での必然的な流れだった。

「そうか。呼び出してすまなかった」

「ということは貴方様が我々をこの地へ呼んだ、と解釈してよろしいのでしょうか？」

「その通りだ」

「なぜ？　とお尋ねしてもよろしいでしょうか？」

「もちろんだ」

王様は蓄えた髭を撫でると、４人を見回す。

「君たちの中に勇者の刻印を持つものがいる。その者にわが国の勇者になってもらいたいのだ」

「勇者の刻印、ですか？」

４人は総じて『後者来た！』と心の中で喜ぶ。

「そうだ。先代の勇者が老衰で亡くなり、後任を呼ばなければならなかった。我が国では代々、勇者の刻印を持つものを召喚して我が

国の勇者になってもらっているのだが……」

そうして王様は少しだけ困ったように４人を見た。

「４人も異世界の人間が来るとは予想外だった」

「それはもしかして、その勇者以外の我々は……その……」

ふと、変な予感がよぎる。

というよりも確定だろう。

「巻き込まれた、ということでしょうか？」

「……そうだろう」

「ですか」

「勇者にも申し訳ないことをしているのはわかるのだが、巻き込んでしまったとなると、勇者以外の者にはさらになんと言えばいいのやら」

本当に申し訳なさそうな表情をする王様。

まさか巻き込まれた、というのは意外だったが自分ら４人が一緒に異世界に来た、というのは同時に心強くもある。

「いえ、気になさらないでください。それで勇者の刻印というものはどこにあるのでしょうか？」

さして気にした様子もなく優斗が尋ねると、王様はかぶりを振って気を取り直す。

「右手の甲だ。強く力を込めて念じれば浮かび上がってくる」

王様の言葉に優斗、卓也、和泉はまず修を見た。

「な、なんだよ？」

「主人公体質のお前だから確実に刻印持ってるだろう。さっさとやれ」

和泉が促す。

「お前ら、リーダーの扱い悪くね？」

一応、優斗たちのグループでリーダー役になっているのは修だ。
あくまで一応ではあるが。

「ご都合リーダーだからいいんだろう」

「そうだ。さっさとやれ、オレらのご都合リーダー」

「こういうときにこそ力の発揮どころだよ」

先ほども述べたとおり、修は主人公体質だ。
運動神経は抜群、そこそこ勉強もできるし顔もいい。
『何かを持ってる』と思わせる。
まあ、オタクなのが全てぶち壊しにしてはいるが。
それでも主人公体質なのは間違いない。

「わかったよ。まったく」

ぶつぶつ言いながらも、修は右手の甲に力を込める。
勇者の印は――あっさりと出た。

「やっぱり」

「オレらやるだけ無駄だし」

「そうだな」

優斗、卓也、和泉は無駄なことをせずに喜ぶ。

「王様、勇者の刻印を持っているのは彼――内田修というものです」

振り返り、優斗は結果を王様に告げる。

「他の3人――つまり宮川優斗、佐々木卓也、豊田和泉は何も力を持っていない異世界者ということになるのですが……どうすればよろしいでしょうか？」

「申し訳ないが召喚は一方通行であり、元の世界に返す方法は現在に至っても確立されていない」

ここに来て帰れない宣言が来た。
どうすんの？　と修以外の3人が視線を合わせる。
もちろん修を残して自分の世界に帰ることは、友達であるので考えてはいないものの、さすがに元の世界に帰る方法が確立されていないとは驚きだ。

「しかし、異世界の者たちは皆、優れた能力を持っていると聞いて

いる。勇者の刻印がなかろうとな。そして勇者の年齢が若いということもある。できれば友人のそなたたちが勇者を支えてくれると助かるのだが」

つまりはよくある『異世界に来たら能力あがってる』というパターンか。

そして視線で卓也と和泉に王様の発言に乗っていいか確認を取る。

こくん、と二人から頷かれた。

「そのご提案に乗らせていただいてもよろしいでしょうか。我々も彼一人にするのは心配だったもので」

と、ここで気付く。

「そういえば修、お前はこの国の勇者になるんだよね？」

そういう方向性で優斗は会話を続けていたが、肝心な本人に確認をとることを忘れていた。

「そりゃ勇者やったほうが楽しいだろ」

ですよね。

「というわけで、よろしくお願いいたします」

◇　◇

王様との話が終わると、王様の傍らにいたお姫様が自分たちのところまで寄ってきた。

「貴方様が新しい勇者様なのですね！」

美しく、長い金髪。吸い込まれそうな碧眼。そして均整の取れたプロポーションを持つお姫様。

そんな彼女が修の手をしっかりと握った。

「わたくし、第一王女のアリシア＝フォン＝リライトと申します。アリーとお呼び下さい」

そして修の手を握りながら、他の三人にも頭を下げる。

「皆様もよろしくお願いいたしますわ」

ペコリ、と三人も頭を下げる。

そしてすぐに直感がよぎった。

――あいつ、早速フラグが立ってるんじゃね？

勇者の刻印を持つイケメン。

そして同世代。

フラグとしては完璧だと思う。

「どう思う？」

「まあ、立ったんじゃない？」

優斗の疑問に卓也が答える。

「相手は三度の飯よりギャルゲが好きな修だが？」

「いや、お前も同じじゃん！」

「そうだ」

「……和泉。自信満々に納得するところじゃないよ」

「けど、お姫様に修を攻略できるのか？」

「卓也も難しいこと言うね。あいつ、リアル恋愛はお子様だから攻略するの難しいよ」

「それは俺ら全員がそうだろう」

どいつもこいつもリアルで恋愛などしてきていないのだから。

主に二次元の恋愛に興味はあるだけ。

「頑張れって応援だけはしてあげようよ」

こそこそと男三人で密談する。

「おい、何を喋ってんだ？」

「気にしないでよ」

とりあえず、お姫様のお相手は修に任せるとして。

「じゃあ王様と話を詰めてこようと思う」
優斗が切り出す。
「いってらっしゃい」
「いってら」
「……お前ら2人も来いよ」
と言いつつも、優斗は連れて行くのを諦めて王様と今後のことについて話し合うことにした。

◇　◇

「とりあえずは分かった状況、決まった現状を全員で共有しようと思う」
まず自分たちは異世界に来た。
そして王様に修が勇者と認定された。
自分たちはそれを助けるために残る。
「さて、と。ここまでは修達も知ってる話。で、ここからが追加情報ね」
優斗は言葉を続ける。

自分たちはこれから魔法学院に通うということ。
寝食はそこの学院にある寮を使う。
異世界者ということは基本的に隠すこと。
まあ、基本的な異世界ものの流れだ。

「という感じかな」

「へぇ、やっぱ魔法あるんだ」

「ほんとに異世界なんだって実感するよ」

修の感想に優斗がうんうん、と頷く。

「それでここからがちょっとしたバッドニュース」

「なんだ？」

和泉が疑問の様相を呈した。

「王様と話をしててさ、気付いたんだけど……」

つい先ほど、王様との会話を思い出す。

「僕たち、向こうの世界で死ぬ直前だったみたい」

「「「……はぁ？」」」

優斗の発言にハテナマークを灯す三人。

「王様に訊いたんだよね。『今まで勇者になることを断った人はい

るんですか？』ってさ。そしたら『基本的に異世界の人間を召喚できる資格として人生に悲嘆した人物、もしくは死にそうな者』って言ってたんだよ。つまりはこっちに来ても問題がない人がこの世界にやってくるってことかな」

「……で？」

修が先を促す。

「少なくとも、スキー旅行に行く状況で僕らが人生に悲嘆するわけがない。ということは後者の『死にそうな者』に当てはまるわけで。こっちに来る直前に感じた揺れる感覚。あれってこっちに召喚される前触れっていうより、バスが横転しただけなんじゃないかと」

「要するに、オレらってあっちでは……」

「たぶん死亡扱いじゃない？」

「……マジ？」

「マジ」

卓也の確認に優斗は頷く。

「それで、まさしく死ぬ瞬間だった修がこっちに召喚されて、僕らは四人で固まって寝てたから他三人は巻き込まれてこっちに来た。というのが僕の予想」

「じゃあ、修様々ということなのか？」

「そういうことだね」

つまり修の主人公体質で助かった、というのが事の真相。

「まあ、僕は両親いないし、この世界にいたところで問題はないけど」

「俺は仲悪いし、なんか清々してそうだ」

「オレはあの家にいるのも結構キツかったし、別にこっちでいいし」

「うちはいなくなったところで『旅に出たんだな』で終わるぞ」

四人で顔を見合わせる。

「つまりは元の世界に戻れなくても問題ないってことか？」

修が結論付ける。

「だね」

優斗はう～ん、と伸びをする。

「だいたいこんなとこだけど、何か聞きたいことある？」

「そんじゃあ、質問」

修が手を上げた。

「魔法って簡単に使えんの？」

「みたいだよ。簡単なやつなら、どんな人でも魔法は使えるみたい」

続いて和泉。

「文字とかって読めるのだろうか？」

「読めない」

「……覚えろということか？」

「そういうこと」

と、ここで伝え忘れていることがあった。

「あ、でも僕らのために家庭教師を付けるって言ってたよ」

「へぇ、そうなんだ」

「うん。今のところ決まってるのは修の家庭教師だけ。他三人は明日中に王様が決めるってさ」

「何で俺だけ決まってんだ？」

「僕が『姫様でいいんじゃないですか？』って言ったから」

「……おい」

「問題あった？」

「まあ……特にないが」

ただ、なんとなく釈然としない。

「そういうわけで、明日の予定は学院に通うための制服の採寸とかあるから、起きて朝飯食べたら王様のところに向かいます」

「りょーかい」

「オッケー」

「わかった」

「それじゃ、寝ましょうか」

そうして四人は就寝する。

長い異世界での一日目は、こうして終了した。

家庭教師がつきました

異世界に来てから2日後。
優斗達は自らの家庭教師と対面するために城の一室へと集められていた。

「どんな人が来るんだろうね？」

「ざます、とかいう家庭教師が来なければ何でもいい」

テンプレのような人物だけは勘弁だと和泉が言う。

「優しそうな人がいい」

「俺だけ、その楽しみがないんだけど」

「シュウ様。わたくしでは不満でしょうか？」

同室にいるアリーに少し悲しそうな顔をされて、修が慌てて否定する。

「い、いや、そんなことはないけど」

「それならいいのですが……」

と、アリーはここで表情を切り替える。

「家庭教師は同じ学院、同年代で信頼できる貴族の学生ですわ。学院生活での何かしら不便なことが多いと思いますから、そのサポートも兼ねています。何かわからないことがあれば、遠慮なく申してください」

そしてアリーは侍女に合図を送ると、侍女は扉を開けた。

しっかりとした足取りで優斗達と同年代の少年少女が制服姿で入ってくる。

「左からフィオナ＝アイン＝トラスティ。彼女はユウト様の家庭教師となります」

艶やかな黒髪が背中まであるストレートヘアー。出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいるモデルのようなスタイル。大和撫子を連想させる和風の美少女だった。

「よろしくお願いいたします、ユウト様」

ただ、その割には表情があまり動かない。

あまり感情を表に出さないタイプなのかもしれない。

「続いて中央、ココ＝カル＝フィグナ。タクヤ様の家庭教師です」

「あ、あの、よろしくお願いします」

同年代の少年少女と比べるとちんまりとしているが、栗色のショートカットと愛らしい瞳が身長と相まって可愛らしさを引き立てている。

卓也自身が同年代よりも少し小さいので、隣に立ったところで違和感は生まれないだろう。

「最後にクリスト＝ファー＝レグル。彼はイズミ様の家庭教師となります」

「よろしくお願いします」

キラリ、と白い歯を見せて微笑む。

何というか、金髪さわやかな王子様が絵本から飛び出てきたようだった。

二枚目ではあるのだが、同時に三枚目の要素も持ち合わせている、そんな感じだった。

「……なんでだ」

と、ここで和泉が声を震わせた。

「なんでなんだ？」

もう一度、同じことを言う。

「あ、あの、何か不都合があったのでしょうか？」

アリーが少しうろたえたようにしている。

家庭教師三人もどうしたのか、と。

何か自分達に粗相があったのかと不安が生まれる。

が、他の三人は何が言いたいのかわかったので、とりあえず代表して卓也が和泉の頭をはたいた。

「気にしないで下さい。自分だけが男の家庭教師だったので、なぜ『女の子』じゃないだと思っているだけですから」

優斗が説明して、

「特にあんたらが悪いわけじゃないから気にしないでくれ」

修がフォローする。

「それならばよろしいのですが……」

「よろしくない！」

頭をはたかれた和泉が勢いよく立ち上がる。

「なぜ！　なぜ俺だけがこんなイケメン家庭教師なんだ！」

褒められているのか貶されているのかわからないので、曖昧な表情を浮かべるしかないクリスト。

「なぜ、と申されましても……信用足りうる方を選別したあと、一

番良い相性のペアを作っただけなのですが」

「どのようにですか？」

「我が国の宮廷占い師によって相性診断をしてもらっただけなのですが」

一応、この国の一番偉い占い師が行ったことなので間違いはないと思います、とアリーは付け加える。

「そういうわけらしいから、諦めろ」

隣では卓也が和泉の肩を優しく叩こうとする。

だが、

「いや、こんなイケメンなのだから女装をすれば――ッ！！」

トンチンカンな発言をしようとした和泉を、卓也が椅子ごと蹴り飛ばす。

あまりにとんでもない光景を目にして、どう対処していいか分からないアリー以下教師三人。

優斗は和泉が復活しないのを見届けてから、何でもないように言葉を続けた。

「相性のことについてはわかりました。こちらとしても色々と教えていただく立場です。なにかと問題は多いかとは思いますが、よろしくお願いいたします」

殊勲に優斗が頭を下げる。

それに習って修と卓也も頭を下げた。

「え、えっと、その……いえいえ、こちらこそ勇者様御一行に粗相がないように気をつけますので……」

言いながら、チラリとアリーは和泉を見た。
あれは大丈夫なのだろうか、と。

「皆様も和泉については気にしないで下さい。クリスト様もあんなのが生徒では苦労すると思いますが、是非とも見捨てないであげてください」

「い、いえ、それは異世界の方ですから丁重に扱わせていただくのですが」

「そんなそんな。和泉をそんな風に扱っては駄目です。ぞんざいに、テキトーにあしらう術を持ってください。でないとストレスになってしまいます」

「だな」

「その通り」

異世界組が頷く。

「というより、こちらが生徒なのですから丁重に扱われても困ります」

こちとら日本で言えば一端の平民だ。
貴族の方々に無礼できないのはこっちのほう。

「それに同じ学院の生徒ですし、私達としましても異世界から来たことを基本的には隠して過ごすことになっています。皆様に丁重に扱われるといぶかしむ人がいると思いますよ」

優斗にそう言われると、困ったような表情をクリスト達は浮かべた。元来、この世界では異世界から来たのは最高級の客人であり、貴族よりも位が高い方々だ。

「ですが――」

「あ～、もうやめやめ！！　丁寧すぎる言葉は駄目！　面倒なの禁止！」

と、ここで修が停滞しそうになった空気をぶった切る。

「同年代、同じ学院の生徒、それ以上でもそれ以下でもなし！　だから気楽に行こうぜ！」

そしてパパッと自己紹介をする。

「俺は内田修。勇者の刻印とかあって、この国の勇者をやることになった。こいつらからはご都合リーダーって呼ばれてる。修って呼んでくれ、よろしく！」

ポカン、とした表情を浮かべる家庭教師達。
優斗と卓也はクスクスと、次第に大きな声で笑った。
そう、これが修なのだ。
シンプルな考えが彼の真骨頂だ。
それに卓也も優斗も乗っかった。

「続いて佐々木卓也。料理が得意なので、この世界の料理を作れるように頑張ろうと思う。卓也でいい。よろしく」

「さらに続けて宮川優斗。本とかに興味があるので、早く読めるようになりたいと思います。優斗と呼んでください。みなさん、よろしくお願いします」

「で、こっちで倒れてるのが豊田和泉。バカ。以上」

修が簡潔に和泉を説明する。

「では、そちらも改めて自己紹介をお願いします」

笑って優斗はアリーから促す。

「あ、アリシア＝フォン＝リライトです。第一王女です。アリーって呼んでください。ど、同年代の友達募集中です！　次、ココさんお願いします」

急にふられてオドオドしながらココが答える。

「わ、わたしはココ＝カル＝フィグナです。ココと呼んでください。目標は身長をあと１０センチ伸ばすことです。よ、よろしくです！　つ、次はフィオナさん！」

フィオナも表情を微かに驚かせながら続ける。

「私はフィオナ＝アイン＝トラスティ……です。趣味は……読書。私も、と、友達募集中……です」

顔をわずかに赤くしながら自己紹介をするフィオナ。
そして最後に、

「クリスト＝ファー＝レグルと申します。皆様からはクリス、と呼んでいただけると助かります。どうぞよろしくお願いします」

これで無事に全員の自己紹介が終わった。
優斗はこのまま、

「ではこれから、お茶会でもしましょう。そして親睦を深めたあと、最初の授業でもしましょうか」

◇　◇

「まず、この世界は『セリアール』と呼ばれています。３つの大国と連なる属国が存在し、その全てが不可侵条約で結ばれています。今、シュウ様がいるのは大国の一つ、リライト王国。他の国では珍しい四季というものが存在する国です」

「ってことは、春夏秋冬があるってことか？」

「そうです。年ごとに折々の風景を見せるのは旅人にとって絶好の観光になるようですわ。なので長期滞在者が多いのも特徴です」

修は難しいことを考えず、ようは日本と同じなんだな、ということで頭の中をまとめた。

「我が国の通貨は『ＹＥＮ』です」

「円？」

「少し発音が変な感じはしますが、その通りです。おそらくは物の売買システムも話を聞いた限りではイズミさんがいた世界と同じでしょう」

「へぇ～」

世界が違ってもあまり社会の構造に変わりは無いんだな、と聞き流しながら和泉は思った。

「この世界にはですね、魔物というものが存在します。え、えっと、とっても怖い存在なので、こういうのを討伐するのには王国軍とかギルドとかがあります。私達の学院の卒業生の７割は王国軍に入るか冒険者となってギルドの依頼をこなして生活を送っています」

「や、やっぱり魔物とかいるんだ」

「はい。で、でも普段は絶対に関わらないですよ！」

そこで卓也は遠い目をした。

「ってことは、いつかは絶対に行くことになるよな」

「ど、どうしてです？」

「修とか和泉とか修とか修とかがいるから」

こんな面白そうなことない、って言って連れていかれる未来が簡単に分かる。

「へぇ、文字は基本的に僕らがいた国の平仮名と片仮名を合わせたもの、と考えたほうが早いかな」

もちろん、文字は違う。

が、感覚的に似ているものがある。

「わかりやすい」

これならば数日のうちに会得できる。

「……では、魔法についてお話いたしましょうか？」

「お願いします」

「僭越ではありますが、魔法についてお話いたします。魔法は基本的に４元素、火、水、風、土となっています。そこから様々に派生していき、多種多様な魔法が存在します。大抵の人は元素によって得手不得手がありますが、日々の生活を行う際には特に気にする必要はないと思います」

しかし、とフィオナは続ける。

「魔法学院では魔法を中心とした授業を行います。最終的には中級魔法を１つ、ないし２つ以上使えるまでになること、初級攻撃魔法いくつかの詠唱破棄を目標とします」

「やはり魔法によって階級が別れているんですか？」

「はい。初級、中級、上級、神話となっています。上級を使えるとなると兵士、ないしギルドの人間としても重宝されます。神話クラスは基本的にシュウさんのような方が使うような魔法です」

「そうですか。では詠唱破棄というのは？」

「魔法は言葉によって発動する、というわけではありません。言葉が意識を作り、イメージを呼び、魔力が反応します。言葉を使用するのが魔法を使う上で一番簡単なツールだからです。つまり詠唱というのは魔法を使うにあたって万人が共通してイメージを持てる台詞だと考えてください。詠唱破棄とは、その簡単なツールを手放して魔法を使え、ということです。とはいえ、詠唱せずに魔法を行使

すると大抵の人は威力が落ちます」

ただし、と付け加える。

「これはあくまで上級魔法に関してまでです。神話魔法は詠唱――言霊によって制約という枷を外し、神の如き魔法を呼び出します。つまり神話からは言霊が必要になる……らしいです」

「らしい？」

「……私も……実際に見たことはないので、教科書の記述をそのまま言っただけです」

「了解です」

要はマンガやＲＰＧと同じなんだな。

◇　　◇

～翌日～

「とりあえず、基本的な魔法を使ってみましょう」

せっかく魔法を使える世界に来た、ということから４人集まって魔法を実際に使ってみることにした。

「みなさん、どちらの手でもいいので人差し指をまっすぐ前に突き出してください」

アリーに言われた通り行動する。

「そして火をイメージしてください」

卓也などはやりやすいように目を瞑った。

「その火が指先に集まり実在するイメージ」

たったそれだけで指先に火が生まれた。

「魔方陣すらも浮かびませんが、これが簡単な魔法です」

4人とも、指先から炎が出る。

「おお」

「なんか不思議だな」

「これは面白い」

「熱くないから変な感じがする」

魔法がしっかりと使えることに感動を覚える。

そして初級の攻撃魔法などを習い始める。

異世界の人間の能力が高いというのは本当らしく、初級の魔法は簡単に使えた。

続いて中級魔法でも習ったほうがいいか……としたところで和泉と修がふざけはじめた。

「お前ら見てろ。『俺のこの手が真っ赤に――』」

「修、燃やすな！」

「ならばフィンガー・フレア――」

「和泉、やるな！」

卓也と優斗が和泉と修の頭をはたく。

「あの、今のは……？」

アリーが一連のやり取りに混乱して、とりあえず訊いてきた。

「僕たちの世界にあるゲームやマンガの物真似ですよ。修とか実際にできそうな気がするんでやめさせました」

「そ、そうですか」

よくわからないが、取り合えずコントのようなものだったのだろうとアリーは結論付けた。

「一応、僕達初級魔法までは使えるようになりましたけど、このまま中級魔法も試していったほうがいいですか？」

「いえ、学院で魔法を使う分にはこれだけで十分ですわ。あとはそれぞれの家庭教師の方と相談しながら魔法を覚えていったほうがい

いと思われます」

と、ここで優斗に疑問が生まれた。

「ちなみに皆さんはどのレベルの魔法まで使えるのですか？」

「わたくしは基本４属性全ての上級魔法を使えます」

これはアリー。

「わ、わたしは土と水の上級魔法使えます」

ココらしい。

「私は風と水なら上級まで」

とはフィオナの弁。

「自分は火と土は上級まで大丈夫です」

最後にクリスが答える。

つまりは全員がトップレベルの魔法を使える、ということだろう。

「オレ達がそのレベルに行くのはどれくらいかかる？」

「魔力総量や実力に左右されますので何ともいえませんが……異世界の方ですしシュウ様以外でもおそらく、２ヶ月ぐらいで使えてしまうのではないかと」

「ということは修はもう使えるのですか？」

「はい。勇者様ですから」

やっぱりチートの刻印持ちは優斗たちと最初の一歩が違う。
ただ、優斗はだからこそ面白いと思う。
追いかける甲斐があるというものだ。

◇　◇

そして優斗たちが異世界に来てから１０日後。
大体のことを習った彼らは、晴れて魔法学院へと編入することになった。

チーム結成

無事に編入できた異世界４人組。
１週間ほど家庭教師にはつきっきりで教えてもらえていたのも、当時は春休みだったからしい。暦は優斗たちがいた世界と考え方も特に変わりはない。
クラスは３クラス。生徒の数は３０人。
異世界からきた４人をフォローするためにも全員が同じクラスに固まった。
優斗たちは田舎から編入してきた、ということにしている。
特に問題なく始業式を終え、帰ろうとした。
その時、騒ぎが起こった。

「さて。帰るか」

「だね」

別途で勉強もしなければならない。
卓也と共に優斗も鞄を持って席を立つ。

「アリー、クリス、ココ、フィオナ！！　お前らも一緒に帰ろうぜ！」

修が同じクラスにいる家庭教師に声をかける。

――あっ。

やっちまった。

少なくとも優斗と卓也はそう思った。

教室がざわざわと騒ぐ。

『なに、知り合い？』『アリーって……アリシア様のことよね？呼び捨てなんて何考えてるの？』『公爵家になんてぞんざいな口の利き方なんだ、あいつは』

などなど、礼儀のなってない馬鹿扱いされる。

すると、だ。

一人の煌びやかな装飾をした男が修の前に歩み寄ってきた。

「おい、そこの田舎者」

「なんだ？」

「王族や公爵家の者に対して口を慎みたまえ」

「お前、だれ？」

ピクリと眉が動いた。

――怒ってるな、あれ。

修の空気の読まなさには慣れている。

このあとの展開も大体読める。

「わ、私を知らないのか！？」

「田舎者なんだから知るわけないだろ」

そりゃそうだ、と優斗と卓也はしみじみ思う。

「私は貴族、パリーニュ子爵の息子であるラッセルだ！」

「そうか。で？」

「口を慎みたまえ、と言ったのだ。貴族に対して無礼だぞ」

「そんなものはあいつらが決めることだ。お前に言われることじゃない」

ばっさりと切り捨てる。

「そんじゃ帰るか」

彼の横を通り抜けて歩き出す修。

それに付き添う他の３人。

「お前らも行こうぜ」

ニッ、と屈託のない笑みを浮かべる。

アリーは少し顔を赤くしながら、ココは慌てた表情で、フィオナは無表情、クリスは苦笑しながら彼に従って歩き出す。

後に残ったのは……怒りに顔を歪めるラッセルと、戸惑った表情を浮かべるクラスメートだけだった。

◇　　◇

「あの……俺はいつまで正座をしていれば――」

「もちろん、いつものように僕が許可したら正座やめていいよ」

「……了解」

優斗がそう言うと、黙って正座を続ける修。

現在、彼らはリライト公園という、国の中でも一番大きい公園の中にいる。

「あの、わたくし達には害があるわけではありませんし、あのように接していただいて嬉しかったのでそろそろ勘弁していただけると」

「アリーさん、それはぬるいです。あいつがやったことは確かにアリーさん達にとって褒められることではあります。けれどですね、その後の対応が最悪なんです。それを反省させるためにも正座は続行させます」

「けれど……勇者様に正座をさせるというのは、なんとも恐れ多いというか」

「だいじょうぶだ。勇者の前に“馬鹿その2”である修だしな」

そうして卓也は遠い目をする。

「懐かしいな。後先考えずに修が不良から女の子を助け出したら、案の定翌日に不良８人に囲まれたこと」

「僕も懐かしい。修が浮き輪で流されてる子供を見つけて、ロープも何も持たずに飛び込んでいったことが今でも腹立つくらいに思い浮かぶよ」

その他、あれやこれやとエピソードを出す優斗と卓也。

「そ、それってシュウさんがすごい人助けをしているってことですよね？」

ココがフォローするように言葉を発する。

「違います。あいつが何も考えずにやるからフォローするのが大変という話です」

「事件を解決しようとするのはいいんだけど、その後が大変なんだよ。主に優斗、次にオレが被害にあってるんだ」

「ふ、不良に囲まれたとき、とかですか？」

「ええ。あの時は修が４人、僕が３人、和泉と卓也で１人を受け持ったんです。学校にばれたら停学になるんじゃないか、などなど考えて裏路地で潰しましたけど、あれは心臓に悪いので勘弁ですね」

二度とやりたくない。

「そういうことがある度に『もっと考えて行動しろ』と言っているのですが、あいつも懲りずに事を起こすので、何かやらかしたら正

座させることにしているんです」

「まあ、修のやつは良いことやってるから怒れないしな」

「まあね」

悪いことはしていないのだから、確かに怒ることはできない。

「で、ではイズミさんはどうなのでしょうか？」

そこでクリスが心配そうに話しかけてきた。

修がこの扱いなら、馬鹿１号である和泉はどうなのか、と。

公園の草むらで豪快に寝ている和泉に視線を向ける。

「和泉は基本的に害が無い馬鹿ですから心配しないでいいですよ。言動は頭のネジが１、２本ほどぶっ飛ぶときがありますが、ほとんど無害です」

「時折、修より酷いのをやらかすけど、まあ……修より稀だからその時は罵倒して蹴りでもかまして終了って感じ」

「よ、よろしいのですか、そのような扱いで？」

「いいんです。和泉のお守りはこれからクリスさんの役割ですから。前にも言いましたが普段のネジがぶっ飛んだ発言は強制的に終わらせたほうがクリスさんの身のためです」

◇　◇

「それにしても皆さんは、仲がよろしいですよね」

アリーがしみじみと言った。

今までの話からしてもたくさんエピソードがある。

長年の付き合いなのだろうか？

「まあ、かれこれ４年ほどの付き合いになりますから」

「最初からみなさんは仲がよろしかったのですか？」

ココがそう言うと、卓也と優斗は顔を見合わせて噴き出した。

「ど、どうしたんですか！？」

「い、いやいや、オレらの出会いを思い出したら可笑しくって」

「だよね。あんな出会い方、誰が予想できるんだって話だよ」

ゲラゲラと笑う2人。

不思議そうに見つめるのは家庭教師４人組。

「オレらの出会いってさ、４年前のクラス替えのときだったんだよ」

懐かしむように卓也は語る。

「それで最初はお互い、クラスメートであって友達じゃなかったわけ。部活も違うし」

「ぶかつ、というのは？」

「同じ趣味、同じ運動をする人が集まって大きな大会で優勝を目指すグループ、と考えてください」

アリーの疑問に優斗が答える。

「それで、みんながクラスに慣れてきた１ヶ月後だったかな。放課後になって部活に行こうとしてた和泉がオレのとこに来てさ、『屋上で待っている』って告げてきたんだ」

「よく知らないのが唐突にそんなこと言うもんだからさ、僕は変人ってイメージが和泉に定着したよ」

笑いながら優斗も茶々を入れる。

「もちろんオレだっていぶかしんだけど、とりあえず行ってみるかと思って屋上に行ったんだよ。そしたら先に修と優斗がいて、フェンス越しに下を見る和泉がいた。で、呼び出した全員が集まったときに言ったのが強烈だったんだ」

「なんと言ったのでしょうか？」

興味津々にココが尋ねる。

「オレらの世界にアニメっていう動く絵の作品があるんだけど、その中の台詞を使ったんだよ」

ああ、本当に懐かしい。

予想外すぎる台詞だった。

「『見ろ、人がゴミのようだ』ってさ」

あの時はマジでビックリしたのを覚えている。

「それは国民全員が知っているような悪役の台詞なんだけど、そんなもの突然言うと思わないじゃん。当然、オレも優斗も修も大笑い。腹がよじれるほど笑って、ようやく息が整ったときに和泉がこっちを振り返って言ったんだよ。『ようこそ、同士諸君。私は君たちのことを歓迎しよう！』って」

「……それは、なんというか……酷い、ですね」

ココが少しだけ引いたそぶりを見せる。

「でしょ。さすがにオレらも引いたんだ。そしたら和泉、掴みを失敗したことに気付いたらしくて『あ、ちょ、そうじゃなくて！　俺は君たちが同属だと思ったからこういう演出をしたまでで！』なんてあたふたし始めてさ。そんなあいつの姿を見て、また大笑い」

ようは同じオタクの匂いを感じたので友達になろう、といった用事なのだが。

何をどうしてそう思ったのか、演出過多でそれを伝えてきた。

「それで、話してみたら似たような趣味を持ってるっていうのがわかって、オレらは仲良くなったんだ。それから一つ上の学校でも同じところ入って、相も変わらず一緒につるんでるってわけ」

懐かしい。もう４年も前の出来事になるのか。

「きっかけはイズミさん、ということなのですね」

ココが眠っている和泉に視線を向ける。

優斗も一緒に和泉を見た。

「ええ。馬鹿っぽいきっかけですが――」

それでも。

あの時の自分達にとっては。

「――最高の出会い方でしたよ」

「だな。あいつがいなかったら、今のオレらはない」

そういう意味では和泉には本当に感謝している。

「みんなはそういったことないのか？」

さすがに自分達クラスのはないとしても、ちょっとしたことぐらい。

と、卓也は思ったのだが……甘かった。

そこにいた４人全員が一斉に暗くなった。

「え、と……地雷踏んだ？」

「だと思う」

特にアリーとフィオナは友達募集中とか言ってたし。

ココとクリスは友達いそうな感じがするけれども、暗くなっているということは何かしらあるのだろう。

「わ、わたくしは友達……いません。王族なので恐れ多いと思っているのでしょうね、きっと」

「……私もいないです。公爵令嬢だし、基本的に無口だし、愛想がないから」

「わ、わたしもです。喋ってくれる人はいるんですけど、基本的に遠慮されてるというか……。やっぱりお父さんが公爵ですから」

「自分も公爵の子息だからでしょうか。女子とは少しばかり話すのですが、男子は突き刺さるような視線しか貰いません。愛想はよくしているつもりなのですが……」

そう言って、４人ともさらに暗くなる。

優斗は優斗でやっぱり、と思う。

まあ、自分達のことを知らせられる貴族の御子息令嬢となれば、貴族でも高位の存在とは思っていたけれども、全員が全員、公爵の家とは思わなかった。

――というか全員友達がいないって。

いくらなんでも作り下手すぎる。

――っていうか、だ。

はぁ、とため息をつくと、優斗は修を呼び寄せる。

「正座は終了。こっち来て」

「りょ～かい」

パッ、と立ち上がると修は優斗たちの近くまで寄ってくる。

「話は聞いてたよね？」

「もち」

「卓也は和泉を……っと。さすが、もう連れてきてくれたんだ」

「優斗が何を言うかはわかりきってる」

「さんきゅ」

和泉は何もわからないだろうが……まぁ、空気を読んで合わせてくれるだろう。

「まずは全員、円になって」

優斗の言うことに修と卓也は納得しながら、他の面々は意味がわからずにではあるが言われた通りに円になる。

「右手を出してください」

貴族組が戸惑う。

だからまず、修が最初に手を出した。

続いてノリで和泉が修の上に手を重ねた。

「ほら、早く手を出してください」

優斗が急かす。

慌てながらアリー、フィオナ、ココ、クリスが手を重ねていく。

最後に卓也、優斗が手を重ねた。

そして視線で修に優斗が合図を送る。

「まず、お前らには最初に言っとくけど……」

修がまずは話し始める。

「俺はお前らと友達だと思ってた。けどさ、お前達はそうは思ってなかったんだな」

だからさ、と修は続ける。

改めて言葉にして伝えた。

「俺らと友達になってくれねぇかな」

そう修が言うと、４人の目が驚きに溢れた。

「これはもちろん俺ら異世界組の総意だ」

視線を配らせれば3人とも頷いた。

「だから俺らが馬鹿やりそうになったとき、困ったとき、色々とあるだろうけど、その時は『異世界の人』だからじゃなくて、『家庭教師』だからじゃなくて、『友達』として助けてくれねぇかな。今日、早速だけど馬鹿なことしちまったし」

ホントだよ、と優斗が茶々を入れる。
全員が少しだけ笑った。

「そんでさ、俺がやった馬鹿とは別の意味で一緒に馬鹿なことやろうぜ」

「そうそう。買い食いだってなんだって付き合う。やったことないだろ？」

卓也が訊けば、４人とも頷いた。

「俺らみたいに一緒に旅行へ行くのもありだと思うぞ」

和泉の言葉にさらに４人は頷く。

「そして世の中には便利な言葉があります。『友達の友達』は『友達予備軍』だと」

ぐるりと貴族の４人に優斗は視線を走らせる。

「修たちがあれほど言ったんです。皆さんは僕らのこと、友達だと思ってくれますか？」

アリーもフィオナも、ココもクリスも頷く。

「なら、アリーさん達は貴方達だけで『友達予備軍』です。僕らを介している『友達の友達』なのですから。どうせなら、お友達になってはどうでしょうか？」

驚いたように４人が左右を見る。

「貴族ですから、何かしら難しい問題があるかもしれません。ですが、そうなっても叩き潰すから大丈夫です。主に修の力を使って」

「俺かよ!?」

「そういう時のためのご都合リーダーだよ」

また、全員が小さく笑う。

「つまり、回りくどくなりましたが、要は難しいこと考えずに全員で友達になりましょう……ってことです」

優斗がまとめると、全員で頷いた。

「だが、ここまで大人数だと軍団って感じがするだろう」

和泉が口を挟む。

「軍団はおっかないから『チーム』でいいんじゃないか?」

「卓也、それ採用!　なんかいい!」

修が全員を見回す。

「いいか、みんな。これから俺らは『チーム』だ!　たくさん遊んで、たくさん馬鹿やって、たくさん勉強……はしたくないが、とにかく全員で楽しく過ごそう!」

修が元気よく号令をかけた。

「じゃあ」

「いくよ！」

そして集めていた右手を卓也と優斗が少し押し下げる。

「えっ？　なにをするんですか？」

「ど、どうするんです！？」

「えっ？」

「どうするんでしょう？」

アリー、ココ、フィオナ、クリス、貴族４人が戸惑う。

「よっしゃ！」

「任せろ！」

が、そんなの無視して次の瞬間、下から今度は和泉と修が勢いよく全員の手をうえに押して弾き上げた。

これが８人にとっての結成式。

友達として。

そして、この先何十年とリライト王国を繁栄させる『チーム』が生

まれた瞬間だった。

他の家庭教師がどのように授業を進めているのかが気になって、アリーは女の子を集めて訊いてみた。

「普段はどういう勉強をさせてるんですか？」

「わたしは基本の魔法講座とか、リライトの歴史とかを教えてます」

「私は魔法の理論とかを主に」

「そうなんですか。わたくしはシュウ様の覚える気がないらしくて、雑談程度に授業をしてますわ」

「へぇ～、苦労してるんですね」

ココががんばってるんだなぁ、といった感じで呟く。

「いえ、シュウ様は言ったことを大体覚えてくださるので、特に困ったり苦労はないんですよ。真面目に聞いてくれないのが難点ですが」

「逆にクリスさんは大変みたいですよ。イズミさんの相手をするの」

「確かに大変そうですわね」

しみじみと全員が頷いた。

「フィオナさんとココさんは特に苦労なさそうですわ」

「タクヤさんは一生懸命な人ですから。わたしが困ることはしませんし」

「ユウトさんは……非常に真面目です。物腰も柔らかくて穏やかで、とても同年代とは思えません」

「あっ、それはわたくしも思っていました」

「でもタクヤさんによると、あそこまでのレベルだと“作っている”みたいですよ。基本的には変わらないけど、もうちょっと言葉も砕けてるって」

そう言われてアリーは彼が仲間と話している様子を思い出す。

「……確かに私達以外と話しているときはそうですわね」

「時間が経てば変わるらしいので、しばらく待ってあげてくれって言ってました」

「そうですね。いきなり異世界に飛ばされて苦労もたくさんあるでしょうし、基本的にはユウト様が皆様をまとめているようなものですから」

あれほど個性の強いメンバーを従えるのは大変なはずだ。

「でも、リーダーってシュウさんのはずじゃ……？」

「それはわたくしも気になって『シュウ様がリーダーではないのですか？』と尋ねましたら『こんぐらいだったら優斗がやってくれる。根は真面目キャラだからな。けど、もっと面倒になったら俺にぶん投げられる』と仰っていましたね。そこがご都合リーダーと呼ばれる所以とも」

「……二人とも、よく知ってますね」

続々と出てくる友人達の情報に、フィオナが少し落ち込む。

「私はあまり、勉強以外でユウトさんと話すこと……ないです」

「なんでです？」

「お喋りするの……苦手ですし、ユウトさんも真面目に勉強してくれているので迷惑かな、と」

「そんなことないと思いますわよ。話しかけてみたら、きっとユウト様もお喋りしてくれるはずです」

「そうでしょうか？」

「そうですよ。がんばってください」

◇　◇

「――ということ、なんですけれど……」

先ほどあった話をアリーが修に伝えてみる。

「あいつは別に根が真面目ってだけで、普段は真面目ってわけじゃないぞ」

「そうなのですか？」

どうみても、異世界組の中では真面目だ。

「真面目なやつが俺らの友達なわけないじゃん」

「でも、授業をしているときは真面目だと」

「魔法を習うのが楽しいっていうのもあるんだろうけど、そうしないと緊張しちまうんだろーよ。フィオナ、もの凄い美人だし」

とはいえ、少しフォローはしてやらないと。

「とりあえず任せとけ。どうにかしといてやるから」

「お前さ、フィオナと話したりしてんの？」

学院寮で不意に修が優斗にそんなことを言ってきた。

「何を突然？」

「俺とかは雑談しながらやってるけど、なんかお前とフィオナだとそんなイメージが沸かなかった」

「……まあ、その予想は当たってる」

長年の付き合いだし、それぐらいはわかるのだろう。

「緊張するのか？」

「まあね。彼女と二人きりの空間というのは非常に緊張する」

「……馬鹿かおまえ？」

「い、いや、だってさ、あれだけの美少女と二人でいるんだよ！そんなの今までの人生になかったからどうしていいかわかんないし！！」

顔を赤くしながら言い訳するように言葉を吐き出していく。

普段は冷静沈着なくせに、どうしてこういうことには弱いのか。

「……なんつーか、典型的なオタクみたいな態度だな」

「否定はできないけどさ……。これでも頑張ってるんだよ」

彼女の前では顔を赤くしないようにする、などなど。

「そんで真面目面してあまり会話をしないようにしてる、と」

「……文句ある？」

「ねぇよ。ただ、フィオナも口下手そうだからな。そんな感じでいつも授業とかしてると息が詰まると思うぜ。これからもずっとな」

「……」

「時には脱線してもいいんじゃねぇの？　のんびり話しながら時間が経てば、お前だってフィオナの美少女っぷりに慣れるかもしれないだろ？」

「かもしれない」

「頑張れよ。異世界から来たやつと美少女ってのはくっ付くのが相場だぜ？」

ニヤリと笑って修がからかう。

「お、おいっ！」

「なんてな。ま～頑張れや」

パンパン、と優斗の背中を叩いて修が出て行く。

彼が出て行く姿を見て、優斗は少しだけ姿勢を崩した。

「……さんきゅ」

◇　　◇

とはいえ、どうしたらいいのか。
特にきっかけもなく、いつも通りに授業を行う優斗とフィオナ。
基本的な魔法学の話が終わり、少し一息つこうとしている時だった。

「あの……」

不意にフィオナが声を発した。

「その……」

視線を右に左にさ迷わせながら、何かを言いたげだった。

「……良い……天気です……」

そう言った瞬間、ぶんぶんとフィオナが頭を振った。

「そうじゃなくて、ですから……えっと……」

ぐっ、と力を込めて何か声を発しようとして、

「……ですから……」

何かを言おうとして、

「……なんでもないです」

ぐっ、とそれを飲み込んだ。

「フィオナさん」

けれども、その姿を見た優斗が逆に彼女に声をかける。

彼女がしたかった意図だって分かっているつもりだ。

「勉強するのにも疲れたので、雑談の相手をしてもらってもよろしいですか？」

たぶん、この言葉を言おうとして言えなかった。

そうだと思う。

答えは、

「……はいっ！」

彼女の返事と、華のような笑顔で。

当たっていたことがわかった。

――そっか。

納得したように、優斗は思った。

ここにいるのは。

とんでもない美人だけれども。

それ以上に。
同学年で。友達で。
何よりお喋りをしようとするのに、こんなにも可愛らしく勇気を振り絞る女の子なんだ。

――馬鹿だな、僕は。

彼女は初めて友達ができて。
たくさん、やりたいことだってあるだろう。
それに数多く応えてあげられるのは、彼女と接する機会が一番多い自分だというのに。

――美人だから緊張する、だなんて。

あまりにも酷い話だ。
思えば、そんな彼女のために修だって昨日自分にああいうことを言ったのだろう。

「フィオナさんは何かやりたいことってありますか？」

「……？」

「こないだ、卓也が言っていたでしょう？　買い食いでもなんでも、やりたいことをやろうって」

そう、だから。
こんな緊張ばっかりの自分は全力で押しつぶして。
彼女がやりたいことをやってあげたい。

「フィオナさんはどんなことをやりたいですか？」

「……ただ……ゆっくりとお話ができれば……いいんです」

フィオナは途切れ途切れにそんなことを口にしながらも、心はもっと貪欲だということを知っている。

――嘘だ。

本当はもっとたくさん、やりたいことはある。

でも、これ以上願うのは贅沢な気がして。

口に出すことは憚られた。

「……フィオナさん」

そして、それに気付かない優斗じゃない。

「僕には言っていいんですよ。気を使うなんてこと、しないでください」

「……そんな……ことは……」

「あるんでしょう？」

絶対的確信を持って訊いてくる優斗に、フィオナはこくんと頷いた。

「とはいっても、すぐに色々なことをやろうとするのは無理かもしれません。僕は女の子と一緒にいると緊張する性質なので」

笑って、優斗は大きく深呼吸をする。

「ですから、ゆっくりでいいのでやっていきましょう」

雑談したり買い食いしたり。

「僕達のペースでたくさん、楽しいことをやっていこうよ」

「……はい」

フィオナはただ、頷いた。

嬉しかった。

――きっとこれは。

友達だから、とかではなく、チームだからというわけでもなく。

――ユウトさんが心からそう言ってくれているから。

こんなにも嬉しいんだ。

ならば、自分も精一杯に答えよう。

きっと。

こういう時にする表情はこれ、だろう。

「よろしくお願いします」

満面の笑みを浮かべて。

フィオナは優斗に返事した。

「なんだかんだで、皆さんってすごいと実感させられますね」

クリスが改めて実感するように言う。

「ですね。全員が４属性の中級魔法を覚えちゃうんですから」

「異世界の人がやはりすごいと言われていても、目の前でやられると唖然としてしまいますわね」

驚嘆、といってもいいかもしれない。

アリー達は修に視線を巡らせる。

「その中でも凄いのは、やはりシュウさんでしょうか」

「詠唱をしてもしなくても威力は変わらず。あげくに上級魔法まで平然と使えますから」

クリスは本当にすごいと感嘆する。

「神話魔法も使おうと思えば使えるのでは？」

フィオナがアリーに尋ねる。

「おそらく使えると思いますわ。歴代でも7割の勇者は使えましたし、それが『勇者の刻印』の力ですから」

最初からレベルが違う。

「……お父様が勇者を召喚せざるを得ない理由がここにあるのですね」

他国の牽制と、自国を守る。
そのための最大限の存在。
今現在、彼の存在を認識しているのはリライトの上位貴族と他国の王族のみ。
彼らの存在が秘匿されている理由は王様のとある理由。
まだ若いのだから、今はゆっくりと遊んでほしい。
そんな謝罪まがいの理由だ。

「もう1ヶ月……経ちますか。あの方々が来てから」

クリスがしみじみと話す。

「わたくしはこんなにも友達ができるなんて思っていませんでした」

「わたしもです。公爵であることが……今は本当に良かったって思ってます」

「ですね。自分もイズミ様の馬鹿騒ぎに巻き込まれるのは大変ですが、それ以上に充実した日々をすごしていると実感しています」

と、ここでココが気になっていたことをフィオナに訊く。

「そういえばフィオナさんはこの間のこと、どうなったんですか？」

それにアリー常々気になっていたので乗っかった。

「ユウト様と話せるようになれたのですか？」

「……はい」

フィオナが顔を真っ赤にしながら頷く。

彼と話すようになってからというもの、フィオナの表情からは様々な感情が素直に見えるようになっていた。

「私たちのペースで一緒に楽しいことをやっていこう。そう言ってくれました」

やさしく、落ち着かせるような声音で。

「今度、一緒に買い食いをしようって誘っていただいて……」

だから少しだけ困った。

「それで皆さんに相談なのですけれど」

つまるところ。

「買い食いって……どうすればいいのでしょうか？」

買い食いの“作法”がわからない。

「わたくしはまだやったことがありません」

「わたしもです」

「自分はイズミ様に連れられて何度もやっていますが」

クリスが肩をすくめる。

「ど、どんな感じなのですか？」

「そのように肩肘を張る必要はないと思いますよ。あれが気になるから食べてみよう、これがおいしそうだ、という感じで食べながら雑談する形です」

「でも、何かしら粗相を働いたら……」

それでもし、優斗に嫌われたりしたら困る。

「でしたらこの後、全員で買い食いするのも一興ではないでしょうか。皆さんなら喜んで行ってくれますよ」

名案のようにクリスが言う。

「こっちでの食べ物は彼らの世界のものとほとんど差異はないと仰っていましたが、それでも料理に違いはあるようですから」

彼らも興味が沸くだろう。

と、ここでアリーが気になった。

「……異世界の料理ってどういうものなのでしょうね？」

「おむらいす……という卵を使った料理がタクヤさんが作る料理では一番おいしいって言ってました。かなりの頻度でタクヤさんのアルバイト先に行っては食べてたらしいですよ」

ココが言ったことは何気なく会話の一端として流しそうになったが……アリーははっ、と気づいた。

「……皆さん」

急に神妙な面持ちでアリーは3人に話しかける。
何事かと不可思議な表情をされたが、アリーは構わずに続けた。

「わたくし、前に2週間ほどリライトから離れたことがあるのですが、それでもこの国の料理が恋しいと思いました」

やはり自分の食べてきた料理が一番合っていると感じた。
でも、そういうことではなくて。
それよりも事態は深刻で。

「……あの方達はどうなのでしょうか？」

料理だけではなくて。
大切な何かをあの世界に残していたりはしていないのだろうか。

「やはり元の世界に戻りたいと思うときがあるのではないでしょうか？」

戻りたいと思えるほどの物があるのではないだろうか。

「もう元の世界には戻れない。それでもやはり……」

そう考えてしまっている人もいるかもしれない。
それは郷里に何かしらの愛着があればしょうがないことだ。

「……今まで、どうしてこのような考えに至らなかったでしょうか？」

1ヶ月も一緒に時を過ごしてきたのに。

なぜだろう。

「お客様、だったからでしょうね」

クリスが答えた。

「……イズミ様達は異世界から来た客人という扱いでしたから」

貴族よりも大切なお客様として扱ってきた。

「今は違います。大切な『チーム』で、大事な友達です」

クリスが断言する。

「友達のことだから心配で」

だからこそ。

「どうにかしてあげたいと。困ってはいないかと……そう思ってしまうのではないでしょうか」

特に初めての友達だからこそ。

「で、でも、そうと決まったわけでもないし」

ココが努めて明るい声を出す。

「も、もしそうだった場合はわたし達が頑張って帰してあげる方法を考えればいいことだから」

「……そうですわね」

自分たちがどれほど考えたところで、真実は彼らの胸中だ。

「確認してみないことには始まりませんわね」

◇　◇

適度に適当に魔法を使って遊んでいた異世界組はちょうどお昼時、というときにアリーに呼ばれた。

「そろそろ昼飯の時間じゃね？」

「今日はどんな料理が出てくるんだろうね？」

「辛いやつじゃなかったらオレはいいかな」

「卓也は辛いものが苦手だからな。俺みたいに辛いものが好きなやつからすると可哀想だ」

「和泉は逆に甘いものが苦手じゃねーか」

和気藹々とアリー達に近寄る。
が、ふと異変に気づいた。
アリーを始めとして４人の表情が皆一様に硬い。

「どうかしたのか？」

いぶかしむように修が訊く。
それを皮切りに、アリーが口を開いた。

「皆さんに尋ねないといけないと思います」

唐突な真剣な声音に優斗達が身構える。
アリーは訊くのが怖いと思いながらもしっかりと４人を見た。

――これは王族が一番抱えなければいけないから。

彼らは突然、縁も何もない場所に飛ばされてきた。
今まであったものが突然なくなったも同然のこの場所に。
強制的に引き離されるといった、理不尽なことが行われた。

「シュウ様達が来てから、もう１ヶ月も経ちます」

でも、友達になり仲良くなった。
いつも気にかけてもらっていた。
１ヶ月しか経っていないけれども大好きな人たちだと思えた。
だからこそ、尋ねないといけないと思う。

「やはり元の世界に帰りたいと……思いますか？」

実際には無理なのだとしても。

帰る方法なんてないのだとしても。

気持ちは……別なのではないかと考えてしまう。

アリー達、元々この世界にいる４人は皆が神妙な面持ちで優斗たちを見ていた。
優斗は不意に嬉しくなる。

――たぶん。

４人がそんな表情をしてくれているのは、本当の友達になったからなのだろう。
友達になって遊んで、笑って、そして――気づいた。
ふとした拍子だったのかも知れない。
それでも、考えてしまったのだろう。

自分達は無理やりに４人を連れてきてしまったのではないか。
元の世界に本当は帰りたいのではないか、と。

口を開いたのは優斗だった。

「そんなことはありませんよ」

「本当ですか？」

不安げにアリーが聞き返す。

「ええ。本当です」

自分たちは元の世界に未練なんてない。

――そんなものがあるほど、あの世界に執着するものなんてなかったんだから。

優斗は考えをまとめる。

そして、修と卓也と泉を見た。

3人とも頷く。

「そろそろ、皆さんに話してもいい頃でしょうね」

これは声を大にして話すことじゃない。

むしろ、話す必要性なんてものはどこにもない。

それでも真摯に自分たちの気持ちを考えてくれた彼女たちには。

話そうと思う。

「僕たちはね、全員が元の世界にある自分たちの国では恵まれた境遇というわけではないんです」

あくまで自らの国の中での境遇があまりよくなかっただけのこと。

ただ、それだけのことだけれども。

そこの一般から考えれば自分たちは大いに不幸だった。

「似たような僕たちだからこそ、あんな馬鹿なことがあってから一緒にいた。誰もが同情するわけでもないし、嫌悪も侮蔑も抱くことがなかった」

紛れもなく“自分”でいれた。

「一人ずつ、お話しましょうか」

４人で視線を巡らせると、和泉から口を開いた。

「俺のところは何もない。本当に“何も”ない。両親共々、冒険者で放任主義者。まともに顔を合わせることなんてそうそうあることでもなし、いなくなってもどうにかして生きろ、としか思わないだろう」

何一つ受け取らずに和泉は生きてきた。

だからこそ、誰かと繋がりがほしくてあんな馬鹿なことをやったのかもしれない。

次に口を開いたのは修。

「うちはな、両親の仲がすごく悪いんだ」

その原因が修にある。

「母親が変な男と作った子供でな、父親とは血が繋がってない。だから父親は俺のことを端から無視してるし、母親も母親で俺を産んでから後悔したのかなんなのか知らないけど俺のことをいないもののように扱ってる。それでも離婚しないのは世間体の問題とかがあるらしいけどな」

どっちにせよ、異物として扱われている。

「……」

「……」

「……」

「……」

異世界４人組の表情が固まった。

修はそんな彼女らの表情をほぐすため柔らかい笑みを浮かべる。

が、続いた言葉は、

「俺でそんなに引いてたら残り二人はもっと聞けなくなるぞ」

修がそう言うと、続いて卓也が話し出す。

「オレは……児童虐待って言ったらいいのか。父親にも母親にも暴言とか暴力振るわれてて、そのうち父親は蒸発。母親からは相変わらず暴力受けながら育ったんだけど……。中学の時はどうにかして部活と隠れてバイト。高校からはもっと金がかかるようになって、それでバイトに専念してきたってわけ。こっちに来る前に行こうとした旅行は皆が金出してくれて、初めての旅行だったって感じ」

どこにも行ったことがなくて、何も買ってもらったことがない。

全てを自分で揃えて自分でやってきた。

だからこそ、友達と行く初めての泊まり旅行は楽しみに満ちていて……その結果が異世界に飛ばされるというのは驚いたけれども、それも旅行としては楽しい出来事だったと今は思える。

そして最後は優斗。

「僕は卓也ほど酷くないですけどね。元々嫌いだった両親が目の前で殺されて、その後は舞い降りてきた大金に目が眩んだ親戚一同を適度に追い払って、現在に至るってところです」

優斗が言葉を濁しながら話す。
正確に言えば、その過程において一番酷かったのは優斗だろう。
でもそれは彼らに伝えるには……まだ綺麗すぎる。
もっと大人になってから、優しい言い方を自分が言えるようになってから正確なことを伝えることができればいいと思う。

「いや、お前が一番強烈だろ？」

「そうかな？　確かにいろいろと端折ってるけど、そのときの心情や過程とか入れる必要性もないでしょ」

「ま、そうだな」

修が納得する。

「という感じで、僕たちは特に元の世界に未練があるというわけでもないし、大事な友達は一緒にこっちに飛んできています。ゲームが出来ないのは少し悲しいですけど、この世界なんてゲームみたいなものですから楽しめます。何も問題はありません」

アリーも、ココも、フィオナも、クリスも。
何と言っていいかわからなかった。

「そんな顔すんなって。俺らはお前らだから喋っていいと思ったんだぞ」

にかっ、と修が笑う。

「でも……」

「アリー、もう一度言うぞ。俺らはお前らだから話していいと思った」

だよな、と修が言うと、

「大事な友達だし」

「そういうことだ」

「貴方たちには隠すようなことでもないですから」

卓也、和泉、優斗が何でもないように言う。

彼らが異世界組にそう声を掛けると、不意に……4人の瞳から涙が溢れそうになっていた。

「えっ！？　ちょ、なんで泣きそうになってんのお前ら！？」

「だってそれほどのことを言ってくれる皆様が、本当に嬉しくて、でも嬉しいけど悲しくて、なんだか涙が出てきたんです」

アリーの言うことに他の3人もこくこくと頷く。

「大事な友達なんて言われたら、もう……嬉しいんですよ～！」

「これほど大切なことを伝えていただける友人になれたことが喜ばしくて」

「……でも、内容が悲しくて」

泣きそうになる。

「あ～、もうストップ！　泣くの禁止！　これから昼飯なんだから。湿っぽいの禁止！！」

修がわ～、と騒いでどうにか和ませようとしている。
その姿が少しだけ可笑しくて、５分もした頃には全員が全員、笑みを浮かべていた。

「そんで、だ。お前ら、午後の予定とかはあんの？」

お昼ごはんを食べながら修が確認する。

「わたくし達もどうしようか、と話していましたので何も決まってはいませんね」

「そんじゃ、どうしようかね」

う～ん、と唸る修。
と、ここでココが、

「あの、わたしはタクヤさんの“おむらいす”を食べてみたいです」

パッと手を上げてココが発言する。

「おお、それいいじゃん」

修が同意した。

「皆もそれでいいか？」

全員が首肯した。

「それじゃ――」

と、そう言いかけたところでアリーが修の服を引っ張った。

「どうした？」

「あのですね」

修の耳に顔を近づけて、何かしら内緒話をしている二人。

ふむふむ、と頷く修の表情がだんだんと悪巧みをするような顔に変わっていく。

全てをアリーが伝え終わった頃には完全にいやらしい笑みに豹変していた。

「おっし、決まったぞ。今日はこの後、城で卓也のオムライス講座だ。参加するのは俺、アリー、卓也、ココ、和泉、クリスの６人だ」

２人抜けている。

「……おい、ちょっと待て」

「なんだ？」

「どうして僕とフィオナさんが抜けているのかな？」

「いや～、なんかお前ら一緒に買い食いするなんて言ってたらしいじゃん。だったら今日の午後はそれをやればいいじゃん、という俺のナイス判断」

「お前な、僕は別にいいけどフィオナさんだってオムライスを食べたいかもしれないだろ？　そんな風にノリで決められても――」

「あの、私は……買い食いで……大丈夫です」

恐る恐る、といった感じでフィオナが答える。

“おむらいす”という食べ物も確かに気にはなったが、それ以上に優斗と買い食いするのを楽しみにしていたのだ。

それを断る理由などない。

「だってさ、優斗」

「……わかったよ」

優斗は大きく息を吐く。

周りを見ればフィオナ以外はニヤニヤとしていた。

――こいつら、絶対に楽しんでやがる。

自分だって緊張はするが、フィオナとどこかに出かけるというの嬉しくないわけがない。

それをこんな形で実現させられるのは少しだけ腹が立つ。

――まあ、でも。

フィオナが本当に嬉しそうな表情をしているのだから。

これはこれでいいか、と思ってしまう。

買い食い、そして訪問

フィオナはお昼を食べた後、王城を後にした。
普段の制服と違って私服で市場を動き回ったりするので、ドレスのような丈の長い服装だと動き回りにくく一度、家に帰ることにした。

「ただいま戻りました」

そうすると、母親がフィオナを出迎えに来た。

「あらあら、今日は帰りが早いのね」

「いえ、今日はこのあと街に出ますので、着替えに戻りました」

「そうなの」

「はい。初めて買い食いをするので、とても楽しみです」

「皆様と？」

「いえ、ユウトさんと二人で」

フィオナがそう言うと、また母親があらあら、と言った。

「デート？」

「デ、デート！？」

瞬間で顔が真っ赤に染まる。

「ち、違います！　私が楽しみにしていたので、ユウトさんが一緒に行こうと言ってくださっただけで！」

目一杯、全力で否定する。

そんな姿を母親は微笑ましく思う。

――我が娘ながら、本当に初心なのよね。

ここ最近の娘の変化には本当に楽しい。

同じ公爵の子息どころか、王女とも友達になった。

そして異世界から来た方々とも友達になった。

その中でも富に会話に出てくるのが“ユウト”という人物。

あまり表情を変えない娘がころころと表情を変化させる。

――気になるわね。

母親として。

「優しいお方なのね、ユウトさんは」

「それはもう。ユウトさんの家庭教師で本当によかったと思います」

赤い顔から一変、心底嬉しそうな表情に変わる。

「じゃあ今日はこの後、連れて来ちゃいなさい」

「……え……？」

「街で買い食いが終わったら、そのまま彼を家まで連れてきなさい。夕飯に招待しましょう」

「……お、お母様？」

「気になるのよ。あれだけフィオナから話を聞いているんですもの」

どんな人物なのか。

「で、でも急に家にお連れするというのは失礼に値しないでしょうか？」

「大丈夫よ。私が言い出したのだから」

「そういうものでしょうか？」

「ええ、だからフィオナは是非ともユウトさんを連れてきてね」

◇　◇

いざ着替えようとすると、何を着ていこうかひたすらに悩んでいる自分がいた。

あれでもないこれでもないと服を出しては考え、自分の姿に合わせ

て鏡を覗く。
途中から侍女と母親が参加して、みんなで試着を繰り返してしまった。
そうして着ていく服がようやく決まり、家を出る。
できる限り駆け足で。
かつ服装が乱れないように走る。
そうして優斗との待ち合わせ場所に着いたのが約束の3分前。
フィオナが約束の場所に近付くと、そこにはすでに優斗が待っていた。
彼の視線がフィオナに合う。
優斗が笑みを浮かべた。

「す、すみません。待ちましたか？」

「いえ。約束の時間前ですし、全然待っていませんよ」

二人でゆっくりと歩みだす。

「何を食べましょう？」

「歩いているうちに見つかった物を食べるのも、こういうものの醍醐味ですよ」

「そうなんですか？」

「ええ。予期せぬものに出会っておいしいという感動を味わえるのも、買い食いの魅力のひとつです」

ものすごくオーバーに言っている感はあるが、これも間違いではないはず。

優斗は心臓を軽く跳ねさせながら会話を交わす。

――本当に困るよな。

基本的に平然を装うのは得意だ。

そうせざるを得ない状況だって昔から多々あった。

しかし。

しかし、だ。

こんな美少女と二人で歩くなんてことは今までの人生にあるはずもなく。

挙句の果てにデートっぽい感じのこんな状況などもあったことはない。

要するに、

――死ぬほど緊張する。

ただでさえ慣れていないのだから。

いつも通りの様子を保つとなると、かなりの労力を必要とさせられた。

フィオナを意識しないように周囲に視線を巡らせる。

一つ、気になる店が目に入った。

「あれって何ですかね？」

優斗がある方向に指をさす。

カラフルな色合いのお店に、幾人かの若い人たちが並んでいた。

「あれは……なんでしょうね？」

頭にハテナマークを浮かべるフィオナ。

二人とも疑問系のまま目が合った。
ふっ、と笑い声がお互いに零れる。

「では、さっき言った通り」

「買い食いをしましょう」

揃って目当てのお店に向かい、並ぶ。
横から見てみると、どうにも見覚えがある食べ物だった。

「……クレープ？」

看板を見てみると、実際にクレープと書いてある。
実際の物も元いた世界と何ら変わりはないようだ。

「どういうものですか？　そのクレープというのは？」

「原材料はよく覚えていませんが、とりあえず甘いものを薄い生地で包んだ食べ物、といったらいいでしょうか。女性に人気があって美味しいんですよ」

「甘いんですか？」

「もしかして、苦手だったりとか」

「いえ。甘いものは大好きです」

「それならよかった。きっと気に入ると思いますよ」

列が捌けていき、優斗とフィオナの順番になった。

優斗はチョコカスタードクリーム、フィオナはイチゴクリームを頼む。
手際よく作る店員にフィオナが感嘆の声を上げながらクレープが出来上がる。
フィオナが恐る恐るクレープを手に取るのを確認すると、優斗は歩き出した。
慌ててフィオナを付いていく。

「それでは、初めての買い食いですね」

「それはそうなのですが……その、質問よろしいですか？」

「何でしょう？」

「フォークやナイフ、スプーンなどはないのでしょうか？」

いきなりの質問にさすがの優斗も少し面を喰らった。が、少し考えたらああ、と納得した。

「これはこのまま、ぱくっと食べるんです」

「……本当ですか？」

信じられないようなものを見る目つきでフィオナが問い直す。

「世の中、そういうものもあるんですよ」

「……ユウトさんが言うなら本当なのでしょうけど」

今までそんなことをしたことがなかったのだから心なし不安だ。

「とりあえず実践してみせましょうね」

そう言うと優斗はクレープにぱくりと食いつく。

思ったとおりの美味しさで嬉しさが浮かぶ。

「こんな感じです。こういうのは出来立てが一番美味しいんですよ」

「……がんばります」

フィオナも優斗の姿を目にして、心を決めた。

少しばかり逡巡したあと、意を決してクレープを口にした。

「……おいしい」

「でしょう？　こういうのがあるから楽しいんです」

彼女の様子に満足する。

「まあ、問題点があるとしたら食べ過ぎてしまって夕飯が食べれなくなることがある、くらいですね」

そう言う優斗にフィオナが奇妙な表情を示した。

――あれ？　変なことは言ってないと思うけど。

「どうしました？」

「あのですね。今日、このあとの予定は空いていたりしますか？」

「まあ、特に予定が埋まっているわけではないですよ」

「でしたらうちに来ていただいてもよろしいですか？」

一瞬、互いに沈黙が生まれた。

特に優斗は不可解の極みに陥っていた。

「……説明を要求してもよろしいでしょうか？」

そう尋ねると、フィオナは理由を話し始める。

全て聞き終えると、ようやく優斗は納得した。

「つまりお母様が僕に会いたい、ということですか」

「はい。私の友人ということもそうですが、やはり異世界から来たのに興味を持たれたのではないかと思います」

「でしょうね。自分も同じ立場ならば、興味を持ったと思いますから」

異世界から来た、というのは格好の餌のようなものだろう。

「あの、でも無理にというわけでもありませんから、嫌でしたら断っても……」

「大丈夫ですよ。フィオナさんのお母様なのですから、無理にどうこうしてくることもないでしょうし」

特に心配は要らないはずだ。

「ですから行きますよ。安心してください」

優斗がそう言うとフィオナもほっ、とした表情になる。

「そう言っていただけると、私もうれしいです」

安心したのかフィオナはクレープを食べ始める。

小さい声で「おいしい」と呟いて、また一口と食べる。

優斗は彼女の姿を見て、一緒に買い食いができてよかったと思った。

――たとえ、このあと修たちにからかわれるとしてもね。

買い食いのことにしても、フィオナの家に行くことについても。

それでもこの瞬間を得られたのは、本当に喜ばしかった。

◇　◇

「ここが私の家です」

フィオナがそう言って示したのは……まごう事なき豪邸だった。

「……すごいですね。このような家を見たのは初めてです」

城を見たときも思ったが、この豪邸も本当にすごい。

1ヶ月経ったにしても改めて異世界に来たことを実感させられる。
庭に花壇。それに特大の家が存在するのはテレビの中でしか見たことがない。
それが実際に目の前にあると……圧倒される。
門にも警備の人がいる、というのがまた凄い。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

警備の初老男性はフィオナの帰りに頷くと隣の優斗に目をやった。

「この方は？」

「私のクラスメートでお友達のユウト・ミヤガワさんです。今日はお母様の招待で来て頂いたんです」

「ああ。この方がそうなのですか」

優斗が頭を下げる。
男性も頭を同様に頭を下げた。

「今後とも、お嬢様をよしなにお願いいたします」

彼が優しそうな表情を浮かべる。

「こちらこそフィオナ様にはお世話になりっぱなしで、こちらから何かしてあげられたらいいと思うのですが」

「いえいえ。貴方と出会ってからというもの、お嬢様が日に日に輝

かれています。私にとってはその日々の輝きを見るのがとても嬉しいのでございますよ」

「バ、バルトさん！！」

真っ赤な顔をしてフィオナが叫んだ。

「いや、なに。お嬢様が仰っていたのがこの方なのでしょう？　でしたらトラスティ家の守衛としてあいさつをしておくのは当然かと」

「そ、そうかもしれませんがその言い方では――ッ！」

「まあまあ。あちらで奥様がお待ちになっておりますよ」

バルトはフィオナと優斗を玄関へと促す。

そこに……いた。

「初めまして、ユウトさん。私はフィオナの母でエリスと申します」

一目でフィオナの母親だと分かった。

黒い髪を短く纏め、フィオナをそのまま年老わせれば彼女のようになるのだろう。

ただ、それでも美しさは鳴りを潜めてるわけではなく、年齢とともに円熟していった魅力というものが彼女にはあった。

「こちらこそ初めまして、エリス様。ご存知とは思いますが自分が宮川――いえ、ユウト・ミヤガワと申します。この度はご招待していただきありがとうございます」

「あら？　そんな畏まらないでくださいな」

「公爵の奥様にそんなことはできません」

「フィオナにはそんな言葉を使わないのに？」

「フィオナ様はお友達ですから」

「なら、母親である私も同じことよね？」

……どういう理論だそれは。

というか一般市民が公爵に慇懃な言葉を使うなとか何という無茶振りだ。

「……でも、しかし――」

「それに位としても異世界人である貴方のほうがこの国では高いのだから、せめて堅苦しい言葉を改めてくれないと私も困るわ」

そういえば、と思い出す。

この国では王族の次に異世界の人間が位が高いと。

だとしても、少なくとも目上に対してぞんざいな口調なんて出来ない。

「……わかり……ました。努力はしますから、今日はある程度で勘弁していただけると嬉しいのですが」

「しょうがないわね。今日はこれくらいで許してあげるから今度来た時にはもっと柔らかくなって頂戴ね」

「……はい」

なんというか……負けた気分だ。
丁寧な言葉を使ってはいけないってどういう貴族様なんだろうか。

「それでは中に入りましょうか。今日は家政婦が腕によりをかけてご馳走を作ってくれているから」

◇　◇

食事をする広間へと案内される。
思っている以上の料理に驚かされた。
席に座って食事を取ろうとして……ふと優斗は気付く。

「すみませんが料理の作法というものを知らないのですが……大丈夫でしょうか？」

こっちの世界の作法なんて知っているわけもない。

「あら、気にしないでいいのよ。堅苦しい場でもないのだから」

エリスがそう言ってくれるので優斗は安心する。

「そう言っていただけると助かります」

改めて優斗は食事を取る。
あまり乱雑にならないよう、丁寧にナイフとフォークを使う。
サラダや魚料理、肉料理の美味しさに舌鼓を打つ。
休み無く食べ始めていたので、一旦手を休める。
するとエリスが話しかけてきた。

「今日は来てくれてありがとう。いつもフィオナが話しているものだから、私もユウトさんのことが気になってたのよ」

「僕もエリス様とお話できて――」

「エリス“様”？」

睨まれる。

「……エリスさんとお話できてよかったですよ。貴族のお屋敷というものも中に入れましたし」

「貴方がいた国では貴族がないのよね？」

「そうですね。昔は存在しましたが、今はいません」

「では華族は？」

優斗は瞬間、ドキリとした。

――なんでだ？

そんなもの、まだ誰にも話したことなどない。

「……どうしてそれを知っているのですか？　友人の誰かが貴方に話しましたか？」

「違うわ。私たちは“元々”それを知っているのよ」

「それは――」

どういうことだ、と問いかけようとして……気づいた。

「今までにやって来た勇者からの知恵ということでしょうか？」

「そうとも言えるし、そうでないとも言えるわ」

「どっちなんです？」

いまいち要領を得ない。

「今までに我が国に来た勇者の風貌を聞いたことはある？」

「ありません」

「今まで来た異世界の人々は、総じて黒髪に黒い瞳を持っていたというの。それは先代も先々代も同じ」

歴代、リライトに召喚された人物はみな同じ風貌をしていた。

これは数百年に及ぶ歴史から分かっていることだ。

「つまり……今までの勇者は僕たちと同じ世界、同じ場所からやって来たというお考えで？」

「そうよ。今まで勇者がどこにいたのか、なんて考える人はいなかったわ。誰もが異世界の人間は総じてそのようなものだと考えている。少し考えれば分かることなのにね、この世界だけでも様々な容姿を持つ人間がいるのに、どうして異世界というだけで容姿が同じでなければいけないのかって」

そこが疑問の始まりだ。

つまり召喚とは、ある特定の世界――特定の場所としか繋がっていないのではないか。

「ではどうして、エリス様はそこに疑問を持たれたのですか？」

優斗の問いにエリスは笑って答える。

「我が家は異世界の血を取り込んでいるからよ」

突然の爆弾発言に、エリスとフィオナの容姿を改めて確認してしまった。

――なるほど。確かに。

最初に抱いた感想は“大和撫子”のようだと。

そう感じた自分はそこまで間違いではなかったのか。

「先祖に異世界の人がいる、ということですね」

「ユウトさんは理解が早くて助かるわ」

エリスは続ける。

「私より3代前、我が家は勇者の刻印を持つ方と結婚をしたわ。そして公爵まで上がっていった。私が産まれた頃にもご健在だったから幼い頃は時折、異世界についての話を聞いていたわ。この世界とは違うことを聞けるのが楽しくってね」

夢物語のようだった。

「では、その続きが気になって今日は僕を呼んだのですか？　たったそんなことのために？」

刺すような優斗の言葉をエリスは軽くいなす。

「あらあら、違うわよ。私が興味を持ったのはあなた自身。フィオナの会話にあれほど出てきたのは後にも先にもあなただけだから。母親として興味を持つのは当然でしょ？」

「でしょうね。どうにもエリスさんは悪い意味での毒気がないですから」

今まで自分が相対してきた大人はもっと狡賢くて、狡猾で、酷い。

「というわけで、今日はフィオナとの馴れ初めとか聞かせてもらうわよ？」

「お、お母様！！」

フィオナが声を張る。

「フィオナさんは今日、よく叫びますね」

優斗とエリスが笑う。
この後、優斗はエリスに尋ねられるがままにフィオナと出会ってからのことを話し始めた。

◇　◇

その頃、別のメンバーは王城にある厨房の一つを使わせてもらってのオムライスパーティーをやりながら、

「今日、あいつらの仲が進展したと思う人、挙手」

賭けをやってきた。
修がオムライスを頬張りながら採決を取る。
……が、誰も手を上げなかった。

「お～い、誰かが手を上げないと賭けになんねえぞ」

「そんなこと言っても、優斗とフィオナだし」

「期待するだけ無駄だ」

卓也と和泉が手を上げることを拒否する。

「そ、そんなことはありません。フィオナさんとユウト様だって二

人っきりでデートをすれば少しぐらい意識するはず――」

「じゃあアリーは手を上げるか？」

「……それは、その……」

そう問われると、さすがに反論もあやふやになっていく。

「んじゃ、進展するほうに賭けるやつがいなかったから、今回の勝負はなし。次回のプリンはじゃんけんで勝ったやつが多く食べれるってことでいいか？」

「「「「「賛成」」」」」

こうして6人の夕飯は進んでいく。

優斗とフィオナを会話の肴にして。

闘技大会、参加します

優斗たちが異世界に来て2ヶ月と少し。
生活にも慣れて、魔法もある程度は自在に操れるようになってきった頃。
その話は出た。

「闘技大会？」

「はい。2週間ほど後になりますが、学生による闘技大会というのがあるんですよ」

アリーから面白い情報がもたらされた。
興味を持った修が尋ねる。

「参加資格は何なんだ？」

「中級魔法を一つでも使えることです」

「じゃあ、ここにいる全員にその資格があるってことか」

「そういうことになりますね」

修とアリーがぐるりと8人を見回す。

「誰か出られてはいかがですか？」

学生の闘技大会と言えば学院でも大きなイベントのうちの一つだ。

「全員で出るのも馬鹿らしいし、１人だけ出ればいっか」

「じゃんけんで決めるか」

和泉の言葉に賛成。異議なしと次々と同意を得られる。

「じゃあ、はじめるぞ」

修を合図に全員が構えを取る。

「「「「最初はグー」」」」

「じゃんけん――ッ！！」

◇　　◇

「はい。それではこれで、闘技大会参加ということになります。後日、通達などがありますので確認を怠らないようにお願いいたします」

優斗は頷く。
傍らにはいつものようにフィオナが付き添っている。

「分かりました」

「それでは、これにて登録受付は終了となります」

受付係にそう言われて、2人は踵を返して教室へと向かう。

「2週間後から大会が始まるのか」

「これからは魔法の練習に力を入れます？」

これまでもやってきてはいたが、より一層に力を入れたほうがいいだろうか？
そう思ってフィオナは訊いてみた。

「ああ、そのことなんですけど――」

「おや？　君も参加するのかい？」

その時だった。
ちょうど目の前にラッセルがいた。
これ見よがしに声をかけてくる。
優斗は心の中で嘆息する。
出会いが最悪だったからなのか、修を中心とする異世界組にはどうにも八つ当たり気味のことをしてくる。
そこまで大きなことはやってこないから問題はないが、面倒なことには変わりなく出来るだけ関わりたくない人物だ。

「はい。僭越ながら参加させていただこうと思っています」

「そうなのかい。実は僕も闘技大会に出るんだよ」

鼻で笑って優斗を値踏みするように睨め付ける。

「僕ほどの実力者が参加するんだ。田舎者なのに参加して怪我しても知らないよ？」

そうだそうだ、と後ろの取り巻きがはやし立てる。

「ラッセル様。こちらとしてもまだ、学院に来たばかりの若輩者ですので対戦することになった場合には胸を借りるつもりで勝負させていただこうと思っています」

あくまで下手に出て優斗が対応する。

異世界組の中でもとりわけ丁寧に接する優斗には、ラッセルも気分が良いようだ。

「それは良い心がけだ。せいぜい僕と当たるまで負けないようにしたまえ」

「ありがとうございます」

慇懃に頭を下げる。

「それはそうとフィオナ様。今度ディナーでもご一緒にいかがですか？」

ニヒルな笑顔を浮かべて会話の対象をフィオナに移す。

「結構です」

「そうですか。ではせいぜい、貴族の嗜みというものを忘れないでいただきたいものだ。そんな平民風情に構っているのならね」

「――なっ！？」

唐突なことに思わず反論しそうになるフィオナだが、ラッセルに気付かれないように優斗が制した。

「ラッセル様。フィオナ様は田舎から出てきた我々に都会での暮らし方、そして学院での過ごし方を教えてくださっています。それも良き貴族としての在り方と存じておりますので何卒、ご理解をお願いします」

「まあ、それなら仕方がない。平民には優しく在るのも貴族というものだしね。だからといって勘違いしてはいけないよ。君達は施しを受けているのだということを」

「重々、承知しております」

「それならばいい。せいぜい、迷惑をかけないように」

高笑いをしながら手下を引き連れて去っていくラッセル。
廊下の曲がり角を曲がって、姿が消えていく。
とたんにフィオナが怒り出す。

「ユウトさん！　どうしてあんなことを言われて何も言わないのですか！？」

「無駄な争いは面倒なだけですしね。修が蒔いた種ですけど、標的は全員みたいですから。実害がない限りはスルーしておこうかな、と」

「……でも私は……ユウトさんが悪く言われるのは嫌です」

「そう言っていただけるだけで嬉しいですよ」

それにしても、と優斗は続ける。

「ラッセルって強いんですか？」

なんか自信ありげだった。

授業で見ている限り弱くはないと思うけれども。

「少なくとも学院で１０本の指に入るほどの強さは持っているかと思われます」

「すごく強いんですね」

「しかし、あんなやり方で強くなっても……」

納得いかないようにフィオナが眉をひそめる。

「どういうことです？」

「魔法具です」

「……ああ、そういうことですか」

今まで習っている中にあった。
魔法具――アクセサリー、武器の類に特性付与が付いている物だ。

「彼は貴重な魔法具を幾つも使っています。それは彼自身に実力などがなくても、上級魔法が使える……といったようなものです」

「だから強くとも、実力はないんです」

元々、魔法具にインストールされているものを使っているだけなのだから、彼自身の強さというわけではない。

「本人がそれでいいなら良いと思いますけどね」

それにそんな人物なら。

――なんとかなるか。

戦う相手としては楽そうだ。
そう思える。

「あ、そういえばさっきの話の続きなんですけど」

「魔法の練習の話ですか？」

「ええ。２週間の時間がありますが、最後の１週間は自主練習をしようと思っています」

「どうしてですか？」

不思議そうにフィオナが問いかける。

「ちょっと試したいことがあるんです。けれどフィオナさんに見せるのは恥ずかしいので」

頬を掻きながら、照れくさそうに言う。

「基本はフィオナさんのおかげでほとんど完璧に出来てますから、少し応用にも走ってみようかと」

◇　◇

魔法というのは、やはり本人によって得手不得手が出てくる。

修は『勇者の刻印』なんてものを持っているから特にないけれども、修は例外だ。

優斗も特に問題なく魔法を習得している。その中でも風とは相性が良い、とフィオナが言っている。

卓也はどの属性が、というよりは攻撃魔法が苦手で防御魔法が得意。

聖属性の防御魔法も使えるのでは、とはココ談。

和泉は……魔法に関しては興味がなく、どちらかといえば魔法科学のほうに多大な興味を持っていた。なので得手不得手で考えれば魔法が苦手、ということになるのかもしれない。

そんな最中、

「お前、何をやっているんだ？」

闘技大会1週間前、自室で黙々と魔方陣を作っては変なことをして、色々と試行錯誤している優斗に和泉が尋ねた。

「いや～、上級魔法と昔のマンガにあった魔法をたくさん試してたんだけど」

「マンガってどの魔法だ？」

「極大消滅呪文のやつ」

優斗は、とある大魔道士が使っていた魔法を実際にやってみようとしていた。

「氷の魔法を炎の魔法を合わせて、エネルギーを発生させるやつだったか？」

「そうそう。だけど、いくらやっても氷が溶けて終了」

魔方陣から出てくる炎と氷をぶつけたところで、さっきから結果は同じだった。

「お前だったら、それ試すよりもっとお気に入りの魔法があるだろう？」

詠唱すら覚えてるやつが。

「もうやったよ」

「結果は？」

興味津々で和泉が訊いてくる。

が、優斗はにっこりと笑って、

「ないしょ」

そう告げた。

闘技大会、始まりました

「こりゃ凄い」

闘技大会当日、町はお祭りムード一色になっていた。
出店が並び老若男女が揃って闘技場を目指している。

「リライトでも大きなお祭りのうちの一つですからね」

年に数度あるイベントのうちの一つだということをアリーが異世界組に教えてくれた。

「それにスカウト陣営も張っていますから、お祭りの他にも違った一面があるのが闘技大会の特徴でしょうか」

兵隊になるには基本的に志願制だが、ギルドに所属してチームを組んでいるものは闘技大会を観戦して、早めに金の卵を発掘しようとしていることもある。
学院に通っているものにとっては、自分を見せる場の一つとしてもなっている。

「だとしても、参加人数が少なくね？」

「しょうがないですよ。中級魔法をしっかりと使える人はあまりいませんから」

計３２名が闘技大会にエントリーすることになっている。

ラッセルとは順当に行けば準決勝であたることになった。
全員は客席に集まって最前席で観戦することにした。
優斗も呼び出しがかかるまではそこにいる。

「それで？　あの馬鹿に勝てんの？」

不意に修が優斗に訊いてきた。

「どうにか頑張るしかないよ」

「俺としては、あの馬鹿をぶっ倒してくれればそれでいいや」

面倒なのかうざいだけなのか、未だに修とラッセルは相性が悪い。

「それをやるとなると、僕はこの学園で１０番目以内に強い奴じゃないといけないんだけど」

「何か問題でもあるのか？」

あっけらかんと修が言った。

「ないよ」

修は優斗が優勝すると信じている顔だ。
自分が出ていないのだから、当然だろうと。
暗にそう言っている。
アナウンスが流れた。
優斗の出番がそろそろとなる。

「それじゃ、行ってきますね」

席を立ち、控え室へと向かって歩いていく。

「……あの」

その時だった。

すっ、とフィオナが寄ってきて、服の裾を小さく握った。

「無理、しないでくださいね」

「……はい」

「怪我したら……駄目ですよ」

「わかってます」

「がんばってください」

「りょうかいです」

お互いに笑顔を浮かべて、ヒラヒラと手を振って優斗は改めて控え室に向かう。

「なんつーか、こう……むずがゆいのは俺だけ？」

そのやり取りを見ていた、他のメンバー。

「オレも」

「自分もです」

次々と頷いていく。

「かといって、好きなんじゃ？　って茶々入れるような場面じゃないんだよな」

「友情とか恋愛を飛ばして夫の出立がとっても心配です、みたいな」

「そうそう、そんな感じ」

修とココの感想に卓也が同意する。

「ただ、それがとてもむずがゆいんだわ」

優斗とフィオナのやり取りに気を取られているうちに試合の一つが終わっていた。

そうこう話しているうちに目の前で行われていた試合が終わる。

次の次は優斗の出番だ。

「そういえばユウトさん、緊張とかしないんですかね？　これだけ観客に囲まれると、わたしなら緊張しちゃいますよ」

少し疑問に思ったココが修たちに尋ねる。

「あいつは緊張しないって」

卓也が答えた。

「そうなんです？」

「だってあいつ、こういう場面に慣れてるし」

◇　◇

「それではミヤガワさん。出番となりますのでよろしくお願いします」

「わかりました」

運営委員に促されて優斗は闘技場内へと踏み入れる。

『――さあ、初出場同士の対戦だ。彼に対するのは2年F組、ユウト・ミヤガワ！！』

優斗が踏み出すと、すでにそこには対戦相手がいた。

データによれば一つ上の学年。

さして有名な名前というわけでもなく、この点では優斗と一緒だった。

周囲を見回す。

修たちが、幾人かのクラスメートが、見知らぬおじさん達が、頑張れと声をかけてくれていた。

――懐かしいな。

部活をやっていたころ、大会に出ていたときはこうだった。
屋内球技の卓球だったけれども、こんな感じだった。
勝ち上がっていくにつれて、同じ学校じゃなくても応援してくれる人がいたというのは今となっては本当に懐かしい。

『さあ、それでは早速始めてもらおうか。審判、お願いしまーすっ！！』

対戦相手と優斗が闘技場中央に向かう。
そこには一人のごついおじさんがいた。
王国でそこそこの実力者らしい。

「制限時間は１０分。決着がついたと思ったらその時点でオレが止める。それ以上の攻撃を行った場合は反則だ。最低限、命さえあれば治してやれるから、存分に戦え」

審判の説明がかなり物騒だった。
自分も対戦相手も頷く。

「それじゃ、開始線まで離れて」

優斗と対戦相手が１０メートルほどの距離で向かい合った。
一呼吸置いたあと、審判が宣言した。

「始めっ！！」

◇　◇

「始まりましたね」

アリーが緊張した面持ちで優斗を見る。

「ユウトさんはどう動くのでしょうか？」

最近、ようやく修以外に“様”付けの抜けたアリーが戦況を先読みしようとする。

「とりあえず初戦だからな。まずは体をほぐすためにもゆっくりと始めるんじゃねえかな」

修が自分の予想を告げる。

「あっ、ショートソードを抜いて……右回りに動き始めましたわ。魔法は使わないのでしょうか？」

「どうだろうな？　さすがに内容までは考えつかないぞ、特にあいつの場合は」

「ほう、相手は炎の玉を作り出したぞ」

初級の魔法ではあるが、オーソドックスな魔法ゆえに誰もが最初に牽制ではこれを使う。

「優斗が構えた。足も止めたし何かしらすんだろうな」

「ちょっと待った。あいつもしかして」

卓也があることを考え付く。

「何をするか分かったんですか？」

アリーが訊く。

「あいつさ……切るんじゃないかな。魔法を」

卓也がそう言った瞬間、相手から優斗に炎の玉が撃ちだされる。
優斗はぐっ、と腰を入れて構えると、そのまま横一線、ショートソードを振りぬく。

「……切りましたね」

クリスが呆然とし、

「切ったな」

和泉が笑いそうになり、

「すごーい」

ココが感嘆し、

「「……」」

アリーとフィオナが絶句し、

「やっぱりな」

卓也が納得し、

「当然だろ」

修が当たり前という表情をした。

「と、当然じゃないですよ！　魔法を切るなんて一流の剣士でもないと出来ませんよ！！」

「アリー、よく見てみろって。剣技だけじゃなくて、ちゃんと魔法を使ってるぞ」

修にそう言われてアリーは目を凝らしてみる。
ショートソードの周りに、何かが渦巻いているのが見えて……消えた。

「属性付与？」

「違う。純粋な魔法だ」

ショートソードはそこらへんにあるただの武器。

「風の魔法を纏わせて、切り裂く。単純といえば単純だろ。魔法的にも簡単だしな」

「で、でもそれをするには度胸とタイミングが――」

「あるんだろ」

それが当然だというふうに修が答える。

「それにたぶん、これからの戦いの牽制の意味も込めてるんだろうし」

「……？」

アリーが首をかしげた。

「普通に見たら、だ。アリー達みたいに魔法を切れる一流の剣士に見える。何かに気付いたとしても属性付与のついた剣を使っているように思える。これからあいつと対戦することを考えると、初級の魔法程度は使えない。そう思わされる」

つまり、と修は続ける。

「使える手の内が一気に減らされる。実際、あいつがどのレベルの魔法までぶった切れるのか知らんけどな。今後の戦いを楽にするためにもそうしたんだろ」

驚きの表情を浮かべるアリーとフィオナを尻目に、優斗が動いた。

「ゆっくりやると思ってたけど違ったな。決めに行くぞ、あいつ」

飛び込むように対戦相手に駆け出す。

対戦相手は慌てて詠唱し始める。

炎の中級魔法の一つだ。

しかし、遅い。
優斗が袈裟切りで対戦相手に襲い掛かる。
すんでで相手が詠唱をやめ、かわす。

「かわされた!?」

「いや、これで終わりだ」

アリーの驚きを修が否定する。
事実、優斗は勢いそのままに間を詰めた。
そして攻撃をかわして体制を崩した相手に左手を軽く押し当てる。
瞬間、相手が吹き飛んだ。
壁に叩きつけられ……崩れ落ちる。

「勝負あり!!」

審判が宣言した。
歓声が沸く。

『決着――ッ!　初参加同士の勝者は魔法を切るという大技を見せた、ユウト・ミヤガワ!!』

◇　◇

「とりあえず、1回戦突破おめ」

「サンキュ」

応援席に戻った優斗にそれぞれ労う。
その中でもフィオナは優斗の隣まで歩いていく。

「お疲れ様です」

「ありがとうございます」

「怪我しなくてよかったです」

ほっとした表情をフィオナが浮かべた。

「無茶はしなかったでしょう？」

「このあとも、です」

「相手がだんだんと強くなっていくので難しいと思いますけど……
できる限り気をつけます」

「はい」

怪我しないのも、無理しないのも不可能だろうけど。
せめて心配だけはかけないようにしたい、と。
そう思う。

その後の試合は修の予想通りと言うべきか、相手が優斗の実力を懸念していたおかげか特に問題なく勝ち進んだ。
そして準決勝。
トーナメントの戦いぶりから大方の予想通り、優斗とラッセルの勝負となった。

「へぇ、ここまで勝ち上がるなんてやるじゃないか」

「ありがとうございます」

「せいぜい、1分は持たせてくれよ？　すぐに決まってしまっては客もしらけるからね」

あくまでも自分が絶対優勢だとラッセルは思っている。
だからだろうか。

「だから君が頑張るためにも賭けをしないかい？」

「賭けですか？」

「ああ、そうだよ。君が負けたら……フィオナ様をこっちに譲ってもらおうか」

「……なぜでしょうか？」

「君たちのところには少々、貴族が集まりすぎているからね。一人ぐらいいなくなってもいいだろう？」

「それを決めるのはフィオナさんですよ」

努めて落ち着いて話す。

心中では……イラッと来ていた。

「それにあの美貌。この僕にふさわしいと思うからね。今のうちに未来の夫のそばにいさせてもいいだろう？」

こっちの言葉を聴く気がない。

話が繋がっていない。

さらには前に話したときと態度が違う。

――ただ、それよりも。

フィオナを譲れだとか。

――物のように扱って。

ふざけるのも大概にしてほしい。

自分の大切なものに対して、よくもそう言ってくれた。

「君が勝ちあがってくれてよかったよ。おかげでこんな提案を思いついたのだから」

「……」

プチ、と来た。

◇　◇

「何か話してるんでしょうか？」

「みたいだけど……優斗、なんか切れてるっぽい」

遠目なので詳しくは分からないが、おそらくそうだろうと卓也は考える。

「ユウトさんがですか？」

クリスが驚きを表した。

あの冷静沈着な人物が怒ってる。

なんてことを言われても、信じかねる。

「あいつの大事なモンの何かをぶしつけに扱ったんじゃね？」

「でなければあいつが切れるってないだろう」

修と和泉が長年の付き合いから判断する。

「だとしたら5秒かな？」

卓也が言う。

「８秒だろ」
修が別の秒数を言って、
「１０秒で」
和泉がまた、別なことを言った。
「何の話です？」
ココが気になって尋ねる。
３人は笑って、
「決まってるだろ。ラッセルが倒される時間だよ」

◇　◇

開始線までお互いが離れた。
優斗の中で怒りが渦巻いてはいるが、それは闘争心に変えるだけ。
あくまでも心と頭は冷静に落ち着かせる。
「始めっ！」
宣言された瞬間だった。

優斗は炎の玉を瞬時に現すと、ラッセルの手前に叩きつける。
爆炎と砂煙でラッセルの視界が一瞬にして閉ざされた。
優斗自身も煙の中に飛び込んでいき、観客からはどちらの姿も見えなくなる。

「いけ」

さらに人の大きさ程度の石の塊を魔法で作り上げ、正面に飛ばす。
優斗はそこまですると、風の魔法を使って大きく跳躍した。

「えっ!?　なんだ!?」

瞬間芸に驚きを隠せないラッセルを尻目に、空中でさらに二度、魔法を使って空気を蹴り上げ自身の身体を加速させる。

――さあ、どうなる。

ここでラッセルは先ほどの石の塊をほんの僅かでも自分と勘違いしてくれているなら。

「そ、そこか!!」

煙で薄っすらと影しか見えないラッセルの姿だが、手を石にかざしているのは見える。

――かかった。

小さく笑う。
さらに風の魔法を使ってラッセルの真後ろ、直下に降り立つ。
そして反応する間も与えずに優斗は短剣を首筋に押し付けた。

……煙が晴れる。
僅か数秒の出来事。
その結果が。
優斗がラッセルの首筋に剣を当てている、ということだった。
審判がすぐさま判断する。

「しょ、勝者、ユウト・ミヤガワ！」

瞬間、歓声がスタジアムに上がる。
準決勝での圧勝劇。

『な、なんと毎年白熱する準決勝がわずか８秒。８秒で決着がついてしまいました！！』

アナウンサーが興奮しながら喋り倒す。
優斗はラッセルに一瞥もせずに戻っていく。
ラッセルが何か審判に言っているようだが、それもどうでもいい。

――とりあえず戻ろう。

少しチームの人たちと話して、落ち着きたかった。

なぜだ、なぜだ、なぜだ。
どうしてだ。
あんな奴にどうして負けなければならない。

「なぜだ……」

どうしたって負けるはずがない。
自分はあの平民に勝ち、フィオナを手に入れるのではなかったのか。

「なぜだ……」

審判でも買収していたのか。

「……ははっ」

そう結論付けてしまえば、全てがスッキリしてくる。

「ならば罰を与えなければならないな」

貴族である自分を不正を使い負けさせた。

「報いを」

そうだ。
でなければ。

「でなければ僕が負けるわけないじゃないか」

◇　　◇

「決勝の相手、誰だっけ？」

フランクフルトを頬張りながら、修が今更のように訊く。

「レイナ様ですわ」

「誰？」

「我が学院の生徒会長をやっている方です」

呆れたようにアリーが答えた。

「女性なのに学院で一番強いんですよ。わたしの憧れです」

ココがうっとりする。

「……そんなのと対戦する僕は大丈夫なんだろか？」

「だ、大丈夫ですよ。たぶん骨の一本か二本ぐらいで……」

……何も大丈夫じゃない。

「とりあえず、出来る限りは頑張りますよ」

とりわけ楽天的な口調をする優斗。

『もうまもなく決勝の始まりとなります』

「それじゃ――」

優斗が立ち上がると、修を始めとした全員が一斉に握りこぶしに親指を立てて優斗に向けた。

卓也あたりが教えたのだろうか、全員が綺麗にやってくれていた。

意味を分からずともやってくれる４人がうれしかった。

優斗も同じポーズを取る。

「行ってきます」

◇　　◇

「君がミヤガワくんか」

目の前にショートカットの美女が立っている。
決勝の相手だ。

「準決勝は爽快だったよ。あのラッセルをわずか8秒で倒したのだから」

「ありがとうございます」

「いや、なに。あいつの性格もほとほと困っていたからな。いい薬になっただろう」

笑って、一息入れたあと……レイナは目をギラつかせた。

「君はまだ、初級魔法程度しか使っていない。まだ底が知れぬということだ」

一つ上のレベルの魔法はどんなものが使えるのか、誰もが判断できない。
もしかしたら上級まで使えるのではないか、と期待もしている。

「楽しみだよ。実にね」

……好戦的。
と考えてよさそうだった。

「あまり期待しないでくださいね」

ただ、それだけを伝えて。
優斗とレイナは距離を取った。

『さあ、学院で一番と呼ばれる実力の持ち主の生徒会長と、準決勝を圧勝した最強の新人が今、激突する』

「それでは――」

審判が宣言しようとした瞬間。
“それ”は唐突に現れた。
どこからともなくカラン、と音を立てて現れた正六角形の板。

「なっ、あれは!?」

音に反応した闘技場内の3人だが、いち早くその場にあるものに気付いたのはレイナだった。
次いで審判が気付き、2人して物体に飛び込んで板を砕きにいく。

「くそ!」

だが……遅かった。
その板を中心に六芒星が地面に描かれる。
そして始まるは……召喚。
六芒星から徐々に人間ではない、明らかに異種族の身体がせり上がってくる。

「……竜」

思わず優斗が呟いた。

しかも姿は見目綺麗なものではなく、黒い体に歪な棘がついている。
大きさも１０メートル、といったところか。

『――――ッ！！』

竜が咆哮を上げた。

「逃げろ！！」

審判が優斗とレイナに怒鳴る。

「非常事態だ。１０秒後には強力な結界魔法を使う規則になってる。取り残されたらお前達でも出れなくなるぞ！！」

審判もレイナも優斗も反応は早かった。
言われたと同時、３つある闘技場内への出入り口に向かってそれぞれ駆け出す。
が、それをみすみす逃すモンスターでもなかった。
審判と優斗とレイナを見回し、一番近かったレイナを標的にする。
竜の様子を逐一見ていた優斗にはそれが見て取れた。
傲慢なまでの鉤爪がレイナを狙いを定めて掲げられる。

――やばい。

優斗は立ち止まる。
反射的に炎の玉を竜目掛けてぶつけた。
威力はないが注意を引くには十分だ。
そのまま２発、３発、４発をぶつければ完全に竜の視界には……優斗がいた。
優斗が他の出入り口を確認すれば審判もレイナもすでにたどり着い

ている。
自分が最速で出口に向かえば残り2秒ちょっとだとしても、確実に――。

「……マジで」

無理だった。
すでに結界は張られ、完全に閉じ込められた。

「10秒経ってないのに」

とは言ったところで、張られてしまったものは仕方がない。
改めて竜と対峙する。

「どうにかするしかないか」

◇　◇

竜が現れた瞬間、修とクリスが戦闘態勢を取った。
しかし竜の視界に映ってるのは闘技場内にいる3人だけ。
その中でレイナが標的にされているのが分かったため、修とクリスは観客席に張られている簡易防御魔法を突破してでも魔法を放とうとしたが……杞憂に終わる。
優斗が竜の気を逸らしたからだ。

そして安堵したのもつかの間、今度は強固な結界魔法が張られ、その中で困ったように立っている優斗がいやに印象的だった。

「……カルマがどうしてここに」

アリーの呟きに修がすかさず反応する。

「あのカルマってのは強いのか？」

周りの観客が兵士に先導されて逃げる最中、チームのメンバーは逃げることなくその場にいた。

「シュウ様なら普通に倒せるとは思います。しかしながらカルマはAランクのモンスター。上級魔法を使えるのが最低は3人いないと倒す、ということすら難しいです」

アリーの説明を聞いた瞬間、フィオナもココもクリスも青ざめる。特にフィオナの表情が一番酷かった。

「この結界も上級魔法すら防ぐ結界。細かい制御は出来ずに闘技場の中を全て包み込むから出入り口も防御されてるんです」

観客だって全員が逃げ切るには少なくとも1分以上かかる。その間、カルマは結界魔法から出してはいけない、というのは子供だって分かる図式だ。

けれどその間、優斗は一人でカルマと対峙しなければならない。まだこの世界に来て2ヶ月しか経っていない優斗に。

「なんだよ。それだったら話は簡単じゃん。優斗があれをぶっ倒せばそれで終了だ」

安心したように修が戦闘態勢を解く。
その光景がアリーには信じられなかった。
「だってカルマは上級魔法を使える人が最低3人はいないと――ッ！」
「でも俺なら普通に倒せるんだろ？」
特に慌てた様子もなく修が尋ねる。
「そ、それはシュウさんが『勇者の刻印』を持っているから」
絶望した表情のまま、フィオナが答える。
「それに私、まだユウトさんには基本属性の中級までしか教えてないんです。それなのにあのモンスターを倒せるはずないです。ですから観客が逃げたあと、シュウさんが結界を破ってでもユウトさんを助けに行っていただくしか……」
どうして修がそんな悠長に構えているのか。
修でしか普通に倒せないと言ったはずだ。
少し非難交じりにフィオナは視線を向ける。
アリーもココもクリスも同意している。
そんな彼らを見て修はこれみよがしにため息をついた。
「その考えが甘いんだよ」
「何がですか！？」

アリーが噛み付いた。

「お前らは今日、あいつの何を見てたんだ？」

中級魔法一つ使わずに勝ち進んできたじゃないか。

「それに優斗は俺の親友やってんだぜ」

まともなわけがない。

「俺は基本すらぶっ飛ばすけど、あいつは基本を完璧に習ったらはっちゃけるぞ」

「つまり？」

クリスを先を促すように相槌を打つ。

「俺より性質悪いときがある」

ニヤリと修が笑う。

それに何よりも大きな間違いが一つ。

「大体、俺が普通に倒せる奴を優斗が倒せないわけないだろ」

修の宣言に、その場にいたアリー、フィオナ、ココ、クリスが首をかしげた。

「それはどういう意味ですか……？」

代表でアリーが尋ねる。

「言った通りだ」

意味はそのまま。
何一つ変更はない。

「お前ら、優斗をなめすぎだ。あいつは俺と同等だぞ」

「それは実力的に、でしょうか？」

「そうだ」

「まさか！？」

アリーが驚く。
リライトの『勇者の刻印』を持つ勇者と同等だなんて。
滅多に目にかかることなんてできない。

「その『まさか』を実現させるのが優斗なんだって」

卓也が苦笑する。

「こんな『勇者の刻印』なんてものもらってる俺でもな、あいつとガチで勝負したら普通でもイーブン。良くても勝率は６割ぐらいだぞ」

実際に向き合って闘ってはいないけれども、それぐらいは分かる。
親友でもあるけれど、それ以上に修が唯一認めた“ライバル”だからこそ。

「それに、いつも冷静沈着な感じで穏やかだけど――」

熱量なんて持ってなさそうな性格をしているけれど。

「――決めたことに対しては極度の負けず嫌いだ。そんで、勝つために限界まで努力することを怠らない」

つまり、だ。

「俺がチートなら、あいつは化け物だ」

◇　◇

カルマと対峙してから、３０秒ほど経った。

警戒されているのか何なのか、まだ攻撃してくる気配はない。

着々と時間が過ぎていけば観客だって逃げていける。

少なくともその時間は稼ごうと思っていた。

が、視界の端に修の姿が映る。

カルマを指差した後、親指だけ突き出して首を切る仕草をした。

――倒せってか！？

カルマを改めて凝視する。

気配、圧力、感じるもの全てを鑑みて。

――まあ。

確かに“倒せない”わけがなかった。

「仕方ない」

観客が全員逃げるのも、あと十数秒で終わる。

出入り口を見ればレイナが結界を叩いているのがわかった。

少し笑えた。

「それじゃあ」

あらためてカルマと対峙する。

「倒すか」

意識を切り替える。

ショートソードを抜いて、戦闘態勢を取る。

また、さらに２０秒ほど経過する。

気付けば観客は全員が逃げ出しているが、優斗の視界にはすでに映っていない。

ただ、時間の計算からいっていなくなっていると理解しているだけだ。

『――ッ！』

動いたのはカルマだった。

一度羽ばたき、突進してくる。

優斗は風の魔法を足元に集め、それを使って一気に跳躍する。

そうしてかわしたも束の間、カルマの口の中に炎の球が生まれているのを見た。
違わずして発射された上級魔法と同威力の球を優斗は空中にいながらショートソードを振りぬいて切る。
着地すると即座に手をかざした。

「求めるは地の縛り、重き懲罰」

闘技場で優斗が初めて詠唱する。
優斗が唱えた瞬間にカルマの動きが止まる。
地面に円状の窪みが現れ、カルマが歪んで見えた。

――まだまだ。

右手を振りぬき、ショートソードに風の魔法を纏わせて全力で投げつける。
弾丸のように飛び出していった剣はカルマの腹部に突き刺さった。

――そして。

これで、最後だ。

◇　◇

「地の派生上級魔法……」

その中でも重力操作の魔法は特に難しいとされる上級魔法だ。

「それをいとも簡単に」

これが自分で特訓していた1週間の成果、なのだろうか。

気付けばフィオナの表情は少しだけ良くなっている。

が、それでも修の言葉を信じ切れてないのか、不安な様子は消えない。

「目を離すなよ、ここからだ」

「こ、ここからって……!?」

修の言葉にフィオナは驚きを表す。

――だって、上級魔法をすでに使ってるのに。

なのに修はそこから、さらに何かがあると言っている。

――そんなこと……。

いくら異世界から来たとしても。

魔法を習い始めて2ヶ月ちょっとしか経ってない。

どんなに凄いと言われても。

これ以上のことを。

できるはずがないと。

『天光満つるところに我はあり』

今の今まで、思っていた。

――これは……詠……唱……？

まさか。

「ユウトさん……？」

彼は足を肩幅に開き、目の前のカルマを見つめていた。

ゆっくりと彼の口から新しい言葉が紡がれる。

『黄泉の門開くところに汝あり』

それはフィオナが……いや、この世界の誰もが聞いたことのない『言霊』の始まりだった。

◇　　◇

『天光満つるところに我はあり』

大好きなゲームの魔法詠唱だ。
かっこよくて、繰り返しこの魔法を見たものだ。

『黄泉の門開くところに汝あり』

自分が好きな魔法。
ならば、使いたい。
使えるように努力をした。

『出でよ』

カルマを中心に魔方陣が広がり、

『神の雷』

さらに天空へと魔方陣が幾重にも連なって浮かび上がる。

――これで終わりにする！！

さあ、轟け。
剛雷。

『インディグネイション』

白光、と呼べばいいだろうか。
闘技場一面を白く染め上げる雷がカルマへと降り注ぐ。
結界魔法すらも壊す稲妻が甲高いノイズを響かせて闘技場に届く。

「――――ッ！！」

白煙が消え、闘技場を包み込むほどの光が消える。
そこにいたのは優斗のみ。
皆が恐れていたはずのＡランクモンスターは、

「……うん、勝った」

消し炭すらも残っていなかった。

◇　◇

「……これが……」

修が言っていた実力。
自信の根源。

「神話クラスの……魔法」

そんなものを使える、優斗。
勇者と同じ強さを誇る……自分の生徒。

「……だけど」

どれほど強くたって。
勇者と同じくらいに強いのだとしても。

「……それでも」

この気持ちは拭えない。

「えっと……」

優斗がフィオナ達に近づいてくる。

「やりすぎた？　これでも威力は抑えたんだけど……」

少し困ったように、そして何でもなかったように皆のところに辿り着いた優斗にフィオナは、

「ユウトさん！！」

飛び込んで抱きついた。

「へっ！？」

素っ頓狂な言葉を出して、優斗は固まった。
後ろでは６人が感嘆の声をあげている。

「……無理しないって……言いました」

「え、いや、あの……」

「……心臓が止まるかと思いました。ユウトさんがカルマの気を引いて、結界魔法に囲まれたときは」

自分が今、心臓が止まりそうですとは間違っても優斗は言わない。

「そ、それは、でも、そうしないと――」

レイナがやられていた、というのはフィオナだって理解できている。けれど、

「ユウトさんが強いのは分かりましたけど！　それでも心配で怖かったんです！！」

目じりに涙が溢れてくる。

先ほどの怖さがまだ心に残っているから、優斗の存在を感じていたくて強く抱きしめる。

「えっと、その、ですね……」

優斗がどうしようかと考えていると、後ろでニヤついている連中から囃し立てられる。

ふざけんな、とも思うがフィオナがこうして抱きついている以上、何かしてあげたほうが安心するのも理解していた。

意を決して、恐る恐るではあるが右手で頭を撫でる。

「ごめん」

「……」

「生徒会長は逃げるのに必死だったし、僕は少なくとも死なない自信はあったから、ああやって竜の気を引いたんだ」

「……」

「閉じ込められたのは予想外だったけど、それでも時間稼ぎどころか倒せるぐらい簡単にできるのは自分で理解できてた」

「……はい」

「でも、フィオナを心配させたのは謝るよ。あと――」

ごめんと言うだけじゃなくて。

「ありがとう。フィオナがそう思ってくれていることが、本当に嬉しいよ」

自分が認められていると。

誰かの大切になれていると。

そう思えるから。

「それで、オレらはあとどれくらい見てればいいんだ？」

唐突な卓也のツッコミに優斗の腕の中にいるフィオナがビクリ、と驚いて離れた。
優斗は小さく笑って答える。
「とりあえずフィオナさんが落ち着いたから、これ以降はないよ」
そう優斗が答えると、フィオナが不満げな表情を浮かべた。
「どうかしましたか？」
「フィオナです」
「……フィオナさん？」
「違います。フィオナです」
そう言われても優斗には理解不能だ。
「……えっと……？」
意味が分からず周りに助けを求める。
「お前さっき、口調が違ったんだよ」
卓也が助け舟を出した。
「そうですね。さらに“フィオナ”って呼び捨てしてましたよ」
ココが付け足した。

「マジで？」

「マジです」

クリスが駄目押しをする。

「そろそろ、その口調も変わるときが来たってとこだろ」

「……みたいだね」

優斗は修に同意する。

「もう一度、呼んでください」

フィオナが要求する。

「えーっと……あー……うー……」

先ほどは意識していなかったから出来たが、あらためて意識して呼び捨てというのはかなり恥ずかしい。

だが、フィオナが呼び捨てじゃないと今後は認めてくれないのもなんとなく分かる。

恥ずかしさをぐっ、とかみ締めて呼ぶ。

「フィオナ」

ただ、そう名前を呼ぶだけで。

花が咲くような笑顔が返ってきた。

「はい、優斗さん」

闘技大会、終わりました

結局のところ、あんなモンスターがいたのだから全てはうやむやのまま終わってしまった。

「何であんなものが出てきたのか、分かってんだろ？」

帰っている最中、それとなく修が話題に出した。

「まあね。状況から考えたら“あいつ”しか考えられないし」

状況的にも展開的にもあまりに分かりやすくて罠かと思えるぐらいだ。

「潰すか？」

「いや、いいよ。次に何か仕掛けてきたら、その時は容赦なくやるけど」

「今回はお前のミスだからな」

「分かってるよ」

自分がキレて容赦なく叩き潰したのが原因だ。

「何を言われたんだ？」

「……フィオナをもらうって言ったんだ。あの容姿は自分にふさわしいとかふざけたこと抜かしてさ」

「そんでキレたわけか」

「そういうこと」

修がそれを聞くと、軽く伸びをした。

「まあ、でも少し安心はした」

「何が？」

「お前の中であいつらも『大切』のうちの一つに入ってたところが、だ」

そう言って優斗と修は視線を前に向ける。

前のほうではアリーとフィオナが笑って何かを話していた。

「……そうだね」

「俺らの中で一番、大切なものを作らないのがお前だからな」

“作れない”のではなくて“作らない”。

そうしないと……失うものに耐えれなかったから。

「……うん」

「俺ら全員、歪んでるけどよ。それでも俺らは俺らなりに大切なもの――信じられるモノを作ってもいいんじゃないかって思ってんだ」

その中でも特に優斗は。

もう少し誰かを信じられるようになってほしい。

「これからこの世界で……もっとできればいいんだけどね」

「できるだろ」

修は空を見上げながら答える。

「あっちとは違う世界なんだからよ」

自分たちが嫌いだったあの世界とは……違うのだから。

◇　◇

「もしかしてタクヤさん達もあれぐらい出来ます？」

「無理」

ふとしたココの疑問に卓也が瞬間的に答えた。

「即答ですね」

クリスが苦笑を浮かべる。

「それはそうだろう。俺たちは優斗ほど頑張ってもない。あいつほど頑張れたら出来るかもしれないが……まあ、無理だ」

和泉がそう言うことにココとクリスが首をかしげる。

「あいつの努力ってのは身を削るのだって当然って感じだ。自分を省みないレベルはさすがにきつい」

だからこそ部活でも今回の闘技大会でも強いと思えるのだが、さすがにあそこまでやろうとは思わない。

「今回も変わらずそうだろう。きっと服の中は痣だらけだ」

上級魔法はともかくとして、あいつが使った神話クラスの魔法。あれを使いこなすのに平穏無事であったとは思えない。

「そんな姿、わたし見てないですよ」

「努力してる姿を見られるのが嫌いだから、優斗は」

卓也が答える。

いつも影で努力して、誰かにその姿を見られることを厭う。照れ屋ということもあるが、それ以上に弱みを誰かに見せたくないというのが心情だろう。

「どうしてそこまでするんですかね？」

当たり前のようなことをココが疑問に思った。

「……あいつはどんな時でも強くならないといけなかったから。戦うために」

しょうがないんだよ、と卓也は付け加える。

「誰とでしょうか？」

クリスの問いに……卓也は少しだけ悲しそうな顔を浮かべた。

「大人たちと」

◇　◇

「優斗さん、すごかったんですよ」

フィオナは家に帰ると、興奮冷めやらぬままにエリスに今日の顛末を伝えた。

「カルマを瞬く間に倒したのよね」

「知ってるんですか？」

「さすがにね。学生主催の闘技大会にAランクのモンスターが出れば問題になるわよ。マルスも現場にいたから」

「お父様も？」

少しだけフィオナが驚く。

「ええ。ユウトさんが神話クラスの魔法を使ったのだって知ってるわよ。まあ、これに関しては緘口令が敷かれたから、これ以上広まることはないでしょうけど」

「どうしてですか？」

「王様の配慮よ。神話クラスの魔法を使えるのが学院にいるなんて知られたら、それだけで注目の的だから」

本当はあの歳で独自詠唱の……しかも紛うこと無き神話魔法クラスの魔法を使うなんて、規格外にもほどがある。

さらにその他もろもろ、大きな事情があるがそれはここで話すことでもないだろう。

「そうですね」

納得したように頷くフィオナ。

「ふふっ、それにしてもマルスが驚いていたわよ」

貴族の一人として観戦をしていた旦那が倒したあとの光景に驚愕していた。

「フィオナったらユウトさんに抱きついたんですって？」

「な、なんでそれをっ！？」

いきなりのエリスの発言にフィオナは顔を真っ赤にする。
先ほどより時間が経った今で考えれば、大それたことをやってしまったと自覚している。

「ガラガラの観客席に残ってるだけでも目立つのに、そこにユウトさんが歩いていけば余計に。そして注目が集まった場所であなたが抱きついてれば完璧よ」

数少ない人数とはいえ、その場にいたほとんどがその光景を目にしたといっても過言ではない。

「……ぁぅ……」

「物語のワンシーンだった、と言ってたのはマルスだけどね」

まるで勇者と姫君のようだ。
旦那はそう語っていた。

「今度、機会があればユウトさんと酒でも酌み交わそうと思ってるみたいだから、都合が合ったら呼んでね」

顔を真っ赤にして、小さく縮こまりながらもフィオナはしっかりと頷いた。

「……はい」

生徒会長、来ました

闘技大会が終わって1週間。
7月に入り陽気も暑さに変わり始めたころ、彼女はやって来た。

「ミヤガワくんはいるか？」

優斗たちのクラスを覗き込んで開口一番、レイナは用件を伝えた。
クラスの大半がいなくなっており、数少ないところに偶然、和泉とクリスがいた。

「彼なら用事があるとかでつい先ほど、帰られましたよ」

「そうか。ありがとう」

優斗がいないと分かるや、踵を返して教室を後にしようとする。
が、嫌な予感がした和泉が呼び止めた。
この人物は闘技大会のとき、優斗と決勝を争うはずだったことは鮮明に覚えている。

「ちょっと待った生徒会長。あんた、どうして優斗を探してる？」

「決まっているだろう。決勝があのような形になってしまった以上、再戦を申し入れにきたんだ」

やっぱり、と和泉は心の中で呟いた。
和泉は優斗の性格を考える。
――再戦はないな。
すぐに結論が出た。彼女に余計な手間を取らせるのも悪いと思ったので、
「あいつ、めんどくさがりだからやらないだろう。それに勝てない勝負はするもんじゃないだろう」
まごうことなき事実を述べた和泉の発言が……見事にレイナの逆鱗に触れた。
「勝てないって……やってみなければわからない！」
「いや、わかる。あの戦いを見てたんだろう？」
だったら理解してしかるべきだ。
「お前は“アレ”を一人で倒せるのか？」
「それは……」
「倒せない以上、圧倒的に実力で負けている」
なんでこんな単純なことが分からないのか。
子供でも分かる図式だ。
「しかし私は――ッ！」

「お前は優斗と戦える場所に立ってない」

“勝負”という範疇に入っていない。

「あの時だって全力じゃない。あんた相手なら絶対に優斗は手加減するだろう」

あのモンスターよりも格下である以上。

「手加減せざるを得ないからな」

そして、その事実を知って。

「それをあんたの矜持は許すのか？」

生徒会長をやっていて、こんな真面目を絵に描いたような堅物っぽい人間が手加減を許すとは思えない。

「言いたいことはわかった」

レイナは和泉の助言に返事をする。

「至極真っ当な意見をどうもありがとう」

きっと彼の言うことは正しくて、真実なのだろうと思う。

「……だがそこまで言われる筋合いはない」

初対面でどうしてそこまで言われなくてはならない。

「それはどうも。まあ、俺の好みはツンデレ美女なんだ。生真面目堅物女に好かれようとは思わない」

和泉は半ば挑発とも思えるような言葉を返した。

「とはいえ、ちゃんと忠告はした。断られても文句は言うな」

去っていくレイナの言葉を掛ける。

そんな様子をクリスが見て一言。

「イズミ様が真面目に誰かと話すって滅多に見ないですよね」

「……俺、いつもそんなに不真面目だろうか？」

「それはもう。だからこそレイナ様と真面目に話してる姿は貴重でしたよ」

「そいつはどーも」

◇　◇

レイナが学院を出て少しすると、優斗とフィオナの姿が見える。

「ミヤガワくん！」

名前を呼ぶと、優斗とフィオナが二人して振り返った。

「……レイナ様？」

「どうかされたのでしょうか？」

二人してハナナマークを頭に浮かべる。

レイナは呼び止めた二人の前に立つと、即座に自分の要望を伝えた。

「ミヤガワくん、勝負をしてくれ！」

「……この間の続き、ということでしょうか？」

「そうだ」

目を爛々とさせているレイナ。

前回は好戦的と評したが、もしかしたら戦闘狂の間違えだったかもしれない。

「申し訳ありませんがお断りします」

「なぜだ！？」

「やる理由がありません」

丁重に断りを入れる優斗。

「理由がないって……。では君はなぜ、闘技大会に出た！？」

あの場に立っていた以上。

少しは戦いを好むものだと思っていたのに。

「じゃんけんで負けたから闘技大会に出たんですよ」

優斗がそう言った瞬間、呆気な表情を浮かべたレイナがいた。

「……それだけ？」

「あの大会に関して言えば、それだけです」

「そう……なのか」

レイナの表情があまりにも呆気に取られすぎていて、少し笑える。

「闘うことが嫌いなわけではないですけど、必要以上のことをやるのは労力使いますし」

つまるところ、大会は終わっているのにレイナと闘うのは面倒だというのが結論だ。

「なのですみませんが、闘いたいのならば他を当たってくれると嬉しいのですが」

優斗がやんわりと断る。

するとレイナが、少し自嘲するように笑った。

「……やはりトヨダの言ったとおりになったな」

「和泉が何かレイナ様に無礼なことを？」

「いや、君が決勝の続きを受けないと言っていた。私はそんなことはないと思ったのだが、奴の言ったとおりになった。ただ、それだけの話だよ」

とはいえ。

「まあ、笑える話だ」

はっはっは、とレイナは全く面白くなさそうに笑い声を出す。

逆に優斗は感嘆の声を上げた。

「どうしたんです？」

フィオナが優斗の様子を疑問に思う。

「いや、珍しいなって思ったんだ。和泉が変人と思われないなんて」

「それもどうかとは思いますけど……」

フィオナが苦笑する。

「ただ、それ以上に意外なこともあったけど」

「なんだ？　トヨダの行動が意外なのか？」

レイナが不気味な笑い止めて会話に加わる。

「ええ。和泉がレイナ様に“手間を取らせないように”なんて考えたのが意外です。あいつ、どうでもいい人物は放っておくタイプですから」

別にレイナの目的ぐらいなら、優斗に害があるとも思わなかっただろう。

普段の和泉なら「勝手にしろ」で終わらせているはずだ。

「……まさか惚れたのかな？」

呟いた優斗の台詞にレイナが鼻で笑った。

「それこそ、まさかだ。奴は自分で好みは『つんでれ美女？』とか言っていたぞ。私のような堅物で生真面目な女は好みじゃないとな」

レイナが不機嫌そうに言った。

けれど優斗はそれを聞いた瞬間から笑いが止まらない。

「どうしたのだ？」

レイナが困った表情をしていたが、笑いは止まってくれない。

――よく言うよ。

何が好みはツンデレ美女だ。

「優斗さん？」

「いや、実は和泉の好みなんですけど」

なんとなく、これは伝えたほうが今後“とっても面白くなる”という確信があった。

「逆ですよ。好みが堅物生真面目な女の子。嫌いなのがツンデレです」

優斗がそれを伝えると、今日一番の呆けた表情をしたレイナがいた。

◇　◇

「優斗さん」

レイナと別れてからというもの、すごく気になっている単語があった。

「どうしたの？」

「“つんでれ”って何ですか？」

フィオナが気になっていたのは、先ほど優斗からも発せられた単語。ツンデレなるもの。

「えっと……男が好きな女性の性格の一つだよ」

「性格？　どういう性格なんですか？」

フィオナはさらに突っ込んで尋ねる。

「普段はツンツンして無愛想なんだけど、ふとした拍子にテレたりする性格。そのギャップが男心をくすぐるんだよ」

そんなことを言われて……フィオナは少し焦る。

『男が好きな女性の性格』だと言っていた。

――もしかしたら優斗さんも？

彼もそうだったらどうしよう。

「優斗さんもですか？」

「いや、僕は騒がしいのが苦手だからね。落ち着いてる性格が好み」

優斗がそう言うと、フィオナは安心した。

――あれ？

ただ、どうして安心したんだろう、と。

フィオナは自分で疑問に思う。

――なんで？

けど、その答えが分かるのは……もう少し先のお話。

夏休みもあと少し、と迫った頃。
優斗はフィオナに誘われてトラスティ家へとお邪魔していた。
兼ねてからマルス――フィオナの父が優斗と飲みたいと言っていたのが発端で、今は優斗とマルスが二人でテラスにいた。

「ユウト君は飲めるかね？」

フィオナの父、マルスがビール瓶を傾けて尋ねた。

「いえ、あちらの世界では飲酒は２０歳以上でしたので、あまり飲んだことはありません」

「そうか。なら果実酒にでもしておこう」

手元にあるビール瓶を戻し、代わりに家政婦に葡萄酒を持ってくるように伝える。

「本当は息子も欲しかったんだ。こうやって歳離れた子供と男同士で飲み交わすのが夢の一つでな」

家政婦が酒を持ってくる間に、自分はビールをとくとくと自前のコップに注ぎ始める。

「ただ二人目は恵まれなくて。フィオナが婿をつれてくるまでは出

来ないと思っていたのだが、ちょうど家内からも娘からも君という人物を聞いていたし評判がいい。実際に会うついでに夢の一つを叶えたく思ったんだ。面倒だとは思うが、おじさんのくだらない夢に付き合ってはもらえないだろうか」

言われた通りに家政婦が葡萄酒を持ってくる。
優斗は受け取って感謝の意を述べた。
そしてマルスに向き直ると、あらためて答える。

「もちろん、喜んで叶えさせていただきます」

キン、と甲高い音を響かせてコップ同士を打ち合わせた。
まずは一口、含んでみる。

――おいしい。

ビールのような苦味がなく、軽い。
これなら好きになれそうだ。

「君を初めてしっかりと見たのは闘技大会の日だったのだがね。本当に驚かされたものだよ」

それまで、幾度か遠くから見たことはある。
書類上でも読んだことはある。
しかし、あれほど長い時間、彼の存在を意識することができたのは初めてだった。

「君のあの魔法は初めて見たよ」

「だと思います。向こうの世界にある物語の魔法ですから」

「物語の中でもあれぐらいの威力なのかい？」

「いえ。もう少し威力は上がります。少なくとも魔王と呼ばれるものを倒せる威力は持っていますから」

「ふむ。本当に神話魔法と大差がない」

おそらくは詠唱が間違いなく『言霊』となっているだろう。
むしろ新しい神話魔法と認定してもいいのではないだろうか。
彼が成長した暁には宮廷魔法士にでもなってもらい……と、ここまで考えてマルスは頭を振った。

「いや、今はこんなつまらないことを話しても仕方ない」

マルスは話題を変える。
明るい口調でフィオナのことを話し始めた。

「娘は明るくなった。よく話すようになったし、喜怒哀楽も前よりずっと顕著に現れる」

あの無口で無愛想だった娘が、だ。

「3ヶ月前から比べたらずっと素晴らしい女性になった」

とても魅力的になった。

「君のおかげだと聞いているよ」

マルスが言ったことに優斗は笑って否定する。

「僕だけじゃないです。周りに皆がいたから、フィオナはあれほど変わったんだと思います」

そうだ。

決して自分だけじゃ無理だった。

「僕だけだったらきっと、緊張ばっかりしてるだけで何の影響も与えられなかった」

「そんなことはない。君だけのおかげじゃないかもしれないが、それでも君が一番フィオナに影響を与えてくれたのだ」

それは親として嬉しい。

素直に彼を賞賛できる。

「ありがとう」

ぐしゃ、と頭を撫で回した。

「おっと、少し馴れ馴れしかったか」

エリスからは良い子だということをいつも聞いており、フィオナからは素晴らしい人だということを聞いているせいか、どうにも初対面という感じがなくて距離感が掴めない。

「いえ、大丈夫ですよ」

いきなり頭を撫で回されて虚を突かれた優斗だが、嬉しそうに笑う。

「あと、裏工作も一段落してね。君たちも貴族の爵位を持つ家柄となった」

そういえば、と伝えようと思っていたことを二つほど思い出す。
これは最初に言っておけば良かった、と少し後悔する。

「シュウ君は伯爵の家系、他は全て子爵の家系ということだ」

「なぜですか？」

「メリットがあるから、だろうと思う。いずれ異世界からの客人ということが発覚すれば、パーティーなどにも呼ばれることが多々あるだろう。その時のために今のうちに慣れておいてほしい、ということ。そしてもう一つは――」

マルスが言おうとして、少し言いよどんだこと。
優斗はそれだけで何となくではあるが、理解できた。
続きを言葉にする。

「絶対防御としての役割、ですか？」

「……そうだ。不特定多数が集まるパーティーで君たちがいてくれれば、何かあっても対処ができる」

「修の勇者としての役目がある以上、仕方ないことではありますね」

「とはいえ、そういう状況は滅多にない。つまりはパーティーマナー向上のための爵位と考えてもらうのが一番だ」

これが伝えることの一つ目。

もう一つは、

「あと、私とエリスが正式にユウト君の後見人になったからよろしく頼む」

「……はい？」

優斗が驚いた表情をさせた。

マルスは笑って答える。

「爵位を得たことによってね、今まで仮だったのが正式になったんだ」

それぞれ、家庭教師を請け負っている公爵家が彼らの後見人となっている。

「……迷惑じゃありませんか？」

「まさか。こうやって酒を一緒に酌み交わせるのに、何が迷惑なものか」

ぐいっ、とビールを煽る。

優斗も一口飲んでから、この言葉を“当然のように”した。

「できる限り迷惑はかけないようにしようと思いますので、よろしくお願いします」

優斗が口にした『迷惑をかけない』という台詞。

マルスは一蹴した。

「駄目だ」

「え？」

「できる限り迷惑をかけなさい」

最大限、そんなものはかけていい。

「君はまだ子供なのだから」

遠慮することはない。

一方で優斗はじわり、と胸の中が暖かくなるのを感じていた。

――なんで、こうやって。

この人は。

――ほとんど初対面なのに。

簡単に胸の中に入ってくるのだろう。

たくさん大人の相手をしてきたから。

何が嘘で何が本当かどうかは分かる。

――この人は信用するに足る人だ。

そんなことが分かってしまう。

「僕はまだ……大人に頼ったことはありません。全力で迷惑をかけない生き方をしてきましたし、頼れるような大人もいませんでした」

「本当か？」

「……ええ。それに僕は『大人』という人種を信じてませんから」

そう言うと少し語弊があった。

「いや、というよりも信じられる人生を過ごしていませんでした」

これが正しい。

「僕の周りにいたのは、僕を道具として扱う両親。ハイエナのごとく集る親戚。そんなのばかりでした」

ろくでなしばかりだ。

「とはいっても、大人全員がそうじゃないってことも分かってます」

だったら社会が正常に作用しているはずもない。

「むしろ僕の周りにいたのが特殊すぎるのも理解できています」

そう言って優斗はマルスを正面から見つめた。

「だから――」

思ってしまった。
いい機会だから。
やってみようと。

「教えてください。迷惑の掛け方を」

「……ユウト君」

「マルスさんが今まで会ってきた大人と違うのは分かりますから」

「……そうか」

迷うことなく言い切った優斗。
それをマルスは……疑問に思う。

――なぜだろうな。

大人というものを信じてこなかった彼が、どうして自分は信じてくれたのか。
マルスは自分だけの功績だと思えるほど傲慢にもなれない。
どうしたって初対面の人間に彼がこれほど信頼してくれるとは思えないからだ。
そう考えると、

――やはりフィオナ、か。

行き着いたのは娘の存在だった。
あの子の父親だということが、大きな力になってくれているのだろう。

――“フィオナの父親”というだけで、彼は信頼してくれている。

我が娘ながら凄い、と感心する。

――いいコンビなのだろう。

互いに影響を与えている。

それも良い方向に。

――もしかしたら。

ふと思い出す。

あの時に見た光景。

――ユウト君がカルマを倒したあとに見た、あの一枚の絵のように光景は。

勇者と姫君に見えた、あの場面。

あながち間違いではない、と。

マルスは今更ながら、そう思った。

「なんでさ」

草木を踏みながら卓也は一人ごちる。

「夏休みは海に行くんじゃないのか！？」

「和泉が勉強すらもほったらかして魔法科学なんかに嵌まってたから追試受けてんだし、クリスは和泉を縛り付けて講習中。仕方ないじゃん、海に行くときはあいつらも連れてかねぇと。だから今回は森に来てみたんだ」

「なぜ！？」

どうしてそこで森に行く、なんてことが出てくる。

「おもしろそうじゃん」

というわけで今回、６人で森の探索をやることになった。

「魔物は？」

「ほとんどいないルートを通るから大丈夫だって」

あっけらかんと言う修だが、それを卓也が信じるわけもない。

「卓也、絶対に何かあるから慌てるだけ無駄。諦めたほうが精神的に落ち着くよ」

「……そうだな」

今までの経験上、何もないなんてことはありえない。

そんな二人の気苦労を知ってか知らずか、修はアリーに声を掛ける。

「アリーは大丈夫か？」

「はい。まだ大丈夫ですわ」

王族だからこそ、こういったことをやったことはない。

だから新鮮で楽しい。

「薬草やら原石やら、いろんなものが落ちてるもんだな」

「採取を本業としているギルドが来るくらいですもの」

修は何かを拾ったり見つけたりしては面白そうに眺める。

その点に関しては他の5人も同じなのだが、いかんせん動き回る範囲が修一人だけ違っている。

「おっ！　なんか洞窟っぽいところ発見！」

早々、修が一人で駆け始める。

「あいつの元気はどこから来てるのか、時折気になるんだよね」

「それは言えてる」

優斗と卓也が苦笑する。

と、そこで先ほどの場所まで行った修が全員を呼び寄せた。

「お前ら、ちょっとこっち来てみろよ。面白いのあるぞ！」

大きなゼスチャーで手招きする。

5人は呼ばれるがままにその場所へと向かった。

「あっ、洞窟じゃなかったんだ」

「違う違う。面白いのはそこじゃなくて」

洞窟かと思ったそこは、洞穴だったようだ。

おおよそ5メートルほど掘り進められており、その一番奥では。

「卵？」

「……光ってる」

卓也とココが不思議そうにそれを見た

「これ、絶対に何かあるぜ！」

光ってる卵なんてもの、確かに“何か”はあるだろう。

と、ここでフィオナが思い出したように言った。

「……もしかして龍神の卵？」

「フィオナ、知ってるの？」

優斗が訊けば、フィオナは昔読んだ書物の内容を思い出しながら伝えた。

「おそらくこれは龍神の卵だと思います。周期は分かりませんが、数十年から数百年に一度……龍神は卵を産み落とします。歴史上でも幾度か人間が育てていますから、記録が残されていますし、今回の状態も生まれる寸前のものと一致しています」

とはいえ、そんなものがこんなところにあるとは。

本当に思いがけない出会いだ。

けれどその一方で、優斗と卓也は眉をひそめる。

「龍神の卵なんて珍しいものを見つけた。ということは」

「嫌な予感しかしないんだよね」

フラグ、と言っていいだろう。

大抵の場合はこの後、何かしらの騒動が起きる。

「あら？　なんでしょうか？」

その騒動の先走りに、最初に気付いたのはアリーだった。

「地面が揺れてませんか？」

言われてみて確認すると、確かに揺れている。

「……来たね」

「これが嫌なんだよ」

言った途端にこれだ。

さすがに修だと思わざるを得ない。

「みんな、戦闘準備して。厄介なのが来るよ」

優斗が言い切る。

全員して洞穴から出てみれば、そこにいたのは……

「3匹で一斉に来ることないだろ」

「大方、この中の卵を狙ってきたってオチなんだろうね」

面倒くさそうに優斗が呟いた。

10メートル級が2匹と5メートル級が1匹。

「アリー、どれがどんな魔物か分かるか？」

「サ、サイクロプスにシルドラゴン。それにオークキングです」

一つ目巨人と銀色のドラゴン。そして豚の人型巨大バージョン。

「サイクロプスとシルドラゴンはAランク。オークキングはCランクです」

正直な話、このメンバーでなければ絶望するランクだ。

「チーム分けすっか」

気軽に修が決める。

「オークキングは卓也とココでなんとなるだろ。サイクロプスは俺とアリーが担当。シルドラゴンは優斗とフィオナでどうにかしてくれ」

この魔物が集まってチーム分けなんてやれるのが凄い。

アリーもフィオナもココも、内心そう思う。

「分かった」

「りょーかいだよ」

卓也と優斗も来てしまったものは仕方がない、と従う。

「それじゃ、まずは」

吹き飛びやすそうなサイクロプスとオークキングに修と優斗は手をかざす。

「「求めるは風切、神の息吹」」

瞬間、豪風が魔物2体を吹き飛ばした。

「うしっ！　行くぞアリー！」

意気揚々と洞穴から飛び出す修。そして慌てて付いていくアリー。

続いて卓也とココもオークキングに向かって走っていく。

「フィオナはこのまま、この卵を守ってて」

「大丈夫ですか？」

「もちろん。この前もちゃんと倒したのを見たでしょ？」

軽く笑って優斗も洞穴から一歩を踏み出す。

――とは言っても神の雷じゃ広範囲すぎるか？　森とか出来る限り傷つけちゃいけなさそうだし。

広範囲の魔法を使うのはさすがに駄目だ。

採取系を請け負っているギルドに怒られる。

なら、もっと狭い範囲で使えてＡランクの魔物を倒せる魔法。

「……これ、うろ覚えな上に不完全版なんだよな」

昔は必死に覚えた記憶があるけれども、いかんせん５年ほど前の記憶だ。

実際にやってみても完全版ではなく、不完全なものが出来上がった。

どうやら覚えていたのは不完全版の詠唱であり、それがイメージとして記憶の底に繋がっているから実際に出てきた魔法でも不完全版だった。

「まあ、でもこれならいけるか」

オークとサイクロプスは他がきっちりと引き受けてくれていて、こっちに向かってきているのはシルドラゴンのみ。

優斗は一度、大きく息を吐いて……吸う。

『天空の戒め解き放たれし、氷れる黒き虚無の刃よ』

勢いを増して迫ってくるシルドラゴン。

だが、気圧されずに優斗は紡ぐ。

『我が力、我が身となりて、ともに滅びの道を歩まん』

右手に黒い光が集う。

そしてその場に押し留められるように球状になった。

『神々の魂すらも打ち砕く――』

球を砕くように握り締める。

瞬間、優斗は振りかぶった。

黒き光が一筋の本流となって、シルドラゴンへと向かう。

「――神滅斬』

稲妻状の刃がストン、とシルドラゴンを両断した。

叫ぶこともなく、何かをするわけでもなく、切られたことすらも分からずに絶命させた。

「よし」

真っ二つに切り裂き、倒した。

優斗が振り向けば、唖然とした表情のフィオナがいる。

「……優斗さんといると、Aランクの魔物は簡単に倒せそうな気が

するから怖いです」

「これも努力してる結果です」

優斗が胸を張って答えると、フィオナは表情を崩して小さく笑った。

「卵は大丈夫そうですね」

「はい。何も問題はなかったので」

フィオナがやさしく卵を撫でる。
優斗も彼女に倣って卵に触れてみた。
その時だった。

「えっ？」

「きゃっ！？」

卵が一際大きな光を発する。
何事かと二人が思うのも束の間、卵の殻が割れる。
光で眩しい中、その中心にいたのは、

「……子供？」

「……赤ちゃん、でしょうか？」

それも……人の形をしている。
おおよそ1歳ぐらいだろうか。

「龍神って龍じゃないの？」

「いえ、龍神と祭られているのは確かに龍なのですが……すみません。私も小さな頃の姿までは知らないです」

二人して混乱していると、魔物を片付けた他のメンバーが洞穴に集まってきた。

「卵は無事か？」

「どうなりましたか？」

まず修とアリーが訊いてきた。

「……無事、というよりは無事に産まれた」

ちょい、と優斗が指差す。

「赤ん坊？」

「かわいいです」

卓也とココが疑問と感想を述べる。

次第に光も弱まってきた。

赤ん坊の目もうっすらと開き、

「……あいっ！」

可愛らしい声をあげて、優斗とフィオナの姿をしっかりと捕らえた。

よたよた、としながら立ち上がろうとする。

「ちょっと待った！」

「あ、危ないです！」

一番近くにいた優斗とフィオナが赤ん坊に駆け寄った。

「セーフ、です」

一足早く辿り着いたフィオナが赤ん坊を抱き寄せる。

「まったく……」

ほっ、と優斗は一息つく。
焦らせないで欲しい。
ただでさえよく分からない状況なのに。
けれど龍神の赤ん坊は、フィオナをじっと見るとさらに全員を混迷に突き落とす。

「どうしたんだろ？」

優斗が赤ん坊の視線が気になって疑問を口にする。
すると次の瞬間、

「ま～まっ！」

そして優斗を見て、

「ぱ～ぱっ！」

なんて言葉を。

幸せそうに言ってのけた。

名前、決めます

森から帰った一行は、とりあえず図書館にある一冊の本を借りてきた。
それをアリーが筆頭にカフェテラスで読み進めていく。

「龍神は自らを育ててくれるものと同じ種族に生まれるみたいです。早ければ数ヶ月、遅ければ数年の後、母親の龍神がやって来て子供を引き取る。それまでは龍神の子供の親となった種族のものが責任を持って育てる」

パタン、とアリーは本を閉じた。

「これがおおよその概要というものですわ」

「放っておくということは？」

そんなことする気もないが、とりあえず優斗は訊いてみた。

「恐れ多くてできません。大変名誉なことなのですから。何よりも赤ん坊を捨て置くというのは、さすがに……」

「だよね」

政治的にも倫理的にも問題がありすぎる。

「とりあえず、埒があかないからエリスさんに相談しに行こうか」

龍神の赤ちゃんを抱きかかえたフィオナに合図する。
自分たちはこの子のパパとママらしい。ただ、突然そんなことになってもどう判断していいかが分からない。
なのでエリスに知恵を貸してもらうことにする。

「アリーも王様に話を通しておいてもらっていい？　結構重要そうなことだから」

「了解しました」

アリーが頷くと、修が立ち上がる。

「そんじゃ、一旦解散すっか。これ以降は優斗とフィオナの問題だしな」

気楽にそんなことを言う修。
それがどうにも優斗は気に入らない。
両手に握りこぶしを作ると、それで修の頭を挟み込む。

「いったい誰のせいで大変なことになってると思ってるんだ、おい？」

グリグリと万力のように締め付ける。

「い、痛い、わ、悪かった俺が悪かったから、ギブギブギブ！！」

修が優斗の腕をタップする。
少しは気が晴れたので、優斗は拳を収めてフィオナと一緒に歩いていく。

「極力、こっちでどうにかするから安心しといてね」

後ろにいる友人達に振り向きながら声をかけ、二人と赤ん坊はトラスティ家へと向かった。

◇　◇

「貴方達、そこまで進んでたのね」

家に帰ってきたフィオナを見るや、エリスの第一声はとんでもないものだった。
確かに若干茶色がかってはいるが黒髪。
そして瞳は赤みがかった黒。
ぱっ、と見れば二人の子供と言われても納得する。

「……いろいろと待ってください」

全力でエリスを押し留める。
からかっているのは分かっているが、それでも言い訳をしなければならない。

「誠心誠意、説明をさせていただきますのでちゃんと聞いてください」

そうしてエリスを交えて今日あった経緯を話していく。

「女の子の龍神の赤ちゃん？」

「はい」

たいして慌てる様子もなくエリスは３人を見比べる。

「もしかして選ばれちゃったの？」

過去、そういった人たちが存在しているのはエリスも知っている。
直近ではおよそ３０年前ぐらいだったはず。

「そのようなんです」

フィオナが頷く。

――とりあえずは。

フィオナも優斗も嘘を吐くタイプでないのは百も承知だ。
しかし確認してみないことには始まらない。
エリスは赤ん坊に近づいていく。

「ねぇ、この人は誰？」

ピッ、とエリスが指差した先には優斗。

「ぱーぱ」

赤ん坊が答えた。

「じゃあこっちは？」

続いてエリスはフィオナを指差す。

「まんま」

紛れもなく赤ん坊は『パパ』と『ママ』だと言った。

「あら、すごいわね」

「……言葉をそこそこ理解しているのかもしれないですね」

「そうみたいね」

二人が両親だというのは間違いなくなった。

それなら、とエリスは自分を指差す。

「私はママのお母さんだから“ばあば”よ」

「ばーば？」

首を傾げながらはっきりと口にする赤ん坊。

「そうそう、よく言えたわね」

「あいっ！」

エリスに褒められて、赤ん坊がフィオナの腕の中で嬉しそうにはしゃぐ。

「良い子じゃないの。この子」

「そうですね」

頷くフィオナ。

が、ここでエリスが一言。

「それでこの子の名前は何にするか決めたの？」

爆弾を落とす。

「え？」

「お母様！？」

大慌ての二人を内心で楽しみながらエリスは続ける。

「育てないの？」

「それを相談しに来たのですが」

優斗が説明するがエリスは意に介しない。

「パパとママになっちゃったんだから育てなさいな。安心しなさい、学生生活をおろそかにしろと言う訳じゃないし、私がしっかりとフ

ォローしてあげるから」

「いや、でも……」

なにかしら不安があるのか、優斗が食い下がる。

「心配しないの。こういうのって出来ないところには来ないようになってるんだから。貴方達なら育てられるから、この子も二人を両親に選んだのよ」

「そう……なのですか？」

フィオナはまじまじと赤ん坊を見る。

「もちろんよ。でなければ龍神の子供を育てた記録がいくつも出てくるわけないでしょう」

「……そうですね」

言われてみれば、そうだ。

ということはつまり、自分と優斗はこの子を育てられるという意味になる。

「頑張ってみましょうか……」

そう呟いたところでフィオナはハッ、とした。

「優斗さんはどう思います？」

今、零れたのはあくまで自分の心境だ。

けれどこの子を育てるには自分だけでは駄目。
優斗の了承も得られないと。

「フィオナは今、育てたいって思ったんだよね？」

「はい」

「……そっか……」

優斗は少しだけ考える。
自分が味わってきたのは一般的な子育てとは言わない。
無論、それが理解できているということは、一般的な子育てぐらいは知っているし、自分の理想の父親像というものだってある。
けれど、

――できるかどうかと言われれば微妙。

なにせ子育てなどやったことがないのだから。

――でも、ね。

それはフィオナだって一緒だ。
そして彼女はやる気になっている。

「なら、僕も覚悟を決めるよ。フィオナが頑張るなら僕も頑張る」

優斗はマイナスイメージを振り切って、彼女と共に子育てすることに決めた。

「はいっ！」

フィオナが元気よく返事をする。

「話はまとまったわね？」

エリスの問いかけに二人はこくん、と頷く。

「それなら親として最初の仕事。この子の名前を決めちゃいなさい。相談も提案もしてあげるけど、決定するのは貴方達よ」

「名前……か」

そう言われて、考える。

「何か良いのはないでしょうか？」

「龍神の子供だからリューナとか、そういうのはどう？」

“リュージン”の子供だから“リューナ”。

「安易すぎません？」

「そうかしら？」

「シャルロッテというのは？」

「「却下」」

優斗とエリスに同時に駄目だしされる。

「ん～、リューネは？」

「お願いですから“リュー”から離れてください」

「フランソワはどうでしょう？」

「フィオナはもうちょっと乙女的な名前から離れようか」

西洋っぽくない顔立ちで、その名前は辛過ぎる。

何か由来でもある名前を……と、優斗は考えようと思ったときに気付いた。

「……あっ、そういえば気になったんですけど」

あまりに大きな問題がありすぎて忘れていた。

「龍神というのはこの世界で信仰のある種族なんですよね？」

祀っているという言葉があったのだから、神様のような存在なのだろうか。

「そうね。神聖な種族として崇めているもの。最大の宗教でもいくつかの宗教でも神獣として扱われているわ」

「……そうですか」

エリスの説明を聞いて。

一つ、思い浮かぶ。

――とりあえず提案するだけしてみるか。

「じゃあ、僕からも名前を一つ」

昔に読んだ小説でこの名前があった。

説中では、その名前の意味を説明していて……それがこの子には合っている気がする。

「マリカ」

優斗が名を紡いだ。

エリスが興味深そうに尋ねてくる。

「どういう意味なの？」

「茉莉花――マツリカと呼ばれる花の別読みなんです」

そう、名前に意味を込める。

その中でもポピュラーなのが花にまつわる言葉だ。

「僕達の世界には花言葉というものがあります」

「それはこの世界にもあるわよ」

エリスが付け加える。

そうなんだ、と優斗は感心しながら言葉を続けた。

「じゃあ、細かい説明は飛ばしまして花言葉だけ言いますね」

優斗はエリス、フィオナ、赤ん坊を見回すと名前に込めた意味を告げる。

「清浄無垢」

先ほどのエリスの会話を聞いて思い浮かんだ。

「他にも愛らしさ、愛嬌、素直などあるんです。だから僕はこの花が意味する言葉のように、この子には育ってほしい」

と、ここまで言ったところで急激に恥ずかしくなってきた。

なぜだがものすごく語ってしまったような気がする。

「ど、どうでしょうか？」

却下されたところでどうこう、というわけでない。

ただ、案外真剣に考えた名前を吟味されるというのは緊張する。

「私はこの名前が良いと思いました」

「こっちの世界でも違和感はないし、私も良い名前だと思うわよ」

そして最終確認。

「二人は……この名前がいいのね？」

うん、と頷く。

それを見てエリスは、あらためて赤ん坊の名前を告げる。

「じゃあ、この子は今日からマリカ。“マリカ＝フィーア＝ミヤガワ”ね」

「フィーア？」

聞きなれない単語にフィオナが首を捻った。

「ユウトさんの爵位名よ。これからはフィオナも名乗る場合があるかもしれないのだから覚えておきなさい」

「えっ！？」

突然のエリスの言葉に驚きを隠せないフィオナ。

「それはそうよ。この子の両親ってことは夫婦よ、夫婦」

エリスが言ったことを二人は頭の中で反芻する。

ポン、と同時に顔が赤くなった。

「それともユウトさんが婿養子ということで“マリカ＝アイン＝トラスティ”にする？　どっちでもいいわよ」

こういった類の話には優斗もフィオナも耐性はないが、それでもいち早く立ち直った優斗が訊く。

「ど、どっちを名乗ったほうが問題あります？」

「どっちもどっちじゃないかしら。一長一短よ」

まだ火照り覚めやらぬ頬を手で扇ぎながら、優斗は判断する。

「なら、時と場合で使い分ける方向にしません？　基本的には爵位の低い僕のほうを使う方向でいいので」

「そうね。そうしましょう」

優斗ならば臨機応変に対応してくれるだろう。

「あとは――」

と、ここで玄関から慌てて家の中に入ってくる音が聞こえた。ドタドタを騒がしい音を響かせながらリビングに近づいてくる。この家をこのように誰にも咎められず闊歩できる人物など、優斗もエリスもフィオナも知る限り一人しかない。

「りゅ、龍神を育てることになったというのは本当か！？」

その唯一の一人、マルスが慌てた様子で帰ってきた。

始まりの一つ

物音を立てて帰ってきた夫をエリスは嗜める。

「騒々しいわよ、あなた」

「落ち着いていられるわけがないだろう」

王城で働いていた時に王より知らされた出来事。
それを聞いて慌てないわけがない。

「この子がそうなのか？」

フィオナが抱きかかえている女の子。
突如乱入してきたマルスに首を傾げている。

「ええ。今しがた名前が決まったのよ。マリカと名付けたわ」

優雅に紅茶を飲みながらエリスが答えた。

「……えらく落ち着いてるな」

「もうフィオナとユウトさんが親に決まっちゃったのだからね。それならしっかりと育てるのが至上の命題でしょう？」

エリスが諭すように言う。

「……それもそうか」

確かに自分が慌てたところで何かが変わるわけでもない。
マルスは落ち着こうとする。
が、エリスはマリカの注意を引くと、マルスを指差した。

「いい、マリカ。これがママのお父さん、“じいじ”よ」

「エリス！？」

落ち着きかけた気分が台無しになった。
しかし、そんな彼のことなど露知らず、マリカはマルスを見た。

「じーじ？」

「そうよ。よく言えたわね」

エリスが褒め称える。

「ほら、あなたも初孫なのよ。ちゃんと言えたのだから褒めてあげなさいな」

エリスがそうマルスに振る。
現在、彼の視界には今日突然に出来た孫がいた。
おそるおそる近づいていくと、なぜかマリカがきゃっきゃっとはしゃぐ。
そんな初孫の様子に少しだけ警戒心を解くと、

「え、えらいぞマリカ」

やさしく頭を撫でてみた。

「あうっ！」

返事なのか叫んだだけなのかマルスには判断できなかったが、それでも喜んでいるマリカの姿に少し顔が綻んだ。

「……あの、エリスさん。そろそろ話を戻してもいいでしょうか？」

と、そこでマルスが帰ってきてから傍観していた優斗が話を切り出した。

「あっ、それもそうね。先ほどの話の続きといきましょうか」

エリスがあらためて優斗に向きなおす。

マルスもそれに倣った。

「それでマリカを育てるにして、どこで育てるかなんですが……」

「まあ、この家でしょうね」

あっさりとエリスが答えた。

「お願いしてもよろしいでしょうか？」

優斗はマルスとエリスに伺いを立てる。

「迷惑を掛けろと言ったのだから、存分にかけていいのだよ」

「ありがとうございます」

優斗が頭を下げた。

その後、何点か話すことがあり、そのことについて詳細を詰めた。

時間はそろそろ２２時を過ぎようとしていた。

「ぁぅ……」

フィオナに抱かれているマリカがうつらうつらしだした。

「あら、もう眠いのね」

エリスは立ち上がるとフィオナを促す。

「フィオナ。今日はあなたが一緒に寝てあげなさい。寝かしつける方法は教えてあげるから」

はい、とフィオナは返事をして立ち上がった。

「僕もそろそろ帰りますね」

次いで優斗も立ち上がった。

「泊まっていってもいいのだよ？」

「いえ、大丈夫ですよ」

その場にいる全員に手を振って優斗は踵を返す。

すると、だ。

寝そうになっていたマリカが急にぐずりだした。

「……ううう」

その様子に優斗も気付く。

帰ろうとしていた足を止めてフィオナに近寄る。

「どうしたの？」

「あの、突然マリカが泣き出したんですが」

優斗が顔を覗き込む。

が、マリカは突然ぐずるのをやめた。

「えぅ」

「だいじょうぶ……かな？」

「おそらくは」

二人してエリスに確認を取ると「たぶんね」と言われる。

「それじゃ今日は帰るから」

「はい、それでは」

玄関に向かおうとする優斗。

そんな彼を急に掴んだ小さな手があった。

「ぱーぱっ！」

フィオナから身を乗り出さんばかりにぎゅっ、と優斗の服を掴む。

「あぅぅ」

そして小さく唸った。

「ど、どうしたんだろ？」

「わかりません」

赤ちゃんのアクションが何を指すかなど1ミリたりとも分からない二人。

だが、エリスが何かに気付く。

「あっ、もしかして」

エリスはマリカを覗き込んで、

「マリカはパパが帰っちゃうのが嫌なの？」

そうエリカに問う。

じわり、とマリカの瞳が余計に涙で滲む。

イエスと言っているようだ。

エリスはマリカの意思を汲み取ると優斗に提案……というより命令する。

「というわけだから泊まっていきなさい、今日は」

一瞬、エリスの言ったことに優斗は戸惑うが、すぐに結論を出す。

「そうですね」

頷いた。

「ユウト君。それなら少し付き合ってもらえないだろうか？」

すると良い機会だとばかりにマルスが飲む仕草を見せた。

「あなた、またなの？」

少し不満そうにエリスが口を尖らせる。

「孫が出来てしまったのだからな。こういう日は祝いたいものだ」

しかしマルスにそう言われてしまい、エリスは反論をこれ以上しなかった。

「秘蔵の一本を持ち出そう」

そう言って笑ったマルスに優斗も笑い返して、

「ご相伴、お預かりいたします」

◇　◇

二人して乾杯をすると、優斗が頭を下げた。

「ありがとうございます」

「何がだね？」

「前に『迷惑をかけていい』と言ってくれたことです。だからマリカをこの家にお願いしようと思いましたから」

幾分、気が楽に提案を言えた。

「気にすることはない。フィオナも母親なのだからな。それに君の責任でもない」

偶然が重なった結果、二人が親になったのだ。

誰かを責める必要などない。

「ならマリカの父親として『ありがとうございます』と伝えておきます」

「そうか」

酒を口にする。

滑らかな味わいの葡萄酒が臓腑に染み渡る。

「それにしても、私もついにおじいちゃんか」

しみじみとした言葉がマルスの口から出た。

「フィオナが学院に入ってなければ、実際にそうなっていただろうがな。しかし唐突にそうなると驚くものだ」

「……貴族というのは結婚も早いのですね」

「ああ。幸いにして娘は魔法を使う素養があったからな。それを伸ばすために学院に入り、それにより婚姻も遅れている。普通の貴族ならばフィオナぐらいの歳ですでに子供がいる者もいるのだよ」

むしろ、この歳で結婚していない貴族の娘は少ないほうかもしれない。

「なら、僕はフィオナに感謝しないといけませんね。彼女に魔法の素養があったおかげでフィオナに会えたし、エリスさんに会えたし、マルスさんに会えましたから」

「そう言ってくれるのは、うれしいものだな」

「そうですか？」

「ああ、そうだとも」

二人は同時に葡萄酒を口に入れる。

あまりお酒を飲んだことのない優斗でも美味しいと思えた。

「それにしても、君はこれからどうするつもりだい？」

「どういうことですか？」

「今日のマリカの態度を見ると、あの子は君が一緒に住んでいなければまた泣き出すぞ」

なんとなくだが、間違いないと感じる。

「……どうしましょう？」

「簡単なのはユウト君がここに引越して一緒に住むことだが」

「大丈夫なのでしょうか？」

自分なんかが公爵家に住む、ということに対してやって来る問題は無視できないものではないはずだ。

しかしマルスは平然と言ってのけた。

「なに、問題はない。まあ、龍神を育てるというのは国にとっても『そこが龍神の選んだ土地』としてプラスイメージになるから、今回のことはある程度ではあるが流布される。だが親の秘匿性は保たれるように国がバックアップに回る」

「それもあるのですが、皆さんは？」

「私は息子が欲しかった。エリスは君を気に入っている。フィオナは言わずもがな、だ。この家にとっても君が来てくれることは歓迎すべきことだよ」

マルスの言ったことに優斗の胸が“ドクン”と高鳴った。

――結果が出なければお前はこの家にいる価値がない。

よく言われ続けていた台詞。
何度も何度も繰り返し、聞き飽きたもの。
それが実の親からもたらされていた言葉。
けれど今、この人は。
全く違うことを言ってくれた。

――ああ、嬉しいもんだな。

“結果を出していない自分”でも求めてくれて歓迎してくれているのは。
ただそれだけのことが、これ以上なく嬉しい。

「そう言っていただけて嬉しいです」

ただ、今ここで決めてしまうことでもないので。

「一応、明日の朝にでも皆さんと相談して結果を出そうと思います」

「ああ。そうするといい」

指輪と家族と得られたもの

「……ん……」

朝日が目に入って、優斗は眠りから覚める。
普段とは違う天井が目に映る。

「……」

寝起きはとても悪いほうで頭の回転もそこそこに悪いが、さすがに自分がどこにいるのかは覚えている。

「……フィオナの家か」

のそのそとベッドから這いずり出た。

――今日は僕がここに住むのか……相談しなきゃ。

普段はゆっくりと頭の回転が上がっていくが、さすがに今日はそういうわけにもいかない。
無理にでも普段の状態に戻ることが必要だ。

「……んー、と……」

どうしようかと回転不足の頭で考え、やらないよりはいいだろう、といつもは絶対にやらない行動をしようとする。

「……伸びでもしてみるか……」

両手を組み合わせ、伸びをしようとした瞬間だった。

左手の指に違和感があった。

「……ん……？」

ぽけっ、としながら指を見てみると……そこにあったのは。

「……ゆびわ？」

左手の薬指に見たこともしたこともない指輪が嵌まっている。

一歩遅れて事の重大さに気付いた。

「いや、なんだこれっ！？」

眠気も消し飛び、頭の回転数も一気に上がった。

慌てて着替えてフィオナたちに会いに行く。

幸い、優斗以外はすでに食事の広間にいた……のだが、なぜかフィオナの周りに集合していた。

マリカはエリスが抱いている。

「あっ、優斗さん」

朝のあいさつすらも忘れてフィオナが困った表情を浮かべている。

「もしかして……何かあった？」

「まーちゃんと一緒に寝てたんですが、朝起きたら指輪が……」

まーちゃん、というのはマリカの愛称だろう。
そして指輪というのは、

「もしかしてこれ？」

優斗は左手をフィオナに見せる。

「は、はい！　それです」

フィオナも左手の薬指に指輪が嵌まっていた。

「これ、取れないんですよ」

フィオナが取ろうとするが、少し動いたところで止まってしまう。
優斗もやってみたが、外れない。

「……いや、まあ……なんとなく理由はわかるんだけど」

二人はエリスに抱かれているマリカを見た。
視線が自分に向いたのが嬉しいのか、はしゃぐマリカ。

「どうしましょうか？」

「指輪の意味もまだ分かんないから、なんとも言えないんだよな」

マルスもエリスも詳しい知識を持ち合わせていないので、何か言うこともできない。

と、ここで家政婦が客人の存在を知らせた。

マルスが尋ねると、アリーの名前が出てきた。

何でも王城に来て欲しい、とのことらしい。

元々、登城するマルスはもちろんのこと、優斗、フィオナ、エリスにマリカもだそうだ。

優斗がここにいたのは予想の範疇で、寮まで行く手間が省けたとは馬車の中でエリスが話していた。

「昨日、お二人と龍神の子供について急いで調べたところ、いくつか分かったことがありましたので、そのことについて父様からお話がありますわ。そこまで堅苦しい話にはならないと思いますので、そこは安心なさって」

とアリーは言うものの、トラスティ家に優斗が全員で登城して王様から話を伺うなんて相当なことだ。

堅苦しくはないかもしれないが、国にはそこそこ重要なことなんだろう。

◇　◇

謁見の間に通される。
優斗にとっては2回目だ。
いつものように王様がいて、傍らには王妃。
前回と違うのはアリーが王様側ではなく自分達を連れてきた、ということだろう。

「父様。公爵家トラスティ及び、ユウト・ミヤガワ様をお連れいたしました」

王様と王妃、そしてこの場にいる近衛騎士の前では優斗は学生でも子爵家でもなく、異世界からの客人として立場で招かれているらしい。

「アリシア、ご苦労。わざわざお前が行くことでもなかったろうに」

「いいえ、父様。わたくしは現場にいましたし、ユウトさんにフィオナさんはわたくしの大切な友人。そんな彼らを呼ぶのですからわたくしが行くというのが当然ですわ」

キッパリと友人発言したアリーに王様を目をぱちくりさせたが、「そうかそうか」と朗らかに笑った。
が、すぐに表情を切り替える。

「今回呼び立てたのは他でもない、龍神の赤子のことだ」

その場にいる全員の視線がマリカに集まる。
マリカを抱きかかえているフィオナを緊張し、マリカは不思議そう

にした。

「さっそくだが龍神の赤子を見せてもらってもいいかね？」

王様がそう言うと、フィオナは頷く。
ゆっくりと王様へと近寄っていってマリカを見せる。

「もう名前は決まったのか？」

「はい。マリカ、と名付けました」

「そうか。いい名前だ」

マジマジと王様がマリカを覗き込む。
が、マリカはそんな王様の長い髭が気になったのか、

「だっ！」

掛け声一つ、右手を伸ばして王様の髭を掴む。
後ろではマルスとエリス、優斗の血の気が引いた。

「ま、まーちゃん！」

フィオナがやめさせようとするが、王様が制した。

「よい。赤子はこうでなくてはな」

しばらく髭で遊ばせる。
そしてマリカが満足して髭から手を離すと、王様は笑って話を続けた。

「さて、ユウトにフィオナよ。二人とも指輪が左手の薬指についてるのではないか？」

「は、はい。朝起きたら指輪が嵌まっていました」

「それは龍神の指輪というもので、人間が龍神を育てることになったときには全員が受け取っているものだ」

「外せないのですが」

「龍神が龍神の母の元へ戻るまでは外せないらしい」

ということは、下手したら数年はこれを付けていることになる。

「なに、精霊すらも扱えるというご利益のある聖なる指輪だ。無理に外すこともないだろう」

それならば別にいいのだが。

優斗は安心する。

「そして、ここからは龍神を育てた何人かの人間が記した本から分かったことなのだが……」

王様は優斗とフィオナの二人を見た。

「分かっている限り、君たちが一番若い親ということになる。今までは若くても２０代後半なのだが」

なぜか今回はこの二人になった。

「選ばれるのに何か共通点とかがあるのでしょうか？」

「卵が孵化する瞬間にいる必要があるのは分かるのだが、それ以外はわかっていない。ただ、少なくとも人間が龍神を育てる場合、なぜか卵を見つける場にいたのが婚約者同士や夫婦だということ。卵のある現場に複数名いたとしてもそれは変わらないらしい」

「そうですか」

そこも違う。

自分達はまだ婚約者どころか恋人ですらない。

「あと重要なのは一緒に住まなければならない、という点だ」

「どういうことですか？」

本当は今日の朝、しようとしていた話題がここに出てきた。

優斗は尋ねる。

「どうやら龍神は自分が住んでいる場所に親も一緒に住んでいないと癇癪を起こすらしい。幸い、歴代で育てていたものは物分りがよくて別々に住んでいても、すぐに同じ家で住むことにしたらしいが、別々に住んだらどうなってしまうのかわからない」

優斗、フィオナ、マルス、エリスは４人で納得する。

確かに昨日は優斗が帰ろうとしたらぐずりだした。

帰っていたら癇癪を起こしていたかもしれない。

知らずして回避したことに安堵すると同時に、心配ごとも増えた。

「……それは毎日帰らないといけないものでしょうか？」

「いや、あくまで“最終的に帰る場所”がそこであればいい、らしい。だから何日も家を空けたところで心配はないし、そこらへんの物分りは良いのだろう」

王様の返答に優斗もフィオナもほっ、とする。

「もちろん、ユウトもフィオナも学生が本分だということは我も分かっている。そしてまだ遊びたい盛りということもな。ということでマルスとエリスにも来て貰ったのだ」

王様は続いてマルスとエリスに視線を向ける。

二人は黙って臣下の礼を取って傅いた。

「マルス。龍神が赤子をこの地に置いたということは、この地が龍神にとっての聖地として認められたということだ。その重要性は承知しているだろう？」

「はっ！」

「そして龍神の赤子、マリカはお前達の孫になる。特にエリスはユウトやフィオナよりもマリカと関わる時間も多くなるだろう」

だからこそ、

「しっかりとフォローしてやってくれ。それは祖父と祖母にしかできないことだ」

王様の言葉を受けてマルスとエリスは顔を上げる。

「陛下の優しき言葉、しかと承りました」

「龍神の赤子、マリカはトラスティ家が責任を持って育て上げます」

その後、数十点もの確認事項を決めて5人は帰りの帰途へ向かうことになった。

マルスはそのまま仕事をしようと思っていたが、王様の配慮によって帰宅を許された。

「というわけで、今日明日中にでもユウトさんを引越しさせないといけないわね」

帰り道の馬車でエリスが確認を取るように告げた。

「本当は今日の朝にでも引越しについて相談しようと思っていたのだが、マリカが癇癪を起こしてしまうとなったら話は別だな」

「そうですね」

フィオナが頷く。

抱いているマリカは今、馬車に揺られてぐっすりと寝ていた。

「あっ、ちょっと待ってください。僕に関しては引越しを急がなくても大丈夫ですよ。もともと荷物は少ないですし、衣類も最低限しか持っていませんので。夏休み中にでもゆっくり持ち運びをしようと思います。一応、8月いっぱいまで部屋は使っていいことになったので」

「そうなの？」

「ええ。むしろ僕のことよりもマリカを育てる道具を揃えるのが先決でしょう」

自分は必要な都度、寮から取ってくればいいがマリカはそうもいかない。

「それもそうね。服とかたくさん着飾りたいもの」

「ベビーカーとかも必要でしょうか？」

「マリカはやんちゃみたいだから、あったほうが便利よ」

あれこれとマリカを育てるのに欲しい物が決まっていく。

女性主導であれこれ話しているうちに、トラスティ邸宅へと辿り着いた。

「それじゃ、僕は寮のほうに一旦戻ります。着替えと引越しをあいつらに伝えに」

「わかったわ。あまり遅くならないようにね」

「ええ。わかってます」

◇　◇

「――というわけで引っ越すことになった」

優斗は寮にいる修、卓也、和泉を自室に呼び出すと昨日から今日に関しての詳細を話した。

「またずいぶんと急な話ではあるな」

昨日から慌ただしいと思ったら、自分が必死に勉強してる最中、こんなにも面白いことがあったとは。

真面目に勉強していなかったことを少し後悔する。

「和泉は昨日いなかったから、余計にそうだろうね」

こんなに早い展開でいろいろなことが決まるとは優斗も驚く一方だ。

「つーか和泉は追試、大丈夫なのか？」

「そこそこ心配なんだけど」

修と卓也がツッコむ。

「今は休憩中だ。クリスがなんか呼び出された。おそらくは優斗たちのことだとは思うが」

「まっ、そうだろうな。そこそこ重要なことらしいし」

「みたいだね」

話を聞きながら着替えをバッグに詰め込む優斗。

「これからもこっちに遊びに来れたりはできんの？」

「ちょくちょくはね。ただ、仮にも赤ん坊を育てるわけだから、頻繁に泊まったりはできないよ」

「そりゃそうか」

「さすがにね」

優斗はバッグをパン、と叩く。

今日の準備は完了だ。

「それじゃ、今日はまだやることがあるから行くね」

「はいよ」

修たちは気軽に返事をする。

最後に優斗は４ヶ月ほど過ごした自室を見てから……３人と目が合った。

「落ち着いたら遊びに行ってやんよ」

「楽しいことがあったら、いつものように呼び出しするから」

「頑張れよ」

修、卓也、和泉と三者三様で送り出してくれた。

優斗は笑って、頷いた。

「行ってくるよ」

◇　◇

荷物を持ってトラスティ家の門を通る。

バルトに一言、挨拶をしてから玄関へと辿り着く。

ノックをしてからドアを開けた。

「失礼します」

中に入ると、途端に小さいものが駆け寄ってきたのが見えた

「ぱーぱっ！」

すごい勢いで来たので優斗はバッグを置くと勢いそのままに飛びつ

くマリカを抱きかかえる。
後から続いてフィオナとエリスがやってきた。

「お帰りなさい、優斗さん」

「お帰り。マリカはちゃんとパパにお帰り、って言った？」

「あいっ！」

優斗に抱かれているマリカが大きく返事をした。

「……」

一方で優斗は少し呆けていた。

――お帰り、か。

少しこそばゆかった。
家に帰ったことで得られる“お帰り”が。
……嬉しかった。

「優斗さん？」

返事も何もないことにフィオナが不思議がる。
優斗は取り繕いながら、それでも久方ぶりに使う言葉を大切にしながら口にした。

「ただいま戻りました」

海と友達と生徒会長

カタン、カタンと。
樹で作られた車輪が回る。
大きい作りの馬車は今、リライト王国沿岸にある海へと向かっていた。
御者台には優斗とクリスが乗っている。
他は全て馬車の中だ。

「大丈夫ですかね？」

中の様子が気になっているクリス。

「まあ、護衛として来てるみたいだから気を張るのはしょうがないとは思うけど……」

「それでも、もっとリラックスしてほしいですね」

「そうだね」

今日は1泊2日で行くことになった旅行の初日。
優斗とクリスは朝、集合したときのことを思い出していた。

「このたび、アリシア様及び公爵様、龍神様の警護担当として参り

ましたレイナ＝ヴァイ＝アクライトと申します」

片膝をつき、頭を垂れる。

レイナが地面を向けている顔を上げると、そこには唖然とした表情の貴族たちと変なものを見るような目の異世界組がいた。

「と、とりあえず立っていただけますか？」

代表してアリーが伝えた。

「はっ！」

きびきびとした動きでレイナが立ち上がる。

「あと、その口調と動きをやめていただけると助かりますわ」

「し、しかし私は護衛として――ッ！」

レイナが反論する。

「まず、わたくし達はなぜ貴女が護衛として来られたか知らされていないのです。それから説明していただけますか？」

「畏まりました」

レイナから話を聞いてみる。

どうやら貴族の中でも上流が集まっており、さらには龍神の赤子までいるこの面子。

特に問題はないと思ってはいるが、念のためということで近衛騎士団長の娘で同じ学院に通っている実力1位のレイナに話が回ってき

た。
というのが彼女から伝えられたことだ。

「皆様にはお伝えされてると思いましたが、驚かせてしまい申し訳ございません」

そして、今へと至る。
置いていくのもどうかと思うので、レイナも馬車の中にいる。
最初は御者も自分がやると言い出したのだが、それは優斗とクリスが丁重に断った。

「護衛で来られたということは、やはりある程度の話は聞かれているのですか？」

「はい。もともと公爵家と親しいとされているミヤガワ様やウチダ様、ササキ様にトヨダ……様のことも知っていましたが、異世界から来た方々というのは先日に教えていただきました」

アリーの問いにレイナが答える。
しかし彼女の口調にアリーがふぅ、と小さくため息を吐いた。

「先ほども言いましたが、普段のレイナ様はそのような口調ではないでしょう？　わたくし達は友達と旅行に来ているのです。レイナ様も一緒にいらっしゃるなら護衛という形ではなく友達として、そして学院の先輩としていていただけるとこちらも気が楽になるので

すが」

「し、しかし――」

「面倒だな、お前は」

今度は和泉が馬鹿にするように言った。

「なんだと!?」

「そんな堅苦しい護衛なら別にお前じゃなくていいんだよ。お前よりも腕の立つ護衛なんて他にいるしお前より強い奴だって勇者の修や優斗がいるんだから。けれどお前が護衛として行け、と言われたんだろ。そこを考えろ」

ハッ、とした表情をレイナが浮かべた。

「さっき優斗が言っていたけどな、ここにいる面子は将来の国政に関しても重要な役割を果たすのがたくさんいる。公爵も王族も勇者も異世界人もいる。お前は将来的に近衛騎士を目指してるんだろう？」

レイナは素直に頷く。

「ならば将来的に守る立場の中心になり得るお前に少しでも俺らの雰囲気に慣れてほしい、というのが今回の件の一端じゃないか、とな」

「……そ、そうなのか」

深く、深く頷く。

「わたし達は公爵だから友達とかいなかったです。でも、だから友達とだけで行ける旅行がとっても楽しみで。レイナ様も――いや、レイナさんも協力してくれると嬉しいです」

ココが憧れの存在であるレイナにそう伝えた。

「つまりオレらが求めてるのは護衛じゃなくて生徒会長ってこと」

「ついでに護衛もしてくれると助かる、って話だ」

なあ、と修が言うと護衛される最筆頭アリーとマリカが返事した。

「あいっ！」

「そうですね」

「まとまりそうですね」

「そうだね」

「ユウトさんは……いえ、ユウトはいつ護衛が将来的なものに繋が

っていると気付いたのですか？」

クリスが優斗を呼び捨てにした。
それに少し驚きながらも優斗は答える。

「まさか、何も気付いてないよ。そうであったらいいって思っただけ。まだ何の情報もないんだから」

「では、先ほどイズミが仰っていたのは？」

「僕の口からのでまかせ。それっぽい道筋を立てれば大抵は納得するから」

「確かに。中のいる方々は皆、納得されましたね」

「僕らのときは修のバカが突拍子もない方法で垣根を取っ払ったけど、レイナさんは堅物そうだから。納得するような理由をもらわないとさすがにね」

「ユウトはよく考えていますね」

「和泉とか修とか頭を使わないでいるのと一緒にいるとね、自然と考えなきゃいけないことが多くなるんだよ。それはクリスも実感してるでしょ？」

優斗がそう言うと、クリスは確かにと頷いた。

「そうですね」

クリスの頷きに優斗は笑みを浮かべて、気楽に手綱を握る。

初めて馬車の御者台になんて乗った。

「それにしてもさ。馬車って二種類あるんだね。初めて知って吃驚したよ」

「遊覧型と高速型の二種類ありますから」

「高速型って魔法具との合わせ技ですごく速いんだよね？」

「そうですね。各国を繋げる大通り限定ではありますが、それを使いさえすれば大抵の国は半日ほどで着きますね」

「……どれだけスピード出るの？」

「さあ？　ただ馬車の窓から見える風景は霞みます」

「……乗りたくない」

おおよそ、怖そうだ。

だが、クリスは小さく笑って、

「無理な相談ですね。いずれユウトも乗ることになりますよ」

◇　◇

今回、泊まることになっているのはクリスの家が持っている避暑地の一つだ。
荷物をそこにおいて泳ぐか別のことをするか話したが、二日もあることだから初日は釣りをしてみよう、ということになった。
近くには川があるということなので、そこへ向かう。

「ほ、本当にこんなものを針に刺さなければならないのですか？」

「そりゃ餌だし」

アリーを始め、クリス以外の貴族の方々は餌をつけるのに四苦八苦している。
レイナも爵位を持っており、子爵という立場なのだが彼女は平然と餌をつけていた。
なんとか全員がつけ終わると、それぞれ少しバラけて釣り糸を垂らす。
優斗とフィオナだけはマリカを交代で見ることにして、今は優斗がマリカの面倒を見ている。

「おっ！」

釣りを始めて数分。

「来たぁ！」

まず修の竿に当たりが来た。
体長３０センチほどの鮎みたいな魚がついている。

「よっしゃ、まずは一匹ゲット！」

手際よく竿を持ち上げて鮎を引き寄せる。
そして自らの手に収めると素早く針を外してバケツに放り込んだ。

「うしっ、みんなどんどん釣るぞ！」

修の掛け声一つ、全員がより一層竿に集中し始めた。
この場所は当たりだったのか、他のメンバーにも当たりがすぐに来た。

「あわわっ！」

ココなどはおっかなびっくり竿を引いて魚を手繰り寄せたり、

「これは大きいですね」

クリスは大きさに満足しながらつりをしていた。
その中でもとりわけ大きい魚を釣ったのがアリー。

「あの、あの、シュウ様！」

予想外の強い引きに慌てるアリーに、修が素早く駆け寄った。
アリーの身体を包み込むように後ろから手を回して一緒に竿を握る。

「一気に引くぞ」

「は、はいっ！」

暴れまわる魚を目の前にして、二人して一緒に力を込める。
すると水面から出てきたのは８０センチほどの魚。

二人で同時にキャッチする。
予想外に重くて尻餅をつく。
ピチッ、と腕の中で暴れる。
呆けた表情で互いに顔を見合わせる。
笑いがこみ上げてきた。

「ふふっ」

「ははは っ！」

パタパタと周りの連中が集まって驚いたり褒め称える。

「アリー」

「はい？」

修は右手をあげる。
アリーは首をかしげながらも、同じように右手をあげた。
修は彼女が手を上げたのを見るとパン、と音を鳴らせてハイタッチした。

◇　　◇

「うめーな」

「おいしいですわね」

「イズミ、邪魔だ。早くその野菜を食べてくれ」

「生徒会長が食えばいいだろ」

「おい、卓也。肉が足らねーぞ」

「お前らも少しは手伝え！」

バーベキューには大抵、焼くばっかりの係が存在する。
そしてそういう場合は基本的に卓也が就任される。
ただ、それだけでは可哀想なので優斗とクリスとレイナ、ココが手伝っている。

「まーちゃん、ゆっくりと噛んで食べてくださいね」

「あい」

ゆっくりとフィオナがマリカの口に運ぶ。

「卓也、魚を焼いてくれ！」

「自分で焼けっ！」

慌ただしく料理が進む。
バーベキューをやったことがあるのは異世界組だけ。
というよりもレイナとクリス、最近料理を始めたフィオナを除く貴族は満足に自分で料理を作ったこともないため、今回のバーベキュ

ーは焼いている肉を取り分けたりひっくり返したりするだけにしても、自分で作る料理としても簡単で新鮮であった。

◇　◇

そして夜。
男子組と女子組に別れて別々の広間で寝ることになった。
となると、だ。
始まるのは修学旅行のような夜の会話。

「それで優斗はどうなんだよ？」

「何が？」

「フィオナとどこまで進んでるのかってことだよ」

先陣を切って卓也が尋ねた。

「期待に応えられずに残念だけど、まだ何もしてないよ」

「キスは？」

「やってない」

「じゃあ、手もですか？」

「繋いでないよ」

「お前、俺が言うのもなんだが……大丈夫か？」

和泉に心配される。

「僕らはそんなにカップルに思え……ごめん、今の疑問なし」

抱きついておいて何を、と心の中でツッコミを入れたのは全員。

優斗自身も客観的に見たら『付き合ってるだろ』ぐらいは思っているはずだ。

「……まあ、お前らなら時間の問題だと思うけど」

卓也が言うと周りが納得した。

次いで彼らの視線が向いたのは、

「クリスは？」

「自分ですか？」

クリスは少し驚いた表情を浮かべると微笑を浮かべ、

「自分は婚約者がいますから、何とも言えませんね」

「「「「婚約者!?」」」」

爆弾発言が飛んできた。

「はい。一応ではありますが婚約者がいますよ」

唖然とした顔にクリスの笑みが深くなる。

「自分が学院にいますので結婚はまだですが、卒業したら結婚します」

「うわぁ、貴族っぽいな」

「貴族ですから」

「会ったことは？」

「1度だけですね。この夏にまた会うことになっているんです」

「よくそれで結婚できるな」

あらためて違う世界の違う常識なのだと認識させられる。

向こうじゃ王族や皇族ですらも一般人と結婚できる時代だというのに。

「これでも公爵家の長男ですから。他の貴族でも自分の意に沿わない結婚は多々あります。これでも自分はある程度自由に選ばせていただいているほうなのですから、幸せなほうかと」

「そういうものか」

「だったらアリーはどうなんだ？」

ふと気になった修が問いかける。

「彼女は王族ですからね。ある程度の地位は必要になります。最低でも公爵の血筋か城内でも権力のある方との結婚になるかと。少なくとも彼女の夫になることは国王になるということなのですから」

「大変そうだな」

「時に意に沿わない結婚を強いられることもあるかもしれません」

国の利益のため。

という言葉で結婚せざるを得ない場合もあるかもしれない。

「そんな時は修の出番かな」

「俺？」

優斗のフリに疑問を浮かべると、和泉が解説した。

「異世界出身で勇者の刻印持ってて伯爵の爵位を持ってる。アリーがどっかの誰かの貴族が嫌だって言ったらお前が婚約者でも結婚でもしてやれ」

和泉がそう言うと、修はまんざらでもなさそうな表情で、

「しゃーないな」

一つ、頷いた。

「んじゃ、俺も気になったんだけどよ。和泉はなんでレイナと相性

が悪いんだ？」

彼の好みを考えると意外だ。

「彼女、お前のド真ん中だろ？」

優斗と卓也が頷く。

確かにそれは疑問だった。

「いや、なんかゲームじゃ好きだったんだが、現実にいると……少しうざい。そういうのってあるだろ？」

ゲームでは妹好きだが、リアル妹はうざいとか。

そういった類。

「ああいう性格、ゲームだから許せるんだ。リアルは勘弁被りたいもんだ」

◇　◇

「マリカちゃんはちゃんと寝てますよね？」

「ええ。もうぐっすりです」

女子も女子で並べた布団の中央に集まる。

「フィオナさんも大変ですね。急にお母さんになるなんて」

暗闇の中、ココの言葉にフィオナは首を振る。

「でも可愛いですよ。まーちゃんが無邪気に笑ってたりするのを見てると、疲れが飛んでいきますから。これが母親になる人の気持ちなんだなって、少し分かった気がします」

「それに何かあってもフォローしてくれる、献身的でやさしい旦那様までいますものね」

さりげなく加えたアリーの言葉にフィオナとレイナが驚きの声を上げる。

「ア、アリーさん!?」

「旦那様がいるのか!?」

「この間、決め事のうちにあったではないですか、対外的にユウトさんとフィオナさんを婚約者だったり夫婦にすると」

今回選ばれた二人は今まで龍神の子供を育てた人たちに比べると違いがある。

その違いがどう働くかわからない以上、できるかぎりは今まで育ててきた人たちと対外的だけにしても似せていこうとするのは必然的な流れだろう。

「そ、それはそうですけど、あくまで非常事態になったときですか

ら」

「ではそのような事態になったら臨機応変に対応しろ、ということか？」

「ええ。時と場合によって夫婦になったり婚約者になったりするそうですわ。マリカちゃんがいる以上、大抵はユウトさんの――ミヤガワ家の奥様というのがフィオナさんの設定になるのではないかと」

本当のことを言うと優斗が婿入りしたときの書類、フィオナが嫁入りした書類、婚約者として認める、ということを書面として王族の印を押された書類。

優斗とフィオナには言っていないが、そういった類の書類がすでに用意されている。

「マリカちゃんの存在を知っている方でも、ユウトさんとフィオナさんは婚約者同士という設定らしくて。わたし達はそれに合わせる必要性があるって教わりました」

「むしろ、その数々の設定を嬉々として望んでいたのはフィオナさんのご両親でしたわね」

二人とも優斗はお気に入りなので、娘の婚約者など以ての外――と思うどころか進んで二人をそうしようとしている節がある。

と、ここでフィオナがこれ以上いじられるのが恥ずかしくなったのか、話を変える。

「わ、私はともかくとしてアリーさんやココさんはどうなんですか？」

「なに？　お二方にもそういった話があるのか？」

次々と出てくる乙女話にレイナも内心が躍る。

「アリーさんはシュウさんとどうなんですか？」

「シュウ様とは別に……何事もなく過ごしておりますわ」

「でも優斗さんが言ってましたよ。アリーさんはシュウさんを狙ってるって。そこのところ、どうなんですか？」

フィオナにそう言われて、アリーはやっぱり、という表情を浮かべた。

優斗は無駄に相手の心の機微に聡い。

おそらくは最初に出会った瞬間からバレていたのではないかと思う。

「なんというか、掴み所がないのです」

「掴み所がない？」

レイナが聞き返す。

「例えば恋愛物語があるとして、それに近い状況になるとします。そういった場面になって一押ししたところで、何か反応を期待しても……一向に反応がないのです」

「……ああ、なんとなくわかるかも」

ココが神妙に頷く。

「脈がないかと思えば先ほどの釣りの時のように後ろから包み込むように竿を一緒に握ってくれたりと、ほとほと難しいのですわ」

普通の恋愛として判断ができない。
暖簾に腕押し、と言ったところか。

「なんかもう、一方的に押したとしても無駄なような気がしますわね」

「確かにそうかもしれません」

全員で深く頷く。

「ココさんは誰かにありますか？　たとえばタクヤさんとかは？」

問われてココは頭に卓也を思い浮かべてみる。

「ん～……ないです」

「ないのですか？」

フィオナが不思議がった。
優斗ほどではないにしろ、卓也だって良い方だとは思っているからだ。

「こう、なんていうか……良い方なのは分かるんですがそれだけ、というか。かっこよさが見えないので……」

惚れる要素が見当たらない。

「例えばシュウさんみたいに顔がいい、ユウトさんみたいに優しい、という面を見つけられてないんです。だから恋愛対象なんて無理ですよ」

なんとなく可哀想な気もするが、これがココの今の卓也に対する評価なのだろう。

続いてはレイナに話を振る。

「レイナさんとイズミさんは最初から仲がよろしかったですわね」

彼女とは幾度か面識はあるが、彼女と和泉がまともに会話をしているというのが自分としては驚きだ。

「いや、あれのどこが仲が良いと」

「イズミさんを初対面で変人だと思わないのは稀だって優斗さんが仰ってましたよ」

「わたくし達のときは……壮絶でしたから」

今でもあれは忘れられない。

顔合わせをしたら、唐突に頭を叩かれ、起き上がったと思ったらクリスに女装させようとのたまった。

そこからさらに椅子ごと蹴られて壁に飛んでいったのだ。

「あの出会いと比べたらレイナさんとイズミさんの出会いなんて普通すぎますわ」

巨大タコは食べれませんでした

旅行二日目、最終日。
快晴。
ということになれば。

「海だな」

「そうだね」

「最終日、か」

「うん」

優斗と卓也はため息を吐く。

「何があると思う？」

「溺れてるのは前にやったから、僕はオーソドックスに海から巨大生物登場に一票」

「ナンパに1票」

「やっぱり二つともあるに1票」

二人は目を合わせるとげんなりした。

「気をつけよう」

「だね」

◇　◇

「みんなも貴族の家柄となっているのですから、息をするように賞賛ができなければいけませんよ」

水着に着替えている女性陣を待っている間、そんな心得をクリスが説いてきた。

「めんどい」

「かったるい」

「恥ずい」

「照れる」

修、和泉、卓也、優斗の順に勘弁の願いを申し出た。

「そんな子供みたいなことを言わないでください」

「だってな～」

あ～だこ～だと騒いでいるうちに女性陣が到着する。

「お待たせいたしました」

アリー、ココ、レイナがやって来る。

「フィオナとマリカは？」

優斗が二人がいないことを気にした。

「マリカちゃんの着替えもありましたから、先に行っててくださいと」

瞬間、嫌な予感がした。

「……迎えに行ってくる」

「どうしたのですか？　待っていてもすぐに来ますよ」

「そうしたいんだけど、嫌な予感は大体当たるから」

フィオナは美人だから余計にそう思う。

「ちょっと行ってくるよ」

「いってら」

「頑張れ旦那」

「行ってこい夫」

お決まりのように修、卓也、和泉に茶化されながらも優斗は歩き出した。

「さて、フィオナとマリカは……」

やって来そうな方向を見れば、小さくではあるが二人の姿が見える。そしてその側には案の定というかなんというか……変なのが纏わりついていた。

◇　◇

「いいじゃん、俺らと一緒に遊ぼうよ」

「い、いえ、ですから友達とも一緒に来てますので」

「そんなのといるより俺らといるようが楽しいよ～」

「ほら、妹さんも一緒に遊んであげるから」

「こ、この子は妹じゃなくて……」

フィオナはほとほと、困ったことになったと思った。

どうやって話せばこの二人はいなくなってくれるのだろうか。

どうしていいか分からなくて悩んでいるときだった。

「ぱ～ぱっ！」

手を繋いでいたマリカが手を離して走り出す。

「えっ？」

と前を見てみれば、そこにいたのは……旦那様。

「やっぱりね」

ひらひら、と手を振って優斗がやって来た。
そして駆け寄ってくるマリカを抱き上げる。

「優斗さん！」

これ幸いにフィオナも優斗に駆け寄った。
当然、ナンパ男二人にしてみれば気分はよくない。

「あんた、この子の友達？」

「だったら俺たち、この子と遊びたいんだ」

なんてナンパ男が言ってくるので優斗は一刀両断する。

「夫ですよ」

「……は？」

「……おっ……と？」

驚いた表情を二人が浮かべる。

「1歳になる娘もいる貴族の妻をナンパするなんて良い度胸ですね」

優斗に言われてナンパ男たちは子供と二人を見比べる。

よく似ていた。

「す、すんません！」

「あまりに美人だったんでつい！」

ヘコヘコと頭を下げ始める。

「僕の妻はこういうことに慣れていないんですからうまく断れないんですよ。確かに若いので娘を妹と勘違いするのも分かりますが、今後は気をつけてください。あと僕たちの友人たちも貴族ですので、うっかり声をかけないように」

「しょ、承知しました！」

回れ右をしてナンパ男二人が走って去っていく。

フィオナが安堵の息を吐いた。

「……助かりました」

「ナンパなんて初めてでどうしていいか分かりませんでした」

「フィオナは美人なんだから気をつけないと駄目だよ」

少しばかり顔を赤らめながら優斗が言う。

「えっ！？」

息をするように相手を褒める。

ということをクリスは言っていたが、やってみてわかった。

――ぜったい無理。

他人モードなら何とでも言えるが、今は絶対に無理だった。

どうしたって顔が赤くなった。

「だ、だからフィオナは美人だし水着も似合ってるから、その……よく声を掛けられると思うし、そういうときははっきりと断るか指輪でも見せれば相手も引くと思う……し」

白のビキニにパレオを着けたフィオナは、気をつけなければその姿に吸い込まれそうになる。

それほど魅力的だった。

「あの……えっと……ありがとうございます」

基本的に他の貴族と違って優斗は滅多に容姿について言及しない。

だからこそ、彼の言葉が真実だと思えて嬉しい。

彼から『美人』だと思われていることが本当に良かったと思える。

この水着も褒めてもらえてよかった。

頑張った甲斐があった。

――それに『僕の妻』って言ってもらえた。

昨日はアリー達にからかわれたりしたが、彼から直接言われると…
…心から喜んでしまっている自分がいる。

◇　　◇

戻ってくるとそこには卓也とココしかいなかった。

「他の人たちは？」

「アリーは泳げないから修が教えてる。レイナは和泉を引きずって遠泳」

「振り回されてるな、あの二人も」

あの和泉を振り回すとはやるな、と感心する。

「3人も行ってきたらいいよ」

「優斗は？」

「僕は子育て」

いつも以上にマリカの面倒を見る。

今日はそうする一日にしようと決めていた。

「フィオナは海とかあまり来たことないだろうし、遊んでくるといいよ。マリカの面倒は僕が見てるから」

「……でも……」

優斗とフィオナを差し置いて、というのは気が引ける。

「友達と初めて一緒に来たんだから、遊ぶのも大事なことだよ」

そんなフィオナの心情を察した優斗が嗜める。

「子育てだけじゃ疲れるからさ」

専業主婦じゃないのだから。

優斗だって相応の負担は持つつもりだ。

「そ、それなら……」

決意したような表情をフィオナがする。

優斗は笑って送り出した。

「うん。遊んでおいで」

「マリカを遊ばせる場合は２０分ぐらいで休憩は長めに入れる、だったっけ」

海の家でエリスに教えてもらったことを再確認する。

「マリカ、ちょっと海に行ってみようか」

「あい」

理解しているのかどうかは分からないが、返事をしたマリカと一緒に波打ち際まで行ってみる。

「ほ～ら、ざぶーんざぶーんってすごいね～」

「あうっ！」

マリカは引いていく波が面白いのか、つたない足取りで波を追いかける。

優斗は強い波が来れば抱き上げたり、絶対に手は離さないように気をつけながら押しては返す波と遊ばせた。

――うん。

優斗は一つ、頷く。

――ちゃんとこの子のことを喜ばせてあげたいと思ってる。

自分はあの二人とは違う。
子供を道具なんかにはしない。
龍神だとしても関係ない。

――大切な娘として……。

マリカを育てる。
あんな扱いを受けてきたからこそ。
理想としての両親の形がある。

――それを目指すんだ。

だからその一歩として。
まずはマリカと。
もっと仲良くなろうと思ったんだ。

◇　◇

「はい、顔つけて」

修の合図で足をばたつかせながらアリーは顔を海につける。
アリーの手は修が握っている。

「顔上げる。バタ足も終了」

バシャ、と音を立ててアリーが顔を上げた。
そのまま立ち上がる。

「そんじゃ、ちょいと一人で泳いでみるか」

「はいっ！」

手を離すと修は5，6メートルほど距離を取った。

「バタ足だけで来てみな」

修の合図と共にアリーはバタ足でまっすぐ修を目指す。
息継ぎなど習っていないので、足だけをばたつかせて修に迫っていく。
指先が修にヒットした。

「ど、どうですか？」

「ＯＫだ。次は息継ぎとクロールの練習でもしてみるか」

「はいっ！」

二人きりだというのに相変わらずの修だが、それはそれでいいか…
…と思ってしまうのは、アリーの惚れた弱みなのかどうなのか。

◇　◇

「なんだ、だらしがないなイズミ」

「……殺す気か、お前は」

大きく肩で息をしながら和泉はレイナを睨みつける。

なんだかんだで競争しろと言われて無理やりやらされたが、遠泳とは聞いていない。

「ユウトやシュウと同じ世界から来たのだろう？　ならお前だってすごいと思うじゃないか」

「あの二人と一緒にするな。天然チートと努力型化け物だぞ、あの二人は。向こうの世界でもスポーツテストで普通に全国屈指の実力の持ち主だ」

あんなのと同列に思われては適わない。

「とはいっても、俺は平均より運動能力が劣っているし、卓也は平凡だが」

つまり普通という単語の基準は卓也だ。

「じゃあイズミとタクヤはAランクの魔物は倒せないのか？」

「無理だ。勝てるわけがない」

「異世界から来てるのにか？」

「だから基準をあいつらで考えるな。いくら魔法適正が高いからといって神話魔法を平然とぶっ放すのはあの二人だけだ」

「そ、それもそうだな」

今まで異世界から来て“勇者の刻印”を持たなかった人物は、基本的に卓也か和泉ぐらいで落ち着く。
上級魔法は使える、ぐらいで。
優斗が例外中の例外だ。

「ならばお前は上級魔法を使えるのか？」

「使えるわけがない」

なぜか自慢げに和泉が言うので、レイナはため息をついた。

「自慢することじゃないだろうに」

◇　◇

「そろそろ戻る？」

ビーチボールでバレーをしていると、卓也が提案した。

「ほら、レイナは死に掛けの和泉を連れて戻ってきたしアリーと修も戻ってきてる。ここらで一旦休憩したほうがいいと思う」

「そうですね」

フィオナとココが頷いた。

優斗とマリカは海の家でカキ氷を食べながら皆の様子を見ている。

3人とも優斗の元へと集まった。

「何を食べてるんですか？」

「いちご味のカキ氷。フィオナも食べてみる？」

「はい」

フィオナが頷くのを見るとマリカが優斗の手にあるスプーンを取ろうとした。

「マリカ？」

「あ、あ、あう！」

何かアクションを示している。

「食べたいの？」

首を横に振った。

「ん～、と。……ママに食べさせてあげたいの？」

「あいっ！」

勢いよく頷いた。

優斗がマリカにしていることを真似したいらしい。

「でもマリカ一人じゃ無理だから、パパと一緒にやろうね」

「あうっ！」

スプーンをマリカに握らせて、その上から包み込むように優斗が手を握る。

そしてカキ氷をすくう。

「はい、あ～ん」

マリカに教えるため、優斗が普段じゃ絶対に言えないことを言う。

「あ～」

マリカが真似した。

くすっ、と笑って優斗が前を見る。

「……」

顔を真っ赤にしたフィオナがそこにいた。

なんで、と思うがすぐに気付く。

優斗も顔が赤くなってきた。

「ま～ま？」

食べないフィオナがどうしたのかとマリカが小首を傾げる。

「あっ、まーちゃんごめんね」

顔を前に出してスプーンを捕らえる。
ぱくっ、と食べた。
冷たくて甘い。
顔の火照りも一緒に取れたらいいと思うが、そうもいかなかった。

「こいつらの可哀想なところは鈍感を貫けないところだろうな。別の視点から見ればこの行動は恥ずかしい、というのが鈍感な奴らと違って分かるから」

卓也が状況分析する。
だから余計に照れているのだろう。

「……うるさいよ」

これは確かに恥ずかしかった。
マリカと同じ要領でやることじゃない。
と、ここでアリー達とレイナ達が戻ってきた。
そしてさらに優斗とフィオナがからかわれたのは一興というものだろう。

◇　◇

海の家で割高の昼ごはんを食べ終わる。

「まだ食べれるけど、どうすっかな？」

「やめとけ。どうせこのあとも動くんだから」

運動なのか、それ以外なのかは別として。

「何かあるのですか？」

アリーが気になって卓也に尋ねた。

「あると言えばある」

「どういうことでしょうか？」

要領を得ない卓也の返しに、さらに突っ込んだことを訊く。

「まあ、そうだな。例えば――」

卓也が何かを言う瞬間だった。

海の遠方、遊泳禁止ラインよりも遠くに“何か”が現れた。

大きな波音を立てて登場するは、

「巨大タコ」

途端、海水浴場がざわめいた。
海の中にいるものは一斉に陸を目指し、腕に覚えがあるものは逆に海に近づいていく。
海の家にいる優斗たちはと言えば。

「でかいね」

遠距離だから分からないが、下手したら２０メートルを超えてるのではないだろうか。

「食えるか試してみようぜ」

「身が引き締まってなくてまずそう」

「ふ、二人とも！　どうしてそんなに落ち着いてるんだ!?」

レイナは優斗と修の振る舞いが信じられない。魔物が現れたというのに。

「慌てる必要……あるか？」

「ないよ」

「だよな」

何も脅威を感じない。

「レイナはどれくらい強いんだっけ？」

「学院で１番だよ」

「俺ら出張んなくていいんじゃね？」

ランク的にもBランクかCランク。
優斗や修がいなくてもいいはずだ。

「いや、さすがに私だけだと勝てるか分からないし、よしんば勝てるとしても骨が折れるから一緒にやってくれると助かるんだが……」

「あれなら俺らじゃなくていいだろ。和泉も卓也もいるし、他もなかなかの実力者ばっかりだぞ」

上級魔法を使える人材が多数いるメンバーを“なかなか”と言えるあたり、さすがは“勇者の刻印”を持っているだけはある。

「それに、ほら。周りにいる冒険者みたいなのも応戦に向かってるみたいだし」

特に役に立ちそうではないが。

「し、しかしだな」

「設定したラインを突破されたら手を出すから」

それでも、と思っているレイナに修が海上を指差す。

「あのブイがあるだろ。あそこに掛かったら俺と優斗も参加する」

けれど逆にあそこに届くまでは、

「それまでは手出ししない」

自分達が片付けてもいいが、それじゃ駄目だ。

「いつだって俺たちがいるとは限らないからな」

優斗はマリカを抱えなおす。

「そんで超えたらどうする？」

「試そうと思ってるのもあることだし、それでも使ってみようかと」

「なんだ？　重破斬？」

この前は神滅斬を使っていたので、今度も似たようなものでも使うのだろうか。

「ここに生命を寄せ付けなくさせる気か？　お前は」

「じゃあ竜破斬」

優斗が修を睨む。

「龍神と竜で違いはあるし、使うべきときがあったら使うけど……次にマリカの前で言ったらぶっ飛ばす」

「冗談だって」

なんとなく縁起が悪いような気がするのも確かだ。

「んで、どうすんだ？」

「大精霊を呼び出そうかと思ってるんだ」

「……大丈夫なのか、それ？」

「感覚的にはいけそうな気がするし、威力の設定もしやすいから基本属性のものならギリッギリで上級魔法の威力まで抑えられるはず」

神話魔法レベルまではいかないと思う。

「もともとこの世界にいるものらしいしね」

「ふ～ん」

「とりあえず、和泉がどうにかするでしょ」

先ほどタコが現れたときにシートまで戻って何か取っているのを見た。

「あいつ、何か造ったのか？」

「おそらくね。ただ趣味の範疇で作ってるみたいだし、どれぐらいの威力かは分からないよ」

「撃てっ！」

男の呼び声に応じて幾人かが炎の球を飛ばしていく。
しかし、いくつも当たれども下級魔法だからかタコにダメージを与えるほどの威力はない。
アリー達も遅ればせながら彼らと同じ位置まで辿り着く。

「レイナさん、どうするのですか？」

「この中で火の上級魔法を使えるのは？」

「わたくしとクリスさんです」

「そのほかは中級までは使えるな？」

全員が頷く。

「では一斉に攻撃だ」

各々が詠唱を始める。
特に集中を要したのはアリーとクリス。

「「求めるは火帝、豪炎の破壊」」

いくつもの火球が生まれ、その中でもとりわけ大きい火球を筆頭にして、

「放て！」

合図と共に一斉に飛んでいく。
すると、だ。
レイナ達の放った魔法が目に入った巨大タコは、足の一本を大きく持ち上げると海面に叩きつけた。
大きな水の壁が火球を飲み込んでいく。
しかし中級魔法以上のそれは水の壁を突破し、威力は弱まりながらも巨大タコに着弾。

「――ッ！」

少しよろめく。
効いた、と思う一方で威力を削られたのも確かだ。

――なら、風か？　土か？　水か？

一度目の攻撃をある程度防がれて焦りが生まれる。
地ならば攻撃が届かず不可能。
風だと威力が弱い。
水ならば、と思うがこちらも破壊力には欠ける。
優斗のように基本属性から派生させた派生属性魔法を使えるのはこ

こにいない。
どうする、とレイナは頭を回転させる。

「おい、生徒会長」

唐突な呼びかけにレイナが横を向く。

「今のをもう一度だ」

珍しく和泉が進言した。

「しかし……」

「水の壁なら俺が突破してやる」

断言した。
しかしレイナは判断しきれない。
チラリと修と優斗を見た。
優斗がこれぐらいなら、とアドバイスする。

「あれで防がなきゃいけないってことは、脅威に感じたってことだから。それでもダメージがあることだし和泉の提案も間違ってないよ」

和泉がそう言うのなら、突破できるのだろう。
どうやってかは分からないが出来るのはわかる。

「けれど決定権はレイナさんにある」

決めるのは彼女だ。

和泉を信じるのか、信じずに別の方法を試すのかはレイナしだい。

「……本当に突破できるんだな？」

確認するようにレイナが問いかけた。

和泉は軽い口調で答えた。

「できなかったらクリスが女装するって言ってるぞ」

「えっ！？　なんで自分が！？」

唐突に名前を呼ばれるわ、変なことを言っているわで慌てるクリス。

「うっせ。婚約者なんているリア充はそんなことして嫌われろ！」

いつものようなバカな光景に皆の表情が少し和らいだ。

……レイナも判断を決める。

「わかった。もう一度、やろう」

レイナが宣言すると、和泉はポケットから拳銃を取り出した。

タコが現れたときに念のために持ち出したものだ。

「拳銃か？」

修が珍しげに見る。

銃という存在を知らないこの世界の人たちは頭にはてなマークが浮かんでいる。

「いつでもいいぞ」

セーフティーを外し、右手を巨大タコにロックする。
レイナはよく分からないがとにかく、準備は大丈夫らしい。

「全員、さっきと同じだ」

レイナの合図でもう一度、同じ魔法を唱える。

「放て！」

火球がタコに飛び込んでいく。
和泉はまだ何もしない。
先ほどと同じようにタコが足を振り上げる。
その瞬間だった。
和泉が引き金を引いた。

――ドン――と。

連続して銃声が６発響く。
視認すらも出来ない銃弾は瞬く間に火球を追い抜く。
そして水柱があがった。

「開け」

ただ、その言葉を和泉が紡ぐ。
瞬間だった。
銃弾から魔方陣が浮かび上がり、岩石が６つ海上に現れた。
そして水の壁を質量を持った岩石が破砕していく。
その岩石で開いた空間を火球が抜けていった。

「いった……」

水の壁を抜ければそこにあるのは巨大タコの身体。
火球は全てが違わずに当たる。

「倒し……たのか？」

威力が軽減されてない魔法が当たったのだ。
さすがに倒れてもおかしくない。
しかし、最初に異変に気付いたのはフィオナだ。

「……膨らんでいませんか？」

全員がよくよく見てみる。
確かに身体が大きくなってきている。
……嫌な予感がした。

「爆発するんじゃ……」

ココが全員の思っていることを代弁する。

「どうするレイナ！？」

問いかける卓也。

「え、えっと……」

どうする。

と、数秒考える。

けれど今は迷う場面でも考え抜く場面でもない。

「まったく」

逆に優斗と修の判断は早かった。

レイナが迷ったと見るや、すぐに前へと躍り出る。

優斗は前に出ながら抱えているマリカをフィオナに預けた。

「この場面で迷ったら負けだぞ」

修が一言伝える。

時間がなさそうなのだから一つのベストを模索するより、幾つかのベターを瞬時に考えて実行したほうがいい。

「最悪、ミスったらフォロー頼むよ」

「しゃーないな」

二人はたったそれだけ言葉を交わして構える。

最初に優斗の左手にある指輪が反応を見せた。

――できる。

元ネタの魔法では追加で召喚されるのだが、この世界では魔法と精霊は分かれているものらしい。
ならば最初からこの詠唱で間違いはないはずだ。
感覚でわかる。
少し気になっているのは、自分の使う魔法はこの世界に比べて詠唱がかなり厨二病っぽいんじゃないかと常に思うぐらいだ。
とはいえ、イメージと繋がる詠唱がこれなのだから仕方がない。
あきらめて左手を前に突き出して紡ぐ。
指輪が少し輝いた。

『具現せよ精霊の結晶』

魔法とは少し違う、精霊の使役。
魔法というのが魔方陣によって魔力が属性付与させられた形というのなら、精霊というのは魔力を魔方陣に通すことによって精霊という元々そこにいる“モノタチ”に協力してもらうということ。

『舞い降りし疾風の神子よ』

薄く緑色をした女性が魔方陣より現れる。
とはいえ距離が離れており、かろうじて姿が確認できるか、といった具合だ。
他の人たちは魔法を使おうとしているため、優斗以外は気付けない。
指輪の輝きが増す。

『我らに仇なす意思を切り裂かん』

竜巻が突然海上に現れて巨大タコを切り刻む。
細切れになったが、それでも爆発する気配は衰えない。

「修」

「はいよ」

ぐん、と右手を振り上げる。
それだけで竜巻の中心に水柱が上がった。
細切れになったタコの破片が水に包まれる。
水の中で小規模な爆発がいくつも起こるが全て水が威力を吸収し、
さらに風が壁となっているので傍目には特に大げさなことになっていない。
全ての爆発が終えると優斗と修は精霊の使役と魔法を解除。
水柱はゆっくりと海に戻っていき、竜巻もすぐに視界に映らないぐらいに霧散した。

「終了っと」

修がパンパン、と手を叩いて終わりを告げる。
唖然としているのはレイナ。
他のメンバーも未だに多少の驚きは隠せない。
卓也と和泉を除いて。
そしてマリカだけはただ一人、目の前の光景を喜んでいた。

「……また聞いたことのない詠唱が出てきましたね。あれは大精霊を召喚するためのものでしょうか？」

「シュウ様も気軽にあれほどの魔法を使うのやめてほしいですわね」

威力的には上級で収まっているが、やっていることはとんでもない。

「……ユウトもシュウも本当にすごいのだな」

レイナが今一度、確認するように口にした。

「正直に言うけどレイナがしっかりしてれば俺らは出張る必要なかったんだよ」

「す、すまない」

修の物言いに縮こまるレイナ。

「いや、さすがに最後の爆発は予想外だし」

「それもそうだったな」

タコが爆発って何だよ、とは確かに思った。

「けれど君たちは対応してみせた」

「いつでもフォローする準備はあったからな」

「……そうか」

それでも自分だったら対応できていなかっただろう。

火球が当たった時点で少し安心してしまった。

これがもっと凶暴な魔物だとしたら、護衛対象を窮地に追いやってしまったかもしれない。

勉強になった、と一つ頷く。

「いや、しかしこうでなくてはな。追いかけ甲斐があるというものだ」

ビシッと指を突き出して優斗と修を指し示す。

「お前ら、絶対に追いついてやるから覚悟しておけ！」

一方で指を指された二人は、頼もしい姿のレイナを見て肩をすくませて小さく笑った。

◇　◇

帰りの馬車。

今度は修と卓也が御者をやっていた。

他のメンバーは戦闘があったり遊んだりしていたので、馬車の中で大抵は眠っている。

その中で起きていた優斗とレイナは小声で会話する。

「イズミの拳銃？　というのもすごかった。銃弾というものに魔方陣が込められているのは属性付与の応用なんだろうな」

素晴らしいものだ、とレイナが感嘆する。

「だが、ユウトの詠唱は何なんだ？　精霊を扱う精霊術士のことは知っているが、お前のような詠唱、聞いたことがない。むしろ精霊術士が詠唱している姿を見たことがない」

「大精霊召喚だからね。詠唱するし魔力も魔方陣も使うけど、厳密に言えば魔法じゃないよ。とはいっても精霊について今は詳しく知らないし、あれはオリジナルの詠唱」

「……本当に何でもありだなユウトは」

「詠唱はそうだけど、精霊についてはマリカの親になった副産物。さすがに最初から使えたわけじゃないよ」

優斗は膝の上で眠っているマリカの髪の毛をやさしく梳く。
そのとき、カタンと馬車が軽く跳ねた。
その小さな揺れで右隣に座っていたフィオナの頭がポスン、と肩に乗っかる。
優斗の視界にフィオナを可愛らしい顔が直近で映る。

「――ッ！」

表情が少し固まった。
レイナはそんな優斗に笑う。

「何をそんなに緊張している。奥様だろう？」

「奥様だろうとなんだろうと美人の顔が近くにあったら緊張するんだよ」

優斗のそんな言い方にレイナはころころと笑う。
おかしかった。
巨大タコが現れても「食べれるか？」なんて会話をしていた男が、女の子の頭が肩に乗っただけで狼狽しているというのは。

「意外な弱点の発見だ」

踏み出す一歩

夜、トラスティ家にて。

「あなた、またユウトさんと飲んでたの？」

呆れたようにエリスが言った。

「少しだけだ」

「それにしたって1週間に4回も5回もやってれば限度があるわ」

「念願の夢だったんだからいいじゃないか」

そんなことを言っても毎度付き合わされる優斗の身を考えて欲しい。

「それにしたってユウトさんだって迷惑でしょう？」

「一緒に暮らしているのだから遠慮なんて必要ないだろう」

「……遠慮、ねぇ」

確かにそうは思うけれども。

「私はもう彼を息子のように思っているよ」

「でも、あなた。それは……」

マルスから聞いたこと。

優斗の身上。
うかつにそういうことを言ってはいけない気がしていた。

「それが彼のためになると思っている」

けれどマルスは引かない。

「フィオナの恩恵があろうとも彼は私を信用してくれた。ならば私は彼の信用に応えるためにもそうしている。とはいっても、彼にはまだ遠慮があるようだがな」

同じ家に暮らしているからこそ、余計に感じさせられた。

「互いに踏み込まなければ駄目なんだと、つくづく思わされているよ」

◇　◇

「金がない」

「……唐突にどうしたの？」

いきなりトラスティ家に来たかと思えば、卓也が変なことを言い始めた。

「金がないんだ」

「定期的に貰ってるじゃない」

異世界組のお金は王様のポケットマネー、つまりは税金によってまかなわれている。

「手持ちが全くないんだ」

「何に使ってるの？　修や和泉じゃあるまいし、卓也が金ないっていうのは珍しいね」

「……落とした」

卓也ががっくりと肩を落とした。

「卓也らしい」

優斗はちょうどリビングにいたエリスに訊いてみる。

「エリスさん、何か割のいいバイトとかありますか？」

「……」

反応がなかった。

考えているのか、視線はこっちに向いているのだが焦点が合っていない。

「エリスさん？」

「え？　な、何かしら？」

「あの、何か割のいいバイトってあります？　卓也が金を落としたらしくて」

今一度、優斗が尋ねるとエリスは少し考えて、

「ギルドでも行ってきたら？　タクヤさんでもできる仕事があるはずよ」

「へぇ、そうなんですか」

卓也に視線を向ける。

「どうする？　行ってみる？」

「ああ、行こうか」

善は急げと立ち上がる。

「フィオナ。悪いけど、マリカのことお願いね」

庭でマリカと日向ぼっこしていたフィオナに出かけること伝える。

「はい。行ってらっしゃいませ」

「ユウトさん、無茶なものは選んじゃ駄目よ」

エリスが釘を刺す。

優斗は苦笑した。

「わかってますって」

◇　　◇

ギルドまでの道のり、卓也がこんなことを言ってきた。

「なんていうかお前ら、同じ家に住んでるのも板についてきたな」

「そう？」

「ああ。フィオナの両親もよくしてくれてるみたいだな」

「うん。マリカを育てるのにもすごく参考になってる」

よくフォローしてもらっている。

「あの二人はどういう存在なんだ？」

「……尊敬できる人たち。あれが親なんだと思える素晴らしい人たちだよ」

「お前にとっても？」

卓也が突っ込んだことを訊いてきた。

「……分からない。少なくともマルスさんとエリスさんが両親だったらよかったな、と思ったことはあるよ」

そうしたら、こんな自分にはなっていないだろうから。

「そっか」

これ以上は卓也も何も言わなかった。

少ししてギルドに辿り着く。

「ここかな？」

「みたいだ」

大きな看板に『ギルド』と書いてある。

中に入ってみる。

なんとなくイメージ的に汚れてる、粗暴といったものがあったのだが、どうしてなかなか綺麗なつくりをしていた。

二人は受付に向かう。

「ギルドに初めて来たのですが……」

「それではご案内させていただきます」

受付の女性に説明を受ける。

クエストランクやプレイヤーランク、などなど。

基本的にＲＰＧと変わらなかったのは二人にとって幸いだった。

特に尋ねることもなくライセンスを受け取る。
この世界のクエストランクはS、A，B，C，D，E，F，Gと8段階。
優斗たちが受けれるのはEランクまでだ。

「討伐でもやるか？」

クエストが貼り付けてある掲示板を見る。

「薬草採取でいいよ。ほら、これなら前に行った森にあったから」

ランクはFランク。熱冷ましの薬草の採取。
そこそこお金になって危険がないということで、これにすることにした。

「あったか？」

「あった。これで数も問題なし」

パパッと薬草を回収してすぐに帰る。
修や和泉のように余計なことをしない。

「修たちがいないと、特にトラブルなく帰ってこれたな」

「まあ、特に修がいないからね」

トラブルを呼ぶ災厄人物の修がいない以上、この二人で行動して問題が起こることは稀だった。

さっそうとギルドに戻って薬草を渡す。

「よし、換金も終了。優斗はこのあと帰るのか？」

「いや、ちょっと商店街まで足を伸ばすよ」

せっかくお金が入ったのだから、少し買い物をしていこうと思っている。

「そうか。それじゃ、今日はありがとうな」

「はいよ」

気軽に答えて優斗は足を商店街へと向ける。

「さて、と」

歩き出す。

「何を買おうかな」

◇　◇

「ただいま戻りました」

夕刻、買い物を終えた優斗はトラスティ家に帰ってきた。

「お帰りなさい、優斗さん」

「あ～い」

律儀にフィオナとマリカが迎えに来た。

「マリカはママの言うこと、ちゃんと聞けたかな？」

「あいっ！」

元気な返事のマリカ。

フィオナに本当？　といった視線を向けると頷かれた。

「それじゃ、良い子のマリカにパパからプレゼントだよ」

夕食も終わりフィオナがマリカを寝かしに行った。
しばらくリビングでのんびりしていると、エリスが話しかけてきた。

「さっきフィオナが何か持ってたけど、何を買ってきたの？」

「クレヨンと画用紙です。さすがに娘にプレゼントを一個も買ってないのはどうかと思ったから」

あの歳ぐらいの遊び道具としてはちょうどいいと思う。

「あら、ちゃんとまーちゃんのために頑張ってるのね」

「父親ですから」

当然のように優斗が言った。
エリスはそれを聞くと……少し真面目な表情を作る。

「それじゃ、今度は私たちと頑張ってみる気はない？」

エリスの発言に優斗は要領を得ない。
疑問の様相を呈した。

「ユウトさんはこの家で暮らし始めてどれくらいかしら？」

「3週間ですね。今日でちょうど」

とても早く思えるほどに時間が過ぎている。

「対外的には私とユウトさんはどういう関係かしら？」

「義理の親子、といったところでしょうか」

おそらくそれが一番適しているだろう。

「ならそろそろ、呼んでもらいたいものよ」

エリスが告げると優斗の表情が厳しいものになった。

何を言いたいのかは分かる。

分かるが。

「……マルスさんから話を聞いたりはしてないんですよね？」

「いいえ、聞いてるわよ」

「それでも、ですか？」

「その通りよ」

優斗の態度からあまり良い話題でないのは確かだが、それでも引くわけにはいかない。

「意地悪をしているつもりはないわ」

「わかってます」

そういう人でないことはよく分かっている。
一緒に住む前からエリスのことは知っているし、冗談と真面目な話の使い分けができることだって分かる。
だからこそ問う。

「なぜですか？」

「私はあなたを本当の息子のように思いたいからよ」

エリスが断言した瞬間、優斗の表情が崩れる。

「疲れるわよ、その生き方は」

今の優斗は気の休まる時間を持っていない。
常に何かしら緊張の糸を張らしている。

「……知ってます」

「この家でくらい、息を抜いたっていいじゃない。それが“家”というものよ」

「それができる生き方をしてきていないって知ってるでしょう？」

マルスから自分のことを聞いているのなら。

「なら、それができるよう努力なさい」

「……厳しいですね、エリスさんは」

「遠慮はしないって決めたもの」

昨日から考えていた。
マルスがああ言った以上、自分だってそうする。
そうしたいと思ったのだ。

「前にマルスが言ったかもしれないけれどね、あなたがいるおかげでフィオナは話すようになった。明るくなった」

まるで別人だ。

「マルスだってそうよ。あなたがいることで、帰ってお酒を飲むことを楽しみにするようになった。今だってマリカのおかげで孫バカ手前よ」

夢の一つが叶った。
たぶん、優斗と一緒に酒を飲み交わす時間が本当に幸福なのだろう。

「私だってそう。あなたと会って、マリカが来て、目まぐるしく変わる毎日が本当に楽しいの」

だから。
その気持ちを優斗にも知ってもらっていたいから。

「ユウト」

もう遠慮はしないと決めた。

「もう一歩だけ、私たちに歩み寄りなさい」

こっちから目一杯に踏み込んでも、最後の一線を越えるのは優斗自身の意思が必要なのだから。
けれども優斗はいつものように軽く頷いたりはしない。
いや、できない。

「……怖いんですよ」

気持ちを吐露する。
ごまかしたりはしない。
真剣に考えてくれているからこそ、自分も真面目に答える。

「きっとその一歩は、僕の保ってる限界ラインを超えるものです」

最後の最後。
エリスからしたらわずかばかりの人生かもしれないけれど、それでもそれが自分を“自分”として保たせている。

――気持ちはあるけど。

そうしたい、という気持ちはあるけれども。
有り余るほどに思っているけれど。
くしゃり、と顔が泣き笑いを浮かべた。

「それを超える勇気を僕は持ってないから」

涙は出ない。
バカみたいだけれど、涙なんて最後に流したのは最後がいつかは覚えていない。
覚えているのは、涙は流さないと決めた誓いだけ。

「……少し、勘違いしてたわ。あなたも弱い心を持っているのね」

いつでも平然としている。
にこやかに笑っている。
強く、優しく在る。
それが優斗に対するエリスの評価だった。
けれどもそれが今、崩れる。
“強い”のではなく、“強くいた”ということなのだろう。

「強くないといけなかっただけです。そうしないと駄目だったから」

「ここはあなたのいた世界じゃない」

「知ってます」

でも、変えられないんです。
そう付け加えて優斗は笑う。
けれどその笑顔は、優斗の心を知ったからこそ印象が変わる。
なんだか悲しくなってエリスは優斗に近づくと抱きしめた。

――この子はずっと、こうしてきたのね。

大人と立ち向かうために必要だった強さ。
強固な意志。
まともな世界で過ごしているなら、そんなものは必要ないというのに。

「……ちょっと苦しいです」

「我慢なさい」

「……はい」

ただ、言われるがままに優斗は抱きしめられる。
フィオナの時とは違う、温かさが身体に染み渡る。
なんとなく、これが“親”なのだと実感した。

「……親の温かさというのはこういうことを言うんですかね？」

ふと、思う。
これが親の温かさだと言うのならば。
自分はできているのだろうか。

「僕はマリカにこの温もりを与えられていますか？」

優斗の問いにエリスは泣きそうになる。

――どうして、この子は。

こんなことすら分からないのだろう。
そして恨みそうになる。
それを教えてこなかった優斗の両親に。

「もちろんよ」

エリスは頷いた。
すると優斗は安堵の表情を浮かべた。

「よかった」

自分は親らしいことができている、と。
そう思えた。

「不安だったの？」

「実感をしてこなかったわけですから」

理想はある。
そうする努力もする。
マイナスイメージも振り切ってはいる。
けれど、不安がないと言えば嘘になっていた。

「でも、だからこそ良い親で在りたいと思ってるんです。あんな両親から産まれたからこそ、そういう教育を受けてきたからこそ、僕は絶対にそうなりたくない。ただ、それだけなんです」

そう告げる優斗に。
エリスはもう限界だった。
どれほど辛い状況だったなんかなんて想像もつかない。
人の汚いところばかり見てきたのも本当なのだろう。

――それなのに。

優斗はこんなにも純粋な芯を持っている。
涙が溢れてきた。
少しでも擦れたりすれば、もっと楽だったろうに。

「泣かないでくださいよ」

「……バカよ、あなたは」

「……その通りです」

「本当にもう、どういう言葉を掛けていいか分からないわ」

「すみません」

情けないように頷く優斗。

「でも、それでも何か言えるとしたら」

本当の強さを持っている優斗に。

――頑張り屋のこの子に。

伝える言葉があるとするならば。

エリスは抱きしめている優斗の肩を持って真正面から見つめた。

「ユウトのためにこれだけ泣ける私は、やっぱりユウトのことを大切に思ってるって実感したわ」

優しく微笑みを浮かべるエリス。

その表情は、ただ美しく。

大きな母性がにじみ出ていて。

それが一重に優斗に向けられていて。

「……ッ……！」

心を揺さぶった。
なぜか目頭が熱くなる。
顔を下に背ける。

「ユウト？」

「……どうして……ですかね」

決めたことだった。

「もう、泣かないって決めてたんです。泣いても何も変わらないから、泣くことに意味はないって……」

思っていたのに。

「……思ってた……のに……！」

込み上げてくるものが止まらない。

「バカね」

エリスはもう一度、優斗を抱きしめる。

「泣きたいなら泣けばいいのよ」

あやすように頭を撫でた。

「私は受け止めるわ。ユウトの気持ちを」

絶対に。

「ありがとう……ございます」

優斗の瞳から零れる涙をエリスは受け止める。

“大人”としてではなく。

“母親”として。

マリカの父親に懸命になろうとしている優斗に見習って。

自分も頑張って優斗の母親になる。

これが彼に対する自分の一歩だ。

「エリスさんの踏み出した一歩は、すごいですね」

「そうかしら？」

「僕を泣かせるんですから、相当なものです」

優斗もエリスも泣きながら笑う。

「これで少しはユウトも勇気、出たかしら？」

今一度、エリスが尋ねた。

「……そうですね」

自分を泣かせるぐらいに踏み込んできたエリス。

そして自分のことを思って泣いてくれた彼女に。

応えたいと思う。

今ならきっと、言える気がした。

「言葉だけになってしまうかもしれないけど、それでもこの一言で一歩を踏み出そうと思います」

大きく深呼吸をして。

言おう。

「ありがとうございます、義母さん」

お茶会に誘われて

「ユウトとフィオナさんにお願いがあるんです」

珍しく単独でトラスティ家に来たクリスが唐突に切り出した。

「どうしたんですか？」

「ユウトには旅行に行ったとき、夏に婚約者と会うことは話しましたよね？」

「うん、聞いた」

「明後日、その婚約者と会うことになったのですが一緒に会っていただけないでしょうか」

クリスが珍しくしてきたお願い。

もちろん、突発な上に意味は分からない。

「……説明、よろしく」

「はい」

クリスは頷くと事の発端を話し始めた。

「初めて会ったときは両家の顔合わせということもあって互いの両親随伴でしたが、今回はどちらの両親もいません。そして早いうちに僕の知人を知っておきたい、という話になりましたので、今回はお茶会をするということになりました」

クリスも初めての経験なので、急に知人を交えてのお茶会など多少の違和感は感じるが、婚約者と会うというのはこういうことなのだろう、と割り切って頷いた。

「それで彼女が初対面でも安心してお茶会をできる人を選ぶとなるとユウトとフィオナさんが適任かと思った次第です」

「……まあ、確かに」

優斗も納得する。

「修と和泉は論外だし、アリーは王族だからどうしたって緊張する。残るは卓也とココだけど……卓也はテンパりそうだし、ココはそれに引きづられそう」

クリスも苦笑していることから、優斗と同じ意見なのだろう。

「というわけで、お二人にお願いしたいのです」

◇　◇

そしてお茶会の日。
クリスが迎えに来たので、優斗とフィオナも準備をして玄関に向かう。

「まーちゃん。ちゃんとお母様――バーバの言うことを聞いてくださいね」

「あい」

「夜には帰れますので、それまで良い子でいてくださいね」

「あい」

「それから――」

フィオナがあれやこれやとマリカに注意するべきことを教える。
初めてマリカを伴わずに出かけるのだから心配するのは分かるが。

「……フィオナ。心配しすぎ。エリスさんがいるんだから」

瞬間だった。
マリカを抱いているエリスからデコピンが優斗に飛ぶ。

「いつっ！」

「ユウト。今、なんて言った？」

凍えるような笑みを浮かべてエリスが迫る。

エリスが何に対して怒っているのかは分かるので、優斗も至極冗談めいて言葉を返した。

「なんでしょうか、義母さん」

ただ、それだけ言えば。

エリスの表情は温かなものへと変化する。

「それでいいのよ」

「お相手は子爵のご令嬢というわけだけど……」

一応、クリスに再度確認を取る優斗。

「清純無垢な女性です。間違えても事前準備なしにイズミと関わらせたくないですね」

和泉の扱いが可哀想だとも思うが、自業自得なので優斗もフィオナも特にツッコミは入れない。

「性格はどんな感じなのですか？」

「ん～……タイプとしてはアリーさんに近いと思います。アリーさ

んを幼くして、慌てる感じが追加された性格ですね」

少なくとも嘘はつけないタイプだろう。

「僕たちはどういう設定で会えばいいのかな？」

「そういえばそうですね。名乗るときに困ります」

友人同士か婚約者か夫婦か。

「……結婚は決定的ではありますが決定ではありませんし、万が一に決裂したとしても、それまでに彼女がマリカちゃんと会う機会がないとは言い切れません。彼女はマリカちゃんが龍神の子供ということも知らないでしょうし、何より指輪を見られたら言い逃れできませんし……」

左手の薬指に同じ指輪をしているのは、さすがに何かあると勘繰られる。

「夫婦ということでお願いしてもよろしいでしょうか？」

「了解」

「わかりました」

フィオナの家からそこまで遠い距離ではなく、軽く打ち合わせをしているうちにクリスの住んでいる家まで辿り着く。
最初に目にする庭園。そこにあるテーブルに一人の女性がしきりに落ち着かなそうに待っていた。

「クリス、あのガッチガチに緊張してるのがそうだよね？」

「はい。自分の婚約者のクレアです」

待ち合わせ時間までは３０分以上もあるから、クリスとしては３人でゆっくり婚約者を待とうとしていたのだが、予想が外れた。

――こんなに早く来ているとは。

少々驚きながら、クリスは近寄っていく。

「クレア、久しぶりですね」

隣まで近づいてクリスが話しかけると、勢いよく婚約者――クレアは立ち上がった。

「ク、ククク、クリス様、お久しゅうございます！」

緊張のあまり、口が上手く回っていない。
クリスも優斗もフィオナも苦笑した。

「あ、あの、あの、あの、こ、この度はわたくし達のためにお、お越しいただき、ありがとうございます！」

９０度にもなりそうな勢いで頭を下げる。
なんというか、優斗が今まで関わってきた貴族とは毛並みが違っていた。

「クレア。今日は緊張しないで済む友人に来ていただきましたから、落ち着いてください」

「ひゃ、ひゃい！」

しかし、これではさすがに緊張しすぎだ。
優斗はフィオナを伴って近づくと警戒心をできるだけ抱かせないようにさわやかに笑う。

「クレアさん。まずは深呼吸をしてみましょう」

「……へ？」

優斗の第一声にぽかんとするクレア。

「クリスもフィオナも一緒に」

意図を察したクリスとフィオナは軽く頷く。

「息を吸って」

優斗の合図でフィオナとクリスがゆっくりと深呼吸をし始めた。
クレアも慌てて同じようにする。

「吐く」

ゆっくりと3人が息を吐く。
もう1度、同じ事を優斗はさせるとパン、と手を鳴らした。

「それでは自己紹介をさせていただきますね。ユウト＝フィーア＝ミヤガワと申します」

「妻のフィオナです。本日はお招きいただき、まことにありがとうございます」

恭しく二人が頭を下げた。

「二人とも学院でのクラスメートなんです」

クリスはクレアの肩に手を置く。

「ユウト、フィオナさん。こちらが自分の婚約者のクレアです」

クリスが紹介するとクレアは先ほどよりもゆったりとした形で頭を下げた。

「よ、よろしくお願いします」

4人してテーブルを囲む。

「クレア、まず最初に言っておくことがあります」

とりあえずこれだけは言っておかなければならないと思う。

「自分達の付き合いは貴族階級の垣根を越えたところにあります。階級が下でも蔑んだりしませんし、階級など関係なく愛称で呼びますし、呼び捨てで呼ばれたりします。一般的にはおかしいかもしれませんがそこは了承してください」

「わかりました」

クリスの説明にクレアが頷くと優斗は早速切り出した。

「クリス、今日のところ口調はどうしたらいいですかね？　クレアさんが緊張するならこのままで通しますけど」

なにぶん、初対面なのでどこまでしていいのかが分からない。

「いえ、まずは普段の口調に戻ってください。ユウトの口調に耐えられなかったら……まずいです」

問題児はもっと他にいるのだから。

「わかったよ」

言われた通り、パッと口調を変える優斗。

「クレアさん。僕はこれからこういう口調で話すけど大丈夫？」

「は、はい」

いきなり言葉使いが変わったことにクレアは驚きはするものの、嫌

悪感は抱いていない様子なのでひとまず安心するクリス。

「ただ、どういうことか、その……」

「クリスが仲良くしてる友達にはもっと言葉が乱雑なのがいるんだよ。そいつらは誰が相手でも口調を変えないから、そういうのが駄目な人だと厳しいなって」

下賤だと蔑みでもしたら、クリスの嫁となるにしてはかなり致命的になる。

「だ、大丈夫です！　頑張ります！」

どういう意味で頑張るのかは分からないが、少なくともそういう人たちとも付き合っていく気があるのは良いことだ、と優斗は思う。

「とりあえずこの二人は初級レベルです。今後、こういうことが増えてくるとレベルが上がっていきますので心の準備はしておいてくださいね」

「……ち、ちなみに、上級レベルだと、どういう方が？」

「王族が出てきます」

「……。……えっ？　お、お、王族って……ど、どうしたら！」

ワンテンポ遅れてまたまた慌てるクレア。

「今日はアリーさんを連れてこなくてよかったですね」

もし連れて来たりでもしたら、彼女は緊張のあまり失神でもしてしまいそうだ。
クリスも苦笑いしながら頷いた。

「本当です」

◇　◇

当たり触りのない会話はしていくうちに、少しずつクレアの緊張もほぐれてきたようで、こんなことをクリスに訊いてきた。

「クリス様は学院ではどういう生活をされているのですか？」

「自分ですか？　自分は普通に……」

と、ここで気付く。

「普通に……？」

ここ最近の自分の学院生活に普通なんてところはあっただろうか？

「普通？」

思いの外、悩むことになった。

「クリス様？　どうされました？」

「いえ、ここ数ヶ月で“普通”という言葉がずいぶんと遠のいたと思いまして」

特に和泉のせいで。

「事情があってクリスが和泉って友達の家庭教師をすることになったんだけど、それが大変だったってことだよ」

「連れ回され、振り回され、大変な日常です」

「そ、そんな方とご友人を？」

心配そうにクリスを見るクレア。

「なんだかんだ言っても、楽しいですから」

そうだ。

一緒にバカ騒ぎに巻き込まれるのは楽しい。

これに関しては真実だ。

時折、後処理は面倒だが。

続いてクレアが気になっていたのはクリスが連れてきた友人達。

「……それで……その、ユウト様とフィオナ様はご夫婦なのだと伺いましたが……」

「何か気になることがありますか？　何でも仰ってください」

同じ女性ということもあり、親身になってフィオナが話を聞く。

「結婚生活とは……どういうもの……でしょうか？」

両親は年齢が離れすぎているし、同年代で夫婦生活を送るというのはどうなのか。

これはこれから結婚するクレアにとって重要なことだった。

「夫は優しいですし、一緒にいることは本当に幸せです。ただ2学期に入れば学院生活と育児を両立させなければなりませんし、大変さはありますね」

「お、お子様がいらっしゃるのですか！？」

驚いた。

学院に通っている方なのにすでに子供がいるとは。

「1歳と少しになる娘がいるよ」

「そういう場合、家政婦などにお任せするのですか？」

「いや、うちはフィオナの母親がフォローしてくれるから。やっぱり親族に育ててもらうのが娘のためにもなると思って」

さらに龍神という特殊性も相まっているため、迂闊に任せられないのが現状だ。

「ユウト様が貴族ということは、フィオナ様のご実家も貴族なのですか？」

続くクレアの問いかけに今度はクリスが答える。

「彼女の実家はトラスティ家。公爵ですよ。ユウトは子爵の家系だから、爵位としてはクレアと同じですね」

「それでよく結婚が許されましたね」

少なくとも侯爵ぐらいでないと公爵の結婚は許されないと思っていた。

「フィオナさんのご両親は寛大な方なんです。フィオナさんが気に入ったのなら貴族だろうと平民だろうと平然と結婚させますよ」

クリスの説明を聞きながら……クレアはある一つのことを思い出す。

「あっ！　それで思い出しました。クリス様。わ、わたくし達の結婚のことなのですが……」

「何かありましたか？」

こうしているから破棄ということはなさそうだが。

何かしら問題が起こったのだろうか。

「早まりそうなのです」

「……どういうことですか？」

クリスが学院を卒業するまでは待つ、という話だったはずだが。

「わたくしも詳しくは分かりませんが、遅くとも年末……早ければ

1ヶ月後にでも、と」

「早くなりすぎじゃない？」

あまりの早まりに優斗も疑問を抱いた。

「わたくしもそう思うのですが……」

「クレアさんは本当に何か聞いてないの？」

「いえ、ただ、クリス様の周りが……ということは聞きましたが」

両親が話しているところをうっかり聞いただけなので、詳しくは知らない。

「周り？」

「はい」

「クリスさんの周囲に何か変化があったのでしょうか？」

フィオナも一緒になって考え出す。

クリスもクレアも意図が分からずに困っている。

優斗も考えて……ふと、気付く。

「……周囲に変化と言ったら」

一つ、思いついた。

「クリス。初めてクレアさんと会ったのはいつ？」

「ユウト達と会うほんの少し前ですよ」

「……なら、そういうことかな」

これなら筋道が通っている気がする。

「優斗さん、何か分かったのですか？」

「多分だけどね」

優斗が全員に説明するためにぐるりを見回せば、フィオナだけではなくクリスもクレアも興味津々に優斗を見ている。

優斗は自分の予想を話し始める。

「クリスが誰かに取られることを危惧してるんだよ」

「どういうことでしょうか？」

「僕らに会うまでクリスに友達はいなかった。ようは一人ぼっちだったんだけど……」

「確認されると胸に刺さるものがありますね」

ただ、事実なのだから仕方がない。

「僕らと出会ってからクリスの周りには人が増えた。それは僕とか和泉だけじゃなくてアリー達、女の子も一緒にいるようになった」

ここが結婚の話が早まった焦点だと見る。

「アリー、ココ、フィオナに最近だとレイナさんか。王族に公爵に近衛騎士団団長の娘っていうのは、クリスの相手としては上等だと思わない？」

このうちの誰と結婚しても利点は多々あるはずだ。

「わ、私は優斗さんの妻です！」

フィオナが慌てて宣言した。

あくまで夫婦という設定なのだけれど、ほとんど反射的に発したフィオナの言葉に優斗は顔を赤くする。

けれど優斗は無理やりに話を進めた。

「あー、フィオナ。嬉しいけどちょっと論点がずれてる。重要なのはクリスの周囲に上等で上級な女の子がいるってこと」

そういう事実があるのが問題。

「クリスが王子系イケメンってことを考えると、この中の誰かと恋仲になってしまう可能性はある」

「そ、そうなのですか！？」

今度はクレアが泣きそうになりながらクリスに問いかける。

「ありません！　ありませんから落ち着いてください、クレア」

クリスはクレアを宥めながら優斗に続きを促す。

「この結婚がどういう利益を生むのか、どういう状況下で行われるかは知らないけれど、その3人のうちの誰かと付き合ってしまったらこの縁談は無くなってしまうかもしれない。特にアリーだった場合は問答無用で破棄という形になるだろうね」

王族なのだから。

「というわけで、誰かと恋仲になってしまう前に結婚させてしまおう、というのが今回の本筋じゃないのかな」

「……そうですね。ユウトが言っていることで合ってそうな気がします」

「それで、どうするの？」

「どうする、とは？」

「僕が言ったのはどうでもいいとして、クリスはどうしたいの？」

自分が言ったことはあくまで予想だ。

正直、どうでもいい推理でしかない。

「早められたのが嫌なら、今まで通り学院を卒業してから結婚……ってレールに戻ることもできると思うけど？」

“チーム”のメンバーの力を使えば容易い。

「ユウトは自分が頷いたら、絶対にやり遂げますよね」

「クリスが本当に嫌ならね」

まるで軽口を叩くように告げた優斗に、心で感謝を述べながらクリスはクレアを真正面に見据えた。

「クレア」

名前を呼ばれてビクリ、とクレアの身体が跳ねる。

「貴女は今回の結婚、どう思っていますか？」

「わ、わたくしは、両親の言うままに……」

「自分は貴女の気持ちを聞いているのです」

テンプレートのような台詞をクリスは叩き切る。

「会って2回目です。そのような男と最短で1ヶ月で結婚など嫌ではありませんか？」

「嫌ではありません！！」

いきなりの大声にクリスだけでなく優斗とフィオナも驚いた表情を浮かべた。

「こ、これでもわたくし、クリス様と婚約することになってから、結婚生活を送るとしたらどんなことをしてあげよう。それればかり考えておりました！」

唖然としている3人に尚もクレアは言葉を続ける。

「確かにわたくしとクリス様の婚姻は両家の思惑が重なってのことですが、それでもわたくしは……」

この人なら、と思えたからこそ。

「愛ある生活を望んでおります」

しっかりと断言した告白に優斗とフィオナから拍手が起こる。

「なんというか……照れくさいですね」

珍しくクリスの顔が赤みを増した。

うん、と一つ頷く。

「ユウト。心は決まりました」

貴族同士の結婚というものは平民と比べておいそれと離婚などできない。

3、4割ほどは仮面夫婦になってしまうものだが、どうしてか彼女とは良い結婚生活を送れると思えてしまった。

それに女性にここまで言われて退くのは男らしくない。

「年内に結婚します」

「そっか」

「ただ、学院との兼ね合いやクレアのこともっとよく知りたいですから、年末までは延ばすつもりです」

「わかったよ」

優斗は手を上げた。
クリスはそれに力強くハイタッチする。

「頑張れ」

「ええ」

ただ、それだけの言葉と動作で。
二人は可笑しそうに笑った。

パーティー初参加ということは……

夏休みも終盤に差し掛かる。
優斗とフィオナ、そして卓也は目の前の光景に少し頭を抱えていた。

「貴族のパーティーってもうちょっとセレブな感じがしたんだけどな」

彼らがいるのは王城の側にあるパーティー会場。
本日は小さいながらもパーティーが行われたので、そこで異世界組を慣れさせるためにも参加することになった。
着慣れない燕尾服などを纏わせて全員が会場にいる。
アリーは先ほどから接待を続け、ココとクリスは挨拶回りに行っている。
フィオナはこの場では優斗の婚約者としてやってきているし、何よりあれだこれだと訊かれ始めたらボロが出そうなので、優斗の隣にいる。
修と和泉といえば、さっきから必死で料理を食べていた。

「それはあいつらのせいだって。あれがパーティーの品位を下げてる」

貴族デビューなので知っている人などほとんど皆無。
注目されることもほとんどない。
なのでお目付け役のアリーとクリスがいなくなってこれ幸いと、料

理を食べ続けているわけだ。

「そろそろ止めにいきます？」

「そうだね。周りに注目される前に……ん？」

「あっ、レイナさんですね」

見慣れた先輩がヅカヅカと二人の元まで歩いていく。

そして勢いよく拳を修と和泉の頭に見舞った。

「二人の頭を殴って黙らせた。さすがだ」

「彼女がいると僕らの負担が減って助かる」

本当に。

「そういえば今日、マリカはどうしたの？」

「お母様に預けてきました」

◇　◇

「またお母様にまーちゃんを預けることになってしまいましたね」

「いいのよ。2学期も近いのだからまーちゃんだって貴方たちがいないことに慣れないといけないわ」

「あい」

こくこくとマリカが頷いた。

「ユウトは会場で何か困ったことがあったらフィオナでもマルスでもいいから訊きなさい」

「分かりました」

優斗とフィオナ、マルスで会場に向かって歩いていく。

「緊張することはない。ユウト君ならば問題ないはずだ」

「そう言っていただけるのはありがたいんですが、心配事はちょっと別にありまして」

「……ですね」

さすがにアリーとクリスとココは親も来ていないから、挨拶に大変だろうと思う。

ということはつまり、バカ1号と2号の手綱が無いわけで。

優斗は自分のことだけで手一杯だろうし、フィオナも基本的には優斗のフォロー役だ。

ついでにフィオナがどうしてフォロー役ができるのかと言えば、今まで愛想よく過ごしてきていないので、あまり声を掛けてくる人がいない。

今回は逆にそれが優斗には助かった。
でも、目下の問題はあの二人だ。

「どうする？」

「どうしましょう」

◇　◇

「何をやっているか、お前達は！」

アリーとクリスに様子を見てくれ、と言われれば案の定だ。
説教してもらうためにもアリーとクリスの元へ引きずっていく。

「腹が減った」

「だからしゃーない」

「しょうがなくない！」

二人を引きずりながらレイナは思った。

――ユウトたちはこいつらの面倒をいつも見ていたのか。

このマイペース二人の相手をするのには根気が必要だろう。
少し同情しそうになる。

「お前達は今日、パーティーが何たるかを勉強しに来たのだろう？」

「飽きた」

「飽きるな！」

怒鳴りながら前にいる男性とすれ違う。

「ん？」

その時だ。
ピクリ、と修が反応した。

「どうした、修？」

「なんか……変な感じが……」

ほんの僅か、毛筋ほどの感覚がピリッと来たような気がした。
引きずられながら周りを見てみるが、特に変わった様子はなく修のアンテナに引っかからない。

「気のせいか？」

違和感とも呼べないほどの代物だ。
慣れない場所で少し神経質にでもなってしまったのだろうか。
少し考えてバカらしいと一笑する。

――神経質とか俺のキャラじゃないし。

「何かあったのか？」

「いや、気のせい」

「ゆっくり会話する暇あったら自分で歩け、馬鹿者！」

レイナが掴んでいた襟首を離す。

ベシャ、と地面に落ちる。

「痛いぞ、会長」

「そうだそうだ」

「ほう、お前らのためを思って説教はクリス達に任せようと思っていたが、どうやらお前らは私の説教が所望のようだな」

「いえ、俺はアリーの説教がいいです」

「俺もクリスの説教のほうがいい」

「……説教されないようにする、と答えないのが本当にバカというか……」

レイナは眉間を揉み解す。

なんとなく保母さんのような気持ちになってきた。

「とりあえず、シュウもイズミも誰にも挨拶をしないのは問題だろう。試しにアリーにでもしてみろ。今ならさほど時間を取らずにで

きるだろう」

たくさんの貴族と話していたが少し落ち着いたのだろうか。
アリーのそばにはフィオナの父親、マルスがいて彼と穏やかに談笑している。
レイナ達がそばに行くとアリーが気付く。

「よっ、アリーにフィオナのおじさん」

「シュウ様、レイナさん、イズミさん。パーティは楽しんでいますか？」

「そのことなのですがシュウとイズミがパーティではあるまじき行為をしていたので、アリシア様に説教していただこうかと」

「レイナさん。今はわたくし達に聞き耳を立てている方もいませんし、いつものようにアリーでいいですわ」

「いえ、騎士を目指したるもの、公私の分別は弁えようかと」

「そうですか。では仕方ありませんね」

無理に強制するものでもない。

「それはそうと、シュウ様――」

何をしてらっしゃるんですか、と問いかけようとした時だった。

テーブル中央のところでガシャン、とお皿が割れる音がした。

同時に起こった悲鳴。

周囲がざわめいた。

「何が……」

修は状況を把握しようとして、

「……っ！」

咄嗟に振り向いた。

真後ろに大柄な男が立っている。

そして振り上げた手には鉈のようなものが握られていた。

「イズミ！　レイナ！　アリーを守れッ！！」

◇　◇

「フィオナ、卓也。何か食べる？」

「そうですね。少しお腹は空きました」

「オレも何か摘むものがほしい」

「取ってくるよ」

優斗は壁際から中央のテーブルへと向かう。

「頼む」

「3人分になりますし、私も一緒に行きますね」

フィオナも優斗のあとを付いて行く。

「シュウさんとイズミさんはどこに連れて行かれるんでしょうね？」

「あの様子だとアリー、クリス、レイナさんの誰かが説教するんじゃない？」

「かもしれません」

くすくすと二人で笑いあう。

「とりあえず、肉とかを手に入れれば大丈夫かな」

「そうですね。あとはタクヤさん野菜好きですから野菜も多めに」

中央のテーブルまで辿り着く。
自分で取り分けて料理を食べる貴族はそこまで多くない。
料理を持ったウェイターが動き回っているし、従士を使って食べ物を取らせるものもいる。
とはいえ珍しい光景とも言えないのがこの国の特徴でもあった。

「さて、取りますか」

「そうですね」

お皿を持って料理を取ろうとした瞬間だった。

「――ッ！」

ゾクリ、とした。
一瞬にして膨れ上がった背後からの殺気。
反射的に隣にいたフィオナを突き飛ばす。

「きゃっ」

可愛らしい悲鳴をあげるフィオナ。
手で持っていたお皿が空中に投げ出される。
けれど彼女が声を出したのと同時。

「……っ……！」

何かが優斗に刺さった。

「ははっ、始まった始まった」

慌てふためく周囲をよそにラッセルは笑みを浮かべる。
悲鳴が起きたということは修か優斗、そしてフィオナの3人のうちの誰かはすでに死んでいるだろう。
いい気味だ、とラッセルはほくそえむ。
修は自分に対して敬意を払いはしないし、優斗は大舞台で不正を働いた。
フィオナもフィオナで将来の夫に対する態度ではない。
優斗に至っては前回、わざわざ罰を与えようとしてやったのに運良く助かったらしい。
ならばここで前回の分も兼ねて灸を据えなければならない。
今回のパーティーに3人が共に参加するのが分かってから、ラッセルはとあるギルドチームに依頼を頼んだ。
凄腕チームに頼んだので金は嵩んだが問題は無い。
しっかりと仕事をしてくれれば。

◇　◇

右肩に痛みが走る。
異物が肉を裂いて突き進んでいくが、その感触が唐突に無くなった。

――もう一回かッ！

振り向きながら右腕も振り上げる。
ナイフが自分を目掛けて突き進んできた。
肩が痛むがどうでもいい。
迫ってくる刃をタイミング合わせて握り締めた。
ナイフなどの刃物は刃を引くことによって対象物を切る。
つまりナイフの刃を全力で握ったところでナイフ本来の切れ味を発揮することはない。

「……お前、やるなぁ」

優斗と相対する男。ひょろ長い男の視線が優斗を貫く。
男がナイフを引き抜こうとする。
優斗は刃から手を離した。
いくら切れにくいとは言っても、切れないわけじゃない。
手のひらは横一文字に傷ができて血が溢れていた。

「優斗さん！」

フィオナが優斗に駆け寄る。

「す、すぐに治します！」

「いや、いい。そんな猶予を与えてくれるわけもない」

それに男が使っているナイフ。
何か違和感がある。

「おい、お譲ちゃん。このナイフに切られたら普通の回復魔法じゃ駄目なんだよ。呪いが掛かってるからな」

意気揚々にひょろ長い男は笑う。
周りは事態に気がついて大騒ぎで出入り口に向かっていた。
特に気にする様子なくひょろ長い男は優斗とフィオナに相対する。

「つっても、魔法で治せないってだけで自然治癒はしちまうんだけど」

「おしゃべりだね」

「そりゃ暗殺失敗しちまったからな。予想外だったぜ、まさかあのタイミングに防がれるなんてな」

「それで？　狙いは何人？」

「言うと思ってるか？」

「暗殺が失敗した以上、殺害対象以外はいなくなったほうが都合がいいだろう？」

挑発するように優斗が鼻で笑った。

「そりゃそうだが、人質っていうのも必要でね」

「他人なら切り捨てる」

「なら友人でも人質にさせてもらおうか」

◇　◇

振り降りてくる鉈を1歩横に踏み出してかわす。
2撃目は……来なかった。

「よくぞかわした」

「狙いは俺か？」

大男が一つ、頷いた。

「シュウ・ウチダ、ユウト・ミヤガワ、フィオナ・アイン・トラスティ。以上の3名だ」

「……殺し屋か？」

この世界なら、こういう存在がいても問題ない気がする。

「暗殺者だ」

「いや、そんだけ大暴れしといて暗殺者ってなんだよ」

暗殺っていうのはもっと緻密に密やかに行われるものではないのか？
心の中で修がツッコミを入れる。

現に周囲の貴族達は慌てて外へと逃げ始めている。

「それでは他の人物は出て行っても構わないでしょう？」

気付けば修の隣まで来ていたアリーが大男に堂々たる態度で告げた。

「……そうだな」

大男が頷くが、そこでひょろ長い男が優斗たちと一緒に合流した。

「ちょっと待てって。それじゃ逃げられちまうかもしれねぇだろ」

混乱に乗じて逃げられてしまっては元も子もない。

「対象以外も何人か残せって」

「……ということだ。ここにいる人間は残ってもらう」

◇　◇

貴族達が出て行くのを確認したあと、内側から鍵を閉められる。

いざとなれば壁でも壊して逃げることも出来るだろうが、生憎と建物は易々と魔法では壊れないように特殊な魔方陣で守られているので、普通の魔法であれば少々時間を喰ってしまう。

それ故の施錠だ。

「今回の件、お前らに依頼したのはラッセルだよな？」

なんとなく暗殺対象の3人で依頼したのが誰だか分かる。
闘技大会の時もそうだったが、あまりに明確すぎて逆に疑いたくなるが。
とはいっても、こんな予想をしなくても今回ははっきりとしていた。

「そんなこと訊かれて頷くバカがいるかっての」

「つっても、本人がそこにいるんじゃしょうがないだろ」

修たちが視線を会場の隅にやる。
格好つけるように腕を組んで壁に寄りかかっているラッセルがいた。

「やあ、諸君」

優斗たちに向かって歩いていくる。

「この私が君たちを断罪しに来てやったよ」

聞いた瞬間、優斗たち全員の頭にハテナマークが灯る。
意味が分からないといった表情の彼らにラッセルは意気揚々と説明を始めた。

「平民の分際で貴族の私に対する横柄な態度。闘技大会という場で不正を働くという不埒な行為。そして私の妻になるというのにそれを理解していない行動。その全てが万死に値する」

だが、説明すらも説明の体をなしていない。

「……意味、わかる？」

「いや、わかんね」

「私がいつ彼の妻になるんです？　可能性がありません」

「父として彼に娘を嫁がせるなど絶対にありえない。というよりユウト君の婚約者又は夫婦ということを知らないのか？」

「あいつってさ、オレらと同じ子爵だろ？」

「バカも休み休み言ってほしいですわね」

「かわいそうです」

「人間として無様だろう」

「……ラッセルがあれほどだとは私も知らなかった」

何か薬でも使ってるんじゃないかと思うぐらいに訳の分からない話に全員でため息を吐く。

「何をこそこそ話しているんだい？」

「いや、どうしたらそういった結論に辿り着くのか分からなくてな」

代表してレイナがラッセルに対応した。

「まず妻にすると言っているフィオナをどうして殺す？」

「別に本当に殺すわけじゃない。私はこういう物を持っているのでね」

懐から水色の透明なガラスに入った小瓶を見せる。

「万能薬？」

「そうだ。死んだ者すらも蘇らせる霊薬。将来の妻にはこれぐらいの教育が必要だと感じたのでね。死ぬほど痛い目に会わせようと思ったのだよ」

ラッセルの説明をレイナはもとより、全員が理解するのをやめる。もう、本当に可哀想な人なんだと割り切るしかない。

「……馬鹿なんだな、お前は」

心の底からレイナが諦めた表情を浮かべた。

「何だと！？」

「お前、子爵だろう？」

「そうだ」

それを誇るように胸を張るラッセル。

だが、

「ここにいるのは子爵に伯爵、そして公爵に王族だぞ。少なくとも

子爵のお前は同率で立場が一番悪い」

「なっ！？」

レイナが言ったことに驚くラッセル。

「ど、どうしてだ！？　貴様らは田舎者だと言っていたじゃないか！！」

修たちを指差すラッセル。

まあ、確かにそう言ったのだが。

「この際、幾つか勘違いしてるようだから教えてあげる」

優斗は嘲るように笑った。

もう面倒だからネタ晴らししてもいいだろう。

ラッセルにしても暗殺者2人にしても。

まともに外に出してやるつもりなど毛頭ない。

「お前らはこの国の『勇者』って知ってる？」

「何ヶ月か前に亡くなったじいさんだろ？」

ひょろ長い男が答える。

「それじゃ、新しい勇者は？」

「条約もある。安全だからこそ勇者を未だに呼んでいないという話がある」

今度は大男が答えた。
優斗はそれを鼻で笑う。

「条約？　安全？　バカだろう、お前ら。いつ、どんなことがあるかもしれないのに『勇者の刻印』を持っているものを召喚しないわけがない」

優斗はちらりと、視線を向ける。

「修」

名前を呼ばれて修は当然のように『勇者の刻印』を浮かび上がらせた。

「こいつが今回、異世界から呼ばれた勇者だ」

ほとんど驚愕と言っていいほどの表情を浮かべた3人に優斗はさらに告げる。

「だから僕らが閉じ込められたんじゃなくてお前らが閉じ込められた。さらに言えば、ここにいるメンバーで異世界出身が修だけだと思うなよ」

ラッセルと暗殺者たちを心理的にどんどん追い詰める。
そして、優斗が何よりも気に食わないのは、

「それにお前はフィオナを将来の妻だとか言ってるけど――」

ほざくな。

「現時点でフィオナは僕の妻だ。そんな彼女がどうやってお前の妻になるんだよ」

圧倒的な挑発。

闘技大会の帰り道、２回目はないと誓ったからこそ。

肩から血が出ていようが、手のひらから血が出ていようが関係ない。

完膚なきまでに潰す。

「そ、そんなもの全て嘘だ！！」

「いいえ、事実です。なんなら王家で保管している書類でも見せてあげますわ」

涼しい顔でアリーが答えた。

「ユウト君とすでに夫婦だということを知らなかったとはいえ、フィオナの親である私の前でそこまでの醜態を晒して、どうしてフィオナを妻にできると思ったのかが知りたいものだ」

「たぶんですけど、単純な彼のことですから死の淵にいたフィオナを助けた、とか暗殺者に狙われていた彼女を救った……とか、くだらないストーリーで妻にできると思ったんじゃないでしょうか」

「ふん、くだらんな」

さらにマルスがラッセルを圧迫させる。

堪らずに視線を背けて暗殺者２人を縋るように見た。

「……勇者がいたとしても、だ。２人がかりで勝負を挑めば勝てる可能性も――」

「ああ、悪いけどここにいる奴ら全員が上級魔法使えるし、簡単には人質にならない。優斗にいたっては俺と同じレベルだ。勇者の俺に一人で勝てないとしたら、どうしたって優斗にも勝てねぇよ。勇者が二人いると考えとけ」

大男の話に途中で割り込む修。

「で、でもさっき怪我させたぜ？」

「あいつはエンジンかかるの遅いからな。尻上がりで調子上げる奴なんだよ。ちなみに俺も優斗も魔物は事実換算でＡランクぐらいだったら余裕で倒せるから。前にあいつが仕掛けたカルマって魔物を瞬殺したのも優斗だぞ」

だから優斗を殺したいと思うなら。

「あいつ殺したいんだったら最初の一撃で仕留めとけ。それが出来なかったお前たちの負けだ」

こうして彼らが勝てない理由を数々列挙してはみたものの。

「けどここまで言ってもあんたらは逃げないんだろ？」

「仕事だ」

大男が憮然と答えた。

「まあ、どっちにしたって許さないし逃がさない。俺らに手を出したんだ。素直に帰れると思うなよ」

修が一歩前へと出る。

「フィオナと僕らが対象らしいから、他の人たちはフィオナを守って。僕と修はこいつらを片付けるから」

「で、でも優斗さんは怪我が……」

肩から血が滴っている。
掌からもだ。

「だいじょうぶ。すぐに終わらせるから」

優斗はそう言って安心させるように笑う。

「貴様らが武器を持っていないというのは僥倖なのだろうな」

「武器？」

ああ、そういえばと修も優斗も思う。
大男が言った意味とは別の意味に捉えて。

「確かに神話魔法をぶっ放して会場を大げさに壊すのは気が引けるな」

「そうだね」

神話魔法とか物騒な単語が出てきて、ひょろ長い男から冷や汗が出る。

「こ、この差は大きいんじゃね？」

とはいえ、威力を温存して戦ってくれるのであれば、まだ勝ち目も――

「そんじゃ武器でも出してみるか」

「だね」

「はっ！？」

なんだその気軽さは。

疑問のよそに優斗と修の前に魔方陣が現れる。

慌てて大男とひょろ長い男が構えた。

だが、遅い。

「グングニル」

「布都御魂」

詠唱は無い。

けれども、一言告げた言葉。

それだけで。

目の前の魔方陣が変化する。

幾重にも折りたたまれていき、形状が浮かび上がってくる。

そして修の前には槍が、優斗の前には刀が体を成していた。

「……マジかよ……」

ひょろ長い男は一歩後ずさる。
経験から分かった。
あれらは別格だ。
自分が持っている武器とは存在からして違う。

「おいおい、勇者ってここまで非常識な存在なのかよ」

「……」

魔方陣が武器と成して物体化するなど聞いたことがない。

「とりあえず、宣告な」

神の槍を携えた修が腕を引いた。

「長々と時間をかけるつもりはない。一瞬で終わらせてやるよ」

「殺しはしない。けれど、死ぬほど痛い目にあえばいい」

それは合図だ。
戦うための宣戦布告。
圧倒的なプレッシャーが暗殺者二人を襲う。
反射的に後方へと下がった。

「「甘い」」

けれど修と優斗にとって、決して安全圏に飛びのかせてはいない。
同時に腕を振るう。

◇　◇

修は引ききった腕を前へ向けて神槍を投げる。

「……」

槍は一直線に大男へと向かう。
避けてる時間はなかった。
大男は鉈を使って槍を弾こうとする。
現実、鉈は槍に当たった。
しかし、

「……っ！」

次の瞬間、どういう訳か槍が肩に突き刺さっていた。
そのまま肩に刺さったまま壁に叩きつけられる。

「……ぐっ！」

衝撃で咳き込んだ。

「あんただったら肩に槍が刺さろうと死なないだろ」

軽い足取りで修が大男に近づいていく。

「……どういうことだ？」

「何が？」

「槍は弾いたはずだ」

「だろうな」

「2本あったのか？」

「いや、違う」

そういうことじゃない。

「この槍は“必ず当たる”んだ。絶対に避けられねぇよ」

神槍グングニル。

かわすことは出来ない。

「……そうか。それほどの武器か」

「ああ。なんつったって勇者が使う武器だからな」

そう言って修は笑った。

「それならば仕方ない」

これほど圧倒的に負けたことはない大男だったが、それでもここまで実力差があると悔しいでもなく、清清しくなった。

◇　◇

布都御魂を横になぎ払う。
雷一閃。
長刀と呼ばれるレベルの刀から雷の斬撃が向かっていく。
それは秒速１５０キロにも達する斬撃。
人の身体では反応するのも難しい。

「……あがっ！」

つまりはひょろ長い男がかわせるわけもない。
そのまま壁まで飛んでいく男を尻目に、優斗はラッセルに視線を向けた。
たとえひょろ長い男が気を失っていなくても修が向こうに歩いていった以上、どうせ何も出来やしない。
それよりもこの男をどう処分するかが優斗にとっては最優先事項だ。
幸いラッセルは自分達のやり取りに腰が抜けたのか、へたり座っている。
布都御魂をラッセルに突きつける。

「ま、待て！　お前は怪我をしてるんだろう。だったらこれを使えば――ッ！」

「いるわけがないだろう」

確かに血は流れているし、かなり痛むのも確かだ。だが万能薬を差し出して終了させようとするその根性がいけ好かない。

切っ先で小瓶を割る。

「それで？　小瓶は無くなったわけだけど？」

「き、貴様！　なんて事をするんだ！」

ここに来ても上から目線を変えないラッセル。

フィオナを取り囲んで守っていたレイナも呆れて優斗に提案をしてきた。

「ユウト、私がこいつを叩き切ってもいいだろうか？」

見ていて本当に不愉快になった。

「それでもいいけど、良識ある義父さんがいるからそれはやらないでおこう」

マルスがいるので、さすがにこれ以上の無理無茶無謀はできない。

逆に言えばいなかったらやっている。

「義父さん。こいつの罪ってどうなります？」

「……正直に言えば、分からない。成金のパリーニュ家のことだから、いくら息子が罪を働こうとも金を積んでどうにかしそうな気がするのも確かだ」

「そうですか」

「……は、ははっ！　そうだ。私は罪に問われない！」

こんな状況なのに心を持ち直したのは凄いといえば凄いのだが、今はどうしてもうざい。

「少し黙ってろ」

ラッセルの足元に刀を突き刺す。

あと数ミリで太ももに当たっていた。

「……っ！　……っ！」

半分、なみだ目になりながらラッセルは頷いた。

「いきなり調子に乗ったりして、死にたいのか？」

優斗の脅しにラッセルが今度は首を横に振った。

「まあ、ブタ箱からすぐに出てきたとしたら、だ。これだけは覚えておけよ」

優斗は先ほど、暗殺者との相対したときでも出さなかった彼本来の殺気を前面に押し出して告げる。

「次に“何か”をしたら、問答無用でお前を殺す。もしフィオナに手を出したら……消し炭すらも残らないと思え」

ラッセルの耳朶に響くは慈悲も何も無く、ただ単純に事実を述べた台詞。
その圧倒的な恐怖にラッセルは……意識を手放した。

◇　　◇

王城の一室で治療を受けての帰り道。
卓也、ココ、クリスには修たちが状況を説明してくれている。
マルスも後始末で忙しい。
けれど優斗は怪我人だったため、フィオナが連れ添って一緒に帰っている。
暗殺者二人とラッセルに話を聞けば、これ以上襲ってくるのはいない、とのことなので2人で帰ることができている。

「腕、痛いですよね」

「そうでもないよ」

魔法での治療が効かないので縫うことになってしまったが、痛み止

めを飲んだりしていれば痛むことはない。

「そういえば遅くなってしまいましたが、助けてくださってありがとうございます」

「当然のことをしたまでだよ」

「それでも、言いたいんです。あそこで助けてもらわなかったら、私は死んでいましたから」

2撃目こそ優斗を狙っていたが、初撃の狙いはフィオナだった。優斗が防がなければ確実に彼女は死んでいたはずだ。

「それなら受け取っておこうかな」

お互い、顔を見合わせて笑う。

「あ～、でもこれでしばらくマリカを抱き上げられない」

「2週間ほどで抜糸だって言ってましたものね」

「右の肩に手のひら。しばらくはフィオナにも迷惑を掛けちゃうな」

「いいんです。存分に迷惑を掛けてください」

「そうは言ってくれても、さすがに気は引けるよ。できるかぎりは自分で頑張ろうと思うけどね」

「駄目ですよ。不用意に頑張ったら怪我が悪化してしまいます」

「でも」

「でも、なんて駄目です」

そう言ってフィオナは少し前に出ると、くるりと振り返った。

「頼ってください。家族なんですから」

ふわりとドレスが翻る。

優しい笑みがそこにあった。

「そ、それに」

少し顔を赤くしてフィオナが続ける。

「わ、私は優斗さんの、つ、つつ、妻ですから、お、夫を支えるのは当然ですっ！」

言い終わった頃には真っ赤になっていた。

それはまるで完熟したトマトみたいに本当に真っ赤で、普段は一緒に顔が赤くなりそうなのに今回に限って優斗は可笑しくなった。

「ゆ、優斗さん！」

「いや、ごめん。すごく嬉しくて、すごく可愛くて、そしたら笑っちゃった」

さっきまでシリアスなことをしていた反動だからだろうか。

いつもは使えない言葉も、するりと出てきた。

「ありがとう、フィオナ」

こんな自分だけれども。
あまり良い所がない自分だけれども。
いつかフィオナと本当に夫婦になれたら、と。
こんなにも可愛い妻がもらえたらどんなに素晴らしいか、と。
実は今、思ってしまいました。

どちらにとっても予想外

久方ぶりに教室に入る8人。
優斗は右手を三角巾で吊るしながらの登校だ。
昨日の事情を知らないクラスメートから「どうしたの?」などと訊かれて、言葉を濁してうまくかわす。
席にかばんを置くとクリスと修が寄ってきた。

「昨日は大変でしたね」

「本当だよ」

一番の重症が自分の怪我だけだというのは上出来だと思う。

「自分は今朝方、相手方の事情も大筋は伺いました」

「今のところ、ラッセルってどうなったの?」

「状況で言えば最悪なのではないでしょうか」

「お金でどうこうなりそうって話は?」

「さすがにあのレベルまでやってしまっては無理な話になっているそうです」

3人は小声で話し込む。

「王族、公爵に対する危険行為。龍神の両親に選ばれた二人と王国の勇者に対しての殺害未遂。一族どころか親族もろとも投獄されても文句は言えません」

「あらためて罪状を並べると大変そう」

「国家転覆でも図ったのではないか、と取り調べている人は勘繰っているそうです」

「暗殺者の二人は？」

「あちらも実行犯と言えばそうなのですが」

少なくとも片方。

「大男に対しては情状酌量の余地はあるそうです」

「どういうことだ？」

「あまり暗殺者っぽくなかったでしょう？」

「確かに」

修と優斗は頷く。

「それもそのはずです。暗殺なんてやったことなかったのですから」

クリスはそのまま話を続ける。

「暗殺対象にしてもフィオナは公爵の不貞の子、ユウトとシュウは田舎者で不良ということで話を通していたらしいですから」

無駄に律儀なためなのか、話を鵜呑みにしてしまったらしい。

「引き受けた以上は依頼を遂行しようと思っていたらしいですけど、最初からそんなことを聞いていたら突っぱねていたって言っているらしいです」

とはいえ、どうしてそんな男が暗殺なんてものを引き受けたのだろうか。

「でも、確認する間もなく請け負ったってことは……金か？」

「そうですね。大男の暗殺者、名をゴウと呼ぶらしいのですが、息子の法外な治療費を支払わなければならなかったらしいので、今回は苦渋の決断として仕事を請け負ったらしいですよ」

「まあ、確かにあんなクソ真面目で大雑把な暗殺者がいてたまるか、って話だ」

あれが本筋の暗殺者というのなら、世界はもっと明るくなっている。

「今のところは牢屋に入れられていますが、今後の判決次第では多少でも罪は軽くなるかもしれません」

「えらく簡単に軽くなるんだね」

「彼が捕まったと知るや幾人かが別人じゃないのかと詰め寄ってきたそうです。少なくとも周りの住民には慕われていましたし、彼の

ような人物が犯罪に手を染めるしかなかった場合は、国家にも責任があるという考えですから」

「王族が危険に晒されても？」

「その王族が統治している国がいけないのですからね」

なんというか面白い考えの国なのだ、と二人は何度も頷く。

そして別の席では。

「ユウトさんも左手一本ではやはり大変ですわよね」

「そうですよ」

フィオナの席にアリーとココが集まっていた。

「ここはフィオナさんが妻として支えてあげるべきでは？」

アリーやココは夫婦だ何だと言っているが、本当のところ結婚どころか婚約もキスも手すらも繋いでいないような清らかな関係だ。

けれども、夫婦設定を受け入れている二人。

しかも互いが互いを憎からず想っているのは傍から見ていても分かる。

そこがまた彼女達の琴線に触れるのだろうか。

恋愛小説みたいで面白い、と。
一応は婚約者というパターンもあるのだが、彼女達の中では基本的に無視されている。

「昨日の帰りに頼ってくださるようには伝えましたが」

「甘いですわ。ユウトさんはそう言っても無理をされるお方。そこを事前に察知してフォローするのが妻としての役目でしょう」

アリーが力説する。
なんとなくフィオナも彼女の説明が正しいような気がしてきた。

「そ、そうですね」

「妻として夫を支える。これが家庭円満の秘訣ですわ」

「そうですよ！」

「はい」

アリーとココがノリノリなので、フィオナも頑張ろうと気を張った。
おそらく、いまだかつてこれほどまでに無駄な王族のカリスマ性はないだろう。

◇　◇

つつなく始業式も終わり、軽い説明を受けて学院を後にした一行は、時折行く大衆食堂へと向かっていた。

「卓也、ちょっとトイレ行ってくるから適当に頼んどいてね」

「わかった」

優斗がトイレに向かった。

卓也は何を頼もうか、と悩んでいたところでココに捕まる。

「なに？」

「ちょっと協力してくださいね」

卓也の耳に手を当てて、ごにょごにょと喋る。

「オッケー。おもしろそうだから乗った」

卓也はそう言って自分の分と優斗の分を頼む。

「卓也、頼んでくれた？」

「もちろん」

「サンキュ、助かる」

優斗が席について雑談に加わると、少しして料理が出てきた。
多種多様な料理が出てくるが、

「御膳定食のお客さんは？」

「あ、こいつです」

「豪勢なのがきた」

「昨日頑張ったご褒美だ」

アリーとココがフィオナに意味ありげな合図を送る。
最近、特にアリーは変な感じで修の影響を受けてきているような気がしてならない。
言葉のチョイスだったり今みたいなことだったりと、良い意味で王族っぽくなくなってきている。
とはいえ、料理はお箸を使うものが出てきた。
確かに左手でお箸を使って食事をするのも大変だろうとフィオナも思う。
一度深呼吸をしてから、切り出す。

「あ、あの、優斗さん」

よろしければ、食べるのを手伝いましょうか。
と、伝えようと思ったのだが。
隣を見れば、

「……ん？　フィオナ、どうしたの？」

左手で器用にお箸を使ってオカズを口にしている優斗がいた。

「い、いえ、その……お箸使うの、お上手ですね」

「前にこいつらと『利き腕と逆の手で何個の豆を隣の皿に移せるか』っていう勝負をしてさ。負けたのが悔しくて必死に精進したんだよね。おかげで集中すれば左手でも問題なくお箸を使えるようになったんだよ」

相変わらずの努力者というかなんというか。

こんな無駄なことにもそんなことをしているとは思わなかった。

フィオナは優斗の役に立てなかったことにシュン、とするしアリーとココは異世界3人をブスッとした視線で睨む。

優斗は食事を取るのに集中しているし、修は視線に気付かない。

卓也とクリスは苦笑して、和泉は我関せずとして黙々と食事をしている。

まあ、なんとも可笑しな食事になっているものだと、苦笑いしている二人はしみじみと思った。

◇　◇

その後も色々なところに回って遊んでいたのだが、優斗も無駄に能力が高いのでフィオナの手を煩わせるようなことはなかった。

その度にフィオナのテンションが少しずつ落ちていく。
そして解散、となった頃には、

「……」

驚くくらいローテンションになっていた。

「あ、あの、フィオナ？」

自宅までの帰り道。
どうしてフィオナのテンションが低いのかが優斗には分からない。
が、このままだとマリカも怯えそうなので、とりあえず会話をしてみる。

「どうしたの？　体調でも悪い？」

「……いえ」

「楽しくなかった？」

「……いえ、楽しかったです」

とは言うものの。

――こ、言葉と口調が合ってない。

本当にシュン、としている。
これではもう埒が明かないと思い、優斗は直球で尋ねる。

「あの、何が原因なの？」

優斗が真摯に問いかける。
フィオナは俯いていた顔をあげ、ちらりと優斗を見る。
「昨日、言いました。優斗さんを支えると」
「うん」
「でも優斗さんは一人で何でも出来るから」
「……はい？」
そこからどうして今の現状に繋がるのかが優斗には分からない。
「お昼のときも食べさせてあげようと思ったのですが、優斗さんは難なくこなしてしまいますし」
「それは、まあ……できることだったし」
「別に私が支えなくてもいいんじゃないかと思ってしまって」
そしてまたフィオナは下を見て俯く。
優斗はとりあえず、彼女の話した内容を頭の中でまとめる。
――えっと、つまりフィオナは……あれなのかな。
自分の役に立つことができなかったから、落ち込んでいる。
――僕のせいで落ち込んでるのか？

予想外の理由だったとはいえ、自分のせいでフィオナが落ち込んでいるのはどうにかしたい。

――でも、どうやって喜ばせる？

おそらく優斗の役に立ってこそフィオナは喜ぶ。
テンションも上がる。
けれども帰ってる途中で手助けを必要とする動きなんてしない。
ということはつまり、現在している動きの中で無理やりフィオナの手を借りようとしなければならない。
現在していることと言えば、

――歩く……だけだし。

ビックリするぐらいに無理な気がしてきた。
と、ここで親子連れとすれ違う。
マリカよりも少し大きな子供が転ばないように母親と手を繋いでいた。

――ん？　転ばないように……。

ふと、気付く。
自分の今の状態で転んだら、確かにまずい。
怪我が悪化する恐れがある。
現在の行動の中で最大のリスクと言えばそれだ。

――じゃあ、それを回避するには。

顔が赤くなる。
が、今の自分にはこれぐらいしか思いつかない。

家に着くまでの時間の問題もある。

――やるしかない。

気合と根性を入れて口にした。

「あの、フィオナ」

「……はい？」

「じ、実はさ、遊んでたから、少し疲れたんだよね」

「……はい」

「それで、ね。左右のバランスが違うからなのか、さっきからうっかり躓いて転びそうになってるんだよ」

まだ優斗の真意は伝わらないのか、フィオナはしょんぼりとしている。

「実際に倒れたら怪我が悪化するだろうし、そうならないためにも誰かが支えてくれると、その……助かるんだけど」

「……はい」

反射的に頷く。

が、ここでフィオナもようやく認識したのかビクッとしながら優斗を見た。

「ゆ、優斗さん。今、なんと仰いました？」

自分の聞いたことが間違いないのか、フィオナが確認する。

「だから誰かが支えてくれると、えっと……助かるなと思って」

優斗が左手で頬をかく。

けれどフィオナは嬉しさのあまり、その左手を取って右腕を絡ませた。

「えっ！？　ちょ、フィオナ！？」

予想外の事態にあせる。

優斗が提示したのは、あくまで手を繋ぐことであって腕を組むまでは予測していない。

逆にフィオナから言わせてみれば、優斗を支えるのでしっかりと支えるためには腕をしっかりと持ったほうがいい、という考えで腕を組んだ。

しかもそれまでが落ち込んでいたから、ハイテンションで腕を組むことを躊躇わせなかった。

少なくとも1分ほどは照れずにいるだろう。

「これで優斗さんが倒れそうになっても心配はいりません」

自信満々に言うフィオナ。

だが、優斗としては左腕に柔らかいものやら何やらで気が気でない。

「ふふっ、ようやく優斗さんの役に立てました」

ニコニコと。

それはもう眩しいばかりの笑顔になるフィオナ。

もちろん、あと３０、４０秒もすれば自分がやっていることに気付いて顔を真っ赤にさせること頃合。
けれどもフィオナは顔を赤くしながらも決して組んだ腕を解くことはせず、そのまま家まで帰った。
当然、その姿を見たエリスに散々からかわれることになるのだけれども。
それはまた、別の話。

「……ふむ」

優斗は手のひらを何度か握り締めて、肩を回す。
痛みはない。
何かが張る感覚もない。

「うん、問題ないですね」

「ありがとうございました」

頭を下げて病院を出る。
何かすることもなかったのでそのままトラスティ家へと帰る。
広間に足を運ぶとエリスとマリカがそこにいた。

「もう大丈夫なのね？」

「ええ。完全復活です」

問題ないとアピールすると、マリカが遊んでいた積み木から目を離して優斗を見ていた。

「マリカ、おいで」

優斗が呼ぶと意気揚々とマリカが駆け寄ってきた。

「ぱ～ぱ！」

飛び込んできたマリカを優斗はしっかりと抱き上げる。
今までより重いと感じたのはマリカが少しばかり成長したことと、優斗の右腕の筋力が落ちたこともあるのだろう。

「フィオナはもう出たんですか？」

「ええ。最後までマリカのことを気にしてたけど」

「相変わらずですね」

苦笑して、マリカを抱いたまま椅子に座る。
フィオナは今日、平民で初めてできた女の子の友人と一緒に遊びに行っていた。

「楽しんでくれればそれでいいんだけど」

「そうですね」

元々はココとの繋がりからで出会って、フィオナ、ココ、その女の子、そして卓也が護衛として一緒に買い物をしているはずだ。
どうしてそうなったのかと言えば、ラッセルが金でもどうしようもないことになったからだ。
つまりラッセルがいなくなってからというもの、平民を見下す貴族グループが衰退を辿っていた。
そういう奴らは平民が貴族と気軽に話そうとしていても口出しをしていたが、ラッセルがいなくなったことによってそれが出来なくなった。
ようはラッセルという傍若無人な矢面に立つ人物がいなくなったから、うかつに自分が槍玉に挙げられてはいけない、ということだろう。

「ユウトはどうするの？」

「マリカの面倒でも見てますよ」

「あら、それじゃあ暇なのね？」

「……なにを頼む気です？」

「クッキーを作りすぎちゃったのよ。だからマルスに届けてほしいなって」

テーブルの上に山ほどのクッキーがあった。

小さい袋詰めにされてあって、だいたい１５袋ぐらいはありそうだ。

「多すぎません？」

「まあ、マルスに渡せばどうにかなるでしょう」

「適当ですね」

苦笑しながら優斗は頷いた。

「マリカと一緒に行ってきますよ」

大きな紙袋を片手にマリカと一緒にトラスティ家の門をくぐる。
バルトが二人の姿に気付いた。

「おや、ユウトさん。お出かけですか？」

「はい。マルスさんにお届けものをしてきます」

「マリカ様もご一緒に？」

「ええ」

と、ここで抱いているマリカが紙袋に手を伸ばした。

「どうしたの？」

「あ～ぅ」

そのままぐいぐいと手を伸ばしていくので、紙袋を近づけるとマリカがそこからクッキー袋を一つ取り出した。
ここでやっとマリカがどうしたいのかに優斗が気付く。

「あい」

マリカはクッキー袋をバルトに向ける。

「……マリカ様？」

「バルトさんにマリカからどうぞ、ですって」

バルトがマジマジと見ると、袋がクッキーだと知って顔が綻ぶ。

「これはこれは。ありがとうございます」

「あうっ！」

王城まで辿り着く。
かなりの頻度で行っているから、門番と軽く挨拶程度で中に入れる。

「マルスさんって確か、国防大臣だからこっちの方で良かったはず」

とはいえ、そこまで詳しく知っているわけでもない。
前に一度くらい聞いたことがある場所を頼りに向かう。

「ちゃんと聞いておけばよかったな」

フラフラと城内を歩いていくと、前方に幾人も引き連れた人物が現れた。

「あ、王様だ」

さっと隅に避けて頭を下げる。
とはいえ、さすがに赤ん坊を引き連れて城内にいたらさすがに王様の目にも留まる。
それがマリカとなればさらに、だ。

「おお、ユウトではないか」

思わず名前を呼ばれたので、頭を下げたまま優斗は返事をした。

「ご無沙汰しております」

「面を上げよ。ここにいる者たちはお前の素性を知っている。マリカのこともな」

王様がそう言うので、優斗は顔を上げた。

「マリカも元気か？」

「この上なく」

「そうか。それはよかった」

と、ここでマリカが動く。

先ほどのバルトの時と同様に紙袋に手を伸ばした。

「マ、マリカ！」

止めようとするが遅い。

マリカが紙袋からクッキー袋を取り出して王様に突き出す。

「これは？」

興味津々に王様が袋を見つめる。

観念して優斗は説明をした。

「……クッキーです。エリス様が作りすぎたため、マルス様に渡すように頼まれたものなのですが……」

そして罰が悪そうに伝える。

「どうやらマリカは王様にも差し上げたいようで……」

おそらく、髭のおじさんとして覚えていたのだろう。
王様は柔和な表情を浮かべる。

「おお、これはありがとう」

マリカから袋を受け取ると、中からクッキーを一つ食べる。
王様なのだからもうちょっと危機感を持て、とも思ったがマリカが直接渡しているのだから問題ないとも思ったのだろうか。

「ふむ、美味い。エリスにも感謝の意を述べておこう」

「ありがとうございます。エリス様も喜ばれます」

「ああ、あとアリシアにも顔を出してくれると助かる。先ほどまで公務であったから今は暇をしているだろう」

「わかりました」

「では、公務が残っているのでな」

もう一つクッキーを取り出しながら王様が去っていく。
ふうっ、と息をはく。

「マリカ。あの人は一番偉い人なんだから、おいそれとクッキー渡しちゃ駄目だよ」

「あい？」

マリカが首をかしげた。

この上なく可愛らしいが、意味がわかってないのは明白だった。

「……ま、いいか」

問題なかったことだし。

◇　◇

続いてアリーの部屋の前に辿り着く。

従士にお目通りを願うと、簡単に通された。

お一人では珍しいですねと言われ、マリカも一緒ですよと言ったら苦笑された。

「ユウトさん、いらっしゃってたのですね」

「ちょっと用事があってね。それでさっき王様からアリーが暇してるって聞いたから寄ってみた」

「ありがとうございます。公務が終わってどうしようかと思っていたところでしたので」

メイドがテキパキと動いてお茶の準備が終わる。

「……がっつりと話す気満々だね」

「暇ですから」

「そういうとこ、本当に修の影響を受けたって思うよ」

アリーが席に着いたので優斗も座ろうと思ったが、席につく前にマリカがしたいことが分かったので、紙袋からクッキーの袋を取ってマリカに持たせる。

そしてアリーの前まで歩いていく。

「あら、どうしたのですか？」

「あいっ！」

マリカが元気よく両手を突き出した。

「えっと……クッキーですか？」

「エリスさんからのクッキー。作りすぎたからってマルスさんに処分頼む途中でね。ちょうどいいからアリーにもおすそ分け」

「ありがとうございます。マリカちゃんもありがとう」

アリーがマリカの頭を撫でるとマリカが満足そうにした。

そのあと、ついでに優斗も処理しようと思って2袋ほど追加でテーブルの上に出した。

「フィオナさんとココさんは今頃、お友達と買い物中ですものね」

クッキーをかじりながら羨ましそうに呟いた。

「羨ましいの？」

「……まあ、一緒にいるのが平民の子ですから、王族のわたくしが加わったら遠慮しそうな気がしますので気が引けますけれど、羨ましいことには変わりありませんわ」

「そうかもしれないね」

貴族はギリギリ大丈夫かもしれないが、王族は恐れ多いと思ってる人は多いだろう。

「シュウ様も今日はイズミさんとクリスさんと一緒に遊んでいるそうですし」

「クリスの家で何かやってるって言ってたな。クリスの胃に穴が開かなければいいけど」

「ふふっ、それもそうですわね」

あの二人と一緒に動いて真面目にどうこう、ということは絶対にないだろう。

「ユウトさんがいなかったら今日は暇で死んでましたわ」

「まあ、ちょうど良かったってことだね」

とはいえ自分もマルスにクッキーを渡したら暇だ。

マリカとどこかに行くにしても、アリーが一緒でも問題はないはずだ。

「それじゃ、一息ついたら一緒に町にでも行く？」

優斗の提案に目をぱちくりさせる。

「いいのですか？」

「マルスさんにクッキーを届けたら暇だしね。暇人は暇人同士、遊びに行ってもだいじょうぶでしょ」

優斗が茶目っ気たっぷりに言うと、アリーが小さく笑った。

「それもそうですわね」

◇　◇

アリーが着替えている間にマルスのところへと辿り着く。
取り次げばすぐに会えることになった。

「おや、ユウト君にマリカじゃないか。どうした？」

「マルスさんにプレゼントです」

マルスは義父と呼ばれなかったことに少し落ち込むが、ここが王城だということで気を取り直す。
優斗はマリカに一袋だけ渡して、あとはテーブルの上に置く。

「エリスさんからマルスさんにクッキーの差し入れです。どうにか処分してくれと言っていましたよ」

「あいっ！」

そして今まで通り、持ってるクッキー袋をマリカがマルスに手渡す。

「おおっ、ありがとう」

孫に直接手渡されて表情が緩むマルス。

「わざわざすまないね」

「いえ、暇でしたから」

「このまま帰るのかい？」

「先ほどアリーと会ったので、そのまま彼女と一緒に遊びにいこうと思ってます」

「そうか。くれぐれも粗相のないように」

「大丈夫ですよ。アリーの許容範囲を超えるような粗相なんて僕にはできませんから」

修や和泉にも耐えれる彼女だ。
優斗がどんなことをやったところで粗相のうちに入らないだろう。
マルスもそれを理解してか、笑った。

「それもそうだな」

そしてマルスの執務室から出るとアリーが待っていた。
そのまま市街へと出る。

「なんていうか珍しい組み合わせだね」

「そうですわね。いつもはほとんど家庭教師ペアですから」

「あうっ」

その中でマリカが優斗の腕の中で主張した。

「ああ、ごめんごめん。マリカも一緒だもんね」

だからペア、というのはおかしい。

「マリカちゃんって抱いてみたりするとやっぱり重みがあるものでしょうか？」

「抱いたことなかったっけ？」

「ありませんわ。あまり赤ん坊と接する機会もありませんし」

「じゃあ抱いてみる？」

ひょい、とマリカをアリーに向ける。
彼女ならマリカも嫌がりはしないだろう。

「えっ、いいのですか？」

「ものは試しって言うから。とりあえず抱いてみたらいいよ」

マリカを一度下ろして、アリーの側に預ける。
アリーが恐る恐る、といった感じで抱き上げた。

「あっ、思ったより重いですわね」

「見た目年齢で1歳ちょっとだし、会ったときより何キロかは増えてると思う」

マリカはマリカでアリーに抱っこされてきゃっきゃっと喜んでいる。

「しばらく抱っこしてあげて。マリカ楽しそうだから」

「そうですわね」

◇　　◇

「あれ？　あれってユウトくんじゃない？」

平民の女の子――リーネがふと前を見ると馴染みのクラスメートの姿があった。
アイスクリーム屋でお金を支払っている。
釣られてフィオナ、ココ、卓也が視線をアイスクリーム屋に向けると、確かにそこには優斗の姿があった。
優斗はそんな４人に気付かず近くにあるベンチに向かった。
カップを２つ持っていて、片方をベンチでマリカを抱いているアリーに手渡す。

「もう一人はアリシア様よね？」

「そうです」

「だろうな」

「抱いてる赤ん坊ってアリシア様の子供……って、そんなわけないか。そうだったら一大ニュースになってるもんね」

なんとなく、隠れるように優斗たちを監視する４人。

「なんか食べ比べしてるな」

「時折、赤ん坊にも食べさせてるね」

「……」

傍目から見ても仲良さそうにアイスを食べていた。

「赤ちゃんが何者かはわかんないけど、あの２人ってもしかして“そういう関係”なの？」

◇　◇

「ユウトさん、気付いてます？」

「あれに気付くなっていうの無理じゃない？」

「ですわね」

４人組が建物の影から自分達を覗いている。

異様な光景と異様なプレッシャーとが相まっているので、見られて

いる2人には簡単に気付かれる。

「完全な姿を現してないけど、あれってフィオナ達だよね？」

「おそらくそうですわ。何をしているのやら」

紙カップを潰してゴミ箱に捨てる。

「問い詰めます？」

「別にいいでしょ。害はないし」

4人組ということは平民の女の子もいるだろう。

だったら、無理に王族が向かってギクシャクさせても可哀想だ。

「次はどこ行く？」

「わたくし、平民の方々が行く小物屋にはまだ行ったことがありませんから行ってみたいですわ」

「りょうかい、じゃあ行ってみようか」

優斗はマリカをアリーから預かって歩き始めた。

◇　◇

「移動しましたね」
「追うわよ」
「マジか？」
「当然でしょ。こんなに面白いことないじゃない」
「……」
リーネは乗り気だ。
ココもそこそこ。
卓也は無言を貫いているフィオナが怖くて、乗り気になれない。

◇　◇

「あれほどヘタクソな尾行もないと思う」
「もしかして見つかるのを待ってるとかじゃ？」
「いや、さすがにないって」

何をしたいのか分からない尾行連中を引き連れながら目的の場所へとたどり着く。
小物専門の雑貨屋、といったところか。
ガラス製品からネックレス、ブレスレットまで安物の光物は揃っていた。
しばらく2人で物色していると店員が話しかけてきた。

「彼女へのプレゼントをお探しでしょうか？」

店内には優斗たちしかいない。
ということは、この言葉は自分達2人に向けられたものだろう。
マリカを抱いているのも余計にそう思わせたのかもしれない。

「あら、そう見えます？」

アリーが調子に乗って優斗の開いている左腕にそっと右腕を絡ませようとする。
長年の社交の経験からか、流れるような動きだった。

「おいこら、アリー」

ペシッとチョップをかます。

「“これ”は従妹なんで。それで“これ”には妻へ送るプレゼントを一緒に見繕ってもらっているんです」

さすがに王族がここにいるはずないだろうと思っているのか、アリーが王女だと気付いてはいない店員。
優斗が従妹だと言い訳して、普通に納得した。

「そうですか。それでは何かありましたら、お声をお掛けください」

「ありがとうございます」

一礼して店員が去っていく。

「わたくしを“これ”呼ばわりするなんて」

「悪ノリするアリーが悪い」

軽く額を触りながらイタズラしてやった、といった表情をするアリー。

「けれどよくもまあ、さらっと嘘がつけますわね」

「それができる性格だから仕方ない。それにしても、アリーも出会った頃は清純だったのに、どうしてイタズラとかするようになってしまったんだろうね？」

顔を見合わせて、笑う。

「僕らのせいか」

「そうですわ」

小さく笑い声をあげる。

「それで？　奥様に何か買ってあげるのですか、わたくしの従兄様？」

また悪戯めいた表情で訊いてくるアリー。

「何か買うことにしましょうかね。僕の従妹が僕の大事な奥様に何が合うか見繕ってくれるそうだから」

◇　◇

店内の2人は仲良さげに回っている。
先ほど店員がやってきた時も2人で笑い合っていた。

「むぅ、やはりアリシア様はユウトくんとデキてたのか」

「いやいや、それはないから！」

慌てて卓也が否定した。

「そうなの？」

「いろいろと事情はあるが、とりあえず優斗とアリーがくっ付くことだけはない！」

「じゃあ、どうして2人っきりで？」

「……」

なんとなくフィオナからの無言の圧力が強まった気がする。
慌てて卓也が弁明した。

「それは……ほら！　アリーは友達少ないし、たまたま予定が合ったのが優斗だったんだよ」

「確かにそう言われると納得せざるを得ないわ。アリシア様と対等に接してるのって貴方たちぐらいだものね」

普通は気後れするものだ。

「というか、別にアリーは王族とかどうとか気にしないぞ」

「向こうはそうでもこっちは気にするものよ」

「まあ、無理にとは言わないが」

◇　◇

買うものを買ってお店を出る。

「気付いたらいなくなってしまいましたね」

「会計してるころには距離を開けたみたい」

まだ側にいるかもしれないが、別にどうということはない。
優斗は二つの袋をアリーに見せる。

「片方はフィオナさんへのプレゼントって分かるんですが、もう一つは何です？」

「こっち？」

現在、優斗の手には2つの袋が存在している。
片方はフィオナへのプレゼントなのは選んだアリー自身が知っているのだが、もう片方はいつの間にか優斗が買っていた。

「こっちはアリーへのプレゼント」

「えっ？」

素で驚きの声を上げるアリーに優斗は袋を渡す。

「見てもいいですか？」

「どうぞ」

アリーが袋の中を確認する。

「サイコロ？」

正方形の物体が九分割されているものが入っていた。

「こっちでの名称は分からないけど、僕らが知ってる名前としてはルービックキューブって言うんだ。修がこれ得意だから、教えてもらうといいよ」

再度、アリーが驚きを表す。

いつも思うが優斗はどうして、こうやって気が回るのだろうか。

さりげなくフォローだってするし、今みたいに修との切っ掛けを作ってくれる。

「……本当、シュウ様がいなかったら、ユウトさんに惚れてしまっていたかもしれませんわね」

「残念ながら僕は奥様に操を立ててるよ？」

茶目っ気出して言葉を返すと、アリーも笑って、

「でも王族の夫にするには身長と顔が少し足りませんわ」

「ちょっと待て」

冗談を言い合う。

「ユウトさんは本当によくわたくし達のことを考えてくれますわね」

「まあ、大切な仲間だからね」

しかも大半は同年代とのコミュニケーション不足だから、できる限りのことはしたいと思うのだ。

アリーをしっかりと王城まで帰すと、そのまま帰途に着く。
まだ6時にもなっていないが、マリカは腕の中でぐっすりだ。

「ただいま戻りました」

「お帰り、ユウト」

広間に行くとエリスが迎えてくれた。
優斗はマリカを広間にある小さな布団に寝かせる。

「フィオナは？」

「閉じこもってるわよ」

平然と答えるエリスに優斗は軽く頭を抱える。

「……うわぁ」

「何かあったの？」

「何かあったわけではないんですが、何となくはわかります」

おそらくはアリーと出かけていたのが何かの原因だ。

「夕ご飯までには機嫌を直しておきなさいよ」

「わかってます」

とりあえず優斗はフィオナの部屋に向かう。
彼女が閉じこもる、ということは怒っているのか落ち込んでいるのか。
なんとなく怪我をした次の日のことを思い出した。
――最近、フィオナは情緒不安定になりやすいなぁ。
と、腕を組んだ日のことを思い出しているうちにフィオナの部屋の前にたどり着く。
コンコン、とノックした。
「フィオナ？」
「……」
「フィオナ、聞こえてる？」
「聞こえてません」
「聞こえてるじゃないか」
こういう妙なところで律儀なのが本当にフィオナらしい。
「どうして尾行してたフィオナが怒ってるのさ」
「……」
「見てたから分かると思うけど、アリーと遊んでただけだよ？」
「……知ってます」

じゃあ、なんで閉じこもってる。

「もしかしてアリーと一緒に出かけたこと怒ってる？」

「怒ってません！」

いや、怒ってるし。

「フィオナ。言ってくれないと何がいけないのか分からないよ」

「……」

まただんまりか、と優斗が思ったときだ。

「……嫌だったんです」

ぽつり、とフィオナが答えてくれた。

「アリーさんと優斗さんが二人で遊んでいるのを見るのが、凄く嫌でした」

なぜか心がキリキリと痛んだ。

「まーちゃんも一緒にいて、なんというか……私の居場所を取られた気がしました」

「誤解だよ」

「あと、何かプレゼントをあげてるのを見たら、なんかもうその場

所にいたくなくなってしまって……」

そんなフィオナの様子を察して、卓也がその場で解散させた。
フィオナはそのまま帰ってきて部屋に篭って、この現状が出来上がったということだ。

「優斗さんとアリーさんが友達同士で遊びに来てるんだって頭では理解しているんですが、感情が納得いかなくて……」

「……そっか」

優斗の中に不意に嬉しさがこみ上げた。
今日の出来事をそんな風に思ってくれているとは知らなくて。
驚いた反面、嬉しくなった。

「ドア、開けてくれないかな」

優しい声音で再度、話しかける。
数秒、間が開いたが鍵の解除する音が聞こえてドアがゆっくりと開く。
優斗の目の前にはうつむいているフィオナの姿が見える。
3週間前、自分の役に立てなくてしょんぼりしていた姿にやっぱり重なって見えた。

「手、借りるね」

優斗はフィオナの右手を取ると、その上に小さなアクセサリーを乗せた。

「はい、プレゼント」

「……ネックレス？」

銀色のチェーンに繋がれた、ハート型のネックレス。

「フィオナへのプレゼントだよ」

「……なんで……？」

「今までフィオナにプレゼント、したことなかったし。アリーと小物屋に入ったとき、ちょうど話題になったからさ」

まあ、貴族にあげるものにしては大した値段のものじゃない。

「安物で申し訳ないんだけどね」

と、ここで先のアリーとの一件に関して弁明しておく。

「ちなみに先に断っておくけど、アリーにプレゼントしたのはおもちゃだから。修の気を引けるようにってあげたんだよ」

つまり自分にとって女性へのプレゼントというものは。

「だから、えっと……女性モノのプレゼントをしたのはフィオナが初めてだから」

別に着けなくてもいいから。

「貰うだけ貰ってくれると嬉しいかな」

照れ隠しに頬を掻きながら伝える。
どうだろう、とフィオナを見つめていると、彼女の瞳から涙が溢れてきた。

「え？　いや、なんで泣くの！？」

突然すぎてパニックになる。
今の流れで泣く場面はなかったはずだ。
フィオナは泣いたまま優斗の胸に飛び込んだ。
そしてぎゅっと抱きつく。

「あの……どうしたの？」

涙を流しながら抱きつかれるのにもデジャヴを感じながら、優斗は背中に左手を回して右手で優しくフィオナをあやすように頭を撫でる。

「嬉しすぎて涙が出てきました」

「……なら、よかった」

ほっと優斗は安心する。
少し抱きしめる力を強くして、何度も右手がフィオナの頭を往復する。
と、ここで時間が掛かっていたためにエリスが様子を見に来た。

「ユウト、引きこもりは手強い？」

気楽に尋ねたが、目の前で繰り広げられているのは義息子と娘の抱擁シーン。

「あらあら、ごめんなさいね」

「うわっ――！」

優斗はパッと手を離したが、フィオナは抱きついたまま離れない。

「……あの、フィオナ？」

「もうちょっと、このままいさせてください」

爆弾発言にエリスは歓喜の表情、優斗は驚嘆の表情を浮かべる。

「ユウト、あとでまた声を掛けるから」

スキップでもしそうな勢いでエリスが広間に戻っていく。

優斗はどうしようと思いながらも、もうどうしようもないところまで来てしまっているのだから、しばらくフィオナの好きなようにさせようと甘んじて抱きしめられていた。

決して一方通行ではなく

クラスの中フィオナたちが浮かなくなった。
というのは様々な要因が思い浮かぶ。
ラッセルのこと然り、フィオナたちが優斗たちと絡むようになってからとっつきやすくなった、ということもある。
特にフィオナは顕著だろう。
ということは、だ。
彼女、そして彼らの魅力に参る方々も出てくるわけで。

「申し訳ございません」

フィオナが頭を下げた。
目の前にいる男子生徒はがっくりとうなだれているが、フィオナはその横をするりと抜けて教室まで戻る。
いささか疲れた様子で優斗の隣に座る。

「フィオナはこれで今月、何人目だ？」

「5人目じゃないか？」

「すさまじい勢いで撃墜されてくな」

告白して玉砕した男子生徒に合掌する男子メンバー。

「ちなみに他だとクリスが４人、修も４人、ココが３人だね」

優斗たちのグループに告白して玉砕した人数、今月で累計１６人である。

「イケメンと美女はいいよな。顔がいいから告白されて」

羨ましそうに卓也が言った。

「自分は年末に結婚をするので、非常に困っているのですが」

「興味ねえ」

「わたしは心もちゃんと見てくれないと付き合う気にはなれないです」

「他人に何を言われたところでどうでもいいです」

四者四様だが、フィオナは特に酷い言い様だ。

「それでもいいじゃん。されてないよりいいって」

とりあえず羨ましい。

「わたくしなんて告白してくれる男子はいませんし」

残念そうにアリーが言う。

「アリーは確かに美人だけど、王族はチャレンジャーすぎるんじゃね？」

「それでもわたくしだって女の子なのですから、告白されることに憧れたりはしますわ」

乙女の夢というものだろう。

「それじゃデートもしたことないのか？」

和泉の質問に少し考えて、姫にはあるまじくニヤリと笑った。

「いえ、デートならこのあいだ、ユウトさんとありますわ」

からかうようなアリーにほとんどは反応しなかったが、一人だけ思うように反応した。

「や、やっぱりデートだったんですか！？」

悲しそうな表情を浮かべるフィオナ。

「……違うって」

対して優斗は疲れた表情を浮かべると、アリーに近づく。

「アリーは最近、僕に対して調子乗りすぎじゃない？」

ニッコリと笑いながら優斗は両方の拳をアリーの側頭部に当てると、そのままぐりぐりと締め付ける。

「い、イタタタ、痛いです！」

前回、一緒に遊んでからというもの、アリーの優斗に対する気軽さがさらに増している。

「だ、だってユウトさんって気楽に話せるんですもの」

頭を締め付けられながらアリーが答えた。
ココもそれに同意する。

「ああ、それはあります」

クリスも納得し、

「そう考えるとユウトだって良い物件だと思いますが、どうして告白されないのでしょうね？」

「そこらへんは上手く立ち回ってるから」

上手く入り過ぎないように考えている。
仮に上手く立ち回っていなくても、告白されるかどうかは全くの別問題だが。

「けれど、ちゃんと考えたらユウトさんてスペック高いですよね」

しみじみとココが言った。
クリスが優斗の情報を列挙してみる。

「異世界出身で子爵で神話クラスの魔法――しかも独自詠唱で使えて大精霊も召喚できる。さらに龍神の父親で柔和で温和で誰に対しても礼儀正しい」

ふと全員が無言になった。
ぐりぐり攻撃から開放されたアリーが軽く涙目になりながら改めて感想を言う。

「……案外シャレになってませんわね」

「スペックを知られたら引く手数多でしょうね」

大半のことが隠されているとはいえ、知られたら大変なことになるのは間違いない。

「特にオリジナルの詠唱で神話クラスの魔法を使えるなんて御伽噺レベルの存在ですから。国内どころか国外からの有名貴族、もしくは王族から縁談が来てもおかしくないレベルですわ」

「へぇ、そうなんだ」

まるで他人事のように優斗が返した。

「実際にそういう話になればかなりの出世になるかと思いますが、落ち着いておりますね」

「別に国外からの縁談が来たってどうこうしようと思わないし」

そういうのは自分の手にあまりそうな気がする。
というかそんなどうでもいい話なのに、隣を見るのが怖い。

「……」

隣から感じるプレッシャーをとにかくどうにかしたい。

話を逸らすように優斗は卓也を見た。

「そ、それを言うなら国外縁談で上手くいきそうな人を選ぶべきだと思うよ、僕は」

「例えば？」

「卓也とかね」

「オレ？」

「修はリライトの勇者様だから国外に婿入りする縁談は論外、和泉はうっかり変なものでも発明して他国に渡したりしたらガチで国際問題になりかねない。僕もそういうのは無理だし、残る人物を考えたら卓也が一番の適任だよ」

少なくとも異世界組で考えたら卓也がベストだ。

「でもタクヤさんって周りに比べると少々、見劣りしません？」

ココが辛らつに、まるで事実かのように言う。

けれど優斗は否定した。

「たぶんね、それは見間違いだよ」

基準点が自分達だから低いと思うのだ。

「強さだって僕と修から比べたら下に見られるけど、普通に比べたら圧倒的な実力だよ。それに守り関係に関しては卓也のほうが充実してる」

もともと攻撃に向いている性格でもない。

「あとなんだかんだで世話焼きだし、奥さんになる人は羨ましいよ」

「そうだな。俺らの世話役だからな」

「卓也がいなければ誰が俺らを世話するというのだ」

「……喜んでいいのか悩むな」

異世界組が最後にした流れるような会話に、クスクスと笑い声が漏れる。

◇　◇

優斗とフィオナはマリカの世話があるからと先に帰る。

残った面子はまだ話していた。

「けれど皆さんもあと数年もしたら、こういう話は冗談で済ませられないくなりますからね」

結婚一番乗り予定のクリスが諭すように言った。

「ユウトさんとフィオナさんは上手くいってくれるといいんですけど」

「上手くいくだろ、あいつらなら」

「ユウトさんはいいとしても、フィオナさんはユウトさんじゃないと駄目でしょうし」

「ん～、それってどっちかと言うと優斗のほうだろ」

ココの感想にまず、卓也が異を唱えた。

「どういうことです？」

見ていると明らかにフィオナは優斗じゃないと駄目に感じる。
逆に優斗はフィオナじゃなくても問題はなさそうに思える。

「優斗なんだけどな、あいつが今まであんなに女の子を近づけるのってなかったんだよ」

知り合ってから一度もあいつの『テリトリー』と呼べる場所に入った女の子はいない。

「なぜでしょう？」

クリスの問いに、次いで修が話し始めた。

「優斗は俺ら仲間に対して兄貴っぽい感じするだろ？」

「そうですね」

そのように感じることは多々ある。

「前に言ったことあるけど、部活っていう集まりがあるだろ。そこでもある程度は面倒が良くてな、男女分け隔てなく同じように面倒を見てたんだ」

あくまである程度、だ。

自分達を相手にするほどではない。

「けど女の子に対してはある種の壁みたいなのを作る。あくまで良い人止まりでいるように」

自分も他人も恋愛感情を抱かないようにさせている。

それがさっき、優斗の言った『上手く立ち回っている』ということだ。

もちろん、それが悪いとは言わない。

「色々と理由もあるしな」

「聞いても大丈夫なのですか？」

アリーが尋ねると修たちは頷いた。

「前に優斗の境遇の話はしただろうけど、あいつの両親って酷かった。詳しく話に聞くだけでもシャレになってない。だからなんだろうけど、優斗は常々言ってたんだ。『自分は愛情のある家庭』を作るって」

絶対に親のようにはならない、と。

「だから……なんだろうな。あいつは絶対的な純愛主義者なんだよ。初恋を実らせて結婚する、なんて馬鹿なことを本気で実行しようとしてる」

だからこその壁だった。

「普通、そんな奴はそうそういないだろ？　でも優斗はそうなんだ」

そのために自分を律していた。

「でも、そんなあいつの予防線をフィオナが簡単に突破するんだよな」

いくら自分達もけしかけたとはいえ、あそこまで簡単に突破するとは思っていなかった。

「一緒にいることも多かったし、フィオナは純粋だからってのもある。それに容姿だって優斗の好みにストライクだってこともあるんだろうが、それでも凄えもんだよ」

逆に言えば、そういう女性じゃないと壁を突破できないのかもしれない。

そして最後に和泉が締めるように話し始めた。

「だからフィオナには優斗でないと駄目、だけでなくて優斗もフィオナでないと駄目だ」

決して一方通行ではない。

「国外の縁談の話があったが、あいつは興味を示さなかった。おそらく女の子じゃ、フィオナ以外に異性としての興味は持つことがないんじゃないだろうか」

6人は一緒に帰っている優斗とフィオナの姿を頭に思い浮かべる。

「なんだかもう、早くくっ付けって思うのはオレだけじゃないはず」

「同意します」

「納得だ」

「ですわね」

「もはやあれで付き合ってないってネタだろ」

「ときどき、空気が甘すぎて逃げたくなりますもんね」

◇　◇

「優斗さんは確かに良い物件ですものね」

納得はしたくないが理解は出来る、といった表情をフィオナが浮か

べる。

「興味ないって言ったはずだけど？　それを言うならフィオナだって告白されてるし」

「それこそ興味ありません」

フィオナにとってはチームの皆以外に評価をどれだけ得られようと興味はない。
特に恋愛沙汰など以ての外だ。

「でもフィオナの魅力が周りにも伝わってきてるから告白されるんだよね……」

そう考えると、なんか胸がもやもやとする。

「……あー、もう」

いや、正直に言えば嫌だった。

「優斗さん？」

「いや、ごめん。なんとなくフィオナの魅力を知ってるのは自分だけだって自惚れてた」

フィオナの良いところを知っているのは自分だけの特権なのだと。
チームの仲間にすら分かっていないことだと。
うっすらと思っていた。
申し訳なさそうな優斗にフィオナは小さく笑みを零した。

「いいえ、優斗さんだけです。私の良いところも悪いところも全部知ってくれているのは」

優斗の言っていることは間違っていない。

「無口だったときの私を知っていて、買い食いもしたことがない私を知っていて、まーちゃんを育てることが本当に楽しいと思っていることを知っているのは優斗さんだけです」

修だって卓也だって和泉だってクリスだって。
こんな自分のことを知らない。

「優斗さんだけなんです」

安心させるようなフィオナの笑みに。
ほっ、としている自分がいることに優斗は気付く。

――ホント、フィオナには助けられてるよな。

感謝しても足りないくらいに。
でも、それでも言葉にしたいから優斗は伝える。

「……うん。ありがとう」

去年の夏ぐらい、だっただろうか。
ゲームの中でこんな台詞が出てきた。

『大切な人が襲われてたらどうする？』

主人公があまりにも名言っぽく言っていたので、自分達だったらどうする？　なんて話をしていた。

「相手を倒す」

と言ったのは修。

「殺す」

と端的に言ったのは優斗。

「落とし穴でも掘る」

と、ちょっとずれたのは和泉。

「卓也は？」

優斗に問われて、少し考える。

「俺は――」

◇　◇

１０月に入りそうになった頃。

用事のなかった優斗、フィオナ、卓也、修がアリーの部屋に集まった。

「交換留学生？」

「ええ。わたくしは昨日、その方とご挨拶をしたのですが……」

何か困ったような表情をアリーが浮かべる。

優斗が問いかける。

「何か問題が？」

「……隣国のリステル王国第４王女様なのです」

「へぇ、それはまた凄いのが来たね」

「わたくし一人では手に余りそうなので、ユウトさん達にも手伝ってほしいのですが」

どういう意味だ、と誰しもが疑問になる。

「まず、なんで王女様が来るんだ？」

「我が国との友好の一環として……と、聞いてはいますが、情報の一つとして大事をしでかしてしまい、逃げるように留学してくるとも聞いております」

「どんな王女なの？」

「良く言えば強気な方。悪く言えば……浄化されたラッセルでしょうか。決して悪い方ではないのです」

いや、ラッセルの浄化版って。

「……嫌な予感しかしねえんだけど」

「同感」

何はともあれ会ってみないと何とも言えない。

ということで、そのまま会いに行くことになったのだけれども……。

「なに？　あんた達がアリシア様の言ってた異世界から来た奴らっ

てこと？　馬鹿っぽいわね」

ショートカットで栗色の髪の毛。
つり目で強気な表情。
美少女と言って問題ない容貌。
それに相まって似合っている声。
だが、彼女の第一声で優斗たちはアリーが言ってたことを納得させた。

「か、彼女がリステル王国第４王女リル＝アイル＝リステル様ですわ」

アリーが冷や汗を浮かべながら紹介をするが、リルはそれを無視して優斗たちを吟味するように見回した。
最初に目をつけたのは修。

「勇者はあんただっけ。顔は良いけど、お兄様ほどじゃないわね。同じ勇者なのに気品からして違うわ。まあ、実力でもお兄様のほうが圧倒的でしょうけど」

続いて優斗と卓也。

「他は所詮、平民でしょう？　そんなのと仲良しこよしで一緒にいるなんて吐き気がするわね」

最初っから強烈なあいさつだった。
修が頭を掻きながらアリーに尋ねる。

「こいつケンカ売ってるのか？」

「こういう性格なのです」

諦めてるのか、何も言い返さないアリー。

「俺、こんなのの面倒なんて見ねえぞ」

修が興ざめしたようにその場を後にした。

「何よ、あれ。あんなのが勇者なんて信じられないわね」

変なものでも見るような目つきのリル。

アリーは慌ててこの場を終わらせる。

「と、とりあえずリル様が何かお困りになりましたら、わたくし達がフォローいたしますので。それでは今日のところ、この辺で失礼いたします」

頭を下げてぞろぞろと部屋を出て行く。

誰が何と言うまでもなく、大変なことになりそうなのは間違いなかった。

先に出て行った修に追いついて、先ほどのリルについて話をする。

「さっき彼女のお兄さんが勇者って言ってたけれど」

「リステル王国は代々、王の親族の中から一番優秀なものが勇者として選ばれるのです」

「強いのか？」

「勇者といえどシュウ様たちみたいに異世界から来た利点、というものはございません。せいぜいわたくしより少し強いといったところではないでしょうか」

「じゃあ、あんまり強いわけじゃないのか」

あれだけ自信満々に言っていることだから、さぞ強いのだろうと思っていたのだけれども拍子抜けだ。

「……シュウ様。シュウ様とユウトさんが例外的なだけで、わたくしとて国の中では強いほうなのですよ」

基本属性の上級魔法を全て使える人間などそうそういない。

呆れたアリーに悪い、と修が悪気なく謝る。

「それで、リル様についてはどうするのですか？」

フィオナが話を切り替えた。

「あいつの面倒見るなんて俺は却下……っていうか、面倒を見切れるのはアリー、クリス、優斗、卓也ぐらいだろ。他の奴らだったら何かしらで切れる」

「かもしれませんわね」

「じゃあ、オレらで何かあったら対応するしかないか」

問題ごとは起こしたくない。

「基本は卓也が担当だからね」

「は？　何で？」

「だって一番暇なのがお前だよ」

名前を挙げた面子を考える。
アリー、王族。
優斗とフィオナ、育児。
クリス、結婚云々。
卓也……特になし。

「あ～、確かに」

「なるべくフォローはするけど、基本は頼んだ」

「はいよ」

とはいえ、あの高飛車なお姫様のお守りをしなければならないのだと思うと、吐く息が重くなってしまうのは仕方がないことだろうと卓也はしみじみと感じていた。

自分はどうするのだろう、と卓也は考える。
修みたいに主人公キャラじゃないから倒せない。
優斗のように大切なもののためならと躊躇なく殺せるわけもない。
和泉の考えにだけは至れないけど……。

――だとしたら。

オレはたぶん。
この答えが一番自分らしい。

「――オレは守る。何があっても守り抜いてみせる。そうしたらお前らがどうにかしてくれるだろ？」

そう言って笑顔を浮かべた。

◇　◇

毎日が本当に大変だった。
リルが同じクラスというのはこちら側の配慮なのだが、やっぱりというかなんというか、かなりの問題児だ。
隣国のリステルでは侍従も校舎の中にも入れるらしいが、リライトでは認められていない。
何をするにも一人でするしかないのだが、生粋のリステル育ちであり王女のリルはあれだこれだと文句を言う。
少なくとも卓也は従者として本当にこき使われていた。
他国の王族だからこそ許される振る舞いでもあるが、他国に来ているのにこの振る舞いをしているというのはいささか空気が読めないとも思える。

「飲み物がないわ！」

「すぐに用意します」

「もっと美味しい食べ物はないの！？」

「すみませんが他にないので、これで我慢してください」

「服が汚れたわ」

「すぐに用意するのは難しいので、申し訳ないけどアリーさんなどに言ってもらってもよろしいでしょうか」

などなど、1週間。

優斗もアリーもクリスも疲れているが、卓也がその中でも一番に疲れていた。

週の後半からは基本的に卓也が呼ばれるようになった、というのも原因だ。

「お疲れ」

「災難だな」

「お疲れさまです」

修とココと和泉が飲み物を持ってきてくれた。

「基本的には卓也任せになったとはいえ、不意打ちがあるから気は抜けないんだよね」

優斗たちはそれぞれ、飲み物に手を伸ばす。

「何でもやってもらう、というのは貴族や王族の基本ですからね。自分もここに入ったときは苦労しました」

「私やココさんは親が貴族としては変なほうに入るので、自分で色々とやらされていましたが普通はクリスさんのような方々ばかりですものね」

「郷に入っては郷に従え、ということわざがあることを知らねぇんだろうな、あいつ」

はぁ、と全員でため息をつく。
張本人は窓際の席でぼぉ、と外を見ている。
そして胸元でペンダントのようなものを握っていた。
が、ふと周囲を見回した。

「タクヤ！！」

名前を呼ばれて卓也がげんなりする。

「頑張って行ってこい」

修に背中を叩かれ、しぶしぶながらリルの席へと向かう。

「何か用でしょうか？」

「あなた達、明日は暇なのよね？」

そう言ったリルの視線の先には優斗たちがいる。

「全員暇かと言われたら分からないです」

「じゃあ、生徒会長は暇なの？」

「それも聞いてみないと分からないですね」

「まったく、使えないわね」

あまりにも理不尽な物言いだが、卓也は心の中で忍耐の二文字を浮かべる。

「それなら時間がある人は明日、あたしの家まで来なさい。そこから馬車を出して特別にお兄様と会わせてあげるわ」

「なんで俺らまで一緒に？」

「護衛は必要でしょう？　少なくとも王族であるあたしが出かけるんだから」

「なんてことを言ってたんだけど……」

「……うわっ、行きたくねぇ」

「シュウ様。そういうことは口に出さないでください」

誰しもが思っていることなのだから。

「申し訳ありませんが、自分は婚約者と会う予定があるので……」

「わたしも予定があります」

「なんか嫌な予感がするし、僕は行こうと思う。フィオナは悪いけど、マリカのことお願い」

「それはいいのですが、嫌な予感……というのは？」

フィオナはもちろんのこと、周りも疑問に思った。

「なんでこっちに来て1週間しか経ってないのに王子と会おうとするのか、ということ。アリーが言ってた『しでかした』っていうのが事実だとするなら、問題がこっちの国にまで来たら厄介だし」

「ただのブラコンじゃねぇの？」

「それがベストの回答。あくまで最悪のことを考えたのがさっきのやつ。というわけで修も嫌だろうけど来てね」

「……しゃーねーな」

「そう言われましたらわたくしも念のため、一緒に行ったほうがよろしいですわね」

「俺も行くか」

暇だからな、という理由で和泉も付いて行くようだ。

「それなら是が非でもレイナさんには来てもらわないといけませんわね」

アリーがそう言うと、和泉を除く全員が笑った。

一方で笑っているアリー達を見て、リルは思う。

――何がそんなに楽しいのよ。

喋っている内容までは分からないが、楽しんでいることぐらいは笑い声を聞けば誰だって分かる。
同じ王族があんな風に笑っていることが奇異に思えるが、それがリライト王国の風土というものだと割り切る。

――明日、お兄様から朗報が聞ければいいのだけれど。

自分がここにいる理由もなくなるのだから。
ふと、視界に卓也が映る。

――それなら、タクヤぐらいは一度リステルに来させてやってもいいわね。

丁寧に話したりはできないが、この1週間は従者のように働いてくれている。
当然だとは思うが、それでもこれは他国で受けた恩だ。
返してやるのが礼儀というものだろう。

――どうしようかしら。

胸元のペンダントを握り締めながら思いにふける。
小さく、笑みが零れた。

「なんだよ、俺たちがどうにかするって」

「だってそうじゃん。お前らが助けてくれるから、俺は『大切なものを守る』って選択肢を選べるんだから」

「……その考えはなかったよ」

「けど卓也らしいんじゃね」

「そうだな。それならば、時が来たときには」

「落として倒して殺してあげるのか」

そんな状況を全員で想像して、大笑いした。

◇　◇

というわけで翌日、馬車に揺られて国境沿いに向かっているのが7人。
リルを筆頭として優斗、修、卓也、和泉、アリー、レイナ。
2台に分かれ、片方にはリル、レイナ、卓也、和泉。
もう片方には優斗、修、アリーが乗っている。
リルと同じにならなくて気が楽な優斗たちだったが、そのせいか手綱さばきを失敗して馬車の車輪が歪んだ。
リルがまた、あーだこーだと言いそうだったので和泉に先に行っておけと合図する。
場所はアリーが知っていたので、残されたほうも問題はない。
分かった、と和泉が頷いて馬車を先に走らせる。
そして20分後、リルが指定した国境にたどり着いた。
何もない、どちらの国にも属さない草原に、栗色の髪をたなびかせたイケメンが立っている。
リルは颯爽と馬車のドアを開けるとイケメンに飛びついた。

「お兄様！」

飛びつかれたイケメンは最初こそ柔和な表情を浮かべたが、すぐに険しい表情になる。

「リル。悪いがまだ討伐はできていない」

「……っ！　そ、そうですか……」

「3日前も空に逃げられてしまって、今は捜索隊が探しているところだ」

二人して深刻そうな表情を浮かべているが、後ろにいる卓也たちに

は何のことだかさっぱりわからない。
イケメンの視線が卓也たちに向いた。

「これは、リルの学友か」

さわやかに挨拶をするイケメン。
リルにそっくりな奴かと思えば予想外。
兄妹でどうしてここまで違うのか、と卓也は問い詰めたくなる。

「私はリルの兄でイアンと言う。妹が迷惑をかけているとは思うが、よろしく頼む」

王子だというのに頭を下げるイアン。

「ほん――」

本当にな、と和泉が言おうとしたところでレイナが高速でわき腹に肘打ちを入れる。
代わりに卓也が答える。

「いえ。オレたちはもリル様の護衛として来てますから、ご学友なんて大層なものじゃないです」

謙遜しているように言っているが、つまりは友達なんかじゃないと暗に言っている。
が、その隠された意味に気付かないイアン。

「いや、そんなことはないはずだ。リルも皆と一緒にここまで来れて心強いと思っているはず」

ニコっと笑うイアン。
レイナが卓也に続き言葉を交わす。

「もうしばらくしたらアリシア様もいらっしゃいます。それまではこのまま、この場所で待とうと思うのですがよろしいでしょうか？」

予想外な名前が挙がってイアンは驚くが、すぐに笑みに戻して、

「そうだな。アリシア様にも少し話したいことが――」

『ここにいたか！　第1王子に第4王女ッ！！』

イアンが穏やかに返そうとした瞬間。
突如、空より声が振ってきた。
卓也も和泉もレイナもイアンも。
全身が総毛立った。

「なんだ！？」

全員が上を見た。
漆黒の竜がものすごい勢いで地面に向かっている。

「さすがというべきなのか、どう思うべきか」

「……優斗の嫌な予感が当たり、か。しかしこんな早々に来るとは優斗も思っていなかっただろう」

漆黒の竜が地面へと降り立つ。
大きさとしては１０メートルほどなのだが、威圧感は今まで見たことのある竜種とは比べ物にならない。
レイナとイアンは前に出て剣を抜く。
和泉は二人のフォローに回ろうと銃を抜き、卓也は震えているリルを後ろへと押しのける。

「……っ！　な、何を――ッ！」

「黙ってろ！」

冷や汗が出る。
圧倒される。
これは今まで卓也たちが見てきた魔物よりも強い。
しかも現状で一番の問題は最強の戦力というべき修と優斗がまだたどり着いてない。
どれぐらいの時間で来れるのかも把握できていない。
ならば、と。
和泉がまずは口を開いた。

「なあ、そこの黒い竜」

言葉を話せる魔物なら、少しの時間稼ぎくらいできるはずだ。

『なんだ？』

「悪いが、俺たちはどうしてあんたみたいな竜に王子と王女が襲わ

れているのか知らない。よかったら理由を教えてくれ」

黒い竜は少し思案する仕草を見せるが、揚々と語り始めた。
どうやら自分の優位性を理解しているようだ。

『なに、簡単な理由だ。我に生贄を捧げるのはもうできないと言ってきたのだ。ならば王女を生贄にすれば数年はやめてやろうと言ってやり、こやつ等は納得した。そして第４王女を差し出してきた……ふりをして我を殺そうとしてきた。その筆頭だったのが第１王子、こやつだ』

「なぜ生贄が必要なんだ？」

『人間の肉、特に女の肉は上手い』

つまりは……なんだ。
女を食す竜を倒そうとしたのだが、イアン達は討伐に失敗しており逃げてきた。
イアンはそのまま勇者として討伐するために残り、リルは国外のリライト王国へと逃げていった。
そして状況報告するために会った瞬間、めでたく襲撃されたというオチか。
和泉は小さく舌打ちする。

――神がかり的な運の悪さだな。

優斗たちがいないのが、さらに拍車を掛ける。

『さあ、理由も分かったところで我を騙したのだ。貴様ら全員喰ってやろう』

予想以上に時間稼ぎができなかったことに和泉が焦る。
しかも標的はなぜか全員に摩り替わった。
黒い竜の目つきが変わる。

『――死ね』

黒い炎弾が、竜の口から生まれる。

「全員、避けろ！！」

レイナが声を張った。
イアン、和泉が左右に避け、卓也はリルを連れて下がる。

「イアン様！　お一人なのですか！？」

レイナが避けながら訊く。
彼一人でこの魔物を倒せるわけもない。討伐隊は近くにいないのだろうか。

「……ああ。黒竜――ダークネスドラゴンに悟られないためにも一人で来たのだが」

イアンの返答にレイナは舌打ちする。
狙われているのが分かっているのなら、どうして一人で来た。
国境ならば安全だとでも思ったのか、この兄妹は。
それに感覚で理解させられる。

――この魔物はSランクだ。

Ｓランクの魔物は、上級魔法を十分に扱える熟練者が最低でも６人いなければならないレベル。
最低でそのレベルなので、Ｓランクに数えられていても討伐必要人数が１０人にも２０人にも跳ね上がる魔物だっている。
少なくとも目の前の魔物は……６人程度じゃ倒せそうにない。

『王子と騎士は反応が良いようだが……』

黒竜が翼を振るう。
それだけで中級魔法規模の風が渦巻いた。
狙いは……和泉。

「イズミ！　避けろッ！」

レイナが気付くが、遅い。

「……ぐっ……！」

直撃を受け、１０メートルほど吹き飛ばされる。

「貴様！　よくもリルの学友を！！」

イアンが剣を神々しく光らせながら切りつける。
が、鱗に薄い傷をつけるのみで、致命傷にはならない。
お返しとばかりに黒竜が左前足を振るい、イアンの右腕をへし折りながら身体ごと吹き飛ばす。

「お兄様！」

「バカ、お前は逃げるんだよ！」

リルが吹き飛ばされたイアンの下へと向かおうとして、卓也が必死に止める。

「タクヤ！　リル様をそのまま逃が――」

直後、今度は黒竜の尻尾がレイナに飛んでいく。
ギリギリで剣を腕との間に挟み、威力を軽減させたが膂力が人間とは明らかに違う。
力そのままに剣を折られレイナも２０メートルは吹き飛ばされる。

「……くそっ！」

空中で体制を立て直し着地をするが、吹き飛ばされるほどの衝撃を受けているせいか迂闊にもよろけて膝を着く。
しかしその数秒が命取りになる。
黒竜はすでに卓也たちを向いていた。
そして口にはすでに何かが渦巻いている。

「ドラゴン……ブレス？」

竜族が使える風の魔法。
衝撃波がそのまま敵へと向かう技だが、Ｓクラスの竜が使うとなれば上級魔法の中でも高威力の魔法と匹敵するのは必然だ。
レイナは撃たせまいと身体に鞭を入れて駆け出すが……遅い。

――間に合わない。

和泉を吹き飛ばし、イアンを吹き飛ばし、レイナをも吹き飛ばす。
全てはこの一撃をリルに見舞うために行ったことだ。

護衛で来たのにこの言葉しか使えないのが自分で腹立たしくなるが、
それでも叫ばずにはいられなかった。
たとえ間に合わないものだとしても。

「逃げてくれ、タクヤ！！」

別に大切ってわけじゃない。
出会ってから1週間しか経ってない。

――なんだけどな。

けれども1週間も従者の真似事をしていたからだろうか。
こんな状況だからだろうか。
彼女を守らないといけないって思ったんだ。

――あの時、笑い話になって終わった話のように。

◇　◇

黒竜が吼えたと同時に、イアンに向かおうとしていたリルが恐怖を浮かばせた。

「逃げてくれ、タクヤ！！」

レイナが叫ぶ。
暴れていた体が突如として静かになるが、彼女を引っ張って逃げる

には時間がなかった。
――どうする。
黒竜が何か魔法を放とうとしている。
何をどうしたって喰らう。
じゃあ、何もせずに黙って喰らえばいいのか？
「……ざけんな」
ふざけるな。
何も足掻かずに諦められるわけもない。
――オレは修や優斗じゃないけど。
チート性能じゃないし。
馬鹿げた努力もしてない。
それでも同じように異世界に来たんだから。
守られるだけの、あいつらのお荷物になるのはごめんだ！
「求めるは――」
優斗は言ってた。
できると信じているから頑張れると。
なら信じろ。
修ほどの才能はなくとも。
優斗ほど努力はしていないけれど。
これは使えると。
発動できると信じぬけ。
これ以上、あいつらに心配かけさせないためにも。

――リルを絶対に守りぬけ！！

右手を前に突き出す。

「求めるは聖衣、絶対の守護ッ！！」

卓也が唱えた瞬間、彼の目の前には白く光り輝く防護壁が生まれる。
聖属性の上級防御魔法。
使えるかもと思われ続けて、使えなかった魔法が卓也の眼前に輝く。
直後、衝撃波が守護の壁が衝突する。
その衝突の重みが卓也の右腕に圧し掛かる。

「……この……ッ！」

気合で耐える。
後ろにはリルがいる。
耐え切れなかったら死ぬのは自分だけじゃない。
卓也は右腕を力の限りに突き出す。
その姿を見て、リルは怯え困った表情を浮かべながらも弱々しく悪態をついた。

「あ、あたしは守ってくれなんて言った覚えない」

「お前の都合なんて知るか！！　オレが守りたいんだよ！！」

叫ぶ。
このやり取りでさえ、今は自分を発奮させる材料だ。

「オレは絶対に守るって決めたんだ！」

しかし、向こうの威力が強まる。

圧迫された結果なのか、右の腕には裂傷が走り爪先からは血が溢れた。

痛みで悲鳴をあげそうになるが、耐えて左手を添える。

「ねえ、もうやめてよ。死んじゃうよ」

泣きそうな表情をリルが浮かべた。

こんな顔もするのかと、卓也は少し驚く。

「そうなったらお前も一緒に死ぬから絶対にやめない。それに似合わないぞ、そんな顔」

言って笑う。

虚勢だろうがなんだろうが、今は笑みを浮かべるべきだ。

「あと、ちょっとだから」

「……何が？」

「あとちょっとで……修たちが来る」

親友がやってくる。

「き、来たってどうしようもないじゃない！　お兄様でもやられてしまうのよ！」

イアンとてリステル王国の勇者だ。
実力はある。
だけどれども、

「残念ながらうちの勇者と一般人、二人の親友は規格外でね。あれぐらいでもサクッと勝っちゃうんだよ」

裂傷が肩まで届く。
それがどうした。
自分が限界まで頑張るんだ。

「嘘とか思うかもしれないけど」

ドラマのように。

「本当なんだ」

アニメのように。

「きっと、あいつらがどうにかするから」

なんとでもしてくれる。

「……ったく」

直後、傍らを走りすぎていく姿が見えた。
見慣れている影が一つ、二つ、三つ。

「……ホントにさ」

ベストなタイミングっていうのを弁えてる。
謀ったかのように来るのはもはや、一種の天命だろう。
呆れるように笑う。

「最高だよ」

一番、カッコいい瞬間に。
一番、やって来てほしい瞬間に。

「最高だよ、お前らは！」

あいつらは颯爽と。

「「「　求めるは風切、神の息吹！！　」」」

やって来るんだ。

◇　◇

優斗と修とアリーが３人同時に風の上級魔法を放つ。
３人分の威力を喰らえば、黒竜といえども５０メートルは飛ばされる。

その隙にアリーは和泉とイアンの様子を見に行き、優斗と修は卓也たちに近づく。
ポン、と卓也の肩を優斗と修が叩いた。

「よく頑張ったね、卓也」

「さすが守りに関してはお前が一番だわ」

「遅いんだよ、バカ」

卓也が軽口で返す。

「ごめんね。道が混んでたんだ」

「ヒーローは遅れてくるもんだろ?」

「バーカ」

笑い合う。
が、修が不意に真面目な表情を浮かべた。

「全員、無事か?」

ぐるりを周りを見回す。
まずは遅れてレイナが合流した。

「私はまだ戦える」

「アリー、他はどうだ?」

「和泉さんは特に外傷ありません。ノビてただけなのでビンタしたら起きられました。イアン様はすぐに治療が必要ですわ」

和泉が頭を振りながらやって来る。

イアンはアリーに支えられながら優斗たちのところまでたどり着く。

「とりあえず事情は分からんが、あの竜をぶっ飛ばせばいいんだよな？」

「そうだよ」

簡潔に言えばそういうことだったので、卓也が頷く。

「まだ戦えそうなのはレイナと和泉だけど……どうする？　別に僕と修だけでやってもいいけど」

むしろ一人で相手をしたとしても余裕はある。

「借りは返す主義だ、私は」

「さすがに今回は俺も同意見だ」

レイナは当然のように、そして和泉は珍しく瞳をギラつかせた。

関係ないのに巻き込まれたのだ。

やり返すに決まっている。

「分かった。んじゃ、アリーはそいつらの子守を頼む。卓也はアリーのフォロー。怪我してやばいだろうけど気合でなんとか守れ」

名指しされた二人は頷く。

が、さすがに黙っていられない御仁がいた。
イアンだ。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！　リステルの問題を君たちにやらせてしまうわけにはいかない。それに黒竜の強さを見ただろう！？逃げてくれ！」

レイナ達に同意を求める。
さきほど、手も足も出なかったのだ。
彼らが来たところで状況が変わるとも思えなかった。
しかし、アリーが絶対の意思を込めて告げる。

「イアン様。わたくし達に手を出した以上、わたくし達の問題にもなっているのです」

大切な友人たちに攻撃をしかけた魔物なのだ。
国という問題で量る必要もない。

「そういうこと。悪いんだけどよ、俺らの仲間に手を出した時点であいつは敵だ」

「しかしっ！」

それでもイアンは引き下がらない。
だからアリーは申し訳ながらも絶対の自信を持って宣告する。

「それにシュウ様はリライトの勇者なのですから、平気ですわ」

告げたと同時に遠くで黒竜が動き出すのが見える。
修はイアンを見ると、腰にある剣に目をやった。

「けどアンタの俺達を想う気持ちを貰っとくよ。剣、借りていいか？　同じ勇者だから使えるだろ？」

唐突に言われて驚くが、イアンは訊かれたことに素直に答えた。

「あ、ああ」

「この剣の名前は何て言うんだ？」

鞘ごと剣を受け取る。

「聖剣、エクスカリバー」

「おお。カッケー名前じゃん」

自分達の世界にある剣と同じ名前だ。

受け取ってから修たちは歩き出す。

「……む、そういえば先ほど剣が折れてしまったな」

魔法を使えばいいが、騎士を目指す者として剣がないのは不安でもあった。

「簡単に折られるの？」

「そうだな。力だけで持っていかれた」

「レイナさんって刀を使ったことある？」

「剣の形をしているものは、大抵は触っている」

それなら、と優斗は手を前にかざす。

魔方陣が生まれ、折りたたまれていき、一振りの刀と成す。

「布都御魂。普通のより長いけど、レイナさんならどうにかなるでしょう」

優斗はレイナに手渡す。

「前にも見たと思うけど属性付与として雷。一応は神剣の類になるから折れないと思うよ」

これを見たのは2回目だからレイナも平然と受け取る。

しかしレイナは後ろを見ずとも、だんだんと遠ざかっていくイアンとリルが驚愕の表情を浮かべているのが手に取るように分かる。

苦笑しながらレイナは前方を見据える。

優斗たちが来たからだろうか。

神剣を手にしたからだろうか。

先ほどまでは恐ろしかった相手だが、今はもう恐怖を感じる必要性がない。

むしろ早く倒したいとさえ思う。

それは和泉も同じだ。

二人は視線を交わして頷く。

「さて、と」

大技を使っている最中にカウンターで喰らった魔法のダメージが抜けず、未だふらついている黒竜の前まで来ると優斗と修が一歩前に出る。

そして修は預かった聖剣を黒竜に向けて突き出した。

「俺達の親友を傷つけてくれた礼だ」

「問答無用」

「絶対的に」

「完膚なきまで」

「倒してやるよ」

「殺してやるよ」

「タ、タクヤ。先ほどユウトが魔方陣を出したらそれが剣になってたわ」

目を点にしてリルが驚いていた。

「そうだけど」

「どうしてそんなに落ち着いてるの！？」

「いや、言っただろ。規格外だって」

そう伝えたはずだが。

「限度ってものがあるでしょ！」

「俺に言われたって困る」

あいつらの限度がどれくらいなど自分が知るわけもない。

「それにあんただって聖魔法使ってたじゃない！　しかもあれって高位神官じゃないと使えない魔法よ！」

「一応、俺も異世界から来てるし」

それぐらいの利点は貰ってもいいだろう。

「……なんなの？　あんたたちって、とんでも集団なわけ？」

「俺を混ぜないでほしい。あの二人と一緒にされたら、さすがにへコむ」

とんでもレベルが違いすぎる。

一方でイアンもアリーから治療を受けながら質問をする。

「リライトの勇者ともう一人の人物はどれほどの強さを？」

「……正直なところは分かりませんわ。全力を出しているところを誰も見たことがありませんから」

「そうだな。あの二人で勝負するくらいしか見れないんじゃないか」

「しかしながら彼らの話を察するに黒竜程度ならば、シュウ様かユウトさん一人で対応できてしまうのでしょう」

「リライトの勇者は強いと言われているが……そこまでか」

「おそらく歴代の中でも指折りの勇者なのだと思いますわ」

さすがに黒竜を一人で相手できる、という勇者はリライトでもそうそういなかったはずだ。

「ならばもう一人の彼は？　先ほどリルが言ったように、とてつもないことをやっていたが」

自分はあんな魔法、知らない。

「前にシュウ様も同じ事をなさっていましたから、おそらくはこの世界にある魔法の一つだとは思うのですが正確なところは分かりかねています」

修はあれでこの世界の魔法に忠実だ。

勇者の刻印の導きによって、そのような力を教えられてたのかもしれない。

だが、優斗は別だ。

「とりあえずユウトさんについては、御伽噺に出てくる大魔法士とでも思ってください。それが一番納得できますわ」

彼だけは常識の枠に収めるのは無理だ。

なにせ使っているのは異世界の魔法なのだから。

◇　　◇

ふと修は思い出す。

「なんか、去年話したこと思い出すな。卓也が守って俺らがなんとかするってやつ」

「……ん？　ああ、あの話か」

ふらついている黒竜を前に余裕綽々で話す。

「殺すに倒す。それじゃあ和泉は埋める係だね」

「なんの話だ？」

さすがに去年に話したことなので、レイナは知る由もない。

「くらだらない与太話だよ。とはいえ、それに従うのも面白そうだね」

ゲームの台詞から取り出した、どうでもいい話。
それでもなんとなく、あの話の流れに乗ってみようと思った。

「それじゃ、あの竜をどうにか取り押さえといて。1発で殺すから」

「承った」

「はいよ」

「わかった」

3人が頷く。
そして興味深げに和泉が優斗に訊く。

「今回は何を使うんだ？」

「極大消滅呪文を元にした、なんと宮川さん初のオリジナル詠唱です」

というのも、参考の魔法をそのまま使おうと思ったら使えなかったので、改良が必要だっただけなのだが。

「やっぱい。カッコよさそうじゃん」

「楽しみにさせてもらう」

「期待させてもらうか」

修、レイナ、和泉それぞれが笑みを浮かべながら飛び出す。
優斗はそのまま、場で陣取る。
最初に切りかかったのはレイナ。
右側から黒竜の右足に切りかかる。
多少はふらついていても視界に映っているはずなのだが、黒竜はよけるそぶりすら見せない。
それが間違った判断と知るのは切られた瞬間。

『……なにっ!?』

「神剣だからな。貴様の鱗など容易く切り裂ける!」

いとも容易く鱗も肉も切り裂き、そのまま2撃目を入れてバックステップで後方へと退く。
その間に和泉は6発の弾丸を竜を囲むように地面に撃ち付けた。

「開け」

言葉とともに、弾丸から魔方陣が浮かび上がる。

「冗談で覚えておいた落とし穴を作る地の中級魔法。使い方によってはこうもできる」

同時に黒竜を中心として地面に穴が生まれた。
巨体ゆえに沈み込むこともないが、それでも足が埋まるくらいは陥れられる。

『小賢しいわ！』

翼を羽ばたかせ空を飛ぼうとする。
が、そんなことを許すわけもない。

「単純なんだな、お前って。甘えよ」

風の魔法を使って上空にジャンプしていた修が聖剣を構える。

「頼んだぜ、エクスカリバー。切り裂け！」

怒号と共に煌いた聖剣が光る刀剣を伸ばし、黒竜の右翼を根元から切り落とす。

『――ッ！！』

黒竜の悲鳴が轟く。
しかし、それに負けない声で修が叫んだ。

「決めろよ、優斗！」

右手の前に一つの魔方陣が浮かび上がる。

『古より伝わりし浄化の炎』

続いてもう一つの魔方陣が左手より生まれ、二つの魔方陣が重なるように浮かび上がっていき、両手を合わせると共に、

『混じりては終焉の氷結』

魔方陣が弾けた。
しかし続けて紡いだ詠唱と共に、

『刹那にて砕きは纏い上げ』

弾けていった魔方陣が集い、今度は足元に先ほどより大きな陣として生まれ変わる。

『求めるは月をも穿つ一弓、消滅の意思』

合わせた両手が白く輝いた瞬間、優斗は手を左右に開く。
左手に光る弓が現れ、右手には弦を引いた状態になっている一筋の光る矢が存在していた。
そして初めて作った魔法の名前を小さく告げる。

『虚月』

右手から矢が離れた。
放った瞬間、矢は極大の光を纏い地面すらも削りながら黒竜に向かう。
そして突き刺さる。

「……よし」

一瞬だった。
修に翼を切られ、悲鳴をあげていた黒竜に矢が刺さり貫き後方から押し迫る光に触れられた瞬間、まるで存在しなかったかのように跡形もなく消滅した。

「はい、終了」

パンパン、と手を叩く。

「やっぱ4人もいると楽だね。魔法だけ使えばいいんだから」

「だな」

「あの魔法、俺には絶対に向けるなよ。いいか、絶対だ」

「え？　フリ？」

「違う。お仕置きであんな魔法使われたら俺の身が持たない」

手加減したものでも喰らいたくない。

「それもそうだが……私としては1発ぐらいはいいんじゃないかと思うぞ」

4人で笑いながらアリー達のもとへ戻ると、案の定というかなんというか、驚愕の表情を浮かべたイアンとリルのお出迎えを受けた。

「これ、サンキューな。使いやすかった」

「いや、それは構わない……のだが」

もう、何て言ったらいいのか分からなかった。

特に優斗と修だ。

自分の聖剣を使って黒竜の翼を切り落とすし、優斗に至っては神話魔法……なのだろうか。少なくともそれと同じ威力の魔法を平然と使う。

何がおかしいか、と問われたら何もかもがおかしかった。

ただ、それでも気になることが一つ。

「もし君たちが全力で戦った場合、どうなる？」

イアンは視線を優斗と修に向ける。

唐突に問われたことに首を傾げる二人だが、少し真剣に考えてみる。

そして結論を出した。

「たぶん……でよろしいですか？」

「ああ、構わない」

「世界がやばいですね」

優斗の一言にイアンとリルは絶句する。

他の面々はなんとなく、そんな予感がしたので驚きはしなかった。

「世界……というと、この世界全てということか？」

「ええ。修はともかくとして、僕の最強の魔法となると……下手したら扱いきれませんし、扱えきれなかったら世界滅亡です」

平然と言う優斗にイアンはアリーを見た。

「アリシア様が言ったことがよく分かった。確かに御伽噺の存在だ」

「でしょう？」

「この二人は使えば国家統一も夢ではないと思うのだが……」

「他国の貴方ならばそう思われるでしょうが、無理ですわ」

「なぜ？」

「だって当の二人が……」

アリーが修と優斗に視線を送ると、

「だるい」

「面倒」

という返答がくる。

アリーは苦笑して、

「ということなので、この二人は自国防衛限定です。平和主義者のお二人ですので、無理に他国を侵略して戦争など行おうものなら、リライトがこの二人に滅亡させられてしまいますわ」

「そうか」

他国の王族としてはほっ、と一安心する。

「では憂いも無くなったことで話を変えさせてもらう。リル、お前はこのまま国に帰るか？」

話を振られてリルが驚く。

「え？」

「お前を狙っていた黒竜は倒された。ゆえに狙うものもいない。帰ってきても問題はないが」

「……」

リルはちらりと卓也を見る。

「タクヤ、お前はどう思うの？」

「オレ？」

卓也はなぜ自分に話題を持ってきたか分からなかったが、素直に答える。

「別にどっちでもいいよ。残りたかったら残ればいいし、帰りたかったら帰ればいい」

卓也のその答えにリルが少し憤慨した。

「で、でもお前はあたしを守るっていったじゃない！」

「それはお前が黒竜に襲われたんだから、１週間ぐらい従者の真似事してたらそう思ってもいいだろ」

それぐらいの情は持つ。

「だ、だからあたしがリステルに帰ったら守れないのよ！？」

「でも誰かに狙われることなんてもうないだろ。それにお前が残ったってオレはもう従者の真似事なんてしないし、別に平民に守られたくもないだろ」

あんだけ貶しているんだから。

「それは……」

ぐっ、と押し黙るリル。

「さらに言うなら、オレは平民ってだけで他人を貶す奴は嫌いなんだ。短い期間だと思ってたから我慢もできたけど、今のまんまだったらオレはお前に関わんないよ」

「え……？」

「それに皆も同じだと思う。生まれだとか血筋だとか興味ない連中が集まってるんだ。別にオレらとお前は友達じゃないし、お前が残るって言うならオレらと関わることはほとんどない。もし俺らが理由で残ろうと思ってるなら、素直に帰ったほうがいいって」

卓也に言われてリルは他の面々を見てみる。
あからさまに顔を背けたり侮蔑の視線を向けたり、苦笑いや困った表情をしていた。
卓也が言ったことが真実だと彼らが示していた。

――あいつらはあたしが客だから面倒見てた。それ以上でもそれ以下でもないってことね。

けれど、そこらへんは分かってる。
自分だって理解して扱われていた。
それでも驚いてしまったのは。
卓也までそうだったとは……思っていなかった。
彼だけはどうしてか違うと思ってしまっていた。
なぜだろう。
卓也に侮蔑されるのはすごく嫌だった。

「だ、だったら」

リルは力強い瞳を卓也を見る。

「なんだ？」

「あたしが変われればいいのね？」

「……はぁ！？」

唐突な宣言に卓也が驚く。

「あたしが変われば問題ないわよね？」

「いや、それは確かに問題ないけど……変えられないだろ、普通はそういうの」

「変わってやるわよ」

力強く言ってのける。

「できるのか？」

「そう思うのなら、証明してやるわ」

リルは胸元にあるペンダントを取る。

「お兄様。これからすることに対しての証人として見ていてください」

リルの行動が何を示すか分かったのか、イアンは顔をしかめる。

「そこまでするのか？」

「あたしの本気を見せないとタクヤは納得しません」

「……まあ、問題になるとは思うが自分でどうにかしろ」

「分かってます」

他の人たちには分からないやり取りがされる。

「タクヤ、少し屈みなさい」

「……？　わかった」

とりあえず、素直に屈む。

すっ、と卓也の首にリルがペンダントをかけた。

「これ、なに？」

「め、目を瞑りなさい」

「いや、その前にこれ――」

「いいから、目を瞑りなさい！」

リルに押し切られて、しぶしぶ目を瞑る卓也。

「……ふぅ」

大きく深呼吸をしてリルは宣言する。

「これより、タクヤを生涯の隣人とすることを誓います。彼の者にいかなる困難があろうとも、側に寄り添い支えることを誓います。彼の者がいかなる災厄になろうとも、信じ続けることを誓います。彼の者にいかなる不幸が降りかかろうとも、助け続けることを誓います」

そして前に一歩出て、卓也の頬にキスをする。
頬に触れた感触に驚いた卓也が目を開き、状況を確認した瞬間に顔を真っ赤にして一歩下がった。

「え……!?　はぁ!?　い、今のなに!?」

「言ったじゃない。本気を見せるって」

「なんだそれ!?　これの何が本気なんだよ!?」

「私の国に伝わってることよ」

「こっちはこの世界に来て半年ちょっとしか経ってないんだ!!知るか!!」

あまりの出来事にテンパっている卓也。

「知るか……って何よ!!　せっかくキスまでしたんだから!!」

あ～だこ～だと口ケンカを始める二人。
それを尻目にアリーはイアンに訊いてみた。

「あれ、どういう意味があるのです？」

「古来より大切な人に送る言葉、とされている。自分の物を送ると同時に告げることで『貴方が大切です』という意味を持たせる、生涯に一度しか使えない言葉なのだが……」

そこで困ったようにイアンは頬をかき、

「最近はプロポーズによく使われている」

「……あ～、なっとく」

「たしかに、そう取れますわね」

「というかそういう意味だと思ってたよ」

「そうだな」

「俺もそうだと思っていた」

言い合っている二人をしみじみと見る。

おそらくリルの意味合いとしては前者とはいえ、

「出会って1週間しか経ってないのに、何がそうさせたんだろうな？」

「卓也が守ったのが原因じゃね？」

「つり橋効果かな？」

「どういう意味だ？」

レイナが訊く。

「今回の場合は黒竜に襲われて心臓がドキドキしているのを、卓也にドキドキしていると錯覚したこと」

「……なんとなくロマンがありませんわ」

「それじゃ、どうするよ？」

「運命でいいだろう」

「いいのか、それで？」

「いいんじゃね？」

「そうだね。少なくとも吊り橋効果って言うよりは良い理由だと思う」

未だに舌戦を繰り広げている二人を見ながら、優斗たちはそんな風に二人をほほえましく観察していた。

王女様、誓います（後書き）

今回の詠唱はＴＯＤ２を使ってます

運命の出会い（嘘）＆（本当）

つい先日の昼休みのことだった。
運命的なことがあった。

「あっ……」

学院の階段で躓いて落ちかけた。
反射的に目を瞑る。
そして衝撃。
けれど、予想に反して衝撃は軽かった。

「あれ？」

瞑っていた目を開けば、自分は倒れておらず、誰かが身体を支えてくれていた。
支えてくれている手を辿って顔を見ると、知らない顔の男性だった。
視線が合うと、彼は笑みを浮かべた。

「大丈夫ですか？」

「は、はい！」

ゆっくりと彼は自分を起こして立たせると、支えている手を離した。

「危ないですから気をつけてくださいね」

そう言って、その人は友人と歩いていった。

途中で一緒にいた友人から「ギャルゲだとフラグだな」とか自分には色々と分からないことを言われて、友人の頭を小突いていた。

落ちたことと助けられたことに驚いて後姿を見てるだけしかできなかった。

あっ、と感謝の言葉を忘れていたことを思い出すが、もう姿は見えない。

「2年生だったよね」

服装からして一つ上の上級生だということが分かる。

「ちゃんと……お礼を言わないと。いえ、お礼はしなければいけないわ」

◇　◇

翌日、お礼としてクッキーを持って2年生のクラスを周って見た。
そして、あるクラスにある集団で見つけた。
有名なクラスだった。王女様がいるクラスだったから。
教室の中に入ろうかどうか悩む。
上級生のクラスに単身で乗り込むのは初めてのことだった。
どうしようかとドアの前で少し悩んでいると、声を掛けられた。

「どうかなさいましたか？」

振り返って後ろを見る。

「……あっ……」

王女様だった。

「ア、ア、ア、アリシア様！？」

「誰か探しているのですか？」

驚く自分に、にこやかに笑みを浮かべながら王女様は再度尋ねてくれた。

「い、いえ！　アリシア様のお手を煩わせるようなことでは……」

「そんなに緊張されないでください。今のわたくしと貴女は上級生と下級生という間柄ですわ」

そう言われても無理なものは無理だ。
緊張で背筋が伸びる。

それに王女様はもう一度笑って、

「とりあえず教室に入りましょう」

自分の背中を軽く押して教室の入っていった。
幾人かクラスの人たちが自分を見たが、すぐに目を逸らす。
すぐに興味をなくしたようだ。

「それでどなたをお探しなのですか？」

「え、えっと……あの人、です」

指差す。
王女様はその先にいる集団を見て、私を従えながら躊躇なく歩き始めた。

「ユウトさん、お客様ですわ」

「客？」

「ど、どうもです」

王女様の背中から顔を出す。
けれどユウトと呼ばれた昨日助けてくれた人は眉根に少し皺を寄せたままだった。

――あれ？　もしかして覚えてないのかな？

衝撃的な運命の出来事だったのに。

「優斗。昨日の階段で助けた子だろう」

昨日、一緒にいた友人がそう言ったことで助けれくれた人は「ああっ」と納得したように手をポン、と打った。

「昨日は災難でしたね」

「い、いえ。助けていただいたのにお礼も言わずにすみませんでした」

「それを言うために来たんですか？」

「はい」

「そんな。ちょっとした出来事だったんですから、お礼を言われることでもありませんよ」

「そ、それでも助けていただきましたし。あとこれ、お礼の品です」

手に持っていたクッキーの袋を渡す。

少し驚いた表情を助けれくれた人はしたけれど、すぐに笑顔になって受け取ってくれた。

「ありがとうございます」

「そ、それで、ですね！　もし放課後、時間があればもっとちゃんとしたお礼をしたいと思うんですけどどうですか！？」

緊張のあまり、一気にまくし立てて話してしまった。

助けれくれた人どころか、周りの人たちまでポカンとした表情をし

ている。
けれど、その中でも助けれくれた人はすぐに表情を戻すと、

「すみませんが、放課後はちょっとした予定がありますので。それにお礼ならクッキーだけで十分です。これ以上は貰いすぎになってしまいますよ」

やんわりと断った。

「そ、そうですか。それでも最後にもう一度、ありがとうございます」

断れたことに小さくショックを受けながら頭を下げて、その場を立ち去る。

◇　◇

クラスの友人にそういうことがあったと話す。

「あんた、そうやってすぐに運命と関連付けるのやめなさいよ。毎回、それで間違ってたじゃない」

「今回は本当よ。あれこそ運命の出会いだわ」

「……はぁ。曲がり角でぶつかったぐらいで運命感じるくらいだから、言っても無駄だろうけど」

友人がため息をつく。

「ちゃんとクッキーだって受け取ってくれたし、これは好感触」

「はいはい、言ってなさい」

呆れたように言われるが、問題はない。

あの出会いは運命なのだから。

◇　◇

というわけで放課後、尾行してみることにした。

“ちょっと”した用事なのだから、時間は余っていると考えていい。

助けれくれた人が少し遅れて学院から出たので、もう用事は終わったのかとも思ったけれどそうとは限らない。

様子を見て、もう用事が終わっていると見計らってから声をかけることにする。

一定の距離を開けて追っていたのだけれど、時折振り返ってきた。

そして少し首を捻る。

顔が見えないくらいの距離で人通りが多いのに、どうして違和感をもてるのだろうか。

それがすごい。
さらに見えるか見えないかギリギリの距離を保つと、さすがに振り返ることはなかった。
と、途中で彼が話しかけられていた。その隙に近づいてみる。
話しかけたのは中年の男女と赤ちゃんだ。
赤ちゃんは彼に抱きついていった。

「二人はどちらに？」

「ちょっとした用事でね。王城に行くことになったのよ」

「それならマリカは預かっておきますね」

「いいの？」

「ええ。あとは帰るだけですし」

「それじゃお願いね」

「はい。義父さんも義母さんも気をつけて」

そう話して中年の夫婦は離れていった。
父さんと母さんと言っていたことからあの二人とは親子ということが分かる。
ということは、あの赤ちゃんは妹なのだろう。
そのまま数分ほど追いかけて、彼に偶然を装って話しかけることにした。

「ぐ、偶然ですね。用事ってもう終わったんですか？」

かなり自然に話しかけたのだが、彼は少し考えた様子を見せると、

「貴女でしたか。僕を追いかけていたのは」

いきなり真相を突いてきた。

ギクリ、とした表情が顔に出てしまったのだろうか。

自分の顔を見て彼はさらに納得の表情をする。

「殺気でも敵意でもなかったので違和感ぐらいしか感じませんでしたし、途中で違和感はなくなったので気のせいだと思ってたんですが」

間違ってなかったんですね、と付け加えられた。

彼の言葉に驚きと同時に尊敬を覚える。

何度も似たようなことをやってきたが、バレたのは初めてだ。

とはいえ、状況の旗色は悪い。

運命の相手なのだから、どうにか好転するとは思うけど。

「なぜ追ってきたんですか？」

「ど、どうしてもお礼をしたかったので」

「それは結構だと昼休みに言いましたよね？」

「そう……ですけど」

「はっきり言いますが、そこまでやってもらうことでもありません。僕と貴女は出会ったばかりで親しき仲でもないのですから」

真面目な表情で彼は自分を諭してきた。

それを彼が抱いている赤ちゃんは何か思ったのだろうか。
彼を見て、
「ぱ～ぱ？」
そう言った。
「……パ、パパ？」
突然の言葉にあんぐりと口を開けて彼を見た。
「ええ。この子は僕の娘ですが」
「……い、妹ではなく？」
「娘です」
断言された。
ということは、だ。
「奥さんも？」
「います」
これまた断言された。
「そ、それなら運命の出会いじゃないじゃないですか！！」
「……はい？」

彼が首を傾げる。
けれど自分は彼が運命の相手じゃないのなら、もう話す必要性も感じなかった。

「運命の出会いじゃないならいいです。さようなら！！」

そのまま踵を返して彼の元から去る。
歩いている途中、

「なんだったんだろうね？」

「あい？」

「マリカも分からないよね」

なんて苦笑して会話していたのが聞こえた。

◇　　◇

そのまま寮に戻って友人に今日の顛末を話した。

「というわけで、運命の出会いじゃなかった」

「だから言ったじゃない」

「あ～あ、次こそは運命の出会いだといいなぁ」

「……あんた。今回も駄目だったのにこりないわね」

「いいじゃない。私はドラマチックな運命を求めてるんだから」

「……それじゃ一生、彼氏なんて出来ないわよ」

◇　◇

一方で優斗は優斗で、家の中で困っていた。

フィオナがマリカを抱きしめながらグチグチとマリカに言っている。

「何が『上手く立ち回ってるから』なんでしょうね。クッキーだってもらって……。まーちゃんもそう思いますよね？」

「あいっ！」

「ですよね」

マリカに肯定？　の返事を貰ったのかフィオナは、じとっとした目で向かいのソファーに座っている優斗を見る。

「あの、フィオナ？」

「……」

「フィオナ？」

「……」

「フィオナさん？」

「フィオナです」

「あ、そこは反応するんだ」

反射的に答えてしまってフィオナは顔を少し赤くするが、それでも視線は変わらない。

「フィオナって最初はいっつも話しかけたってだんまりなんだよね。なんか恒例のパターンになってる気がする」

「……優斗さんのことだと単純ですから」

フィオナの言葉に小さく笑うと、優斗は立ち上がってフィオナの隣に座った。

「何度でも言うけど、彼女は助けれたお礼にクッキーをくれた。僕と放課後会おうとしたのは僕を運命の出会いだと思ったから」

「わ、私のほうが優斗さんと運命の出会いをしてます！」

「……っ！」

不意打ちをくらう。
フィオナは素直な分、ストレートな物言いをしてくる。
いつになっても慣れないものだと優斗は思う。

「そ、そうだね。僕もそう思う。それにね、さっきマリカと一緒に帰ってきてるとき偶然に彼女と会ったけど、マリカが娘だと知ったら『運命の出会いじゃない』って言って帰っちゃったよ。もう会うことはほとんどないんじゃないかな。だからフィオナが気にすることは一切ないよ」

優斗がそう言うとフィオナは目をぱちくりさせて、そしてゆっくりと頭を彼の肩に乗せて目を伏せた。
優斗の身体がビクッとしたが、フィオナは言葉を発した。

「ごめんなさい」

「何が？」

「毎回、同じことやってますよね」

「そうだね」

「進歩、ありませんね」

「問題ないよ。それにマリカも今のママが好きだもんね？」

「あいっ！」

フィオナの腕の中にいるマリカが元気良く返事した。

「ほらっ。夫も娘さんも今のフィオナがいいって言ってるよ？」

優斗の言葉にフィオナはマリカを見て、そして優斗を見る。
優しい瞳をしている優斗と視線が合う。

「いいんですか？」

「もちろん」

優斗が頷くとフィオナもようやく笑顔を浮かべた。

「じゃあ、このままでいますね」

黙ってられない時もある

学院にも保護者会、というものはある。
その際には午後にある授業も保護者は見られるのだが。

「というわけで明日、見に行くわね」

「マリカはどうするんです？」

「もちろん連れて行くわよ」

「……マジですか？」

「マジよ」

「何か問題があるんですか？」

真剣にエリスが答えた。

どうしてなのか分からなくて、フィオナが訊く。

「……平穏に過ごしたい」

「ユウト、そんなもの異世界に来た時点で捨てなさいよ」

「それを言われると困りますけど」

「それにお友達のせいで平穏なんてないんだから、別にいいじゃない」

「……ごもっともです」

まったくもって反論できない。

「ただ、マリカを連れてくるなら僕のことを『パパ』と呼ばせないように気をつけてくださいね。その都度、嘘を考えるの面倒ですから」

優斗が言ったことにマリカが泣きそうになる。

おそらく『パパと呼ばせないで』に反応したのだろう。

「あぅ……」

「ち、違うよマリカ！　パパはマリカのパパだからね」

それに気付いた優斗は慌ててマリカをフィオナから預かって抱き上げる。

「ぱ～ぱ？」

「そうだよ。マリカのこと、嫌いになんてなってないから」

「あいっ！」

ぎゅ～っと抱きしめられて安心したのか、にこにことするマリカ。
それに安堵してほっ、と一息つく。

「大変ね」

「義母さんのせいじゃないですか」

◇　◇

参観できるのは実技の時間だ。
実技の時間は割と自由に動けることもあって、親と話す生徒の姿もちらほらと見られる。
優斗たち異世界組は親もいないので比較的のんびりといられるが、学院に通わせている親にとっては色々とあるため、子供だちも少し必死になっている。
学院の成績が良ければ出世コースにも乗れる。
文武両道ならばなおさら、だ。
貴族の両親には体面というものもある。
ので、今回の参観は普段よりもピリ、とした緊張感の中で行われている。
ちなみに優斗たちの出番を終わっており、のんびりと他の生徒の試合を観戦中だ。

「おい、優斗。あれ見てみ」

修が向いている場所を見てみる。
そこにいたのはリルと卓也とアリーと、
イアンとアリーの父親――王様だった。

「……何やってんの、あの人たち」

「あれって一応、リステルの勇者とうちの国の王様だろ？」

「そのはずだけど」

「王様はいいとしても、そんな簡単に勇者って国から出てこれるのか？」

「知らないよ。もしかしたら伝えることがあって来ただけかもしれないし」

和やかに談笑しているところから察するに、そこまで大事な話になっていないと信じたい。
というより彼らの周りにいる貴族の親たちがイアンとリルとアリーと王様の姿に気付き、話しかけようとしているほうが、一つでも粗相があればこっちのほうが大事になりそうな気がする。

「フィオナのおばさんは？」

「もう来てるよ。さっきからフィオナが話してる」

視線を移せばフィオナたちも和やかに話していたが、リルたち同様に周囲にいる貴族親子が機会を伺っている。

公爵ともなれば接点を欲する下位階級の貴族も多いのだろう。
特に自分の息子がフィオナと恋仲や婚約でもすれば儲けものだ。

「優斗」

「なに？」

「めっちゃマリカがお前を見てる」

視線をマリカに固定させると、確かにじっと優斗を見ていた。

「行ってやったほうがいいんじゃないか？」

「だね。あの場所には行きたくないけど、行かなかったらマリカが泣くだろうし」

このままずっと留まったとしたら、マリカに泣かれかねない。
それだけは避けたかった。
優斗は腰をあげるとフィオナたちに近づく。
エリスがそれに気付いた。

「ユウト。さっきは格好良かったわよ」

「ありがとうございます」

エリスが親しげに話しかけ、それで唐突に現れた優斗に周囲の視線が集まる。
値踏みされているような嫌な視線だった。

「今のうちに慣れておきなさい」

「大丈夫です。こういった視線にはもう慣れています」

「……そうだったわね」

優斗の過去を思い出してエリスが少し暗くなるが、それを壊すようにマリカが優斗に手を伸ばした。

「あぅっ。あうっ」

「マリカがあなたに抱いてほしいって言ってるわよ」

昨日のことがあったからなのか、いつもより懸命にマリカが手を伸ばしている。

「エリス様。さすがに授業中ですので」

“エリス様”？」

「……いや、本当に勘弁してくだい。周りに人がいるのですから」

「関係ないわね」

優斗は声を小さくして、

「……エリスさん」

「誰のことかしら？」

「……義母さん。今は授業中だから勘弁してくれませんか？」

「大丈夫よ。さっきフィオナだってマリカを抱いたけど文句言われなかったもの」

「……分かりました」

こういった場合はエリスも引かない。
諦めてマリカに優斗は手を伸ばす。

「おいで、マリカ」

「あいっ！」

マリカを抱きあげて、小声でエリスに優斗は尋ねる。

「何がしたいんですか？　義母さんは」

「さっきから周りが鬱陶しくて嫌なのよ。フィオナと仲が良い男の子がいれば落ち着くかと思って」

「……甘くありません？　僕は今のところ、平民ですよ」

「だって……」

と、ここで息子を引き連れた男性が寄ってきた。
息子はラッセルの取り巻きの一人だった。
どうやら優斗が親しげなのを見て、邪魔しに来たのか様子を見に来たのかどっちかだろう。

「初めまして、トラスティ公爵奥方様。私は――」

ごちゃごちゃと自分と息子の説明をし始める。

「ほら来た」

「まったく、面倒ね」

相手に気付かせないぐらいに毒づいて、エリスは顔に笑みを浮かべる。

「男爵。申し訳ありませんが私は娘の様子を見に来ておりまして、こういったことはパーティでやっていただけませんか？」

笑みを浮かべながら一刀両断するエリス。

「しかし平民の相手をしている暇があるならば、こちらの相手をしていただいてもよろしいのでは？」

しかし相手も引かない。

息子がラッセルの子分だったとあって、父親も同じ考えの人間だった。

「平民？　それは一体誰のことを仰っているのでしょうか？」

「そちらの男のことですよ。息子から聞きましたが平民のくせに公爵や王族と親しげに話している礼儀のなっていない愚か者のことです」

テンプレのような台詞をよくも初対面の人間に言えるものだと優斗は感心したが、エリスは違った。

義息子にしてフィオナの相手だ。
それを貶すなど以ての外だった。
今まで、何を言われても耐えられると思っていたが、さすがに初めて頭にきた。

「何を勘違いしているのか分かりませんが、この場に平民なんていらっしゃいません。ここにいるのはミヤガワ子爵の長子、ユウト＝フィーア＝ミヤガワ。さらに言えばフィオナの婚約者で私の将来の息子になる子ならいますが、いったいどこのどちらと勘違いなさっているのかしら？」

挑発する笑みを携えて愚か者を見るような視線を向ける。

「し、しかし息子は彼が平民だと！」

「ならばアリスト王もあそこにいることですし、訊いてみますか？
それに息子さんから聞いてらっしゃるから知っておられると思いますが、ユウトはアリシア様と仲がよろしいのでアリスト王とも名前を覚えられるほど面識があります。是非ともご随意に」

そこまで言われると、さすがに引き下がるを得なかったのかすごすごと消えていく。

「……ああ、もう、面倒だったわね」

「やりすぎです」

「しょうがないじゃない。ユウトを貶されたらプツンと来てしまったんだもの」

「そこに関してはありがたいですが、公爵の奥方なんですから耐えてください」

「わかってるわよ。次はできたら気をつけるから」

と、続いて近寄ってくる影があった。
またか、と思った優斗とエリスだったが姿を見て驚く。
とたんに頭を下げた。

「よい。ここにいるのはアリシアの父親だ」

王様が優斗たちに寄ってきたのだ。
周りも注意深く観察していた。

「このあいだ、エリスが焼いたクッキーをマリカから貰った。ユウトには伝えたが美味かったぞ」

「ユウトからもそう伝え聞いております。お口に合い光栄でございます」

「ユウトもアリシアと遊んでくれてありがとう。前にマリカと一緒に遊びに行ったときのことを聞いている」

「いえ、アリシア様に付き合っていただいて、こちらこそマリカが喜んでおりました」

「そうかそうか」

王様が言っているそばから、優斗が抱きかかえているマリカが髭に手を伸ばしかける。

慌てて優斗はマリカの手を押さえた。

「別に髭で遊ぶくらい構わないが」

「王様はよろしいかもしれませんが、なんでもかんでもやりたいようにやらせていたらマリカのためになりませんので」

「それもそうだな」

王様は小さく笑ってその場を去っていった。
続いて王様が向かった先に大半の注意が向かう一方で、優斗たちにも少なからず注目が残る。
その中で優斗とエリスは苦笑した。

「王様は気さくすぎて逆に困りますね」

「そうね」

◇　◇

――夜。
いつものようにマルスに誘われてテラスでお酒を飲む。

「義母さんが怒って言い返したときは焦りましたよ」

「気持ちは分かる。私でも言い返さないとは言い切れないからな」

「僕は別に構わないんですけどね」

「それほど大事なのだよ。私たちにとってユウト君はね」

「ありがとうございます」

少し照れくさくなって、コップのお酒を煽る。

「でも、これでフィオナと僕が婚約者というのが広まってしまうかもしれませんね」

「何か問題があるのかい？」

「いえ、特にはありませんけど」

「ならいいじゃないか。私達にしたって何も問題はない」

マルスもジョッキに注いである酒を一息に飲む。

「さて、と。これ以上飲むと怒られてしまうから、私は先に戻っているとしよう」

いつもは大体、一緒に戻るのに珍しくマルスが先に戻るといってきた。

「分かりました。僕はこれを飲んでから戻ります」

「ああ。ゆっくりするといい」

マルスが優斗の視界から消えて、一口お酒を含んでから空を見た。
月が満月を描いていたので気分が良くなる。
すると、マルスの代わりに一回り以上も小さい身体が優斗の隣に座った。

「優斗さんも飲みすぎは駄目ですよ」

「大丈夫だよ。義父さんのペースに付き合って飲んでるわけじゃないから」

「ならいいんですけど」

安堵したように息をはいて、そしてフィオナは訊く。

「もしかしたら婚約者として学院で扱われてしまうかもしれませんね」

「そうだね」

聞いたのはクラスの極一部かもしれないが、それが広がらないとは限らない。

「いや……ですか？」

「なにが？」

「私が婚約者とみんなに思われることが、です」

「なんで？」

「だってまーちゃんの父親というのも周りに知られたくないようだったので」

「まあ、波風は立たないほうがいいからね」

けれど、と続ける。

「知られたって嫌じゃないよ。面倒だとは思うけど嫌じゃない」

「本当ですか？」

「本当だよ」

優斗は笑う。

「それなら、もし私が本当の――」

「フィオナ。待った」

と、フィオナが言いかけたところで優斗が止めた。

やっぱり嫌なのだろうかと一瞬だけ考えてしまうが、先ほど優斗が否定していたので違うと考え直す。

一方の優斗は立ち上がると窓ガラスへと歩いていく。

「何をやってるんですか？」

そして声をかけた。

「……」

「……」

「これ以上黙ってるなら僕の魔法の実験台にしますよ？」

ぼそりとえげつないことを言うと、

「そ、それは勘弁してほしい！」

「ちょっとした遊び心だったのよ！」

マルスとエリスが飛び出てきた。

「二人して何をやってますか」

「そ、それはだね」

マルスが言いよどんでいると、エリスがばしっと言った。

「娘と義息子のラブラブシーンが見たかったの」

「……ったく、二人とも正座！」

多少は酔っ払っていることもあるのだろうが、普段は修たちにしか言わないことをマルスたちに向かって言い放った。

「出刃亀をするような輩には説教をさせてもらいます！」

そう言って始まった優斗の説教は1時間を要した。

翌日、フィオナにも軽く説教をされて、マルスとエリスは二度としないと誓ったそうだ。

「そうそう、そうすれば精霊を使えるようになるから」

「魔法に似てるようで違うんですね」

「精霊には意思があるからね。彼らの意思を無碍にしちゃいけないんだよ」

「わかりました」

10月に入って少ししたころ、精霊使役の練習をしていた二人に家政婦から来客の知らせが届いた。

「ユウト様、お客様がいらっしゃられました」

「僕に？　誰ですか？」

「リステル第4王女のリル様でございます」

「……え？」

予想外な人物だった。
何しに来たのかが全くわからない。
フィオナと視線が合うが、彼女もよく分からないようだ。
とりあえず家の中に入れると、第一声にこんなことを言ってきた。

「お願いがあってきたの！」

◇　◇

「へぇ～、あなたたちって婚約どころか結婚してたのね。ユウトのいる場所を聞いてビックリしたわ」

「……あー、色々と理由はあるんですが正式に結婚しているわけではなくて」

「だってこの間、ユウトが赤ん坊を抱っこしてるとこ見たときに訊いたらタクヤとかシュウが二人の子供だって言ってたわよ。それに指輪だってしてるし」

リルが指す先にはフィオナの膝の上にいるマリカ。
さらによくよく見れば二人が同じ指輪をしているのだからそう思うのは当然だ。

「……とりあえず説明しますので」

面倒ではあったが長々とこれからも関わっていくので、できるかぎりの説明を優斗は始める。

「この子がそうなんだ」

「ええ。龍神の赤ん坊なんです」

マリカの説明を聞き終えたところで、リルが思い出したように言った。

「って、そうだった。ユウト、あんたってタクヤ達に対してそんな喋り方じゃないでしょ」

「え？　いや、まあ、それはそうですが」

他国の王族に対して口調が変わるのは当然だ。

「あたしにも普通にしゃべりなさい」

「突然、どうされたんですか？」

優斗が尋ねるとリルは少し顔を赤くしながら、

「あ、あたしはあんた達が平民だからって無闇に下に見るとかそういうのはやめるって誓ってるじゃない」

「そうですね」

「だ、だったらあたしにも、その……」

リルは頬をかきながら、

「友達みたいに接してもらいたいと思うのは……普通でしょ？」

照れくさそうに言った。

同等に扱おうと思ったら、友達になってもらいたいと思うのは必然だった。

「だめ？」

そう訊くと優斗は首を横に振った。

「駄目じゃない」

願ってくれるなら歓迎すべきことだ。

「なら、友達としてお願いを聞くよ」

あらためて聞く体制をとると、リルは力強く言った。

「一緒にリステルに来てほしいの」

そしてどうしてリステルに行かなければならないのか、説明を始める。

「やっぱりというか何というか、あたしがやったことって少し問題

になってるのよね。他国の人間に王族が“誓いの言葉”を使ったことに対して、ね」

「そうなんだ」

「あの言葉は撤回できるものでもないけど、少なくとも説明はしないと納得もしてもらえなくて」

だからこそリステルに一度、戻ることになった。

「それで僕が一緒に行く理由は？」

「念のための護衛、っていうのが一番正しい理由だわ。僅かな可能性ではあるけれど、襲われる懸念もある。まあ、ないだろうけど」

「襲われる？」

「あたし、何人か婚約者候補がいたんだけど、そいつら全部を蹴ってタクヤに誓っちゃったから。もしかしたらっていう可能性があるし」

リルから“誓いの言葉”を得られれば、婚約者候補にとっては婚約者になれるのと同義だ。

ということは他国のタクヤに使ったのなら、逆恨みされる場合もあるかもしれない。

もちろん、未だに婚約者の候補という枠組みからは外れていないのも事実なのだが。

「でもタクヤには悪いけど、当事者だし一緒に来てもらうわ。他の人たちにはあたしのせいで手を煩わせるわけにもいかないから、ユ

ウトだけにお願いしたいの」

「国から護衛を呼んだりギルドに頼んだりしたら？」

「言ったでしょ。あくまで念のためにすぎないって。ほとんど旅行みたいなものよ。それにギルドや護衛よりあんた一人のほうがよっぽど強いじゃない。黒竜を魔法一発で倒したり本気になったら世界がやばいとか言ってるんだから」

優斗以上の護衛なんてほとんど存在しない。

「お願いしていい？」

「……へぇ」

リルの言葉に感嘆した優斗。

それが気になってぶっきらぼうにリルが訊いた。

「何よ？」

「本当に変わったね」

瞬間、リルの顔が赤くなった。

「ち、誓ったって言ったじゃない！」

「分かった分かった」

苦笑する。

「護衛ってことはフィオナとマリカはお留守番だね」

「あ、ちょっと待って。この子が龍神なのよね？」

危ないことになるから二人は残そうと思っていたのだが、リルからストップがかかる。

「そうだけど」

「それなら一緒に来てもらってもいい？」

「どういうこと？」

「龍神の赤子がリライトにいるというのは教えてもらっているけれど、リステルの者で実物を見たのはいないのよ。その情報を本当なのか問われたところで真実だと言い切れる者もいないの」

「それで？」

「むしろリライトが龍神の赤子がいる、と嘯いて信者の方々を呼び寄せようとしているのかもしれない、と勘繰る馬鹿も出てくるかもしれないわ」

「先にそれを潰しておきたいと？」

「ええ。この間にアリーのお父様に話をして、機会があればと言っていたの。それなら今回はちょうどいい機会になると思って」

話した場所が場所なので龍神の赤ん坊の正体までは知らされていなかったが、この子だとは驚きだった。

「それをすることによって得られるのは？」

「より強固な信頼関係。正直な話、あたしがやったことも好転させればリライトとの関係強化に繋がるし、さらに龍神の赤ちゃんを来させられるほど、リライトとリステルの関係が素晴らしいものだと知らせることもできるわね」

両国の関係性を国内にも国外にも示すことができる。

「仲が良いところを国内外に知らせたところで、デメリットはないわ」

と、ここでリルは軽い口調で、

「家族旅行だと思って来たらいいじゃない」

「……もう一度訊くけど、危険はないんだよね？」

「ないわよ。あったとしても１０％もないわ」

「りょうかい。それなら連れてくよ」

「ありがと。そしたらまずは、アリーのお父様に話を通しておかないと」

言葉というのはフラグとして残る

馬車に揺られながら一行はリステルへと向かう。

「初めて他国に行くね」

「そうだな。こんなことで行くとは思ってなかったけど」

卓也としては巻き込まれた感で一杯だ。

「何よ、文句あるの？」

「微妙に大事になりそうなことを軽々とやるなよ」

「仕方ないじゃない。ああするのが一番だと思ったんだから」

「だからって一生に一度しか使えない言葉をそこで使うな」

「なんですって！？」

広くはない馬車の中で卓也とリルが口ゲンカを始めようとする。

そのときだった。

「たー！　りー！」

マリカが大きな声で遮った。

「……今のなに？」

マリカの言葉の意味がわからず、リルが優斗とフィオナに問いかける。

「おそらく卓也の『たー』にリルの『りー』だと思うけど」

「そうですね。そういう意味でしょう」

二人がマリカの言葉の意味を代弁する。

「マリカがケンカするなってさ」

ねっ、と優斗がマリカに同意を求めると、意味を理解してるのかしてないのかわからないが、大きく頷いた。

それで卓也とリルの気概も逸れた。

「マリちゃんに言われたら仕方ないわね」

「そうだな」

◇　◇

そして、それ以降は特に問題もなくリステル王国へと入った４人は王城へと向かう。
話は通してあったので、そのまま玉座へと向かう。
たどり着くとそこにいたのは６０歳は過ぎていそうなおじいさんと呼べる人が座っていて、傍らにはイアンがいた。
優斗、卓也、フィオナは方膝を立ててしゃがみこんで顔を伏せる。

「彼らがリルの学友かい？」

「そうよ」

リルが頷く。
とりあえず父親でも口調が変わらないことに驚く。

「顔をあげなさい。呼び寄せたのはこちらなのだから」

ほっほっほっ、とリステル王が穏やかに笑う。
言葉を聞いて優斗たちは顔をあげる。

「まずは龍神の赤子をみせてもらってもいいかね？」

「はい」

フィオナが立ち上がり、リステル王へと近づいていく。

「マリカと言ったね？」

「その通りでございます」

「証拠を見せてもらってもいいかい？」

穏やかな口調でフィオナに聞く。

フィオナは左手の薬指にはまっている指輪を見せた。

「ありがとう。確かにこれは龍神の指輪だ」

「父親役は彼でいいのかい？」

リステル王が視線を優斗に向けると、フィオナは静かに頷いた。

「君たちの事情はリライト王から聞いているよ。大変だね」

「お父様。事情って何？」

「こちらの話だよ」

言葉を濁す。

けれど視線は優斗に向けたまま、

「ユウト、と言ったね。黒竜の件についてはイアンからも話を聞いているよ。私たちの問題に巻き込んでしまってすまなかったね」

「いえ、大切な友人であるリル様を守ることができて光栄であります」

「そう言ってくれると助かるよ」

微笑みを維持しながらリステル王は続いて、

「君やリライトの勇者がリルの友人というのは私としても喜ばしいかぎりだ」

「……それはどのように受け取ればよろしいのでしょうか？」

「褒め言葉だよ。君たちほどの力を持つ者が友好的であるというのは、隣国であるリステルにとっても喜ばしいんだよ」

リステル王に言われて優斗は少し考えるが、その言葉の意味に気付く。

「侵略される可能性が減る、という観点からでしょうか？」

リステル王は優斗の言葉に少しだけ目を見開いたが、微笑みはそのままだ。

「そうだね。リライト王が今の王であるかぎり心配はないと思うが、それでも不安の種は残るものだからね」

「大丈夫です。その点については心配ないと断言できます」

「ほう。どうしてかね？　君たちならば一国の主になれるだろうに」

「利点がないからです」

どういう意味なのか、という視線をリステル王が送ってきたので優

斗は答える。

「我々は異世界からやってきました。考え方がまず違っています。民主主義で戦争というものを忌避するべきものと考えている我々からしたら一国の主という考えは『大それた話』になります。さらに私やリライトの勇者の幸せというものはもっと素朴なものなのです」

「一国の主というものは幸せになり得ないのかい？　リライトの領土も増えるというのに」

「それは『リライトの幸せ』ということになります。あくまで私の幸せという話になりますが、少なくとも私の幸せは友達と楽しく遊べて、フィオナと一緒にマリカを育てられる環境のことを指します。もしも他国の侵略を私たちの力を頼りにするとするならば、友人と遊ぶ時間はなくなる。さらにマリカの面倒も見れなくなると何一つ利点がありません」

リステル王は優斗の言葉の審議を問おうと目を細める。

けれど彼の言葉に嘘はないと判断したのか、先ほどの微笑みを浮かべた。

「確かに侵略は君の幸せとは程遠いね」

「はい」

リステル王は何度か頷くと、続いて卓也を見た。

「そして君がリルから“誓いの言葉”を受けたタクヤだね？」

「は、はいっ！」

「ほっほっ、緊張しなくてもいいよ。君を問いただしに呼んだわけじゃないのだから」

とは言うものの、この状況で緊張しないほうがおかしい。

「リルのことだ。君に意味など教えずに使ったのだろうし、君に非はないよ」

「お、お父様！？」

「だってそうだろう？　見届けたイアンからもリルが問答無用で使ったと聞いているよ？」

「そ、それはそうだけど、見境なしに使ったわけじゃないわ。ちゃんと考えて使ったんだから。タクヤになら言ってもいいって思ったから」

「おかげで婚約者候補はみな、うな垂れていたようだ」

「別にあんな連中がどう思おうと知ったことじゃないわ」

「確かにどうしようもない連中もいたことは確かだが、幾人かは素晴らしい人物だったのも確かだよ」

「それでも嫌なものは嫌なの！」

「……本当に仕方ない娘だ」

呆れたように笑う。

「タクヤ。こんな娘でよかったら貰ってくれないかい？」

「へっ！？」

唐突に言われてすっとんきょうな声が出る。

「気が強くわがままなところもあるが、これでも可愛いところもあるのだよ」

「いや、でも、他国の王女がオレみたいな一般人と結婚ってまずいんじゃ！？」

卓也の反論の中に「嫌だ」という言葉が入っていないということは、少なくともリルのことを悪く思っていないことが分かる。
それに気付いたのはリステル王と優斗だ。
卓也本人でさえ気付いていないのかもしれない。

「君は王族よりも希少な異世界の人間だ。そしてリライトで下位ではあるけど爵位を持っている。少なくとも嫁がせる先というには問題がないと思っているよ」

さらなるリライトとの友好の架け橋になる。

「だけど出会って１ヶ月も経ってないんですよ！？」

「君の世界ではおかしいのかもしれないが、こっちの世界では顔も知らなかった同士が結婚する場合もあるのだよ」

「け、けれど……」

卓也がちらりとリルを見る。

「何よ、嫌なの？」

「い、嫌ってわけじゃないけど……」

なんだかんだで一緒にいて楽なのは確かだ。

「じゃあ何なのよ！　悪いけどあたし、あんたに誓ってるんだからね！」

彼以外の誰かに誓うことはもうない。

「……うぅ」

「はっきりしないわね！！　イエスかノー、どっちなのよ！？」

痺れをきらせたリルが問い詰めた。

反射的に卓也が答える。

「イ、イエス！！」

瞬間、卓也の運命が決まった。

さらにリルの顔がほっとしたのを卓也以外の人間は見逃さない。

そういうことだったのか、と卓也とリル以外が目配せする。

「ほっほっほっ、それならばリライト王に書状を送らないといけないね。たった今、リライトとリステルの友好の架け橋ができたのだから」

リステル王が頷くと、当人達以外は頷いた。

「いや、まさか卓也が本当に国外の人と婚約するなんて思って無かったよ」

笑って卓也の肩を叩く優斗。

「ビックリですけど、お似合いだと思います」

「リルが他国との架け橋になるために婚約したとなれば他のものも納得するだろう」

それぞれが言葉は違えど祝福？　のようなことを言う。

「えっ？　ちょっ！？」

「言質はリステル王族にリライト公爵、子爵と聞いてるから」

無駄な抵抗はしないほうがいい。

卓也は何かを言おうとして、そして……無駄だと悟ったのか何も言わなかった。

まあ、実際のところは何かを言おうとしたところで、結局は自分だってそこまで嫌がってないのだから反論しても無駄だと思ったからだ。

何だかんだで腹をくくった卓也がリルと二人で先頭を歩いていた。
離れた後ろでは優斗とフィオナ、イアンが話している。

「ねえ、タクヤ。ユウト達の“事情”って何？」

「聞いてないのか？」

「ユウトとフィオナが婚約者でも夫婦でもないってことは聞いてるけど」

それ以外にあるのだろうか。

「さらに言うなら恋人同士ですらない」

「……それはひょっとしてギャグで言ってるの？」

「残念ながらマジだ」

「あれだけラブラブで？」

「あれだけラブラブで」

それが事実だとすると龍神の親になる前提条件が分からなくなってくる。

「あたしは恋人ぐらいなら龍神の親に選ばれるものって思ったんだ

けど」

「それが違うから、せめて今までの親たちと同じような関係に偽装したってこと」

「そんなこと言っても、あの二人って全盛期の恋人とかと同レベルの甘い空気出してる時ない？」

「たぶん、そこがマリカに選ばれた理由なんじゃないかと睨んでるよ、オレは」

そのまま6人で夕食を取り、本日は王城に泊まることとなった。
フィオナとマリカとリルは一緒の部屋で寝ることになり、男子もイアンが優斗たちに訊きたいことがたくさんあるとのことで一緒の部屋になることになった。
そして食事をした広間から各々の部屋へ向かっている途中で、変に待ち構えている人物に出会った。
後ろには従者を引き連れている。

「お久しぶり。イアン様、リル様」

「うわっ、ガリア侯爵」

気まずそうにリルが顔を背けた。
イアンはやれやれ、と返事をする。

「どうかしたのか？　今日はもう仕事はないはずだが」

「いやだな。リル様が“誓いの言葉”を使った相手を見に来ただけだよ」

そう言って卓也を値踏みするように睨め付ける。

「リル様もこんな輩を婚約者にするのだったら、私を選べばよかったのに」

瞬間、リルが反論する。

「あんたなんて絶対イヤ！　あんたよりもタクヤのほうが1億倍マシだわ」

「まあ、私を選ばなかったことを後悔するのは貴女でしょうが」

そしてガリアの視線が優斗に移り、フィオナと……マリカで少し留まる。

小さく笑った。

「それでは私はこれで失礼するとしよう」

一応、ガリアは小さく頭を下げて通り過ぎていく。

卓也は意味が分からず、

「あれ、誰？」

「元々はあたしの婚約者候補。父親が死んでからあいつが侯爵の地

位を継いだんだけど、論外すぎて話にならないわ」

「どういう意味なんだ？」

「頭悪い、短絡的、自己中心的、その他もろもろよ。あいつの父親は優秀だったけど、次に問題起こしたら父親の貯金も使い果たして余裕で爵位降格。それぐらいの酷い奴」

リルがボロクソに言う。
その一方で優斗は嫌な不安を感じた。

「……イアン様」

「なんだ？」

優斗はイアンの耳に口を寄せる。

「マリカのことを知ってる貴族って……どの爵位までですか？」

「ん？　リステルで知っているのは王族の私達だけだが」

イアンの返答に優斗は眉をひそめる。

「……」

「どうかしたのか？」

「ガリア侯爵……でしたね。彼の視線がフィオナとマリカに移った時、笑ったんですよね。しかも笑い方が赤ん坊を見たときに出る笑いじゃなくて、もっと不快な笑い方で」

悪寒が走った。

「それは私も見ていたが、彼は基本的にああいう笑い方だ」

「ならいいんですが、何となくマリカの正体を知ってそうな気がして」

「気のせいじゃないのか？」

「あくまで気のせい、というならそうですが……」

ふむ、とイアンも考える。

念のためということもあるだろう。

「ならばリル達の部屋には護衛をつけよう。泊まる部屋も隣同士ならば何か問題があればすぐに駆けつけられる」

◇　◇

結局のところ、夜には誰も来なかった。

女性陣はたっぷりと話したところで眠り、男性陣もイアンの質問攻めが終わったところで気付いたら眠っていた。

そして朝、比較的寝坊などをすることのない優斗とイアンが目を覚

ます。
ドアを開けて隣を確認すると、護衛兵が問題ありませんと伝えてきた。

「どうやら杞憂だったようだ」

「そうですね。お手数をお掛けしてすみません」

「いや、いい」

卓也を起こし隣の部屋に朝食を食べることを伝えたら、まだ準備に時間が掛かるから先に行っておけと言われた。
念のため護衛兵に朝食を取る場までは護衛をするように頼み、３人は先に出て朝食を取る場へと着く。
しかしそこから、５分、１０分と待つ。

「女性の身だしなみを整える時間はどうにかならないものかと常々思う」

「僕はもう慣れました」

「オレは優斗までの心境にはなれないな」

けど、女性だから仕方ないかと優斗たちは笑う。
そう話していた瞬間だった。

爆発音が響いた。

反射的に3人は立ち上がる。

「今のって……」

「爆発か！」

「場所は！？」

食事場から飛び出してバルコニーへと出る。

真下にあるキレイに並ばれた森林を超えて、５００メートルほど離れた王城域内の広場から煙が見える。

下を見れば今の音と煙に反応して幾人かの兵士が向かっていく姿が映る。

煙でそこにいるのが誰なのかは分からないが、片方は少数でもう片方は2，３０人ほどはいそうだ。

「一体、誰がこんな朝からやっている？」

イアンの疑問も当然だった。

けれど、嫌な予感がする。

フィオナとリル、マリカがまだ来ていない。

優斗は間違いであってくれと願うが、次に起こった現象が優斗の願いを崩す。

竜巻が少数グループから生まれたのだ。

しかも現象が見える少し前に、薄く緑色に光る何かが彼らの眼前に。

そして身体のどこかが白く煌くのが見えた。

――たぶん、あれは……。

龍神の指輪を使ったから。

精霊の召喚を行なったから精霊が現れ指輪が光った。

「……フィオナ、だ」

それに気付いた瞬間、全身から冷や汗が出た。
大切な人が襲われている。

「――ッ！！」

バルコニーから飛び出た。
高さは２０メートルほどあったが風の魔法を使って身体を減速させて着地。
そのまま駆け出す。
イアンがすぐ後ろについていて、卓也も少し離れた場所から優斗を追っている。
走りながら優斗が願うのは唯一つ。

――間に合え。

一秒でも早く、フィオナのところにたどり着く。
それだけが優斗の想っていることだった。

君を失うことに耐えられない

優斗たちから遅れること5分、フィオナとマリカ、リルが部屋を出る。
護衛兵2人も一緒に歩いていると、目の前に完全武装をしている兵士が5人現れる。
疑問に思ったのはリルだった。

――あれって王城勤めじゃないわね。

武装姿が通常の兵士と違っている。
その違いが足を止まらせた。
次いで護衛兵2人も異変に気付く。

「どうかされたんですか？」

一人、フィオナだけがまだ状況に気付いていない。
リルが後ろを見れば、前にいる兵士と同じ服装の奴ら5人。
囲まれていた。

――狙いはタクヤじゃなくてあたし？

ずいぶん堂々と来たものだ。

「フィオナ、ごめん。囲まれた」

リルが緊張感を漂わせ、護衛兵が前後に別れた。
フィオナもそこで初めて状況を把握し、マリカを強く抱き寄せる。

場所的にはすぐ横に窓があり、そこが開いている。
逃げるには打ってつけだ。
リルが視線だけでフィオナに合図を送る。
フィオナが気付き、頷いた。

「――ッ！！」

次の瞬間、二人は同時に窓から飛び出す。
地面までの高さは１５メートルほど。
フィオナは上手く着地したが、風の魔法がそれほど得意ではないリルは十分な減速が出来ずにお尻を強打したが、それでもすぐに立ち上がって走る。
最初は城の中に逃げようとも思ったが、右から左から兵士が出てくるので真正面、森林のほうへと逃げる。
走って走って走って。
城から少し離れた訓練でも使われる広場に出る。
そこで……囲まれた。
３０……いや、４０人はいた
そして武装した兵士の中から、一人だけ小奇麗な格好をした男が出てきた。

「ふん、あんたの仕業ってわけね。ガリア侯爵」

「いかにも。私がやっているよ」

「なに？　あたしを殺したいの？」

「いやいや、最初は君の婚約者を殺そうと思っただけど、君を殺そうと思ったことはないよ」

「ならこの状況は何よ」

睨みつけるリルにガリアは視線をフィオナとマリカに留めた。
首を傾げるフィオナだが、彼女が抱いている赤ん坊は普通の赤ん坊ではない。
そう、卓也を殺しに行ったときに聞こえてきたのだ。

「リル様と婚約者の話を偶然聞いてしまってね」

その“話”が何を指すのか。
なぜフィオナとマリカを見てるのか。
リルはすぐに気付く。
あまりの迂闊さに悔しさで顔をしかめた。

「それならば、と思ったわけだよ」

ガリアは欲望を滲ませる笑みを惜しげもなく前面に出した。

「私が龍神の親になろうとね」

「なっ!?」

「ば、馬鹿じゃないの!? あんたがなれるわけないでしょ!!」

フィオナが絶句し、リルが反論する。

「いやいや、君たちの話を要約すれば龍神の親というものは夫婦や婚約者どころか恋人ですらなくてもなれるというものじゃないか」

つまりは誰にでも可能性はあるということ。

「私は王族を迎えるのと龍神の親、二つを量りにかけて後者を取ったんだよ。この世界で最大の崇拝対象たる龍神。その親ともなれば王族よりも遥かに価値がある」

クックッ、とこみ上げる笑いを堪えきれないガリア。

フィオナを指差す。

「今ならば君も妻に迎えてあげよう。顔は素晴らしく他国の公爵家だ。私の妻になるには分相応。これで仮初めの婚約者、嘘の夫婦を演じる必要がなくなるのだから君にとっても悪い話じゃないだろう？」

そうすることがベストだ、と言うようにガリアは笑い続けている。

その一方でフィオナは心の奥底からふつふつと怒りがこみ上げてきた。

どう勘違いしたら、そういった結論になるのだろうか。

――仮初めだとか、嘘だとか。

心底、どうでもいい。

自分にとって重要なのは“優斗と一緒にマリカを育てること”だ。

「仮初めの婚約者？　嘘の夫婦？　だからなんだっていうんです」

ガリアがマリカの父親になるなど冗談ではない。

マリカの父親はたった一人。

優斗なのだ。

「嘘だとか偽りだとか、何一つまーちゃんを育てることに関係あり

ません」

「少なくとも君みたいな女性があんな偽りの夫を持っているのは君にとって苦しく、悲しいことだろう？」

分かっているよ、と言わんばかりのガリアにフィオナは初めて敵意を向ける。

何を分かったように語っているのだろう。

ぜんぜん、全てが間違っている。

――苦しさなんてありません。

楽しい日々ばかりだ。

――悲しさなんてありません。

嬉しい日々ばかりだ。

その全てがマリカと優斗から得られている日々だ。

優斗がいなかったら得られなかった日々だ。

この気持ちは偽りじゃない。

「関係が偽りだったとしても、私の気持ちは何一つ偽りなんてない！」

声を張り上げろ。

宣言しろ。

――初めて私と一緒に遊んでくれた男の子を。

いつでも隣にいてくれる男の子を。

――初めての感情をたくさんくれた男の子を。

いつでも微笑んでくれる男の子を。

――私が。

どれほど想っているのかを。

「私は」

心から。

「私は優斗さんを愛しています！！」

声を高らかに、言い放つ。

そして笑んだ。

「だから私の夫は偽りだとしても優斗さんがいいんです」

「彼は君を想っていないのかもしれないのにかい？」

「優斗さんが私を想っていなくても、関係ありません。私が彼を愛しているだけなのですから」

ただ、それだけの事実が自分の裡にあればいい。

「そしてもう一つ」

龍神の親はなろうとしてなるものじゃない。

「私達の関係が偽りに満ちていたとしても、優斗さんがまーちゃんの父親じゃなくてもいい、なんて理由はどこにもありません。まーちゃんが優斗さんを父親に選んだのですから」

マリカが自ら、優斗を選んだ。

「だからどんなことになろうとも貴方が龍神の父親になることはありません」

フィオナが言い切る。

が、ガリアはそれを聞いてなお、自分が龍神の親になれることを信じて疑わない。

「元々、龍神の赤ん坊をダシにして父親のほうは殺す予定だったんだ。君も私の妻にならないなら死のうか。顔が良くて公爵家だから

妻にしてやろうと思ったが、否定するなら生かす必要性もないしね。
ただ私が父親になればいいだけのことだから」

ガリアはそう言って手を上げた。

「構えろ！」

彼の後ろにいる兵士が一斉に構える。
けれど3、4割の兵士は戸惑いを隠せない。
いくらガリアの私設兵士といえど、まともな人間はいる。
話を聞いていればあの二人が龍神と母親とういことは理解できた。
赤子とはいえ龍神と、龍神を育てている母親に手を出すなんて大それたことを出来るはずもない。
かといって雇い主に逆らうこともできず、構えるだけ構えて後ろに下がる。
フィオナはリルにマリカを預ける。
リルは魔法が得意ではない、ということなので実質的な戦力はフィオナだけだ。
多対一。
攻撃に出ることなんて考えられない。

――きっと、戦いが始まったらすぐに優斗さんが来てくれる。

2分でいい。
耐え切ろう。

「放て！」

後ろで火球を携えていた魔法使いが放つ。
フィオナは咄嗟に風の壁で直撃を避ける。

しかし、その間にカマイタチがフィオナの左腕を裂く。
深くはないが、血が溢れてきた。
さらに後ろには巨大な岩と火球が見える。
フィオナはすぐに考えを変える。

――ペース配分なんて考えてられない！

最初は2分で満遍なく魔力を使いきろうとした。
けれど無理だ。
人が多すぎる。
少しでもどこかで手を抜いたら死んでしまう。

――全力で防ぎきるしかない。

それが1分後に駄目になろうが、2分を持たなかったとしても。
全ての魔法を防ぎきる障壁を作らないと駄目だ。

――なら、今の私にできる最大の防御は。

優斗に教えてもらった、これしかなかった。

『三界を流浪する天の使者よ。龍神の指輪の名において願う』

唱えている間に左肩もカマイタチで切れる。
けれども、痛みを無視してフィオナは続ける。

『来て』

そして傷ついた左腕を前に突き出す。
指輪からは白い光が溢れていた。

『シルフ！』

名前を呼んだ瞬間、薄い緑色の女性が現れる。
直後、強烈な竜巻がフィオナ達を包んだ。
竜巻は火球も岩をも通さない。
剣を持った兵士も近づけず、何もできない。
けれど30秒もしないうちに息が荒くなり、身体が崩れそうになる。
風の精霊を統括する大精霊を呼び出したのだ。
しかも全力での防御。
魔力の減りが凄まじかった。

「ちょ、ちょっとフィオナ！！　大丈夫なの！？」

心配そうにリルが訊いてくる。
ちらりと視線を向ければマリカは泣きそうになっていた。

「……まんま」

「だいじょうぶ……ですよ。ママが……守りますから」

かろうじて笑顔を見せて、さらに力を込める。

――私は、優斗さんじゃないから。

強くないから。
倒すことなんてできないし、こんな人数を相手にしたら守りきることもできないかもしれない。

――でも、守りきれれば。

1分と少しが経過した。
竜巻の障壁は崩れ始め、ついに火球が小さくなりながらもフィオナの右腕にかすった。

「まだ……まだ……っ！」

頑張る。
振り絞る。
そうすれば来てくれる。
前にリル達が襲われたときも、自分と似たような状況だった。
優斗から話を聞けば、あんなタイミングで現れることができたのは修が勇者で主人公体質だからって言っていた。

――彼は自分を勇者じゃないなんて言うけれど。

勇者っていうのは修みたいな奴を言うんだ、って笑うけど。

――少なくとも私にとっては。

彼は。

――優斗さんは。

誰よりもかっこよくて優しい。

――私の勇者様なんです。

身体が倒れそうになる。
竜巻が消えそうになる。

そのどっちもをを必死に堪えようとして、駄目だった。
竜巻を精霊自身が止めたのだ。

「……どう……して？」

フィオナが問いかければ精霊は消えかかりながら微笑を浮かべて、ある方向を指差した。
気付けば誰かの叫び声がして攻撃が止まっている。

「……あっ……」

そして精霊が指した先には……彼がいた。

「貴様ら、何をしているッッ！！」

イアンが吼えた。
突然に現れたリステルの勇者に攻撃がピタリと止まった。
優斗はそのままフィオナの元へと駆け寄る。
今にも崩れ落ちそうな彼女はきっと、最後の一滴まで魔力を使い切っているのだろう。
けれど精霊から指を指された自分を見たとき、彼女は嬉しそうに笑った。

優斗はフラフラなフィオナの身体を抱きとめる。

「……無事でよかった」

よく見れば右腕は少し煤けており、左肩と左腕は切れていた。
心が締め付けられそうになる。

「……私……頑張りました」

「うん」

フィオナに治療の魔法をかけながら、身体をしっかりと抱き寄せる。

「まーちゃんを守ったんですよ。パパがいない時はママが守ってあげられるんだって教えてあげられたと思います」

「……うん。ホント、僕の自慢の奥さんだ」

「でも少し疲れたので……あとは任せてもいいですか？」

「……うん。ゆっくり休んで」

魔力を使い果たして気を失ったフィオナを、優斗は優しく寝かした。
遅れて着いた卓也に治療を続けるように頼んだ。
卓也のほうが治療の魔法については実力が上だからだ。
続いて優斗はリルとマリカのところへと向かう。
フィオナが倒れて大泣きしているマリカがいた。
懸命に優斗に手を伸ばしていたので、マリカを預かる。
背中をリズムよく叩く。

「ごめんね。パパ、来るの遅かったね」
そして言い聞かせるように優しい声音で話す。
「けれどママがちゃんと守ってくれたよね？」
「……あいっ……」
しゃくりながらもしっかりとマリカが返事をした。
「もうパパが来たから、マリカは泣かないよね？」
「……あいっ」
先ほどよりも強く頷く。
「マリカはママに似て、強い娘だもんね」
「……あいっ！」
さきほどよりももっと力強く頷く。
「じゃあ、もうちょっとリルと一緒にいてね。パパはやることがあるから」
泣き止ませたマリカを再びリルに預ける。
そして踵を返した。
イアンがガリア達に何かを言っているようだが、優斗にはどうでもよかった。

「貴様達、何をしているのか――」

「そこにいるので全員か？」

イアンの言葉を遮って伝えた。
まったく声を張っていないのに、なぜかイアンよりも響く。
同時にその場にいた人間の毛という毛が逆立つ。

「どうした？　意味が分からないのか？」

普通に尋ねるように訊いているが、違う。
あまりにも冷え切った声音と感情に。

「……っ！！」

誰も彼もが、言葉を失い恐怖で身を竦ませた。
特にガリアの側にいる人間は身体すら震わせている。

「死にたいのはそこにいるので全員かと訊いてるんだ」

あまりに軽く問われる。
それは彼らの命が優斗にとって本当にどうでもいいものであり、そんな奴らがフィオナ達を襲ったことに心底殺意を芽生えさせているからだ。

「どうする？　今すぐ楽に死ぬか、それとも苦痛に喘いで死ぬか」

簡単な相談事のように訊いてくる。
けれど誰も返事ができない。
誰かが選択してしまえば、すぐにでも始まりそうな地獄絵図に卓也

はフィオナの治療を終え、リルに駆け寄り声をかける。

「リル、覚悟だけはしとけ」

「な、何を？」

「今日、リステルが無くなる覚悟をだ」

卓也もリルも優斗の殺気に身体を竦ませているが、おそらくはガリア達ほどではない。
話すぐらいの余裕はあった。

「じょ、冗談……」

「冗談なわけないだろ。あいつがキレたとこは見たことあるけど、ブチ切れたとこはオレも見たことないんだよ。だから下手したら、国ごとやりかねない」

そしてそれが叶えられるほどの実力の持ち主だとリルは知っているはずだ。

「けれど、そしたら国民の命だって」

「悪いけど、あいつにとってフィオナとマリカの命のほうが重い」

「で、でも数十万、下手したら百万人以上の命よ？」

それをあの優しい優斗が奪うというのだろうか。

「オレら全員、結構普通じゃないけどな。イカれてるって話なら和

泉でも修でもなく、優斗が一番イカれてるんだよ」

それは生まれてから過ごした教育と、環境がそうさせたものだ。
だからこそ、今の優斗の性格は全ての詳細を知っている卓也からしてみれば凄いと思う。
狂わず、擦れず、親を反面教師にして弱い心を押し隠し、強く在る。
優斗の普段の性格が“あんな性格”なのは、彼の本質の一つである優しさと努力と願望によるものだ。
純粋で一途な芯があるから。
今の優斗の性格がある。

――ただ、それだけに。

何十にも鍵と鎖で奥底に秘めている裏の本質という点では、優斗が群を抜いてヤバい。
もちろん普段はそれが表に出ることは絶対にない。
今回のようなことがないかぎりは。

「……大丈夫なの？」

その問いはリステルの国が、なのか。
それとも優斗が、ということなのかは分からなかったが、とりあえず優斗のことについて答えることにした。

「大丈夫だよ。約束してるんだ」

自分達が無二の仲間になったときに約束していた。
優斗は自分の性格と本質を知っていたから。
分かっているからこそ自分達にこう言った。

「あいつが壊れたら殺してでも止めるって」

優斗がどのように壊れてしまうかは分からないが、少なくとも“今”はまだ問題ない。

「たぶんオレら仲間が殺されないかぎりは壊れないから大丈夫だと思う。案外あいつも耐久力あるから」

「もし、壊れてしまったら……止められるの？」

世界を破壊できる可能性を持っている男だ。

卓也では止められそうにない。

けれど卓也は

「優斗は壊れようがどうしようが絶対にオレらには手を出さない。だからさっきも言ったとおり、殺して止めるんだよ」

優斗はそうしてくれと言っていた。

「けれど“大切”の中でも特別なフィオナとマリカに手を出してるんだ。こう言いたくはないけど、リステルぐらいは無くなる覚悟はしておけ」

その卓也とリルが話している途中でリステル王がこの場にやってきた。

そのことに気付いた優斗が視線を向ける。

少しだけ威圧が収まったのか、ガリアが声を発した。

「わ、私を殺す！？　そ、そんなことをすればリライトとリステルの戦争が起こるぞ！」

優斗は再びガリアを見る。

「だから？」

何だというんだ。

「お前ごときを殺したところで戦争が起こるわけもない。仮に戦争が起こるとするのならリステルごと滅ぼしてやろうか？　そうすれば戦争は起きない」

そう言ったところで優斗はふとやってしまったことに気付いた。

イアンに謝罪する。

「……悪い、言い過ぎた」

怒り過ぎていて言葉が過激になっている。

彼らを許すことは出来ないが、それでも言葉は選ぶべきだった。

「悪いのはあいつらだけ、なんだよな」

「ああ」

優斗は頷くイアンとリステル王の二人に視線を向けた。

「リステル王、イアン。僕は言ったはずだ。僕の幸せは何なのか、と」

初めて謁見したとき、自分の幸せは友達と遊べてマリカをフィオナと育てられることだと。

しっかりと伝えた。

「選べ」

そのうちの一つを奪おうとした輩が目の前にいるのだ。

「僕がこいつら全員を殺すか、お前らがこいつら全員を社会的に抹殺するか。二つに一つだ」

選択肢はこの二つしか残っていない。

けれど空気を読めない男は声を荒げた。

「お、王よ！　私は龍神の親になることが国の利益になると信じて行動に移ったまでです！　仮に彼らを殺したとしても弱気なリライトのことだ、こちらが強気で知らぬ存ぜぬを通せば戦争にはならない！」

ガリアはまるで演説するかのようにリステル王へと話し続ける。

「王よ！　民のためにも彼らを殺し、私を龍神の親に！！　それが一番なのです！！」

けれどもリステル王は、そんなガリアを見て……深く頭を振った。

「ガリア侯爵……いや、ガリアよ。君はなぜ、龍神の赤子がこの国に来たのか分かっていないようだ」

「ど、どういうことですか！？」

少し考えれば分かることなのに、ガリアは問いかける。

「リライト王が我が国ならば、と信用して護衛すらも付けずに送り出してくれたのだ。お前がやっていることは先代から築き上げた信用を壊すものだというのが分からぬか？」

先代からの全て壊そうとしている。

「し、しかし！」

「さらに龍神の父親、ユウトはリステルの災害の一つである黒竜を倒した張本人でもある。その恩人に対してお前がやったことは何だね？　彼を殺そうとし、彼の妻を殺そうとし、娘を略奪しようとしている。しかも妻はリライトの公爵家の血筋であり、娘は龍神だ。いつからリステルはそこまで非情で非道な国になった？」

「で、でも彼らの関係はまがい物で――」

「黙りなさい！！」

ここで初めてリステル王が声を荒げた。

「私はね、今は君をどうしてやろうか、と考えているんだ。本来ならば先ほどユウトが言っていた通り、リステルごと滅ぼされても仕方ないことをしたんだよ。その力が彼にはあるというのに」

彼の幸せというものを聞いておきながら、それを壊そうとしているのはガリア。

もっと大元を辿ればリステルという国だ。

「今は温情だけで生かしてもらっている。それを報いるにはどうす

るか。そのことを考えるので本当に頭が一杯だ」

極刑ですら生ぬるいとしか思えない。

次いでイアンが優斗に話しかける。

「黒竜のとき、君たちに助けてもらった。そんな恩人たる君の手を煩わせる価値もない人間だし、こんな奴をいつまでもこの地位に置いていた我々の失態だ」

使えないものを使えないとして切り捨てられない。

これはいつの時代でも悪習になっている。

「こいつらはリステルに任せてくれないか？」

「信じていいのか？」

「ああ」

イアンが真摯に頷く。

約束を違うことなどしないと誓う。

優斗はそこに信用をおき、リステル王へと向いた。

「……リステル王」

「なんだね？」

「こいつらの処分は貴方たちに任せます。ですから――」

一つだけやらせてほしい。

「土地を一つ、消滅させることだけは了承してもらいます」

「……どういうことかね？」

問いかけるリステル王に、優斗は周りが寒気を感じさせる冷たい笑みを浮かべた。

「フィオナとマリカに手を出した奴の末路を示すだけです」

◇　◇

フィオナとマリカはリルと卓也とイアンに任せ、優斗はリステル王と数人の近衛兵士と共にある場所へと向かっていた。

「ここですか」

たどり着いたのはガリアの家。

周辺には住居などはなく大きさは1キロ四方はありそうだった。

その土地の中央には無駄に煌びやかで豪勢な住居が存在している。

すでにこの家に伝令は出しており、十数人はいる従者はすでに大切なものを持って逃げている。

けれどもなぜ、出なければならないのか意味は分からなかった。

そんな彼らに向けてリステル王は今朝あった出来事を話し始める。

「今朝、君たちの主であるガリア元侯爵がやってはいけないことを行なったのだ」

いつもにこやかであるリステル王が憮然とした表情をしているのに戸惑う従者たちだが、一人の従者筆頭とも言えるべき女性が勇気を持って話しかけた。

「な、なんでございましょうか？　早朝から兵士と共に出て行ったことに関係がありましょうか？」

「その通りだ。現在、我が国には来賓としてリステルより龍神の赤子が来ている。ガリアは兵を使い、その龍神の赤子を奪い去ろうとした」

瞬間、従者の中にも『信じられない』といった表情をしたものが何人もいた。

さらに凄い者になれば、主であるガリアに対して嫌悪感を露にした。元々好かれていない主ではあっただろうが、ここまでの感情を見せるの今言った彼の蛮行によるものだろう。

「さらには龍神の両親の殺害を企てようとした。これはリステルだけではなく、世界で見ても大問題だ」

世界中から非難を浴びても仕方のない出来事だ。

「君たちは許せるかい？　この中には龍神に対して信仰深いものもいるだろう？」

リステル王の問いかけに、先ほど嫌悪感を表した男性が断言した。

「許せるわけがありません！」

リステル王は男性に対して頷いた。

「そうだね。私も許せるわけがなかった。だからこそガリア侯爵家をまず、壊すことにしたのだよ。君たちには申し訳なく思うが、彼がやったことを考えたら、これぐらいでも生ぬるい」

と、ここでリステル王は安心させるように、

「もちろん、君たちの就職先に対しては国がバックアップをしよう。ただの被害者なのだからね」

そう伝えたことで、幾人かがほっとした表情をした。

「リステル王。そろそろよろしいですか？」

優斗がガリア家に目を背けずに伝えた。

「そうだね。……君たちは一旦、ここから離れなさい。危ないからね」

従者の半分は疑問だったが、近衛兵士に連れて行かれる。

そして彼らの姿が見えなくなると、優斗が構えを取った。

『天光満つるところに我はあり』

その場にいる、誰もが聞いたことのない詠唱が優斗の口から流れ出す。

『黄泉の門開くところに汝あり』

右手を前に掲げ、

『出でよ』

天空へ幾重にも重なった魔方陣が生み出される。

『雷の裁き』

そして降りてくる。

『インディグネイト・ジャッジメント』

優斗が唱え終わった瞬間、まず幾つもの雷が降り注ぐ。
それだけであらゆるものが砕け、蒸発する。
けれども終わらない。
天空から一振りの白き剣が振り降りてきて、中心部分に突き刺さる。
クレーターが直径にして５００メートル以上は出来た。
その威力で土が捲れ上がり波のように迫ってくるが、風の魔法で壁を作り防ぐ。
そして十数分後、土煙も晴れてようやく全容が見えると、リステル王と近衛兵士もさすがに唖然とした。

「聞きしに勝る……とはこのことなんだろうね」

家があった場所は深さにして十数メートルほどの穴が出来ており、家の周辺を飾り付けていた森林どころか家の欠片すらも存在していない。
見事な土一色の土地がそこに生まれていた。

◇　◇

「ほんっとうにすみません！！」

そうしてガリアの家を壊して王城に戻ると、さすがに少しはスッキリしたのか優斗の頭に上った血の気も下がった。
そして思い出すのはリステル王とイアンに対して、あまりにも無礼な態度を取ってしまったこと。

「怒りのあまりにどうかしてたみたいでして、あんな風な口を利いてしまい申し訳ありません！！」

全力で頭を下げる。
これは国際問題になってしまうのか、と本気で考えてしまうくらいに焦っている。

「私は何も気にしていない。非はこちらにあるのだし、元々年齢もそう違わない。君のような異世界人で龍神の父親であり、伝説の大魔法士レベルの人間に敬語を使われると逆に申し訳なく思う」

ひたすらヘコヘコと謝る優斗にイアンが苦笑する。
先ほど、全員を震え上がらせた殺気が嘘のようだ。

「私に対しても気にしないでいいよ。先ほどイアンが言った通り、非があったのは私の国のものが行なったこと、つまりは私の監督不行き届きなのだからね。君に何と言われてもしょうがないことだよ。さらに言うなら、申し訳ないと平謝りしなければならないのは私のほうだ」

言いながら頭を下げようとするリステル王を優斗が必死に止める。そんなこんなで馬鹿みたいなやり取りをしている間に、リル達が合流した。

「ぱ～ぱ！」

「マリカ！」

優斗はリルからマリカを預かる。

「フィオナは？」

「怪我は全部治ってるけど、さすがに魔力の使いすぎ。まだ寝てるわよ」

「精霊術を全力で行使したからね。しょうがないか」

と、話が少し途切れる。

わずか数秒だけだったが、切り替えるようにリルが声を出した。

「あ、あのね」

「なに？」

「……ご、ごめんなさい」

リルが優斗に頭を下げた。

「どうしたの、突然？」

「今回の事件、元はといえばあたしが原因なのよ。あたしがあんた達を連れてきたんだし、あの馬鹿にマリちゃんのことがバレたのもあたしがタクヤにあんな場所で色々と訊いたことが原因だし」

「別にわざとじゃないんだから、気にしないよ」

「それじゃあたしの気が済まないのよ」

自分は彼らを危険にした張本人と言ってもいいのだから。

リルは一歩も引かない姿勢を見せる。

「……ん～、それなら」

優斗は少し考えると卓也を呼び寄せた。

「ま、しょうがない」

長年の付き合いから呼ばれた理由が分かる卓也。

「え？　どうしてタクヤが呼ばれるの？」

「一応、婚約者だしオレも原因の一つだし」

卓也はそう言って直立不動。

優斗はマリカを下ろして後ろを向かせた。

「いつでもいいぞ」

「なら、遠慮なく」

優斗は右手を振りかぶると、卓也を殴りつける。
卓也は数歩後ろにたたらを踏んだが、すぐに体制を立て直す。

「これで勘弁だな」

「そうだね」

互いに笑みを浮かべる。
慌ててリルが卓也に駆け寄る。

「ご、ごめんね」

「いいって。けじめはつけなきゃいけなかったし」

軽く頬をさする卓也。

「で、優斗はこれからどうする？」

「フィオナの側にいるよ」

「分かった。少ししたら、オレ達も見に行く」

「わかったよ」

そう言って優斗とマリカは卓也たちと別れる。
優斗はフィオナが眠っている部屋へと入った。
傷もすっかり治り、すやすやと眠っているフィオナの姿がある。
よかった、と本気で安堵する。

「マリカもお昼寝しようか」

朝からずっと起きっぱなしだし、いろいろとあって疲れているだろう。
マリカを二つあるベッドのうちの片方へと入れる。
そして胸の部分をゆっくり、ポンポンとリズムよく叩くと5分もしないうちにマリカの寝息が聞こえてきた。

それから一時間ほどしただろうか。
フィオナが目を覚ます。

「……ん……」

薄っすらと目を開け、場所を確認する。
そして左右に視線を動かし、優斗を発見した。

「……優斗さん」

「体調はどう？」

「大丈夫です。まーちゃんはどうですか？」

「今は隣のベッドでお昼寝中」

「そうですか」

フィオナは起き上がり、隣のベッドで眠っているマリカの頭を少し撫でると、ソファーへと向かって座った。

「飲み物とかいる？」

「いえ、大丈夫です」

グルグルとフィオナは肩や腕を回す。
痛みはなく、異常は見当たらない。
安心して深くソファーに座りなおす。
と、その時だった。
ソファーの上から優斗がフィオナの身体に手を回した。
突然のことにフィオナの身体が固まった。
思い返せば、優斗から抱きしめられるのは初めてのことだった。

「あ、あの、ゆ、優斗さん？」

「よかった」

「え？」

「フィオナが無事で……よかった」

心の底から心配して、恐怖した。
“フィオナが死んでしまう”と考えた瞬間に。

「優斗さんよりは弱いですけど、私だってそれなりに強いんですから安心してください」

「そうだね」

「でも、もう少し実力はつけないといけないって実感しました。私たちの娘は龍神ですから、今後もああいったことがないとも限りません」

「うん」

「優斗さんも手伝ってください。今回は魔力の使いすぎで倒れましたけど、私はまーちゃんの母親として、ちゃんと守ってあげたいんです」

「もちろん。僕ができることならね」

と、ここでフィオナが小さく笑った。

「どうしたの？」

「いえ、前と立場が逆転したなって思いまして。優斗さんがこの世界に来たころは私が家庭教師で魔法とか教えていたのに、今は優斗さんが先生になってしまいましたね」

「そうだね。時間が経つのは早いものだと実感するよ」

もう半年以上、この世界で過ごして。

馬鹿みたいに遊んで。

騒いで。
笑って。
怒って。

――そして。

大切な人ができた。

――あんな台詞は感動するだけの台詞だと思っていたのに。

今ならあのマンガのヒロインの台詞の意味が分かる。

「フィオナ」

抱きしめる力を強くする。

「1日でも1分でも1秒でもいいからさ」

たった、それだけでいいから。

「僕より長く生きて」

自分より早く死なないでほしい。

「たぶん君がいなくなることに……耐えられない」

心から呟いた優斗の言葉に。
フィオナは自分の手を優斗に重ねながら。

「……はい」

頷いた。

隣にいたいと願う

優斗たちがリライトに戻った週末。
トラスティ家では仲間内での小さなパーティが行なわれようとしていた。
修が音頭を取る。

「それでは、卓也とリルの婚約を祝って……乾杯！！」

「「「「　　乾杯！！　　」」」」

最初に修とアリー、ココが主役二人に絡む。

「いや、まさか卓也とリルが婚約するとは思わなかったわ」

「本当ですわ」

「驚きました」

「お前らも驚いただろうけど、オレが一番驚いてるから」

「何よ！　文句あるの？」

「……ありません」

きつく言い寄られて、反射的に謝る卓也。

続いて和泉とレイナとクリス。

「再来月にはクリスの結婚式もあるから、めでたいことが続くものだ」

「そうだな。私も祝福しよう」

「ありがとうございます。是非とも式には皆さんに出席をお願いいたします」

最後に優斗とフィオナ。

「僕がやったことで二人の婚約が流れなくて、本当によかったよ」

「あとで話を聞いたときは私もビックリしましたけど、無事に落ち着いて胸を撫で下ろしました」

あのあと、リステル王がリライト王に謝罪するだのなんだのとなったのだが、政治的な部分には詳しく介入しようとも思っていないので、優斗の周りは今のところは落ち着いている。

「というか、皆ってお酒を飲めたの？」

ふと気になって優斗が尋ねた。

現在、全員のグラスにはワインやビール、お酒の類を持っている。

すでに2杯目に突入しようとしている奴もいた。

「オレは弱い」

「俺はそこそこじゃね？」

「嫌いではない」

とは異世界組。

「自分は嗜んでいますので」

「わたくしは慣れてますから」

「私は弱いです」

「わたしはあんまり強くないです」

「私は問題ない」

「あたしもアリーと同じで慣れてるわ」

というのが現地組。

お酒に弱いのも少なくはいるようだが、めでたい席なので全員がハイペースで飲んでいく。

そうして1時間もした頃には、

「オレはどうせ、尻にしかれるんだよ、分かってるさ」

「ユウト、シュウ。絶対に勝ってやるからな」

などなど、多種多様な酔い方をしていた。
現時点で酔わずに素面なのは優斗、アリー、クリス、リルのみだ。
他は全員、酔っ払っている。

「いいですか～。ちゃんと聞いてますか～クリスさん」

ココがクリスに絡む。
その横では和泉が、

「……」

酒瓶を片手に無言で酒を飲み続け、

「いいか。私としてもお前はやぶさかではない。感謝しろ」

と、誰もいないところに語りかけているレイナ。
先ほどはおそらく優斗と修だったのだが、今は……誰になっているのだろう。

「なんでこう、強気な女の子がオレの婚約者なんだよ。オレに合ってるのは分かるけどさ～」

なぜか泣きながら卓也がリルに語り続け、

「うふふふふふ」

優斗の隣で笑みを浮かべながらフィオナがお酒を注ぐ。

「これまた、おもしろい具合に酔っ払ってるね」

「これほどタイプが別れると壮観ですわね」

「絡み上戸に無言にわけわからないところに話しかけたり、泣き上戸。フィオナは笑い上戸か」

と、ここで一人忘れていた。

「修は？」

「シュウ様は……」

アリーが隣を見る。

すると修が胡坐から正座になりながら、

「海賊王に、俺はなる！！」

と言ってテーブルを強く叩いた。

そして突っ伏す。

衝撃で優斗とアリーの前にあるグラスが傾いて倒れる。

「あっ……」

倒れたグラスを見て、優斗とアリーは倒れたグラスを直し、そして零れたお酒を片付けようと布巾に手を伸ばし、

「あら」

「ごめん」

うっかり手が重なった。
パッと手を離し、優斗が「やるから」と言って布巾を取ろうとした瞬間だった。
右隣にいるフィオナが優斗の耳たぶをものすごい勢いで引っ張った。

「い、痛たたたたたたたた！」

思わずフィオナの手を払うと、彼女は続いて優斗の首に腕を回してピッタリと優斗にくっ付いた。

「ちょっ！」

「ありーさん！」

「は、はい！？」

フィオナの勢いに思わずかしこまった返事をするアリー。

「ゆうとさんは私のだんなさまなんです！！　とっちゃだめです！！」

舌が回らずにいつもよりも可愛らしい発音のフィオナ。

「えっと……それは分かっていますわ」

「ならいいんです」

アリーの返事に上機嫌になったフィオナは、そのまま優斗に抱きついたままだ。

「ゆうとさんも、ぎゅってしてください」

「あの……フィオナ？　一応、みんなの前だよ？」

「カンケーありません。いまの私は『ゆうとさん分』が足りないのです」

なんだそれは、と優斗は心の中でツッコミを入れる。

が、今のフィオナには何を言っても通用しなさそうなので、諦めてぎゅっと抱きしめる。

「フィオナさんは笑い上戸だけでなく甘え上戸でしたのね」

「普段は一緒にお酒とか飲まないから、知らなかったよ」

よしよし、と頭を撫でながらフィオナを軽く抱きしめる。

「あら？　いつものユウトさんなら顔を赤くなさるのに」

「素面でやられたら赤くなるけど、今は酔っ払いだし」

酔っ払いがやっていること、と割り切ると楽だ。

けれど優斗の話を聞いたリルが卓也をいなしながら口を挟んだ。

「何を言ってんのよ。こないだ、あんたがフィオナ抱きしめてたじゃない。おかげで部屋に入るタイミングわかんなかったんだからね」

あとで行くとは言ったが、どうにも入りづらかったのを覚えている。

「……それは申し訳ない」

優斗もさすがにそれを言われると顔が少し赤くなった。

さらに2時間。
飲み続ける。
素面のメンバーは度数の強いお酒を飲み比べするまでになり、最終的には優斗以外のメンバーが突っ伏すことになった。
優斗は毎晩のようにマルスに付き合っているせいか、ほろ酔い程度で済んでいる。
フィオナは優斗の膝枕を堪能しながら寝ており、それ以外は雑魚寝している。

「さて、と」

片付けでもしようかと思い、フィオナの頭を持ち上げようとして足音がしたことに気付く。

「ラナさん？」

やってきたのはトラスティ家で家政婦長をしている５０代の女性だ。
テキパキと後片付けを始める。

「い、いいですよ。僕達がやったことなんですから、僕が片付けますよ」

優斗が慌てて断ると、ラナも微笑んでやんわりと断る。

「ユウトさん。我々の仕事を取らないでくださいな」

「け、けど」

「お嬢様が初めて、こんなにもたくさんのお友達を連れてきてパーティーをなさったんです。嬉しくて、片付けぐらいはしたいのです」

フィオナを視界に入れると、ラナはまた小さく笑う。

「それにお嬢様はユウトさんのお膝の上でゆっくりと眠っているようですし、そのまま寝かせてあげてくださいな」

優斗もそう言われてしまうと、躊躇う。

「すみません。お願いしてもよろしいですか？」

「ええ。もちろんです」

言ってからというもの、ラナはものすごいスピードで物音を立てずにテーブルのものを片していく。

そして5分もしないうちにキレイにテーブルの上を片付け、全員に毛布をかけた。

「すごいですね」

「これも家政婦の技ですよ」

「おみそれしました」

互いに笑う。

「最近のお嬢様について、よくバルトさんとも話すのですよ」

「そうなんですか？」

「ええ。マリカ様が来てからというもの、守衛に関しても人員が増強されましたし、バルトさんもお暇ができまして」

「それでどんな話を？」

「私もバルトさんもお嬢様が子供のころから知っていますから。だからこそ、この半年での変わり様についてよく話しておりますよ」

「良くも悪くも、僕達が変えてしまいましたからね」

「私は良い変化だと思いますよ。何より笑顔が増えましたから」

「そう言っていただけると、自分達もありがたいです」

優斗はフィオナの髪を軽く梳く。

不意に、ラナは内容を変えてきた。

「ユウトさんは……」

「なんでしょうか？」

「この先、何を望みますか？」

ピタリとフィオナの髪を梳く手が止まった。
少し考えて……苦笑した。

「また唐突な話を持ってきましたね」

「かもしれませんね。けれどお嬢様を思えばこその質問だと思っていただければ結構です」

フィオナはきっと優斗がいなくなることを望んでいない。
ラナが子供の頃から接しているからこそ理解できることだが、逆に優斗がどう思っているのかは分からない。
良い人物ということだけは理解しているが。

「難しいです。子供の頃は決められたレールを歩いていただけですし、そのレールが外れた今は……『今』のことしか考えていません」

未来のことなど、考えたこともなかった。

「フィオナが隣にいてくれて、マリカを一緒に育てることが出来て。そしてここにいる連中と馬鹿騒ぎする。そんな毎日が続いてくれればいいと願うばかりで」

この素晴らしい日々が。
続くことを願うから。

「楽しい『今』が大切すぎて、その先のことを考えるのはどうしてもおこがましいものだと思ってしまうんです」

それでも、もし。

「でも、仮にですよ」

仮定の話をするなら。

「今よりも未来のことを望むとするなら」

望むことは一つだ。

「どんな時でもフィオナが隣にいる人生であってほしい、と。そう思うんです」

まるで夢を語るように告げる。

それは本当に、純粋に願っていて。

けれど“夢”だからこそ叶わないと。

そう言っているようにも見えた。

「それならば……いえ、私のような家政婦が口を挟んでいい話でもありませんね。いつか旦那様と奥様に相談されてはいかかですか？」

ラナは何かを言おうとするが……何も言えなかった。

これ以上は自分が口を挟む領域を超えている。

「ええ。ご助言、ありがとうございます」

ラナも去っていき、優斗はフィオナを見つめる。

「僕は君を幸せにできるのかな？」

眠っているフィオナの髪に軽く触れながら、独り言を呟く。

「僕がフィオナをいつまでも幸せにできると信じて……いいのかな？」

そう言って、自嘲するように笑った。

「なんてこと、誰にも分からないか」

理想家じゃないからこそ、そんな素晴らしい未来を信じ続けることはできない。

「“これだ”と思っても、ボタンの掛け違えのようにズレてしまう場合だってあるし」

ほんのちょっとした運命のイタズラで容易くすれ違ってしまうことがある。

「けれどね。例え、この先に何があっても」

何かが切っ掛けで。

離れ離れになってしまったとしても。

「初めての恋が君でよかったって思う」

この気持ちになったことだけは、絶対に後悔しない。

だから口にしようと思う。
こんな友人達が雑魚寝しているような場所だけれど。
普段よりもお酒が入っているからかもしれないけれど。
ラナと話したことが切っ掛けになったかもしれないけれど。

「フィオナ」

それでも声にすることは今、大切だと思ったから。
ありったけの想いを込めて。
思うがままに届けよう。
この言葉を。

「好きだよ」

そしてまた、バカを相手にする

最近、フィオナの機嫌がすこぶる悪い。
というのも、

「フィオナ先輩！！」

意気揚々とやって来る、後輩が原因だ。
先日にあった優斗との婚約者騒動で、フィオナに告白してくる人数は減ったものの、それでも一定の人数は残っている。
その一人が学院の後輩であるラスターだ。
元気よくめげず、悪い奴ではない。
けれどフィオナにとっては邪魔な人間でしかない。

「……なんでしょうか？」

「一緒にお昼ご飯食べましょう！」

「……すみませんが友達と一緒に食べますので」

「いいじゃないですか。一日ぐらい」

「……それを決めるのは貴方じゃありません」

半ば無視する形でフィオナは和泉たちと合流する。
優斗と修にアリーは買出し。
リルと卓也は用事があって席をはずしている。

「それじゃ、お昼は諦めますけど帰るときは一緒に帰りましょう！」

意気揚々と引き返していくラスター。
彼の姿が消えると、珍しくフィオナが机に突っ伏した。

「お疲れ様です」

ココがフィオナの頭を撫でた。

「……これでもう、3日目です。勘弁してほしいです」

「さすがのフィオナもお疲れだな」

和泉がある意味、ラスターに感嘆する。

「フィオナさんほどもてるというのも考えものですね」

「3日目って言ったけど、前の二日間の放課後はどうしてたんです？　ユウトさんはいませんでしたよね？」

確か修と遊んでいたはずだ。

「……初日はアリーさんと帰りました。昨日はタクヤさんとリルさんと一緒に」

「今日はどうするんだ？」

「優斗さんがいます」

「それなら問題ありませんね」

一緒に帰る人がいなかったら、誰かが名乗り出ようと思っていたが杞憂に終わる。

「けれどあの人ってユウトさんを目の敵にしてません？」

「していますね。フィオナさんを騙してる悪党と思ってるのでは？」

「二人の様子を見てそう思うって、相当に目がくすんでるな」

「恋は盲目、と言いますから」

そして放課後。

優斗とフィオナが校門を出たときに、

「なぜ貴様がフィオナ先輩の隣にいる！！」

第一声が轟いた。

「なぜ、って一緒に帰るからですよ」

落ち着いて対処する優斗。

「そんなの、オレは認めてない！」

なんてことをラスターが言うので視線でフィオナに問いかけると、フィオナはうんざりした様子で言った。

「彼が勝手に私と一緒に帰ると言っているだけです」

「それなら帰ろうか」

「はい」

無視して帰ろうとする二人をラスターが止める。

「待て！　オレは認めてないと言っただろう！」

「必要なのは貴方の許可ではなく、フィオナの許可ですよ」

「けれどオレが先約だ！」

「私は貴方と帰ると一言も言った覚えはありません」

フィオナの態度は一貫して冷たいままだ。

「さようなら」

そして別れの言葉を告げて、去る。
さすがにフィオナにこう言われては、彼も一緒に帰ろうと続けることはできなかった。

「大変だね」

「本当です」

フィオナはお昼よりも大きいため息をつく。

「けれど彼もすごいね。僕達が婚約者だって言ったら『嘘か本当か分からないし、いずれオレの婚約者になる』なんて言うんだから」

「……悪意がない分、ラッセルよりは良いのですけど」

「面倒な部分では疲れるね」

「はい」

こっちの意思などお構いなく押してくる。

「とりあえず、切り替えよう。明日は訓練のために森に行くんだから、そのために今日も精霊術の練習をするんだよね？」

「もちろんです」

「なら気分はしっかりとリフレッシュしないとね。陰鬱な気持ちが精霊に伝わっちゃうかもしれないから」

「そうですね」

精霊達も良い気分はしないだろう。

「最初にマリカの面倒見て、気分が落ち着いたら練習にしよう」

「……早くまーちゃんで癒されたいです」

「同感」

優斗だって煙たらがられたり、不躾な視線で見られるのは慣れている。

けれども疲れるものは疲れる。

トラスティ家の門まで辿り着き、門を通ろうとした瞬間だった。

「貴様ッ！　なぜ人様の家に入ろうとしている！」
遠方からラスターが叫んで走ってきた。
「これは予想外」
思わず笑ってしまった。
彼が再び登場してくるとは思っていなかったからだ。
「フィオナはいいよ。先に入ってて」
「いいのですか？」
「いいよ。マリカで癒されておいで」
小さく手を振って、フィオナを家の中へと入れる。
そして始める彼の言葉は、やはり優斗にとっては笑ってしまうものだった。
「おこがましいと思わないのか！　事と次第によっては貴様を切るぞ！」
「僕は別に悪いことはしていないのですよ」
「ふん。悪人の貴様に聞く耳など持つか」
どうやら話を聞いてくれないらしい。
困ったものだと苦笑すると、守衛所からバルトと数人の守衛が出てきた。

「どうされました？」

「見ての通りです」

優斗はちょいちょい、とラスターを指す。
ラスターは威を得たとばかりにバルトに、

「守衛さん！　不審人物が進入しようとしてましたよ」

「それはどちらに？」

「ここにいます！」

どうどうと優斗を指すラスター。
優斗はこみ上げる笑い声を堪えて、自分が現在、彼にどう思われているかどうかを説明した。

「どうやら僕が不審人物らしいです」

バルトとしては優斗がどうして不審人物なのかが理解できないが、
現状では優斗が不審人物というより、

「とりあえず君は剣を納めなさい。今のままでは君が不審人物だ」

バルトに言われ、ラスターはしぶしぶと剣を鞘に納める。

「それでどうしたら、彼が不審人物ということになったのかな？」

「こいつがフィオナ先輩の家に入ろうとしたからです！」

「……？　ここは彼の家でもあるのだよ」

何か問題あるのだろうか。

「はっ？」

「ですから僕はこの家に住んでいるんです」

「そ、そんな、まさか、だってここは公爵家で……」

なぜ平民の彼が住んでいるのだろう。

「何かの間違えでは？」

「毎日、ここから学院に通っているところを見ているので、間違っているとは言えないね」

バルトに断言され、対応に困っているラスターに家の玄関からエリスが顔を出して追い討ちをかける。

「ユウト！！　マリカが待ってるわよ」

その名前を出されると、優斗もゆっくりとラスターの相手をしていられない。

「すぐ行きます」

それだけエリスに伝えて、

「というわけですみませんが、これで失礼しますね」

挨拶もほどほどに家の中へと入っていく。
残されたラスターは三下の敵が言うような台詞を吐く。

「お、覚えてろよ！」

その姿を見たバルトと他の守衛が笑ってしまったのは、しょうがないと言えるだろう。

庭で修練に励んでいるフィオナを見つめる優斗とマリカ、エリス。

「フィオナ、頑張ってるわね」

「そうですね」

「明日は森に行くんですってね」

「ええ。実際に戦わないと得られないものもありますから」

「でも無用に倒すのはご法度じゃなかったかしら？」

「実はこっそりギルドランクを上げてきたので、Bランクぐらいの魔物までなら素材にできる魔物を狩れるようになってるんです」

「あら、さすがね」

と、ここでエリスは一つ気付く。

「マリカはどうするの？」

「最初は危ないので置いていこう思ったんですけど……」

マリカ本人に訊けば、

「やーっ！」

と、ぶんぶんと首を振って嫌がる。

「マリカが嫌がるので連れてきます。どうせなら、前にピクニック気分でリステルに行ったけどできなかったし、明日は少しぐらいピクニックができますから」

「危なくないの？」

先日、リステルで起こった騒動はエリスも聞いている。
そのことがあって今、フィオナが訓練をしているということも。

「何となく、修と同じようにマリカがトラブルを引き寄せる体質なのかもしれないと思っていますが、今回は二人から絶対に離れませんから」

身も心も凍るようなトラブルは起こさない。

「それなら安心ね」

エリスもそれを聞いて安堵する。

「そういえば、フィオナに纏わりついてる後輩ってどうなったの？さっきユウトが話してた子？」

ここ最近、フィオナがぐったりしているのはその子のせいだとエリスは聞いている。

「ええ。まさか不審人物扱いされるとは思いませんでしたけど」

「チャレンジャーよね。頑張ってるのは買ってあげるけど、無茶は勇気とは言わないわよ」

さらに言えば、うちの優斗に対して同じ扱いを何度もしていたら、エリスのほうが先に怒る自信がある。

「なんとなく、彼との間に一騒動ありそうなのは気のせいで済めばいいんですけど」

「そういうユウトの勘って大体当たってるから、諦めたほうがいいわ」

「ですよね」

これまで何度もその勘が当たってきたのだ。

今回も当たるだろう。

都合のいい解釈ほど性質が悪い

翌日、お昼を前にして意気揚々と出かけようとした優斗たち。
なのだが、

「……なんでいるんですか？」

「フィオナ先輩！　一緒に遊びましょう！」

ラスターがなぜかトラスティ家の前で待ち構えていた。

「すみませんが今日は家族で出かける予定がありますから」

「家族？」

そうは言っても一緒にいるのは優斗と赤ん坊だけだ。
彼女の両親などどこにもいない。
一方でマリカは母親の気分がどんよりしているのに気付く。

「まんま？」

マリカが呼んだ瞬間、ラスターに衝撃が走る。

「ママ、だと！？」

「まーちゃんは私と優斗さんの子供ですけど、何か？」

まったくの無表情でフィオナが答える。

いい加減うっとおしいのだが、ラスターはフィオナの無表情を違う意味に捉えた。

「そ、そうか！　その赤ん坊を使ってフィオナ先輩を騙しているのだな！！」

瞬間、炎玉がラスターの真横を掠める。

「……次にそんなことを言ったら、本気で魔法を当てます」

フィオナの警告だった。

今の言葉は許せないが故の。

さすがのラスターも冷や汗が出た。

しかし同時に考え違いもする。

優斗が無理やり父親をやっているものだと。

「優斗さん、行きましょう」

ラスターを無視して歩き始める。

今日はピクニック兼訓練なのだ。

楽しい日にしたかった。

したかった、のだが。

「どこまで着いてくるんですか？」

呆れたように優斗が訊く。

「貴様らを二人きりにするわけがないだろう！」

「マリカもいますけど」

「そんなことを言っても無駄だ」

何を無駄なのかは分からないが、彼にとっては優斗の言葉自体が無駄なのだろう。

そして彼がいることで機嫌が悪いのが二人いる。

「ほら、フィオナもマリカも膨れないの。せっかく森までピクニックに来てるんだから」

「だって」

「うぅー」

フィオナもマリカも、家族三人で遊びに行けると思っていたのだ。

邪魔者がいるので当然、機嫌も悪くなる。

優斗もそれに気付いているので、無駄だとは思いながらも訊いてみる。

「二人の機嫌が悪いので、帰ってくれませんかね？」

「オレには関係ない！」

「やっぱりそう言いますよね」

逆にラスターだけは今の状況に気付いていない。

――確実に君のせいなんだけど。

こういう鈍感さは、本当にある意味で尊敬できる。

そのまましばらく歩き、見晴らしの良い丘へと出る。

そこで持ってきたレジャーシートを広げて昼食を取ることにした。

フィオナが持ってきたお弁当箱を広げる。

「おお、おいしそうじゃないですか！　さすがフィオナ先輩！」

「優斗さん、まーちゃん。今日はサンドイッチですよ」

なぜか当然のようにラスターがレジャーシートに座っている。

けれどもフィオナはすでに、ラスターを視界に入れていない。

存在すら頭の中から抹消するようにしている。

「ほら、マリカ。サンドイッチだよ」

優斗はサンドイッチの一つを取ると、自分の膝の上に座っているマリカに持たせる。

「そうそう、自分で手にとって」

マリカの手を支えながら、マリカ自身がサンドイッチを口元に運ぶのを待つ。
そして拙い動きながらマリカがサンドイッチを口にした。
ちまちまと口に運び、まず一つを食べ終わる。

「うん。よくできたね」

「あいっ！」

マリカもフィオナと同じく、ラスターのことを考えることをやめたようだ。
こういうところも本当に似始めていると優斗は思う。

「まーちゃん。次は何が食べたいですか？」

「あうっ」

マリカが手を伸ばす。

「これですか？」

フィオナが訊くと、マリカが頷いた。

「はい、どうぞ」

今度はフィオナがマリカに手渡す。
マリカは嬉しそうに受け取ると、口にした。
フィオナも顔が綻ぶ。

「そろそろ家での食事、スプーンを一人で使わせて食べさせるべきでしょうか？」

「でも、結構ぼろぼろと溢しながら食べるって言わない？　夏の海のときにマリカにスプーン持たせたけど、ちゃんと持てないって分かってたから僕が上から一緒に持ったし、義母さんと相談してから決めよう」

「そうですね」

自前の弁当を食べているラスターが優斗の言葉に反応した。

「貴様、フィオナ先輩のお母様をそのように呼んでいるのか！？」

優斗としては最初、フィオナ達と同じように無視しようと思ったのだが、あまりに大声なのと反応しなかったら掴みかかってきそうだったので、仕方なく対応する。

「そうですけど」

「誰に許可を取って呼んでいる！」

「誰？　って本人からですよ」

「ふん。フィオナ先輩のお母様のことだろうから、お情けで呼ばせたのだろうさ。感謝するんだな」

ラスターの言い分にフィオナの眉根が軽く上がったが、それでも気丈にマリカに次のサンドイッチを尋ねる。

「まーちゃん。次はどうします？」

「フィオナ先輩！　娘さんに是非ともおかずをあげます！」

そう言って手元にある弁当から大きいカツをマリカに差し出す。

が、マリカが嫌がる。

「やーっ！」

「ちゃんと食べないと大きくなれないぞ！」

そういって無理にでも食べさせようとする。

予想外のことに反応の遅れた優斗とフィオナが慌ててマリカとラスターの間に身体を入り込ませる。

「何してるんですか！！」

思わずフィオナから怒声が出た。

「な、何ってフィオナ先輩の娘さんにおかずをあげようと……」

「この子はまだ小さいんです！　大きいものを食べて喉にでも詰まらせたらどうする気ですか！？」

怒るだけ怒ってフィオナはマリカに振り向く。

「まーちゃんは大丈夫ですか？」

「だいじょうぶ。ちょっとビックリしただけだから」

優斗がマリカをあやしながらフィオナを安心させる。
さすがにラスターも悪いと思ったのか謝ってきた。

「す、すみません。フィオナ先輩」

思わずフィオナは睨んだ。
けれど何か言葉を発する前に優斗に肩を叩かれる。
代わりに優斗が落ち着いた声音で話しかけた。

「ラスターさん。貴方は子供を育てたこと、ありますか？」

「ないに決まっている」

「僕達もマリカが初めての子供ですが、細心の注意を払って育てています。義母さんや義父さんや家政婦さんにアドバイスをもらいながら。それでも失敗してないか不安なものです。ですから唐突にそんなことをやられると困ります。分かりますね？」

「……ふん。言われなくても分かっている」

「次はないですよ」

あくまでフィオナとマリカに悪意はないので許してあげるが、さすがに今のは危険だった。これが続くと我慢もできなくなる。
けれどやはり、優斗からの言葉には反発したいのか、

「貴様に言われるまでもない」

自信を持って言い返してきた。

「それじゃ、今日の本題に入ろうか」

弁当もレジャーシートも片付けて、森に来た目的について確認する。

「一応、ギルドランク上で倒すことができるのは素材にできる魔物のBランクまで」

「はい」

「今のフィオナの実力だとBランクの魔物でも下の奴がギリギリ限界、かな？　だからBランクが出てきたら逃げることにしよう」

「わかりました」

頷くフィオナとは逆に、ラスターが優斗に噛み付く。

「おい、貴様。まさかフィオナ先輩に倒せと言っているのではないだろうな？」

「フィオナの訓練に来たんですから」

「馬鹿か貴様は！　女性になんてことをさせようとしている！」

次いでラスターはフィオナに向き、

「フィオナ先輩！　貴女が戦わなくともオレが倒してあげます！」

「……余計なことをしないでくれますか？」

自分のためにしようとしているのに、なぜ彼に止められなければならない。

「大丈夫です。オレはこれでも剣で会長から三本中一本を取れるくらいの実力者です。魔法も上級魔法を一つ使えますし、同学年では敵無しです。学院全体でも十指には入る実力だと自負しています」

「……だから、余計なことをしないでくれますか？」

「分かっています。こいつの実力がないばかりにフィオナ先輩が戦わないといけないのでしょう？　フィオナ先輩が強いのは有名ですから。ですけどオレならそんな心配させません」

本当に話を聞かない。

ビックリするくらいに。

無駄だとは思うがフィオナは一応、事実でもあることをラスターに言ってみる。

「……優斗さんは闘技大会で決勝までいく実力者ですが」

「あんなの偶然に決まってます」

やっぱり、とフィオナは嘆息する。

何をどう言ったところで無駄なのだろう。
特に優斗のことに関しては。

「……お願いですから邪魔はしないでくださいね。私は訓練に来てますから。邪魔したら……貴方を敵とみなします」

今のところはEランクの魔物で素材となる魔物ばかりを倒している。
が、さすがに実力差がありすぎて訓練になっているとは言いがたい。

「おい、貴様」

「何でしょうか？」

「フィオナ先輩に戦わせて何も思わんのか？」

「何がでしょうか？」

「自分が戦おうとは思わないのか、と訊いている」

「今日はフィオナが訓練をするから森に来てますから。フィオナが戦うことに思うところはありませんね」

「ふん、腰抜けが」

何と言われようとも、フィオナが決意を持ってきているのだ。
それは優斗にだって止められない。
と、ここで遠方に巨人の姿が見えた。
一つ目ではあるが額に角が生えている。
確かサイクロプスの格下存在であるサイクロスという魔物だ、と優斗は知識を頭の中から引っ張り出す。

「確かBランクだね」

狩れる魔物ではある、が。

「逃げようか」

「いえ、大丈夫です」

「フィオナ？」

「やります」

先ほどのやり取りと違っている。
Bランクは逃げると話したと思ったが、違っていただろうか。

「……さっきも言ったけど、フィオナの実力ならギリギリBランクの魔物が限度だと思う。もちろん、あいつはBランクでも弱い部類にはなるから倒せるとは思うけど、厳しいんじゃないかとも思う」

「分かってます」

「それでも？」

「はい」

どうやらフィオナには思うところがあるらしい。
引きそうにはなかった。

「……分かった。けれど危なくなったら手を出すよ」

「それでいいです」

巨人が優斗たちに気付いた。
ゆったりと近づいてくる。
そこに優斗たちのやり取りを部分部分で聞いていたラスターが剣を抜いた。

「馬鹿か貴様は！　オレが時間を稼ぐから、その隙に逃げろ！」

ラスターが猪突猛進で突っ込む。
が、巨人の右腕一振りで吹き飛ばされる。
さすがに優斗もフィオナもフォローできないほどの早さと鮮やかさで飛んでいった。
綺麗に飛ばされたが、腕の振りに脅威を優斗が感じずに反射的に魔法を使わなかったということは大したダメージでもないはずだ。
ラスターは無様に着地し、片膝をついてフィオナ達に叫ぶ。

「こ、こいつは強い！　今のうちに逃げろ！」

ラスターは再び立とうとするが、立ち上がれない。
予想以上に耐久力もなかった。
フィオナはそんなラスターを一瞥すると、巨人に向かって風の魔法を放つ。

彼のことは嫌いではあるが、死んでほしいとも思っていない。
フィオナの注目がラスターからフィオナに向いた。

「私が相手です」

巨人と一人、対峙した。
優斗はマリカを抱きながら下がる。
一応、風の精霊にお願いして待機してもらっている。
いつでも助けに行けるように。

「求めるは水の旋律、流水の破断」

フィオナが攻める。
水の上級魔法を使って、巨人を斬ろうとする。
が、斜めに傷が薄っすらと出来るだけだった。

「……あまり斬れない」

バックステップで退く。

「それなら」

次に使うのは風の上級魔法。

「求めるは風切、神の息吹」

豪風に巨人が倒れて5，6メートルほど吹き飛ばされるが、すぐに起き上がる。

「これは駄目ですね」

優斗ほど上手く扱えるなら別だろうが、自分ではどうやってもダメージを与えられない。

「だったら至近距離で」

近づいて水の上級魔法を使えばある程度のダメージは与えられると踏む。

巨人の右腕が近づくが、落ち着いて避ける。

――これだけの至近距離なら。

イケると思った瞬間、すぐさま左腕がフィオナに振り下ろされる。

一瞬の思考を突かれてかわす時間はない。

「風の精霊、お願い！」

フィオナは自分の身体と巨人の腕の間に風の精霊を集める。

巨人の腕の力で、身体ごと持っていかれる。

「フィオナッ！」

かろうじて風を圧縮させて防いだとはいえ、吹き飛ばされている。

駆け寄ろうとした優斗だが、それをフィオナに制された。

「来ないでください！！」

フィオナに向かって動こうとした身体が止まる。

「大丈夫ですから」

怪我は負っていない。
まだいける。

――やっぱり、考えが甘かった。

前回もそうだった。
万遍なく魔力を使おうとして無理で。
今回はたった一人が使う上級魔法で倒せるなんて難しかった。
最初は甘い考えで挑んでしまう。
けれど、それが分かったことが実戦から得られたことだ。

「大丈夫です。信じてください」

「……フィオナ」

「まんま」

心配そうな二人の表情に笑った。
優しい笑みが浮かんだ。

「私は優斗さんと一緒にまーちゃんを育てていきたいんです。どんなことがあっても」

何があっても、だ。

「魔物に襲われるくらいで、誰かに襲われるぐらいで。たったそれだけで優斗さんの足を引っ張るなんてごめんです」

優斗の足かせになることだけは我慢できない。

「ちゃんと守ってあげるってまーちゃんに誓いました」

だから。

「だからどんなBランクの魔物ぐらい綺麗に倒せないと」

マリカに安心してもらえない。

「いつだって優斗さんがいるわけじゃないんです。優斗さんがいないからってまーちゃんをさらわれたり、怪我したりさせるのは絶対に嫌だから」

そのために。

もっと強くならないと。

ギリギリで倒せると思われているなら。

「私は今ここで、この魔物を簡単に倒せるくらい強くならないといけないんです！」

フィオナは左手を前にかざす。

龍神の指輪が薄く青色に煌いた。

『青ざめし永久氷結の使徒よ』

途端に周囲に冷気が押し寄せてくる。

『龍神の指輪の名において願う』

願うは氷の大精霊。

『来て！　セルシウス！！』

詠唱が終わった瞬間、アイスブルーの透明な女性が目の前に現れる。

「お願いしますね」

ただ、そう訊くだけで。

氷の大精霊は頷いた。

巨人の足元に氷が瞬間的に現れた。

そして見る見る間に巨人が氷漬けになっていく。

僅か数秒で、凍っている柱が生まれ、そこの中には一瞬で凍死した巨人が存在することになる。

タイミングもあるだろうが、できるなら最初からこうすれば良かったのに、それをしなかった。

フィオナのミスだ。

一応、採点を訊いてみる。

「どうですか？」

「バッチリ僕たちに心配かけたんだから３０点」

「あいっ」

ペシ、とフィオナの頭を軽く叩いて、それが当然だとばかりに優斗とマリカが頷く。

「まあ、フィオナがそこまで氷の精霊とも相性が良いとは思わなかったけど」

「私も驚きました」

「けれど、それが発見でもあったね」

「そうですね」

と、ここでラスターが駆け寄ってくる。
どうやらダメージは抜けたようだ。

「フィオナ先輩！　凄かったです。あれって精霊術ですよね。初めて見ました！」

Bランクの魔物を倒したフィオナを褒め称えるラスター。
代わりに優斗を睨みつける。

「それに比べて貴様は最悪だな。フィオナ先輩が強いからといってBランクの魔物と戦わせるなど」

ふん、と鼻息を鳴らして、

「やはりオレが婚約者になるほか、ないようだ」

と、のたまう。
けれど優斗とフィオナは2人での話に入り込んでいる。

「魔力は大丈夫？」

「はい。前と違って今回は精霊が倒せる範囲での魔力を欲してくれましたので、その分を提供するだけですみました」

「良い傾向だね。ちゃんと精霊と対話ができてるんだから」

「ありがとうございます」

「あとは角を取って、ギルドに提出しよう。結構な額になるからマリカにはおもちゃを買ってあげられるし、残りはフィオナのお小遣いにしたら？」

「いいんですか？」

「もちろん。フィオナが倒したんだから」

フォローにフォローを重ねる

無事に採取も終わって帰ることにした。
静かな道をゆっくりと歩いていると、ふと大きな音が響いた。
鳥の羽ばたく音も聞こえてくる。

「何でしょうか？」

「大型の魔物が動いてるんじゃないかな」

「誰かが狩っているんでしょうか？」

「たぶんね」

とりあえず魔物に出会わないように気をつけようと思ったが、音はゆっくりではあるが段々と大きく響いてくる。

「向かってきてますね」

「マリカが狙いなのか？」

ふと身構える二人のところに、大きな音とは違う小さな音が間近に届く。
人影が見えた。
優斗が前に出て、身構える。

が、その人影の正体が分かると驚きの声をあげた。

「「レイナさん!?」」

なぜか生徒会長が全力疾走していた。

「ユウトとフィオナか!」

レイナも驚いていたが、彼らの姿を見て足を止めた。

「何してるの?」

「イズミとクリスと一緒にギルドの依頼をこなしに来ていたのだが、あいつら、自分達の仕掛けた落とし穴に嵌まってしまってな。さすがにAランクのあいつを一人で相手するのには苦労していて距離を置いたところだ」

と、ここでレイナに名案が浮かぶ。

「ユウト、手伝ってくれないか? 修練のために来てるから、サポートだけしてくれればいい」

優斗なら簡単に倒せるだろうが、今回は自分の実力をあげるために来ている。

だからフォローしてもらおうと思った。

けれども後ろにいたラスターが声を張り上げる。

「オレが手伝います!」

レイナは優斗とフィオナとマリカしか視界に入っていなかったが、

ここでようやくラスターの存在に気付く。

「ん？　ラスターか。いや、足手まといだ」

ラスターならばフォローすらも出来ない。

「なっ！？　オレが足手まといなら、こいつなんて何の役にも立たないじゃないですか！」

「お前は何を言っている？」

意味が分からなかった。

が、少し考えると理由を思いつく。

「……ああ、そうか」

異世界から来ていることを隠している以上、学院ではそれなりの実力で通している。

優斗の本当の実力を知らないのも理解はできる。

「ユウトも大変だな」

「そうなんだよね」

「イズミからラスターについても話は聞いているが、別にいいんじゃないか？」

ラスターには実力を見せても。

フィオナに纏わりついており、彼女はとてもぐったりしていると聞いた。

優斗を見下しているとも。

「私としてはこいつがユウトを誉めているのが気に喰わない」

年下で実力も下で、ほとんどのことが下であるラスターだというのに。

「レイナ先輩！　冗談はやめてくださいよ。オレは先輩から一本を取れるぐらいに強いんですよ。学院じゃ１０番以内に強い自信あるんですから」

「……いや、指導レベルで一本を取ったことを誇られても困る」

剣技を教えながらやっているので、それで一本を取ったところで自身を強いと思われても。

「そうなんですか！？」

「あとお前は実力を過信しすぎだ。お前の成績的には二十傑ぐらいだろうと思う……が、だからどうした？」

あくまで学院の表沙汰になっている実力表にすぎない。

優斗や修、和泉など本来の実力を隠しているものがいるのだから。

「世の中には上には上がいる。当然、学院にだって私より強い奴もいるに決まっている。実力なんてものは成績だけで測るものではない」

それを口酸っぱく教えてはいるのだが、どうにもラスターは信じようとしない。

「こいつはな、頭が悪い上に視野が狭い。どれだけ違うと言っても信じない」

「知ってます」

「もうちょっと真実を見る目を養ってくれると良いのだがな」

「戦闘狂のレイナさんが言う？」

「それでも実力を見る目は持っているぞ」

だから闘技大会の時、優斗と戦うのを楽しみにしていたのだ。

「そうだろうけど」

強い者には鼻が利くというかなんというか。

「……なぜレイナ先輩がこいつと対等に話しているのですか？」

不審気にラスターが言う。

年上で生徒会長のレイナと同等に話している優斗が気に喰わないのだろう。

自分なんて年上の優斗に上から目線なのに、棚に上げている。

「友人だからな。当然だろう」

本音を言うなら貴族よりも上の異世界からの客人であり、龍神の父親。

実力は“勇者の刻印”を持っていないのに伝説の魔法士クラス。

どこを取っても敬語しか使えない相手だ。
と、ここで足音が近くまでやってきた。

「さて、と。頼むぞ、ユウト。私は早くお前達に追いつきたい」

「だからって本人を巻き込む？」

「しょうがないだろう。他にいないんだから」

「分かったよ」

ラスターがいるから、あまり豪勢な支援はできない。
それでも出来ることはある。

「フィオナは防御を重視して周囲に気を配って。他にいないとも限らない。あとヤバいと思ったら絶対に僕を呼ぶこと。分かった？」

「はい」

「その際、私は一人だが」

「どうにかできるって。さっきも一人だったんだから」

レイナが精進しているからこそ、Ａランクの魔物からも簡単に逃げ切れたのだろう。

「お前はフィオナとマリカ以外には厳しくないか？」

「二人は家族。レイナさんは仲間。家族に対する愛情と仲間に対する愛情は違うってこと」

「そういうことか」

そう言われてしまっては仕方ない。

「レイナ先輩！　やっぱりオレを選ぶべきです。オレならサポートを完璧にこなせます」

これほど言ったところでラスターは出張ってくる。

優斗を目の敵にしているのもそうなのだろうが、自分の実力も把握できていないのも困ったところだ。

「ラスター。お前は本当に――」

「いいって。やりたいって言うならやらせてあげたら？」

「ユウト。しかしだな」

「自分の実力を知るのも、レイナさんの本当の実力を知るのも、魔物の怖さを知るのも、どれも大事だと思うよ」

「甘い男だな。お前は」

「まあ、悪意はないからね」

悪意だったら全力で叩き潰すのだが、敵意なのだから叩き潰すのもかわいそうだ。

あまりにも愚かなことをしたら別だが。

「フィオナ先輩！　もし危険が迫ったらあいつではなくオレを呼ん

でください！　オレなら絶対にフィオナ先輩を守ってみせます！」

そんな会話を余所にラスターはフィオナへ迫るが、フィオナは相変わらずの無視だ。

「とりあえず僕はレイナさんと彼のフォローをするから。彼については詳しく知らないし、死なないように守るため余計に気をつける。あとレイナさんの手に負えないと思ったら僕が倒すからね」

「そこらへんは心配ないはずだ。イズミもクリスも倒せると踏んだからな」

「なら、大丈夫だね」

あの二人がそう思ったのなら問題ないだろう。

木々の間から問題の魔物が現れる。

その姿を……優斗は見たことがあった。

「これってシルドラゴンだよね」

「よく知ってるな」

「前にサイクロプス、オークキングと一緒に見たことあるから」

「その時はどうしたんだ？」

「和泉とクリス以外は全員揃ってた」

「……相手の魔物も相手が悪かったわけか」

まさかのレイナも魔物が可哀想に思える日が来るとは思わなかった。

「シルドラゴンはどうやって倒した？」

「一切合財を魔力で構成した魔法剣で一刀両断」

その説明だけでレイナは倒したのが優斗だと分かった。
倒し方が明らかに優斗じゃないと出来ない倒し方だった。

「……私じゃ真似できそうにないな」

シルドラゴンが吼えた。
優斗とレイナは平然とし、マリカは吃驚していたがフィオナが宥める。
ラスターは気圧されていた。
さすがにこのランクになると雄叫びでも格下には脅せる効果があるらしい。

「こ、こいつ、強いんじゃ？」

「Ａランクなのだから当然だろう」

弱いとでも思ったのだろうか。

「最初に言ったが、お前は足手まといにしかならない。戦わないのも勇気だ」

「バカ言わないでください！　オレはちゃんとフォローできますし、オレがいなくなったらこのヘタレしかいないんですから！」

あくまでやめるつもりはないらしい。
レイナは説得するのを諦めて、考えを倒す方法へと定める。

「さて、と。どうやって倒そうか」

シルドラゴンも相手人数としては４人。
一直線に襲ってくることはなかった。

「切り刻むのは？」

「竜種だけあって鱗が硬い。そこそこはダメージは与えられるがバッサリ切り捨てるのは無理だ」

「なら、口の中ぐらいしか弱点ないんじゃないのかな？」

「そうだな。私が剣を突き入れて中から魔力を炸裂させて爆発させよう」

「できるんだ？」

「イズミの改造のおかげでな。前回の黒竜の時に剣が折られたことを父上に言ったら、属性付与の剣を買っていただいた。さらにイズミの改造も相俟ってかなりの名剣になったぞ」

「それはすごい」

レイナが剣を抜く。
優斗もショートソードを抜き、ラスターも遅れて身構えた。

「二人とも、フォロー頼んだぞ」

レイナが飛び込んでいく。
次いで優斗も駆け出した。
二人の様子にラスターも遅れて駆け出す。
レイナは右から、優斗は左から斬りかかっていく。
シルドラゴンは翼を羽ばたかせ、後ろに下がろうとする。

「させないよ」

優斗が左手を地面に置くと魔方陣が生まれる。
シルドラゴンの背後に岩石が現れた。
突然、岩にぶつかったシルドラゴンは不覚にも腹から落ちる。
その隙にレイナが左の翼の部分を集中的に狙っていく。
ラスターといえば、

「行くぞ！」

なぜか真正面から剣を振りかぶっていた。

「……マジですか」

優斗が予想以上に驚いた。
攻撃を避ける技量があるならいい。
でも、おそらくラスターはないはずだ。
竜の攻撃は尻尾にさえ注意すれば基本的に左右に来ないから、楽だというのに。
それぐらいは考えられると思っていた。
シルドラゴンの口元から炎が溢れる。
炎球だ。
しかもラスターは斬りつけるのに夢中で炎球を避けるそぶりがない。

「本当に世話が焼ける」

ラスターを左から思い切り突き飛ばす。

「な、何をする！？」

誰に突き飛ばされたのか分かったのか、反射的に文句を言うラスター。

けれど優斗には反応してあげる余裕はない。

優斗は左腕に風の魔法を纏わせると、発射から到着まで僅かコンマ１秒ほどしかない瞬間を捕らえて、炎球を下に弾いて地面にたたきつけた。

森である以上、うかつに逸らして燃えたりでもしたらやばい。

「さすがに熱いね」

中級レベルの風魔法なので袖は焦げたが、問題はない。

「なっ、なっ！？」

今、目の前で起こったことがラスターには信じられなかった。

竜が放った炎球を弾き飛ばしたことと、優斗が飛ばしてくれなかったら炎球が当たって、下手をしたら死んでいたかもしれないということ。

恐怖と驚きの目で優斗を見上げる。

「魔物を前に呆けてる時間なんてないですよ」

ショートソードを振るいながら立ち上がるように促すが、ラスター

は呆けて立ち上がらない。

「死にたいんですか？」

挑発するような優斗の言葉に、さすがのラスターも立ち上がろうとした。

が、遅い。

シルドラゴンが振り回すように左腕を前に突き出した。

先ほどの巨人よりも強力であろう一撃。

それがラスターに迫る。

「――ッ！」

思わずラスターが目をつぶった。

が、いつまで経っても衝撃が来ない。

「……？」

なぜ、と目を開けば優斗が受け止めていた。

風をショートソードに纏わせて防御力をアップしている。

ここで初めてレイナの怒声が響いた。

「ラスター！　だから言っただろう、足手まといだ！」

華麗に流美にレイナが剣を振るう。

今までラスターが見たことのない速度だった。

「死にたくないなら下がれ！」

シルドラゴンが左腕を戻して身体全体をぐるりと回転させた。

尾が右回りで向かってくる。
レイナが飛んでかわしたが、そのまま優斗とラスターにも向かっていく尾。
今度こそやられたとラスターは思った。

「せー……のっ！」

が、優斗はラスターの首根っこを掴んで無理やりジャンプする。
そして通り過ぎたところで着地。
優斗がラスターの表情を見れば、すっかり闘志の抜けた表情になっていた。

――これはやりすぎたかな？

実感させるとはいえ、お灸を据えすぎたような気がする。
とはいえ彼のような人物にはちょうどいいかもしれなかったと思う。

「これがＡランクの魔物の力です。勇気と無茶を履き違えたら駄目ですよ。判断のミスで死んでしまうことがあるんですから」

諭すように優斗が伝える。

「ユウト。邪魔だからどっかにやってくれ！」

ラスターの所為で優斗が満足にフォローをできていない。

「レイナさんが怒ってる理由も自分が一番理解できたでしょう？
実力を過信しないで、これからも精進してください」

風の精霊を使って優しく遠くに放り投げる。

「さて、と。ラスターさんもいなくなったことだし、ケリをつけるよ」

「分かっている」

一体、どういうことなのだろうか。
目の前ではレイナと優斗がシルドラゴンを倒しに掛かっていた。
また優斗がレイナの逆側に回る。
そして一太刀。
それだけで翼が切れて、ポトリと落ちた。

『――ッ！』

シルドラゴンが痛みで叫んだ。
レイナがその瞬間、真正面に動く。

「弾けろ！」

レイナが吼えて剣をシルドラゴンの口の中へと突き刺していた。
ラスターはその光景を見ているだけ。

「……違う」

自分は本来、レイナのフォローをしているはずだ。
なのになぜか駄目出しをされていた。

「……そうじゃない」

優斗ができるのなら自分にだって出来るはずだ。
あいつに文句を言われる筋合いはない。

「……オレは強い」

少なくとも優斗よりはずっと。

「オレは強い」

あんな弱々しい男よりも強い。

「オレは強い！」

ラスターは目の前に手を向ける。

「トドメを刺してやる」

レイナが何をするのかは分からないが、一発で倒せるとも思えない。
ならば追加攻撃をすれば完全に倒せるはずだ。

「求めるは火帝、豪炎の破壊！！」

炎弾が生まれる。
レイナはまだ真正面にいた。
けれどラスターは……放つ。

自分が倒すという思いに駆られて。

レイナは剣を突き刺すと、そのまま剣に魔力を込めた。
込めた魔力に反応して剣先に光が生まれる。
そしてそれが炸裂した。
身体ごと破裂することはないが、シルドラゴンを倒すにはそれで十分だった。
優斗はそれを見て、やっと終わったと安堵したが……視界の端に映る光景に嘆息した。

「……いくらなんでもバカすぎるって」

レイナの背後に向かう。

「ユウト？」

「もうネタの領域だよ、彼は」

優斗はショートソードで斬ろうと思って、思いとどまる。
シルドラゴンよりも大きい炎弾だ。
さすがに斬ったところで、木に着火するのは目に見えていた。
地面に叩きつけるにも大きすぎる。

――ああ、もう。

諦めて相殺することにする。
とはいっても、炎の上級魔法を相殺できるほどの水魔法や氷などの派生魔法――この世界の魔法を優斗は覚えていない。
つまりできるのは、優斗が元いた世界のゲームにある魔法を使って相殺するのみ。

『氷結は終焉』

突き出した右手の前に魔方陣が浮かび上がる。

『せめて刹那にて砕けよ』

巨大な氷が炎弾にぶつける。
けれども大きさに圧倒的な差があった。
みるみるうちに炎弾が小さくなる。
そして氷を半分ほど溶かしたところで炎弾が消える。

「……まったく」

右手を振るう。
氷も役目を終えて砕けた。

「ユウト。鱗を取るのを手伝ってくれ。これが依頼の品なんだ」

「わかったよ」

レイナも炎の上級魔法を撃たれたことは理解していた。
が、すでに無表情なフィオナがラスターに向かっているのが見えたので、自分が言うまでもないと思って優斗と共に依頼の品を取るこ

とに決めた。
優斗もそれを理解してレイナに付き合う。
結果がどうなるのかは分からないが、たぶんこれでラスターとも決着がつくのだろう。

貴方じゃないと

ラスターはへたり込んだ。
自分の魔法が優斗に防がれた。
それが自尊心を削っていた。
フィオナは冷たい目でラスターを見る。
彼女の腕の中にいるマリカも母親の雰囲気を察したからか、大人しい。

「優斗さんの感謝してください。優斗さんのおかげでレイナさんは傷を負いませんでしたし、優斗さんが助けなかったら貴方、下手をしたら死んでましたよ」

ゆったりとした様子でフィオナを見る。
いつものラスターではなかったが、それでも口は回る。

「で、でもあいつがフォローできるなら、オレだって出来るはずで……」

「この状況で、まだそう言いますか」

何も出来ないのにただ、突っ込んでいった。
それならまだしも余計なことをしてレイナに怪我を負わせようとした。

そのどちらも助けたのは、まごうことなき優斗だった。
けれど事実を突きつけられてなお、ラスターは優斗を認めようとしない。

「だってあいつはフィオナ先輩に戦わせるほど軟弱じゃないですか！」

「……貴方の良くないところは人の話を聞かないところ、都合よく考えるところですね。私もレイナさんも優斗さんが弱いなんて言ったことありませんよ」

ただの一言も言ったことがない。

「優斗さんは強いんです」

今、ここにある現実を見ろ。
フィオナはそう言いたかった。

「優斗さんは悪意がないかぎりは甘い人ですけど、私は違います。貴方を立てるようなことは言いません」

「で、でも、あんな奴がフィオナさんの婚約者など間違っている！」

その言葉はフィオナが好きだから出てきたのか、それとも優斗を否定したいが為に言ったのかは分からない。
だが、フィオナは最初からラスターの優斗を否定する言動が気に喰わなかった。
今まで我慢していたのは優斗が大丈夫だと言っていたからだ。
けれども、それだって臨界点がある。
今のでギリギリまで抑えていた堪忍袋が切れる。

「間違っているなんて貴方に言われたくありません。それを言う資格も何もないではないですか」

何でラスターに否定されなければならない。

「それに貴方、私のことを好きだと言いますけど、一体どこを好きになったんですか？　顔ですか？　身体ですか？　それとも家柄ですか？」

「……それは……」

唐突な問いに言葉が詰まるラスター。

「はっきり言いますが、貴方のことを私が好きになることは絶対にありません」

未来永劫、永遠に無い。

「貴方には悪意がありませんでした。ですからはっきりと遠ざけることはしてきませんでしたが、それは優斗さんの厚意もあるからだと気付かないのですか？」

「け、けどそれはフィオナ先輩の心が広いからであって――」

「違います。私は心が狭い女です。友人にだってすぐに嫉妬するし、嫌な気持ちになる。他人なんてどうでもいいって思いますし、優斗さんみたいに優しくありません」

「そ、そんなことないですよ！」

ラスターが力強く否定するが、だからこそフィオナは嘆息する。

「なぜ貴方が分かるんですか？　私の性格なんて何も知らない貴方が。優斗さんを知らない貴方が」

フィオナのことを知っている仲間なら、とてもじゃないが心が広いなんて思わないだろう。

彼が言っているのは彼の理想の中のフィオナ。

「貴方の都合と理想を私に押し付けないでください」

最低限の性格さえ知らないのに、どの口が好きだと言うのだろう。

「それに私のことを少しでも知っているなら、絶対に言っては駄目な言葉を貴方は何度も言いました」

特に優斗のことだ。

「私は婚約者を貶されて、ずっと黙ってられるほど出来た女じゃありません」

「で、でも、婚約者っていってもオレのほうがフィオナ先輩を好きな自信がありますし、オレのほうが絶対にフィオナ先輩を幸せにできます、何よりも大切にできます！」

フィオナがここまで言っても退かないラスターだが、彼の言葉に対してフィオナの心は何も動かない。

「貴方はいつも『優斗さんより自分は強い』とか『優斗さんより好

きだ』とか言いますけど」

それがアピールのつもりなのかもしれないが。

「貴方の言葉は私の心に響きません」

どこにも届かない。

「それに、幸せにできるって言いますけど……貴方は私の幸せが何なのか、知っているんですか？」

「……それ……は……」

またラスターは言葉に詰まる。

「いい加減、止めてください」

フィオナはこれが最後だと思い、自分の想いの丈を語る。

「私の幸せは優斗さんと一緒にまーちゃんを育てること。友達とたくさん話して遊べること。こんな些細な日常が私の幸せなんです」

それは奇しくも優斗と同じ幸せだった。

ほんの半年ほど前までは友達がいなかったからこそ、友達と遊ぶのが楽しい。

マリカを育てることになってからは、この子がすくすくと育っていく様子を見ていくのがとても嬉しい。

「だからこの幸せを奪おうとする人がいるなら相手が誰であろうと容赦はしません」

さすがにここまで駄目出しをフィオナにされて、落ち込まないわけがなかった。
が、気落ちしながらでも訊きたいことは絶えない。

「……なんであいつの肩を持つんですか？」

「婚約者の肩を持たない人なんていないと思います」

「……あいつがそこそこ強いというのは認めます。でもあいつは、フィオナ先輩を守ろうとしなかった。フィオナ先輩が大切じゃないんですよ」

誰が何と言おうと、大切な人が危なかったら守るべきだ。
危険な目にさらしてはいけない。

「人によってはそう思うかもしれませんね」

「どういうことですか？」

ラスターの問いに、フィオナは彼の前で初めて微笑んだ。
優斗のことを考えて。
ラスターが初めて見る表情だった。

「あの人は貴方よりずっと心配性で、私が怪我でもして帰ったらとってもうろたえてしまうと思います」

そういう人だ。

「さっきだって私が吹き飛ばされたとき、心配そうな顔で駆け寄ろうとしたんですよ。けれど私が止めたから彼は駆け寄らなかった」

ラスターはそれでも助けに行くべきだと思っているのだろう。

でも、彼は違った。

「優斗さんは私の想いを汲んでくれたんです。私やまーちゃんが傷つくことを本当に恐れる人だけど、それでも私が戦うと言ったから……」

助けに来なかった。

「貴方の大切の仕方もいいんだと思います。それが大切にされてることだって理解してくれて、喜んでくれる人だっていると思います」

貴族の令嬢には、そういうのが好きな人が大勢いるだろう。

「でも私は想いをしっかりと受け止めてくれて、そして進む道を一緒に進もうとしてくれる。こういう大切がいいんです」

けれどそれは。

「もちろん優斗さんに迷惑だってかけてしまいますし、心配だってさせてしまいます」

彼に良い気持ちをさせていないことも確かだ。

「でも……」

フィオナは心底、嬉しそうな表情を浮かべた。

「不謹慎ですけど、嬉しいんです。大切に想われてるって実感できるから」

優斗に自分がそう想われていると。
感じられる。
それがフィオナには嬉しい。

「……オレにそんな表情を向けてくれたこと、なかったですね」

「そうですね。貴方のことは邪魔としか考えたことありませんでしたから」

フィオナがばっさりと切り捨てた。

「もう少しオブラートに包んでくれると嬉しいんですが」

「私にそれを求めないでください」

またも突き放すように答える。
きっとこれがフィオナの性格の一つなんだとラスターもようやく気付く。
苦笑した。
確かにこんなフィオナはフィオナじゃないと思ってしまう。
これだって“フィオナ”なのに。

「そう……いうことか」

所詮はこれだけの想いか、となんとなく納得してしまう。

「フィオナ先輩」

けれど、それでも『好き』という感情は確かにあった。

だから訊きたい。

「……正直に答えてもらっていいですか？」

「何をですか？」

「あいつよりもオレが早く出会ってたら、オレを好きになってくれましたか？」

仮定の話ではあるが。

もし、そうだったなら。

どうだったのだろう。

少しは考えてくれるかとラスターは思っていたが、フィオナは早かった。

「無理です」

「早いですね」

あまりの早さに悔しさも出てこない。

「どれだけの男性と出会ったとしても、やっぱり優斗さん以外に愛

する人なんて思い描けないんです」

頭を下げる。

申し訳ないと思うが、無理だった。

優斗以外に誰かなんて。

◇　◇

話が終わった頃合を見計らって優斗とレイナが合流する。

ラスターは優斗を一睨みしたあと、先に一人で帰っていった。

残った優斗たちは和泉とクリスを回収して、ギルドへと向かう。

そしてギルドで依頼達成のお金を貰うと優斗とフィオナは和泉たちとそこで別れた。

家への帰路へと向かっている途中で、フィオナがマリカと手を繋いで歩きながらぽつりと話し始める。

「あれだけ怒ったのは初めてかもしれません」

「怒っちゃったんだ」

あちゃ、といった感じて優斗が笑う。

「私だって我慢の限界くらいあります」

じと、と優斗をフィオナは見る。

「優斗さんのことをあれだけ言われて我慢しきれるわけありません」

「ありがとう、って言う場面なのかな？」

「言わなくていいです。私の問題ですから」

ただ自分が我慢できなくだっただけ。

「でも……」

少しだけ、気になった。

気になってしまった。

「優斗さん」

「ん？」

だから少しだけ勇気を出して訊いてみよう。

「もし優斗さんの立場が私になった時は――」

そうなった場合。

自分がたくさん、中傷されていたら。

「優斗さんは怒ってくれますか？」

フィオナの少し真面目な質問に。

優斗は唖然とした表情を浮かべたが、すぐにからかうような笑みに

なった。

「それを訊くのはちょっと卑怯じゃないかな」

「なんでですか？」

「決まってるからだよ。絶対に怒るって」

大切で大切で。

どうしようもないくらいに大好きだから。

「僕はフィオナに関しては、怒るために必要な沸点がとんでもなく低くなるんだから」

自分と同じようなことがあったら、やった人物を魔法を吹き飛ばす自信がある。

「……同じですね」

「そうだね」

「嬉しいです」

「そっか」

なぜか互いの胸に充足感が生まれる。

嬉しくなった。

「あうっ」

マリカが声をあげた。
そして空いている右手を優斗に伸ばした。

「わかったよ」

小さく笑って優斗は小さな手を握る。
そしてフィオナを示し合わせてマリカを持ち上げる。

「あいっ！　あう！」

両手を持ち上げられて空中に浮かんだことに喜ぶマリカ。
その姿に癒されながら、

「今日の夕飯、なんだろうね？」

「ハンバーグって言ってましたよ」

二人はなんてことはない会話を楽しんだ。

初めてだから踏み出せなかった

１１月も中盤となったころ、優斗と卓也とクリスが一同に集まっていた。
事の発端は卓也がクリスに訊きたいことがあったからだ。

「なあ、クリス」

「なんでしょうか？」

「特に知ってもない人と結婚するってどんな感じなんだ？」

自分も同じ状況に置かれたわけだが、特に話が進展しているわけでもなく。かといってリルとの関係が進展しているわけでもない。だからこそ、クリスに訊いてみたかった。

「タクヤがそれを自分に訊きますか」

「だって。オレの場合は勢いで頷いた感が多々あるから」

そして卓也は優斗を見る。

「優斗は役に立たないし」

「すみませんね。よく見知った方と婚約やら夫婦やらやっていて」

優斗がおどけて返す。

「だからクリスに訊きたいんだよ。どうなのかな？　って」

卓也の問いにクリスは少し考えると、自分の考えを伝え始めた。

「前にも言ったと思いますが、貴族の結婚というものは双方が愛し合った上での結婚など、そうあるものではありません」

7割ほどは政略結婚だろう。

「家名を上げるため、地位を上げるため、望まれない結婚など多々あります」

「やっぱりそうなんだね」

「特に次女や三女となった女性など顕著でしょう。自らの意思で結婚など」

見捨てられていれば話は別だが。

「穿った見方をすれば、家を興す手段なのですよ。結婚など」

「……」

「……」

正直、これほど結婚というものに冷めた発言を聞いたのは初めてだった。

優斗も卓也も言葉を失う。

「自分は公爵家ですから、選ぶ立場にいました。自分より上など王

族ですから。アリーさんをどうこうしようとしない限りは選びたい放題です」

自分が持っている位を望んでいる輩のほうが数多くいるのだから。

「幾人もの候補がいた中で決めたのがクレアです。初対面ではありましたが、クレアなら仮面夫婦などではなく、本当の夫婦になれると思ったからです」

けれどそれは。

「粗暴な言い方をすれば、少しでもマシだと思った女性を選んだだけです」

こう言い換えることもできてしまう。

「おそらく貴方たちの観点から見て問題なのは、そういった結婚を我々が普通と思っていることでしょう。結婚とはそういうものだと割り切っている」

「念のために訊くけど、マジで全員がそう思ってんの？」

卓也が確認を取る。

「貴族や王族など、結婚なんてそういうものとしか思っていません」

「なんかそれって……悲しいね」

「そういうもの、か。リルもそうなのか？」

「分かりかねます。それこそ一番彼女に近しいのはタクヤですから」

「だね。卓也が分かってあげないといけないんじゃないかな」

彼女がその考えで卓也を婚約者と選んだのか。
それは優斗とクリスには答えることはできない。

「でも、その答えが返ってきたら正直……ヘコむ」

「好きなのですか？」

「分からない。まだ好きと断言できるわけでもない」

いいな、と。
そう思っているだけだ。

「けれどクリスが言ったように選ばれたんだとしたら……嫌だと思った」

「それならばお互いに好きになっていけばいいではありませんか。自分とクレアもそうですよ。自分たちは愛ある生活を望んでいますから」

別に仮面夫婦になる必要性はない。
婚約から始まったとしても愛を育んではいけない理由などない。

「少しずつ分かっていけばいいんじゃないかな。卓也はそういうの、得意だろ？」

根気強く。

それが卓也の強みだ。

「……だな。順序は逆だけど、頑張ってみるか」

卓也は一度、両手で頬を張る。

話して吹っ切れたのか、相談してきたときよりは表情は晴れたように優斗とクリスには見えた。

「それで優斗はどうなんだよ？」

「何が？」

そして話題は次の人物へと移る。

「フィオナと」

「というか、あの状況で互いに好意を持っていないとか馬鹿なことは言わないですよね？」

「互いかどうかは分からないけど、少なくとも僕はフィオナのことが好きだよ」

優斗の返事に卓也とクリスが首をひねる。

「……分かんないってなんだ？」

優斗はフィオナが好き。
ということはすでに告白も済んでいるものじゃないのだろうか。
それならば彼らの仲むつまじい姿にも心底納得できる。

「いや、だって付き合ってるわけじゃないし」

「……はい！？」

「……タクヤ。自分は耳がおかしくなったのでしょうか？」

「いや、正常だろ」

「何が言いたいのかな？」

「言わせんな、馬鹿」

卓也とクリスは二人してため息をつく。

「告ってないのか？」

「うん」

「……つまりあれですか？　別に告白しなくても同棲しているし、マリカちゃんのおかげで夫婦やら婚約者やら言われているから、わざわざする必要もないと」

「いや、だからフィオナがどう思ってるか分からないし」

クリスが大げさに頭を振った。

「……先ほどのタクヤも相当なヘタレだと思いましたが、ここにもいましたか」

こと現状においては卓也以上のヘタレだ。

「言えばいいじゃないですか」

「いや、だって考えてもみてよ。もし僕がフィオナに告白したとして、断られたりしたら悲惨だよ。マリカがいるから家を出るわけもいかないし、一緒にマリカを育ててるんだから嫌でも顔を合わせる」

断るとかねぇよ、と卓也とクリスは視線でツッコミを入れる。

「そこまでネガティブになる理由はなんなんだ？」

優斗はそう言われて少し考え、

「怖いのかもね。初めての恋で」

自分の考えを素直に口にした。

「フィオナと一緒にいれる状況がほんのわずかの可能性でも崩れて

しまうと思ったら、うかつに今の状況を変えたくないと思ってるのかも」

それだけじゃない。

「あと、義父さんや義母さんとの関係を崩したくないっていうのもあるんだろうし」

何かを言って崩れるのが怖い。

「大切なんだ。フィオナもマリカも義父さんも義母さんも。だから今の関係を崩したくない」

「……それでフィオナを誰かに取られたらどうするんだ？」

「フィオナがその人のことを好きなら諦めるよ」

もし、彼女が本当に好きなら。

「でも」

こう言うのは変だけど。

「今まで言ったことに矛盾するけど」

怖いと思っていると同時に、こう思ってる。

「このまま終わりたくないのも確かなんだ」

すごく怖いけれど一歩を踏み出そうと考えてる。

「そろそろ頑張らないと……ね。そのために言わなきゃいけないこともあるし」

今まで彼女に――彼女たちに言わなかったことを。

「それを言って初めて、フィオナと真正面から向き合えるのかなって思ってる」

◇

◇

フィオナとココとアリー、リルも4人で集まっていた。

「それでリルさんはどうなんです？」

ココが興味津々に訊いてきた。

「何がよ？」

「タクヤさんとのことですよ。婚約までしちゃって。いつから好き

だったんです？」

「……べ、別に言わなくてもいいでしょ」

少し顔を隠してリルがそっぽを向いた。

「え～、だって気になりますよ」

「わたくしも」

「私も気になります」

便乗してアリーとフィオナも乗っかってきた。

3人の期待の視線を受けて、さすがにリルも黙ってられなくなる。

「……そ、そんな大層な話じゃないわよ」

リルが話し始めたことに目を輝かせる3人。

「黒竜に襲われたときにうっかりときめいちゃっただけ」

あれだけ悪態を突いていた自分を、命を賭して守ってくれた彼の姿に。

「でもリルさんって婚約者候補がたくさんいらしたのですよね？」

そこから選ぼうとは思わなかったのかとアリーは気になる。

「そりゃ婚約者候補がたくさんいたけど、別にいいやつはいなかったし。そいつらよりもタクヤのほうがずっと良い男だし。それにあ

たしは貴族達の政略道具になるつもりもなかった」

人形のように扱われるなんて我慢できなかった。

「というかアリーとココはどうなのよ」

今度は逆にリルが二人に尋ねる。

「わたしは全然です。婚約の“こ”の字も出てきませんよ」

「シュウ様があれですから」

苦笑するアリーに3人も同じように笑った。

「アリーは苦労しそうね」

おそらく仲間の中で朴念仁ナンバー1の修。

恋愛関係に発展させることは殊更に難しそうだ。

「フィオナさんは進展とかあったりします？」

そして今度の話題はフィオナへと移り変わる。

「いえ、特に何も」

落ち着いた感じで紅茶を飲むフィオナに、アリーは前々から思っていた疑問を訊く。

「ぶしつけに訊きますけれど」

今まで直接に訊いたことはなかったけれど。

「フィオナさんはユウトさんのこと好きなのですよね？」

「ふぇっ！？」

フィオナが手に取っていたカップをガチャリと音を鳴らして落とした。

一瞬で顔を真っ赤にしたフィオナにリルがからかうように言った。

「こないだ愛してるって言ってたわよ」

「え！？　い、いつですか？」

「本当なのですか！？」

突然降って沸いた話にココもアリーもテンションが上がる。

「あたしとリステルに行った時によ。３０人以上に大見得切って言い放ってたわ」

「ふぇ～」

「すごいですわね」

そんな大人数に言うなんて。

と、ここでココは疑問に思った。

「告白はしないんです？」

それを訊くと、フィオナの真っ赤だった顔はすぐに赤みが消えた。

「……いえ、さすがに断られるのが怖くて」

「なんでです？　だってフィオナさんってユウトさんに好かれてるじゃないですか」

「好意を持っていただけてるのは分かるのですが、それは仲間の皆さんも同様だと思いますし」

「「「……えっ？」」」

予想外の返答に3人が面を食らった。
そして次々に声を揃えて否定する。

「違いますわ。全然、違います」

「扱いからして違うわよね」

「ですよ」

明らかに圧倒的にどうしようもなく扱いが違う。
なのに同じに思うって。
あきれる。
鈍いのか、それとも危機感が足りないのか。

「前にも話したと思いますが、ユウトさんは詳細が知られたら大変な人物です。国内有数どころか国外まで引っ張りだこの争奪戦が起きそうな方です。このまま手をこまねいていたら奪われてしまうこと必至ですわ」

アリーがそう言った瞬間、フィオナが叫んだ。

「それは嫌です！」

珍しく、フィオナが真顔で余裕のない表情になった。
今までならば『優斗さんが決めたなら仕方ありません』と言うのに。
互いの結びつきが強くなったのだろうか？
それとも、より一層に優斗を愛するようになったのだろうか？
どちらにしても反射で言い放ったこの言葉は、おそらく彼女の純粋な本心なのだろう。
そんな彼女の様子にアリーはイタズラを思いついたように笑う。

「幸い、現状ではフィオナさんはユウトさんの奥方です。今のうちに良妻としてユウトさんを捕まえておくのがよろしいのでは？」

アリーの提案にフィオナは飛びついた。

「ど、どうしたらいいですか！？」

あまりにも真剣な様子に少しだけ申し訳ない気もしたがアリーもココもリルも、それ以上に楽しさが勝った。

「じゃあ、みんなで考えましょう」

積極的？　引っ込み思案？

普段の優斗は朝に弱い。
やろうと思えば問題なく起きれるのだが、それは特別な状況になったときだけ。
普段は１５分以上もぼけっとしている。
特に休みの日などはゆっくりとまどろんでいるのが好きだった。

「失礼します」

そんな彼のもとへと向かったのはフィオナ。
音を立てないように優斗に近づき、

「優斗さん、起きてください」

優しく声を掛けるが優斗は起きない。
というわけで、このあいだの話し合いの際に言われたことをやってみる。

「あなた……お、起きてください」

顔を真っ赤にしながら言う。
が、優斗に反応なし。
そして起きなかった場合の次の手段。

「お、おはようのキス……でしたね」

頬と唇の二択らしいが。
とりあえず頬に狙いを定める。

「……よしっ！」

気合いを入れてベッドに手を掛けた。
と、ここでベッドが軽く揺れる。

「……ん……？」

そのわずかな振動で優斗が目を覚ます。

「……」

少しだけ目を開いて……フィオナを目が合った。

「……きょう……なんかあったっけ……」

「……い、いえ、なにも」

フィオナとしては、まさか頬にキスをしようとしていたなどとは言えない。
優斗はフィオナの返答を聞くと、安心したように目を閉じた。

「……おやすみ」

◇

◇

「……うぅ……」

朝は失敗した。
が、次は成功させる。
お昼を食べ終わって優斗は現在、ソファーで寝転びながらマリカを持ち上げている。
ソファーは優斗がまるまる使っているので、ほかに座るものもいない。

「あぅーっ！」

“高い高い”をしてもらって喜んでいるマリカ。
フィオナは二人が遊び終わるところを狙って『ひざまくら』をやってみようと試みる。
だが、

「ユウト、ちょっとそこでお茶飲むから頭あげて」

「向かいのソファーが空いてますけど」

「いいからいいから」

無理矢理にエリスが優斗の頭があった部分に座ってきた。
ひょいっと頭をあげた優斗はそのまま起きようとしたが、額を押されてあえなく後頭部がエリスの太ももの部分に着地した。

「……なんです？　突然に」

「娘に膝枕ってしたことあったけど、義息子にはやったことなかったから」

「義父さんで我慢しません？」

「嫌よ。自分の子供にやるっていうのが重要なのよ。そ・れ・に――」

フィオナをエリスはにやにやと見る。
ただならぬ表情をしたフィオナがそこにいた。

「あら？　フィオナ、どうしたの？」

「わ、分かっててやってるんですか！？」

「なんのことかしら？」

エリスがフィオナをからかっている。

これでようやく優斗もエリスがどうしてこんなことをやったのか見当がついた。

「フィオナをからかうためにやったんですか」

「だってあの子ったらさっきからウロウロしながらユウトとマリカのことを見てたから。もしかしたらこういうことやりたいのかな、って」

「ち、違います！」

からかわれていたのに気付いて、フィオナが反射的に否定する。

「部屋に戻ります！」

そしてバタバタと自室へと戻っていった。

「本当に慌ただしい娘ね」

「……義母さん。フィオナをからかうのやめてください」

「だって楽しいんだもの。今のあの子ってからかい甲斐があるし」

「……はあ。僕にまで被害が来るようにしないでくださいね」

「そこらへんのさじ加減は分かってるわよ」

1時間後、落ち着いたフィオナは再びリビングに戻る。
が、優斗とマリカの姿が見えない。
エリスに尋ねる。

「優斗さんは？」

「あそこでマリカとお昼寝中よ」

エリスが指したほうを見れば、二人仲良くマリカのお遊びスペースで眠っていた。
にやにやしながらエリスがフィオナに訊く。

「それで、次は何をするの？」

「や、やっぱりさっきの分かっててやったんですね！」

「だってぶつぶつ独り言で言ってるんだもの。それはもう分かるわよ」

朝からずっと言っていれば気付かないほうがおかしい。

「次はうでまくらって言ってたわね」

「わ、わー！　だ、駄目です！　いくらお母様でも次はやったら駄目です！」

「静かになさい。二人が起きちゃうじゃない」

慌てたフィオナをたしなめる。

「というかさっきから疑問だったのだけど、どうして突然そんなことやろうと思ったの？」

エリスの当然とも思える質問にフィオナは、先日の話をする。

「ふうん。つまりユウトが誰かに取られるかもしれないから、先に既成事実を作ろうとしたのね」

「そ、そうじゃありません。妻らしいことをすれば優斗さんをここに留めておけるって話になって」

「なに？　フィオナはユウトをここに留めておきたいの？」

エリスの直球な質問にフィオナは照れるが、しっかりと頷いた。

「だったら別にそんなことしなくてもいいじゃない。帰る場所とおいしいご飯を作って待っていること。これが旦那に妻を持って一番よかったと思わせる方法よ」

「……そう……なのですか？」

あっけらかんとしたエリスの言葉にフィオナは驚く。

「そうよ。たまに振る舞う手料理なんて、若いときのマルスは泣いて喜んだわよ」

貴族だから料理を振る舞う機会はそうそうあるわけではないが、それでも料理を作ってあげたときは喜んでいた。

「だからフィオナ達は今のままでいいのよ。ときどき、ご飯を作ってあげてるしょう？」

「はい」

「それに、ユウトが帰る場所は“この家”なんだから。無理にどうこうしようと思わなくていいの」

と、ここでエリスはイタズラめいた表情を浮かべ、

「どうしても離したくないのなら、告白でもなんでもして本当の婚約者やら夫婦になればいいだけじゃない」

そう言ったら、またフィオナは顔を真っ赤にして自室へと戻っていってしまった。

エリスは笑う。

「フィオナって変に行動派なのに、妙なところで引っ込み思案なのよね。誰に似たのかしら？」

行動的なのは自分の性格だろう。

ということは、引っ込み思案なところは、

「きっとマルスね」

あと少しが足りない

久しぶりに5人で夕飯の食事をしていた。
普段はマルスの帰りの時間が不定期のために4人が多いのだが、本日は仕事が早く終わったとのことなのでマルスが早々に帰ってきたのだ。
優斗はマルスが早く帰ってきたことで、一つの決心を固めた。

――今日、話そう。

このあいだ、決めた。
自分の過去をちゃんと話すと。
他人に知られたら嫌な過去だけど。
この人達には、知ってもらいたいと思ったから。
優斗は夕飯が終わりフィオナがマリカを寝かしつけに部屋に行くのを見て、マルスとエリスに時間をもらった。

「時間と取ってくださってありがとうございます」

「それはかまわないんだが」

「何の話をするの？」

「僕の昔話をしようと思いまして」

優斗が言うと、二人とも一様に驚いた表情を浮かべた。

「いいのかい？」

「別に話さなくてもいいのよ」

多少なりとも優斗の過去を知っている二人は、気を遣ってきた。
それが嬉しい。

「けれどこれ以上、黙っておくことはできないって思いましたから」

大切にしてくれるからこそ。

「しっかりと話したいんです」

「どう説明したらいいか分からないので、最初から順に話していき

たいと思います」

優斗は大きく息を吸って……吐いた。
身の丈話をするのはこれで2度目だ。
さすがに修たちの時とは別の緊張感がある。

「まずは僕の両親のことから話したいと思います。僕の両親はこの世界で言えば、商工の代表でした。そしてその商工を一代で大きくさせた手腕の持ち主でもありました」

晩年に至っては数百億という利益を得ていた。

「真っ当じゃない方法も使って」

不正ギリギリ。
もしかしたら平然と不正をしていたのかもしれない。

「悪党のごとく乗っ取り、幾数もの商工を潰し、その人達の生活を破滅させていました」

そんな両親は当然。

「もちろんですが両親の結婚も愛あるものではありません。政略結婚みたいなものです」

会社の利益になるため、一家の利益になるため。
それで自分の両親は結婚した。

「そして僕はそんな両親から帝王学……とでも言えばいいでしょうか。勉学、運動、芸術の分野などのありとあらゆるものにおいてト

ップであることを強要されて生きてきました」

物心ついたころには、すでにそうだった。

「幼少のころからずっと学ぶことだけを強要された当時の僕は、今から見れば感情のない人間でしたね」

初めて会ったときのフィオナよりもずっと。

無感動に、無表情に。

ただ生きていただけ。

「失敗をすれば食事も抜かれますし、殴る蹴るは日常茶飯事。誰かに負ければ存在すら否定されてきました。『結果が出なければおまえはこの家にいる価値がない』と」

ずっとずっと、そうされてきた。

強制を指定されてきた檻。

「それが当たり前だと思っていましたが、小学校……7歳ほどから通うようになる学校に行けば、さすがに自分の境遇があまりにも違いすぎることに気付きました」

友達と遊んでいる同世代を見るたびに。

自分が彼らと違うものだと見せつけられた。

「そして思うんです。なぜ自分だけがこうなのだろう、と。どうしてここまでされなければならないのだろう、と」

あこがれた。

彼らの生き方に。

「もちろん、友達が作れるわけもなかった。両親ともに僕に友人など不要と思っていましたから」

友人などお前にはいらない存在なのだと。

「けれど１０歳になったころ、僕は思いました」

子供の浅知恵みたいなものだけど。

「元凶が両親ならば、この２人が死んでしまえばいい。いっそ殺してしまおう。そう決めました」

今から鑑みれば、あまりにも子供らしい短絡的な考えだった。

「自らが手を汚したことばバレれば犯罪になる。やるならば完全犯罪を行わなければならない。そこからの２年間は暇な時間があれば両親を殺す計画を算段していたような気がします」

自分が殺したことを警察に悟られずに。

いかに両親を殺すか。

ただ、それだけを。

「そんなある日、転機が訪れたんです」

あっけないほどに。

それは来た。

「１１歳の年末の頃です。両親に潰された商工の人間が家に上がり込み、包丁を持って暴れたんです。自室にいた僕は、乗り込んでき

た暴れる彼を取り押さえることもせずに捕らえられました。たぶん、当時の僕でも取り押さえられたと思いますが、僕は抵抗せずにいました。僕を殺そうとはしていなかったので安易に捕まったんです。そして手錠をかけられましたね」

けれどもそれは。
殺さないだけで。
それ以上の絶望を知れ、と視線が言っていた。

「リビングに連れていかれて、始まったのは殺戮です。両親はすでにお腹を刺されて蹲っていましたが、そんな彼らに何度も何度も全身をくまなくメッタ刺しです。命が失われたあとも、何度も。何片にも切り刻まれ、肉片がそこら中に転がりました」

血なまぐさい臭いが。
リビングに充満していた。

「この光景を僕に見せたかったのでしょうね。お前の両親はこんなことをされる人間なんだと。教えたかったのだと思います」

何度も何度も。
両親が刺される瞬間を。
目撃させられた。

「そのあと、彼は満足したように自首しました。僕に一生分の傷を心に負わせたものだと信じて」

あくまで普通の両親で。
自分が普通の子供なら。
彼がやったことは大いに意味があっただろう。

「僕は……何も悲しくありませんでした。殺そうと思っていた両親が死んだ。しかも自分が手を掛けることもなく。よかったとさえ思いました」

自分の手を汚す必要がなくなったのだから。
けれどそれは、決して終わりなどではなくて。

「両親は莫大な保険に入っていたので、僕はそれを受け取ることになりました。ですがその大金をかすめ取ろうとした汚い大人たちが大勢、押し寄せてきました」

養親に、後見人に、親族だから、と。
莫大な遺産に目がくらんだ人々がやってきた。

「僕は彼らを全力で拒否しながら、自ら後見人を立て、全て振り払いました」

そして大人とはなんて汚い存在なんだろうと。
子供ながらに悟った瞬間でもあった。

「何もかもが終わったころには学校も一つ上に上がり、中学校というところに通い始めました」

事件があったから引っ越しをして。
何も知らない土地で一人、生きていく決心をした。

「そこで初めて僕は、自分で何かをするということを行いました。自分で選んだ部活に入り、自分の意思で遊びにいき、見てみたいと思ったアニメを見て、ようやく生きているという実感を得ました」

のめり込みすぎて、軽いオタクになってしまったのは愛嬌というものだろう。

「でも、それは同時に敷かれたレールがなくなり、将来のことが白紙なった瞬間でもあります。自分で考えて未来を描かなかった僕は……将来を想像することができない人間になっていました。明確に願っていたのは両親の死だけなのですから」

子供らしい夢を持つこともなく。
ただ、殺すことだけを考えていた小学校時代。

「けれどいずれ見つかるだろうと楽観的に考え、僕はその日1日1日を生きていき、そして修たちと出会いました」

親友達と出会った。

「それからの日々は……本当に楽しかったんです。次の学校――高校に上がるときも僕はどこに行こうか考えていませんでした。実力的にも財力的にもある程度の学校は狙えました。けれどそんな時、あいつらが言ってくれたんです。どうせだったら同じ学校に入ろうぜって」

簡単に。
まるで普段の世間話のように話してくれた。

「嬉しかった。嬉しくて、嬉しくて、僕は……自分がどういう人間なのかを教えました。彼らなら受け入れてくれると思ったから」

性格も。

過去に起こった事件も。
余すことなく伝えた。

「そうしたら彼らも同じような境遇だと知って、驚きと同時にもっと大きな仲間意識が芽生えました」

唯一無二だと。
一生涯の友人だと。
思えた。

「そして同じ高校へと進学した僕らは楽しく過ごして……あの召喚の日を迎えました」

あのスキー旅行での。
召喚に繋がる。

「……これが僕の全てです」

全てを言い切ると、優斗は大きく息を吐いた。

「実の両親に殺意を抱き、殺そうとしていたこと。そして助けられたかも知れない両親を見殺しにしたこと。これは……紛れもない事実です」

否定できない自分の過去だ。

「これが昔の僕です」

あまりにも醜い、隠したい過去。

「僕の今の性格は、僕が理想としていた性格なんです」

強く、優しく在る。

ある意味で仮面をかぶっているようなものだ。

「本当の僕は臆病ですぐに人を恨み、憎み、殺そうとする……弱虫な性格なんです」

そんな自分を。

マルスとエリスは。

どう思うだろうか。

「……それだけかね？」

マルスは全てを聞き終えると、ただそれだけを訊いてきた。

「はい」

優斗は頷く。

マルスは優斗の頷きに、少しも動揺することはなかった。

「私はそれを知ったところで、君を義息子じゃない……などと言うつもりはない」

言えるわけがない。

「理想の性格？　結構じゃないか。最初は違かったとしても、今は立派に君の性格だよ。そう在りたいと望み続けて得られた君自身だ」

もう立派に優斗の性格なのだ。

否定してはいけない。

「私は君の過去を知れて……よかった」

それはマルスが考えている以上に辛い過去だろう。

推し量ることなんてできない。

けれど、

「私は、そんな君が息子であることを誇りに思うよ」

マルスはただ、微笑んでそう伝えた。

そしてエリスは、

「――っ！」

右手を一閃、優斗の頬にたたき込んだ。

「馬鹿じゃないの！？　どうしてそういうことを早く言わないの！！」

怒鳴った。

張られた左頬を触りながら、優斗は少しだけ唖然とした。

まさかビンタをされるとは思っていなかった。

「す、すみません。結構スプラッタな内容もあるので迂闊に話せるモノでもないかな、と。それに二人に嫌われるのが怖かった、というのもありますし」

「さっさと言いなさいよ！　私がユウトのことを嫌うわけないんだから！」

そして初めて優斗がエリスのことを『義母さん』と呼んだ日と同じように、彼女は優斗を抱きしめた。

思わず、涙まで出てくる。

優斗は苦笑した。

「相変わらず、義母さんは僕のために泣いてくれるんですね」

「母親なんだから……当たり前よ」

「……はい」

今はもう、断言できる。

誰にも否定なんてさせない。
優斗にさえ、させない。

「ユウトは絶対、何があってもうちの子だから。それを忘れたら怒るわよ」

「……はい」

「貴方が昔の貴方自身を否定したくても、私は肯定するわよ。その事実があったからこそ、私の大好きなユウトに会えたんだから」

「……はい」

まさか。
肯定されるとは思ってなくて。
……力が抜けた。
あんな過去でもあってよかったのだと。
ほんの少しだけ、思えた。

「ユウト君。とりあえず気になったことがあるのだが」

「なんでしょうか？」

エリスに抱きしめられながら、マルスの質問に答える。

「最初に黙っておくことができなくなった、と言っていたが何か切っ掛けがあったのかい？」

「……はい」

話そうと思った理由は、たった一つ。

「フィオナと真正面に向き合いたいんです」

ただ、それだけ。

「正面を向いて彼女を見ていきたいから」

「だというのに、フィオナには言わないのかい？」

「……直接言おうとも思ったんですが、上手く話せる自信がなくて。義父さんと義母さんから言っていただけると助かります。大切なのはフィオナが知ってくれる、ということですから」

そう。

ただ、自分の過去を知ってくれる。

それだけでいい。

この件だけは上手く話せる自信がなかった。

「内容が内容なだけに、怖がらせたくないんです」

彼女は純粋で。

優しいからこそ。

怖がらせたくない。

「大切な女性だからこそ……絶対に」

けれどそれは。

『大切な女性だから』というのを言い訳にして。

フィオナだけに自らの口で伝えられないのは。

彼女にだけは嫌われたくないということ。

『二人――エリスとマルスに嫌われるのが怖いから』というのも本当だろうけれど。

やっぱり一番は。

『フィオナにだけは嫌われたくない』から。

だから。

彼女にだけ伝えられない。

そしてそれは。

彼が自分で言っていた。

優斗が弱虫だという証なのかもしれない。

伝え聞くのではなく

今、エリスがフィオナに話している。
優斗はその間、テラスでマルスと飲んでいた。
あくまでいつものように過ごしている。

「本当に良かったのかい？」

「……分かりません。ただ、僕が説明するよりは良かった、と。思うしかないです」

手に持ったグラスからカラン、と氷が音をさせた。

「どの判断が正しいかなんて分からないですよ」

「……そうか」

だから『正しいと思う』選択をしただけだ。
その時だった。

「――ッ！」

テラスへと繋がる窓が開かれた。
振り向く優斗とマルスの視界にいたのはフィオナ。

手が震え、険しい様相をしている。
彼女の様子から、エリスから話を聞き終えたのは判断できた。
遠目にエリスの姿が見えるのも、その証だろう。

「フィオ――」

「私はっ！」

話しかける優斗を。
フィオナは遮った。
唇を噛みしめ、ぐっと目を伏せる。

「……私は……」

泣きそうになる。
声が震えた。

「……私は……っ！」

嫌だった。
大切な優斗の話を本人から聞けないなんて。

「……どんなに怖い内容だったとしても……優斗さんから直接聞きたかったです」

父も母も優斗から直接聞いているというのに。
自分だけは、伝え聞いた。

「……私は……直接話すほどの価値もないんですか？」

泣きそうになりながら問うフィオナ。
その様子に優斗は考えるよりも何よりも先に、否定の言葉を放った。

「違う！」

そうじゃない。

「……違うんだ」

言わなかったじゃない。

――できないんだ。

君に上手く話すことができなくて。
どうやってもありのままの自分しか伝えることができなくて。
少しでも和らげる話し方ができなくて。
でも、それが言い訳だということも否定できなくて。

「……僕は……」

怖いだけ。

「凄惨なことを話して君を怖がらせたくないんだ」

否定されたくない。

「上手く話せなくて君に嫌われたくないんだ」

大好きで。
大切で。

かけがえのない女性だから。

「幻滅されたり、否定されたりしたら……」

どうしていいか分からなかったから。
せっかく一歩を踏み出そうと思っていたのに。
その一歩の結果を少しでも良い方向に持っていく自信がなくて。
本当に弱々しい一歩を踏み出すことにした。

「……優斗さん……」

情けないぐらいに情けない、優斗の表情。
フィオナが初めて見る優斗の姿。

――こんなに不安そうな優斗さんを見るのは初めてですね。

いつもの強さは見る影もない。
人によっては、普段と違うからこそ幻滅してしまうかもしれないけれど。
自分は違う。

「しませんよ」

フィオナは優斗の頬を両手で優しく触れると、額同士を合わせた。
ほんの数センチのところで視線が合う。

「否定も幻滅もしません。どんな優斗さんでも私は受け入れます」

親を憎んでいたとしても、殺そうとしたとしても、弱虫だったとしても。

「例え過去に何があったとしても、です」

自分は受け入れてみせる。
優斗が自分にしてくれたように。

「貴方は私と出会った時、私を受け入れてくれました。無口で話すことが苦手な私を」

けれどもお喋りをしてみたい自分を。

「貴方だって緊張してたっていうのに、頑張って話しかけてくれました。優しく笑って私を受け入れてくれました」

ただ、ただ。
それが嬉しかった。

「だから今度は私の番です」

貴方がしてくれたように。

「辛い過去があるなら私が癒やしてあげます。弱虫な貴方がいるなら私が守ってあげます」

だって。

「だって私たちは――」

誓いも何もしていないけれど。

「――夫婦じゃないですか」

例えそれが。

「仮初めでも偽物でも今は……私は優斗さんの妻です」

ならば自分が優斗を信じないことも認めないことも許さないわけもない。

「だから貴方を支えます」

ここまで言って、やっとフィオナは微笑んだ。

「貴方を支えるのは私だけの特権です」

優しいフィオナの言葉が優斗に染み渡る。

「……ありがとう」

優斗はただ、それだけしか言えなかった。

今思えば、なんで怖がっていたのだろうと思う。
フィオナはこんなにも優しくて純粋で……何よりも強い女性なのに。
頬と額から伝わる彼女からの温もりに優斗の表情が綻ぶ。
が、ここにいるのは優斗とフィオナだけではなく、

「あー、お前たち。こういうことは親がいないところでやってくれると助かるんだが……」

非常に居づらそうにマルスが声をかけた。

「「す、すみません！」」

ぱっと二人が飛び退く。
ついさっきまでのシリアスな状況とは違い、一瞬で二人が茹で蛸になる。
何とも対照的な光景にマルスから笑いが漏れる。

「いや、なに。場所を考えてくれと言っただけだ。私は今のようなことを咎めるつもりは全くないぞ」

「お父様っ！？」

「いや、ちょっ、それは！！」

「はっはっはっ。私はそろそろ部屋に戻るとしよう。二人はこのままここに残るのかい？」

からかうようなマルスの問いかけに、

「戻ります！」

「私もです！」

真っ赤にしながら優斗とフィオナはそそくさと家の中へと入っていった。

マルスはそんな二人の様子を見ながら、再び座ってグラスを煽る。

「なんというか、見ていてもどかしいというのはこういうことなのだろうな」

気分が良かった。

優斗が自分の過去を話してくれたことも、義息子と娘の仲むつまじい様子を見れたことも。

「願わくば、あの二人が本当の夫婦になってくれると私もエリスも安心するんだが」

マルスにとって優斗以上にフィオナを預けるに足る人物など存在しない。

「なんて言っても、時間の問題か」

あの様子を見せられたら。

そう思うのも当然だろう。

最終結論：リア充は死ねばいい

本日、１１月も末日に向かってきたところ。

「しゃあっ！」

意気揚々と修が飛び出して木刀を一閃、振り抜こうとした。

「ぬるい！！」

その太刀筋を受け止めたのはレイナの父、近衛騎士団長だ。
模擬戦を行っているというので修が意気揚々と騎士団長を指名したのが事の発端で、現在二人は戦っている。

レイナの誘いで優斗、修、和泉、卓也は近衛騎士団の鍛錬場へと集まっていた。
どうにも一度、近衛騎士団の方々と修たちを会わせたかったらしい。

「やっぱり近衛騎士団長ともなれば修でも簡単には勝てない……っていうか負けるかな？」

「分からない。いくらなんでも、とは思うがそれで勝つのが修でもあるからな」

「そうか？　オレとしては何とも言えない」

口々に感想を言いながら二人の模擬戦を見る。
勇者と近衛騎士団の団長の戦いというのは、さすがに見ておもしろい。
気付けば始まってから４分弱が経過していた。

「シュウは型など関係ない振り回しているかのような戦い方だが、それで父上とこんなに長い時間やり合えるというのは凄いな」

感心するように言ったのはレイナ。
普段から周りが修のことをチートだのなんだの言っている理由をまざまざと見せつけられているようだ。

「制限時間って何分だっけ？」

「５分だ」

優斗の問いかけにレイナが答える。

にやりと優斗が笑った。

「じゃあ、ここで賭けをしようか。二人の勝負の結果がどうなるのか。賭けるのは、あとでフィオナ達が持ってきてくれるクッキー一枚」

「ほう、面白そうだ。修の勝ちに賭けよう」

最初に乗ったのは和泉。

「オレは引き分け」

続いて卓也も乗っかり、

「ならば私は父上が勝つほうに賭けよう」

レイナが断言し、

「僕も卓也と同じ引き分けで」

優斗が最後に選んだ。

戦いは最初よりも熱く繰り広げられており、修は木刀どころか蹴りなども加えてどうにかダメージを与えようとしていた。

が、百戦錬磨の騎士団長も紙一重でそれをかわす。

代わる代わる行われた攻防は、５分を経過した合図によって終わらせられる。

「あっした！」

修が木刀を納めて頭を下げた。

「私と5分戦えるとはさすがだ」

騎士団長に言葉を貰ってから修は優斗たちのところへ戻ってくる。

「やっぱ強いわ。勝てる気がしなかった」

満足そうに戻ってきた修……だが。

「馬鹿かお前は。勝てなくても勝て」

「何をしているのだお前は。素直に負ければ良いものを」

「僕は修が引き分けるって信じてたよ」

「オレもだ」

和泉とレイナにはボコボコに言われ、優斗と卓也には褒められた。

「……お前ら、俺で賭けてたな？」

「当然。オレと優斗はおかげでクッキーが一枚増量したよ」

イェイ、と優斗と卓也がハイタッチする。

するとそこで、騎士団長の声が響いた。

「続いて、模擬戦を行いたいものはいるか？」

騎士団長の問いかけに間髪いれずスッ、と手を上げた人物がいた。

副長だった。

女性で若干２２歳という若さながら実力と美貌を備え、副長の座を得たということをレイナから４人は散々聞かされていた。
あまり口数が多い方ではないが、的確な指導をしてくれるとも。

「誰とやりたい？」

「あの方との一戦を望みます」

手のひらで示されたのは優斗たちのグループ。
それだけでは誰かが分からないが、視線が１点に注がれていた。

「……えっ？」

優斗は視線が自分と合ったのに気付く。
気のせいだと思いたくて、ゆっくりと左を見た。
和泉とレイナが首を振る。
続いて右を見る。
修と卓也が優斗を指さした。
再び、優斗は副長に視線を向ける。
こくりと頷かれた。

「え？　何でですか？」

「興味があります。貴方様の実力に」

副長はどうやら優斗がこの世界で何をしてきたのか、知っているらしい。
ならば興味を持たれるのは仕方ないとは言える。

「あ～……卓也や和泉じゃ駄目ですか？」

「貴方様です」
断言された。
「いいじゃんか。やってみろよ、俺だって団長とやったんだし」
「副長とユウトの勝負。興味がないと言えば嘘になるな。私がまだ勝てたことがない相手でもあることだし」
「楽しんでこい。女性といえど近衛騎士団の副長。お前が適う相手でもあるまい」
「がんばれよ」
一様に優斗を励ます。
「……はいはい。ここで僕と副長が戦ったほうが面白いんだよね？」
「そういうこと」
全員に、ほとんど同時に頷かれた。
「まったく、女性を相手にするのって苦手なのに」
優斗は文句を言いながらも前へと向かう。
修から木刀を受け取って副長と相対した。
ゆったりとした動きで副長が構える。
たった、その動きだけでゾクリと悪寒がした。

――この人……半端なく強い。

この木刀での勝負。勝てる可能性はあまりなさそうだ。
とはいえ、こういった感覚を得るのは初めてじゃない。
部活で全国上位を相手にしたとき、修と勝負をしたとき。
何度もこの感覚を味わっている。
この時点で、相手が女性だから苦手……という感覚はとうに消えた。

――今回の場合だと、こういった相手に長期戦なんて無理。一発勝負でどうにかするしかないよね。

相手の強さを感じて優斗も気合いが入る。
右手に持った木刀を左脇に締まった。

「……逆袈裟か？」

レイナが興味深そうに呟いた。

「いや、イメージ的には居合いだろ」

呟きに修が答える。

「鞘はないのにか？」

「言ったろ。イメージだって」

優斗が狙っているのは最速最短勝負。
そして日本人が刀を使っての最速勝負を仕掛けるなら……居合いが一番に思い浮かぶところだろう。

「特に修練してるわけでもない木刀での勝負じゃ、長期戦に持っていっても優斗の勝ち目は薄い。つーか、ほとんどない。それなら、もっとも勝つ可能性があるのは相手の実力を把握しきれない最初の一太刀。そこに賭けたんだろ」

修の言ったことは優斗の考えとほとんど相違なかった。
そこはやはり修だ、と言うべきだろうか。

「……っ！」

副長が動く。
優斗も一歩、踏み出した。
副長の振り下ろす木刀と、優斗の横薙ぎに近い木刀の軌道が合わさって甲高い音が響く。
刹那、優斗の木刀が折れた。
模擬戦において木刀が折れることなど、ほぼない。
予想外の状態に周りがざわつく。
副長は多少崩れている体制を戻して告げる。

「……続けましょう」

「いいえ。僕の負けです」

続行を望む副長とは別に、優斗はあっさりと負けを認めた。

「ありがとうございました」

呆然としている副長に一礼してから、優斗は修たちのところへと戻っていった。

「まだ決着、ついていなかったんじゃないか？」

「そうだな。たかだか木刀が折れたぐらいで負けを認めるなんてさ」

「いや、木刀が折れたのは確かだけど……折れた以上の意味があるんだよ」

和泉と卓也がワイワイと言うが、レイナと修は苦笑している。
この二人は分かっていた。

「さすがにあれを避けられるとは思わんかったな」

「副長の人外っぷりが露見した、ということか」

「だよね」

示すように話した3人に、卓也と和泉が首を捻る。
それに気付いたレイナが説明を始めた。

「いいか、二人とも。今のは優斗の木刀が折れただけに見えただろ？」

二人同時に頷く。

「けれどな、あの一瞬で起こったのはそれだけじゃない。折れた木刀が飛んでいった場所、確認したか？」

「……どこだったか？」

「副長に向かってたはず」

「そうだ。ユウトは折れる瞬間をコントロールして折れた先を副長の顔に当てようとした。けれどそれを避けたんだよ、副長は」

「……マジで？」

「マジだ」

卓也の問いかけに、レイナが頷く。

「だろ？　ユウト」

「その通り。あんなの避けられるってどういう反射神経してるんだろ。僕だって反射神経には自信あるけど、かわしきれるか分からないのに」

「いや、私はむしろ折れると思った瞬間に折れた先をコントロールしようとして、あまつさえ当てようとするお前の考えもわからん」

「しょうがないでしょ。ああするしか勝ち目なかったんだから」

と、話していると副長が優斗たちのもとへと歩いてきた。

そして来て早々、

「先ほどの勝負、もう一度できませんか？」

再戦要求をしてきた。

優斗は笑顔でさっくりと断る。

「勘弁してください」

「し、しかし、あれで決着がついたとも言い辛いでしょうし」

「あれは僕の負けです。木刀を折られるだけでも負けに等しいのに、せめてもの一撃とした折れた部分すらもかわされて。完膚無きまでに僕の負けです」

「しかし貴方様ほどの実力の持ち主なら……」

ごにょごにょと話し始める。
何か駄々をこねる子供のように見えた。
後ろで聞いていた修、和泉、卓也、レイナが小声で話し始める。

「なに、あれ？」

とりあえず修がレイナに訊いてみる。
彼女が一番事情に詳しそうだった。

「あ～……副長はだな、その……ユウトたちのファンらしくてな。ユウトと勝負ができる今日をとても楽しみにしていたそうだ」

「なぜだ？」

「彼女は近衛騎士団副長だ。つまりはお前らの詳細を知っているわけで、お前らがこの世界でこなしてきたことに対しても知っている」

「オレらがやってきたこと……というより、優斗がやったことか？」

「その通りだ。シュウもユウトと同じくらいイカれたことはやっているが、それ以外も奇行で騒がれてるしな。その点、ユウトは安心

だ。こと戦闘においては報告があるだけでもAランクの魔物のカルマ、シルドラゴンの単独撃破。黒竜の共同撃破にパーティーで起こった暗殺未遂事件の解決、隣国リステルでの大立ち回り。さらに使う魔法はオリジナルの神話魔法に精霊術」

ざっ、と略歴を並べてみる。

「戦闘以外でもマリカの父親でもある。いくら副長でも年頃ではあるわけだし、ユウトの詳細を知っていれば興味を持つのは当然だろう」

「それもそうか」

しみじみと卓也が頷く。

◇　◇

それからしばらくして、アリーとフィオナがクッキーを持ってきた。優斗はまだ副長に捕まっており、再戦要求はされていないが魔法について話すことになっているようだった。

離れた場所でいろいろと手振り身振りを加えていた。

「皆様、お疲れ様です」

アリーが飲み物と一緒にクッキーを配り始める。
フィオナに連れてこられていたマリカもクッキーの袋を手にとっては渡していた。

「おっ、マリカも一緒に来たんだ」

修がフィオナに抱かれているマリカの頭をポンポンと触る。

「一緒にお出かけしたかったので。あと、優斗さんはどこにいます？」

「あいつなら、さっきから副長に捕まってんよ」

修が指さす。
二人で仲良く話している姿がフィオナの目にも映る。

「……そうですか」

勇者である修が一瞬、ゾクリとした。
フィオナは無表情のまま優斗のところへと向かう。

「あれ、やばくね？」

少しばかり焦った表情で修がレイナたちに言う。
けれどレイナは問題ない、とばかりに手を振った。

「大丈夫だ。さっき“ユウトたち”と言ったろう。それにはフィオナも加わっている」

「そうなん？」

「公爵令嬢でありながらリライトでも稀な精霊術の使い手だからな。凄い相手には目がないんだ、副長は」

「そういうことか」

とそこにいるメンバーは納得する。

が、その時の優斗たちはというと――

◇　◇

「……優斗さん」

優斗が副長と話しているところにフィオナが来る。

その第一声を聞いただけで怒ってることが把握できる。

「フィ、フィオナ？」

「なんですか？」

「どうして、その……怒ってるの？」

「怒っていませんが」

いや、嘘。

毎度毎度、そういって怒ってなかった例しがない。

その一方で副長はやって来たフィオナとマリカにさらに目を輝かせる。

「マリカ様とフィオナ様ですね」

「そうですが」

「精霊術の使い手として名高いフィオナ様と龍神様。この目で見ることができて感激です」

尊敬のまなざしを一身に受けて、さすがのフィオナも毒気を抜かれる。

「あ、ありがとうございます」

「先ほどからユウト様にも様々な話を伺っていましたが、やはり素晴らしいです。ですから――」

それからずっとべた褒めが続く。

その間にフィオナからクッキーや飲み物を受け取る。

そして2分ほどして、ようやく言葉が途切れた。
が、質問が代わりに飛んでくる。

「お二人は龍神様のために夫婦役をやっていると聞いておりますが、間違いありませんか？」

「ええ、その通りです」

優斗は頷きながらクッキーをかじり、飲み物を口にする。

「では龍神様に無事、迎えが来たあとでいいので私と結婚などはいかがでしょうか？」

「――ッ！」

唐突な言葉に優斗は口にした飲み物を吹き出した。
同時に隣にいるフィオナの威圧が復活する。

「な、なぜにそんな話を？」

脂汗を垂らしながら優斗は慎重に話を伺う。

「父がいい歳なのだから異世界の客人の一人でも婿様にしたらどうだ、と言っていまして。それならば貴方様にでも婿になっていただこうかと」

フィオナの威圧感が増す。
隣にいる優斗の脇腹も抓り始めた。
痛いが、我慢する。

「さ、先ほどは僕たちのファンだと仰っていませんでしたか？」

「ええ。ファンだからこそ婿様になっていただこうと思いまして」

ひょうひょうと告げる副長。

「す、すみませんがご遠慮させていただきます。貴女と家庭を作るイメージができませんので」

威圧と脇腹の痛みで顔が強ばるが、どうにか否定の言葉をひねり出す。

それを告げると、特に傷ついた様子なく副長は頷いた。

「それならば仕方ありません。どなたか良い殿方はいらっしゃらないでしょうか？」

「僕がおすすめできるのはすみませんが、いませんね」

「分かりました」

副長が納得したところで、彼女が部下に呼ばれる。

「すみませんがこれで失礼いたします。また近いうちにお二人からもお話を伺いたいと思いますので、その時は是非」

頭を下げて副長が二人の前から去って行く。

残されたのは優斗とフィオナ。

彼女に抱かれているマリカは先ほどから黙ったままだ。

「あの……」

「優斗さん」

いつぞやのリステルで起こった事件で、優斗が使ったような声音をフィオナが発した。
脇腹を抓る力が強まる。

「どういうことでしょうか？」

「な、なんのことでしょうか？」

「先ほど、求婚されていたように見受けられますが」

「い、異世界の人間なら誰でもいいように話していたと思います」

なぜか丁寧な言葉使いになる優斗。

「でも最初は優斗さんに訊いたんですよね？」

「ファ、ファンだと仰ってましたから」

「優斗さんはあのような方がいいのですか？」

「い、いえ。僕の好みとはかけ離れております」

「けれど美人な方でしたよ」

「ぼ、僕にはもっと美人で可愛い方が妻にいますので」

それを言った瞬間、フィオナの表情が緩んで抓る力も弱くなる。

が、すぐに表情を戻して抓り直す。

「そ、そんなことを言っても無駄です」

それでも嬉しそうな気配は消えない。

これ幸いと優斗は状況の好転を謀る。

「マリカもパパとずっと一緒にいるのはママがいいよね？」

「あいっ！」

黙り込んでいたマリカに話を振ると、マリカは元気よく返事した。

「ほら。マリカも僕の隣はフィオナがいいってさ」

優斗は言いながらフィオナからマリカを受け取る。

ついでに脇腹を抓っている指を外す。

「ママは怖いね～。パパはママがいいって言ってるのに、信じてくれないんだよ」

「あぅ～」

優斗とマリカが二人してフィオナを責めるように言う。

いつのまにか形勢逆転していた。

「わ、私が悪いんですか！？」

「僕だっていきなり言われたところで、はいそうですと頷くわけないじゃないか。それに恋愛感情じゃなくて損得で結婚申し込まれて

もね」

マリカをあやしながらフィオナを責め立てる。

「ママはパパがそういう人だと思ってたんだって。ショックだね、マリカ」

「あい」

「ちょ、ちょっと待ってください！　そうじゃないんです！」

逆に必死に弁明をするフィオナ。

そんな3人の様子を見ていたレイナたちはと言えば、

「あれ、なに？」

「痴話喧嘩じゃないの？」

修の呆れた言葉に、さらに呆れた様子で言葉を返す卓也。

「リア充死ねばいいのに」

「イズミ。なんだ、その“りあじゅう”というのは？」

「気にするな。ただの妬みの言葉と思ってくれ」

変なところで変なすれ違い

寒空となった12月。
フィオナはアリー、ココ、リル、そして卓也を集めて相談をしていた。

「寒さも強くなってきたのでマフラーと手袋を編んであげたいんです」

「へぇ、いいじゃない。ユウトもマリちゃんも喜ぶわよ」

「それでですね。内緒に編んで驚かせたいんですけど、どうしたらいいですか？」

「……えっと、驚かせたい気持ちはよく分かりますが、どういうことなのですか？」

アリーが逆に問う。

「優斗さんは聡いので、絶対にバレちゃうと思うんです。それでバレないための策を皆さんに提案してもらえたら、と思いまして」

フィオナの言葉に全員が「確かに」と納得する。
彼女が優斗に隠し事を通しきれるとは思えない。

「策って言っても、ユウトさんが近づいてきたら逃げるとか」

「わたくしもそれぐらいしか思い浮かびませんわ」

「あたしも」

「じゃあ、そうしたほうがいいですね」

女子勢が和気藹々と話が進行していく。
が、そこで卓也がストップをかけた。

「オレとしてはお勧めしないな。その案は」

「どうしてです？」

「相手が優斗だからだよ」

卓也の言うことにフィオナ達は聞き耳を立てる。

「フィオナが驚かせたいっていう気持ちも分かるけど、オレは素直に編み物を作ってあげてプレゼントしたほうがいいと思う。優斗の性格を考えたらな。それでも目一杯喜んでくれる奴だよ」

「ユウトさんの性格を考えたところで、今言ったことに何か問題があるようには思えないのですけれど」

こういうイベントに目がないアリーが反対する。

フィオナもココもリルも同様だ。

「甘い。あいつは基本的に全力でネガティブだ。そんなことやられたら、どう勘違いするか分からないって。後に問題になりそうなことは断つべきだ」

「大丈夫じゃないの？　ユウトとフィオナに問題起こるわけないでしょ」

「そうです」

「私もそこまで問題があるとは思えないのですが……」

平然としている女子勢。

卓也は一つため息をつくと、

「一応は止めたからな。問題が起こっても知らないぞ、オレは」

そう告げた。

◇

◇

翌日、優斗が朝起きるとリビングにフィオナがいなかった。
すでに朝食を取り終わってゆっくりしているマルスとエリスが「おはよう」と言ってきたので、優斗も言葉を返す。
フィオナがいないなんて珍しいこともあるんだな、とテーブルについて食事を始める優斗。

「義母さん、フィオナはどうしたんですか？」

「あの子ならもう出て行ったわよ」

「こんな朝早くからですか？」

「あら？　ユウトも知らなかったの？」

「ええ、何も聞いてませんけど……」

エリスと優斗、二人してハテナマークを浮かべる。

「何かしら急ぎの用事でもあったのではないかな。特に気にすることもないだろう」

「そうですね」

「そうね」

マルスに優斗もエリスも頷く。

けれども学校に着いてからというもの。

「フィオナ。今朝って何か用事が――」

「すみません！　用事がありますので！」

優斗が話しかけようとすると、

「フィオナ。あのさ――」

「アリーさんに呼ばれてますので！」

物の見事に、

「フィオ――」

「すみません！」

避けられた。

あまりにも不自然な状況に優斗も困惑する。

「……何かやったっけな？」

自分の過去を思い返すが、それほど大きな失敗はない。
と、和泉が困惑している優斗のところへやってくる。

「どうしたんだ？」

「なんか、フィオナに避けられるようになった」

「何かしたのか？」

「いや、記憶があるうちはやってない」

「そうか……」

そう言われると和泉も手助けのしようがないが、取っ掛かりを見つけるぐらいは相談に乗ろうと思う。

「一緒にいては困る、もしくは一緒にいるところを見られては困ることがあるのか？」

「そんな話を聞いた覚えはないんだけど……」

と、優斗は言ったところで、可能性を一つ思い付く。

「もしかして……」

「何か思い付いたのか？」

和泉が訊く。
基本的には優斗の予想は当たるのだ。

「とりあえずは。ただ、確証が持てないから、もうしばらく待ってみるよ。気のせいかもしれないし」

「……？　まあ、よく分からないが解決できそうならいい」

◇　◇

「それで、首尾はどう？」

「大丈夫です。優斗さんには悟られていません」

「それなら一安心ですわね」

「よかったです」

女子勢が集まって話し合う。

「手編みのマフラーと手袋はどこまで出来ているのですか？」

「まーちゃんの分は完成しました。あとは優斗さんのマフラーですね」

「早く渡して驚かせてください」

「時間が経つほどフォローも苦しくなるしね」

「はい。頑張ります」

こそこそと話し合う。

それを視界に入れてる卓也は、ため息をつく。

――楽しみにしてるのはいいんだけど、優斗のことは考えてるのか？

卓也の視界の端では、優斗が真面目な表情をしながら女性陣を見ていた。

さすがにフィオナの避けられ続けてからというもの、うかつの近付くことはなくなった。

――優斗のやつ、碌でもない方向に考えが及ばないといいんだけど。

優斗のネガティブ思想はチームで一番酷い。

何か問題が起こったとき、プラスに考えることはない。

それが今回も同様だった場合、問題になるのは目に見えてる。

◇　◇

フィオナが優斗を避けてから、数えること5日。
今でもフィオナの態度は変わることがなかった。
家でも学院でも優斗との接触を極力断つようにしていた。
和泉は少し前に相談に乗った手前、心配になって優斗と二人での帰り道で問いただしてみる。

「おい、フィオナは一体どうしたんだ？」

「……あくまで僕の予想でいい？」

「それでいい」

和泉が頷く。

「たぶんだけど、誰かに惚れてるんじゃないかな？」

「……はぁっ！？」

すっ飛んだ発想にさすがの和泉も驚く。

「だから、誰かに惚れた。そう考えると僕と一緒のところを見られて勘違いされるのが嫌なのも理解できるよ」

「いや、ちょっと待て。いくらなんでも発想が突飛すぎるだろう」
優斗にベタ惚れだったフィオナが優斗以外に好きな人ができるなどありえない。
「そうでもないよ。それだったら数日間、僕と接触を極力避けてきたことにも納得できる」
そう答える優斗に和泉は何でそうなる、と問いかけたくなる。
が、優斗のネガティブ発想は今に始まったことではないと考え直す。
――中学のときからそうだ、こいつは。
常に最悪のところに考えを置いて、そこから対処する方法を考え出す。
良い方向に考えることがほとんどない。
それが今は、明らかに裏目に出てる。
「あとは――」
言葉を続けようとした優斗が一瞬、驚いて、困ったような顔をして、すぐに表情を戻した。
その変化を見た和泉は優斗の視線の先を辿る。
商店で楽しそうに買い物をしている修とフィオナの姿がそこにはあった。
「……修、なのかな。フィオナの好きな人って」
「そんなわけがないだろう」

「分からないよ。主人公がハーレムっていう話はたくさんあるし、アリーもフィオナも綺麗どころだから、修のハーレム一員になるっていうことなのかもしれない」

「馬鹿か、そんなわけがないだろう」

和泉がもう一度、否定する。

けれど優斗は踵を返して違うルートで帰り始める。

「まあ、修じゃないのかもしれないけど、それでも僕を避けてるのは確か。今のところ、僕がフィオナに一番近しいのは間違いなかったとは思う。だからこそ相手に勘違いされないために、ね」

足早に優斗は去って行く。

表面上は普通だが、その場にいたくなかったのは明らかだ。

「……とりあえずフィオナのこと、応援しないとね。そのためには僕の気持ちを封印して、それでフィオナとはあくまで『家族』として接するようにしないと」

「待て、優斗！」

和泉が引き留めようとするが、優斗は止まらない。

「ごめん、和泉。ちょっと心の整理をしたいからさ、今日はこのまま一人で帰らせてもらっていい？」

「……そんなこと、させると思うか？」

とてつもない勘違いをさせたまま、帰らせるわけにもいかない。

「フィオナがどういう理由でお前を避けてるかは知らないが、少なくともお前が考えている理由じゃないはずだ」

「それ、論破になってないよ。どういう理由なのかが分からないから、僕が言った理由であるのかもしれない」

「しかし……」

「例え、僕の言っていることが間違っているとしても、唯一分かってるのはフィオナが僕を避けてること。それは覆すことのできない事実で、常識的に考えてポジティブに捕らえることはできない出来事だ」

急に避けられたら、誰だってそう思う。

「だったら……分かるだろ？」

「……お前の言いたいことは分かるが」

和泉としても、そう持ち出されたら納得せざるを得ない。

「とりあえずさ、気持ちを落ち着けたいんだ。だからごめん」

そう言って優斗は走る。

元々、身体能力でも絶対の差がある二人。

すぐに和泉の視界から優斗の姿がなくなった。

優斗は和泉を引き離すと、歩きながらゆっくりと考える。

「フィオナが僕の避けてるなら、僕からもある程度は距離を置かないといけないよね。でないとフィオナがやってることが無意味になる」

今後、どうやってフィオナと接していこうか。

「最初のうちは呼び名を『フィオナさん』に戻して、口調も最初に会った頃にしよう。これをアピールしていけば、フィオナもあそこまで露骨に避ける必要はなくなるはずだし」

うん、と優斗は頷く。

「それで落ち着いたらフィオナを妹的な存在として見ていこう。初恋の相手だし、そういう視点で見ることはなかなか出来ないかもしれないけど、僕なら時間が経てば出来る」

そういう人間だ、自分は。

「マリカもできるかぎり、僕が見てあげないと。マリカのせいでフィオナに迷惑を掛けたくないし、最悪の場合は僕一人で面倒を見ることも視野に入れないと」

責任感が強いフィオナのことだから育てる気はあるだろうが、フィオナの懸想の相手からしたら迷惑かもしれない。

「とりあえずはこれぐらい、かな」

そう言って優斗は胸元を触る。

「……大丈夫。こういうことには慣れてるし」

今更、それが一つ二つ増えたところで問題はない。

優斗は考えをまとめると、寄るところに寄ってからトラスティ家へと帰る。
まだフィオナは帰っておらず、エリスとマリカと3人での食事を終えてからというもの、ソファーでマリカと一緒にくつろいでいた。
そこへエリスがお茶を持ってきた。
向かいのソファーへと座る。

「最近一緒に帰ってこないしフィオナの挙動は不審だし、どうしたの？」

さすがにフィオナの様子がおかしい。
優斗ならば何か知っていると思い、尋ねる。

「忙しそうですから、仕方ないですよ」

「何かやってるのかしら？」

「僕は何も聞いてませんし」

お茶を啜りながら優斗は答える。
エリスは冗談で、
「もしかして、誰か男の子と会ってたりするのかもね？」
なんて言ったものだが、優斗の返答はエリスの想像を超えるものだった。
「僕もそうじゃないかと思ってます」
「……えっ！？」
驚きの声が出た。
優斗の冗談かとも思ったが、冗談を言っている雰囲気ではなかった。
「……そう……なの？」
「分かりません。ただ、彼女の行動を鑑みるにそうなのかな、と」
落ち着いている優斗に比べ、エリスは焦る。
「で、でも、何か用事があって会ってるのよね、きっと」
「僕はてっきり好きな人が出来たものだと思ってましたよ」
「――っ！」
続いた優斗の爆弾発言。
ただ、これについてはさすがに信頼性がない。

「い、いやね。それはないわよ」

「今週に入ってからずっと避けられてるので、好きな人に男の子と仲良い姿を見られたくないものだとばかり思ってたんですが」

平然とそう答える優斗。

ここまで堂々と言われると、少しだけエリスも不安になる。

「……え……いや……そんなわけ……」

「大丈夫です。来週までには彼女に迷惑を掛けない距離感を会得してみせますから」

優斗は心配しないでいい、と語るような様子を見せるが、エリスとしては正直そんなものどうでもよかった。

――どうなってるの!?

頭がこんがらがる。

エリスとしては、優斗とフィオナは完全なる相思相愛で本物の婚約者になるのも時間の問題だったはずだ。

これは普段の様子から見ても間違いないはず。

――なんだけど。

どうしたら、こんな状況になるのだろうか。

――ユウトは平然とした表情してるし。

とは言っても優斗のことだから取り繕っている表情なのかもしれない。
どっちなのか、その判断はエリスにもできない。

――ああ、もう面倒ね。

色々と拗れているので、いっそのことエリスが色々とバラそうかとも考えたが、当人同士の気持ちを他人が言うなんて駄目だ。
かといって優斗を説得するだけの情報がエリスにないのも事実。
渦中のフィオナは最近、帰りが遅い。

――あの子ったらホント、何をやってるのかしら。

◇　◇

今日はココの家に集まる前に、修に手伝ってもらって優斗の好きそうな柄を教えて貰った。
その柄をしっかりと覚えてからココの家で編み物を始める。
明日には編み終わりたいので今日も遅くまで編んでおり、帰りが遅れてしまったのはしょうがないところだろう。

――でも、3分の1くらいまでは編めました。

予定していたところまで編めてフィオナ的には大満足だ。

「ただいま戻りました」

バルト等に挨拶をしてから家の中へ入る。
リビングにはまだ、優斗とマリカ、エリスがくつろいでいた。

「お帰りなさい」

「お帰りなさい」

「あい」

エリス、優斗、マリカの順に『お帰り』と言われるが、何かしらの違和感がフィオナの中に生まれた。
が、優斗がリビングにいるので、その疑問をすぐに打ち消す。

「わ、私はご飯も食べてきましたし疲れているので、部屋でゆっくりとしていますね。あとでまーちゃんはお母様が連れてきてください！」

一息で伝えきってフィオナは自室へと向かっていく。
おそらくは何もバレていないはず。

――今日と明日を乗り切ればいいんです。

フィオナはただ、それだけを考えて自室へと入った。

「あの子ったら何を考えているのかしら？」

あまりにも不審な態度にエリスに眉間に皺が寄った。

「いいじゃないですか。家族に知られたくないことだってあるんですよ」

優斗は笑う。

「今日は僕がマリカを引き受けますね。疲れてるのにマリカの面倒までさせるのは大変ですから」

言って優斗はマリカを抱き上げる。

それと同時にあることを伝えていないことに気付く。

「あっ、そうだ。明日と明後日、二日間に跨がってギルドの依頼を受けてるので。もし彼女が明日帰らないようなら、申し訳ないですけど義母さん、マリカのことお願いします」

「それは別にいいんだけど……」

どうしてこのタイミングで、とはエリスが思う。

けれど、すぐに一つの予想を思い付いた。

――偶然、ってわけじゃないわよね。

フィオナと距離を置くために依頼を受けたとみたほうがいい。

「部屋への戻り際に僕がマリカと寝ることを彼女に伝えますね」
そう言って優斗は軽く頭を下げる。
「おやすみなさい」
優斗は少し困ったようなエリスの姿を背にして、自室までの道のりの途中にあるドアを二回、ノックする。
そして母親と間違えられないように声を掛ける。
「フィオナさん。このままでいいので聞いてください」
彼女の部屋から聞こえたドアに駆け寄る音がピタリと止まった。
声を掛けておいてよかったと優斗は思う。
「今日は僕がマリカと一緒に寝ますので、フィオナさんはゆっくりと休んでください」
そして先ほどに決めた通りの口調でフィオナに話しかける。
「それでは失礼します」
◇　◇

フィオナは今し方に彼から伝えられた言葉を把握するのに時間が掛かった。

「……え？」

最初に聞いたときは間違いだと思った。

「……えっ……？」

彼が紡ぐ言葉の中で。

“フィオナさん”と。

そう聞こえた。

「……あれ……？」

耳が遠くなったのだろうか。

それともドア越しだから聞き間違えたのだろうか。

「気のせい……ですよね？」

しかも心なし口調が丁寧な気がする。

自分にはもう、半年以上は向けられていない義務的な口調。

それが使われていたような……。
フィオナは一度、思い切り頭を振る。
「……聞き間違いです」
すでに彼の姿を扉の向こうにはない。
少しぼぅっ、としていたから。
だから聞き間違えたのだろう。
けれど、それはただの望みで。
翌朝。
不安が拭えずにあまり眠れなかったフィオナが部屋から出ると、出かける準備万端の優斗がそこにいた。
「おはようございます、フィオナさん」
笑顔で挨拶する優斗。
「……えっ……」
不安と心配が現実になって、体が硬直するフィオナ。

「僕はもう出ますしマリカの面倒は義母さんに頼んでいますから、疲れているのならもう少しゆっくりしてもいいと思いますよ」

時間が詰まっているのか、急ぎながら玄関へと向かう優斗。
フィオナの様子には気付いていない。

「それでは、行ってきますね」

パタパタと出て行く優斗。
フィオナはその姿に、否定も反論もできずにただ……後ろ姿を見送っていた。

フィオナはそのまま、慌てて家を出た。
そしてココの家へと向かう。
すでに卓也たちが集まっていて、フィオナの様子に卓也以外の誰もが怪訝な表情を浮かべた。

「どうしたのですか？」

代表してアリーが訊く。

「ゆ、優斗さんが……」

フィオナの顔が少し青い。

両手を震えているのは寒さか、それとも恐怖か。

それでもフィオナの口からは昨夜にあった出来事を紡いでいく。

卓也は一通りの話を聞くと、

「まあ、予想通りと言えば予想通りだな」

納得した。

「どうせフィオナが避け始めてから、いろいろとネガティブに考えたんだろ」

優斗のことだから。

そして出した結論の一つとして、

「一旦、関係を最初の状態に戻すことがフィオナのためだと思ったんだろうな」

「そう……なの？」

問うリルに卓也は頷く。

「このままだと距離まで置かれるんじゃないか？」

「べ、別に編み物を渡せば解決する問題よね」

避けていることが問題なら、それを解決すればいいだけだ。
けれど、

「優斗がそれを受け取る隙を見せるとは思えない」

「えっ？　で、でもクラスメートで同じ家に住んでるんですよ」

ココが卓也の予想を否定する。

「あいつ、距離を置こうとしたらとことんやるぞ。そういうところは抜け目なく、な」

そんな優斗に対してフィオナがどうこう出来るとは思えない。
卓也はため息をついた。

「だから言っただろ。問題が起こるからやめろって」

「……はい」

今となっては後の祭りだが、フィオナが素直に頷く。
けれど続く卓也の言葉はフィオナの心をさらに抉る。

「下手したらフィオナ以外の女の子と仲良くなろうとか思いかねないな」

「ど、どうしてですか！？」

「だってフィオナに避けられたってことは、フィオナに誰か好きな奴が出来たとか優斗のことが嫌いになったとか、ネガティブな優斗

ならそう考えるだろ」

事実は明らかに違うし、優斗の考えがあまりにもアホらしいのは優斗以外が納得するところだ。
けれども問題は“優斗がどう思っている”のか。

「後者ならいいけど前者ならフィオナのために別の女の子と仲良くしようとしても不思議じゃない」

「……どうやったらそんな考えになるのよ」

呆れた声をリルが出す。

「簡単だって。フィオナの優斗を避けた理由が“男”なら、フィオナの為にもフィオナが好きになった相手のためにも“自分はフィオナよりも仲良い子がいますよ”とアピールする可能性がある」

それぐらいはやってのける男だ。
卓也の言葉にフィオナの顔が真っ青になる。

「わ、わ、私、帰ります！！」

そしてパニックになったのか、フィオナは早々に家へと戻っていった。

そんなフィオナを見送りながら、

「あいつ、自分が幸せにするって甲斐性を持ってないの！？」

「そうです！」

リルとココが憤慨していた。

卓也は二人に呆れる。

「お前らこそ何言ってるんだ。あいつは『フィオナが幸せ』だったらいいんだよ、それで」

自分である必要性がない。

「好きな女の子は自分が幸せにする、なんて殊勝で自信ある考えを持てるほど優斗はできた人間じゃないぞ」

親友に対して辛辣ではあるが、この評価は正しいと思っている。

優斗は自身の人間性に対してとことん、自信がない。

むしろ毛嫌いしている節もある。

そんな優斗だ。

「あいつが自分の幸せとフィオナの幸せ、秤に掛けてどっちに傾くか。答えは分かりきってる」

並行にはならない。

「フィオナだ」

確実に彼女に傾く。

「だからフィオナのためになら何だってやるし、フィオナのためならいくらでも自分の気持ちを殺す」

大切だから、と。

ただそれだけの理由でやる。

「そういう……馬鹿な奴なんだよ、あいつは」

大切だから手放さない、ではなく。

大切だからこそ手放す。

自分が幸せにしたいと願っても。

二人の分岐点

義息子が出て行って、娘が出て行って、マリカと家に残っているエリスはすでに1時間ほど考え込んでいた。

「どうしてこうなっちゃったのかしら、ね」

フィオナが原因だというのはわかりきっている。
けれど普通なら、いぶかしんで終わりのはずだ。
優斗のように考えることはあまりないように思える。

「けれど、そう思っちゃうのがユウトなのよね」

エリスはため息をつく。

――分岐点なのかしら。

あの二人が上手くいくのか、それとも駄目になるのか。

「こんなことで、ねぇ」

切っ掛けはフィオナが避け始めたこと。
その理由がくだらないことなのか、それとも本当に大きなことなのか。
エリスには判断できないけれども。
ただ、一つ分かっていることは。

――フィオナの態度は最悪ってことかしら。

くだらないことであるのならば対応はもっと上手くやれと言いたいし、他に好きな人が出来たのならば直接言ってやれ、と思う。
フィオナは人付き合いが下手だから仕方ないとも思うが、それでも最低限のラインというものはある。

――特に相手がユウトなんだから。

さらに大きいため息が出てくる。
と、その時だった。
バタバタと騒がしい足音を鳴らしてフィオナが帰ってきた。
急いで帰ってきただろうに、顔は蒼白だった。

「お母様！　優斗さんは!?　優斗さんはどこへ行きました!?」

「何よ突然」

フィオナのおかしな様子に眉根をひそめる。

「優斗さんは……!?」

「いないわよ。ギルドの依頼受けて明日まで帰ってこないわ」

「な、なんでですか!?」

フィオナが訊いてくるが、エリスとしてはフィオナがそのことを問う理由がわからない。

「フィオナのせいじゃないの」

他の誰でもなく、フィオナのせい。

「あなたが避けるからユウトだって避けたのよ」

「……ち、違うんです……」

フィオナはうろたえ、否定するがエリスは言葉をやめない。

「だってそうじゃない。フィオナの態度が明らかにおかしかったのは私もマルスも気付いてたわ。もちろんユウトなんて避けられた張本人なんだから当然の話よね」

だからこそ優斗は、ああいう結論に出たのだ。

「あなた、ユウト以外に好きな人でも出来たの？」

「そんなのありえません！！」

フィオナが全力で否定する。

「じゃあ、どうして避けたのよ？」

「……優斗さんを驚かせたくて。内緒でマフラーと手袋を編んでたんです。けれど優斗さんはすぐに気付くだろうから、頑張って顔を合わせないようにして、話さないようにしてたんです」

「……驚かせたいって……」

エリスは開いた口が塞がらない。

言いたいことは分かる。
やりたいことも分かる。
けれど、告げるべきことは一言。

「馬鹿ね」

ただ、これだけだ。

「……やっぱり……そうですよね」

「そうよ。ユウトの性格を分かってないわ」

他の誰にやってもいいが、優斗にだけは駄目だ。

「確かにあの子は聡いわ。それに強い。身体も心もね。けれど大切な人に対しては恐がり、臆病、小心者」

とにかく変化を恐れる。

「知ってるわよね。あの子の“大切”にフィオナも入っていることを」

エリスの問いかけにフィオナは恐る恐る頷く。

「特に貴女なんて“大切”の中でも特別。宝石みたいなものよ」

一番大事にされている。

「でも、あの子の“大切の仕方”を知ってる？」

エリスが告げた瞬間にフィオナの表情がハッ、とした。

「相手を縛らないし、相手のことを考えて自分のことは考えない」

大切。故に縛るのではなく。
大切。故に縛らない。

「だから今回、貴女が避けたからユウトも避けたし、少しでも貴女の迷惑にならないような動きをしようとした」

問い詰めることもせず。
怒ることもしない。
ただ、フィオナが望んでいるであろう動きを考え、実行した。

「人としては歪で欠けてるとは思うけどね。けれどそれが、あの子の大切の仕方」

どこまでも他人優先で、自分の一切顧みない。
可笑しな愛情表現。

「ビックリさせたかったのも分かるわ。フィオナの気持ちだって私にはよく分かる」

好きな人相手ならば当然だ。

「けれどね、あの子はそれじゃ駄目なのよ」

特にフィオナだからこそ。
優斗の心に一番入り込んでいるフィオナにやられてしまえば、容易に傷になってしまう。

「それに気付いてる？　そんな子が5日も頑張って待ってたのよ。待って、待って、待って……それでも避けるから結論を出した」

時間が経てば経つほど不安も結論を出した時の傷も大きくなるのに。

「今までのユウトだったら、2日が限界だったでしょうに」

心に受ける傷を少なくするために。

「私はね、それほど頑張ったあの子を責めることなんてできない」

できるわけがない。

「フィオナ。これだけは言っておくわよ」

だから優斗の義母として。

伝えなければならない。

「貴女が好きになった男の子は歪んでるわ」

今一度、真実をフィオナに。

「今なら分かるわ。あの子の過去を全部聞いた今なら」

優斗が自身に抱いている不安。
それが理解できる。

「自分の感情を殺して相手のために動く。ある程度なら、それは分かる。けれどあそこまで自己を放棄して、となると……異常よ」

おそらくは反動なのだろうと思う。
“大切にされず縛られてきた”からこそ“大切にしたからには縛らない”。
好きな人に対してある程度、束縛したいという欲求が生まれるのは当然の理であるだろうが、優斗にはそれが全くない。
もしかしたらできないのかもしれない。

「まあ、私はだからこそユウトが愛しい。大切な義息子がそうであるなら、正しい方向へ導いてあげたいと思ってる」

時間が掛かってもいい。
それでも義母として。
教えてあげたいと思っている。

「けれどフィオナはどうするの？」

問いかけよう。
エリスは“義母”として答えを出したから。
フィオナはどうするのか、を。

「癒やしてあげられる？　守ってあげられる？　あの子がフィオナにだけは知られてほしくなかった過去を、歪んでいる心を」

ただ一人。
唯一過去を伝えられなかったほど大切にされているフィオナは。

「その全てを癒やして守れるの？」

一体どうするのだろうか。

「これからだって、こういうことはあるかもしれない。端から見れば些細なことでもユウトにとっては傷つくことが」

それができるのは彼女。

「他の誰でもない、フィオナのせいで」

「……」

あまりにも真剣なエリスの問いかけ。
フィオナが息を飲んだ。

「今回だってそうよ。貴女がユウトを避けたから、ユウトはこうなった」

避けられたからネガティブに考えて。
馬鹿な結論を出して。
そして傷ついた。

「……フィオナ。ここが分岐点よ」

きっと優斗とフィオナの。
二人がどうなるかの分かれ道。

「本当にあの夜の願いを貫き通せるの？」

優斗の過去を知った日。

フィオナは言った。

『辛い過去があるなら癒やす』

『弱虫な貴方がいるなら守る』

『優斗を支えるのは自分の特権』

自分は仮初めでも偽物でも今は優斗の妻なのだから。

そうフィオナは言ったはずだ。

「けれどね。もし、願ったことが出来ないなら――」

今からでも遅くはない。

「――ただの家族になりなさい」

◇　◇

真剣に。
大切な義息子を守るために問いかけられた言葉に。
フィオナは。

「……嫌です」

ただ、胸の内を伝えることしか出来ない。

「……嫌です」

だから否定する。

「嫌なんですっ！」

母親の言葉に真っ向から否定する。

「ただの家族になんて、なりたくありません！」

この気持ちを捨てろというのか？
冗談じゃない。

「私が欲しいのは“親愛”じゃないっ！」

求めているのはそんなものじゃない。
フィオナが優斗に求めているのはたった一つ。

「“恋愛”です！」

これだけだ。

「だって……」

この世界の誰よりも。

「だって……」

この世の中の誰よりも。

「フィオナ＝アイン＝トラスティは宮川優斗を愛しているから」

誰よりも彼のことを愛している。

親愛なる彼を愛しているのではない。

恋愛なる彼を愛している。

「だからこそ――」

そう続けて浮かぶ言葉に、自分は本当に強欲になったのだと感じる。

前は『私が彼を愛しているだけなのですから』と言っていたくせに。

今はもう、そんなこと思えない。

――愛されたい。

他の誰よりも優斗に愛されたい。

「だからこそ私は――」

偽物じゃなくて。

仮初めじゃなくて。

「優斗さんと本当の夫婦になりたい」

彼を支えてあげたいから。

「本当の婚約者になりたい」

彼を癒やしてあげたいから。

「本当の恋人になりたい」

彼を守ってあげたいから。

「もう、願いを違えることはしません」

己に誓う。

「私は一生を優斗さんと添い遂げます」

今回のような真似は二度としない。

「これが私の――答えです」

告白

二日掛かりの依頼も終わり、達成料金をギルドで受け取る。
そしてそのまま優斗が修とレイナと和泉と共に帰路についている途中だった。
隣を歩いている修が優斗に話しかけた。

「優斗」

「ん？」

「辛いか？」

何気なしに問われたこと。
それが何に対して問われたのかは、別に聞き返すこともない。
これでも修は優斗の親友だ。
気配で、戦闘中の動きで、いつもの優斗らしさがない。
僅かなことではあるが、それだけで修は優斗の調子が悪く、何かしら問題を抱えていたことを見通していた。
優斗も修が見通していることを理解しているからこそ、『何が』とは問い返さない。

「僕が辛いって言うと思う？」

「思わねぇよ」

もう４年以上も連んでいる。
今更、言う奴だとも思っていない。

「俺はどうせ、くだらない理由だと思ってんだけど」

「まあね」

「そうか」

修はそれだけ言うと、小さく笑った。

「まあ、なんかあったときには慰めてやんよ」

「サンキュ」

「おう」

そして修と和泉は途中の道で別れる。
今度は優斗とレイナの二人になった。
そのまま公園に入る。

「少しずつではあるが、お前達に近付いているという実感がある」

「まあ、確かにね。初めて会ったときとは比べものにならないくらいに上達してるよ」

「とは言うものの、お前らの上限が分からない以上、もっと精進する必要があるのだが」

先が見えないという点では少し、目指しづらい。

「少なくとも僕と修に並び立つには神話魔法や、それに並び立つほ

どの剣技を習得しないといけないからね」

「そこだな。そこをクリアしないかぎりはお前達と並び立てないということだ」

途中の目標としてはまず、そこだ。

「その歳で神話魔法と対等に張り合おうとするのって大変だよ」

「使えるお前が言うのか？」

レイナが切り返すと、優斗は困ったように笑う。

「まあいい。今度、闘技大会があるからな。それまでにもっと実力をつけなければな」

「闘技大会がまたあるの？」

「リライトであるわけじゃない。隣国の一つにリスタルという場所があるだろう？」

「名前ぐらいなら聞いたことあるけど」

「そこで世界中の猛者を集めた闘技大会がある」

「へぇ、そうなんだ」

「だから――」

と話を続けようとしたレイナの視界にあるものが入った。

「いや、続きは今度だな。私はここで別れよう」

「あれ？　レイナさんの家ってもうちょっと先じゃなかったっけ？」

「こういう場を邪魔するほど野暮じゃないつもりだからな」

レイナはスッパリと話を切ると、そのまま走って帰っていく。

「何なんだ？」

優斗としては意味が分からない。

後頭部を軽く掻きながら前を向いたところに。

陰が見えた。

夕日が落ちかけて、それはまさしくシルエットしか見えなかったが、

優斗が間違えるはずもない。

「……優斗さん」

フィオナがいた。

フィオナはエリスに宣言したあと、自室に籠もって一人で編み物を完成させた。
何のために避けてきたのか。
その理由をしっかりと示したかった。
翌日、昼過ぎからフィオナはギルドからの帰り道にある公園で優斗を待っていた。
いつ帰ってくるかは分からない。
けれどここで待っていれば、いずれは優斗と会える。
その気持ちは抱きながらフィオナはベンチに座っていた。
1時間、2時間、3時間、4時間と。
夕暮れから夜に変わろうとする時間帯に。
優斗は現れた。
隣にはレイナがいて、二人で話している様子だ。
ギルドの依頼を受けている最中もずっと一緒にいたのだろうか。

――二人きりで。

ズキリと胸が痛む。
同時に卓也の言葉を思い出す。
レイナと優斗は元々、仲が良い。
これ以上仲良くなってしまったら。
そう考えると怖い。

「……え？」

と、不意にレイナと視線が合った気がした。
気のせいかとも思ったけれど、レイナはすぐに優斗と別れた。
――気を遣わせてしまいましたね。
ベンチから立ち上がる。
左手にある袋がカサリと小さく鳴る。
――ありがとうございます。
今は優斗と二人で話したかったから。
そしてフィオナは頭を右手で掻きながら前を向いた彼に、
「……優斗さん」
声を掛けた。

正直な話、優斗はどうして彼女がここにいるのか理解ができなかった。
けれど久しぶりに呼ばれた名前に嬉しくなって。
そして……首を振る。
――駄目だってば。
しっかりと距離を保たないといけない。
フィオナを縛り付けようなどと思ってはいけない。
「どうしたんですか？　こんなところで」
「――っ！」
フィオナが息を飲む。
優斗は笑みを顔に貼り付ける。
「何か買い物でも？」
「……い、いえ……そうじゃなくて。優斗さんを……迎えに……」
いざ、優斗を前にして話していると声が震えた。
温かさのない笑みに、初めの頃の口調。

今まで自分に向けられていたものが全て無くなっている。

「義母さんですかね、貴女にそう言ったのは」

困ったように優斗が笑う。

「断ってもよかったんですよ」

あくまで優しく優斗は言う。

「フィオナさん、こんな時間に僕と二人で会ってたら勘違いされてしまいますから」

迷惑ですよね、と。

そう告げた。

フィオナは泣きそうになる。

――そんなわけないです。

迷惑なわけがない。

大好きな優斗を迎えに来たのに、思うわけがない。

「……」

「あの、フィオナさん？」

それに何よりも“これ”が嫌だった。

――違いますよ。

前に言った。
初めて彼が自分に敬語以外を使って、そしてその後、敬語に戻ってしまった時に。

「……フィオナです」

告げながら一歩ずつ、優斗に近付く。

「フィオナです」

困惑している優斗は立ち止まっている。
そのまま彼に近付いていって、胸元の服を握りしめた。
零れる涙はそのままに叫ぶ。

「私は“フィオナ”です！」

“さん”なんていらない。

「……そんな風に喋って、そんな風に呼ばないでください」

今の優斗にされるのが、一番堪える。

――それに。

優斗は勘違いされると言っていた。
それが自分の好きな相手に勘違いされるという意味であるなら遅い。

「もう……勘違いされてますから」

他の誰でもなく、目の前にいる男性に。

「でしたら、余計に勘違いさせないようにしてあげてください」

言いながらゆっくりとフィオナの手を胸元から外そうとする優斗。
フィオナは彼の胸元にある指を外される前に、思い切り引き寄せる。
そして、少し背伸びをした。

「……ん……」

「――っ！」

ほんの数秒。
僅かな時間。
口唇を重ねる。

「……」

フィオナが顔を少し離すと、驚きのあまりに呆然としている優斗が見える。

「これで勘違いは……なくなりましたか？」

訊くが、答えは返ってこない。
突然のことに事実が把握できていないのだろう。

フィオナはもう一度、訊く。

「なくなりましたか？」

「……え？　いや、でも……どうして？」

困惑する優斗にフィオナは真っ直ぐ伝える。

「決まっているじゃありませんか」

勘違いしているようだから、それを正しただけだ。

「私が愛している男性はこれまでもこれからも一人だけ」

そうだ。

愛しているのはたった一人。

「優斗さんだけです」

他にいない。

フィオナは胸元にある手を背中に回す。

「私が恋人では嫌ですか？」

顔を優斗の肩口に埋める。

「私が婚約者では嫌ですか？」

もし否定されたらどうしよう、と。

考えてしまうけれど。

それでも訊きたいから。

「仮初めじゃなくて、偽りじゃなくて」

嘘偽りなく、正直に伝えよう。

「私が本当の妻では……嫌ですか？」

この想いを。

「……私は優斗さんと本当の夫婦になりたいです」

けれど、そう問うところで恐怖は消えなくて。

どうしようもなく怖くて。

背に回している手に力が入る。

「……」

一方で、優斗はまだ混乱していた。

フィオナにキスされ、愛していると告白され、問われた。

状況が読めない。

なぜ避けていたのに、突然こんなことをしてきたのか。

フィオナの性格からして、幾人にも恋をしているとは思わない。

ということはまさしく自分を好きだということなのだろうし、言葉

を違わず信じるなら愛してくれているのだろう。
それは自分も同じだし、気持ちに齟齬があるわけでもない。

「……別に嫌じゃ……ない……けれど、だったらどうして避けてたの？」

けれどやっぱり、この点だけが納得できない。
自分は避けられていたからこそ遠ざかったわけだし、自分が遠ざかったのに彼女が近付いてきたのは理解できない。

「……その……えっと……」

フィオナは優斗から少し離れると、左手に持っている袋から編み物を取り出した。

「……それは？」

「マフラーと手袋……です」

ちゃんとした完成品を優斗に見せる。

「あ、編んでたんです。冬が来て、マフラーとか手袋がそろそろ必要になるかと思って」

ただ、優斗に喜んで欲しかった。

「けれど優斗さんを驚かせたくて、バレないように顔を合わせないようにして」

逃げていた。

「そうしたら、優斗さんが私に併せて遠ざかって……」

今回の出来事になった。

「……そんなことだったんだ」

フィオナの事情を理解してしまうと、確かに納得できる。

「信じて……くれますか？」

「うん」

とても彼女らしいと思う。

「ホント、馬鹿みたいな勘違いだったんだね」

「いえ、私がいけないのですから」

「……君だけがいけないわけじゃないよ」

自分があと少し待てれば、こんな騒動にならなかったのだから。

――けれど、きっと。

自分の心を鑑みれば、難しいだろう。

「僕は君のことが大切だから、何かあったらすぐに君を手放そうとする。君の願うこと、君の想うことの障害になりたくないから」

もう少し独占欲があればいいのかもしれないけれど。
今の自分には、まだ持てない。

「それなら私の願いは――」

けれどフィオナは彼の言いたいことが分かっていた。
だから、こう言った。

「もう二度と私を手放さないでください」

フィオナの言葉に優斗が目を丸くする。

「ずっとずっと貴方の側に置いてください」

言いながらフィオナはマフラーを首に掛ける。

「何があっても絶対に離さないでください」

そして巻いたマフラーを整え、

「この先に何があっても、私が優斗さんを愛していくことだけは変わりません」

また、優斗の口唇に軽く自分の口唇を触れさせる。
2度目のキス。
最初よりも暖かい感じがした。

「私が一番辛いのは優斗さんと共に歩めないことですから、それだけは知っておいてください」

そう伝えると、フィオナは少しだけ離れてからくるりと振り返った。

「帰りましょう。まーちゃんが待ってます」

ふわりと浮かぶ、微笑み。
優斗は彼女の見惚れながら、同じように笑みを浮かべる。

「帰ろう、フィオナ」

そして笑みと共にフィオナに届けられた言葉は。
フィオナがずっと望んでいたもので。

「はい」

ただ、一度。
フィオナは嬉しそうに頷いた。

◇

◇

普段の調子に戻った優斗たちにエリスやマルスも安堵し、いつもの日常が戻る。
フィオナはマリカを寝かしつけた後、眠ろうとしたときに今日の出来事を思い返す。
それと同時に気付いた。

――わ、わ、私からしてしまいましたっ！

顔が真っ赤になる。
足をバタバタしたくなった。

――しかも2回も！

最初は離れてしまった優斗を取り戻すためだったのに。
気持ちが溢れてしまって、キスを2回もしてしまった。

――は、はしたないと思われなかったでしょうか。

女性から2回連続で、なんて。
けれど嬉しすぎて顔がとろける。

――でもこれで、私と優斗さんは。

と、考えたところで、ふと引っかかる。

――あれ？　でも優斗さんから言われたのは……。

大切だと言われただけで。
『夫婦じゃ嫌ですか』と問いかけたときは、うやむやに頷かれただけ。
――こ、答えを何も聞いてませんでした。
一気にテンションが落ちる。
――どうしましょう？　今更訊きに行くのも……。
その時だった。
コンコン、と控えめにドアがノックされた。
――どなたでしょう？
マリカはちょっとやそっとじゃ起きやしないが、それでも極力静かにドアに向かう。
そしてゆっくりとドアを開けると、そこにいたのは、
「優斗さん？」
「寝てた？」
「いえ、起きていましたが……どうされました？」
パタン、とドアをゆっくりと閉める。
「えっと……その……」
珍しく優斗にしては歯切れが悪い。

「……？」

フィオナには優斗のやろうとしていることが予想付かない。
先ほど疑問に思ったことを訊ける感じでもない。
それでも彼と一緒にいられるのは嬉しいので、別に気まずいわけでもない。

「……あの……そのね、伝えてないことがあって……」

「はい」

けれど優斗はそう言うと決意したのか言葉と共に一歩、フィオナに近付いた。
ゆっくり両腕が開いたと思うと、フィオナの身体が優斗の腕に抱き寄せられる。

「ふぇっ！？」

驚くフィオナに優斗はあの時に伝えていなかったことを紡ぐ。

「好きだよ」

心を込めて。
彼女に伝わるように。

「フィオナを愛してる」

そこまで言ったところで限界だった。
優斗は顔から火が出そうなほどに真っ赤になる。

「お、おやすみ！」

パッと両腕から彼女を解き放つと、そのまま急いで自室に入る。
その場に取り残されたフィオナは、唐突な展開とあまりの嬉しさにへたり込む。

「……どうしましょう」

顔を優斗と同じくらいに真っ赤にさせたフィオナは、彼からの言葉を頭の中で何度も反芻する。

「今夜、眠れないかもしれません」

できないし無理

優斗が夕食後の紅茶を飲みながらのんびりしていると、マリカを寝かしつけたフィオナが左隣に座ってきた。
心なし、寄り添う形で。

「優斗さん、今日は皆さんに私たちのことをお伝えしたんですよね？」

「うん。そうだよ」

「私も女性陣に伝えたのですが、それって『安心した』と言われました」

状況を作ってしまった一因でもあっただけに、大層焦っただろう。

「まあ、少し問題が起こったしね」

「優斗さんはどうだったのですか？」

「僕たち？」

優斗は今日の放課後を思い出す。

◇　　◇

「というわけで恋人になったんだけど……」

無事にフィオナと恋仲になったことを男連中に報告する優斗。

だが、返ってくる言葉と言えば、

「おせーよ」

「遅いですね」

「遅いだろう」

「どこの鈍感主人公だ、お前は」

などとメタクソに言われる。

「いや、鈍感主人公って……あのレベルは無理だよ。だって『好き……』とか小声で言われて『えっ!?』とか問い返したり、手を繋いだり抱き合ったりして女の子の顔が真っ赤でも『どうしたんだろう?』とか疑問に思って平然な顔してるんだから。明らかな嫉妬されてるのに『なんでだろう?』って、もう人間として何か欠落して

るレベルだって」

「お前が言うか？　お・ま・え・が！」

卓也が優斗の額を指で押す。

あんだけ周囲が見ても問題ないと思っていたのに。

やっとか、と思う以外にないだろう。

「お前が言うかって、もちろん言わせてもらうよ。僕はフィオナと手を繋いだら全力で心臓がヤバいし、抱きしめられた時は破裂寸前。女の子と接触することに手慣れてる鈍感主人公とは一緒にしないでほしいね」

「かろうじて鈍感主人公よりマシなレベルだ、バカ」

「まあ、ハイパーネガティブなだけですしね」

フォローしているようで全くしていない卓也とクリス。

「……つーかさ、せっかく異世界に来たりしてんのに、誰もマンガとかラノベみたいに次々と美少女が惚れてくるラブコメやらハーレムやらになってないのっておかしくないか？」

一人ぐらいはあってもいいと思う。

「特に優斗と卓也は婚約者ありだからな。これから増やすことも可能だろう？」

「婚約括りで考えるとクリスもだ」

「やってみねぇ？　ハーレム展開」

お気楽に修が訊いてくる。

が、彼らはハーレムを作ろうと思った時点で、軽く身震いを起こした。

「クレアにマジ泣きされるので勘弁を」

「リルに八つ裂きにされるので勘弁を」

「フィオナに抹殺されるので勘弁を」

二人ほど物騒な言葉を吐いたが、あながち間違いではなさそうなのが悲しみを誘う。

「というか僕はハーレムとか駄目だし」

「優斗はラブコメもハーレムも苦手だからな」

「だってさ、おかしいでしょ。ギャルゲーとかでさ、ほんのちょっと優しくされただけで惚れるって。しかも好きになった理由が『他の人とは違う感じがする』とかだと『違う感じ』を説明しないでシナリオ終わるし。『下心のない優しさ』とかなんてバカらしくない？　ヒロインが孤独キャラだったら分かるけど、そうじゃなかったら十数年も生きてきて、全員が下心のある優しさだったのかよ、とかツッコミを入れたくない？」

優斗が熱く語る。

珍しい優斗の姿に軽く卓也たちが引く。

「……いや、まあ……」

「……一理あるとは思うが」

「ですね」

卓也と和泉はかろうじて納得。クリスは大いに納得したのか頷いている。

どこの世界でも物語は似通うものなのだろう。

「だからテンプレも苦手になってきたんだよね」

「どういうことです？」

クリスが興味を持った。

「いろんな美少女にモテる主人公が、いろいろ迷ったあげくにメインヒロインとくっ付いたとするよね」

「ええ」

「物語はそこで終了だけどさ。よくよく考えてみれば、モテる系優柔不断主人公のうち、7割は付き合った後も同じことやると思わない？　だって優柔不断なんだし。そう考えるとヒロインって可哀想だよ」

「……あ～」

言われてみれば、と卓也が納得する。

「あるかもしれませんね」

「あとは主人公の幼なじみといえば、主人公に？」

「惚れてんな」

「惚れてる」

「惚れてますね」

「惚れてるだろう」

「けれど惚れた経緯が明確に説明されてない場合が多いんだよ。子供のころから好きですって感じで。しかも何年も何年も想い続けて、それでライバルが現れて慌てるってパターン」

何かしらのスイッチが入ったのか、優斗が熱を入れて語る。

「以下、義妹、ツンデレ、そういうのは基本的に好感度マックスから始めるんだから」

「いや、様式美というものがあるだろう？」

和泉がもっともなことを言って反論する。

「限度っていうものがある。あるゲームの主人公なんて幼なじみ、義妹、昔出会ったツンデレが最初から好感度マックス。転校先で助けた女の子も即惚れる。ヒロインキャラ５人いて４人が最初から惚れるってなんだよ。しかも全員がそんだけ惚れやすくて初恋です……とか。３０分でコントローラーぶん投げたし」

優斗としては考えられないことなのだろう。

「しかも腹立つのが主人公が基本的に平凡ですよ、とかほざいてるの。どこが平凡なのか教えていただきたい。主人公が一人に対して美少女が周囲に5人も6人もいる時点で平凡じゃないと気付け。それよりも性質が悪いのは自分で暴れ回ってるのに平穏が好きとか暴言抜かしてる奴。卓也を見習えと思うよ」

「おい」

とりあえず卓也が突っ込む。

「どこぞのゲームをアニメ化する際なんて、主人公が惚れられる理由が分からないってことで超イケメンにしたんだから」

その後もあ～だこ～だと独自の考えを展開する優斗。

「こんなユウトは初めて見ます」

「優斗はシナリオに重きを置くから、手軽なラブコメが駄目なんだってよ」

嫌悪感が生まれるらしい。

「そういうことですか」

「優斗はこの点に関して潔癖症みたいなところあるからな。俺らは萌えればなんでもいいけど」

ご都合主義万歳。
美少女が惚れてくれるからこそのラブコメ。
とは思うのだが、優斗だけは駄目らしい。

「別に平凡な男に美少女が惚れるな、とは言わない。言えるわけもない。ラブコメである以上は必須条件だよ。けれど3人も4人も5人も同時に惚れてるとか何？　どいつもこいつも無個性に近いのに、どこに美少女がこぞって惚れる要素があるのか教えてほしい。『優しい』だけで即惚れてくれるなら、世界はもっと平凡に優しい世界だよ」

いや、自分を投影するにはそれが一番だから……とは分かりきっているためツッコミを入れない。

「ハーレムもそう。駄目とは言わない。けれどハーレムを形成するなりに必要な要素があると思う」

「金があるとか？」

修が言い、

「イケメンだとか？」

和泉が言い、

「決死の想いでハーレム作るとか？」

卓也で締める。

「そう、それなら納得する」

こんな人物であるなら優斗でさえも『やっぱり』と納得できる。
と、ここでクリスが、
「というか、ハーレムの女性達はよく平気でいられますよね」
「どういうことだ？」
修が聞き返す。
「自分なら、愛されているとしても複数の男の一人だと思うと女性から離れて行きますよ」
「そうか？　みんな平等に愛してるから問題ないんじゃねーの？」
「そうだな。平等なら優劣がつくわけでもないし」
修と卓也は至極当たり前の意見を言ったつもりだったが、予想外にも和泉から否定の言葉が出てきた。
「甘い」
「和泉？」
優斗が驚く。
萌えれば何でもいいはずの和泉が、こんなことを言うとは。
「平等に愛を注げる人間が存在するわけない」
「なんだそれ？」

「例えば、だ。ハーレムに４人いたとしよう。歳も格好も性格も違う４人だ。つまり魅力は人それぞれということになる」

「ふむふむ」

優斗たちは一様に頷く。

「そんな彼女たちに主人公は言うわけだ。全員を愛している、と」

「そこに何か問題があるんか？」

「あるに決まっている。魅力が違うのだ、つまりは同じ部分で比べればそこに差が生まれる」

先ほどの優斗のように演説する和泉。

「これは平等か？」

優斗たちに問いかける和泉。

「なんか哲学っぽいね」

「そうか？」

こんな話が哲学のようなものであったら、哲学者が浮かばれないだろう。

とりあえず卓也とクリスが問い返す。

「いや、けどトータルで同じくらいなんだったら問題ないだろ」

「魅力の部分で違いがある以上、心が機械でない限りは無理だと思うが……」

「いや、優柔不断な性格なら大丈夫なのでは？」

「それでも確実に差はあるのではないか？」

あれこれ議論するが明確な答えが生まれない。

「じゃあ、逆転の発想で彼女たちは愛に差があっても主人公を愛しているから問題ないというのはどうかな？」

「どんだけ聞き分けいいんだよ」

「女に対して都合良いところを求めすぎ」

「自分は先ほど言った通り、無理ですね」

「それこそナンセンスだ。差が生まれれば優劣が生まれる。それが優越感や劣等感となってハーレム崩壊の危機になるだろう」

修、卓也、クリス、和泉の順に優斗の案を瞬殺する４人。

「……真面目に議論すると、ハーレム作るのって無理ゲーにならねぇ？」

「そうだろう。古来よりハーレムというのは権力者が女性を囲うことであって、そこに愛などは存在しないのが常だ。あくまでゲームやマンガにあるハーレムは願望だからな」

現実にあるハーレムなぞエグイ話ばかりだ、と付け加える。

「……こんなん話が終わらねえし面倒だから結論としては、愛されて、愛して、上手いことハーレム作るやつは超すげぇってことでいいんじゃね？」

「ですね」

「だね」

「……まあ、そうだろう」

「そうだな」

無理矢理に修が結論づける。

「つまり俺らにハーレムを作ることは無理ってことだ」

「ということだろう」

「そういうことだね」

「幾人もの女性を愛でるほど手慣れているわけでもありませんし」

「むしろ八つ裂きにされるし」

◇　◇

「――って感じで僕らが付き合い始めたことについては『遅い』の一言だけだったんだよ」

むしろ他の話のほうが延々と続いた。

「やはり男性ってハーレムを作りたいんですか？」

「人によるんじゃないかな。けれどそういう願望があるからこそ、物語が生まれるわけでもあるし」

否定はできないだろう。

「ただ、僕は一人だけいてくれればいいけどね」

というよりは何人も自分に惚れてくるとは思えない。

「じゃあ、凄い美人が言い寄ってきても優斗さんは大丈夫ですか？」

少し心配そうにフィオナが訊いてくるが、優斗は自信満々に答えた。

「何人もの女性を囲む度量も度胸もない」

男としては狭小ではないかと悩むところではあるが、それが優斗の限界だ。

「あと、こうは言いたくないけど、僕にこれだけ可愛い婚約者がいるなんて十分に物語っぽいんだから、これにハーレムを望むのはバカだよ」

異世界に巻き込まれるわ、魔法が使えるようになるわ、父親になるわ、婚約者ができるわで、十分すぎるほどに物語だ。

「だからね……」

「はい」

「えーっと……だね」

「はい」

続けようとする言葉に、優斗が顔が赤くなる。

言うのをやめようかとも思うが、告白のときはフィオナが頑張ってくれたのだから。

今度は自分の番だと優斗は軽く頭をかきながら伝える。

「僕はずっと、フィオナだけだから」

「えっ？」

「だからフィオナ以外の相手は……いらない」

伝えきる。

自分はフィオナに心底、惚れているから。
魅せられているから。
他の誰かに視線が向けることがない。
とは言っても今は照れ臭くて彼女の方を見ることはできない。
真っ赤な顔を明後日の方向に向ける。
けれど、彼女が喜んでくれているのは分かった。
告げた後に握られた、左腕の袖の部分。
力としては、ほんの少しだけ。
されど決して離さぬようにと、握ってくれているのだから。

なぜこの面子で……

のんびりと紅茶を啜りながら食後の会話を楽しむ優斗とフィオナ。

「そいえばクリスとクレアさん、婚前旅行に行くみたいだね」

「そうなのですか？」

「結婚式の１週間前にリスタルで闘技大会があるじゃない？」

「はい」

「あれって世界中から人が集まるイベントだから、ちょうどいいってことで行くみたいだよ」

結婚式というのはもっと忙しいイメージがあったのだが、彼らはそうでもないらしい。

「レイナさんも出るらしいし、ついでに応援もするんじゃないかな」

「そうですね。学生の部に出られるのでしょう」

「大変そうだ」

世界中から猛者が集まるのだから。

「あら、意外にそうでもないのですよ。チーム戦ですから」

「そうなの？」

「ええ。一般の部は個人戦なのですが」

「まあ、レイナさんだったらチーム戦でも問題ないだろうけど」

同年代と比べれば圧倒的な実力で周囲を引っ張るだろう。

「あっ、でも……」

と、あることに気付いたフィオナが声を発した。

「どうしたの？」

「優斗さんも出られるのでは？」

「なんで？」

優斗は首を捻る。

少なくともそのような話を一度も聞いていない。

「選ばれるのは各学年から一人ずつ。出場選手の選考理由の一つがリライトで行われた学生闘技大会の結果でして、優斗さんは決勝まで行っていますし」

「けど一週間後なんだよ？　まだ話が来てないってことは選ばれなかったんじゃないかな？」

「どうなのでしょう？　私も詳しくは知らないのでなんとも言えませんが……」

互いに悩むが答えは出ない。
すると、家政婦から話を受けていたエリスが優斗たちに向き直った。

「ユウト！　お客様よ！」

「誰ですか？」

「レイナさんと近衛騎士団副長。あとはラスターって男の子よ」

レイナの姿が見えて、フィオナの腕の中にいるマリカが、

「なーっ！」

「マリカ、久しぶりだな」

『なー』はレイナの『ナ』だ。

レイナが名前を呼ばれて軽く笑む。

「少し大きくなったんじゃないか？」

「そうだね。前よりちょっと大きくなったかも」

レイナが近付いてマリカの頭を撫でる。

マリカはされるがままに喜んでいた。

「それで用件は？」

「来週リスタルで行われる闘技大会についてだ」

ドンピシャだ。

優斗とフィオナが呆れたように顔を見合わせた。

「まさしく今、その話をフィオナとしてたんだけど……」

副長とラスターが一緒な理由がよく分からない。

二人に視線を巡らせる。

ラスターには睨まれた。

副長は優斗の視線に気付いたのか、一歩前に出た。

「この度、リライトから一般の部出場。及び学生の部出場選手の選考を任された近衛騎士団副長のエルです」

ああ、なるほどと優斗が相づちを打つ。

「前述について話をしていたということはユウト様のことですから予想されていたと思われますが、正式に伝えさせていただきます」

副長の視線が優斗に固定される。

「ユウト＝フィーア＝ミヤガワ様。来週より行われるリスタル闘技大会にリライト代表として出場していただきたく思います」

次いで、フィオナの視線を移し、

「そしてフィオナ＝アイン＝トラスティ様。貴女様には予備選手として、サポートメンバーとして同行をお願いしたいと思っております」

フィオナの名前も告げられたことに優斗もフィオナも驚く。

が、それを表には出さずに優斗は尋ねた。

「選考理由はどのように？」

「リライトの闘技大会の結果、及びに学院の成績や実際の実力を鑑みて各学年より一人ずつ、選出させていただきました。比重としましてはやはり、リライトの闘技大会の結果に比重が大きく偏るのですが、そこから成績を合わせ見ても、ユウト様の選出は妥当だと考えさせていただきました」

やはり闘技大会決勝進出が大きな理由なのだろう。

成績は上位の下のほうに持って行ってはいるものの、そこそこ秀才くらいで終わる成績でもあるのだから。

「フィオナ様は闘技大会こそ出ておりませんが成績、実力共にトップクラスであり、精霊術士という希少性と有用性から選抜を」

言われてみれば、と確かに思う。
精霊術を使ってBランクの魔物を平然と倒せるのだから。

「他に3年からはレイナを。1年からはラスター・オルグランスを選出しました。大会期日ギリギリまで選考が伸びてしまいましたので、予定があった場合には断っていただいても問題はありません。ただ、出来るかぎり出場していただきたいのがこちらの願いとなっております」

「レイナさん達を一緒に連れてきた理由はどのような？」

「早計とは思いましたが、同じチームとして闘うことになりますので顔合わせをさせたかったのです」

断ると思っていないのだろう。
優斗としては前に会ったときの様子から、自分たちをねじ込んでるんじゃないか、とも少し疑ったが、どうやら違うらしい。
正しく選んでもらったのであれば断る理由もない。

「分かりました。僕としても適正な判断の下、選出していただいたのであれば是非とも参加させていただこうと思っています」

「私も問題はありません」

二人して納得する。

「ユウト様、フィオナ様。こちらの申し出を受けていただき、真にありがとうございます」

副長が頭を下げる。

つまり今、闘技大会に参加するメンバーが決まったわけだが。

「まさか、あの時の面子で闘うことになるなんてね」

シルドラゴンを倒したときに組んだメンバーだなんて。

「ふん。精々足を引っ張るなよ」

偉そうにラスターが告げる。

「……」

「……」

「……はぁ」

フィオナと副長が眉をしかめ、レイナが盛大にため息をついた。

前途は多難そうだ。

◇　◇

「まーちゃん。今日からパパとママは４日間、帰ってきませんからね」

「あい」

「本当はまーちゃんと一緒に行きたいんですが、色々な国の方々が来ていますので危ないんです。それは分かってくれますね？」

「あい」

「まさかまーちゃんと４日間も離れ離れだなんて……」

ぎゅーっとマリカを抱きしめるフィオナ。

予想外だったのが、大会の期間。

全日程３日間のうち、２日目と３日目が学生の部。

事前申請による登録は終わっているが、前日には現地で本登録などをしなければならないため、行程としては全４日間だ。

優斗とフィオナがこんなに長い期間マリカと離れ離れになるのは初めて。

そこがさらにフィオナに不安をもたらす。

「あぅ？」

フィオナとは違って平然としているマリカに、優斗は紐の付いている笛をマリカの首に掛ける。

「これはパパからマリカにプレゼント。もし怖いことがあったり遊びたかったら、その笛を吹くこと。すぐに修が飛び込んできてくれるから」

「あいっ」

和泉作、特定個人の耳に入る笛。

聞こえる距離は半径５０キロほどなので、ほぼ確実に修には届くはずだ。

「パパとママがいない間、良い子にできる？」

「あいっ！」

「うん。良い返事だ」

軽く頭を撫でる。

「義母さんもマリカのこと、よろしくお願いします」

「まかせておきなさい」

「危ない場面があったら、遠慮無くマリカに笛を吹かせてください。あの笛はマリカにしか吹けませんし、修ならどうにかします」

唯一優斗が安心して任せられる相手だ。

「分かったわ」

「それでは行ってきますね」

「いってらっしゃい」

フィオナと二人して待機していた馬車に乗る。

中には副長、ラスター、レイナと、

「和泉？」

「イズミさん？」

なぜか和泉がいた。

「なんでいるの？」

「会長の武器を改良したのは俺だ。ということで、何かあったときのために一緒についていくことになったんだ」

「あ～、そうだったね」

そういえば、と思い出しながら優斗とフィオナは隣同士に座る。

すると突然、

「フィオナ先輩！　ここも空いてます！」

ラスターが自分の隣を叩いてアピールし始めた。

ここ最近は近付いてこなかったので、もう邪魔されないと安心していたのだが。

「だから、何です？」

温かみの欠片もない声音でフィオナが問う。

「いや、オレの隣が……」

「だから？」

「えっと……」

前に全力でキレられたせいか、さすがのラスターもフィオナの機嫌が悪くなったことぐらいは気付く。
と、ここで優斗が小さくフィオナを小突いた。

「コラコラ。それぐらいでやめないと」

「……分かりました」

不承不承ではあるが、フィオナが視線をラスターから外す。

「問題ありすぎだろう、このメンバー」

端的に和泉が言った。
それは優斗もレイナもフィオナも感じていたことだから、否定も何もできない。

「あ、そういえば」

と、ここで副長が空気を読まなかったかのように優斗とフィオナに話しかけた。

「道のりは長いですので、是非ともフィオナ様とユウト様には色々とお話をさせていただきたく思っているのです」

丁寧に訊いてくる副長。
そこで優斗は前から思っていたことを伝える。

「あの、引率の立場にある副長に様付けされるのも変な感じがするので、レイナさんみたく呼び捨てで呼ばれると気分が楽なんですが」

「無理です」

即答された。

「ユウト様方を呼び捨てなど、恐れ多い」

「ではせめて“様”を除いてはいただけませんか？」

せめてもの願いとフィオナも続くが。

「無理です」

「無理なのですか？」

「はい」

断言された。

ここまで頑なに否定される理由は分からないが、副長の譲れない部分というのもあるのだろう。

こうまで言われてしまっては、さすがに優斗もフィオナも強要することはできない。

「それでは話の続きをさせていただいても？」

「ええ、どうぞ」

「……では。まずフィオナ様は魔法も精霊術も両方とも使えますが、個人の訓練としては精霊術に重きを置いているとレイナから聞いたのですが、それはどうしてなのですか？」

武芸に身を置くものとしては気になるのだろうか。
副長のみならずレイナ、和泉も耳を傾ける。

「魔法も精霊術も、行使するにあたって最低限必要な魔力というものが必要なのは分かりますよね？」

「はい」

「精霊術の恩恵は、その“最低限”の部分を限りなく低くすることができるんです」

「というのは？」

「精霊は意思があります。上手に対話をすることができれば、精霊というのは僅かな魔力で動いてくれるんですよ」

要は精霊術士のことが好きだから、進んで動いてくれる。
逆に毎度のこと強制的に命令をするような精霊術士に対しては、精霊が最低限のラインを下げることはない。

「特にフィオナは精霊にすごく好かれていますから、進んで力になってくれている分、必要な魔力が少なくて済むんです。要はコストパフォーマンスがとんでもなく良いってことですね」

へぇ、と感慨深く頷くレイナと和泉。
副長も目から鱗が落ちたかのようにしきりに頷いていた。

「では、続いての質問を」

「どうぞ」

「ユウト様はレイナとフィオナ様のどちらがお強いと思いますか？」

副長の質問に優斗はフィオナとレイナを見る。

「……」

そして二人の実力を考え、

「……おそらくはレイナさんでしょう」

結論を出した。

「ずいぶんと悩まれましたね」

「そうなったか」

「それほどフィオナも強くなっているということか」

「さすがフィオナ先輩！」

和泉たちも感想を口々にする。

「訊いた私が言うのもおかしいとは思いますが、レイナの実力は相当のものです。悩まれたということはフィオナ様はレイナと互角に太刀打ちできるとお考えなのでしょう？」

「その通りです」

「なぜ、その結論に至ったか教えていただいてもよろしいでしょうか？」

副長の疑問に優斗は頷く。

「では、まず最初に……副長は大精霊がどれほどいるか知ってますか？」

突飛な質問が来たが、副長は表情一つ変えずに答える。

「基本である四大――地水火風と別途に氷、雷。その上位に位置する二極と称される光と闇。そして精霊の主、唯一契約を必要とする統括者、元素の大精霊マクスウェル。合計9体です」

「正解です」

昔から姿形を持っている“大精霊”格は9体と言われている。

「フィオナはその中の6体――四大に氷、光の大精霊を召喚することができます」

優斗の爆弾発言に思わず副長も声を弾ませた。

「本当なのですか！？」

「マジですか！？」

副長とラスターが興奮しながらフィオナに訊く。

ラスターは精霊のことは詳しく分からないが、凄いということだけは分かる。

「えっと、その……はい」

フィオナとしては別段、凄いとは思っていなかったので逆に焦る。
隣にいる御仁はもっととんでもない人物だから、相対的に自分の評価は下がっていた。

「それで？」

レイナが腕を組んだまま優斗に訊く。

「まだ何かあるんだろう？」

大精霊を召喚できる“くらい”で、優斗がそこまで悩むとは思えない。

「さすがレイナさん」

優斗が苦笑する。

「では、フィオナが組み合わせ次第で出来る同時召喚は最大で何体だと思います？」

この質問に驚愕したのは副長。
少なくとも大精霊の同時召喚というのは、ここ最近の精霊術士には聞いたことがない。
優斗は驚いている副長を尻目に、答えを告げる。

「答えは3体」

ピッ、と指を3本立てる。

「さすがのレイナさんでも大精霊3体を同時に相手取るには難しいでしょう」

平然と優斗は言っているが、難しいどころではない。

副長は反論する。

「大精霊を3体も相手取るとすると、さすがにレイナでも勝てないと思うのですが」

「いや、同時召喚できるだけで、フィオナも行使には慣れていませんから。そこを鑑みての結論です」

特にここ最近の実力の伸びはレイナも目覚ましい。

出会ったばかりのレイナなら余裕だろうが、今はそうとも言えない。

「ふむ。ユウトもすぐに答えを出せないわけだ」

上にいる優斗と修を相手取ろうとしているが、下を見たら見たでフィオナがすぐそこにいるというのも、武人としては最高の状況下にいるのではないだろうかとレイナは思い、にやけてしまう。

「しかし、フィオナ様でも無理なのですか」

と、にやけているレイナを尻目に副長が少し残念そうに言った。

「6体の大精霊を召喚できるフィオナ様でもさすがに伝説の大魔法士以外では契約することのできなかったマクスウェルを召喚するというのは難しいのですね」

十分凄いフィオナでも召喚できていないということは、マクスウェルとはもっと並外れた存在なのだろう。

「いや、まあ……確かに難しいのもありますが、マクスウェルは契約する際に問題がありますから」

「どういうことなのですか？」

「まず、マクスウェルが契約できるのは世界で一人だけであるということ。さらには契約を求めたときに生じる戦闘がこの上なく厄介だということです」

「厄介？」

「強制的に魔力でも吸い取られるのか？」

何気なしに言った和泉の言葉に、優斗は「正解だよ」と告げた。

「契約なしで召喚した場合、契約者足る人物かどうか確かめるために問答無用で戦闘を行います。なぜ厄介なのかというと、召喚者の魔力を使って自由気ままに遠慮なく術をぶっ放してくるんです。マクスウェルのせいで魔力は減る、けれどマクスウェルを倒すには自分も魔法や精霊術を使って応戦する必要がある。つまり自らの魔力が枯渇する前に倒さなければならないタイムトライアルです」

マクスウェルについて説明する優斗。

まるで講義をするかのような説明だが、レイナは話を聞いていて分かったことがある。

——ユウトの奴、絶対に契約してる。

副長は優斗の化け物っぷりを聞いているだけであり、間近で見ていないから想像つかないだろうがレイナは幾度となく見ている。
だからこそ自分の予想が当たっていると確信していた。

——今の話は経験者だからだろう、ユウト？

でなければ事細かに話せるわけがない。
心の中で小さく笑いながら、本当に愉快だと実感する。
そして隣を見れば和泉も同じ結論に達しているのだろう。
呆れたように笑っていた。

他人の評価と実際の実力に差がありすぎるのも問題だ

リライト居残り組――修、卓也、アリー、ココでのんびりとお茶をする。

「優斗のやつさ、俺とかマリカがトラブル体質だと思ってんじゃん」

「そうだな」

「そうですわね」

「けどあいつもそこそこなトラブル体質だって気付いてんのか？」

修が今更のように言う。

「そうなんです？」

ココが疑問を浮かべると、

「年に数回、俺が関係なかったときにだってトラブってた」

「そこまで大事ってわけじゃなかったし……まあ、気付いてないだろ」

「だよな」

むしろ、あの人生でトラブル体質じゃないと断言するほうがおかしい。

「俺とかマリカが酷いだけだし」

「それはそれで、何と言っていいのやら」

「アリー、笑っとけ。修はこれでも楽しんでる」

面倒ではあるが。

つまらない人生よりはマシだ。

「普段いる場所だったら、発生する可能性は低いんだけどな。今日から行ってる場所は初めてなんだし、何かしらは起きそうだわ」

「まあ、どうにかするだろ。優斗のトラブルバスター能力は半端ないから」

「だな」

◇

◇

「事前申請は行っていましたので、これで無事に本登録も終了です」
副長が受け付けより受け取った闘技大会の詳細用紙を各々に配る。
「私はこれからアリスト王を迎える準備をしてきますので、これにて解散。２０時に宿の食堂で集合としましょう」
「我々も出迎えたほうがよろしいのでは？」
「いえ、アリスト王より学生は遊ばせておけと厳命されているので」
副長は踵を返して優斗たちから離れていく。
「どうする？」
「しばらくぶらつくとするか」

市中を歩く。
街全体がお祭りムード一色だ。
優斗たちは歩きながら先ほど手渡された資料に目を通す。
「学生の部、登録チームは３２チームだって」
「予選はバトルロイヤルとありますね」

「4チームの中から1チームのみトーナメントまで勝ち抜けられる、か」

レイナはルールを口にしたあと、本音を言う。

「相手が上位評価以外なら予選は楽だな」

「レイナ先輩！　オレが全部倒してやりますよ！」

レイナの口に乗ったのか、調子よくラスターが宣言するが、

「バカを言うな。お前が倒せるほど甘い奴らがやってくるわけではない」

すぐに叱責される。

「強敵ってどの国か分かる？」

「ちょっと待っていろ。おそらく、近くに……」

レイナが見回す。

そして目的の場所を見つけたのか、すぐさま寄っていっては“ある物”を手にして帰ってくる。

「新聞？」

「公的な行事で賭けも出来るからな。新聞でも特集として組んである」

広げた新聞を優斗たちはのぞき込む。
和泉が感嘆の声を上げる。

「魔物と同じようにランクで分けられているのだな」

「そうだ」

和泉はそのまま、読み進めていく。

「ふむ。唯一のSランクはライカールだな。学生最強の精霊術士と魔法士がいるらしい。魔法士のほうは神話魔法を扱うに一番近い存在だと謳われている。倍率としても圧倒的だ」

「続いてAランクが2チーム。エンガルトとコリル。そしてBランクには3チーム……。私たちはここだ」

レイナが指さす。
確かに優斗たちの名前が載っていた。

「なんて書いてあるの？」

「学生の中でも最上位の実力を持っている3年のレイナ＝ヴァイ＝アクライトが中心となっているチーム。ただし例年と違い穴が存在しており、1年のラスター・オルグランスの奮闘が勝敗に左右される。しかしながら、関係筋より高評価を得られている2年のユウト・ミヤガワには要注意。データがほとんど存在せず、出場選手の中で一番の未知数である。唯一出場している国内大会では初出場で決勝まで勝ち上がったことを見るに侮れない。よって昨年よりもランクは一つ落ちてBランクとするのが妥当ではあるが、ダークホースとしては一押し」

読んでいるレイナの眉間に少し皺が寄る。
どうやら、お気に召さなかったらしい。

「倍率としては……6番手だな」

「Bランクの中でも一番下の評価か」

さらにレイナの眉に深く皺ができる。

「レイナさん以外は雑魚と思われてるんだろうね」

優斗の評価なんて、まるでゴシップだ。

「王様のコメントも載っていますね」

紹介文のすぐ下にあるのは、アリスト王のコメント。

「えっと……『今年は優勝できるメンバーが揃っている』と書いてあります」

「さっき書いてあった関係筋って……王様？」

「かもしれません」

優斗とフィオナは顔を見合わせて苦笑する。
と、ここで賑やかな集団が目の前に現れた。
優斗たちの姿を確認して、足を止める。

「調子はどう？　レイナ」

そして気軽に声を掛けてきた。
レイナは目を大きくすると、小さく笑った。

「マルチナか」

「昨年は楽しかったね」

「そうだな」

言葉を交わすレイナと女性。
どうやらレイナの知り合いらしい。

「今年はどうなの？」

「悪いが、負ける気がしない」

「凄い自信ね」

「このメンバーで勝てなかったら、二度と優勝できんさ」

自分がいて優斗がいる。
これで優勝できなかったらどうしようもない。

「貴方自身の実力も伸びているでしょ？」

「お前の予想の最上位を当てはめてくれ。それぐらいの実力を付けてきたつもりだ」

「あら？　それは楽しみ」

そう言って笑うと、行く場所があるからと彼女の集団は離れて行った。

「今のは？」

「去年、準々決勝で当たった。強敵の一人だ」

「勝ったの？」

「チームとしてはな。ただ、個人の決着はついていない」

「チーム自体も強敵なの？」

「ああ。さっきの新聞の評価では私たちより上のＡランク。エンガルトのチームだ」

レイナがいてもＢランクのリライト。
そして昨年、対等の闘いを演じたマルチナのエンガルトはＡクラス。
ということは、つまり穴がないということなのだろう。

「厄介だね」

「かもしれないが、言っただろう？　負ける気がしないと」

食事を取ったあと、副長は明日が早いために個室へと戻る。
残った学生達は明後日より始まる予選のために作戦を考えようと思ったのだが、

「貴様が足を引っ張らなければ予選など問題ない！」

とラスターが豪語して、彼は部屋へと戻っていく。

「まあ、あれでも聞き分けはよくなったほうなのだがな」

「たぶんだけど、僕がいなかったらちゃんと参加したんじゃないかな？」

「やたら無闇に優斗さんに突っかかってこないだけマシになりましたね」

さて、と優斗は仕切り直す。

「作戦とかってある？」

「トーナメントならば、王道で1番手同士、2番手同士、3番手同士が闘いながらフォローするのが常だが……」

つまり自分たちの順番を当てはめると。

「評価順だとレイナ、優斗、ラスターの順番か」

つまり対外的には優斗が2番目と思われている。

「優斗が2番手って鬼畜だろう」

「相手が可哀想で仕方がないな」

「いやいや、全力でやるわけじゃないし」

さすがに神話魔法は使えない。

「ただ、予選はバトルロイヤルだ。評価上位国と同じ組にならないかぎりは、新聞の評価を鵜呑みした連中がおそらく私を集中的に狙うだろう」

「バトルロイヤルだからリングアウトでも選手失格。最後に一人でも残っていたチームがトーナメントに進めるって書いてあったからね」

そして優斗はからかうような感じで、

「レイナさんにみんなが集まった瞬間、風の魔法で全員ぶっ飛ばす？」

「私ごと飛ばす気か！」

フィオナも和泉もテンプレのようなツッコミに思わず笑ってしまう。

「……まあ、確かに案としては悪くないがな」

「悪くないんだ？」

「しかしそれだと、つまらん。トーナメントに入ったらそうは言ってられんが、予選くらいは楽しみたい」

レイナがそう言うと、全員が呆れたような、納得したような表情を浮かべた。

「戦闘狂だしね」

「戦闘狂ですから」

「戦闘狂だからか」

全員が頷く。

「けど、レイナさんは大丈夫かもしれないけど、僕はさすがに制限してある魔法で余裕は生まれないと思うんだよね」

特に上位評価のチームに対しては。

「今のところ、どこまで使えるように見せてるんだ？」

「風の上級魔法を使えるかな？　ってぐらい。他は中級までだね」

それでも学生としては十分すぎるほどなのだが、世界クラスと闘うとなると心許ない。

「精霊術も使おうかな？」

「隠し技として使えばいいだろう？　せっかく未知数という評価をもらっているのだ」

和泉が優斗に同意する。

「滅多に見ないからな、優斗の精霊術は」

「おかげで有名なのはフィオナの方だ」

レイナの言葉にフィオナは苦笑する。

「私の精霊術の先生は優斗さんなんですけどね」

「そうだな。まあ、ユウトが精霊術まで使うとなれば、対戦チームがどうなるかは知らんが不意打ちで私かユウトのどちらかがリングアウトしても、片方が残っていれば何とでもなる」

過信なく、自信だけを覗かせるレイナ。

和泉がレイナの様子を見て、しみじみと呟く。

「この二人が同じチームで学生の部に出るって反則だと思うのは俺だけか？」

「安心してください。私も思っています」

予選前日、ある意味フルスロットル

リスタル闘技大会初日。
午前中の予選を圧倒的な強さで通過した副長を見た後、昼間のあいだは自由行動となった。

「……」

「……」

けれども宿屋の一室にて、カチャカチャと和泉がレイナの剣を弄る。

「……」

「……」

レイナはその姿をじっと見ていた。

「……」

「……会長」

その状況に耐えかねたのか、和泉が声を掛ける。

「別に一緒にいる必要はないんだが」

「私の武器の手入れをしてもらっているのに別の場所に行くのも変

な話だろう？」

何よりも見ていて楽しい。

だからこそ、この場に留まっているのも理由の一つだ。

「そういうものなのか？」

「少なくとも私にとってこの剣は、魂のようなものだからな。おいそれと離れようとは思わない」

「そうか」

和泉は納得して、また剣を弄る。

「……なあ、イズミ」

「何だ？」

「イズミは大会に出たかった、とかはなかったのか？」

剣から目を離さずにはいたが、和泉の眉根が少し上がる。

「なぜだ？」

「男とは総じて、闘ってみたいものなのだろう？」

「……まあ、気持ちは分からなくもないが、俺は肉体言語を持ち合わせていないからな。闘技大会のような類は苦手だ。別の分野なら話は別だが」

魔法科学系の大会があったのなら、気持ちは分かる。

「では闘技大会には出たくないのか」

「人には向き不向きがある。俺は戦うよりも武器をいじっているほうが性に合っている」

言いながら和泉は剣に魔法具としての宝玉を嵌める。

「……これでよし」

最後に総点検をしながらレイナに剣を渡す。

「問題はない。明日も明後日も全力で闘えるだろう」

「助かる」

レイナは剣を預かると、大事そうに鞘に収めた。
けれど少し残念そうな表情を浮かべる。

「せっかく一緒に来ているのだ。イズミともフィオナとも一緒に戦えるのであれば、もっと面白かったのだが……」

皆とギルドの依頼を受けているときなどはいつも楽しかった。
もちろん、和泉に対しては怒鳴ることも多々あるが。

「気持ちはありがたい。だがチーム戦とはいえ少人数だからな。俺の場合、多人数ならば活躍の場もあるだろうが、3人だと難しいものがある」

「そうか？　いつもお前はなんだかんだと言いながら一緒にやってくれているだろう？」

「無理矢理引きずられてやっているの間違いだ」

そう突っ込めば、レイナが少しだけ不機嫌な表情をした。

とりあえず否定はできないらしい。

和泉は苦笑する。

「今回、会長は絶対に優勝したいのだろう？」

「ああ」

1年、2年のときと優勝できなかったからこそ、今回は絶対に優勝したいという想いがある。

「ならば“戦い”で“闘う”ということに関しては、俺じゃなくて適任に任せるべきだろう」

「シュウやユウトか？」

問いかけるレイナに和泉は頷く。

「俺が戦いで会長の手助けになれることは少ない。だからこそ、今回は優斗がチームメイトでよかったと思っている」

「適材適所というやつか」

和泉が頷く。

「まあ、上手い具合に配分されているからな、俺たちは。今回の件は俺が直接的に会長を手助けできる立場にいなかったというだけだ」

「どういう意味だ？」

レイナが首を捻る。

「少なくとも戦闘に関して言えば、前衛が修。中衛が優斗。後衛が卓也。フォローが俺だ。これを覆すことはできない」

別の件では、また違ったようになるのだが。

少なくとも戦闘に関してはこういう配置になってしまう。

「俺が前面に出て戦えば足手まといになる。だからこそ『会長が優勝したい』と思っていることを叶えるには、俺ではなく修や優斗がチームメイトが良かったと思っている」

とは言っても、だ。

「しかし、会長に協力をしないというわけではない。俺には修にも優斗にも卓也にもできないことができる」

それが武器を弄ること。

メンテナンスをすること。

万全の状態の武器を扱わせること。

「会長の願いを叶えるのに会長と同じ土俵に立つ必要は無い。なぜなら、俺よりもしっかりと同じ土俵に立てる親友がいるのだ。会長の願いに対して同じ想いを抱いてくれるだろうし、託すには何も問題はない」

その土俵では自分よりも上手くやってくれる親友がいる。
だったら、やってもらったほうがいい。

「けれど俺はあいつらができない、俺が必要とされていることを誇りを持って全うする」

「……イズミ」

「それでは不服か？」

訊きながら、和泉は立ち上がる。
そして仕事は終わったと言わんばかりに歩き始めた。
レイナは和泉の後ろ姿を見ながら、破顔する。

「そんなはずがないだろう」

◇

◇

優斗とフィオナは大会初日、大いに盛り上がっている通りを歩いていた。
歩きながら二人は宿屋に残っている和泉とレイナのことを考える。
「イズミさんとレイナさんってどういう関係なのでしょうね？」
「……分からない。あの二人だけはどうなのか分からない」
なんというか、謎だ。
「ある日、突然に『付き合うぞ』『いいだろう』とかいう会話があってもおかしくないぐらいに変な人たちだから」
「ふふっ、そうですね」
フィオナが笑う。
と、その時フィオナが人混みに紛れそうになる。
「――おっと」
優斗がフィオナの手を掴んで引き寄せる。
「こういう人混みはあんまりないからね」
「はい」
「案外、迷子になりやすいから気をつけて」
優斗はしみじみ、そう思う。

いつもの4人組で祭りに行ったとき、開始5分で修と和泉を見失うのは恒例だった。

「……」

フィオナは優斗の言葉に少し思案すると、

「優斗さん」

「ん？」

「左腕をお借りしますね」

そう告げるや、フィオナは優斗の左腕に自分の右腕を絡ませた。

「――っ！」

優斗はビックリしてフィオナを見る。

そこには顔を真っ赤にした彼女がいたが、それでもしっかりと腕は組んでくる。

まあ、腕を組むどころかキスまでしているのだし、何より本当の婚約者になっているのだから問題などあるはずがない。

……照れるか照れないかは別だが。

「な、なんというか、積極的になったね」

「優斗さん、ネガティブですから。積極的なことしないとすぐに駄目なこと思ってしまうかもしれませんし」

「それは……」

「否定、できませんよね？」

顔を真っ赤にしながらもにっこりと笑うフィオナに優斗は素直に頷くしかない。

「はい」

「それに今回の闘技大会で敵ができてしまうかもしれませんから」

「敵？」

「優斗さんが実力を出したら、そこに惚れてしまう方も現れるかもしれません」

「……あのね。僕に惚れてくれるなんて特殊な人物、そうそういないからね」

修じゃないんだから、あるわけがないだろう。

「私は特殊なんですか？」

「当然。むしろ唯一じゃないの？」

「それならいいんですが……あっ！」

と、ここでフィオナが何かを見つけた。

「どうしたの？」

「あれ、見てください」

フィオナが指さす。

大勢の人中でも人だかりが出来ていた。

けれど一つの部分だけポッカリと空いている。

「争い事？」

「みたいです」

「まあ、こういう大会だから面倒なのもいるだろうし」

関わる必要もないし、スルーしようとする二人。

だが、

「貴様ら、女の子に対して3人で文句をつけるなど男の風上にも置けん！！」

「ああっ！？　テメェこそ俺らが誰だか知ってんのか！？　マルコス国の出場者だぞ！　闘技大会に出るほどの実力の持ち主なんだよ！」

争っている片割れの声に、優斗は頭が痛くなった。

「片方の声に聞き覚えがあるのは気のせいかな？」

「……いいえ。私も知ってるので、聞き間違えではないと思います」

「さすがに予選前日に問題を起こすのもヤバいよね？」

「はい」

「……とりあえず彼が正義だというのは幸いだよ」

優斗とフィオナは人垣をかき分けていく。
そして問題の中心部へとたどり着く。

「ラスターさん。何をしているんですか？」

優斗が声を掛ける。
と、ラスターは男3人組を睨み付けながら答えた。

「嫌がる彼女を無理矢理手込めにしようとしていたのだ！」

ラスターの後ろには確かにショートカットのかわいらしい女性がいる。

――なんだかんだで正義感は強いんだよね。

レイナを慕っているだけはあると思う。
優斗は男3人組に向き直ると、当たり障りのない笑みを浮かべた。

「すみませんが、彼も明日から試合がありますのでここらでやめにしませんか？」

「なんだテメェは！？」

突然の乱入者である優斗を威嚇する男。

「同じ学院の先輩です」

あくまで穏やかで丁寧に対応する優斗。
だが、リーダー格であろう男が優斗と腕を組んだままのフィオナに視線を走らせた。

「はっ、良い女連れてんじゃねぇか」

下卑た笑い方をするリーダー格。

「その女を出してくれりゃ、別にそっちの女はいらねえな」

後ろにいる男2人も同様に頷く。

「貴様らにフィオナ先輩など一億年早い！！」

ラスターが怒鳴る。
対して優斗は一言。

「……へぇ」

たった……それだけ。
けれど、充分だった。
瞬間、圧倒的な重圧が3人に襲いかかる。

「な――っ！」

「ひ――ッ！」

「――っ！」

突如脅える3人組に周りのギャラリーがいぶかしんだ。

「フィオナ。ちょっと腕、離してもらえる？」

「え？　は、はい」

組んでいた腕を解くと、優斗は脅えている3人組に向かう。
そしてリーダー格ともう一人の首に腕を回すと、相談するかのように頭を近づけさせた。
半強制的に余った男も顔を近づける。
他の誰にも聞かれなくなったことを確認すると、優斗がぼそりと言った。

「お前ら、死ぬか？」

すぐさま3人から脂汗が流れ出る。
言い返すとか反抗するとか、そういうレベルではなかった。
怖すぎて言葉が上手く出ない。
“格”や“存在”そのものが別物。
同じ人間なのかと疑いたくなる。

「それとも手を引くか？」

続いて優斗が問うたことに、3人が思い切り頭を縦に振った。

「良い子だ」

ポン、と腕を回していた2人の頭を叩く。
振り向いてフィオナ達に笑顔を浮かべる。

「とりあえず話し合いで解決できたから安心していいよ」

◇　◇

ラスターは女性が一人では危険だということで、彼女を友人との集合場所まで送っていった。
自分たちの集合時間も押し迫ってはいるが、ラスターの行動も当然といえば当然なので文句があるわけもない。
優斗とフィオナは早めに宿に戻ることにした。
再び腕を組みながら歩く。

「まずい」

けれど宿に戻っている最中、優斗が呟いた。

「何がですか？」

「思ってた以上にフィオナ関連での沸騰値が低くなってる」

まさかあれしきのことで切れるとは思わなかった。

「ラッセルも似たようなこと言った時あったけど、あの時は半ギレぐらいで耐えたんだけどな」

「結局はキレたんですね」

フィオナが苦笑する。

「まずいな～」

優斗が右手で頬を掻きながら、困ったような表情を浮かべた。

「まずいんですか？」

「やっぱり平和に解決したいから。なんか恐怖政治みたいになってたよ、さっき」

無理矢理頷かせたようなものだ。

「いいじゃないですか。普段の優斗さんは平和に解決しようとしていますし、ああいう風になってしまうのは仲間の皆さんに何かされた時と家族に何か言われた時でしょう？」

「まあ、そうだね」

「世の中、どうでもいいことに本気で怒る人もいるのですから、優斗さんの怒り方は大丈夫なほうですよ」

フィオナは顔を少しだけ優斗に傾ける。

「それに私は嬉しかったです」

ふわりと、近付いた分だけフィオナの甘い匂いが優斗の鼻腔を擽る。

けれど照れながらも微笑んだフィオナの続く言葉は、

「優斗さんに愛されてるって……実感できましたから」

もっと甘かった。

必然の強さ

ベスト４が出そろった個人戦。
準決勝２試合目では副長が現在、勝負をしているが分が悪い。
一向に攻められず、反撃に出たとしても威力や攻め手に欠けている。

「ユウト！」

優斗が副長の試合を観戦席で見ていると、声を掛けられた。
呼ばれた方向を見てみれば、クリスとクレアが優斗に向かっている。

「会えるとは思ってるけど、思ったより早く会えたね」

「リライトにある円形の闘技場とは形が違って、四角いリングに観戦場所が２カ所しかない珍しい形ですから。その分、幅が広いのが難点ですが制服を着て黒髪な人物を探していけば、そこまで手間は掛かりません」

「そっか」

確かに黒髪は目立つ。

「他の方々は？」

「作戦会議中」

「ユウトはここにいてもいいのですか？」

「僕がいると作戦会議に参加しないのがいるからね」

「なるほど」

言葉に秘められた人物を思って、クリスが苦笑する。

「一般の部はどうなってますか？」

「一応、今は準決勝。副長が闘ってるけど……」

と、二人が視線をリングに向ければ、ちょうど副長の剣が弾かれた瞬間だった。

ほどなくして審判から勝利選手の名前が告げられる。

割れるような歓声が起こった。

「……負けてしまいましたね」

「善戦はしてたんだけど相手はギルドランクSの大物らしいからね」

まともにやり合っただけでも十二分に凄いと言えるだろう。

「それで、今日の午後からはユウト達の出番というわけですね」

クリスの言葉にすぐ後ろにいたクレアもおっかなびっくり、

「お、応援しています！」

優斗に言葉を掛けた。

「ありがとう」

あまり回数をこなして会っていないせいか、未だに会った最初は緊張しているクレアに優斗は前々日に見た新聞を話の種にしてみる。

「二人とも、新聞特集のやつ見た？」

「いえ、自分は見ていませんが」

「わたくしもです」

「なんか僕の評価がゴシップ記事みたいになってたんだよ」

「どのように？」

問いかけるクリスに優斗は苦笑する。

「関係筋より高評価……とか言われてた。あとはデータが少なくて未知数、とか」

「また信用性のない文章ですね」

確かにゴシップのように感じられる。

「まあ、事実はもっと酷いものですが」

「あの……それはもしかして、ユウト様は……」

恐る恐る尋ねるクレアにクリスは軽く手を振る。

「逆ですよ、クレア」

そして手を優斗に示す。

「この隣にいる化け物に勝てる人間なんて、自分が知る限りは一人しかいません」

「ユウト様は化け物なのですか！？」

「突っ込むところ、そこ！？」

まさかのボケにツッコミを入れる優斗。

クリスが笑って否定する。

「クレア、僕が言いたいのは『ユウトが強すぎるから高評価程度じゃ話にならない』ということです」

「そうなのですか」

と、ここで気付く。

「一人しかいない……。ということはつまり、クリス様よりも強いということでしょうか？」

クリスだって学生の中では相当な実力を持っているのはクレアも知っている。

けれど優斗より強いのが一人しかいないということは、おそらくは優斗より上だと思われるのはレイナということであり、つまるところクリスよりも強い……ということになる。

「自分とユウトを比べないでください。泣きますよ？」

「あ、あのあの、その、ご、ごめんなさいクリス様！」

クリスの言葉を真正直に取って慌てるクレア。

優斗もクリスも小さく笑う。

「冗談ですよ」

そうクリスが告げると同時にアナウンスが流れる。

決勝の時間と、午後から始まる学生の部の出場選手の集合。

「そろそろお時間のようですね」

「楽しみにしています」

優斗の代わりに観客席に座った二人に優斗は軽い感じで、

「できるだけ、期待に添えようとは思うよ」

◇　　◇

予選は完全なる抽選によって組み分けされる。

つまりは高評価なところでも、組み合わせ次第でつぶし合いになる。

ということは、

「予選１組。リライト、マルコス、サイタル、エンガルト」

上位ランクに数えられたリライトとエンガルトが同じ組になることもある。

「さっそく因縁の対決が勃発って感じかな？」

リライトメンバーと合流した優斗はしみじみと感想を言った。

「早いか遅いかの違いだ」

「……ものすごく楽しそうだね」

「つまらないと思っていた予選から、これだからな。思わず笑みも零れてしまうというものだ」

そうこう話している間に抽選は続く。

他の上位評価のチームは順当にバラけ、予選で一番の注目はおそらくリライトとエンガルトになるだろうと周囲も話している。

「予選１組の試合は３０分後より始まります。それまでは各国ブリーフィングルームを設置していますので、そこでお待ちください」

運営者の言葉でそれぞれの国が、宛がわれた部屋へと向かう。

その部屋で待つこと数分、副長が入ってきた。

「おしかったですね」

「いえ、精進が足りませんでした」

優斗が声を掛けると、落ち着いた返事がきた。
どうやら負けた反省はすでに済ませているらしい。

「さて、一般の部は終わりました。ベスト４という結果には王も納得してくださるでしょう」

副長は全員の前に立つと、今度は引率者としての役割をしっかり果たす。

「けれど私が貴方たちに望む結果は一つです」

レイナ、ラスター、優斗に視線を巡らせる。

「優勝。それが出来ると私は思っています」

告げる言葉は、それが出来ると言わんばかりの自信に満ちた言葉だった。

「ではブリーフィングを始めます」

副長の宣言によって作戦会議が始まる。

「まず予選の国を確認すると、マルコス、サイタル、エンガルトの３国ですが……」

つい先ほど決まった対戦国を副長は思い返す。

「正直に申し上げれば、リライトとエンガルトの一騎打ちになるでしょう」

他は雑魚でしかない。

「そのためには邪魔なマルコスかサイタルの選手は秒殺してください。無駄に攻撃を喰らってはたまりません」

中にはそれなりの実力者も一人ぐらいはいるかもしれない。

「おそらくはエンガルトも同じ考えでしょう。相手の出方を見てから、対応すべきチームを見定めてください。2国を倒し、エンガルトと一騎打ちになった場合……」

「おそらく私の相手はマルチナでしょう」

レイナが当然のように言った。

「倒しなさい」

「言われなくても」

自信を持ってレイナが頷く。

「ユウト様は2番手と思われる相手を選んでください。誰かしらのフォローなどさせずに完封をお願いいたします」

「分かりました」

優斗は課せられたことをしっかりと頭の中で反芻する。

「ラスター・オルグランスはまず、倒されないことを前提に勝負してください」

「な、なんでオレだけ！？」

「3番手と言えど、4元素のうちの3つ――もしくは派生などの上級魔法を使える相手でしょう。さらに剣技も貴方と対等であると考えなさい」

「は、はい」

「レイナとユウト様は相手を倒した後、ラスター・オルグランスのフォロー。ラスター・オルグランスは何があっても倒されないこと」

全てを言い切ってから、副長はもう一度視線を全員に巡らせる。

「以上です。質問は？」

「ありません」

「僕もありません」

「オレもないです」

出る選手が全員、首を横に振る。

無論、ラスターは優斗が二番手だということも、優斗より評価が低いことも気に食わないが、ここで食ってかかっても副長に黙殺されることは目に見えているので不満げな表情を浮かべるだけだ。

「分かりました。では――」

と、続けたところで用意された部屋のドアが開いた。

そこから現れたのは、

「アリスト王、どうされましたか？」

王様だった。

「なに、ユウトに話がある」

「僕にですか？」

名前を呼ばれたところに驚く優斗。

「少し借りるぞ」

副長が王様に頷くと、レイナ達とは少し離れたところ。
小さな声で話せば内容が聞き取れない場所まで連れてこられる。

「王様。話とはいったいどのような？」

「何かあったら神話魔法を使っていい」

優斗の眉がピクリと動いた。

「いいのですか？」

「あくまでも“何かあったら”だ。使うべき時を誤るな。お前やシュウが持っている力は強大だ。無用な誇示はいらぬ誤解を生む」

世界で神話魔法を使えるのは把握されているだけで６人。
そこに割って入ったのが優斗と修だ。

しかも、使える6人は神話魔法一つしか使えないのに対し、優斗も修も多数使える。
まさに一騎当千というべき存在。
国に一人いれば危ういと思われるのに、二人ともなれば危ういどころではない。

「お前ならば大丈夫だと思うがな。念のために伝えておこうと思ったまでだ」

「はい」

「とはいっても、何かやったところでどうにかしてやるから気楽に闘うがいい」

豪快に笑う王様。

「ありがとうございます」

頭を下げる優斗。
が、笑った顔が一転、真面目な表情を浮かべる。

「とりあえずは気をつけろ」

「なにがでしょうか？」

「どうにも気にくわん奴らがおる」

「……それは？」

「ライカール国。あそこは力こそが覇であると信じている実力主義

の国だが……どうにも今回の選手は癖が強いらしい。現国王の娘も出場しており、昔から性格に難があるのも分かりきっておる」

「……そうですか」

「闘うことになれば、何が起こるかはわからん。用心だけは怠らないでくれ」

「分かりました」

王様の話も終わり、個人戦の決勝も終わる。
予選１組、最初の出番である優斗たちは闘技場のリングに通じる通路で待機していた。
続々と同組の対戦相手が現れる。
エンガルト、サイタル、マルコス。
そしてマルコスの選手を見た瞬間、ラスターが大声を発した。

「貴様ら！　ここで会ったが１００年目。切り刻んでくれる！」

突然の言葉に誰しもがラスター達を注目した。
当然、優斗も見る。

「あれ？」

前日、見た姿があった。

――昨日のナンパしてた連中だ。

偶然というのは凄いものだと感心する。
マルコスの３人はいきなり怒鳴ってきたラスターを睨み付けようとするが、彼の近くにいる優斗の姿が視界に入った。

「「「あっ」」」

同時に顔が真っ青になっていく。

「昨日はどうも」

とりあえず、差し障りない挨拶をする優斗。
対してマルコス３人組は、

「い、いえいえ！　滅相もありません！」

全力でヘコヘコしていた。
これ以上、彼らに話しかけるのも可哀想だと思い、優斗は彼らから距離を置く。
そこにレイナがやってきた。

「何をしたんだ？」

「フィオナにちょっかい出そうとしてたから脅した」

「どのレベルで？」

「キレレベル２くらい」

「あんな小物にお前のプレッシャーを耐えられるわけがないだろうが」

「……彼らの姿を見て、少し申し訳なく思ったよ」

あくまで少しだけ、だが。

◇　◇

いざ、予選が始まるにあたって出場チームの紹介とアナウンスがされる。

『さあ、予選１組目。予選最大の激闘が起こるとしたらこの組だ！』

順々にリングへと入場していく。

『まず最初にエンガルト！　優勝候補の一角にして打倒ライカールの一番手！　予選はスムーズに抜けたいところ……だが、そこに待ったを掛けるのがレイナ＝ヴァイ＝アクライト率いるリライト！　学生最強と謳われる剣技と最高峰の実力。並のチームならば彼女一人に負けるであろう！　さあ、彼女をエンガルトがどのように対処するのが予選１組目の見所だ！』

アナウンスを聞きながら優斗はレイナに話しかける。

「学生最強の剣技だってさ」

「父にも副長にも負けっ放しで、おそらくはシュウにも引き分けられてしまう剣技を最強だと言われてもな」

納得はいかない。

「いや、リライト最強レベルの騎士や勇者なんだから、そこに負けたからって学生最強の名が無くなるわけじゃないでしょ」

「ふむ。それもそうか」

話している最中にも入場は進み、四隅に各チームが散らばった。
中央には審判。
ぐっ、とリング上の選手全員が身構えた。

「それでは予選１組。試合開始！」

審判の宣言と共に始まった。
それと同時にエンガルトの炎、風、土の中級魔法が一瞬にしてサイタルのチーム目掛けて発動されている。

「エンガルトはサイタルを狙うらしいな。私たちはマルコスを狙うか」

鞘より剣を抜いて構えるレイナ。
しかし、すぐに困惑した。

「……いない！？」

最初に指定されていた場所にマルコスの選手が存在しなかった。
焦るレイナ。
だが、

「待った待った。意識をリングの外に向けて」

隣で呆れたような声をさせた優斗。
言われたようにリング外に意識を向けると、

「……リングアウト？」

すでに彼らがリングの外にいた。
さすがにそこまでは意識を向けていなかった。

「ユウト、何かしたのか？」

「いや。僕がする前に自ら降りていったよ」

魔法も精霊術も威圧もしていない。
しかし、だ。

「……きっとお前に殺されると思ったのだろうな」

「たぶんね」

などと話しているうちに、エンガルトがサイタル全員をリングアウトにしていた。

「まあいい。これからが本番だ」

改めて構え直すレイナ。
視線はマルチナに固定され、互いに見合っている。
優斗も2番手と思われる相手から視線を向けられた。

「頼んだぞ、ユウト」

「了解」

「ラスター。気張れよ」

「分かってます」

ラスターがロングソードを抜く。

「行くぞ！」

3人が同時に散らばった。

◇　　◇

「マルコスの奴ら、何だあれは？」

「おそらくは昨日に優斗さんの圧力を受けたのが問題だったのかと……」

フィオナ、和泉、副長はクリス達と合流して試合を観戦していた。

「……それは逃げますね」

「クリス様、そうなのですか？」

「ええ。前にフィオナさんが傷ついたとき、４０人５０人を殺気一つで震え上がらせたと聞きましたから」

学生じゃ逃げたくなるほどの恐怖心を抱いても仕方ないだろう。

と、ここでリング上いたもう一チームもリングアウトした。

「……エンガルトも相手を倒し終わったということは、ここからが本番です」

副長の手に力が入る。

「相手も優斗さんたちも同時に散りましたね。１対１の状況が３つ。どの対戦が一番最初に終わるかが問題ですね」

「……判断が難しいです。ラスター・オルグランスがどれほど粘れるのかが鍵になるとは思いますが」

「大丈夫だろう。会長か優斗のどちらかが先に勝負をつける」

「……どうしてその考えを」

「副長。簡単な考えだ。優斗は実力を制限していようと鬼畜だし、会長はそんな優斗たちと対等に闘うために鍛錬を行っている。実力の伸びが想像以上にハンパない」

闘技場ではすでにレイナとマルチナが激しく切り結んでいる。が、必至なマルチナとは違い、レイナは余裕があるような表情を浮かべていた。
一方で優斗は、

「ほう、優斗はショートソードを抜いたな」

「相手も大変ですね。ユウトはあれで平然と魔法を切りますから」

「あいつ、本気出せばあれだけで地系統の上級魔法以外は全部叩き切るから相手もやりにくいだろう」

見れば、いくつも迫り来る中級の炎玉を冷静に一つ残らず切り裂いている。

「自分も最初見たときはそうでしたが、さすがに相手も唖然としていますね」

会場全体も拍手が生まれていた。

このとき、一つの予感が和泉とクリスに生まれる。

「前に見たな。この光景」

「リライトの闘技大会の１回戦ですね」

「ということは、前に見たときのように決めに行きそうな気がするな」

「そうですね。自分もそう思います」

◇　◇

狙い目は上級魔法を使おうとする瞬間。
それまでは迫り来る魔法を全て叩き切ってきた。

「……っ！」

相手が業を煮やして上級魔法を紡ごうとする。

――来た！

優斗は全力で前へと駆ける。
しかし相手も反応した。

詠唱をすぐに止めてロングソードを構える。
やはり優勝候補のチーム、反応は早い。

――それなら……。

風の魔法をショートソードに纏わせて、投擲。
そしてほぼ同時に地の精霊術を使う。
瞬間、地面から一本の石柱が相手の真下からせり上がった。

「――ッ！」

地面の異変を感じた相手が左へ飛び退くが、そこにはあらかじめ投擲していたショートソードが向かっている。

「うわっ！」

相手が不格好になりながらも、それを避ける。
けれど体制を崩した場所に、優斗が全力で駆け抜けてきた。

「せー……のっ！」

立て直す時間など与えない。
ジャンプして、相手の顎に膝蹴りを見舞う。
さらに着地すると同時に相手の服を掴み、風の中級魔法を使ってリング外まで投げ捨てる。

「よし」

相手がリングアウトするのを確認する。

「さて、と。これで次は彼の手伝いだね」

◇　　◇

呆れた表情をクリスが浮かべる。

「……えげつないですね」

和泉はさすがだ、と言わんばかりの表情。

「走り込みながら膝蹴りで顎を的確に捉えただけでも、すでに失神ものだろう」

副長は無表情のまま。

「あげくに相手が地面に倒れきる前に服を掴んで投げ捨てましたから。ダメージを回復させる間も与えていませんね」

フィオナは安心したように。

「とりあえず怪我しなくてよかったです」

最後にクレアが、

「……」

放心していた。

「クレア。大丈夫ですか？」

クリスに名前を呼ばれてはっ、と意識を取り戻す。

「え、あ、はい。あの、ユウト様の予想外な戦いに驚いてしまって……」

なんというか雰囲気と合わない戦闘スタイルだった。

「まあ、ユウトは魔法や精霊術の制限をしていますから、ああいったスタイルのほうが勝ちやすいのでしょうね」

前回も似たようなスタイルで勝ち上がっていた。

「制限……ですか？」

「ええ。少しは相手に会わせないと、ただの蹂躙になってしまいますから」

本当はその他諸々の事情が相俟っているのだが、この場で話すことでもない。

「それよりも、他の人たちはどうなりましたか？」

「優斗はラスターのフォローに向かったな。会長は……ふむ、そろそろ終わりそうだ」

◇　　◇

一撃、二撃、三撃、五撃、十撃、二十撃と撃ち交わしていれば、自ずと相手の実力は計れる。

「はぁっ！」

まさか、ではあった。
これほどまで実力の差が生まれるとは思ってもいなかった。

「――シッ！」

レイナは横に剣を薙ぐ。
相手の剣が弾かれると同時に前に出る。
意のままだった。
相手を自由にコントロールできる。
昨年のときとはあり得ないくらいの余裕があった。

「このっ！」

慌てて弾かれた先から剣を振るうマルチナの剣をレイナは、

「――ンっ！」

上段から振りかざして叩き折った。
そして剣をマルチナの首元に突きつける。

「どうだ？」

「……参ったわ」

マルチナが両手を挙げて降参した。
レイナはちらりと横を見ると、すでに優斗がラスターのフォローに回っていた。
急いで向こうに行く必要はない。

「この1年間で、とんでもない化け物になったものね。想像以上の実力じゃない」

「私がか？」

「他に誰がいるのよ」

マルチナの悔しそうな表情にレイナは苦笑する。

「いや、同年代に私よりもとんでもない奴が少なくとも二人、いるからな。そいつらに比べたら私は圧倒的に可愛いほうだ」

「そうなの？」

「ああ。今の私じゃ手も足も出ない」

冗談無く言うレイナにマルチナは、参ったと言わんばかりに額に手

を当てる。

「……あなたが強くなった理由、分かった気がするわ」

◇　　◇

「レイナも勝ちましたね」

「これで3対1だ」

和泉たちの視線には、たった一人を三人で追い詰めていく状況が映っている。

「ラスターさんが斬りかかり、レイナさんがフォローし、ユウトが……止めとばかりに風の上級魔法を放ちましたね」

「これでリライト以外の全員がリングアウト。我々の勝ちです」

副長が安心したように大きく息を吐いた。

「終わってみれば完勝ですか」

「凄いですね」

観戦していたクリスとクレアがそれぞれ感想を述べる。
和泉とフィオナは立ち上がった。

「さて、あいつらをねぎらいに行くとするか」

「そうですね。優斗さんも少しは疲れたでしょうから」

予想外な伏兵

フィオナ達は最初にいたブリーフィングルームで優斗たちを待つ。
すると、息一つ切らしていない優斗とレイナ。軽く息が上がっているラスターが戻ってきた。

「お前ら、あれは軽いイジメにしか見えなかった」

「……そうか？」

「僕は奇襲で打ち負かしただけだよ」

「それがエグいんですよ」

勝負が終わったあとだと言うのに、軽口を叩く。
フィオナは優斗に近付くと軽く手を取った。

「怪我……ありませんよね？」

「見てたから分かると思うけど、怪我してないよ」

「これからも駄目ですからね、怪我なんてしたら」

なんか似たようなことをリライトの闘技大会のときもした。

優斗は既視感に陥る。

けれど前回とは関係性がまるで違う。

素直に思っていることを口にすることが出来た。

「いや、闘技大会なんだし、さすがに少しは了承してもらいたいんだけど」

「駄目です」

む～、とした上目遣いで優斗を見るフィオナ。

「あ～、その……」

さすがに困る優斗。

「レ、レイナさん。何とか言ってもらえません？」

「自分でどうにかしろ」

何とか助けを求めようとしたが、一刀両断された。

「貴様！　フィオナ先輩に心配してもらっているのだ！　何が不満だ！？」

そこにラスターまで加わってきて面倒な事態になりそうだったが、副長が手を一度叩く。

乾いた音が響いて、全員が黙った。

そして副長に注目する。

「皆さん。まずは予選突破、おめでとうございます」

先ほどのやり取りなどなかったかのように副長が賛辞を述べ始める。

「優勝候補の一角を圧倒的実力を以て崩したことで、相対的に我々の評価は上がったことでしょう」

事前の予想を崩すというのはやはり心地が良いものだ。

「レイナ。貴女はよくやりました。このまま勝ち続けなさい」

「はい」

レイナが頷く。

「ユウト様。相手の不意を突き、実力を計らせることなく終わらせたのは感嘆に尽きます」

「ありがとうございます」

優斗は小さく頭を下げた。

「ラスター・オルグランス。貴方は実力的に負けていましたが、よく耐えました。しかし今回だけではなく、この大会を通じてやり通すことが重要です」

「了解です」

ラスターもさすがに素直に頷いた。

「それでは皆さん、この後は予選を観戦したあと――」

それぞれ勝ち上がってきたチームの詳細を調べましょう、と副長が続けようとした瞬間、フィオナが不意に声を発した。

「――えっ？」

ビクリと身体が跳ね、視線の方向が見えない闘技場のリングへと向かっていた。

「フィオナ、どうしたの？」

不審な行動に優斗が問う。

「……優斗さんは感じませんでしたか？」

そう言われても、優斗は何のことだか分からなかった。

とりあえずフィオナが向いている方向に注意してみる。

「……」

壁に囲まれた場所にいる。

つまりは視界に入ることではなく、気配関係だろう。

――ということは……。

少し集中して探ってみると、フィオナの言いたいことが把握できた。

「……なるほど」

「どうしたんだ？」

レイナがいぶかしむように訊いてきた。

優斗はじらすようなことはせず、端的に答えた。

「精霊が死んだ」

「……どういうことでしょうか？」

クリスが首を捻る。

「強制的に精霊を扱い、命令と支配に耐えられなくなった精霊が死んだんだよ」

「……それは不味いのではないか？」

和泉としても、この世界での精霊について詳しく把握しているわけではないが、オーソドックスなゲームの世界なら、そういった類いの話はあまりよくはないはず。

「いや、問題はないよ。精霊だって生き死にはある。あれ程度なら世界に何の影響も及ばさない」

優斗は答えると、誰がやったのかを考え、

「確か学生最強の精霊術士がいるんだったよね？」

「ああ」

レイナが首肯する。

「たぶん、そいつの仕業かな」

精霊を殺せるレベルとなると、そこそこの実力はあるはず。

「ユウトでも気付かなかったことをフィオナはよく気付いたな？」

「感知系はフィオナのほうが上だからね。おそらく、今の世の中で一番精霊に好かれているフィオナだからこそ気付けたんだよ」

龍神の母親であり、純粋な彼女だからこそ精霊に好かれている。

「……気分が悪いです」

フィオナが顔をしかめた。

身近に感じられる精霊が不当な死に追いやられれば、さすがに良い気持ちはしない。

「優斗、大精霊がそいつにでも召喚されたらどうなる？」

「さすがに大精霊を殺されたら不味いことにはなるけどね。でも、まず無理だよ。下位、中位の精霊ならまだしも大精霊はその場にいないからこそ召喚しなければならないわけだし。そしてマクスウェル以外の大精霊の召喚に必要なのは強制でも支配でもなく合意だから。そいつが考えを改めないかぎりは召喚に応じることが無い」

とは言っても、だ。

「無論、例外はあるけどね」

「例外とは？」

「唯一大精霊を強制的支配下におけるのは精霊の主たるマクスウェルと契約者だけ」

二つの存在だけが例外。

優斗の話を聞くと、レイナ、和泉、クリスが安堵した。

「ならば安心だな」

「そうだな」

「驚かせないでください」

三者三様で安心する。

けれどラスターは精霊の基礎は知っているものの、詳しくはないため疑問を呈す。

「レイナ先輩、しかしそいつが契約していたらどうするんですか？学生最強の精霊術士と呼ばれているならば、僅かばかりでも可能性があるとは思います」

「ありえないな。ユウトが言っていただろう。マクスウェルと契約できるのは一人だけだと。そしてもし、そいつがマクスウェルと契約していたら『学生最強の精霊術士』ではなく『最強の精霊術士』と呼ばれているはずだ」

「そういえばそうですね」

レイナの説明に納得するラスター。
だが、ふとあることに気付く。
キッと優斗を睨む。

「というか精霊術士でもない貴様がなぜフィオナ先輩が感じ取ったことを分かったように説明している！　フィオナ先輩が感じたことと違っていてはどうするのだ!?」

瞬間、時が止まった。
副長とレイナは半眼。
和泉とフィオナは「何言ってるんだこいつは?」みたいな視線。
優斗は首を捻る。

「……言ってないの?」

優斗からではどうせ話を聞かないので、自分が外れての作戦会議のときに味方全員の詳細と実力をある程度は話したとレイナが言っていたので、てっきり精霊術のことも言っていたと思ったのだが、違ったのだろうか。

「いや、端的ではあるが言ったはずだが……」

「俺も会長が言ったと記憶しているが」

「私もです」

「しかとレイナが説明していました」

全員が聞いていた。

ということは、ラスターが“優斗の話題”というだけで理解することをシャットアウトしていたということであり、代表してレイナが一言。

「ど阿呆が」

「レ、レイナ先輩？」

「いいか、お前は阿呆だからしっかりと説明してやる」

ただ単に優斗が精霊術を使えると簡素に伝えたのが不味かったのだろう。
なのでしっかりはっきりフィオナという話題も交えつつ説明をする。

「フィオナがなぜ、リライトで精霊術の使い手として名高いのか知っているか？」

「リライトでは精霊術士の数があまりにも少なく、大した使い手がいないからです」

「そうだ。現に大精霊を召喚できることを知られていなかった時点でも、フィオナはリライトでは名高い使い手だ。しかし、ならばどうやってフィオナはあれほどの精霊術を短期間で使えるようになった？」

「フィオナ先輩の才能です！」

断言するラスター。
まあ、間違ってはいない。
確かに間違ってはいないのだが。

「……フィオナに才能があったのは合っているが、違う。フィオナに精霊術を教えた先生がいたからだ」

だからこそ僅かな時間で大精霊すらも召喚できるほどの人物になった。

「そしてフィオナに精霊術を教えた人物こそユウトだ。だからユウトも精霊術を使えるんだ」

もちろん、優斗がどうやって精霊術を覚えてきたのかは……割愛。

努力と気合いと根性だろう。

あとは独自の考えと基礎は調べて纏め上げ、フィオナでも扱えるように分かりやすく説明したのだろう、ということはレイナにも察しが付く。

「貴様ごときがフィオナ先輩に精霊術を教えただと？」

ラスターはレイナの説明を聞いたあと、優斗を一睨み。

「ふん。まあ、すぐにフィオナ先輩に抜かれて立つ瀬がなかったからこそ、今は使っていないのだろう」

まるで事実だと言わんばかりのラスターの物言い。

そこそこ強いのは認めてはいるが、あくまで優斗は自分よりも実力は下。

レイナよりもフィオナよりも下なのは当然だ。

「……」

「……」

傲慢不遜としか感じ取れないラスターの態度に、見て分かるほどキレそうなのが二人いる。

一人は言わずもがなフィオナ。

「優斗さん。私、怒っていいですか？」

「駄目」

穏やかに優斗が止める。

これでも前よりはマシになっているので、むしろラスターは成長したなと優斗は逆に感慨深い。

「では私が切りましょう」

けれどもう一人、キレそうなのが副長。

剣を抜こうとするのをレイナと和泉が止める。

「待て。引率者が何をしようとしている」

「副長。ここは抑えてください。ユウトは気にしていません」

どうどう、と馬を宥めるように扱う。

「そうですよ。僕なら気にしてませんから」

「しかしですね、ユウト様を貶されて何もしないというのは騎士の名折れとなります」

いや、むしろ優斗&フィオナのファンとしての名折れだ。
けれどもやはり、その姿を勘違いするのがラスターのラスター足る所以。

「貴様！　副長までも拐かすとはなんたる――ッ！」

「いい加減、黙ってください」

直後だった。
ラスターの首筋に手刀一閃、クリスがたたき込む。
そのまま崩れ落ちてうつぶせに倒れるラスター。
クリスはラスターの様子を確かめ、気絶以外には問題がないか確認し始める。

「……マジで？」

「……えっ？」

「……ほう」

「……珍しいことをするものだな」

「……クリス様」

「……良い角度ですね」

全員が驚く。
クリスはラスターの安全を確認し終えると、さわやかな笑顔を浮かべる。

「さすがにあれほど不用意に友人を貶されてはイラッとしましたので」

いや、にこやかにやることじゃないだろうとは誰もが思った。

けれども、王子系イケメンのさわやかな笑顔とやったことのギャップが妙に笑えてくる。

「……くっくっくっ。まさかクリスがこんなことをやるとは思わなかった」

一番クリスと接する時間の長かった和泉が耐えられないように笑い始めた。

「そうだな。まさかのクリスだ」

レイナも同意しながら、笑い始める。

「チームの皆は自分の初めての友達なんです。イズミはユウトと付き合いが長いからユウトが何と言われようと気にしない性格なのを把握しているから何とも思わないかもしれませんが、自分には無理ですね」

友達が悪口を言われているのには慣れない。

きっと相手が正しかったのだとしても、自分は優斗や和泉が悪口を言われていれば怒ってしまうだろう。

……今回は確実にラスターが悪いが。

「まあ、別に悪い子じゃないから」

「そこは理解しているのですが……」

なぜかラスターのフォローに回る優斗。

「クリス様……」

クレアがクリスの袖を掴んで見上げる。

「怖がらせてしまいましたか？」

「いえ、友人のために怒るクリス様は素晴らしいと思います。わたくしの伴侶となるかたは義に厚い方なのだと」

どうにもクレアにはクリスの姿が格好良く見えたらしい。

夢見る乙女のような視線を向けている。

「真っ当な実力を考えると、学院2年の男性陣の中でクリスはユウトとシュウの次ぐらいにはなるということを忘れていたよ」

レイナが笑いながら思い返す。

あの当て身は完璧だった。

「さて、こいつをどうする？」

笑いながら和泉がペシペシとラスターの額を叩く。

完全に落ちている。

起きる気配がない。

とはいっても、置いていくには忍びない。

「僕が運んでる最中に目でも覚ましたら大変なことになるから、和泉が運んで」

優斗が未だに笑っている和泉に頼む。

「いいだろう。珍しいものが見れたのだから、これぐらいはお安いご用だ」

最大印象は……

予選も観戦は3組目から。それ以降の試合は全部見終わったあと、和泉とレイナ、副長は未だに起きないラスターを宿まで運びに行った。
優斗たちは決勝トーナメントの組み合わせ表まで確認してから宿に戻る。
そして情報を皆と共有する。

「次は評価でBランク筆頭だったマイティーで、その次は順当に行けばAランクの片割れ、コリル。そして最後にライカール……だね」

見事に大変な展開になった。

「上位評価を殲滅しないといけないのですね」

大変そうだとクリスが言った。

「とりわけ、一番最初に考えるべきはマイティーだろう。あのチームは……」

レイナの言葉に、全員がマイティーのメンバーを思い浮かべる。

「ハゲだ」

「ハゲでしょう」

「いや、正確には筋肉ハゲだよ」

和泉、クリス、優斗の順に酷いことを。

「確かに3人そろってハゲで筋肉隆々。物理攻撃は見た目通りに威力はあるが遅い。魔法も攻撃系統は上級まで使ったやつはいない」

レイナが彼らの情報を口にする。

「だが、防御魔法に定評がある」

「防壁って形じゃなくて、身体に貼り付ける防御魔法だったね」

おそらくは聖魔法の一種だ。

「奴らについては実際、どれほどの威力まで防げるのかは相対しないと分からないな」

予選での対戦チームが中級魔法までしか使えなかったので、中級まで防げることは分かっている。

「相手の魔力量によっては、上級魔法まで防がれることを想定して闘ってください」

「分かりました」

優斗と和泉が副長の言葉に頷く。

「次は順当勝ちでコリルですね」

「予選はオーソドックスな戦い方でした」

クリスが指さすトーナメント表のチーム名に、クレアが感想を言う。

「穴はないが、突出した部分もなし。エンガルト以上でないかぎり、私やユウトが負けることもない」

「僕たちのときも王道で来てくれたら助かるんだけど……」

「見た限りなら我々のほうが実力は上ですから。奇襲を仕掛けるとしたら相手側でしょう。ユウト様やレイナはそこに注意しなければなりません」

予選の戦いぶりからしても、下に見られることはないはず。

「最後はライカール」

クリスが名を口にすると、フィオナの眉根が寄った。

優斗の予想通り、予選2組に出ていた。

つまり精霊を殺したのはライカールの精霊術士。

「予選2組だったから見れなかったけど、相当だったらしいね」

「全員を半殺しか……」

レイナが呟く。

見るも無惨な状況だったらしい。

「話を聞くと、タイプは魔法士と精霊術士と剣士だ。バランスは良いのだろう」

テンプレのようなパーティー構成だと和泉が唸る。

「剣士はどうか分からないが、魔法士は上級魔法でも高い威力のものを。精霊術士は……」

レイナの視線に優斗は答える。

「分かっている段階では、四元素を上級クラスの威力まで」

別途の氷、雷。二極の光や闇を使えるかもしれないことを考慮しなければならない。

「あげく人を傷つけるのを厭わない連中ということだ」

和泉は気にした様子なく言うが、クレアが脅えたような表情を浮かべる。

「王様も警戒するほどのチームだからね」

「そうなのか？」

レイナの問いに優斗は頷く。

「うん。予選前に話したとき、気をつけろって言われた」

と、ついでに思い出したことがあったので伝える。

「あっ、先に言っておくけど」

ラスターはまだ気絶中。
クレアはあと少しでクリスの妻となるのだから、言っても構わないだろう。

「勝ち負け以外で何かしらやばかったら神話魔法使っていいってお達し来てるから。使ってもどうにかしてくれるってさ」

優斗の発言に軽く驚くフィオナ、和泉、クリス。
副長は普段の冷静な表情が一瞬にして喜びに変わった。

「本当ですかっ!?」

身を乗り出さんばかりの副長に優斗が軽く引く。

「何をそんなに嬉しそうなんですか?」

「緊急時とはいえ、独自の詠唱によるユウト様の神話魔法をこの眼で見れるかもしれないと思うと……」

使わないとやばい状況なのだから喜ぶ場面じゃないはずなのに夢見心地な副長。
それとは別にクレアといえば、

「……神話魔法? ……えっ?」

予想外過ぎて処理できていなかった。

「えっと……ユウト様が使えるのですか？」

「そうですよ、クレア」

クリスが頷くと、ようやく処理しきれたらしい。

「……え……えぇ！？　す、凄いです！！」

遅れて驚くクレアにクリスが注意する。

「いいですか。これは自分の伴侶となるクレアだからユウトもこの場で話したのです。他言は無用ですよ？」

「は、はい！」

こくこくと頷くクレア。

その姿にほっこりとしながら、レイナは話をまとめる。

「ユウトが神話魔法を使う必要がないことを祈るが、兎にも角にも、まずはマイティーを倒さなければ先はない」

見回す。

優斗、フィオナ、クリス、和泉が頷いた。

「そうだね」

「そうですね」

「そうでしょう」

「そういうことだ」

闘いの華

決勝トーナメント初戦。
マイティーとの戦いはやはり、予想通りのものとなった。
魔法を放ち、斬撃を幾度も浴びせる。
しかし屈強な肉体と防御魔法の前に跳ね返される。
多少の傷はつけども、すぐに回復魔法を使われて意味がない。

「レイナさん、そっちは？」

優斗とレイナは互いに敵と距離を取って近づき、背中合わせに話す。

「ただの斬撃じゃ傷一つ付いたところですぐに回復だ」

あれほどとは思ってもいなかった。

「お前はどうだ？」

「駄目だね。上級魔法も防がれた」

「どうする？」

優斗が風、レイナが炎の魔法を浴びせるがやはり防がれる。

「案は二つあるけど」

「どんなだ？」

「防ぐ際に魔力を消費してるから、一つは魔法を放ち続けて相手の魔力が切れるか自分の魔力が切れるか勝負」

「もう一つは？」

「一撃必殺。あの防御をブチ抜く攻撃をする」

別に声を小さくして話していなかったからだろう。
レイナが相手をしているリーダーハゲがニカッと笑みを浮かべると訊いてきた。

「どっちを選ぶのだ！？」

見た目通りの野太い声。
けれど何かしらを期待しているかのような訊き方だ。
優斗とレイナも笑った。

「決まってる」

「決まっている」

望み通りにやってやろうじゃないか。
互いの相手にレイナは剣を。
優斗はショートソードを差し向ける。

「「　　ブチ抜くっ！！　　」」

高らかに宣言した優斗とレイナに歓声が沸く。
リーダーハゲも優斗の相手の2番手ハゲも威風堂々、防御の態勢を取った。

「いいだろう！　来い！」

「かかって来いやぁ！！」

さらに観客が沸いた。
注目が優斗とレイナ、ハゲ2人に集まった。
少し離れたところでラスターと相対しているハゲは羨ましそうにしていた。

◇　◇

「どうしてあの方たちは受け止めようとされているのですか？」

真剣勝負なはずなのに、なんであんなことになったのかが分からなかったクレアが質問する。
問いにはまず、副長が答えた。

「『華』……ということでしょう」

「どういうことですか？」

答えの意味が分からなくて、フィオナが続けて問う。

答えたのは和泉。

「戦いにおける『華』だ」

さらにクリスが補足する。

「盛り上がる場面、盛り上がる瞬間。最大の攻撃に対して最大の防御。逃げては『華』がありません。ですから彼らは受けて立つのですよ。真っ向勝負を」

だから誰しもが優斗とレイナ、ハゲ達に注目する。

「でも、ユウト様とレイナ様はどうやって、あの防御を突き通すつもりなのでしょうか？」

ただの攻撃では防がれる。

魔法だって上級魔法ですら防がれた。

「レイナとユウト様のことです。何かあるのでしょう」

副長が淡々と告げる。

まずは優斗が動いた。

「……ほう」

和泉が感嘆の声をあげる。
優斗が呟き刀身に左手を這わせると、雷を帯び始めた。

「魔法を切っているときと同じようにショートソードに魔法を纏わせる魔法剣ですね」

それだけで相手の防御を貫けるのだろうか？　とクリスは疑問に思うが、優斗はそこから持ち方を変えて、身体を捻った。

「逆手？」

「……そういうことか。相変わらずあいつは面白いことをする」

意味が分からないクリスと違い、和泉は見当が付いた。
副長もフィオナもクレアも興味津々に和泉の話を聞き始める。
特に副長が一番、興味を持っていた。

「知っているのですか？」

「まあ、俺たちの世代では誰しもが真似をした技だ」

本来は幼稚園児や小学校低学年の子供が真似るやつだが、優斗みたいに中学以降に読んだ人間でもやってみたい、という気持ちは生まれるのだろう。

「一つは亀の仙人が生み出したかめはめ波、一つは霊界探偵の霊丸、そして一つは勇者で竜の騎士が使った――」

まさしく一撃必殺の技。

「――アバンストラッシュ」

◇　◇

「求めるは雷帝、瞬撃の落光」

派生の雷魔法中級。
ショートソードに段々と電気を帯びていき、刀身をゆっくりとなぞりながら完全に雷を纏わせる。
そして逆手に持った。

「行くよ」

「来ぉいっ！！」

瞬間、優斗は飛び込んだ。
風の魔法を使いながら一駆けで相手の眼前へと押し迫る。

「――ッ！！」

そして全力の一刀を以て相手の胸元へと叩き付けながら振り抜く。

「……あぐっ！？」

飛び込む速度を全て振り抜く速度に変え、雷を纏わせた斬撃。
その威力は相手を吹き飛ばし、１５メートルほど転がらせるほど。
ハゲはゴロゴロと転がりながら、地面を這いずり……摩擦で止まる。

「……」

数秒ほど様子を見るが、２番手ハゲは起き上がらない。
手応えはあった。
起き上がらないところを見るに、完全に気絶している。

「よしっ」

優斗はショートソードを鞘に収める。
とりあえず自分は勝った。
ということは、あとはレイナが勝利を収めるだけだ。

◇　　◇

「優斗は勝ちか」

「あとはレイナさんですね」

まだレイナは動いていない。
けれど優斗のショートソードと同様に剣に変化が起きていた。

「あれはなんですか？」

クレアは見たことがなかった。
刀身が紅く染まっている。

「炎の属性付与だ」

もっと近くで見れば、時折に炎が吹き上がっているのが分かる。

「優斗さんは無事に貫きましたが、レイナさんはどうなのでしょうか？」

フィオナは普段、レイナと一緒に闘うことがない。
彼女の攻撃の考察についてはやはり、和泉やクリスには劣る。

「フィオナは会長が強くなるにあたっての最大の問題点って何だったか知っているか？」

「……いえ、わかりません」

フィオナが首を振る。
けれど、代わりに副長が答えた。

「攻撃力の無さですね」

「さすが副長。よく分かっている」

レイナを鍛えているだけあって、やはり把握していた。

「会長は技術で闘うタイプだ。腕力でどうこうするわけではない」

女性である以上、仕方がないと言える。

「それをカバーするのが属性付与の剣と俺の施した改造……なんだが、頼り切りなのは負けている気がしたらしくてな」

和泉とクリスは見合わせて笑う。

「一つの技を極めようとした」

「それは？」

問いかける副長に今度はクリスが答える。

「突きですよ」

軽く右手を突き出して、突きの真似をする。

「ギルドの討伐依頼では、魔物を倒すときは大抵、突きを使っていました」

正確には平突き。

元々の属性付与や和泉の武器改造も相俟って、突きが一番良い技だとたどり着いたらしい。

「それを見たイズミが『左手は前方に突き出せ』とか茶々入れはじめて、真面目に修練しているレイナさんに殴られながらも長々高説していたら、レイナさんが洗脳されて今の突きが完成したわけなんです」

あの時の和泉の熱意は正直、気持ち悪かった。

「名称は確か……」

完成した暁に和泉が命名していたはずだ。

「牙突。そうでしたね、イズミ？」

和泉は仰々しく頷く。

「俺らがいた世界では一番有名な突きの名前だ」

◇　◇

視線は目の前にいる筋肉ハゲからぶらさない。

身体を半身にし、少し腰を落として突き出した左手は軽く剣に触れる。

あとは切っ掛け一つで飛び込むだけだ。

「……」

「……」

見合って数秒……もしくは十数秒だろうか。
小さくはあるが、剣を鞘にしまう甲高い音が聞こえた。

「――ッ！」

それが合図になる。
レイナは飛び込み、右手を前に突き出すのと同時に左手を引き絞る。

「はぁっ！！」

炎を纏わせながら突き穿った剣は寸分違わず狙った左脇腹へと向かっていき、防御魔法をもろともせずに一瞬にして突破。
見事にリーダーハゲの脇腹を貫いていた。

「……私の勝ちだな」

レイナはすぐさま、剣を引き抜く。
身体を貫かれ、身体の中から炎で焼かれたのだ。
激痛と呼んでもおかしくない痛みがあるはずなのだが……。

「はっはっはっ。見事だ！」

けれど平然とした様子でリーダーハゲがレイナを褒め称える。

「まだ続けるか？」

「いや、1番手同士の真っ向勝負で華々しく破られたのだ。これ以上は野暮というものだろう」

死合ではなく試合なのだ。
2番手も負けていることから、これ以上は負けの時間を引き延ばすことにしかならない。
それならばと、リーダーハゲはどっしりと地面に座って審判に高らかと負けを認めた。
瞬間、唯一不完全燃焼だった3番手ハゲは文句を垂れ、ラスターは……妙な顔をした。

◇　◇

「なんだか不思議な戦いでしたね」
控え室に向かいながら、クレアが先ほどの試合を思い返す。
フィオナも同意した。
「勝ち負けよりも大切なものを見せられた戦いでもありました」
「そうだろう。互いの自信を賭けた勝負だったのだから。観客の盛り上がりがそれを証明している」
そして控え室にたどり着くとレイナと優斗が談笑していた。
二人が振り向く。
「面白かった？」

「最高です」

優斗にグーサインを出すクリス。

「レイナさんに牙突教えたの和泉だよね？」

「当然だ。ちなみに、さらに進化させたものもあるぞ」

「零式？」

「残念ながら違う。見てのお楽しみだ」

もったいぶる和泉。

そう言われたら、楽しみは後に取っておくしかない。

と、ここで二人ほどいないことにレイナが気付く。

「ん？　ラスターと副長はどうした？」

レイナが問うと、クリスが出入り口を指さした。

「さっき、もの凄い勢いでラスターさんが副長を引っ張っていきましたよ」

納得がいかない

そして引っ張られた副長とラスターは人気のない通路で対峙していた。

「ラスター・オルグランス。どうしました？」

「副長！　次のコリル戦はオレを2番手の奴とやらせてください！」

堂々と言い放つラスター。

思わず、副長の眉根に皺が寄る。

「なぜです？」

「あいつが2番手を倒せるならオレが倒せないわけがない！　だからオレを2番手に！」

予選や1回戦はまだいい。

だが、次からは準決勝だ。

本来の実力順である自分を2番手に置くべきだと進言する。

無論、そこには優斗の高評価が気に食わないなどのその他諸々が付随してくる。

「……ふぅ」

また、あまりの言い草に嘆息する副長。
予選とトーナメント、2回の戦いを終えたところで未だにそんなことを言える彼に驚きを隠せない。

「貴方はこの大会、優勝したいのですか？　それとも自己の満足で終えたいのですか？」

「そ、それはもちろん優勝です！」

「レイナの前でも同じことを言えますか？　1年、2年の時、レイナは優勝できなかったからこそ、3年の今回は是非とも優勝したいはずです」

「当然言えます！」

答えるラスターだったが、副長は大きなため息を一つ。

「ならば結果を見れば予選、1回戦共にユウト様はレイナよりも相手を早く倒しています。けれどラスター・オルグランス、貴方は未だに一人として倒せていない。これで貴方を2番手に置きたいと誰が思います？」

「しかしあいつの偶然がいつまでも続くとは限りません！」

あまりの堂々な言い方に呆れて物も言えなくなりそうだった。
何を、どこを、どうやって見たら自分の方が強いと思えるのかが不思議だった。

「……ラスター・オルグランス。例えユウト様が偶然で勝っていようと、偶然を起こせるだけの実力が必要なのです」

事実は逆に実力を制限しているのだが。

それを言ったところで信じたりはしないだろう。

僅か数日しか彼を見ていないが、それぐらいは副長も把握していた。

「さらにはっきりと結論を言いましょう。貴方の実力では3番手の相手に粘るのが精一杯です。2番手の相手を請け負えば早々に破れ人数として劣勢を強いられるでしょう。無論“現在の動き”から鑑みると、ユウト様よりも圧倒的にラスター・オルグランスが劣っているということではありません。ですが、戦闘時における柔軟性に違いがありすぎます」

あまりに行動の質が違いすぎる。

「どの方法が一番、勝つに値する動きなのか。貴方にはそれがありません。常に正面からの戦い。もっと別の方法が良い場合があるのにも関わらず、そうしないというのはレイナのように実力のある者だけが行える選択です」

そしてレイナとて、魔物との戦いで劣勢の場合は戦いの選択肢を増やす。

無様だろうとも勝つ方法を見出そうとする。

「しかし、卑怯だ！」

「違います。卑怯というのは最低限の礼儀すら守れない下劣で非常識な行動を指すものです。しかし、この場合は戦術というのですよ」

それすらも彼は分からないのだろうか。

「授業では常に正面からの戦いでしょう。しかし、本来は敵が授業のように正面から動きますか？　魔物が正直に戦いますか？　貴方はそれを卑怯と罵りながら負けるのですか？」

「……それは……」

「真っ向勝負が好きだというのなら、真っ向から事実を受け取りなさい。己が唯一の穴であると称されたことを」

◇　◇

「……納得がいかない」

う～ん、と唸りながら控え室に戻るラスターだが、途中でレイナと和泉が飲み物を取りに行っている姿が見えた。

なぜだか声を掛けづらい雰囲気だったので、その場で止まることとなった。

二人はラスターに気付くことなく会話している。

「あと2つ勝てば優勝か。思いの外、楽に勝ち進めているものだ」

「やはり優斗がいると楽だろう？」

「当然だな」

当たり前のように言うレイナに、ラスターは「なぜだ!?」と言いそうになったが、必至に口の中に留める。

「楽観視するつもりもないが、正当に行けば初めての優勝。そのために私は頑張るのみだ」

「願いが叶う、か」

「ああ。2年越しの願いだからな」

それが叶いそうなのだ。
嬉しそうな表情をするのも無理はない。

「しかし、ラスターも頑張っている。私とユウトだけでも負けることはないが、あいつが粘っていることで試合が楽になっているよ」

ラスターは自分の話題になったことで、少し注意深く聞き耳を立てた。

「あれで実力を過信するところがなければな」

「優斗がいるから性格上、無理だろう」

「そうだな」

レイナが苦笑する。

「何にせよ、不作の1年と言われている中でトップとして頑張っているんだ。少しは評価せねばな」

突然のレイナの言葉に、驚きを隠せないラスター。
自分たちの学年が不作と呼ばれているなど知らなかったからだ。

「そうなのか？」

「3年には私。2年には知られているのでもアリーやクリスだ。比較してしまっては可哀想だろう？」

現在、学院最強と呼ばれる3年のレイナ。
2年には4元素の上級魔法を扱えるアリーと剣技、魔法共に上位クラスのクリス。
上記の3人は1年の時から飛び抜けた存在だった。
当時の彼らとラスターを比べると、どうしても格が落ちる。
学年全体的に見ても同様だ。

「それもそうか」

言っていることに納得する和泉。

「何にせよ、だ。このまま頑張ってくれれば文句は言わんよ、私は」

お茶の入ったコップを3つ持ちながら、控え室に戻ろうとする和泉とレイナ。
と、レイナの視界にラスターが入った。

「何をしている？」

「え？　い、いや、オレは……」

まさか話を聞いていたとも言えず、どもる。

「ラスター。お前が戻らなければブリーフィングが始められない。行くぞ」

「は、はい！」

レイナに促され、ラスターは後ろに付いていく。

副長に色々と言われ、レイナにも色々と言われ、珍しく……ヘコみそうになった。

◇　◇

控え室に戻って３０分後。

ある程度の話し合いが終わると、準決勝が始まった。

「……これは面白い展開になりましたね」

「まあ、状況的にはこうするのが一番だろう」

観客席から興味深そうにクリスと和泉が考察する。

「優斗もレイナも圧倒的に勝ちすぎた。ならばこういうのも手だ」

「“今のユウト”ではおそらく防戦になるでしょうし……」

やはり、というべきか。
コリルは王道では来なかった。

「ラスター・オルグランスの動きによっては、楽に勝てるか時間が掛かるか決まりますね」

始まった瞬間、優斗とレイナは軽く驚きを表した。

「そうくるんだ」

「そうくるか」

相手の1番手はレイナに。
2番手と3番手、二人がかりで優斗に向かっていった。
考えとしてはすぐに優斗を打倒してから、数の利でレイナを倒そうとしているのだろう。
さらに言えば、ラスターは完全に足手まといとしてカウントしている。

だからこそ無視をするという考えに至ったはずだ。

「……」

ラスターは立ち止まっていた。
相手がいない。
倒すべき相手が真正面にいない。
リング内を見れば、すでにレイナと優斗は敵と相対している。
自分だけが呆然としていた。

「ラスター！！」

レイナが相手に斬りかかりながら怒鳴る。
慌ててラスターがレイナのほうを向いた。

「ラスター、私をフォローしろ！　すぐにこいつを片付けるぞ！」

「し、しかしあいつが！」

視線を移せば優斗が前後から魔法と剣で打ち込まれていた。
動きべきはレイナのところではなく優斗のところではないのか。

「ユウトなら大丈夫だ！　粘れる！」

レイナが絶大の信頼を寄せる。
返事こそないが、優斗は笑って頷いていることだろう。

「ならばお前がすべきことはなんだ！？　あいつらがユウトを倒すよりも早く、私たちがこいつを倒すことだろうが！！」

レイナの相手は防御主体。
優斗が倒れるまでは粘りきるつもりだ。

「だ、だけど2対1など……」

しかもレイナと共に相手取るなんて。
卑怯ではないのかという考えが浮ぶ。
だが、

「最後の大会、私は優勝したいんだ!! だから手伝え、ラスター!!」

レイナの一喝がラスターを動かした。
無意識だった。
一目散にレイナのところへ向かうと、上段から剣を振るう。
そして剣を振るっている最中、ラスターはようやく気付く。
無意識にここに向かってしまったということは、自分のこだわりなどレイナの願いの前にはちっぽけなものなのだということに。

「よく来た!」

レイナが笑った。
そのままラスターは正面から押していく。
逆にレイナは後ろへと回り込み、前後から激しく攻め立てる。
一気に劣勢に陥れられる相手の1番手。

「……っ!」

相手の1番手はラスターの斬撃を防いだ直後、後ろからのレイナの斬撃を防ごうとする。

「無駄だ！」

一閃。

レイナが相手の剣を弾く。

返す剣で袈裟切り。

切られた痛みと衝撃で相手は俯せに倒れた。

「ラスター。行くぞ！」

「はい！」

すぐに二人は優斗のところへと駆けつける。

一瞬にして形勢が逆転した。

珍しく、少しだけ息を弾ませた優斗が文句を言う。

「……遅い」

全部、防ぎきったが予想よりも来るのが遅い。

そこそこ疲れた。

「悪かったな。頭の悪い奴がいたから遅れてしまった」

「ふん。耐えたことは評価してやる」

数は3対2。

どちらが優勢なのかは分かりきっている。

ニヤリとリライト勢が笑う。

「さあ、勝つぞ」

「了解」

「分かりました！」

叶えたいこと

準決勝2試合目。
ライカールとファルタの試合を観戦する……が、

「これは……」

副長が眉をしかめる。

「……うわ」

「惨いことをする」

「酷い有様だ」

「何ということだ！」

「やり過ぎですね」

ある意味、想像以上の光景が繰り広げられていた。
フィオナとクレアには刺激が強すぎるので、見せないようにしている。

「剣士が……いや、騎士か。騎士が腕を切り落とす。精霊術士は溺死寸前まで。魔法士は焼死寸前……か」

観客が幾人も吐き気を催している。
スプラッタ映画顔負けの状況だ。

「審判が止めなければ、確実に死んでいただろうな」

レイナが舌打ちをした。

「とりあえず、控え室に戻りましょう」

副長の合図で全員が観戦席から立ち上がる。

「自分はクレアと飲み物を取りに行きます」

「俺も一緒に行こう」

「オレも行く」

「僕はトイレ行ってから戻るよ」

「私は少々の食べ物を買ってから戻る」

一人で2つのコップを持ちながら歩く。

「いやはや、次の試合は大変なことになりそうですね」

「怖い人たちなので、無理はしないでほしいです」

「信じるしかないだろう。優斗とレイナを」

「ふん。オレがいるから問題はない」

自信満々に言い放つラスター。

こいつは本当に変わらないと和泉とクリスが思う。

と、その時だった。

向かいから歩いてくる集団を避けようとして、通路の端による。

けれど寄った先に前を向いていない人がおり、図らずしてクレアとぶつかった。

「きゃっ」

手で持っていたコップからお茶が少し零れる。

そして零れた水滴は地面に落ち、跳ねて……集団の中央にいる女性の靴に1滴、掛かった。

「す、すみません！」

クレアは水滴の1つが女性に掛かってしまったのが分かったので、頭を下げて謝る。

頭を下げられた女性といえば、足下を見て、クレアを見て、

「ラファエロ」

告げた。

瞬間、傍らにいる一人の騎士が一投足に剣を抜いて横薙ぎ。

あまりに唐突な出来事にクレアも、和泉も、ラスターも反応できなかった。

反応できたのは、ただ一人。

「――ッ！」

甲高い金属音が通路に響く。

「しっかりと謝ったではありませんか。それとも他国の貴族と問題を起こすつもりでしょうか？」

クリスが睨み付ける。

鞘よりレイピアの刀身を半分出して受け止めていた。

「やるね～、色男。だが残念」

けれど続いて、女性の逆側にいた男がニヤニヤ笑うと手を前にかざした。

直後、風とかまいたちがクリスに襲いかかる。

「……ぐっ……！」

不意打ちだったが、かろうじてクレアを攻撃範囲内から押し出す。

けれど自身の防御はできず、５メートルほど飛ばされる。

脇腹からは血がにじみ出ていた。

「クリス様！」

「クリス！」

クレアが蒼白になりながらクリスの元へ向かう。

「貴様ら、何をする！！」

ラスターが剣いて吠える。

「私が着飾っている靴に水滴が付いたのよ？　私の美を衰えさせた罪は重いわ」

「美？」

問いかける和泉に対して、女性はこともなげに言う。

「王族にして『学生最強の魔法士』の私の美を損なわさせるのは罪よ」

「……はっ。３０点だな」

和泉が鼻で笑う。

何が美だ。

外面だけが良いだけで『美』なんて言うわけがない。

「顔の作りは良いが正直な話、性格がうざすぎる。王族っていうのはアリーみたいな性格がベスト、次いでツンデレだ。高慢ちきが過ぎる性格はテンプレを通り越して萌えるポイントがない。だからト

ータルで３０点だ」

吐き捨てるように言ってやる。

だが、女性は屑の見るような視線を和泉に向け、

「雑魚がうるさいわね」

風の中級魔法を和泉に叩き付けた。

「……い……つっ！」

同様に和泉も吹き飛ばされた。

「イズミ様！」

「……イズ……ミ」

クリスと近い場所まで和泉が飛ばされる。

「おいおい。オレにもやらせてくれよ」

「ジェガン。貴方は一人やったからいいじゃない」

嘲るような笑いが広がる。

「貴様ら！」

彼らの様子に怒りの炎が灯り、今にもラスターが斬りかかろうとする。

が、ここである女性の声が響いた。

「何をしているっ！！」

凛とした声音。
レイナだ。
ラスターがほっとした声音を出す。

「レイナ先輩……」

レイナは和泉やクリスの様子を見て、前方にいる女性たちを睨み付ける。

「これは貴様らがやったのか？」

「私の靴に水滴を付けたのだから当然じゃない」

「……なんだと？」

「そこの女を殺そうとしたんだけど、あの男が防いだものだから面倒なことになったのよ」

クレアとクリスを不快そうに見る。

「貴様――いや、ライカール第2王女ナディア。リライトに喧嘩を売るつもりか？」

「私には当然の権利よ」

女性――ナディアはあくまで厚顔不遜だ。

「でも貴女。レイナってことはレイナ＝ヴァイ＝アクライト？」

「そうだ」

「へぇ。こいつがねぇ」

ジェガンと呼ばれた男がマジマジとレイナを見る。

「貴女、面倒そうなのよね」

ナディアが手を前に翳す。

「ここでやる気か？」

レイナも剣に手を掛ける。

「貴女たちが死にたいのなら構わないわ。どっちにしろ、あの女は殺すけど」

クレアを指さすナディア。

「させるわけがない」

「させるはずないでしょう」

痛みを耐えて立ち上がった和泉とクリスがクレアを庇うように前に立った。

「見過ごすわけにはいかないな」

レイナも剣を鞘から解き放つ。
と、ここで最後にもう一人、やってくる。

「みんな、どうしたの？」

いつも通りの様子で優斗が登場した。
だが、仲間に視線を向けると、

「何があってこうなった？」

視線と雰囲気を一変させた。

「また雑魚がぞろぞろと……うざいわね」

ナディアが嘆息する。
が、彼女のことはどうでもいい。
優斗はクリスから話を聞く。

「クレアが飲み物を零して、水滴が一滴、彼女の靴にかかったんです。クレアは謝ったのですが、問答無用で殺そうとしてきまして」

「それで、この状況か」

優斗も話を聞き終えると、ナディア達を睨み付ける。

「……すごく面倒。全員、ここで殺しちゃったほうがいいかしら？」

「国際問題にでもする気か？」

レイナがまだ、冷静に言葉を返す。

「そんなのどうでもいいわよ。高貴なる私の美を損ね、気分を害したのだから全員死になさい」

「貴様にそんな権利があるとでも？」

「あるわよ。血筋も美も実力も全てを兼ね備えている私に許されないことはないわ」

「ふざけたことを」

「ふざけてないわ。だったら、貴女たちの大切な人も全員殺してあげるわ」

決めた、と言わんばかりのナディアにレイナが怒号する。

「やってみろッ！」

レイナもラスターもクリスも剣を抜き放ち、今にも斬りかかろうとした……瞬間だった。

「ストップ。皆、控え室に戻ろうか」

優斗の声が通路に響いた。

あまりにも絶妙なタイミングで、動こうとした足が双方とも完全に止まった。

「レイナさんもラスターもクリスも剣を収めて」

「なっ！？　ユウ――」

「収めて」

反論しようとしたが、優斗の眼光を真に受けてレイナは剣を収める。
決して優斗は恐れて収めさせたのではない。
ピリピリとした空気が、優斗が怒っていることを示している。
こういう優斗がすごすご逃げるはずもない。
むしろこの中で一番の過激派だ。
いの一番に問答無用で相手を壊滅させてもおかしくない。
にも関わらず、剣を収めろということは“ここでやるべきではない”と。
暗にそう言っていた。
和泉とクリスとレイナは優斗の意を汲み取ると、優斗以外全員の背を押すように通路を歩く。

「戻るぞ」

「許可した覚えはないわ」

ナディアが何か言うが、レイナは無視する。
クレアがビクッと身体を震わせたが、クリスが抱えるように連れて行く。
優斗は一人、彼らと相対する。

「すみませんが、あと1時間後には決勝です。決着はそこですればいいですし、クレアさんがしたことは謝ったのでこちらにはすでに非がありません。それに大会運営の方々がやって来ましたので、これ以上やれば強制的に止められること必須です」

ただの通路でこれはやり過ぎだ。

ぞくぞくと野次馬が集まってきている。

「それでは」

踵を返して優斗も歩き始める。

「おい、待てよ」

けれどお構いなしに精霊術士――ジェガンが火の精霊術を使った。

「――ったく」

優斗は舌打ちすると、振り向きもせずに同様の威力、同様の火の精霊術をぶつけて相殺させた。

「あら」

「おっ」

「……」

少し驚いた表情を浮かべたライカールのメンバーに優斗は首だけを振り向かせると、

「今度こそ失礼します」

そう告げて今度こそ控え室へと戻っていった。

優斗が控え室に戻ると傷ついた和泉とクリスは副長に回復魔法を掛けられていた。
ゆっくりと椅子に座る。
すると開口一番、ラスターが大声で怒鳴った。

「なぜ止めた!?　貴様はあれほど言われて良いというのか!?」

「あの場でやったところで意味がない。下手したら両方棄権扱いされて決勝どころじゃなくなったんだし、レイナさんも本望じゃないだろ?」

「ああ、助かった」

自分を律しきることができなかった。
反省すべきだな、とレイナは思う。

「だが貴様は友人が傷つけられて、どうしてそこまで平然としていられる!!」

「平然?」

続いたラスターの言葉に、優斗は嘲るような声音を出した。

「面白い冗談だ」

「……なっ!?」

突如、雰囲気の変わった優斗にラスターが驚愕する。

――そうだ、冗談じゃない。

平然としているわけがない。

だれが平然としていられるものか。

「決勝の舞台で叩き潰すに決まってるだろ」

毛虫を潰すように親友を傷つけた。

それだけで万死に値する。

「大勢の観衆の前で潰す。完膚無きまでに」

ピリ、とした空気が控え室に満ちる。

クレアが少し脅えた。

その時だ。

「優斗さん、落ち着いてください」

フィオナが隣にやって来て、優斗の手を取った。

「気持ちは分かりますけど、少し落ち着いてください」

ぎゅっと。

包み込むように手を握る。

たちまち、控え室の張り詰めた空気が霧散する。

「……ありがとう」

そう言う優斗に、フィオナは軽く微笑んだ。

「しかし現実問題、彼らは実力も性格も今までの対戦相手とは明らかに違います」

やっと落ち着いて話せる空気になったところで、副長が口を出す。

「あくまで『試合』が前提なら勝ち目は多いにあります。ですが向こうは殺すことに躊躇しません。しかも今回で因縁が着きました。確実に殺しに来ることでしょう」

話を聞いただけだが、おそらくは殺すことを厭わない連中だ。しかも大会中、不慮の事故として片付けられるだろう。

「全員、命が危うくなったら棄権をしなさい。これは命令です」

「しかし副長！」

ラスターが反論しようとする。

「申し訳ありませんが、私には優勝よりも貴方たちの命のほうが大切です」

優先順位は優勝じゃない。

「いくら霊薬があるとはいえ、蘇らせるには限度があるのですから」

副長の言葉に……ラスターもさすがに押し黙った。

それからは試合開始前まで、無言の時間になった。
けれど、開始15分前となったところで、副長が立ち上がった。

「15分前になりましたね。最後に皆さん、輪になってください」

今まで予選、トーナメント共に試合前にこんなことは言わなかった。
誰もが首を捻ったが言われた通りに輪になって集まる。

「手を前に出して」

素直に全員が手を前に出す。

「一人ずつ、メッセージを」

驚く様相の皆に副長は告げる。

「最後の闘いです。こういうのもいいでしょう?」

僅かに微笑みを浮かべた副長に、全員が頷いた。
まずはフィオナから想いを言葉にする。

「私はただ、無事を信じています。できれば怪我無く帰ってきてください」

無論、一番心配してしまうのは優斗だが、レイナもラスターも無事に戻ってきて欲しい。
次いで和泉。

「今更、何かを言うことはない。信じている。そしてお前らが勝つところを、篤と見させて貰おう」

いつも通りの口調で話す。
さらにはクレア。

「あ、あの……わたくしのせいで皆さんに迷惑を掛けてしまい、申し訳ありません」

ペコペコ頭を下げるクレアに、誰もが気にするなと声を掛ける。

「死なないでください。それだけが私の願いです」

自分の責任でこうなってしまったからこそ、皆には死なないでほしい。
そして隣、クリス。

「婚前旅行でこんなことになるとは思っていなかったのと、イズミがふざけずに終始真面目ということで違和感全開なのが気になる今

日この頃なのですが……」

苦笑するクリス。

優斗、和泉、フィオナ、レイナが笑った。

「皆さんが勝ってくれれば、忘れられない最高の思い出になります。頼みましたよ、親友」

優斗を見るクリスに彼は一つ、頷いた。

5番目は副長。

「先ほどはあのように言いましたが、それでも願うことを許されるなら……」

彼らの無事以外に願っていいのだとしたら。

「勝ってください。ああいった手合いに優勝させないでください」

騎士として、武人としての誇りが汚れる。

ラスターは副長に大きく頷く。

「あんな連中に勝たせるわけにはいかない！　叩っ切ってやる」

誰もがお前には無理じゃ、とは思ったが威勢だけは誰もが買っていた。

笑いながら優斗が続ける。

「ハッピーエンド至上主義者は、結構傲慢なんだ」

誰も欠けさせないし、誰も何も失わせない。

「今回もハッピーエンドにするよ。例え何をしようとも、ね」

決意の優斗の言葉。

レイナは頼もしさを感じながら、最後の言葉を口にする。

「私は一昨年も去年も優勝できなかった」

時の運の善し悪しではなく、実力で負けてきた。

「けれど今回、やっと手が届きそうなんだ」

特に傷つくこともなく、勝ち上がってこれた。

「良いメンバーに巡り会えたと思っている」

それは優斗とラスターに限ったことではない。

「師である副長が引率だったことは助かり、フィオナが予備選手とはいえ一緒に来てくれたことは嬉しかった。クリスとクレア、友人が見てくれているのは心強い。ラスターは……まあ、馬鹿さ加減には呆れるところはあるが、頑張っているしな」

あまりの物言いに笑い声が漏れる。

「ユウト。お前がいなければ私はこの実力になることはできなかった」

明確に目指すべき相手。

いつかはライバルと呼ばれたい相手――優斗と修。

「そしてイズミ。お前がいるから私は全力で戦えるんだ」

彼に対しては、これだけでいい。

本当はもっとたくさん、言いたいことはあるけれど。

自分と和泉には不要だ。

「もちろん結果はどうなるか分からない。負けてしまうかもしれないし、勝つかもしれない。内容も無残に負けるのか、それともどこかの誰かが無双するのか、全く予測がつかない」

未来は確定していない。

「けれど、どんな展開でも私は皆のために、自分のために喜んで剣を振るう」

傷ついた友人のために。

願うべき目標のために。

「だから今、私が言うべきは一つ」

ずっと言い続けていた言葉を、今一度……声にしよう。

「優勝するぞ」

『さあ、決勝の上がったのはこの2チーム！』

リング上にてリライトとライカールの代表が向かい合う。

『ライカール！　悪夢と言わんばかりの勝ち上がり方に誰しもが恐怖している！　今度も相手を同様にしてしまうのか！？』

アナウンスが大きく煽る。

『対するは前評判を覆し、圧倒的な実力を持って決勝まで勝ち進んできたリライト。正当な闘いは観客の心を鷲掴みし、会場の８割以上はリライトの応援だ！』

レイナやラスターが睨み付ける中、ナディアが軽やかに言った。

「提案をしてあげるわ」

「……なんだと？」

「決勝なのだし、少しは観客を楽しませなければならないでしょう？」

だから、と。

「1対1。他は手出ししてはいけない。どうかしら？」

「信じられるものか！！」

ラスターが反抗するが、ナディアがゴミを見るような目つきをするだけだ。

「雑魚は口を開かないで。あくまで情けで言われていることを知りなさい」

そう言いながら、すでにリライトが提案に乗ったような言いぶりをする。

「こっちの1番手は私の側仕え、騎士ラファエロを出すわ」

「ならばオレが――！」

ラスターが先ほどの反抗も忘れて名乗り出ようとするが、レイナが手で制した。

「私が出よう」

すっと一歩前へ出る。

「相手が騎士だというのなら、私が出なければなるまい」

将来、騎士を目指す者だからこそ。

「……そうか。貴公が出てくるか」

ラファエロが剣を抜く。
対してレイナも剣を抜いた。
審判が慌てて開始を宣言する。

「貴公が出てくるならば騎士同士の闘いだ。正々堂々――」

互いに構える。

「我が願いを賭け」

「我が使命を賭け」

ぐっと手に力を込める。

「リライト、騎士習い――レイナ＝ヴァイ＝アクライト」

「ライカール第2王女側仕え筆頭騎士、ラファエロ・アクサス」

「「　参る！！　」」

◇　◇

「なぜレイナさんが？」

観客席からクレアの肩を抱きながら、クリスが疑問を呈した。

「純粋な実力順で出ようとしたのでしょう」

副長が手に力を込めながら答える。

「ラスターさんは？」

「ラスター・オルグランスでは殺されます。おそらくはレイナやユウト様が助ける間もなく。剣技で相手の騎士に対応できるのはレイナと、本気を出したときのユウト様だけでしょう。ラスター・オルグランスでは荷が重すぎる」

「そうですか……」

「ならば純粋な剣の勝負になるということか？」

「……おそらくは。相手の騎士の全力を見たわけではありませんが、彼は魔法を主とした闘い方はしないはずです」

だからこそレイナが出たとも言える。

「……しかし、あいつらは一体どういう考えを持って、あの提案をした？」

「なぶり殺しを見せしめようとしているのか、それともまた、別の考えを持っているのか……判断がつきませんね」

副長でも予想はつかない。

真っ当な連中じゃないということは分かっているのだが。

「あれほどの騒動を起こしたのだ。まともに終わるとは考えられないのだが……」

と、和泉はリングを見渡すと、不意に違和感を覚えた。

「ん？」

「どうかしましたか？　イズミ」

「優斗が……見ているだけだ」

リングの端で、ラスターと共に戦況を見ている。

「何か問題が？」

クリスが首を捻る。

疑問に思う必要性はない。

現に今、戦っているのは二人だけだ。

「言い方が悪かった。ただの見学になっている」

そこそこ気は張っているだろうが、優斗にしては警戒心が薄すぎる。

――なぜだ？

この状況下で優斗がどうしてあんな様子になる？

和泉は少し考える。

「……」

「あの、それのどこがいけないのでしょうか？」

難しい顔をする和泉にクレアが問いかけた。

「どういう意味だ？」

「騎士同士の闘いに手出しは無用と思っているのではないでしょうか。ですからユウト様は見ることに徹していると思います」

何気なく、当たり前のように言ったクレア。

「――っ！」

けれど和泉は、まさしくクレアの言葉から納得させられる答えを得た。

「……そういうことか」

「イズミ？」

理由が分かった。

優斗が警戒心を薄めてしまった理由。

確かに言っていた、と和泉は納得する。

「優斗は『騎士同士の闘い』という言葉に、無意識の信頼を置いている」

ああ、そうだ。

誰だって思うだろう。
どれだけ自身が怒っていても、どれだけ相手が汚くても、騎士同士の闘いとなれば“誰も手出しをしない”という不文律が昔から出来上がっている。
気高く、尊い闘い。
過去、現在、未来、異世界を通じて共通概念。
闘いの場にいればこそ、余計に“不文律を犯してはならない”と無意識に思っていることだろう。

「だから今、あいつは普段と同じくらい警戒心が薄くなっているのだろうな」

相手にとって有利となり得る予想外の副産物だ。

「……変な言い方になってしまうが、何か起こるなら優斗が事前に危機を感じ取れるぐらいの大事であってくれ」

◇　◇

互いに隙を窺い続けながらの攻防。
薙いでは受け、振り抜いては避ける。
すでに打ち合い続けて5分。

「さすがだな」

「貴公こそ」

現状、レイナとラファエロは同等のせめぎ合いをしていた。

「しかし、このままではラチがあかないな」

レイナはふっ、と笑う。

「ギアを一つ、上げよう」

「なに？」

「行くぞ！」

先ほどよりもスピードの増した横薙ぎ。

「――っ！？」

本当に速度が上がったことに驚く相手だが、すぐに修正をする。

しかし、遅い。

レイナの怒濤の攻めに防御を余儀なくされ、だんだん後退させられていく。

そしてリングの端、ライカールのナディアとジェガンがいる場所に近付いていっている。

その時だった。

レイナが上向きに振り抜いた剣が衝撃を与え、ラファエロの体制を崩す。

――崩した！

その隙を見逃すレイナでもない。

上段から振りかぶる。

「もらった！」

そしで切りつけようとした瞬間、あと一歩で勝利という瞬間。

「――なっ！？」

全く意図していない、別の場所から。

完全なる不意打ち。

豪風がレイナの身体を切り刻んだ。

◇　◇

優斗が異変に気付いた瞬間には遅かった。

巧妙に動きを隠し、ここ一番というタイミングで瞬時に魔法と精霊術を発動させた。

「――なっ！？」

４元素最速の風がレイナに襲いかかる。

レイナの背後を見れば炎玉。
さらにはナディアが何かしら詠唱を唱えているのが見える。
おそらくは上級でも高威力の魔法。
反撃させる間もなく殺すつもりだ。

「……くそっ！」

優斗は吐き捨てる。
図ったかのようなタイミングだ。
距離が離れすぎている。
レイナが押していたのもある。
優斗が『騎士同士』という言葉に憧れとも言うべき納得をしてしまったことで、気を抜いたのもある。
明らかに向こうが仕掛けるにはベストのタイミングだった。
いくら優斗でも追いつける距離ではない。

『悪夢の王の一片よ』

優斗は唱えながら駆け出す。

『世界のいましめ解き放たれし凍れる黒き虚無の刃よ』

全速力で走る。
2撃目となる炎玉には間に合った。
が、完璧に防げるほどの魔法は使えない。
軽くしか風の魔法を纏わせることのできなかった右手を犠牲にして、炎玉を弾く。

『我が力、我が身となりて共に滅びの道を歩まん』

激痛が右手に走る。
が、右手一本の犠牲ならば容易いものだ。
視界の端にはナディアが今にも魔法を放とうとしている。

『神々の魂すらも打ち砕き』

できる限り速く。
最速で紡ぐ。
そしてナディアの魔法が放たれると同時に、言霊は完成した。

『神滅斬』

左手に生まれ出る漆黒のバスターソード。
それを優斗は地面に突き刺した。
瞬間、閃光が優斗たちに放たれる。
けれど、優斗の眼前にある漆黒の剣を前に裂ける。
僅か5秒ほどの一撃。
されど高威力の魔法を防ぎきる。
目が眩むような光が収まっていく。

「ぎりぎりセーフ、か」

優斗は魔法を解く。
正直な話、反射的に思い付いたのがこれだけだった。
なので今回『神滅斬』を防御として選んだ。
ただ、良い判断だと思っている。
相手は自分がやっていることに集中して優斗の詠唱を聞いてもいないし、光が収まる前に魔法を解いたことで姿形も見ていない。
つまりは優斗がどうにかこうにか防いだとしか思っていない。
基本的に派手な神話魔法に置いて、剣という形を取る『神滅斬』の

利点だ。

――でも、和泉に完全版の詠唱を教えて貰っててよかった。

しかも形状も図で解説してもらったので、さすがに記憶の底から思い出して失敗はしなかった。

優斗が後ろを見れば、レイナはかなりのダメージを喰らってはいるものの意識ははっきりとしている。

さらに後方ではラスターも健在だ。

「ごめん。完璧に失策だった。騎士同士が正々堂々って言葉に油断してた」

「……いや、ありがとう。言っておくが断じてお前のせいではない。誰が『騎士同士の闘い』に手を加えると思うものか。むしろ私に一撃だけしか与えさせなかったユウトを皆が賞賛するよ」

「そう言ってくれると僕も助かる。怪我は大丈夫？」

「問題ない」

とは言っているが、全身ズタボロだ。

全身至る所に傷を負っており、衣服が赤く染まっている。

けれどレイナはあらん限りの気力を持って吠える。

「どういうつもりだ！！」

騎士同士の闘いだったはずだ。

誰も手出しをしないという約束だったはずだ。

怒りで手が、指が震える。

けれどもナディアたちはレイナの怒りを嘲笑う。

「貴方たちがあまりにもつまらないからやったのよ」

「ほんと、見てるほうがかったるいんだよ」

ナディアはさぞかしつまらなそうな表情をしている。

「いいじゃない。どうせ貴方たちは私に勝てないんだから」

「なんだと!?」

「なんて、嘘よ嘘」

ナディアはイタズラが成功したような笑みを浮かべる。

「アクライトは唯一私たちに一矢ぐらいは傷つけるかもしれないから、真っ先に潰そうとしただけ」

ネタバラシを楽しそうに告げてくる。

「最初から予定していたことだし」

「最初から、だと?」

レイナの眉がつり上がった。

ラファエロを睨み付ける。

「貴様は騎士としての誇りはないのか!?」

「戦場に美学など存在しない。騎士の矜持など持っているだけ邪魔なものだ」

事も無げにラファエロが言う。

「違う！　貴様の言うとおりならば騎士が存在することもない！」

自分が目指していることもない。

「騎士とは時に敵からも表敬を受ける素晴らしき武人だ！　義を尊び、誇りを重んじているからこそ尊敬と憧れを受けるのであろう！？」

「笑わせる。主君の望みを叶えることが俺の義であり、何を賭しても遂行することこそが誇りだ」

否定するラファエロ。

怒りが増して震える場所が右手どころか右腕全体になる。

「そんなものが……そんなものが騎士であってたまるかっ！」

「それは貴公と俺との騎士道の違いであろう？」

再び、ラファエロは構える。

「俺が間違っているというのなら勝ってみせろ、アクライト」

そして後ろの2人が嘲笑。

「もっとも、その様子じゃ無理だろうがな」

「諦めてラファエロに殺されたら？」

裏切った張本人たちのくせに、何も悪いことはしていないと言わんばかりだ。

彼らの姿にレイナは怒りがさらに増す。

増して、増して、増して、増して、増し続けた末に、

「……いいだろう」

覚悟を決めた。

再び、構える。

「だが残念だな。もう余計な茶々など入れさせはしない」

鋭くギラついた眼光がラファエロを貫く。

「一瞬だ」

右手を引き、半身にし、軽く左手で刀身に触れる。

「刹那に私の全てを賭けよう」

腰を落とし、力を貯める。

「だから諦めろ、ライカールの外道共」

紅く宝珠が輝き始める。

「呻いても遅い。嘆いても遅い。懺悔しても遅い」

宝珠の紅は刀身を徐々に染めていく。

「お前達の行いは完璧なる勝利への道ではなく、地獄へ通ずる道と知れ」

刀身から炎が溢れ出る。

過去最大の熱量が周囲に吹き荒れた。

「……馬鹿なことを」

ラファエロが一笑する。

「貴女ごときができるわけないでしょう?」

「アホか、お前は」

ナディアとジェガンが続いて嘲笑する。

が、レイナは鼻で笑った。

「馬鹿なこと? できるわけがない? アホか? いや、違う。これは予言だ」

勘違いをしている。

彼らにとっての“地獄”を体現するのは自分じゃない。

自分など優しすぎる。

「何故、正々堂々と戦わなかったのかと。何故、謀ってしまったのだと。何故、傷つけてしまったのかと。貴様らはこれらを胸に、恐怖を携えながら自問自答することになる」

彼らは決して怒らせてはいけない化け物の尾を踏みにじった。
しかも救えないことに、踏みにじることを当たり前の権利だと思っている。
化け物が激怒するのも必然。

「まずは貴様からだ」

しかし、この男だけは自分が仕留めよう。
彼に任せきりになることだけはしない。
この憤りを全て、叩き込むことを誓う。

――主のために問答無用で人を切りつけることが、主のために謀ることが騎士だというのなら。

その在り方を否定してやる。

――決意は胸に。

やるべきことも定めた。
レイナは相対している人物に向かって、殺気を込める。

「立ち向かうか？　偽りの騎士よ」

◇　◇

「あの……馬鹿」

レイナのしようとしていることが読めて、和泉は額に手を当てた。

「どうしましたか？　イズミ」

「会長のやつ、全て使う気だ」

この言葉で理解できたのは……クリスだけ。
他は全員が疑問のまま。

「何をですか？」

代表して副長が訊いてきた。

「俺が施した改造の全てを、だ」

「イズミさんの改造というと、あの魔力を炸裂させるやつですよね？」

「それもだが、もう一つある」

和泉が施した改造は二つ。
一つはフィオナが言ったもの。
もう一つは、全く別だ。

「使い方としては神話魔法に近いものがある。言葉によって枷を外し、使う魔法だ」

ただ、似ているというだけで神話魔法には到底及ぶものでもない。

「4段構造になっていて、一つの言葉を紡ぐたびに順に枷を外すように作ったんだが……」

つまり制限をつけているものなのだが。

「全部外す気だ、会長は」

「何か問題が？」

「反動が強すぎる」

だからこそ制限をさせた。

「魔力を体内に循環させ、肉体の強化――と共に脳にある身体のリミッターを外させる魔法だ。この世界にある肉体強化の魔法は脳のリミッターを外すだけだから、火事場の馬鹿力と変わらない。そして数秒で限界が来るからこそ、使う者はほとんど存在しない」

ほとんど失われた魔法に近い。

「だが、属性付与の応用で宝珠に送った魔力を身体に還元させられるように上手いこと改造できた」

和泉は指を順に立てていく。

「第一段階は力の強化。第二段階は速度の強化。第三段階から第四段階は脳のリミッター解除だ」

その中で問題点となるのは、２つだけ。

「まだ、第一と第二だけならいい。特に問題はない。けれど、それに加えて脳のリミッターまで外したら……今までの肉体強化の魔法と同じだ。すぐに限界が来る」

リミッターというのは、脳が身体を傷つけないために制限してものだ。

それを魔法で外すのだから、当然反動は来る。

しかも今は全身に傷を負っている。

健常時の比類ではない。

「それでも、そうするとレイナは決めたのです」

それは誰かのために、ではなく。

自分と和泉たちのために。

「……しっかりと見てあげてください。レイナの勇姿を」

「ああ」

◇

◇

膨れあがる相手の殺気は肯定の証。
だからレイナは錚々と。

「求めるは朱華、闘いの歌」

蕩々と。

「希うは閃光の狭間」

言葉を口にする。
続く言葉に和泉は怒るかもしれない、と小さな笑いを零す。

「願うるは永遠の刹那」

けれど、紡ぐのを止めはしない。
魔力が体中を巡る。
体外にまで吹き出るほどの魔力が相手を威圧する。

「遍くを携え、天井より紅く染め上げるは我が一刀――」

見据え、呟くは最後の枷を外しきる言葉。
深紅に染まる愛剣の名。

「曼珠沙華ッ！！」

瞬間、レイナの身体が霞む。
相手が知覚するのに間に合わないほどの速度で飛び込み、右手の剣で相手を穿つ。
さらに剣に炎の属性付与と魔力の炸裂。加えて捻りを加える。
空気が捻れ渦が生まれるほどの回転。

――なんだったか。『牙突』とは別の名前だったな。この穿ち方は。

単純に牙突2号でいいじゃないかと言うレイナに。
和泉はまた、よく分からない話をしながら「別物なのだ」と言っていた。
捻るから、さらに威力が加わるのだと。
そして牙突にこんな技はない、と。

――確か名前は。

ブラッディー・スクライド……だったか。
格好悪い名前だし、意味が良く分からなかったが、和泉が満足そうにしていたのだから、別にその名でいいかと思う。

「はぁぁぁッッ！！」

だからレイナは放った。
『フォローすることしかできない』と告げた和泉が。
こちらが呆れるほど懸命に教えてくれたこの技を。

「――ッ！」

悲鳴すらも許さない、刹那の瞬撃。

突きのあり得ない速度、捻られたことによって増す貫通力、そして炎と炸裂を携えることによって生まれた破壊力。
全てを重ね合わせた、まさしく『一撃必倒』というべき威力の一撃が、ラファエロを大きく広がったリングの後方へと、呻くことすらも許さずに吹き飛ばした。
誰もが彼女の勝ちを見た瞬間だ。
歓声が大きく沸き上がる。
誰もがレイナの名前をコールする。
本来ならば、その歓声に応えることだろう。
けれどレイナには出来なかった。

「……う……くっ……」

立つのが精一杯だった。
全力を使い切った。
持てる力以上を使い、反動で身体がギシリと軋む。
身体が崩れ落ちそうになるが、懸命に堪える。
まだ、しなければならないことがあった。

――見ていてくれ。

自分はこれが大会最後の闘いだ。
ならば最後の最後。
勝ち名乗りまで、しっかりと名乗れ。

――見ていてくれ。

ゆったりと震える手を上に持ち上げ、剣を天高く指した。
沸き上がり、誰もがレイナの名前を叫ぶ中、彼女の視線は……一人の男を捕らえる。

「……私の……勝ちだっ！！」

遠く、姿は分かれども視線がどこを向いているかは分からない。
しかし、きっと自分の姿を見てくれているはずだ。
なればこそ、相棒に対して無様な勝ち名乗りは許されない。
堂々と。
勝利を宣言する。

――最後の私の見せ場を、しっかりと見ていてくれ……イズミ。

伝説の再来

ナディアは不機嫌になる。

「あの程度の雑魚に負けるなんて、恥を知りなさい！」

遠方で倒れているラファエロにトドメとばかりに地の魔法で追撃を加える。

あまりの酷さに観客から大ブーイングが起こる。

「うるさいわよ！！　会場の雑魚共も文句があるのならかかってきなさい！」

結界魔法で守られている観客席に火の上級魔法をぶち当てる。

一瞬にして観客のブーイングが止まった。

「出来ないわよね。神話魔法に一番近いと言われている私に適うわけないんだから」

そしてあざ笑う。

が、すぐに矛先は優斗たちに向かった。

「リライトの雑魚共。せっかく無傷で勝ち進んできた私達に傷をつけてくれちゃって……。しかも雑魚ごときが私の魔法を防ぐし。ミヤガワとアクライト、私の気分を害した罪は重いわ。前にも言ったとおり貴女たちの大切な者も全て殺してあげるわ」

◇　◇

「ライカール王。我が国の民を平然と殺そうとする。それが貴国のやり方か？」

一方で、リライト王は賓室で大会を眺めているライカール王に食って掛かっていた。

「勝負事に正々堂々も卑怯もない。勝つ以外には何の価値もない」

「彼女の言葉は偽りなく、事実として彼らの親しい者すら殺そうとしているのだろう？」

「問題があるのか？」

事も無げに告げるライカール王。

「力こそが正義であり、全てだ。別に他国に攻め入ろうというわけではない。私は力が無ければ何の意味も無い、ただの悪だと教えてきただけのこと。故に彼らの大切な者が殺されるというのは、その者たちの力がないだけ。守れない己を恨め」

この教えに何の異論があるというのだ。

「力で覇を唱えれば、いずれ力で全てを失う」

「口だけでは何とでも言える。ならば力に対して力で対抗してみせよ」

挑発するようなライカール王に、リライト王は眉根を揉みほぐすと……言った。

「……いいだろう。我が国の人間を嘗めるなよ」

◇　◇

ナディアの物騒な物言いを無視しながら優斗はレイナを抱えてラスターのところへと向かう。

途中、優斗は遠方の一室にいる王様を見る。

遠目からでもはっきりと分かるほどに頷かれた。

「本当に久々に……力を使い果たした気がする」

リングの端でレイナは腰を落とす。

「……悪いが私はここまでだ。魔力もほとんど無い」

あの刹那の一撃に全てを使ってしまった。

「本当は正々堂々と……戦って……」

楽しんで。

「最後まで、お前と共に立っていたかった。もっと高らかにイズミが託してくれた武器を掲げ……勝ち名乗りを上げたかった」

今になれば、それが出来ないのが悔しい。

「……けれど……」

この願った未来を無くしてでも。

「許せなかったんだ」

騎士の名を汚したことも、仲間を傷つけたことも。
彼らの行為を許してはならないと胸の内が叫んだ。
正義ではなく、理念でもなく。
自らの心が否定しろと訴えていたから。

「大丈夫。ちゃんと分かってる」

優斗がレイナの肩をポン、と叩く。

「良い啖呵の切り方だったよ。おかげで僕も覚悟が決まった」

「お前に任せるのは、申し訳ないとしか言えない……」

自分は3年で責任を全うする立場だというのに。

「でも、無理だから……」

全て使い切ってしまったから。

「……後は……頼んでいいか？」

済まなそうに告げるレイナに、優斗は笑みを一つ。

「任せて」

「……あんな奴らに負けないでくれ」

「“今の僕”が負けると思う？」

「……ふふっ。それもそうだな。なら、私たちを優勝させてくれ」

「終わったらパーティーだから、すぐに霊薬でも飲んで治さないとね」

軽く告げる優斗。

「ゆっくり休んどいていいよ」

「ああ」

「そして見てて。リライトが優勝する瞬間を」

「……ああっ！」

最後にハイタッチを交わす。

バトンタッチは、これで完璧だ。

「ラスター。レイナさんを守りながら治療できる？」
普段と違い、すでにラスターを呼ぶときに“さん”は抜けている。
「貴様……一人で相手取るつもりか？」
「もちろん」
当然のごとく言う優斗にラスターが怒鳴る。
「バカを言うな！　学生最強の精霊術士と魔法士だぞ！　貴様一人で何が出来るものか！　先ほどは偶然防げたとしても二度目はない！　無駄に死ぬだけだ！！」
「……突然どうしたの？」
いつもと似たような物言いだが、何か違う。
違和感があった。
「言いたくはないが……貴様がこれ以上傷つけばフィオナ先輩が悲しむ。分かりきっている結論をわざわざ証明する必要はない」
優斗の焦げた右腕。
煤けて所々に焦げた地肌が見える右袖を見ながら。
悔しそうに、心底悔しそうにラスターが言う。
が、優斗は嬉しそうに笑みを携えた。
「ラスター、ありがとう」

まさか心配されるとは思ってもいなかった。

「でも……ここは引かない」

決めたから。

化け物と称された圧倒的な力と。

悪魔と見紛うべき自らの本質を以て。

魔王の如く蹂躙すると。

「あのふざけた連中を逃すことはしない」

「貴様を殺すと言われたからか？」

「違う。僕のことなんてどうでもいい。けれど僕の仲間に対して、あいつらはやっちゃいけないことをした」

そうだ。

一度ならず何度もやった。

「親友たちを傷つけ、親友の婚約者を殺そうとし、皆を殺すと嘲り、裏切りを持ってレイナさんを倒そうとした連中を……許すことなんてしない」

「だったらオレも一緒に――ッ」

「大丈夫。“あの程度”の連中、二人がかりでやるまでもない」

余裕を浮かべて優斗はリング中央へと歩んでいく。

そこにはすでに、ジェガンがいた。

「ラスター、悪いが治療してくれるとありがたい」
身体をぐったりとさせているレイナが言う。
「しかしレイナ先輩！」
「安心しろ。ユウトがあいつらに負けるはずがない」
「けれど一番弱いやつですら、押されていたとはいえレイナ先輩とやり合えるんですよ！！」
ならばそいつよりも強い二人を相手となれば。
「あいつごとき、すぐやられるに決まってます！！」
「……少し変わったと思えば、そういうところは変わらないんだな、お前は」
レイナは大きくため息をつく。
「信じないかもしれないが、私たちの中で一番強いのはユウトだ。

だから私は送り出せる」

「冗談……ですよね？」

「悪いが、この状況と状態で冗談を言えるほど愉快な性格はしていない」

一歩間違えれば殺される事態だというのに、自分より弱い者を送り出せるものか。

「けれどあいつは多少なりとも精霊術は使えるとしても、上級魔法なんて風を一つ使えるぐらいじゃないですか！　勝つために動いたところで高が知れてる！　それを成績が物語ってる！」

「ラスター。前から言っているだろう。学院の成績なんて物の役にも立たん」

何度も言ってきたはずだが、こういう場だからこそ、もう一度言おう。

「今までの試合ですら、あいつの実力からすれば氷山の一角」

手抜きと思われても仕方ない。

「これからお前が見るのは、この世界で遙か高みにいる人物の実力だ」

それこそ、強さを求めるものが見逃してはいけない。

「色眼鏡をかけず、しっかりと見定めろ。ユウトの強さを」

「どうした？　二人して来ないのか？　別にいいんだぜ、約束破ったのはこっちだし、二人で来ても」

「お前達こそどうした？　井の中の蛙ごときが調子に乗って、僕と一人で勝負しようだなんて正気か？」

優斗が言葉を返す。
いつも彼らが言っている言葉を言われただけなのに、カチンと来たようだ。

「バカじゃねーの？　さっき精霊術を同じ精霊術で相殺できたからって何いっちゃってんだよ。お前みたいな雑魚に二人も三人も集まったらすぐに殺しちまうだろうが。オレはいずれ大精霊すら召喚し、マクスウェルと契約する男だぞ！　魔法も半端、精霊術も半端のテメエがオレに勝てる道理はねえんだよ！！」

と、ここでジェガンはあることを思い付く。
振り向いてナディアに言った。

「おい、ナディア！　見せてやれよ、力の違いってやつをよ」

ジェガンの言っていることにナディィアが面倒そうな表情を浮かべる。
が、自分の魔法を防いだことと今の物言いにはイラっときたのも確かなので、

「仕方ないわね」

そう言ってはるか後方へ何かを投げる。
すると、投げたものから巨大な六芒星が広がった。

「召喚か」

前に一度、見たことがある。
あの時はカルマという魔物だった。
今回は、

「ギガンテス。私の国が所有する魔物よ」

遠く、遠く。何もない野原に。
３０メートルはあろうかという巨人が、圧倒的な存在がそこにそびえ立っていた。

「わずか二日で小都市を滅ぼすと言われているＳランクの魔物。倒すには手練れの戦士が２０人、二日掛かりになるわ」

当然、Ｓランクの中でも上位に位置する魔物だ。

「まあ、どっちにしても貴方はジェガンに殺されるんだし、関係ないわよね」

「どうだ？　ビビッたか？　けど棄権なんかさせねぇぞ。あんだけ大事言って逃げるわけねぇよな」

これで優斗が恐れると思ったのだろうか。
強気な態度をさらに前面に示す。
だが、甘い。

「今更、魔物ごときで驚くこともない。それよりもずっと気になってたんだがお前、学生最強の精霊術士とか言われてるらしいけど、お前程度の精霊術で学生最強とか言われて……恥ずかしくない？」

まるで後ろの存在を無視するように言う優斗。

「本当の精霊術っていうのを教えてやるよ」

「……殺す！」

優斗の挑発にキレたジェガンが幾数もの魔方陣を展開する。
火、水、地、風。
いくつもの精霊術をぶつけてくるが、優斗はいざこざの時のように、全て同じ威力と同じもので相殺する。

「ヤロウ！」

今度は同時に８つ、魔方陣が広がる。

「地水火風。その全てが２つずつ、しかも上級魔法と呼べるに値する威力だ。防げるもんなら……防いでみろ！！」

飛んでくるは８つの精霊術。

その全てを喰らってしまえば、さしもの優斗とて無事では済まない。
だが、優斗は避けることもせず、ただ……告げる。

「四大」

瞬間だった。
優斗を守るように4体の、地水火風の精霊が眼前に現れた。
薄く紅き猛々しい男性の姿を模した、薄く青き凛とした女性の姿を模した、薄く緑の清廉の女性を模した、薄く可愛らしい土竜の姿を模した大精霊が。
彼らは一つとして優斗に届かせることなく、全てを無きものとした。
そして優斗の背後に控える。

「……だい……せい……れい？」

ジェガンの前に掲げていた腕が……予想外の光景にがくんと下に落ちる。
観客席のざわついた声がリングにも届く。
ジェガンも心中は同様だった。
目の前の状況を信じられない。
信じたくもない。
だが、現実として見える。
そこにいる。
感じ取れる。

「見て分からないか？　感じられないか？　ここにいるのが大精霊だと」

「ふ、ふざけんな！　オレですら召喚できないのに、お前みたいな雑魚がどうして召喚できる！？」

しかも詠唱なし。
さらに名を呼ぶこともせず、一括りに纏めて召喚するなど。
常識外れにもほどがある。

「言っただろ？　本当の精霊術の使い方を教えてやるって」

常々彼らが優斗たちに向けていた視線を、優斗は同じように向ける。

「何がいずれ大精霊を召喚する男だ。お前は精霊に命令と強制しかしてない。そんな奴が大精霊を召喚できるわけないだろう？」

「ば、馬鹿いってんじゃねぇ！　精霊ってのは道具なんだよ！　道具をどう扱おうが所有者であるオレの勝手だ！」

同時、後ろにいる大精霊からの意思が優斗に伝わってきた。
深く強い、憤りの感情。
優斗は彼らの気持ちを代弁する。

「調子に乗るなよ、三下」

ほざくな。

「お前には二度と精霊術を使わせない」

◇　◇

「まさか……」

優斗がやろうとしていること。
そして、それができるであろう精霊の可能性をフィオナは思い付く
同時に和泉も同じ考えに達したらしい。
頷いた。

「呼ぶつもりだろう」

「けれど、神話魔法ならまだしも……あれは……」

過去、一人しか呼ぶことを証明できたものはいない伝説の存在。

「前にフィオナが傷ついたときよりはマシ……だがな。俺、クリス、
クレアが傷ついたことに加えて度重なる俺たちへの悪態とレイナへ
の裏切り。さらには精霊への侮辱。優斗がキレる中でも最上級に値
する。ブチ切れていないだけマシだ」

だが、それでも。

「しかし最上級にキレているからこそ、そこまで頭が回っていない。
相手の土俵で完全無欠、慈悲無く叩き潰すつもりだ」

力、格の違いを見せつけるつもりなのだろう。

「それに王様がどうにでもしてくれる、と言ったのを信じているの
だろう」

「でも……」

いくらなんでも、この観衆の中で。

呼んでしまえば言い逃れも情報統制も不可能では無いか。

そうなると優斗がそばからいなくなってしまうのでは、とフィオナは不安になる。

だが、和泉は安心させるように言った。

「何も変わりはしない。例え王様がどうにもできなくて、何と言われようとも優斗は変わらずフィオナの側にいる。それが優斗の願いだ」

だからどんな手を使ってでも優斗はフィオナの側に居続ける。

「そうだろう？」

確信を持った和泉の問いかけ。

当然のように落ち着いている姿に、少し嫉妬が浮かび上がる。

――羨ましいですね。

親友とはいえ、そこまで信じ切れているのは。

優斗への理解度として卓也にも和泉にも、そして当然の如く修にも自分は劣っている。

まだまだなのだな、と実感した。

――私も……信じないと。

今、ここで優斗の親友である和泉が優斗を信じているように。

自分も。
彼と同じように。
彼以上に優斗を信じよう。

「はい」

フィオナが頷く。

「二人とも、どうしたのですか？」

彼らの様子を不思議がったクリスが訊いてきた。
副長もクレアも怪訝な表情をしている。

「クリス、クレア、副長。しっかりと見ていろ」

これから優斗がやることを。

「蘇るぞ。過去一人しか使うことの出来なかった詠唱が」

次いで和泉のあとにフィオナが続けた。

「そして見逃さないでください」

彼らが証人。

「優斗さんが……」

嘘偽りなく。
冗談でもなく。

「伝説の大魔法士と肩を並べる瞬間を」

それは新たなる一ページ。

「リライトだけでなく、この世界――『セリアール』の歴史が変わる瞬間を」

◇　◇

「ハッ！　やってみせろよ！」

できるわけがないといきがるジェガン。

けれど優斗は無視して後ろを向いた。

「四大。少し防御を任せてもいい？」

尋ねる優斗に四大精霊は頷いた。

「ありがとう」と告げて、優斗はゆっくりと息を吸う。

『この指輪は御身の目。この指輪は御身の耳。この指輪は御身の口』

凛とした声が会場に響く。

優斗の足下に魔方陣が広がる。

『我が名は優斗。指輪の契約に基づき、この儀式を司りし者』

魔方陣から極光が溢れ、会場に四散していく。

『我、伏して御身に乞い願う。我、盟約を受け入れん。我、盟約を受け入れん。我に秘術を授けよ』

聞いたことのない詠唱。されども集まってくる精霊の気配。異変に気付いたジェガンが何かしら攻撃をしているが、優斗に届くことはない。

そしてジェガンの行動を誰もが気付いてもいない。

会場全ての観客が目の前で行われていることに惹き込まれていた。

『来たれ根源たる元素を統べる者。知恵を支配する者よ』

優斗はさらに集中する。

龍神の指輪が輝きを放つ。

『我が手の内に――――御身と、力と、栄えあり』

右手を大きく振り払うように広げた。

「来い」

統括する者。

「マクスウェル！！」

告げた瞬間、眼前に広がる魔方陣。
そしてそこから現れたのは――人の形をした大精霊。
まるで老いた賢者の様相を呈している老人は、召喚した者――優斗の姿を認める。

『久しぶりじゃの、契約者殿』

「悪いけど、冗談を言い合う精神状態じゃないよ」

『そうみたいじゃの』

マクスウェルが穏やかな表情を一変させる。

『して、用件は？』

「目の前の男、どう見る？」

問われてマクスウェルはジェガンへと視線を向ける。
蛇に睨まれた蛙のようにジェガンの動きが止まった。

『精霊たちが泣いておるわ。無理矢理使役され、朽ちていったものも数多くいる』

マクスウェルは蓄えたあごひげに触れる。

『とはいえ世界から見れば朽ちたのは少数。世界の均衡が崩れるわ

けでもなし、儂は特に何かをしようとは思わんが……契約者殿に見られたのが運の尽きよのう』

馬鹿だとしか言いようがない。

「マクスウェル。お前に願うことは一つ」

先ほど、口にした台詞。

「あいつに二度と精霊術を使わせるな。できるね？」

『おやすいご用じゃ』

優斗の願いにマクスウェルが両腕をパン、と叩く。
その手から光の輪が広がった。
たったそれだけ。
けれどマクスウェルは満足げに優斗に言った。

『これであの小僧に精霊が近付くことはない。無論、死ぬまでの』

◇　◇

「……なっ……あっ……」

目の前で起こっていることに処理しきれないラスター。
ジェガンが精霊術を使おうとしても使えずに動揺している姿が、事実として使えさせなくしたのだと知らしめる。

「何をそんなに驚いている？」

平然としているレイナ。
だが、ラスターはそれが信じられない。

「驚くにきまってるじゃないですか！　オレだって知ってる！　マクスウェルは過去に一人、伝説の大魔法士だけしか契約できなかった！」

「二人目がユウトというだけだろう？」

「……な、何でそんな落ち着いてるんですか！？」

「言っただろう？　世界の高みにいると。あいつが私たちの中で一番だと」

「あんなもん想定外ですよ！！」

騒いでいるラスターの近く。
観客席でも同様に戸惑いが生じていた。
「本物？」や「偽物だろう？」などとありとあらゆる声がリングにも届いてくる。
だが、一人の精霊術士が驚愕しながらも口にした。

「本物の……マクスウェル様」

ジェガンが本当に精霊術を使えていない。
目を凝らせば、本当に精霊が彼の周辺だけ存在していない。

「あのようなこと人間にはできない……。四大様でも二極様でも出来ない。精霊の主、マクスウェル様でなければ……」

そう言うと、精霊術士は自らの手をぎゅっと握ると、深々と頭を優斗とマクスウェルに下げた。

「貴方様は伝説の大魔法士――マティス様の再来」

どこの国の、どういう精霊術士なのかは分からない。
だが、彼女は紛れもなく頭を下げた。
ラスターが会場を見れば、事態に気付いた幾人かが同様に頭を下げている。
そのほとんどが精霊術士。
観客は、それであそこにいるマクスウェルが本物だということを信じる。

「……何で頭を下げて……？」

「ユウトの呼び出したのが本物のマクスウェルだと気付いたのだろう。マクスウェルは伝説の存在。そして『セリアール』の歴史上、二人目の召喚者が目の前にいる。その姿を自分の眼で見た伝統的な精霊術士は、頭を下げるだろうな」

「レイナ先輩は気付いてたんですか？　あいつがマクスウェルを呼べることに」

「まあ、来るときの馬車でな。ユウトのマクスウェルの説明が詳し

かったので、予想は付いた」

「いや、普通は付きません」

珍しくラスターがツッコミに回る。

レイナが笑った。

「それが付くんだ。ユウトの化け物っぷりを実際に見てしまったらな」

◇　◇

呆然としているのは副長、クリス、クレア。

「どうした？」

久々に呆けた様子のクリスに和泉が訊く。

「いや、ユウトとシュウが常識の枠外にいることは慣れているつもりでしたが、前情報なしのマクスウェルはさすがに少し驚かされました」

「……まあ、そうだろうな。俺も直接は言われていないが、軽く話を聞いて予想を付けていなければ少しは驚いただろう」

と、クリスの隣に和泉は視線を向ける。

「クレアはどうした？」

驚いた表情のまま、止まっている。

「……情報処理が追いつかなくて、固まってしまったようです」

クリスが苦笑した。
また副長も隣にいるフィオナに尋ねていた。

「本物……なのですか？」

「本物です。紛うこと無く精霊の主――マクスウェルです」

フィオナが断言する。
そして、その一言が副長の様子を一変させた。

「すごい……」

ぽつり、と一言だけ言ったと思ったら、

「すごい、すごいすごい！！　さすがユウト様！！　過去一人しか召喚できていないマクスウェルを召喚するなど！　ああ、やはりユウト様＆フィオナ様のファンをやっていたよかった！！　妻のフィオナ様でさえ素晴らしき使い手なのに、夫のユウト様は輪にかけて素晴らしい！！　夫婦揃ってこのような……。もう私、ファンクラブを作ります！　当然、私は会長にして会員ナンバーは1番です！」

「……はあ」

ぎゅっとフィオナの手を握るが、フィオナは若干引き気味。

「どうした、あれは？」

「感動のあまり、メーターが振り切れてしまったようですね」

変なものを見るような和泉と、困ったような様子を示すクリス。

と、ここでようやく副長も自分の失態に気付いたのだろう。

「……こほん」

一つ、咳払いをした。

「さて、ユウト様がマクスウェルを呼び出したのは驚きましたが……」

「驚きってレベルじゃなかったが」

「こほん！」

和泉のツッコミに再度、副長は咳払い。

「しかしユウト様が本気を出したと言うことは、これでこちらの勝ちは揺るぎないものとなったでしょう」

◇　　◇

「さあ、何してる？　マクスウェルも契約者もここにいるんだ。お前がマクスウェルと契約したいなら、すべきことは僕を殺すことだろ？」

一歩ずつ、ジェガンに近付いていく。

「……くそっ！　くそ、くそ、くそ！！」

何度も精霊を扱おうとするが、一向に使えない。
しかも大精霊を5体も引き連れて歩いてくる優斗に恐怖を感じる。

「喧嘩を売る相手、間違えたな」

告げながら、足が竦んで動けないジェガンの胸元へと手を当てる。
次の瞬間、

「――あがッ！」

何の前触れもなく吹き飛んだ。
優斗はジェガンが飛んでいった先を見ることもなく、ナディアへと視線を向ける。

「次はお前だ」

「……ふん。マクスウェルと契約したぐらいで調子に乗らないでほ

しいわね。精霊術士って、要は精霊がいないと何もできないんでしょう？」

暴言とも言えるべき言葉に観客から、さらなるブーイングが起こる。

「私は違うわ。ジェガンは先の見えない妄言を吐いていたけど、私はそうじゃない。私自身の力でギガンテスを従えさせているし、魔法だってそう。あと一歩で神話魔法に手が届くのよ」

誇るように言うが、優斗は表情一つ変えない。

「7人目の神話魔法の使い手に。しかも私ほどの若さで到達できそうなものは過去、存在しない。圧倒的な私自身の力を見せてあげるわ」

ギガンテスがいることに余裕を持っているのだろうか。

高飛車な態度は崩さない。

『どうするんじゃ？　契約者殿。契約者殿が望むのであれば、小娘も小娘の魔物も分解するか、もしくは隕石でも落として消滅させてやろうかの？』

「マクスウェルが認めた契約者は、あんな小娘や魔物に対して精霊術を使わないぐらいで負ける人物だと思ってる？」

当然のような言葉を返す優斗。

マクスウェルが笑った。

『ほっほっほっ。それでこそ契約者殿じゃ』

言いながらマクスウェルの姿が消える。

「四大もありがとう」

優斗の言葉に、四大はそれぞれ笑みを浮かべながら消えていく。

「マクスウェルが怖かったようだし、これで満足か？」

まるで喧嘩を売るような言い方。
ナディアが言い返す。

「誰が怖い！？　誰が小娘ですって！？」

「お前以外に誰がいる」

他にいない。

「お前ごときの魔法士が調子乗り過ぎなんだよ」

ジェガンもナディアもそうだ。
いずれ大精霊を使う。
いずれ神話魔法を使う。
どちらも“今”、使えていない。

「僕にとってはあの男もお前も何も変わらない、ただの雑魚だ。小娘と呼んで何が悪い」

優斗の圧倒的な挑発に、ナディアが吠える。

「ふ、ふざけないで！　やりなさい、ギガンテス！！」

ナディアの命令に後ろの巨人がゆったりと動き出す。
優斗は動きを見ながら、
――遅いな。
ただ、それだけを思う。
神話魔法は言霊が必要だ。
これだけ動きが遅いのなら、詠唱だって余裕だ。
ナディアは絶対的な自信を持っている。
精霊術を使わない優斗がギガンテスを倒せるわけがないと高を括っている。
「泣いて謝るなら今のうちよ。まあ、泣いたって許さないけど」
「そっちこそ大丈夫？　あの魔物、殺すけど」
「やってみなさいよ！」
挑発に次ぐ挑発。
優斗はその言葉を引き出すと、
「いいだろう。後悔はするなよ」
冷徹に告げた。
――ぐうの音も出ないくらいに殺してやる。
両手を揃えるように下に向ける。
そして紡ぐ。

言霊を。

『黄昏よりも暗き存在』

足下には魔方陣。

その光からは時折、炎が溢れ出ている。

ナディアは余裕を持っているのか、優斗を攻撃してこない。

『血の流れより紅き存在』

もちろん、魔方陣の外枠には結界とも呼べるべき防御がなされているのだが、彼女は間違った余裕を持っているが故にそのことを知らない。

『時の流れに埋もれし偉大なる汝の名において、我、今ここに闇に誓わん』

けれど、この瞬間から驚くべき魔力の奔流が優斗の手に集っていることに気付く。

『我等の前に立ち塞がりし全ての愚かなるものに』

しかし、何をやろうとしても、もう遅い。

『我と汝の力もて、等しく滅びを与えんことを』

次なる名で言霊は完成する。

『竜破斬』

優斗は両手を前へと差し出す。
収束された赤光。
それが解き放たれた。
赤光は一直線にギガンテスへと向かい、ぶつかる。
直後、観客席すらも揺らすほどの巨大な爆発が起こった。
全てを粉砕したと思わせるほどの威力。
煙が晴れるところを見る必要もないくらいに、圧倒的な神話魔法の力。
誰もが今の一撃でギガンテスが死んだと理解するのは当然だ。

「さて、と」

パンパン、と両手をはたく。
ナディアに視線を固定する。

「うそ……」

今、起こったことが信じられていないナディア。
けれども優斗は構わずに言った。

「二日で小都市を滅ぼす……だっけ」

逆に言うなら、二日掛けないと滅ぼすことができない。

「こっちは一撃。だったらどっちが勝つか、答えは明白だ」

軍配は優斗に上がる。

「残るはお前だけだな」

「で、でも！　そんなものを私に向けたら私は死ぬわ！」

さすがにあの威力を目の当たりにして、ナディアが恐怖に顔を強ばらせる。

「だから？　平然と殺そうとしているんだから、平然と殺されることぐらい覚悟しておけよ」

何を馬鹿なことを言っている。

「私は王族なのよ！！」

「関係ない。元はと言えばお前が原因だ」

「観客すらも巻き込むつもり！？」

「なら、巻き込まない神話魔法を使うだけだ」

「……えっ……？」

さらに続いて、言霊を紡いでいく。

何も出来ないのか、何もしないのか。

神話魔法を二つも使えるわけがないと信じたいのか。

優斗には分からないがナディアは動かない。

全てが紡ぎ終わり、優斗は光の矢を構える。

黒竜を殺した一筋の閃光。

『極大消滅呪文――メドローア』を元に創り出した『虚月』をナディアへと向ける。

「先に言っておく」

狙いは違わず、ナディアに。

「この魔法は事実、黒竜ですら無に帰す」

ということは、だ。

人の身ならば。

「防げなかった場合」

絶対的に。

紛うことなく。

「死ぬ」

淡々と。

事実だけを優斗は述べる。

「神話魔法まであと一歩らしいけど、その一歩に今、届くのか？

そして届いたとしても、ただの神話魔法じゃ届かない。神話魔法の中でもハイクラスの威力が必要だ」

優斗はさらに右手を引き絞る。

怪我をしていて刺すほどの痛みはあるが、無視できる。

故にどうでもいい痛みだ。

「吠えるならやってみせろ」

厳かに告げる優斗に対し、一向にナディアは動かない。
『学生最強の魔法士』だけあって、優斗の魔法が恐ろしいことだけは分かるのだろう。
とはいって、このままダラダラと時間を掛けるつもりもない。

「仕方ない。5秒だけ、時間をやる」

別に温情ではない。

「選べ。立ち向かうか、棄権するか、何もしないか」

そしてナディアに言葉が届いたと同時、優斗はカウントを始める。

「5」

威圧とばかりに、さらに魔力を込める。

「4」

優斗の表情は無表情。
蹂躙しているのに楽しそうな表情もせず、人を殺すのを怖がる表情もせず。
ただ、無感情。
それがナディアにさらなる恐怖をもたらす。
もし立ち向かい、勝てなければ殺される。
何もせずとも殺される。
けれども今、この状況で神話魔法を使えるようになるわけもない。
結論として彼の提案の一つ目と三つ目を選んだ場合、自分は死ぬ。
それを理解させられた。

「3」

「……します」

ナディアが何かしら言う。
しかし声が小さくて優斗には届かない。

「2」

「……棄権します」

それでも、優斗に届くだけだ。
カウントを続行する。

「1」

「棄権します！！」

今度は大きな声で、会場に響く声でナディアが宣言した。

「……」

優斗はナディアの棄権を聞き届けると、魔法を霧散させた。
目の前の恐怖が無くなったことにぐったりとへたり込むナディア。
優斗は彼女を一瞥すると、踵を返す。
そしてこの瞬間、リライトの優勝が決まった。
優斗はレイナたちのところに戻ると、ようやく無表情を解いていつもの表情にした。

「見てた？」

「当然」

観客の怒号のごとき歓声が優勝を実感させる。
ある程度、動けるようになったレイナと優斗がハイタッチを交わす。
次いでラスターとハイタッチをしようとした二人だが、

「えー……あーっ……」

何を言うべきか迷っているようだった。
だが、頭を振って迷いを振り切ると、

「これで勝ったと思うなよ！」

愛すべき悪役キャラみたいなことを言った。

「いや、試合には勝ったんだけど」

「ぬぐっ！」

呻くラスター。

「あははっ、最後の最後までこうなんて」

「……お前」

まさかの台詞とやり取りに優斗が吹き出し、レイナが呆れた。
最後の最後まで、ちゃんと纏まらなかったリライトチームだが、自分たちはこれで良かったな、と。
そう思えた。

トドメと祝賀と酔っ払い

控え室でゆったりと談笑しているリライト勢だが、

「ごめん、ちょっとトイレ」

優斗がそう言って立ち上がった。

「抜け出せるのか？」

霊薬を飲んで完全回復しているレイナが疑問を呈した。
大会の運営委員が寄せ集まろうとしている野次馬やその他諸々を抑えているのは、控え室の中でもよく分かる。
そんなところに話題の中心人物が姿でも見せたら大騒動になりそうな気がするのだが。

「精霊に協力してもらえばチョロいよ」

光を軽く屈折させてもらえば、あらま不思議とばかりに姿が見えなくなる。
優斗はひらひら、と皆に手を振って控え室を出る。

「さて、と」

光の精霊に手伝ってもらって姿を隠し、目的の場所へと歩く。
そして数分歩いて、たどり着いた。
周りに人の気配はない。
優斗は姿を現すと、ドアを開けた。

意気消沈している3人の姿が見える。

「えっ？」

「あっ？」

「……？」

急にドアが開いたことに驚くが、彼らは優斗の姿を認めると驚愕した。

「な、なんで！？」

ナディアが狼狽する。
まさかこんなところに優斗が来るなど、露にも思わない。

「まさか、あの程度で全て終わったとでも思ったか？」

優斗は彼らに近付いた。
それだけでナディアとジェガンが脅える。

「こっちは不安なんだ。負けた腹いせに不意打ちで仲間を殺されたら堪らないからな」

「……し、しないわよ。……だって私たちは倒されたし、棄権したじゃない……」

「オ、オレなんて精霊術が使えなくさせられたんだぞ！」

恐がりながら言い返す二人だが、何を甘いことを言っているんだと

ばかりに優斗は続ける。

「倒されたぐらいで、精霊術を使えなくさせられたぐらいで、棄権したぐらいで。たったそれだけで終わったと思うにはムシが良すぎるだろう？」

自分たちの行いを思い返してみろ。

「まだお前らから聞いてないんだよ、謝罪の言葉を」

言いながら、周りには他に誰もいないからと殺気を放つ。

ナディアの身体が震え始めた。

ジェガンとラファエロも恐怖で金縛りにあったように動けない。

「クリスと和泉を傷つけたこと。クリスの婚約者を殺そうとしたこと。僕らの大切な人たちを殺すと言ったこと。レイナさんを謀ったこと。全て謝っていない」

「……どうすれば……いいの？」

この恐怖から逃れたいためか、ナディアが訊いてくる。

「お前らが考え得る最大の謝罪をしてみろ」

「……さい……だい？」

「分からないなら、一つ案を出してやる」

優斗は地面を指さす。

「土下座しろ」

「……貴……様っ！」

一国の王女に対してあまりの言い草。
ラファエロが恐怖を抱きながらも剣に手をしようとする。
だが、

「や、やめなさい！」

慌ててナディアが止めた。
もし、何かしてしまえば末路は分かりきっている。

「ああ、安心していい。別に変な気を起こしても構わない」

そうしてくれたところで、何の問題もない。
ただし、

「3人で協力すればどうにかなるとでも思うならな」

出来れば、の話だ。

「お前らの言葉を借りれば、目の前にいる男に雑魚がいくら集まったところで勝てるのか？」

思うならやればいい。

「神話魔法もマクスウェルも召喚できる男を殺せると思うならな」

ナディアとジェガンの身体がビクリと跳ねた。

自分たちが“いずれ”と思っていたことを両方とも体現している相手。

“今”どころか未来永劫、そんな化け物を相手取ることができるわけもない。

「しっかりと考えろよ？　容赦はしないが僕はお前らと違って優しい。立ち向かえば殺すが、何もしないのなら圧倒的な恐怖を与えてトラウマになったぐらいで半殺しに済ませてやる。謝罪すれば無傷で終わらせてやる」

優斗は言う。

が、すでにこの状況が、ナディア達にとって半ばトラウマになるだろう。

「選択肢を与えてやるよ」

「……姫様を……王族を殺すというのか！？」

唯一、優斗の行ったことを知らないラファエロが食い下がる。

だが、お前は何を言っているんだとばかりに優斗は白い目を向ける。

「お前だってリライトの貴族を殺そうとしただろう？　目には目を。歯には歯を。脅しには脅しを返しているだけ。それに僕の言葉に偽りがないことは、お姫様が一番分かってるな？」

「……はい」

今でも思い出すだけで身体が凍る。

さきほど相対していたときの、無感情な表情と自分の命を石ころと同じ程度だと見据えた眼光を。

「こっちも時間がない。手早く決めろ」

優斗が急かす。

するとナディアは、すぐに二人に命じた。

「……ラファエロ、ジェイド。膝を着きなさい」

「……姫様」

「……私はまだ……死にたくない」

あれだけ殺す、殺す、殺すと言っていたナディアが、そんなことを宣いながら膝を着こうとする。

「今の発言にイラついたから、やっぱり殺そう」

「そんなっ！」

助かると思ったのに翻った絶望をナディアは一瞬にして味わう。

「冗談だ」

優斗が嘲るように笑う。

「でも、お前たちだって似たようなことをやっている。相手がどう思うのか知れて良かったな」

白々しく言い放つ優斗。

けれどナディアは怒りもせず、言い返すこともせず、安堵した。

“殺すのが冗談”だということに安堵した。
そしてあれほど汚されることを疎んだ衣服を地に着け、土下座する。

「……申し訳ありません……でした」

「何に対してだ？」

「……貴方様の……御友人を傷つけたこと……殺そうとしたこと…
…罵詈雑言を口にしたこと……謀ったこと。……全て……謝ります」

「二言はないか？」

「……あ、ありません」

「次にやったら、この場があると思うか？」

「……思い……ません」

「違えた場合、どうなるかは理解しているか？」

「……しています」

「ならば二度としないと誓うか？」

「……誓います」

未だに身体が震える。
恐怖が止まらない。
二度としないと誓うか、など。当然だ。
目の前の化け物相手にやった結果が今の状況。

身体を震わせるほどの殺気を放つ相手にもう一度やれ、と誰に言われても拒否する。
優斗は彼らの姿を見届けると、殺気を放つのをやめた。
強大な威圧が無くなって、ほっと一安心する3人。
顔を上げると、先ほどとは違う悪戯気な笑みを浮かべた優斗がいる。

「なら、最後にもう一仕事。一筆、書いてもらおうかな？」

部屋を出て２０分ほどしてから、優斗は控え室に戻った。

「遅かったな」

「ちょっとね」

「そろそろパーティーが始まると言っていたぞ」

レイナが教えてくれる。
優斗は頷きながら、わざとらしく手に持っていた紙を皆に見せた。

「あっ、そうそう。さっきこんなものを渡されたんだよ」

優斗は和泉、レイナ、クレア、クリスを招き寄せる。

「これは和泉で、こっちはレイナさんとクレアさん。あとはクリスにもあるよ」

一枚ずつ配る。

「なんだこれは？」

和泉が問う。

「ライカールからの謝罪文。ごめんなさい、二度としないので許してください……だってさ」

あまりにも白々しく言う優斗。

和泉、レイナ、クリスは心底呆れた表情を浮かべた。

「えげつないにも程がある」

「絶対にユウトのこと、トラウマになっているな」

「あそこまで一方的に負けた相手に対してさらに追い打ちなど、鬼ですか貴方は」

「失礼な。ちゃんと会話で納得してもらったんだから」

それは『会話』と書いて『脅し』と読むのだろう、と3人は思う。

いくら自分たちを不要に不当に不用意に傷つけた相手とはいえ、震えている文字から彼らの心情が思い浮かぶ。

つい先ほど己を蹂躙した化け物がトドメとばかりに脅してくるなど、さすがに少し同情した。

◇　◇

それから１０分後。

『学生の部――優勝、リライト』

小さな横断幕を掲げながら、ささやかな祝賀パーティーが行われた。

王様が今、スピーチを行っている。

「今回、一般の部は3位。学生の部は優勝となった結果には大いに満足している。あとから聞けば決勝の相手、ライカールとはいざこざがあったと聞いているが、よく怯えずに戦い抜いた。我に挑発するような講釈を垂れていたライカール王が呆けている顔はまさしく見物だった」

怯えるどころか逆に最後は脅していたことに、和泉やレイナは笑いそうになる。

「さらにユウト。マクスウェルを従え、独自詠唱の神話魔法クラス……いや、ここではっきりと認めよう。独自詠唱の神話魔法を放つ姿は大会の歴史に名が……残ってしまうかもしれない」

王様が困った表情を浮かべる。

「あ～、できる限りは情報漏洩の阻止とお前に被害が行かないように全力を尽くす。だが、さすがにマクスウェルは予想外だったぞ」

いくら優斗でも伝説の存在を召喚するとは思ってもいなかった。

「す、すみません」

申し訳なさそうに謝る優斗に笑いが起こった。

「面倒な国がいくつかある。回避することが出来なかった場合は……すまんが頼む。悪いようにしないことだけは誓う」

「分かりました」

「とはいえ、この『セリアール』において、二人目の契約者がリライトの者であるということは、未来永劫誉れ高いことだ。お前がこの世界にいてくれることを、龍神に感謝しよう」

と王様が言うものの、内情を知っている者は優斗の娘が龍神なために苦笑する。

「この場ではリライトと戦った者達も賞賛したいと来ている。無論、どこぞの誰かのおかげで来たいと言うものが殺到し、選別させてもらったのは言うまでもないが」

その“誰か”がつい先ほどまで話題になっていた人物なのは当然のことなので、恥ずかしがる彼に対して続けて笑いが起こった。

「それでは皆、リライトに戻るまでの僅かばかりではあるが、楽し

もう！」

王様が杯を掲げると同時に、その場にいる全員が同様に掲げる。

「乾杯！」

和泉とレイナ、フィオナでカクテルを飲みながら談笑？　をする。

「相手からしてみたら、ユウトは人外にしか思えなかっただろうな」

レイナは今でもライカールの連中の引きつった顔に笑いを覚える。

精霊の主を呼ぶわ、神話魔法でギガンテスを殺すわ、かといってさらなる神話魔法を突きつけるわ。

「自業自得です」

フィオナが言いながら、カクテルのおかわりをする。

「優斗は基本的には自分を追い詰めるドMだが、キレると蹂躙するドSに変わる」

「よくあるパターンです。優斗さんはいつもあんな性格だから豹変するんです」

また言いながら、一気にカクテルを飲み干しておかわりする。

「……フィオナ。機嫌を直せ」

なぜフィオナがハイペースでお酒を飲んでいるのか。

理由が分かるため、和泉も強くは言えない。

「別に優斗さんが怪我したから心配したとか、一緒にいたいのに引っ張りだこで寂しいとか思っていません」

「いや、全力で思っているだろう」

優斗から話を聞こうとする者が周囲に群がる。

少々困った様子の優斗だったが、いつの間にか……というか、何故!?　と問いたくなるような立場になっている副長が手際よく周り

を纏め上げ、第一陣と第二陣に分断することができた。

――いや、ユウト&フィオナファンクラブ会長ってなに？

ファンだと言ってもらったことはある。

しかしそんなものを認識した覚え、あるはずもない。

――どういうこと？

首を傾げる優斗。

まあ、でも、とりあえず副長のことは置いておくとして、怒濤の第一陣が終わり、第二陣が来る前に副長、クリスとクレアと一緒に和やかに談笑する。

「なんですか？　ユウト&フィオナファンクラブって」

「ユウト様とフィオナ様のファンクラブです。ちなみに私は会員ナンバー1、会長です」

「いや、そうではなくて……」

優斗は大会時の落ち着いた様子と真面目な態度の副長はどこいった！？　と問いたくなる。

いや、そこは今でも同じなのだが、どこかにネジが一本飛んでいったようなことになってる。

「ちなみにわたくしは会員ナンバー2です」

「なんで！？」

クレアの発言にツッコミを入れざるを得ない優斗。

「ユウト様とフィオナ様のような理想の夫婦になりたいのです」

尊敬のまなざしを持って見てくるクレアに、優斗はツッコミを入れることを諦めて話題を変えた。

「クリス達はこれから、またどこか行くの？」

「最後はリステルに寄ります。それで婚前旅行は終了ですね」

「来週は結婚式か。楽しみにしてる」

「イズミとシュウの暴走、止めてくださいね」

心の底から願う。

「特にイズミは終始、真面目でした。溜まりに溜まったものが結婚式で爆発してもおかしくありません」

「なるべく頑張る」

「お願いします」

と、ここで優斗のところへ向かってくる人物たちがいる。

「第二陣が来たようですね。では、自分たちはフィオナさんたちのところへ向かうとしましょう」

「どうにかしろ、会長」

「わ、私が止められるわけないだろう！？」

「ラスター、お前は？」

「無理を言うな！　今のフィオナ先輩はオレにマジギレした時ほどの威圧感があるのだぞ！」

「……打つ手無し、ということか」

明らかなハイペースで飲み過ぎだということで止めようとした和泉とレイナ。
けれど一向に止まらない。
どうしたものかと考えていたところにラスターがやって来て、意気揚々とフィオナに話しかけようとしたが、

「うふふふふ。失せてください」

と彼が言葉を発する前から存在を否定する始末。
結果、フィオナが飲んでいる姿を無残にも見ているだけとなった。

「うふふふふふふ。優斗さんってばモテモテなんですから」

喋りながら、またコップを空にするフィオナ。
だんだんとテーブルへの置き方が雑になっているのは気のせいだろうか。

「もう13……いや14杯目。怒濤のペースだな」

「イズミ、どうしました？」

優斗と別れたクリスとクレアが和泉達に合流する。

「クリス、止められるか？」

くいっと和泉がフィオナを指す。

「……無理です」

姿を見てから否定する。
妙な威圧感があった。
できれば関わりたくない。

「けれどこれ、笑っているということは第一段階ですよね？」

「……どういうことだ？」

和泉が問い返す。

「フィオナさんは酔いが進むと、酔い方が変わるんです」

第二陣もあらかた片付け、最後に優斗のところへ来たのは昨日、そして今日のトーナメント初戦で戦ったチームのリーダー。

「マイティーのリーダーさんと……マルチナさんでしたっけ？」

「あら、覚えててくれたの？」

「まさしくその通りだ！　このダンディ・マイティー、戦友の快挙に喜びを以て来させて貰った！」

服の上からでも動く姿の見える胸筋に優斗が吹き出しそうになる。

――っていうかダンディ・マイティーって名前なの！？

これがまた、よく似合っていて笑いがこみ上げる。

が、よく考えると国の名前を背負っているということは……お偉い人なのだろうか。

――あ～……いいや。訊く必要もないし。

別にどうこうなるわけじゃない。

「レイナが言ってた手も足も出ない同年代って貴方のことだったのね」

「おそらくはそうだと思いますよ」

「ワシの仲間もお前にやられたことを誇りにしておったぞ！」

「僕も貴方の仲間と勝負したのは楽しかったですよ。ものすごく盛り上がりましたよね？」

「もちろんだ！　あの時は血湧き、肉が踊ったぞ！」

最後の決勝を除けば、一番の盛り上がりだったと言っても過言ではない。

「それにしても決勝の時より様子が全然違うわね。纏ってる空気が優しいわ。空気もピリつかない」

「あれ？　殺気も放たなかったし威圧もしていなかったつもりなんですが……」

もしかしたら漏れていたのだろうか。

「私ぐらいのレベルなら分かるわ。たぶん、感じられたのはあまりいないでしょうね」

「良かったです。あの時の心境だと放ったが最後、会場中を無差別に怖がらせていたと思いますから」

「会場中ってどんだけよ……。けど、普段からそうなるわけじゃないみたいね」

「あれは相手が僕たちに喧嘩売ってきた腐ってる相手でしたからね。あんな厳つい空気、普段から出すことなんてそうそうありませんよ」

「それもそうね」

まあ、まず問題としてあんな空気、普通は出せるわけもないが。

「っていうか貴方の実力を見たらレイナがあれほど強くなるのも分かるわ」

「確かにレイナ殿は強かった」

「ライバルになりたいと言っていますから。Aランクの魔物を倒せずとも相対するところまで実力伸びてますし」

「……シャレになってないわね」

自分は彼女をライバル認定しているだけに少々焦る。

「素晴らしいな、レイナ殿は！　さすがワシを倒しただけのことはある！」

リーダーハゲが大きく頷く。

と、ここで突然に声が響いた。

「ゆうとさん！」

舌っ足らずの口調でフィオナがやって来た。

「あの子は？」

「妻です」

「奥さんなんだ？　凄く美人じゃない」

「なるほど。確かに美人だ！」

「ありがとうございます。ただ、飲まされたのか何なのか、相当に酔ってます」

向かってくるフィオナの後ろでは友人達がごめん、と両手を合わせて優斗に向けていた。

彼女を飲ませたのか、それとも飲んでいる姿を止められなかったのかのどっちかだろう。

酔ったフィオナは優斗のすぐ隣まで来ると、唐突に耳を引っ張った。

「い、痛い痛い痛い痛たたたっ！！」

急激に引っ張られて優斗が痛がる。

周囲の注目が一気に優斗たちに集まった。

優斗は慌ててフィオナの腕を掴む。

「僕が何かやった！？」

問いかける優斗に、フィオナは一度マルチナに視線を送ってから優斗を見る。

「デレデレしてはだめです」

「してません」

「イチャイチャしてはだめです」

「やってません」

「うそです」

「嘘じゃありません」

何故に浮気を調査するが如く問い詰められているのか。

勘弁してほしかった。

「なら“しょーめい”してください」

「どうやって？」

「キスです」

「はい！？」

「キスしてくれたら“しょーめい”とみなします」

がっしりと優斗の首に手を回すフィオナ。

「ひ、人前じゃ恥ずかしいから！　みんなこっち見てるから！　別の方法にして！」

そこまでチャレンジャーになれない。
慌てて、どうにか別の方法にして貰おうとする優斗。

「ならわたしがします」

だが残念。
問答無用、優斗の頭を手で固定して動かせないようにすると、

「「「「「　　おおっ！　　」」」」」

ギャラリーが歓声を上げるほど、思い切り口付けをした。

「……」

「……」

きっかり5秒。
キスをしてから口唇を離す。

「これで“しょーめい”できました」

甘い笑顔を浮かべて、抱きついたままのフィオナ。
拍手が沸き起こる周囲には、血涙を流しているラスターの姿もある。

「ずいぶん過激ね」

「愛情溢れているのだな！」

間近で見た二人が感想を言う。

優斗は真っ赤になりそうな顔をどうにか押し止めると、大きく深呼吸をして自らを落ち着かせる。

――これは酔っ払いがやったこと。これは酔っ払いがやったこと。

念じるように呟く。

「……よし」

上辺だけだが、どうにか落ち着いた。

「これで証明できたから離れようね？」

「だめです！　“しょーめい”できましたが『ゆうとさん分』が足りません！」

なんか前も酔ったときに同じことを言ってたな、と優斗は思い返す。

「……はぁ」

こうなったら絶対にフィオナは離してくれない。

周囲の目など気にせずに優斗は自分のものだと見せつける。

まさしく甘えたい放題だ。

しかも性質が悪いことに、この甘えん坊モードに入ると優斗から離れることはなく、当時の状況を覚えていることもない。

仲間内ならまだしも、これだけの人前では優斗にとって拷問でしかない。

唯一の救いはパーティーがあと少しで終わること。

――お願いだから、早く終わって！

感じれば遠く、聞けばさらに遠く

優斗の願い通りに祝賀パーティーも終わり、クリス達と別れて馬車でリライトへと戻る。
フィオナは優斗の太ももを枕にしてぐっすりと眠っている。
ラスターが「何と羨ましいことを！」などと大声で言いそうになったところをレイナが脳天から一撃で黙らせた。
そして、

「ようやく帰ってきたね」

「長い道のりだった」

「確かにな」

優斗、フィオナと共に和泉、レイナがトラスティ家で馬車を降りた。
もしかしたら修たちがいるかもしれないと考えたからだ。
優斗はフィオナを背負いながら門を抜け、家へと入る。

「バルトさんの話だと修たちいるみたいだから、先に広間に行ってて。僕はフィオナを部屋に運んでから行くよ」

「分かった」

和泉たちが頷く。

優斗に言われた通り、先に広間に向かうと、軽く開いているドアから声が聞こえてきた。

「いやー、たすけてーっ！」

「無駄だ。誰も来てくれない」

「そうです！　そうです！」

……何かやってた。

和泉とレイナはそのまま、ドアの隙間から広間を観察することに決めた。

「そんなことありませんわ。こんな時、絶対にあの方が来てくれます！」

「無駄です！　このまま捕らわれててください！」

どうやら劇？　みたいなことをやっているらしい。

アリーが捕まっており、捕まえたのは卓也、ココの２人。

修とマリカの姿はまだない。

すると、

「待てぇい！」

「そ、その声は！」

卓也が驚きの声と共に、颯爽と修とマリカが登場した。

……なぜか修は四つん這い。背にはマリカが乗っている。

と、ここで優斗も和泉たちに合流した。

小声で「なに、これ？」と聞いてくる優斗に和泉が「おそらくはごっご遊びだろう」と答える。
その間も劇は進む。

「ふはははははっ！　マリカンジャー推参！！」

なんだそれ！？　と覗いている3人がツッコミを入れる。

「人を欺き、精霊を欺こうとも……この龍神を欺けると思ったか！？」

「あいっ！」

マリカが細長い棒？　のようなものを持ちながら大仰に頷いた。
さすがの優斗たちも呆れを通り越して感動する。

「何が凄いかといえば、実際に龍神がやっているのが凄い」

「今の世に、勇者のシュウを馬代わりにできる奴などマリカぐらいじゃないか？」

「最強すぎる馬だよね」

ぼそぼそと3人が話していると、マリカは構えのようなものを取った。

「ゆくぞ！」

「たーいっ！」

馬になった修がカサカサと動き、マリカが細い棒をペチペチと卓也、ココに当てる。
それだけでバタバタと倒れ始めた。

「み、見事だマリカンジャー……」

「敗北しました」

動きが止まって、倒されたことをアピールする。

「この世に悪がある限り、マリカンジャーはどこにでも現れる！」

「あいっ！」

マリカが高らかに武器？　を掲げる。

「ありがとう、マリカンジャー。助かりましたわ！」

アリーが捕らわれから脱出したのか、マリカに駆け寄る。

「それが使命なのだからな。では、助けが必要な時は呼んでくれ、必ずマリカンジャーが駆けつける！」

「あうっ！」

「では、さらばだ！」

またカサカサ動きながら修とマリカがフェードアウトした。
無事に終わったところを見計らって、優斗たちは広間のドアを開ける。

倒れているままの卓也と優斗たちの視線が合った。

「帰ったのか」

「何やってるの？」

「龍神戦隊マリカンジャー第3話。囚われの姫を救え」

「……3回目なんだ」

「……そうなんだよ」

なぜか哀愁を感じさせた。

「というわけで、ただいま戻りました」

優斗が帰宅報告をする。

彼らと共に広間で劇を鑑賞していたエリスが「お帰り」と出迎える。

「ぱ～ぱっ！」

マリカが我先にとばかりに飛び込んできた。
優斗はマリカを抱き上げる。

「ただいま、マリカ」

「あうっ」

「修たちに遊んで貰ってたんだね。楽しかった？」

「あいっ！」

「よかったね」

ぎゅうっと抱きつくマリカの頭を良い子良い子する。

「そっちはどうだった？　何か面白いことあったんか？」

ソファーに座っている修が訊いてきた。
優斗も向かいのソファーに座る。
続々と他の面々も集まりはじめた。

「色々とありすぎて疲れたよ。相手がうざかったからマクスウェルとか召喚したし。そっちは？」

「この家にSランクの魔物が来て、そいつワンパンでぶっ飛ばしたぐらいだわ」

「へぇ、そうなんだ。あっ、駄目だよマリカ。もう夕飯なんだから、クッキーは食べたら駄目」

「いいじゃん。さっきまで遊んでたんだし」

「そうやって甘く考えて、前に夕飯をたくさん残しちゃったんだから」

「別に残してもよくね？」

「よくない。こういうのはきっちりと教え込まないと」

「ふ～ん。俺は軽く面倒みたくらいだから楽しかったが、本当の育児は大変だな」

「修もいずれ分かるようになるよ」

「そういうもんかね。ああ、そういえばフィオナはどうした？」

「酔っ払って寝ちゃった」

「酔ったんか」

会話を続ける優斗と修。
けどおかしい。
色々とおかしい。
明らかに物騒な単語を互いに使っていた。

「「「「「　　ちょっと待て！！　　」」」」」

卓也、和泉、アリー、ココ、レイナが同時にツッコミを入れた。

修側の話。
どうやらマリカのことを狙った魔物がいた。
そいつは龍神を喰らえば不老不死になれるなどと言っており、さらに魔物でも稀な人間の形になることができた。
そして、いざトラスティ家に着いてマリカを喰らおうとした。

「元の姿になろうとし、変化している最中に鬼ごっこをしていて逃げていたマリカが横を通り過ぎ」

「鬼として追いかけていたシュウが『鬼ごっこの邪魔だ！』とすれ違い様に」

「ワンパンでぶっ飛ばしたんだ」

あらましは大体そんなものだった。

「そうですわ」

「まあ、仮にもSランク区分の魔物が鬼ごっこの邪魔で倒されるなんて、あれほど哀れな魔物を見ることは二度とないな」

「とっても綺麗に飛んでいきましたよ」

各々が感想の述べる。

話を聞いた闘技大会組はといえば、

「……なんだそれは」

「……これぱかりは俺も驚かされた」

和泉とレイナは驚きを表す。

「ユウト。お前はできるか？」

訊いてくるレイナに優斗は軽く手を横に振った。

「ムリムリ。和泉がレイナさんの武器に施したような魔法を使ったら出来るかもしれないけど、通りがかり様にワンパンでぶっ飛ばすとか僕には絶対に無理。そんな気違いなこと不可能だって」

「お前が言うなっつーの。マクスウェルとか召喚してんのによ」

「残念ながら僕のは昔、召喚した人いるし。修のは絶対に今まで誰

もやったことないんだから、お前のほうが酷い」

「どっちもどっちだろう」

和泉が互いの主張を一刀両断する。

神話魔法どころかワンパン撃破の修も過去一人しか契約させていないマクスウェルと契約した優斗も、同じくらいに馬鹿げたことをやっていると気付いてほしい。

というかこの二人、相手の実力に対する信頼度が高すぎる。

珍しく優斗までもが修と一緒にボケたと錯覚させられた。

続いて優斗たちの話をする。

優勝したことも騒動があったことも。

そして優斗がマクスウェルを召喚したということも。

理由を聞けばアリー達も少し驚くぐらいで、そういうことかと納得する。

「……父様、これから大変ですわね」

「そうなんか？」

「独自詠唱の神話魔法でもギリギリ、どうにかできるかっていうレベルですわ。それに加えて精霊の主、マクスウェルまで召喚されたら……」

いくら三大国の王の一人とはいえ、無理すぎる。

おそらくは4，5日ほど不眠不休で対応に当たらないといけないのではないだろうか。

それでも結果がどうなるかは厳しいものがありそうだが。

「前々からちょっとは疑問だったんだけど、やっぱり優斗の詠唱ってやばいのか？」

アリーに卓也が疑問を投げかける。

「やばいも何も、独自詠唱を使っているなんてお伽噺ぐらいでしかお目にかかれませんわ。まあ、伝説の大魔法士も独自詠唱を使ったという文献はありますので、事実としては世界で2人目になりますわね」

だから全く以て伝説の大魔法士の再来と言っていい。

「元々、『セリアール』にある神話魔法の詠唱は全て『求め――』から始まります。リライトで把握している神話魔法は8つありますが、全て同様です。他国が把握している詠唱もそうでしょう」

古来の魔法書や言い伝えやらに分散しているので、一国が把握している神話魔法の詠唱の数は少ない。

「けれどユウトさんのは最初から『天光満つるところに――』などと全く違います」

最初から違えば、さすがに独自の詠唱だと分かる。

「これだけならばユウトさんの魔法が神話魔法かどうか怪しいものにはなりますが、実際の威力を見てしまえば神話魔法だと実感できますし、何より……」

と、ここでアリーは手を前に翳した。

「これは実際に見てもらったほうが分かりやすいですわね。これからユウトさんの魔法の詠唱を使う気で詠みますわ」

大きく深呼吸してから、紡ぐ。

『て……』

だが、最初の一文字を発した後、続かない。

声も何も出せなくなる。

これ以上は続けられないと、アリーはすぐに紡ぐのをやめた。

「……ふぅ。このように使う気で詠むと声を発せなくなります。一文字でも声を発せられたのは僥倖ですわね」

アリーが詠唱を詠めなかったというのは、制約を外すことができなかった、という意味合いに他ならない。

「つまりはこの世界からユウトさんの詠唱は『言霊』であると認識されているわけなので、紛れもなく神話魔法であると言えるのです

わ」

今のが証明になる。

「そこで最初の疑問に返ります。ユウトさんの詠唱はセリアールの魔法史に存在せず、さらに神話魔法として世界から認識されるというとてつもないことですので、本当にやばい方である……というわけですわ」

「……知らなかった」

優斗が唸る。

自分はゲームやアニメの詠唱をしているだけだったので、ここまで大層なことをやっているという自覚は全くといっていいほどなかった。

「とはいっても、独自詠唱の神話魔法などほとんど１００％の確率で本人以外は使えず、魔法の研究機関以外にはただの神話魔法としか認識されないので、つまるところ神話魔法が使える凄い人物まで格下げされるわけなのですが」

それでも、この歳で神話魔法を使うなど化け物としか言いようがない。

「ただ、ユウトさんはそれを２つ見せつけ、さらにはマクスウェルの召喚。こぞって他国の研究機関や王族が婚姻やら歓待やらを望むでしょうが、父様がユウトさんの実力を読みきれなかったせいでもありますので、ユウトさんに非はありませんわ」

だから大変なことを王様に全て任せればいい、とアリーが言う。

「慣れてたけど、あらためて常識で考えると化け物だな」

「や～い、化け物！　化け物！」

卓也の発言に修が調子に乗って子供みたいなことを言う。

だが、

「シュウ様だって変わりません！　前にひょんなことから窺いましたが神話魔法を３０個も４０個も使えるなんて、ユウトさんと違って過去に存在しませんわ！　大体、詠唱を手に入れるだけでも苦労するのに、あらかじめ知ってるってどういうことです！？」

自分は違いますよ、みたいな言い方にアリーが修を叱った。

神話魔法なんて１個使えるだけで充分にえげつない人物になり得る。

生涯を掛ける魔法士だっている。

けれども、実力が見合わなかったり自分に合った神話魔法ではないということで使えないものが多々いる。

なのに一人で二桁もの神話魔法を使えるなど、もはや意味が分からない。

「……いや、だって『勇者の刻印』が使えるって教えてくれんだもんよ」

アリーに怒られて珍しくしゅん、となる修。

和泉が途方もなく呆れた。

「……チートにもほどがある」

詳しい話なんて面倒だから聞くこともないが実際に聞いてしまうと、

ほとほと呆れる。

「リライトにいた歴代の勇者でも最高は２つを使えたのが限界だというのに、彼らの１５倍、２０倍の数を使えるんですから……」

強いと言われているリライトの勇者ではあるが、彼らのことがまさしく霞む。

今代のリライトの勇者は、それほどに強く……ある意味、優斗同様にえぐい。

「……なんというか、こいつらに近付けてるのか不安になる会話だ」

目指すべき頂は……果てしなく遠い。

少なくともＳランクの魔物をワンパンで倒したこと、マクスウェルを召喚したことを話題にしたところで、予備知識なくとも平然とスルーするぐらいじゃないと駄目なのだろう。

彼らの実力を言葉にして聞いてみれば、そうできるのも無理はないが。

ただ、レイナは無茶を言うなと叫びたくなる。

「……会長」

哀れむように和泉たちはレイナの肩を叩いた。

「……頑張れよ」

「……なんといえばいいか分かりませんが、頑張ってください。応援してますわ」

「わたしも応援してます」

「ファイトだ、レイナ」

彼らの優しさが身に染みた。

史上最大の結婚式

アリーが言った通り、王様が色々と対処に不眠不休で追われている頃。
優斗たちはカフェで、とある話をしていた。

「さて、お前ら。４日後にクリスの結婚式があんだけど……」

優斗、修、卓也、和泉の４人がテーブルを囲んで話す。

「やっぱ花嫁をさらうのがベストじゃね？　そんで、『返してほしければ――』うんぬんの口上を述べるのがベストだろ」

「いや、ここは裏を掻いてクリスにウェディングドレスを着せる。ダブル花嫁だ」

「それも有りだわ！」

優斗と卓也をそっちのけで案を出し合う修と和泉だが、

「駄目に――」

「決まってるだろ！」

全力で優斗と卓也が二人の頭を叩く。

「クリスから言われてるんだよ。お前ら二人を暴走させないでくれってさ」

「お前ら、王族も貴族もやってくるような結婚式に変なことやろうとするな」

とりあえず注意してみる。

「つまらん」

「それじゃつまんねーよ」

思った通りすぎる回答が来た。

「つまんなくていいんだよ」

「“盛り上げる”じゃなくて“余計なこと”の範疇なんだから。修と和泉がやろうとしてるのは」

「あん？　じゃあ、全力全開で盛り上げりゃ問題ないって優斗は言ってるんだよな？」

予想外の反論が来た。

「それは……向こうに迷惑かからなければ問題ないと思うけど」

優斗が肯定すると、修がニヤリと笑う。

「言ったな、優斗」

つまりは“何かやってもいい”と優斗は言った。

「よっしゃ。じゃあ馬鹿なことはやらないでやっから、度肝を抜く

ぐらいのやつをやってやるよ」

「……何をする気なんだ？」

卓也がいぶかしむ。

「お前らも参加な」

「……マジか？」

「大丈夫だって。大それたことやろうとするだけで、馬鹿なことじゃねーから」

言って修は全員の顔を寄せる。

別に誰かが聞いているわけでもないが、秘密の相談っぽくする。

そしてあれやこれや、自分の案を話し始めた。

「……これ、できるだろ？」

全員に確認を取ってみる。

「まあ、和泉なら用意できそうだし、僕と修の力なら不可能じゃないと思うけど……」

確かに大それたことをしようとしているが、問題には……おそらくならない。

「こういう時のために勇者の力ってのはあるんだよ」

「それだとオレの出番が少ない」

卓也が不満を漏らす。

「えっと……それじゃあ、こういうのはどう？」

今度は優斗が新たな案を出す。

全て聞くと、卓也も満足そうに頷く。

「分かった。久々に腕が鳴るな」

修は卓也も納得すると立ち上がる。

「よっしゃ。そんじゃ、下見やら用意やらしないとな」

修の合図で全員が頷いた。

「了解だよ」

「はいよ」

「いいだろう」

気付いたら、全員で大それたことをしようとしていた。

しかもノリノリで。

◇　◇

『3日前』

修と優斗で教会の下見をする。
壮大な感じではなく、森の中にひっそりとあった。

「これ、やっぱり木とか色々と動かすはめになるから、振動は凄くなるよ」

「やっぱそっか。まあ、そこらへん俺がどうにかするわ」

「りょうかい」

念入りに二人で下調べを行う。

「あっ、精霊術使ったらフィオナにバレるかも……」

「安心しろ。それもどうにかしてやんよ」

『2日前』

部屋に籠もっている和泉のところへ卓也が顔を出す。

「和泉、間に合うか？」

「打ち上げ自体は問題ない。打ち上げるために必要なものは買えた。問題は多種多様な光なのだが……」

そこが中々に難しい。

元来、何ヶ月もかかって作るモノだ。

それを魔法という知恵を得て、僅か数日で作ろうとしている。

「あれって本物は化学反応だろ？」

「そうだ」

「だったら優斗のノームかマクスウェルでどうにかなるんじゃないか？」

「……いや、現存の魔法でどうにかできる。なればこそ、これは俺の仕事だ。俺以外の力を借りて楽にやってはクリスも感動がないだろう？」

「……そうか。まあ、無理はするなよ」

「ああ、分かっている」

『1日前』

優斗は卓也と一緒に買い物をする。

「これでモノは揃った？」

大きなものを持ちながら優斗が訊く。

「ああ。オレも一昨日、昨日と試したが、ほとんど向こうにあるものと同じのを揃えられた」

差異はほとんどない。

「それじゃ、あとは作るだけだね」

「そうだな。……っと、そういえば、修と和泉はどうした？」

「あの二人は最終確認。色付けも成功したらしくて、修が張ってる完全結界魔法の中で試し打ちしてる」

「それが問題なければ、準備はオッケーだな」

「そうだね」

『クリスとクレアの結婚式当日』

正装したチームのメンバー。

男子はクリスの控え室へ。

女子はクレアの控え室に、昼過ぎからそれぞれ集まっていた。
まず、男子の控え室へ。

「シュウ、イズミ。今日は本当に何もしないでくださいよ？」

その中で白に統一された服装を着ているクリスが念を押すように言った。

「ユウト。この二人、変な計画は立ててませんよね？」

「大丈夫。“変な計画”はしないって」

そう、別に“変な計画”は立ててない。

――大それた計画は立てたけど。

というか、優斗もノリノリで乗った。

「それならば安心なのですが……。いいですか？　クレアを攫うとか自分にウェディングドレスを着せるとかやろうとしたら、はっ倒しますからね」

瞬間、４人が吹き出した。

「クリス、凄えな。優斗たちにボツを喰らったやつ、まさしくそれなんだわ」

「……やはり計画は立てたんですか」

「安心しろ。しっかり頭を叩かれた」

「当然です！」

クリスの大声に、また４人が笑う。

続いては新婦の控え室。

フィオナ、アリー、ココ、レイナ、リル、クレアがいる。

「クレアさん、綺麗ですわ」

「あ、ありがとうございます、アリシア様」

未だに数度しか会っていないアリーに緊張を隠せないクレア。

それでもどうにか返事をする。

「本来は父様も来る予定でしたが、早急に終わらせなければならない仕事が多々ありますので、わたくしが王族の名代として来ています。これ以上、緊張する必要はありませんわ」

「は、はい」

落ち着かない様子のクレアに、ココが話しかける。

「だいじょうぶです。さっき見たらクリスさん、とっても格好良かったですから。クレアさん、目を奪われて緊張なんてなくなっちゃいます」

かなりとんちんかんなことを言うココに、全員が軽く笑う。

「その格好良いクリスは、かなり心配していたようだがな」

「そうですね。シュウさんとイズミさんの姿を見るまで、安心できていないようでした」

「まあ、仕方ないけどね」

レイナとフィオナとリルの発言に、アリーとココが呆れるように納得した。

「どういうことですか？」

一人、分からないクレアが首を捻る。

「何かやられるのではないかと心配していたんだ。クリスは特に被害者だから、この場でもあの二人が仕掛けてくるのではないかと気が気で仕方なかったんだ」

「まあ、ユウトさんとタクヤさんがいるので、さすがに諦めたとは思いますわ」

◇　　◇

聖堂の中でまさしく、結婚式が行われていた。
全員が今は大人しく二人の様子を見守っている。

「お二方とも、龍神に永遠の愛を誓いますか？」

神官が尋ねる。
二言なく、クリスとクレアは頷いた。

「「誓います」」

「よろしい。それでは誓いの口付けを」

神官に言われると、クリスはクレアのヴェールを後ろへと流す。
そして、

「……」

「……」

ゆっくりと口付けをした。
神官は二人を見届けると、

「では、これよりお二方には洗礼の儀を行っていただきます」

そしてクリスとクレアを奥の部屋へと誘う。
優斗たちにはよく分からない“洗礼の儀”というものだが、要は夫婦になったので身も心も綺麗にして旅立ちなさい、ということらしい。
つまり招かれた者達は洗礼の儀が行われている間、暇になる。
当然のこと、本来はその場で待機し、戻ってきた二人を祝福するのが通例。
なのだが、

「ごめん。ちょっとトイレ行ってくるね」

「そんじゃ俺も行くわ」

「ならば俺も行こう」

「なんか皆が行くからオレも行く」

図ったように優斗たちは席を立った。

「シュウ様。２０分しかありませんし、うっかり話し込んで遅れないでください」

「分かってんよ」

笑って全員で聖堂から離れる。
そして当然トイレには行かず、教会の出口へと向かった。

◇　　◇

そして勝負の時間。

「修！　今、何分経った！？」

「１７分だ！」

「卓也！　和泉！　あと3分、設置は大丈夫！？」

優斗の声が二人に届く。

「問題ない！」

「オレはちょっとまずいかもしれない！」

「和泉はフォロー行ける！？」

「任せておけ！」

ぶっつけ本番、４人で“大それた計画”を仕掛けていた。

「優斗、ちょっとズレてんぞ！」

「どれ！？」

「右側の奥から3つ目……そう、それだ！　それを３０センチ左に

ずらせ！」

「了解！　ノーム、頼んだよ！」

言われた場所を動かす。

全員、テンション上がっていた。

「こっちも設置終わったぞ！」

卓也から報告が入る。

「了解！　僕もこれを動かしたら……終了！」

修に言われたところを直して、全ての作業が終わる。

「オッケー。時間内に全部、終わったな」

そこでようやく修は“魔法を解いた”。

修が使っていたのは完全防御魔法。

魔法はおろか、音も気配も全てを遮断する魔法。

それを縦、横、長さ２００メートル超のものを張っていた。

「あとはクリスとクレアが来るのを待つだけ、だな」

「うん。ここからがもう一つの本番だね」

◇　◇

クリスは洗礼の儀から戻ると、彼らがいないことに気付いた。
少し嫌な予感が生まれたが、さすがに優斗と卓也がどうにかしていると思って打ち消す。
もうやることは少ない。
皆を引き連れて教会の出口まで行くこと。
出口から馬車まで、また皆に祝福を受けながら歩くこと。
二人で馬車に乗ってパーティー会場まで向かうこと。
以上だ。
しっかりと全うしようと思い、にこやかに笑顔を浮かべながらクリスはクレアと共に歩く。
後ろを着いてくるリルやレイナが、どうしてあの４人はいないと憤慨しているのが笑える。
教会の出入り口にたどり着く。
出入り口をクレアと共に開けたら、少し待機。
皆が馬車までの道のりを囲ってくれるので、それが終わったら再び歩く。

「クレア。それでは開けますよ」

「はい、クリス様」

クレアが頷き、二人してドアに手をかける。
そして開けた瞬間、

「……えっ？」

クリスから驚きが漏れた。
次いでクレアからも驚きの声が出てくる。

「……まだお昼すぎ……ですよね？」

クリスとクレアが驚くのも無理はない。
暗闇が全面に広がっていた。
夕暮れ時ですらない。
いくら冬とはいえ、こんな時間に暗闇が空一面になるわけもない。
クリス達の後ろにいる客人にも動揺が伝わっていく。

「なぜ？」

けれど現に、目の前の道が見えない。
困惑するクリス。
すると、

「あっ、クリス様、見てください！」

クレアが暗い空を指差した。
そこにあったのは、

「流れ星？」

「凄いですね。たくさんありますよ」

一つ二つどころではない。
1秒間に4つも5つも見える。

「……」

呆けて空を見るクリスだが、今度は唐突に何か打ち出す音が聞こえた。
クリスもクレアも客人も驚く。
少し甲高い音が『ひゅ～』と鳴る。
次の瞬間、

――　ドーンッ！！　――

一輪の鮮やかな花が咲いた。
さらに打ち出す音は続く。
色を変え、形を変え、いくつもの花火が咲き狂う。

「……綺麗ですね、クレア」

「はい」

やがて打ち出す音は止まる。
僅か３０秒ほどではあるが、確かに美しい光景だったと。
クリスの胸に刻み込まれる。
そして最後の花火が消える……瞬間。
今度は馬車までの道のりがライトアップされた。
クリスの驚きは止まらない。

「これは……」

ただ、木に間にあった通り道ではなかった。
左右の木は３０メートルほどずらされており、馬車へ続く道はただ

の土塊ではなく大理石が白く輝いている。大きさにすれば縦４０メートル、横６０メートルの現実では存在しない一枚の大理石。そして、その上には紅い絨毯が敷かれており、先には馬車がある。
絨毯の両脇は綺麗に大理石が削られており、澄んだ水が流れていた。しかも絨毯の両脇だけでなく大理石全体に見事な水路を作り、見るものを感動させた。
さらに外には荘厳な石柱が８本ずつ、計１６本並んでいる。
石柱には蛍光の魔法具が仕込まれていて、それが優しげな光を放っていた。

「……しょうがない人たちですわね」

呆れるようにため息をついて、立ち止まっているクリス達の横を通り過ぎるアリー。
フィオナ達も似たような表情を浮かべながら馬車への通り道で出迎える準備をする。
彼女たちが動いたことによって他の客人も、恐る恐る通り道へと向かった。

◇　　◇

隠れながら様子を窺う優斗たち。

「全員、通り道に並んだ？」

「問題ない。客も並び終わった。あとはクリス達が歩いて馬車に乗るだけだ」

和泉が答える。

「オッケー。それじゃ仕上げといくぞ、優斗」

「分かったよ」

同時に構える。

まずは修が紡ぐ。

『求め彩るは極彩の光』

彼が詠むのは、攻撃魔法じゃない。

『移ろい最果てに現れるものよ。我が手、我が内、夜天を駆けろ』

神話魔法は攻撃だけじゃない。

祝福するものもある。

だからこそ、今この瞬間、この神話魔法は使うに値する。

『巡れ鮮光。鮮やかなる透を壮大なる空へと示せ』

極大の魔方陣が空へと広がり、光のカーテンを作り出す。

「頼むぞ、優斗！」

「任せて」

今度は優斗が一言、

「――レム」

告げた。

魔方陣から現れるは４対の純白な羽根を持つ女性型の大精霊。

「頼むね」

そう言った優斗に、光の大精霊は優しく微笑んだ。

◇　◇

客人が困惑している最中、いざ歩こうとした時だった。

空に極大の魔方陣が広がった。

けれど魔方陣は広がり、広がり、そして……消える。

瞬間、

「……わぁ」

極彩の光のカーテン。

オーロラが魔方陣の代わりに広がっていた。

隣にいるクレアが空に目を奪われる。

客人も同様だ。
リライトでは絶対に『あり得ない光景』を目にして、奪われないものなどいない。
クリスも空に視線を取られる。
――まったく……。
そして見上げながら思う。
――まったく、彼らは……。
今の出来事ができるのは、彼らしかいない。
昼過ぎに夜空を広げることも。
星を降らせることも。
花火を打ち上げることも。
道を作り替えてしまうことも。
オーロラを作り出すことも。
全部、彼らしかできない。
「行きましょうか、クレア」
空に目を奪われている妻を促す。
「あっ、は、はい」
慌ててクリスの腕を取る。
そして歩こうとすると、空からクリスとクレアに輝かしい純白の光が、まるでスポットライトのように当たる。
気付けば、通り道の照らす光量も少し落ちている。
通り道を飾る客人たちからは「素晴らしい演出だ」と賛辞が続く。

仲間たちの横を通ると、全員が全員、苦笑していた。

◇　　◇

クリスとクレアが乗った馬車が無事、移動する。

「おし、まずは一つ目……大成功！」

イェイ、と全員でハイタッチをする。

「シャドウもありがとう」

優斗が闇の大精霊に声を掛けると、騎士の姿を模した闇の大精霊が消える。

そして空には再び、青空が戻る。

「そんじゃ、次は――」

「シュウ様！　皆さん！」

と、ここでアリー達に居場所がばれる。

女性陣が全員、男性陣のところへと向かってきた。

「何もやらないのではなかったのですか!?　しかもユウトさんも

タクヤさんも一緒にやるだなんて……」

「何もやらないって……そんなこと、誰か言ったか？」

修が男性陣に訊くが、全員が首を横に振る。

「やらないのは『変な計画』であって『大それた計画』をやらないとは、誰も言ってないよね」

「そうだよな」

「そうだ」

示し合わせるように頷く。

「……確かに変なことはやっていませんが、それでも大それ過ぎですわ」

けれどそう言ったところで後の祭り。

全てをやり終えたこと。

「まあ、いいですわ。わたくし達も馬車でパーティーに向かいましょう」

「あっ、俺らはそれも抜けっから」

突然の爆弾発言にアリー達がまた驚く。

「……シュウ様。今度は何をするつもりなのです？」

訊いてくるアリーに、修は次なる計画を話す。
すると、だ。

「そんなこと、わたくし達をのけ者にしてやることではありませんわ」

「当然ね」

「そうです！」

「私とて、あの二人を祝福したい気持ちはある」

「私はお手伝いできると思いますよ」

意外にもアリー、リル、ココ、レイナ、フィオナが乗ってきた。

◇　◇

夜7時。
およそ2時間ほどのパーティーも無事に終わる。
客人への応対やら何やらで非常に疲れたクリスとクレア……ではあるが、

「結局、皆さんは来ませんでしたね」

クレアが少し寂しそうに言った。

「何かあったのですよ、きっと。もしかしたら説教で遅れてしまったのかもしれませんし」

「でも……」

「ほら、しょんぼりしないでください。クレアもお腹がすいてるでしょう？　今日は――」

「レグル様！」

と話したところで、従業員から呼び止められる。

「どうかされましたか？」

「こちらをお二方に渡してほしい、と」

言いながら従業員は封筒をクリスに手渡す。

「それでは、失礼します」

従業員は渡し終えると、すぐに去って行く。

見れば差出人の名前は無い。

クリスは首を捻りながらも封筒を開く。

「なんですか？」

「ちょっと待ってください。えっと……『パーティー終了後、トラ

スティ家まで来ること』と書いてあります」

「……フィオナ様の家にですか？」

「そうですね」

「何をするのでしょうか？」

「分かりません。自分に彼らのことを説教しろ……かもしれませんね」

さすがに色々とあったので理由が読み切れない。

「とりあえず、向かったほうがよろしいでしょうか？」

「そうですね。そうしましょう」

◇　◇

馬車から降りる。

すると、すぐ目の前に優斗と修がいた……のだが、

「……それは何の格好ですか？」

なぜかウェイター姿の二人に問いかけざるを得ない。
けれど優斗も修も問いかけには答えず、綺麗に頭を下げた。

「クリスト＝ファー＝レグル様、クレア＝ファー＝レグル様。本日はご予約、ありがとうございます」

まずは優斗が台詞のような言葉を使う。
続いて修。

「料亭――『異世界』へようこそ。今宵1日限りのオープンとなりますが、どうぞごゆっくりとお楽しみください」

修も珍しく綺麗な言葉使い。

「ユウト？　シュウ？」

「どうぞこちらへ」

優斗と修が二人を促す。
どうやら、クリスの問いかけに答えるつもりはないらしい。
仕方なく二人についていくクリスとクレア。
広間に通され、椅子に座らされる。
いつもはすっきりとしている広間が、煌びやかな内装に変わっていた。
すると、修が口を開く。

「それでは本日のスタッフをご紹介させていただきます」

右手を差し出す。
すると、隠れた場所からまず一人、出てくる。

「料理人――卓也」

まるでコックの格好をした卓也が出てきて、頭を下げる。

「料理サポート――フィオナ、レイナ」

似たような格好のフィオナとレイナも頭を下げる。

「飾り付け――和泉、アリー、ココ、リル」

４人が続けて出てきては同じように。

「副支配人――優斗」

優斗も深々と頭を下げる。

そして言葉を引き継ぐ。

「最後に当料亭の支配人――修。以上がスタッフとなっております」

もう一度、全員がクリスとクレアに頭を下げた。

また修が口を開く。

「本日、お二方にお出しさせていただくのは私たち、『異世界の客人』による異世界料理のフルコースとなっております。是非ともご堪能くださいませ」

パンパン、と両手を修が叩くとたくさんの料理が出てくる。

どれもこれもがクリスとクレアには見たことがない料理だ。

「……どうして、これを？」

不思議そうにクリスが修たちを見た。

今日あったことは一般的な祝福とは明らかに違う。

度が過ぎているといっても過言ではない。

「どうして、と言われましても……」

けれど修は、そうすることが当たり前だというように笑みを浮かべた。

「私たちにできる精一杯のお祝いが、結婚式に行ったことや料理なのですよ」

いつも馬鹿げたことに付き合ってくれるクリスに送る、心を込めた贈り物。

修たちがそうすると決めたのはごく自然の考えだった。

「貴方は私たち異世界から来た者にとって、この世界で出来た“初めての親友”なのですから当然です」

彼らの全てを賭して祝福するのは当たり前のこと。

そして修も優斗も、卓也も和泉も。

本当に優しく笑った。

いつものような悪戯めいた笑顔ではなく。

『ありがとう』と。

それだけを込めた笑みだった。

「……」

初めて聞いた、彼らの心の声。

「……本当に……」

クリスが俯く。

「……本当に馬鹿ですね、４人とも」

目頭が熱い。

「……何が“初めての親友”ですか」

自分なんて“生まれて初めて”の親友達だ。

「……何が精一杯のお祝いですか」

貴方たちが結婚式を行ったとき、これ以上のものを返せる自信なんてない。

「……それに似合ってないんですよ、その口調」

違和感しか生まれない。

修たちが苦笑する。

「……まったく……貴方たちって人は……」

呆れるような声音を出すクリス。

でも、駄目だ。

我慢しようとしても、溢れてくる。
止める術が分からない。
嬉しくて、嬉しすぎて止まらない。

「えっ！？　ちょ、なんで泣く！？」

まさかクリスが泣くとは思ってなかったので、修が本気で焦る。
口調も普段のものに戻った。
クリスは修たちを見ると、珍しく声を張る。

「自分だって“初めての親友たち”にこれだけ壮大に祝われて、嬉しくないわけないでしょう！！」

涙を零しながらクリスが言い放つ。

「変な心配してた自分がバカみたいではないですか……」

何かやるとは思っていたけれど。
むしろ変なことをするんじゃないかと楽しみ半分、恐がり半分だったのに。
こんなに嬉しいことをしてくれるとは思っていなかった。
修たちがクリスの姿に満足げな表情を浮かべる。

「まっ、そんだけ喜んでくれたらやった甲斐あったわな」

「結婚式のときなんて修の神話魔法と大精霊４体と精霊の主を費やすという過去に例を見ない規模の祝福だからね」

おそらく過去に存在しない。
というかするわけがない。

「ユウト、そうなのですか？」

「そうだよ。オーロラは修の神話魔法だし、大理石と石柱を地の大精霊。流れてる水は水の大精霊から出して貰った最高の霊水。暗闇は闇の大精霊にやってもらって、流れ星は精霊の主に隕石を降らさせて、最後のスポットライトは光の大精霊」

「別に神話魔法だって攻撃だけに使うわけじゃねーしな」

「精霊術もそうだよ」

続いて和泉に右手を示し、

「周囲を照らしたライトと花火は和泉の作品」

「ふふっ。イズミの作品でこれほど喜んだのは初めてですよ」

「そう言ってもらえると、頑張った甲斐があったというものだ」

和泉が嬉しそうに頷く。

すると、修がいつものような笑みになり、

「そしたら卓也が自分だけやることない！　って言い出してよ、この料理が出てきたってわけ」

自分だけクリスを祝えてない、と思っていた卓也の心境をばらす。

「バカ！　バラすな、そんなこと！」

卓也が修の口を塞ごうとする。
周囲に笑いが起こるなか、続きは優斗が引き継いだ。

「それで結婚式が終わったあと、パーティーに参加しないで料理作るって言ったらアリー達もやるって言い出して」

クリスが女性陣を見れば、うんうんと頷いている。

「このように全員揃って待ち構えてたというわけだ」

「わたし、頑張って動きました！」

「私も誠心誠意、お祝いの気持ちを込めて手伝いましたよ」

「わたくしも飾り付け、頑張りましたわ」

「あたしもね」

彼女たちにとってもクリスは大切な仲間。
祝いたい気持ちは一緒だった。

「皆さん、ありがとうございます」

クリスが目元にある滴を拭いながら笑みを浮かべる。

「うしっ。そんじゃ、冷めないうちに料理、食べろよ！　食えないぐらいに作ってるから！」

修の合図で、さらに続々と皿を運ばれてくる。
本当にたくさんあるので、卓也も気合いを入れたことがはっきりと

分かる。
クリスは苦笑しながら、
「一緒に食べましょう。貴方たちと一緒にいるのにクレアと二人で食べるなんて、自分には違和感があってしょうがないですよ。クレア、いいですよね？」
と横を向いてクリスが問いかけるが、、
「……な、なんでクレアが泣いているのですか！？」
隣ではクレアが号泣していた。
「だ、だってクリス様と皆様のやり取りが、素晴らしくて……っ！！」
ボロボロと大粒の涙が止まらない。
「ほら、せっかくの料理が冷めてしまいますから。頑張って泣き止んでください」
子供をあやすようにクレアの頭を撫でるクリス。
「は、はいっ。私も皆様と一緒に食事、取りたいです！」
しゃくりながらも必至に泣き止もうとするクレアを微笑ましく思いながら、優斗たちは椅子をテーブルへと持っていって座る。
ついでにシャンパンを全員分、用意する。
修が音頭を取った。

「それじゃ、みんなコップ持ったか！？」

『持った！！』

「クレアは泣き止んだか！？」

「はい！」

「よっしゃ！　今日はクリスとクレアを祝ってんだ。全員、全身全霊を込めて叫べよ！」

『もちろん！』

コップを持ち上げる。

「それでは、二人の結婚を祝って――っ！」

そして全員がクリスとクレアに高々とコップを向けた。

「「「「「「「「「　乾杯！！　」」」」」」」」」」

一つの事件、連なる出来事

いつか。
いつか、と。
願っていることがあった。

いつか友達ができたら、恋愛相談をしてみたい。
いつか友達ができたら、あだ名で呼んでみたい。
いつか友達ができたら、その人を目一杯大切にしたい。

子供ながらに抱いた、小さな小さな夢物語。
公爵という立場なんてどうでもいいと言ってくれる友達ができたなら、こんな小さな夢を叶えようと思っていた。

――そして。

『いつか』は訪れて。
いくつかは出来たけれど。
やっぱりまだ、叶えられないこともあって。

――それでもいずれ。

一緒にいるのだから。
大切な仲間たちと一緒にいるのだから。
叶うと思っていた。

――でも。

知らせが届いて。

文が届いて。
もしかしたら、願っている『いつか』は出来なくなってしまうのでは、と。
もしかしたら、祈っている『いずれ』は無理になってしまうのでは、と。
思ったから。
――少しだけ、頑張ろうと思ったんです。

◇　◇

今は12月、年末差し迫る頃。

「……すまん」

トラスティ家テラスにて王様と優斗、マルスでなぜか酒を飲んでいた。

「いえ、やりすぎた僕のせいでもありますし」

手を横に振って優斗が問題ないとアピールする。

「そう言われると我も助かる」

安心したように王様が杯を煽る。
どうやら王様とマルスは幼少の頃からの付き合いだったらしく、王子であった頃はよく来て飲んでいたらしい。
もちろん今回、トラスティ家まで来たのは６日間の不眠不休デスマーチが終わり、優斗に伝えなければならないことがあるためだ。
ついでに開放感から全力で酒を飲みたい、という気持ちもあった。
優斗としては当然のこと、王城に呼ばれればすぐに行く。
しかし王様は「久方ぶりにマルスと酒が飲みたかった」などと言って堂々、テラスまで突き進んだ。
そして報告が、上記の通り。
今はマルスが秘蔵の酒を選び抜いているので、彼は席を外している。

「研究院各所からの文が３０通。他国からの婚姻、歓待届けが５０通超。リライトのギルドに届いたパーティメンバー要請が６０通。およそ１５０通……しかも全てが早急に連絡されたし、などと書いておって本当に死ぬかと思ったわ」

さらには直接交渉も１０国ほど。
全ての国に「優斗には妻がおり、貴国のように一夫多妻制の国ではないから」ということを回りくどくもしっかりと示した。
正式に婚約者になったのだから、別に夫婦でもいいだろうと王様も引け目なく堂々と上記を記す。
それでも妾でいいからと訴える国に追い打ちをかけるがのごとく脅すような書状を送りつける。
それが６日間続いた。
優斗がテンション上げて結婚式を派手にしようとしている頃、王様はそんな状態に追われていた。
けれどその中で一国だけ、王様の力を以てしても拒否しきれない国があった。

「ミラージュ聖国……でしたか？　僕が行かないといけないのは」

「ユウトは知っているか？」

「いえ、リライトの歴史を知るだけで精一杯ですので、他国についてはほとんど知りません」

「そうか、ならば説明をしよう。ミラージュ聖国というのは言うなれば最大の宗教国家だ。その対象はもちろんのこと、龍神。そして精霊も崇拝の対象となっている」

「……どういうことですか？」

「この世界の最大宗教はな、竜神の護るモノとして精霊がいると考えているのだ。そして筆頭の国がミラージュ。だからこそ、数少ない精霊術士の7割はミラージュ聖国におる」

王様は酒を飲んで、一旦間を空ける。

「しかも国を作ったのは伝説の大魔法士――マティス。唯一……いや、世界で初めてマクスウェルと契約した者が作ったのだ。精霊に傾倒し崇拝するのも納得できるだろう？」

「そうですね」

王様から教えて貰ったこと、ほとんどを優斗は知らない。

何事もないなら日々ならまだしも、常日頃を育児と遊びと隠れた努力に費やすので手一杯。空いた時間はフィオナとまったりしたい。

リライトの歴史を追うだけでもパソコンないから案外面倒なのに、他国のことなんかまだ調べる気も起きない。

唯一知っていたのは伝説の大魔法士――マティスが国を作った、ということを知っているだけ。
どういう国なのかは知らないし、王様より聞いて初めて「この国がそうだったんだ」と理解した。
しかも知っていることだって情報源はマクスウェルからだ。
優斗からしてみれば、マクスウェルだって精霊の主というよりただの好々爺だし、そんな爺から聞いた話なんていくつかの驚くべき事実を除けば古臭いお伽噺としてマリカに面白おかしくお話する以外に活用方法がない。

「けれどそんな国なら、マリカを連れてこいとは言われなかったんですか？」

「もちろん前々から言われている。しかしリステル国と問題が起こったのでな。さすがに連れて行くことは出来ないと突っぱねた」

「そうなんですか」

「しかし、さらには契約者までもが我が国に現れた。龍神のみならず契約者をも二度も三度も断ってしまえば『リライトは龍神と契約者を独占している』と言われてしまう。特にミラージュが言うからこそ、他国にも影響が及ぶ。リライトとしてもこれ以上の関係悪化は困るのでな。なればこそ、お前に行ってもらうしかなくなったのだ」

「一人で、ですよね」

要求はそうあったと聞いている。

「正確に言うなら、行くのは二人だがな。彼女はある意味で別件な

ため、お前一人と考えて間違いはない」

「誰も連れて行ってはいけない……というのは、何かやると言われているのだと思いますが」

「大げさなことはせんよ。仮にも精霊同様……いや、それ以上に崇拝すべき契約者だ。やったとしても少々の色仕掛けが精々だろう。既成事実さえ出来てしまえば、ユウトを国に置いておけると思っているのかもしれん」

「……絶対に隙は見せないようにします」

「そうしてくれ」

二人して酒を飲み干す。

「けれど……」

優斗は一緒に向かう女の子について考える。
もう一人、というのは仲間の女の子。

「ココも唐突……ですよね。急に婚姻が決まり、顔見せのためとはいえ“婿入りしてくる相手”の国に向かうというのは」

「向こうも必死だ。王族の男子を婿に入れようなど普通は考えられないが、ミラージュ聖国にはリライトに婿入れさせても余りあるほど利点がある」

「僕とマリカですか」

「おそらくな。リライトと繋がりを持っておきたい、ということだろう」

ベストは優斗がミラージュ聖国にいてくれること。
けれど望みは薄いと考えているのだろう。
何かをやってくるのかもしれないが、あくまで相手は契約者。恐れ多いことはできない。
ならばベターな策を同時に行ってしまおう。
だからこそ結婚適齢期であり、年齢も近く王族を婿入りさせても問題ない公爵の位を持つココに白羽の矢が立った。
少なくとも“龍神と契約者がいるリライト”との関係強化に繋がる、と。
無論、ココ自身が優斗やマリカと親しいなどとは聞き及んでいないが、事実がそうだというのは僥倖だろう。
もちろんココの親もそれには大いに喜んだ。
他国とはいえ王族と血縁関係になることなど誉れ高い、と。
さらに相手は王族の中でも逸材という触れ書き。
ココが学生身分ではあるが、両親は今回の申し出を快く受ける。

「しかし、どうにも腑に落ちないところがある」

「なんですか？」

「ココはフィグナ家唯一の嫡子。故に我も少し介入させてもらったが、相手は『王族の試練』を此度、受けるほどの逸材……という触れ書きを送ってきている。だが、我の耳にはとんでもない駄目王子としか話が届いていない」

聞き届いていることと触れ書きが真逆の様相を呈している。

「……嘘、ですかね？」

「いや、お前みたいに実力を隠している……と考えられなくもない」

「けれど僕は相手がとんでもない駄目王子だった瞬間、その婚姻を叩き潰す自信があるんですが」

さすがにココが了承するなら仕方がないとも思うが、それでもココが婚姻をするということになった原因の一つは優斗にある。

だからこそ、やってしまいかねない。

「契約者が物言いをするとなれば、さすがに相手も聞かざるを得ないとは思うが……。まあ、こちらとしても本心を言ってしまえば穀潰しを我が国の民にする気もなし、ましてや公爵家の長など論外。ユウトの判断で決めればいい。ココの両親には我が何とでも言ってやろう。だから――」

王様は“あること”を優斗に伝えた。

「……荷が重いのですが……」

「我は心配していない。それに仕方なかろう。判断すべき人間は、お前以外にいない」

「そう言われると僕も困りますが……」

「お前たちの結婚に対する感性が我々と違うことは分かっておる。それでも、我はお前に任せようと思う」

と、ここでマルスが戻ってきた。

王様はこれで話は終わったとばかりに意気揚々と秘蔵の酒を飲み始める。
優斗は何か言おうとして……諦める。
どうせ、何か言ったところで覆りはしないのだから。

◇　◇

二日後、優斗とフィオナが王城に向かうとミラージュ聖国の盛大な馬車と護衛が待っていた。
ものごっつい武装をしている集団に近付くと、敬礼をされ……正直、優斗は引いた。
ただでさえ苦手だというのに、ごっついおっさんにされるとなると落ち着かない。
ココはまだ来ておらずフィオナと話していようかとも思ったが、周囲の注視を一身に浴びていたので、適度に別れの挨拶して馬車に乗る。
そして数分後、ココがやって来た。
後ろにはご両親の姿もある。

「あれ？　フィオがいるってことはユウも来てます？」

「もう馬車に乗ってますよ」

「ふ、二人とも来るの早いです！」

「ココが遅いんですよ」

仲の良い友達のやり取りを行うココとフィオナ。
優斗は馬車の窓から二人の様子を見ながら、数日前のことを思い出す。

それはクリス達の結婚祝いを大騒ぎでやっていた時だった。
クレアが酒で潰れ、フィオナがいつものように甘え上戸になり、いつものようにただの酔っ払い集団が出来上がっていたのだが、その中でも珍しくかなり酔っ払ったココが突然、こんなことを言い出した。

「わたし、これから皆のことを略称で呼びます！！」

いきなりの発言に酔っ払い全員の注目がココに集まる。

「いいですか～。これからは男性陣だったらシュウさんを『シュウ』！　ユウトさんを『ユウ』！　タクヤさんを『タク』！　イズミさんを『ズミさん』！　クリスさんを『クリス』と呼びます！」

「おいお～い！　俺は『シュウ』のまんまじゃねーか！」

「ズミさん……ってどこの親方なのだ俺は！！」

二人の酔っ払いが煽る。
展開は突然すぎたが、酔っ払いだからか普通に今のことを受け入れ

る。
もっとも、酔いが進んでいない優斗、クリス、アリー、リルは呆然とみていたが。

「いいんです！　シュウはもともと名前、短いんですから！」

次いでココは視線を女性陣へ。

「アリーさんは『アリー』！　フィオナさんは『フィオ』！　リルさんは『リルさん』！　レイナさんは『レナさん』！　さらにアリーとフィオにはわたしのことを呼び捨てにすることを強要します！」

なぜかとてもニコニコとしているココ。
素面組はこそこそと話す。

「ココ、大丈夫かな？」

「いつも以上にハイペースで飲んでましたから。何か弾けてしまったんでしょう」

「わたくしは別に呼び捨てにされたところで問題はありませんし、むしろ嬉しいことなのでいいのですが……」

「っていうか何で女性陣であたしだけ同い歳で『リルさん』なのよ！？」

「ココの中でそういうキャラなんでしょ。高飛車女王様キャラ」

「出会いが最悪でしたし」

「そうですわ」

「……容赦ないわね、あんたら」

素面とはいえ、少しは酔っているのでいつもよりもドギツイ言葉を使う優斗、クリス、アリー。

「いいです？　わたしは常々思ってました。仲間たるみんなと一緒にいて、何かが足りない。そう、愛称や略称が足りないと！」

ご高説をするかのようなココ。

他の酔っ払いが囃し立てる。

「え？　なに？　ココって演説キャラになるの？」

「ココさんの最上位酔いがこのモードになるのでは？」

「凄いですわね」

「前に飲んだときはあそこまで酔う前に潰れちゃったから知らなかったわ」

延々と民衆に語りかけるかのごとく話すココ。

彼女の語りは、その後……なんと1時間も続いた。

と、このようなことがあって、ココは全員の名称を改めた。

フィオナも酔ってはいたがココの話は覚えていたので、彼女のこと

を呼び捨てで呼んでいる。

「ココ、優斗さんが浮気でもしようものなら、全力で魔法を当てて構いません。私が許可します」

「いいんです？」

「問題ありません」

馬車の外で物騒な会話が行われていた。
優斗はココに慌てて声をかける。

「ココ、待たせても悪いから行こうよ」

「あっ、それもそうです」

ココが馬車の中に入りながら両親と軽く一言、二言と言葉を交わす。
優斗もフィオナと窓越しに最後の言葉を交わす。

「浮気したら駄目ですよ？」

「するわけないから。信用できない？」

「信用はしてますが……不安です」

思えば、物理的にこれほど離れるのは初めてのことだ。
それがさらなる不安を煽る。

「……フィオナ」

優斗は冗談なく不安そうなフィオナを見て、

「仕方ないな」

優斗は馬車から降りる。

無論、注目は浴びたが仕方ない。

「フィオナ、ちょっと目を瞑って」

「――？　はい」

不安そうな表情を浮かべたまま、素直に目を瞑るフィオナ。

――やるしかない、か。

優斗は一つ気合いを入れると、フィオナの頬に口付けをする。

「――っ！？」

ビックリして目を開けた彼女を優斗は間髪入れずに抱き寄せる。

周りも当然驚いているが、今は構わない。

「不安、なくなった？」

己の腕の中にいる婚約者に問いかける。

「……は……はい」

「戻るまで数日あるけど、頑張れる？」

優斗の腕の中で、フィオナがこくんと頷いた。

「できるだけ早く戻るから」

最後に強くフィオナを抱きしめてから、彼女の身体を離す。

フィオナの表情からは、すでに不安は抜けていた。

というか少し呆けている。

周囲が唖然としていたが、優斗は愛想笑いをしながら馬車に乗る。

少しして、先導の馬車に続いて優斗たちの乗った馬車が動き出した。

もちろんのこと、馬車の中にはココがいるので、

「ユウ、大胆です！」

大はしゃぎしながら優斗を賞賛していた。

一方で優斗は、

「……恥ずかしすぎて死にそう」

愛想笑いも崩れ、顔どころか全身を真っ赤にさせていた。

「え～、どうしてです？　すごく素敵じゃないですか」

「あんな場所で女の子を抱きしめるとか、死ぬかと思った」

「もっと大勢の前でキスしたって聞きましたけど？」

「あれは酔っ払ったフィオナのせい。今のはどっちも素の状態でやったから恥ずかしいんだよ」

「じゃあ、どうしてしたんです？」

「……フィオナが不安そうだったから」

でなければやるわけがない。

「うわ～、素敵な旦那様発言」

「いや、王様のせいで諸外国にはガチでフィオナの旦那認定されてるから」

酔った勢いで言ってみた。
思い返すと、とんでもなく無理があったと思う。
強引な上にバカみたいな理由。
どういう考えでそうなったのかと自分自身に問い詰めたくなる。
けれど、みんな文句も言わずに納得してくれた。

――うれしかった。

些細な夢が、また一つ叶ったから。
きっともう、全部は叶わないけど。
それでも……。

◇

◇

「ものすごく着飾ってるね」

優斗はココの姿をあらためて見てみる。

ヒラヒラのドレスで肩も出してる。

ネックレスやイヤリングもおそらく高級品だろう。

「これから夫となるべき人のところへ行くんだから仕方ないです。お父さんもお母さんも喜び勇んで服を用意しましたし。しかもユウが行くから一緒に行けばいいなんて、どんなです？　しかも一人で……なんて。軽くネタの領域です」

「相手が王族だしね。ココの両親も早めに決めておきたいだろうし、向こうも速攻で決めておきたいだろうし。互いの意見がかち合ったってことじゃないの？」

「でも世話係もなし、なんですよ？」

「そこらへんは……どうなんだろう？」

予想としては、色々とある。

同年代の二人で同じ学院生。友人じゃなくとも馬車で二人きりの空間を作れば仲良くなるだろう……という相手側の策謀。

無論、優斗が所帯持ちと聞いているからこそ、向こうもそういう手段を取ったとも思える。

もしくは婿入りさせるミラージュ側が呼んでいるのだから、その他のことは向こうが全て完璧に取り計らうため、来させなくていい。

それとも、可能性は低くとも“ココが拒否してしまう”かもしれないから、彼女の周りにいる余計な人物を来させないようにしているのか。

色々と考えられるが、全ては予想。
他に理由があるのかもしれない。
所詮は学生である優斗の浅知恵だ。

「というかユウはなんで制服なんです？」

「学生だからね。一応、制服も礼服の一つだし。それにもしかしたら、こんな服で来る僕のことを軽く見てくれるかも……」

「無理ですよ。ユウは国賓待遇ですから」

つまりは最上級の歓待を受けることとなっている。
なのに制服で向かうとかチャレンジャーすぎる。

「……そこなんだよね。リステルにマリカを連れて行った時でさえ来賓だったのに」

「それほどユウはミラージュ聖国の方々にとって崇拝すべき方なんです」

「崇拝って……。帰りたい」

そんなキャラじゃない。
っていうかマクスウェルを呼んだことが、なぜそうなるのか優斗には理解できない。

「諦めたほうがいいです。マクスウェルを召喚しちゃったんですから」

あっけらかんと言うココ。

だが、優斗としては少々心苦しい。

「でも、それが僕もココもミラージュ聖国に行く理由。マクスウェルを召喚したからココの婚姻にも繋がったんだし……」

「分かりませんよ？　あくまで予想は予想。ユウのことは関係ないかもしれないです。それに貴族の婚姻なんてこんなものです」

平然とココが言う。

「あっ、ユウはわたしと婚姻を結ぶ人のこと知ってます？」

「いや、余計な情報は入れないようにしてるんだ」

「どうしてです？」

「それは――」

ぼそぼそと話す優斗。

ココはそれを聞いて、大層驚くこととなる。

◇　◇

ミラージュに着く。
周りを楽しむ間もなく王城の中へと入っていく。
優斗とココの素性が割れているのか何なのか。
王城を歩くたびにすれ違う人が膝を着いて頭を下げるのは、勘弁してもらいたい。
まずは来客室にたどり着く。
優斗とココの部屋は間に1室あっての隣だ。

「わたしはここで待機となっております」

ココの口調が変わった。
迂闊に親しく話してミラージュの不評を買ってはいけない……とでも思ったのだろうか。
ことミラージュ聖国においては優斗のほうが立場が上。
彼女も公賓待遇ではあるが、優斗が国賓待遇になっているため、最初にミラージュの王家その他とお目通しをするのは優斗だけだ。
優斗としては国賓だの公賓だの、どうでもいいことだが。

――普通……逆じゃないの？　仮にも王族が輿入れする相手なんだからさ。

そこらへんは優斗もよく分からない。
しかも国賓と公賓を分けて謁見の間に行く理由も分からない。
ただ呆れ半分、一人で行くのに寂しさ半分。
騎士の方々に連れられて優斗は謁見の間へと向かう。

「……えっ……？」

そしてまさしく、謁見の場へと通された瞬間だった。

「総員！　ミラージュ建国の祖、大魔法士マティス様の再来――ユウト＝フィーア＝ミヤガワ様に最大の敬意を払え！」

凛とした男性の声が響いた。
同時に玉座へ続く道にいる偉い方々、全員が両手を交わし合わせ、膝立ちで頭を下げる。
ミラージュ王すらもやってきた。
勘弁被りたい状況だったが、迂闊に何か言えない状況でもある。

――本当に勘弁してよ。

軽く泣きたくなる。
きっかり１０秒、ミラージュ王が頭を下げたあとに顔を上げる。

「遠路遙々、よく来てくださいました。世界で二人目となる契約者とお会いすることができ、私も光栄であります」

しかも丁寧語で話しかけてきた。
目の前にいるのは、大体５０歳くらいの男性。
３０歳以上も歳が離れている人にこう言われるのは、正直に言って非常に嫌だ。
が、今はそれを押し殺す。

「この度、リライトより参りましたユウト＝フィーア＝ミヤガワと申します」

優斗もできるかぎり丁寧に言葉を返す。
挨拶と共に下げていた頭を上げて、少し周囲の様子を探る。
未だに王様以外は頭を下げていた。

「あの……皆様も顔を上げていただけると私も非常に助かるのですが……」

「それはそれは。恐れ多いこと、はばかりませぬ」

ミラージュ王が否定してきた。

「いえ、私は頭を下げていただけることに慣れていないのです。ですから私のことを想ってくださるのなら、顔を上げてください。是非ともお願いいたします」

優斗が本気で懇願する。

すると、恐る恐るではあるがその場の全員が顔を上げてくれた。

おかげで優斗は少しだけ落ち着ける。

「アリスト王より書状を預かっております。どうぞ、こちらを」

王様が認めた書状を渡す。

本来は優斗が膝を着いて渡すものなのだが、空気がそれを許していない。

むしろ敬語を使う空気すら出させてもらっていない。

しかもミラージュ王が渡す際に再度、膝を着こうとしているので慌てて渡す。

「……これは」

ミラージュ王が書状を開き、内容を見ると驚きの様相をミラージュ王が呈した。

優斗は書状に書いてあることを告げる。

「リライト公爵家であるココ＝カル＝フィグナの此度の婚姻、アリスト王に変わり私が見定める役割である、ということを知っていただきたく思います」

優斗の告げたことに周囲がざわつく。

「リライトの貴族の婚姻は王の承認が必要だということはご存じでしょう。しかし、貴国は私とココ＝カル＝フィグナの二人で、とのご所望でした。なので私がアリスト王に代わり、この婚姻を受け入れるか受け入れざるべきかを判断することになります」

いくら宗教国家として確固たる地位を築いているのだとしても、国としての格は三大国の一つであるリライトのほうが上。

もちろん利点云々、フィグナ家とミラージュ王家との力関係云々は置いておくとして、だが。

「大国リライトの公爵家に連なる者となるのです。私としましても生半可な者では承認することもできませんが……。ただ、触れ書きを聞かせていただいた限りは問題ないと思われます。何せ『王族の試練』を受ける方なのですから。無論、大事なのは本人がどういう人物であるのか、ということ。なので私はココ＝カル＝フィグナの相手が『王族の試練を受ける方』ということ以外、情報を得ておりません」

本当は『駄目王子』という話も聞いているのだが、この場で言うこともない。

というか自分の言っていることは大抵、事実でもあるがハッタリだ。

正直、自分がどうこうできるとは思っていない。

けれども優斗は心境をおくびにも出さずに告げる。

「私の目で、耳で、全ての情報を実感した上で結論を出そうと思っています」

優斗の発言に……周囲が凍り付いた。

なぜ『凍り付いた』のかは、今はまだ優斗も判断できない。

「どうかされましたか？」

訊くと、王様の近くにいる側近と思わしき老人が口を開いた。

「い、いえ、マティス様の再来である貴方様がこのような些細なことに関わることもないと思いまして……」

「そんなことはありません。私もリライトの一人として、貴族の一人として、公爵家に連なる方がどのような方なのか知る必要があります」

「さ、左様でございますか」

優斗が堂々と宣言すると、老人はスゴスゴと引き下がる。

と、ここで扉の開く音がした。

周囲の注目が、音のした扉へと向かう。

そこから現れたのは……、

「おっ！　お前がリライトから来たやつなんだ」

なんというか、もの凄く小さくて太ってる人だった。

けれど若い。

優斗よりも2つほど下だろうか。

なんというか大家族の末っ子とか金持ち一人っ子の甘えた部分を究

極までやったら、こんな感じになりそうだった。

――あ～、いるよね、こういうの。

とりあえずゲームとかアニメでテンプレのように存在するお間抜けキャラ。

服装からして高貴な身分だとは思うが、さてどういった人物なのだろうか。

「おい、お前。今ここでマクスウェルを召喚してみろ！」

何かいきなり色々とすっ飛ばして、とんでもないことを言ってきた。

先ほどよりも周囲が凍った。

「なんだ？　できないのか？　どうせ嘘なんだろう？」

ふふん、と勝ち誇ったような顔をする

「……無知なこと、大変申し訳ありませんが……貴方様は？」

「ぼくはミラージュ聖国第３王子、マゴスだ！」

なんとなく嫌な予感しかしないが、とりあえずは予感を打ち消して優斗は返答する。

「申し訳ありませんがマゴス様。真偽を確かめるために精霊の主を召喚するというのは、いささか無理なことかと存じます」

「そういってできない言い訳するんだな、お前は」

今度は空気が止まった。
凍り付きすぎて止まった。
優斗はどうしたものか、と考えて思い付く。

「……すみませんが、この中でリスタルの闘技大会を見に行った方はいますか？」

優斗の質問に幾人かが手を挙げる。

「では私がマクスウェルを召喚した姿を見た、というものはいますか？」

さらに訊く。
闘技場に行ったという人たちは、誰も手を下げなかった。
確かに少しは疑問でもあった。
どうして最初から、誰も彼もが自分を“マクスウェルを召喚した人物”であることを信じ切っているのか。
けれど見た人が何人もいれば、納得もできる。
そのうち何人かは精霊術士なのかもしれない。
それならば、より理解しているだろう。
優斗はマゴスに向き直る。

「彼らが見ているということは証明にはなりませんか？」

「だからやってみろと言っているではないか」

尊大不遜な態度は崩れない。
ライカールの王女様が似たような感じだったが彼の場合は全く毒気も悪意もない、ただのバカなので楽すぎる。
怒る気もないし、不機嫌になることもない。

けれどもどうやって対処しようか困った。

――どうしよう？

一応はマクスウェルも精霊の主だし、ひょいひょい呼んだところで逆に彼らが困りそうだ。

少し優斗が考える。

と、沈黙を勘違いしたのか、王様が顔を真っ赤にしていた。

「マ、ママ、マ……マゴス！！　お前は大魔法士様に対して、なんたる無礼な言葉を！！」

そしてマゴスの頭を地面に叩き付けながら、自らも土下座した。

「申し訳ありません！　この度のご無礼、是非ともご容赦のほどを！」

何度も何度もマゴスの頭をゴスゴスと地面に叩き付けながら、ミラージュ王も土下座する。

あまりに唐突すぎる展開に優斗も呆気に取られたが、さすがにこれは困ると同時に焦った。

――本当に勘弁！　ホントに勘弁！　マジで勘弁して！

冗談抜きで洒落になっていない。

「ちょ、ちょっと待ってください！　一国の主ともあろうお方が私などに土下座などしないでください！　私はこの通り、何も気にしていません！」

どうにかして頭を上げさせようとしたが、中々上げてくれない。
ほとほと困り果てていたのだが、ある男性から救いの手は差し伸べられる。

「父上。大魔法士様も困っておられです。父上の誠意は伝わっております故、ここは顔を上げてもよろしいと思います」

切れ長の瞳を持ったイケメンが助けてくれた。
まさしく超絶イケメン。
クリスや修よりもイケメンだろう。。
年齢は優斗よりも1つか2つ、上ぐらい。

――なんていうか、ホストとかにいそう。

かといってイメージ的に浮かぶチャラさや不誠実さはなく、ただ格好良い。
優斗でも見惚れそうになる。

――っていうか、この声って。

最初の凛とした響きを持った声の持ち主。
イケメンボイスの彼だ。

――何この最強生物？

父上と呼んだことからも王族。
見た目と血筋だけで、通常より遙かにオーバースペックもいいとこだ。
ミラージュ王はイケメンに言われて、

「真に申し訳ありません！」

最後にもう一度、マゴスの頭を叩き付けながら謝って顔を上げた。

「いえ、私はミラージュ王に頭を下げられるほうが困りますので……」

なんで格上の人物に頭を下げられないといけないのか。

優斗は精神的に疲れる思いをした。

「……少し拗れてしまいましたがリライト王からの書状も渡すことができましたし、私はこの場を退出したほうがよろしいでしょうか？」

なんかもうグダグダになってしまったので、とりあえず訊いてみる。

ミラージュ王から頷かれた。

「我が愚息のせいでとんだ事態になってしまい、恐縮の限りです」

「いえ、実際にマクスウェルを見ていないともなれば、疑問となるのは当然のことだと思いますから」

優斗が愛想笑いを浮かべると、ミラージュ王がほっとした表情を浮かべる。

するとイケメンがその場を仕切った。

「騎士団長！　大魔法士様を丁重に部屋までお連れしろ！」

命令を受けた騎士団長が優斗を促す。

マゴスもマゴスで強制的に退出させられていた。

優斗は彼らに最後の挨拶をかわしてから、謁見の間から離れた。
そのまま部屋まで連れてこられる。
ココの挨拶が終わるまでは、ボケっとしながら時間を潰す。
しばらくしてからココが戻ってくる気配がした。
夜のパーティーまでは自由時間だと聞いているので、優斗はココの部屋へと行ってみる。
もちろん、ココはこれから婚姻するべき相手と会うのだが、彼女も時間的に空きはある。
なので部屋まで行くと、会うことはできた。
部屋の外には護衛がいるが、中には優斗とココの二人だけ。
というよりも中で控えようとしてたメイドを丁寧に外へ出した。
優斗は緊張を解く。

「……疲れた」

「大丈夫です？」

ココが苦笑した。
二人してメイドが用意してくれた紅茶を口にする。

「……契約者って立場を舐めてた」

「何かあったんです？」

「ミラージュ王に土下座された」

「また、どうして？」

「いろいろとあってね。本当に勘弁してほしかったよ」

生まれてこの方、お偉いさんが悪意なく頭を下げてくることなどなかった。

「ユウは平民感覚が抜けない貴族ですし。さっきこの部屋まで来るときも面白かったです。あの困ったような表情」

くすくすとココが笑う。

「しょうがないでしょ」

「そうですね」

二人して紅茶に口を付ける。

と、ここで来客の知らせがあった。

優斗とココは佇まいを正して「どうぞ」と伝える。

現れたのは先ほどのイケメンだった。

「先ほどの愚弟の無礼を詫びようと来たのですが」

と、ここでイケメンの視線がココを捕らえる。

「まさかフィグナ様の部屋にいらっしゃる……と……は……」

ピタ、とイケメンが固まった。

ココが首を傾げる。

優斗も不審に思う。

「どうかされましたか？」

と、優斗が問うとイケメンはハッとした様子で膝を降ろす。

「い、いえ。先ほどは愚弟の無礼、申し訳ありません」

「気にしておりません」

そう言ってイケメンを立たせる。

「それより貴方はマゴス様のお兄様……ということでしょうか？」

「はい。ミラージュ聖国第2王子、ラグフォードと申します」

イケメンは名前も格好良かった。

「それで、その……大魔法士様。非常に尋ねがたいのですが……」

「何でしょうか？」

「大魔法士様はどうして、フィグナ様のお部屋に？」

ラグフォードが尋ねる。

さすがにこれから婚姻を結ぼうかとする女性の部屋に男性が入るなど、普通ではあまり考えられない。

というか親や兄妹でもないかぎり、あり得ないと思っていいかもしれない。

だが、それを答えるよりも先に、優斗は常々ツッコミを入れたい単語があった。

「あの、申し訳ありませんが……大魔法士様と呼ばれる器ではありませんので、どうか名前で呼んでいただけませんか？」

「しかし闘技大会では独自の神話魔法を自在に操り、マクスウェル様を召喚したのですから。まさしくマティス様の再来――大魔法士様と呼ぶに相応しいお方かと」

そう呼ぶのは当然だ、と。

ラグフォードは言っている。

「……あ～……」

ぶっちゃけた話、聞いたことのある『マティス』とマクスウェルから聞いた『マティス』は違っている。

トータルで考えればどちらの『マティス』とも一緒なのだが、やはり実物と差異がある以上、一緒だとは言えないと思うのだが……。

仮にもマティスが作った国なのだから、優斗は僅かな願いをかけて訊いてみた。

「質問なのですが、マティスって“何人”いますか？」

「それは……一人だけですが」

答えるラグフォードに、優斗の願いが散る。

――この国にも伝わってないんだ。

あの好々爺が嘘を言っている可能性もあるが、この話はおそらく本当のこと。

ということはつまり、ミラージュ聖国でさえ正しいことは伝わっていない、ということになる。

――まあ、お伽噺になるほど古いことだから、仕方ないのかな。

優斗は諦める。

「あの、それが何か……」

「いえ、何でもありません」

優斗は軽く手を振る。

「話を戻しますが、大層な名前で呼ばれてしまうとさすがに辛いのです。大魔法士マティスほどの功績を残しているわけでもないのですし。ですからせめて名前で呼んでいただけると助かります」

最後は軽く本気の懇願が入った。

するとラグフォードも優斗が本気で願っていることに気付いたのだろう。

「ではユウト様、と。それでよろしいですか？」

「ありがとうございます」

とりあえず、様付けまで格下げできたことは嬉しい。

本音は“さん”や呼び捨てなのだが。

少し安心して、最初の疑問を優斗は答える。

「では先ほどのご質問を答えさせていただきますが、謁見の間で伝えた通り、私は彼女の婚姻を判断する役割をリライト王より承っております。さらに言えば、私の妻が彼女の親友であり、私個人としても彼女は大切な仲間なのです」

「そうなのですか？」

「ええ。既知の間柄なのです」

あと、と優斗は続ける。

「非常に恥ずかしいことなのですが、私はこういった貴族の方々や王族が集まっている場に慣れておりません。少し彼女と話して私の緊張疲れを取るのと同時に、婚姻を判断する者として、これから婚姻相手と会う彼女の緊張も解こうと思った次第です」

「左様でしたか」

ラグフォードが納得したように頷いた。

いいのか？　とも優斗は思ったが、納得してくれたなら助かる。

「ならば緊張を解きほぐすがてら、王城をご案内いたしましょう」

言ってラグフォードは一人の女性を部屋に入れる。

歳は同年代くらいだろうか。

ラグフォードに似た美少女だった。

「お初にお目に掛かります、ユウト様。ミラージュ聖国第２王女、ミルファと申します」

女性がゆったりと頭を下げる。

「ミルファに案内係をさせようと思います」

ラグフォードがそう言ったので、優斗はココに訊いてみる。

「ココ、どうする？」

「わたしは問題ありませんが……」

ココがそう答えたので、優斗も了承する。

「では行きましょう」

立ち上がろうとした優斗だが、ミルファが少々焦ったような声を出した。

「あ、あの、フィグナ様もご一緒ということでしょうか？」

「ええ。何か問題が？」

「いえ、フィグナ様はこれから会うべき人もいるのですから、ユウト様だけで……」

要するに『優斗と二人で』とミルファが言ってくる。

「それなら私も遠慮いたします。あくまでココが問題ないと言うから私は行こうと思ったまでです。ココが残るのなら私も残ります。ココを一人にするなど、私の選択肢にはありません」

断言する。

「どうされますか？」

優斗が笑みを貼り付けたまま訊く。

困っている様子のミルファに、助け船を出したのはラグフォード。

「皆で行くとしよう、ミルファ」

彼がそう発言する。

優斗は分かりました、と頷いて立ち上がった。

ココも次いで立ち上がる。

するとミルファが優斗たちのところへ近寄ってくる。

ドアではなくこちらへ向かってきたことに、何かするのかと優斗はいぶかしむ。

すると彼女は優斗の手を取った。

「それではご案内させていただきます」

そう言いながら歩こうとするミルファ。

だが、引こうとする腕が動かない。

「すみませんが、手を離していただけますか？」

にこやかに、爽やかに優斗が伝える。

「え、あの……」

「離していただけますか？」

けれど決して甘さはない。

彼女程度なら、それだけで気圧されて手を離す。

――さて、今のはどう考えればいいのかな？

先ほどからの一連の流れ。
誰かに言われてやったのか、それとも個人の思惑でやったのか、天然なのか。
言われてやったというのなら、協力者はいるのかいないのか。
もしも色仕掛けみたいなものなのだとしたら、王様が“少々”と言った以上、今ぐらいが限界だと思いたい。

「ラグフォード様、ミルファ様」

とりあえず、今のが何であれ最初から全開で教えておこう。
無駄な企みを吹き飛ばすくらいの事実を。

「先ほど、私が妻帯者であることはお伝えしたと思います」

「はい」

代表してラグフォードが応対をする。

「リライトが一夫一妻制であることはご存じですよね？」

「知っております」

「故に無駄な誤解を生じさせたくないのはご理解いただけますか？」

「はい」

ラグフォードは普通に頷く。
隣でミルファも頷いていた。
だが、この言葉を聞いても平静を保っていられるだろうか。

「私は妻を心の底から愛しています。妻に誤解されでもしたら、誤解させた者に対して何をするか分かりません。神話魔法を放ってしまうかもしれませんし、マクスウェルを使って隕石で押しつぶしてしまうかもしれません。下手をしたら国ごと破壊する……なんてことも」

一瞬にして王女の顔が青ざめ、ラグフォードの表情が少し驚きを表す。

と、ここで優斗は苦笑を浮かべた。

「まあ、国というのは大げさになってしまいますが、実際に妻を傷つけられただけで土地を消滅させてしまったこともありますから」

まるまるすっきり、土一色にしたことがある。

「なので申し訳ありませんが、私は迂闊に見知らぬ女性と触れることを気をつけているのです。噂はどこから始まり、どこまで広がるのか分かりませんので」

続いて優斗はミルファに頭を下げる。

「ミルファ様も私の行動はご無礼だったと思いますが、ご了承の程をお願いいたします」

下げた頭を上げる。

そこには呆けた様子のラグフォードと、少し脅えたミルファの姿があった。

別に言い過ぎたつもりもない。

むしろ軽く言ってあげたつもりだ。

――というより、そっちが怖がるのは違うよね。

何かしらやられることを一番怖がっているのは優斗なのだから。

緊張を取り除くための話がでかすぎる

フィオナの話を聞いて、羨ましくないと言える人がどれほどいるだろう？
たった一人の男性があれほど想ってくれている。
たった一人の男性をあれほど想っている。
普通の貴族なら無理なはずで、ましてや公爵ともあろう家柄なのに。
皆が身悶えしそうな恋愛絵巻。
誰もが羨む純愛物語。
わたしは話を聞く度、面白くて、おかしくて、楽しくて、そして……酷く羨ましい。
相談をされる度、必至に、真面目に、親身になって、そして……酷く希う。
わたしでも出来るのではないかと思ってしまって。
アリーやフィオナと一緒に悩んで、リルにばっさりと断言してもらって、レイナに助言をしてもらう。
そんな、本当に甘美な夢を。

けれど実際は知りもしない男が婿養子としてやってくる。
割り切ってはいる。
所詮、貴族の結婚なんてそんなものだ。
夢も希望もありはしない。

――けど。

目の前にある物語が眩しすぎて。
近すぎて。
小さな頃に夢見たちっぽけな“願い”が、未だ消えずに胸に残ってしまっている。

◇　◇

王女様は優斗のことを恐れたのか何なのか、気分が優れないと言って帰っていった。
なので、とりあえず3人で王城の中を歩いていた。
優斗は残ったラグフォードを観察する。

「……」

おそらくは、彼は今の件について関係ない。
彼女が戻っていった瞬間、困惑した表情を少し浮かべたことからも窺い知れる。
弟がやったことを当人ではなく兄である彼が謝りに来ることからも、責任感があり誠実な性格なのだろう。
打算と計算でここに来た感じはないし、少なくとも感覚的に腹黒さなどは見当たらない。
これは今までの優斗の“経験”からして、間違いない。
なればこそ、訊いてみる。

「ラグフォード様。一つ質問なのですが、先ほどのミルファ様の行動は誰かに言われてやったことだと思われますか？」

「……おそらくは」

ラグフォードが頭を下げる。

「私の指導不足の至る所です。不快な思いをさせてしまって申し訳ありません」

「いえ、怒っているわけではありません。元々、そういうことがあると聞いてはいましたし、その行動が悪いとも思いません。ただ、貴方たちは私のことを知りません。私はこういう人物であることを、やってしまった後で悔やんでも申し訳ないと思いますので、今のうちにラグフォード様から皆様にお伝えしていただけると助かります」

「ユウト様のご厚意、痛み入ります」

本当に誠実なのだろう。
嘘偽りなく答えてくれた。

「大変情けない話ですが、私は妻や仲間が傷ついたり嫌な目に遭ってしまうと、国とか全てどうでもよくなってしまうのです。相手が他国の王族だろうと何だろうと、全力で叩き潰そうとしてしまって……」

「王族だろうと何だろうと……？」

「ええ。私がマクスウェルを使った闘技大会も、ライカールの王女が私の仲間を侮辱し、殺そうとしたのが原因で私がキレてしまったんです」

今思えば、やり過ぎている感はある。
と、ここで優斗は少し苦笑を浮かべ、

「内緒になりますが、試合終わったあとも二度とやらないようにライカールの控え室へ話し合いに行ったぐらいで」

話し合いという名の“脅し”ではあったけれど。

「ユウ。わたし、それ初耳です」

ココが訊く。

試合が終わったあとの話し合いとやらを聞いたことがなかったので、訊いただけなのだが。

「……ユウ？」

一瞬、素に戻っていた。

愛称で優斗を呼んでしまう。

「……ユウ、とは？」

そこをラグフォードに突っ込まれた。

ココは慌てて口調を戻す。

「ユ、ユウト様は過激なのですね」

……いや、その取り繕い方もどうなのだろう。

優斗は小さくため息をつく。

どうやらココは表面上は平然としていたが、かなり緊張しているらしい。

「ラグフォード様。これからのこと、見ないフリをしていただくのは可能でしょうか？」

「それは……どういった？」

「先ほども言った通り、ココの緊張を解したいのです。ですが今のままでは緊張を解くことはできませんから」

そして優斗は悪戯気にココを見る。

「特にこの子は緊張しすぎると失敗することも多いので」

ココが反射的に反論する。

「ユウッ！　……ト様。これでもわたしは公爵家令嬢。このようなことで緊張はしません！」

「さっきから失敗してるくせに」

からかう。

「……む～！」

優斗とココの何とも愛らしいやり取りにラグフォードの頬も緩む。

「ユウト様、フィグナ様。どうぞいつも通りにお過ごしください。私も緊張をして失敗してしまう経験はありますから、それが取り除けるのなら普段のようにしていただくのが一番でしょう」

なんとも話の分かる王子様だ。

優斗の中で彼の株がグングン上がっていく。

「ただ、やはり何というか……お二方は仲がよろしすぎると申しますか……」

少し言い辛そうにしているラグフォード。
優斗はそれを察して、

「まあ、確かにココは可愛いので疑いたくなるのも分からなくはありませんが……正直に言いましょう」

バシッと言ってみせる。

「ココは論外です」

おそらくココあたりから何かしら言われるかな、と思った優斗だが、否定は別のところから来た。

「そ、そんなことはない！　これほど可憐な方を見たのは初めてだ！」

ラグフォードが声を大きくして反論した。

「……えっ……？」

「……えっ……？」

優斗とココが同様の反応をした。
まさか否定の声がラグフォードから出てくるとは思わなかった。

「えっ！？　あっ、いや！　私は一般的なことを言っただけで！」

自分の言ったことに気付いたのか、ラグフォードも慌てて取り繕う。
優斗はそんな彼に小さく笑って、

「まあ、世の中の男性や貴方が見たらそうかもしれませんが、僕にとって恋愛対象とは妻のみが対象です」

ということで。

「つまり、妻以外の女性全てが論外です」

優斗はココに訊く。

「がっかりした？」

「するわけないです。ユウがフィオのこと以外を見始めたら、とりあえずユウの頭を叩いて直します」

治すではなく直す。

「だよね。そうなったら、僕も自分の頭がおかしくなったとしか思えない」

「そうですよ」

二人して頷く。
と、ここでラグフォードが訊いてきた。

「その、フィオ……というのはユウト様の奥方で？」

「その通りです」

優斗が頷く。

「スタイル良くて、おしとやかで、もの凄く美人なんです。どうやったらああなれるのか……」

「ココも同い年なのにね」

「ユウ、言っておくけどフィオとかアリーが美人過ぎるだけで、わたしだって可愛いほうです」

「自分で言う？」

優斗がからかうような声音で訊く。

「だってしょうがないです。ユウはフィオ一筋ですし、シュウは女の子に興味があるか分からないし、タクは婚約者の尻に敷かれてるし、クリスはおべっかが上手いですし、ズミさんはもう何なのか……」

告白はされる方だが、仲間内に評価されていないというのは良いのか悪いのか。

「みんなの妹分だからね。小さいから」

「そうです。妹扱いはされてますけど、女性扱いされてませんから」

なので自分から言わないと、優斗たちは理解してくれないだろう。

「フィ、フィグナ様！　フィグナ様はお美しい方だ！　私とて美し

い方は幾人とて見て参ったが、貴女ほど可憐な方を見たことはなかった！」

先ほどと同じよなことをラグフォードが言った。

「……」

何だろうか、この展開。

――これ……何？

一目惚れとかそういうオチ？
これから親戚になるからフォロー？
それとも貴族が相手にする賞賛の一つ？
いや、優斗としても普通に考えれば後者2つなのだが、どうにも熱が入っている気がしなくもなく。
判断に困る。

「……あ、ありがとうございます」

ココが少し顔を赤くしながら頭を下げた。

「い、いえ、女性を褒めることも王族たる自分の責務です」

対してラグフォードも少し、顔が赤みがかっているのは優斗の気のせいだろうか。

「そ、それよりお二方。この中庭にある彫像、これが誰だか分かりますか？」

ラグフォードが急に話題を振ってきた。
気付けば前には大きな彫像がある。

「……大魔法士マティス？」

ココが首を捻りながらも答えると、ラグフォードが頷いた。

「ええ。ミラージュ聖国、建国の祖であり、歴史上で数々の名を残している大魔法士マティス様。我々の誉れです」

誇り高いように告げるラグフォード。
だが、優斗はそれを見て、

「……男性……か」

一言、呟く。
それは小さく、誰の耳にも届かないと思えるほどの小ささ。
けれど耳敏くラグフォードが捕らえた。

「……ユウト様」

だからこそ問う。
先ほどの質問から合わせれば、優斗の知っている“マティス”が何者なのか、疑問が沸く。

「今の言葉と先ほどの“何人”という質問。ユウト様は何を知っておられるのですか？」

問われた優斗は少し驚いたが、しばし考えると……口を開く。

「これは冗談だということを前提とした話として了承して聞いていただけますか？」

「……？　はい」

「何が始まるんです？」

ココが尋ねる。

「大魔法士マティスの話だよ」

優斗はくすっと笑って話をする。

「ココは大魔法士マティスって、男性だと思ってる？」

「それはそうです。昔から絵本やお伽噺にはずっとマティスは男性だって書かれてます」

「でも違ったら？」

「女性ってことです？」

「ううん、そういうことでもない」

ラグフォードとココが首を傾げる。

優斗は言い方が悪かったな、と思いながら続ける。

「正確に言うなら“マティス”は二人いる」

「ふたり？」

「うん。これから言うことは吃驚仰天が満載だから気をつけて」

あらかじめ前置きをして、今度はラグフォードに問う。

「ラグフォード様。おそらく貴方はマティスの血筋であると思いますが……どうでしょうか？」

「その通りです。我々、王族はマティス様の血を引いております」

「では、建国したマティスは最終的に妻がいた、と。そういうことですよね？」

その質問の意図。

ラグフォードはすぐに気付く。

「……まさか」

「想像の通りです。大魔法士マティスの伝説はマティス夫妻が一緒くたになった話なんです」

二人のしたことが時が経ち、一人の人間がやったこととなってしまった。

「じゃあ、最初の契約者ってどっちなんです？」

「それは男性の方だよ」

「では独自の神話魔法というのは？」

「女性の方です」

まあ、ここまでは割と簡単な話。

「ただ、ここからがかなりややこしい話になるんですが」

チラリと優斗はラグフォードを見る。

「僕は正確に言うなら“一人目”の契約者なんです。もちろん、マクスウェルと契約したという点では二人目ですが」

「……どういうことです？」

ココにはさっぱり意味が分からない。

「ヒント。よく物語にある主人公と精霊との恋物語」

「……はい？」

そんなことを言われてもココは分からない。

が、ラグフォードは察しが付いたらしい。

「……もしかしてユウト様はこう言いたいのですか？“マティス様は精霊と恋をした”と。そして相手は……」

「そう、マクスウェルです」

優斗は意味なくピッと指を立てる。

「男性であり、最初の契約者であったマティスは精霊の主、マクス

ウェルに恋をした。そして彼らは紆余曲折の末に結ばれ……初代マクスウェルは人間となり、子を産んだ」

「精霊って人間になれるんです？」

「大精霊の人間型だけだけどね。特にマクスウェルは元素を司ってる。やってやれないことはないよ」

まあ、要するにどうにかこうにか“人間になれる”ということだけ知ってくれればいい。

「そして初代マクスウェルは次なるマクスウェルを創り出した。そのマクスウェルとは両方のマティスも契約してない。つまりは2代目マクスウェルと契約したのは僕が初めてってこと」

これが先ほどの“二人目”にして“一人目”という意味。

「世の中にある精霊と人間の恋物語の雛形はこの二人なんだよ」

「ふぇ～、凄いです」

ココが感心する。

ラグフォードは、

「……大ニュースだ」

驚愕の話を聞いて、しかも信じた。

「い、今すぐ皆を集め、ユウト様の話を教えなければ――ッ！」

あたふたと話を広めようとする。

「待ってください、ラグフォード様。最初に言ったでしょう？　冗談として話を聞いてください、と」

「……そうでした」

契約者が話すものだから、ラグフォードは真実偽りない話として受け取っていた。

というよりも今の話が嘘だとなぜか思えない。

けれども契約者が冗談だと言うのだから、今は自分の内に秘めておこうと思う。

「ユウ。ちなみに二代目のマクスウェルは、どうして初代のマクスウェルと同じことにならなかったんです？」

「初代は見目麗しい女性。二代目のマクスウェルの姿は老人だからね。精霊の主にして、龍神を守護していると言われているじいさんと恋愛する猛者はいないと思うよ」

優斗のおどけた言い方にココから笑いが漏れる。

「そうですね」

頷くココに笑みを浮かべて優斗が時間を見れば、戻るにいい時間だ。

「さて、と。そろそろ戻ろうか。ココも色々とチェックしないとならないだろうしね」

「はい」

駄目だけど嬉しい

もうちっぽけな夢は叶えられないかもしれないから、と。
そう思うから。
せめて素晴らしい婚姻相手であればいいと思う。

優斗のように優しくて、修のように面白くて、卓也のように頑張り屋で、和泉のようにちょっと変で、クリスのようにかっこいい。
そして自分の心を見てくれる。
もちろん、全部を求めるわけじゃないけれど、少しぐらいはあって欲しい。
そんな人なら、きっと自分は愛していくことができると思うから。

◇　◇

今はココが婚姻相手と会っている。
優斗とラグフォードは二人が会っている隣の部屋で待機していた。
――ベストはこの人が婚姻相手だったんだけど……。
ミラージュ聖国には第４王子までいると聞いているが、第１王子は跡継ぎだから違う。

第2王子のラグフォードはここにいる。
残るは第3王子と第4王子だが、マゴスの年齢から考えて第4王子はまだ適齢期ではないはず。
つまるところ、

「ラグフォード様」

「何でしょうか？」

「ココの相手は……マゴス様でしょうか？」

「はい」

ラグフォードに頷かれた。
何となく予想はついていたとはいえ、外れて欲しかった。

「マゴス様は『王家の試練』を受けられるお方と聞いているのですが、いつ受けるのですか？」

「明日にでも。貴方たちの前で試練を受ける予定でいます」

「僕たちの前で？」

「はい。証明するには、それが一番だと」

一番って……そんな簡単なものなのだろうか。

「ラグフォード様。僕も『王家の試練』については調べました。王家が保管している“ミラージュの森”にて試練の証となるものを取ってくる。そしてミラージュの森には王族以外が力を出せないよう

に制約がされてある、と」

「その通りです」

「マゴス様は僕やココを連れて守れるほどの武芸者なのですか？」

「……いいえ、違います」

ラグフォードは力なく首を横に振る。

「明日は３０人編隊で向かいます。指揮能力を発揮し、『王族の試練』を乗り越える算段を整えています」

優斗はラグフォードの様子と今の話を聞いて、きっとミラージュ聖国が用意するのは熟練者３０人なのだろうと予想がつく。

「ですがそれで僕が納得すると思います？」

「……それは……」

ラグフォードが言葉に詰まった。

その瞬間だった。

別室の扉が開く。

いくら何でも早すぎた。

まだ5分かそこらしか経っていない。

ココの姿が見える。

「……ココ！？」

彼女の様子に優斗が思わず席を立った。

「……ユウ……」

戻ってきたココの瞳には、今にも涙が零れようとしていた。

◇　◇

ココは婚姻相手の姿を最初に見たとき、思わず落胆した。
彼の姿はあまりにもだらしなく、ラグフォードを見て予想していたのと全然違っていたから。
けれど、

「なんだ、ちんちくりんじゃないか」

第一声はもっと酷いものだった。

「もっと胸が大きくて美人なやつはいなかったのか？」

容赦なく言ってくる。
悪気はないのだろう。
ただ、思ったことを彼は言っているだけだ。

「チビで胸無くて色気ない奴がぼくの嫁？」

まるで駄々をこねる子供みたいな態度だ。

「こんな奴のところにぼくが婿に行くなんて冗談じゃない！　もっと美人でボンキュッボンの嫁がよかった～」

ココを貶めているつもりはないのだろう。

ただ、彼はわがままを言っているだけ。

「マ、マゴス王子っ！　この婚姻はこちらから是非にと仰ったものですので……」

控えているメイドが思わず口を出してしまった。

けれども彼は止まらない。

「そんなのぼくには関係ない！　美人だって聞いてたのに！」

納得がいかないのだろう。

「さっきのやつだって、マクスウェルを召喚しろって言ってもやらないんだもんな！　リライトは嘘つきばっかりだ！」

あ～だこ～だと言う彼に、ココがようやく口を挟む。

「ユ、ユウト様は間違いなく契約者なので……」

「なんだお前！　これから夫となるぼくに文句を言うのか？」

「い、いえ、そういうわけではなく」

マゴスの機嫌を損ねそうになり、思わずココが引き下がる。

「あんなのでも妻がいるっていうんだからな！　どうせ大したことないやつだろうけど！」

「……その、彼の妻はとても素晴らしい方で……」

「そんなわけないだろう？　あんな嘘つきの妻なんて」

当然だ。

「で、でもわたしは彼とも彼の妻とも友人でして……」

「友人～？　ちんちくりんなお前の友達なんて、ちんちくりんしかいないんだろう？　だからあいつもどうせ、ちんちくりんなんだ。妻なんて輪をかけてそうだろう？」

「――っ！」

思わず言い返しそうになる。

けれど……言えない。

目の前の彼は自分の夫となる人物。

無駄に関係を悪化させてはいけないし、そうなってしまってはフィグナ家にも迷惑が掛かる。

公爵令嬢として、それだけはやってはいけない。

「……っ」

けれども悔しさで胸が一杯になる。

しかしマゴスは彼女の心境など知ったことではない。

「おい、ちんちくりん。お前、くだらないやつと友達やってるなら、全部切れ。ぼくの妻になるんだから、相応しいやつを友達にしろ」

「……それ……は……」

言い返したい。
けれど言い返せない。
ぐっと唇を噛みしめる。
絶対に、絶対に違う。
くだらなくなんてない。

――そう……思ってるのに。

言い返せない。
言っては駄目なのだと……自制する。

「フィ、フィグナ様！　マゴス様！　か、顔合わせはこの程度にして、あとはパーティーにてゆっくりと話し合うのがよろしいかと！」

そんな彼女の雰囲気を悟ったメイドが、口を挟む。
本来ならば彼女は控えているだけのはずだが、状況がそれを許さなかった。

「まあ、いいや。父様にもっと美人でボンキュッボンの嫁とか愛人ができないか聞いてみよっと」

マゴスは知ったことかとばかりに意気揚々と引き上げる。

「……それでは……失礼します」

ココは彼に頭を下げながら部屋を後にしようとする。
僅か数分。
ほんの少ししか会っていないのに。

「……」

辛かった。
あんなのが自分の夫となるなんて。
あんなのが自分と夫婦になるなんて。
信じたくない。
思わず、目頭から涙が溢れそうになる。
理想は儚く散って。
現実はあまりにも酷いもので。
何より自分自身に腹が立った。

「……バカです、わたし」

ドアを開けて、隣室に入る。
優斗とラグフォードがそこにいた。

「……ココ!?」

思わず優斗が立ち上がって駆け寄る。

「……ユウ……」

友達の姿を見て、自分が酷く情けなく思える。
思わず彼の胸元に手をやり、服を握りしめてしまった。

「どうしたの？　辛いことがあった?」

優しく声を掛ける優斗。

「……違うんです」

ココは首を横に振る。

辛いだけじゃない。

それ以上に、

「……わたし……言い返せなかった……」

悔しいんだ。

「わたしのことも少しは言われたけど、そうじゃなくて……」

自分のことも言われて、少しは嫌だったけど。

「ユウのこと……フィオのこと……みんなのことを言われたのに……」

みんなの悪口をたくさん言われたのに。

「この人と婚姻するからって……たったそれだけで言い返せなかった……っ！」

声を発することが出来なかった。

「……何も……言えなかった……っ！　わたしの大切な仲間のことなのにっ！！」

思わず涙が零れる。
酷く、酷いくらいに自己嫌悪だ。

「……バカ。我慢したんだったら、それを誇ればいい」

けれど優斗は優しく言う。
ココは何も悪くないと、何も間違っていないと言っているようだった。

「泣きたくなるほど嫌なことでも我慢したんだから、悔やむんじゃなくて誇ればいいよ」

「でも……っ！」

「僕とか修とか和泉とかなら、仲間に何か言われたら相手が誰だろうと言い返すだろうけど、今回の場合のココは違うよね？　これから一生を付き合うかもしれない人に言われたんだ。言えなくても無理ないよ」

頭を撫でる。
優しく撫でていると、優斗の胸に軽くココの顔が当たる。

「……フィオに……怒られちゃいます」

「ココを泣かせたまま放置したほうが怒られる」

「……許してくれなかったら？」

「ココは仲間だし、僕たちの妹分だよ？　これぐらい許してくれるって」

「……うん」

しゃくりあげるココは子供のように頷いて、優斗の胸に顔を預ける。

「お兄ちゃんに甘えるのは……妹の特権です？」

「そういうこと」

ココが落ち着くように、優斗は頭を撫で続ける。

けれど視線はラグフォードに向く。

「ラグフォード様」

「……はい」

「今は出て行ってもらってもよろしいでしょうか？」

「……はい」

黙ってラグフォードが席を立ち、部屋を後にする。

若干、優斗の言葉が冷たく感じるのはラグフォードの気のせいではないだろう。

しかしラグフォードが悪いというわけではない。

マゴスに対しての感情が漏れてしまっただけのこと。

けれど彼は何も言わずに立ち去った。

「ありがとうございます、ラグフォード様」

きっとココのことを慮って彼は立ち去ってくれた。

マゴスと違って本当に出来た王子だ。

――それに、ね。

今、泣いているココを。

こんな彼女の姿を彼に見せるのは忍びなかった。

頭を撫で続けて、１０分ほどだろうか。

「落ち着いた？」

「……落ち着きました」

ココは涙も止まり、しゃくりあげていた呼吸も普段通りになっている。

「というわけで、甘やかし終了」

パッとココの頭から手を離し、少し距離を空ける。

あまりの早さにココから小さく笑みが零れた。

「やっぱりフィオのことが怖いんです？」

「それはもちろん。フィオナの嫉妬なんて、出来れば受けたくない」
「だったらやらなければよかったのに」
「けど、やらなかったら怒られる」
優斗の返答に思わず笑う。
「大変ですね、ユウも」
「そうなんだよ」
お互いに苦笑する。
そして同時にため息一つ。
「あの人が夫になるって……正直、嫌です」
「やっぱり？」
「はい。わたしのことなんて何も考えてくれないと思います」
彼は自分勝手でわがままだ。
「それにわたしのこと、ちんちくりんって言ったんですよ」
「……あらまあ」
「……ユウ？　別に間違ってなくないか、とか思ってます？」
「いやいや、さすがにちんちくりんとは思えないって」

小っちゃいとは思っているけれど。

「ならいいです」

小さく笑って、そして真面目な表情をココが浮かべる。

「……分かってるんです。お父さんとお母さんは今回の婚姻、逃したくないって。触れ書きを見ただけなら、わたしだって頷きます」

「しかもラグフォード様と会ったあとだけに、弟も……と予想したけれど実物は予想以上に酷い、か」

どこが傑出した人物なのか分からない。

「でもわたしは健気に笑って婚姻を受け入れるべきです。こんな良縁、もうないかもしれないんですから」

これほど誉れとなるべき婚姻は来ないはず。

「相手は王族ですし、多少のことなら我慢すればいいです」

自分が我慢しきればいいだけ。

「でも……」

“昔の自分”なら出来ても“今の自分”は出来るか分からない。

「……やっぱりユウとかみんなと一緒ですね。みんなのこと言われると、すごく嫌です。我慢するのが辛いです」

きっと一緒になってしまえば、今回のように色々と言われてしまうだろう。
そうなってしまったら自分は、

「我慢しきれる自信がないんです」

「……フィグナ家の考えとココの立場として、今回の婚姻は成功させたいって思ってるの？」

「……はい」

嬉しさの欠片を表さずにココが頷いた。

「だから何としてもこのまま、婚姻を結びます。わたしが拒否しなければいいだけだから」

「そっか」

優斗はただ、それだけを言った。

――ココも両親も成功を願ってる。

滞りなく婚姻を結ぶことを。

――なら、仲間の僕はどう動くべきだろう？

ココが家のために、と考えて婚姻を結ぼうとしている。
自分の気持ちを無視して。

――あいつらなら、どう言うのかな？

少し考えて……思わず笑みが零れる。

――決まってるよね。

きっと異世界組は同じことを言う。

自分がやろうとしていることを、全肯定してくる言葉を言ってくる。

元々、こっちにいるメンバーは悩むだろうけど、結局は同じことを言うだろう。

――うん。

なら、やるべきだ。

――本当は見ているだけにしようかとも思ってたけど。

相手が“あんなの”なら、話は別だ。

ココは優斗が何もしないと思っているのかもしれない。

けれど、

――結婚観が違うんだよ、こっちの世界とはね。

だから決めた。

動く。

そして結果として、どうなろうとも受け入れよう。

故に覚悟する。

ココに嫌われてもいい、という覚悟を。

◇　　◇

夜になりパーティーが始まる。
メインはやはり優斗。
彼の周りにはひっきりなしに人が集まってくる。
かといってココのところに来ないわけではない。
上辺だけの美辞麗句を交わしながら、様々な人たちがやって来た。

「ふぅ……」

一旦、ココのところにやって来る波が止まる。
ほんの少しだけではあろうが、ゆったりとした時間ができた。
と、ここで一人の男性がココのところへとやって来る。

「フィグナ様。度重なる愚弟の愚行。まことに申し訳ありません」

本当に申し訳なさそうにラグフォードが頭を下げる。

「別にラグフォード様が謝ることではありません。わたしの容姿が問題ということもありますから」

「そんなことはない！　何度も言うが、私は貴女ほど可憐な女性を見たことがない！」

本当に。

誠実な言葉をラグフォードが紡ぐ。

「……はい。ありがとうございます」

それが嬉しくて、笑みが零れる。

「ユウト様は様々な方々の相手をしておりますし、その間は私が貴女のお相手をさせていただこうと思っています」

「そんなこと、恐れ多いです」

手を横に振るココ。

「いえ、私がお相手させていただきたいのです」

切れ長の瞳を笑みに変えるラグフォード。

思わずココもドキリとする。

「そ、それなら……」

頷いて、話し始める。

「話し方もユウト様と同じようにしてもらって構いません。先ほどまで接待で疲れたでしょうから」

「え？　でも……」

「少しくらい気を抜く必要があると思われます」

お茶目に笑う。

「それなら、ラグフォード様もいつも通りに話してもらっていいです？」

「私も？」

「はい。わたしだけ、というのはおかしい気がしますし」

ココの提案に少し驚いた表情のラグフォードだが、頷く。

「分かった。なら私のことは“ラグ”でいい」

「ラグ？」

「そう。フィグナ様……いや、ココが私もいつも通りでいいというなら、ラグと呼んでくれるのが一番助かる」

「分かりました」

ココが首肯する。

「しかしココは素晴らしい友人をお持ちだ。大魔法士様が友人など、こちらとしても驚いている」

「そうです？　わたしの周りってユウみたいにとんでもない人ばっかりなんですよ」

何が凄いって、彼は氷山の一角にすぎないこと。

「そうなのか？」

「そうです。よくもまあ、あれほど変なのばっかり集まったと思います」

「例えば、どのようなご友人が？」

興味本位でラグが訊いてみる。

「男の子で言うならユウはあんなですし、シュウもユウと同じくらい凄いですけど、それ以上に暴れ回ってるし、タクは案外まともかと思ったらリステルの王女様と婚約して尻に敷かれるし、クリスはクリスで普通かと思えばシュウとズミさんに振り回されながらも遊ぶ度量の広さ持ってますし、ズミさんはただの変人です」

「……あ～……女性陣は？」

「フィオは純粋培養された絶滅危惧種みたいに可憐な女性で、アリーは最近いたずらを覚えた王女様ですし、リルさんはリステルの王女様ですけど性格的には女王様ですし、レナさんは女性だけどみんなから戦闘狂って言われるぐらい戦うの好きです」

要するに、まともな奴などいない。

「……愉快な友人……だと言っていいのか？」

「はい。とっても愉快です」

毎日が楽しかった。

「……そうか。だからユウト様は非常に仲間思いなのだな」

「ユウはわたし達の中で一番怒らせちゃいけない人ですけど、巡りが悪いのか一番怒ってる回数が多いです」

「そんなにユウト様は怒るのか？」

「ユウが怒るのって、基本的に仲間の誰かが何かされた場合です。それで運が悪くて、誰かが傷ついた時にはいっつもユウがいて怒ってます」

平然と言うココだが、ラグはある予想にたどり着く。

「その話を聞いて思ったのだが。ユウト様は今、怒っているのではないか？」

ココが泣いた。

彼女の言うとおりなら、優斗は怒っているのではないだろうか。

「あれぐらいなら大丈夫だとは思いますけど……」

プッツリとはいってないはずだが。

「ただ、さっき何か決めたような目をしてました」

決意をしている表情だった。

それに気付かないココでもない。

「何をするのかは分からないけど」

何をどう、決意をしたのかは知らないけれど。

「きっとユウは、わたしのために……」

彼は――いや、私達はいつもそうだから。
いつも仲間のために何かをしでかす。
自分だって今の立場に他の誰かがいたら、優斗と同じように動くだろう。
だからこれは、推論ではなく確信。

「わたしの所為でユウは何かするんです」

そう言って、ココはミラージュ王と話している優斗を見る。
きっと彼は今から、何かするのだろう。

◇　◇

話していると気付く。
今回の婚姻、仕組んだのはミラージュ王ではないことに。
彼はひたすらに優斗を崇拝しているが、策謀だのなんだのとするような感じではない。
誠実さで国を引っ張っているタイプだ。
ラグフォードはおそらく、彼の血を多分に引いているのだろう。

――でも。

最終承認をしたのはミラージュ王だろうと思うから。
だから切り込む。

「ずっと気になっていたんです」

「何がでしょうか？」

「なぜリライトの公爵家に王族を送り込めるのか、ということです」

「それは……」

「ああ、送り込む理由は何となく分かっているからいいんです。私が問題と思っているのは“なぜ王族であるマゴス様を送り込めるのか”ということです」

一瞬、後ろに控えている重臣たちに緊張が走るのを優斗は見逃さない。
おそらくは彼らが何かしら動いているのだろう。
だが、まあ、どうでもいい。

「そちらはこう考えているのではないですか？“王族ならば向こうも迂闊に断ることなどない”と。例えそれがどのような相手でも」

腐っても王族。
王族同士なら大国であるリライトが断ることはあっても、公爵と王族ならどうだろうか。

「いくらリライト王だとしても、なし崩しで認めるのではないか、と」

優斗が言っていること。
これは合っているかどうなのかが重要では無い。
“婚姻を判断すべき優斗”が現時点でどう思っているのかが重要だ。
だから間違っていたっていい。
仮説に何を言われようと結論は変わらない。
今、言っているのは結論に対する適当で傲慢な理由付けなのだから。

「王族との婚姻となれば、フィグナ家としては例えどんな相手でも婚姻することでしょう」

優斗はミラージュ王だけでなく、後ろの重臣たちをも見据える。

「そちらには利点しかありません。リライトとの関係が深く繋がり、嬉しい誤算として私とココ＝カル＝フィグナは親しい関係です。尚且つ言い方が悪くなりますが殺潰しを処分できる。ノーリスクハイリターンです」

損が一つもない。
優斗だって最初の出会いとココを泣かせたことで、彼を素晴らしい人物などと思うことは到底ない。

「触れ書きにしてもそうです。私は一つだけしか聞いておりませんが『王族の試練』を受けられるほどの傑出した人物……と聞きました。ですが第３王子を見る限りは『王族の試練』を受けられるだけであり、試練を越えられるのか越えられないのかは別問題。要は『王族の試練』を受けたという事実があればいい。それだけで傑出した人物と言うことができる。まあ、そこに私とココ＝カル＝フィグナを連れて行く理由は分かりかねますが、どうせくだらないことでしょう」

彼の指揮に従って敵を倒す。
それで優斗やココが勘違いでもすれば儲けものだとでも思っているのだろう、と優斗は勝手に判断する。

「さらに言うなら私とココ＝カル＝フィグナの二人だけで来させたのは、リライト王の判断する情報を格段に減らそうとしたから。彼女のことを想っている臣下が一緒に来ないのはそういういいことでしょう？　彼女だけならばリライト王に対して否定はしない」

相手が誰であろうと。

「ただ、そちらの唯一の誤算は判断すべきがリライト王ではなく私であるということ」

二人で来たうちの一人が婚姻を判断するなど。
契約者とはいえ、リライトでは一介の貴族である優斗がそんな大役を任されるなど。
これほど馬鹿げた展開は読めなかっただろう。

「……悪いですが、相手が駄目なら私はココ＝カル＝フィグナの立場も彼女の家族の考えも殺して此度の婚姻を潰します」

だってそうじゃないか。
自分は日本生まれの日本育ち。
自らの両親はそうじゃなかったとしても普通、“結婚”というのは幸せで然るべきだと考えて何が悪い。

「フィグナ家を考えたら潰しては駄目です。彼女の立場を考えても潰しては駄目でしょう。けれど私の判断基準は『ココが幸せになれ

るのかどうか』ということです」

優斗の判断基準はその一点。

「例えマゴス様が大人数を指揮して『王族の試練』では傑出した才能を見せたとしても……」

今日、優斗が見た姿と違う姿を見せたのだとしても。

「僕の仲間を泣かせておいて、滞りなく婚姻を進ませるわけないでしょう」

断言してやる。

あり得ない、と。

そのためだったら苦手だろうと何だろうと、いくらでも上から目線で話すし偉ぶって高慢ちきを演じてやろう。

嘘でも謀りでも何でもやってやる。

「もしマゴス様に対する私の評価を覆したいのなら、明日の『王族の試練』……連れていけるのは私達以外で一人だけです」

それが最低限の譲歩だ。

「それ以上を連れてくるなら、問答無用で今回の婚姻は潰します」

◇　◇

「ミラージュ王と後ろの重臣が真っ青になってます」

「何を言われたのだろうか？」

「おそらく婚姻を潰す、と。そう言ったんです」

ラグの表情が一瞬、驚きと……何かしらの感情を浮ばせる。
だが、すぐにかき消える。

「ココはそれでよろしいのか？」

「わたしの立場としてはやめてほしいです」

今回の婚姻を潰してほしくない。

「けれどきっと、ユウはわたしの立場とかわたしの家のことを考えた上でやったんです」

考慮はしただろう。
けれども結果、ああいった行動に移った。

「きっとわたし達、誰だってそうなんです。大切なのは『仲間が幸せなのか』ってことだけで」

家のこととか、立場とかは後でどうとでもしてやるから。
まずは幸せが第一だろう、としか考えない。

「わたしの考えとしては、何をバカ言ってるんです!?　って言いたいけど……」

余計なことをするなって怒鳴りたい。

「でも、気持ちは『ありがとう』って。そうとしか思えないんです」

あんな男と婚姻を許してくれなくてありがとう。

そんなことしか思えない。

「きっとラグならユウもあんなことしないで認めてくれたでしょうけど」

「えっ!?」

ラグがこれ以上、ないほどに驚く。

「知りませんでした？　ラグってユウからは評価高いんです」

「い、いや、さすがに会って数時間だからな。分からなくても無理ないだろう?」

「でもユウは認めてます。ラグのこと」

少なくともミラージュ聖国の中で一番の好印象だろう。

「わたしもラグだったら……って思いますけど」

彼が自分の白馬の王子様なら、きっと素直に受け入れられるだろうけど。

「わたしの婚姻相手はマゴス様だから」

余計なことは考えないでおこう。

王道のような馬鹿者

夢は夢。
あっけなく、儚い。
少しだけ期待したけれど、現実は甘くない。
きっと彼と婚姻してしまえば。
大切な場所にはもう、行くことができない。
仲間と一緒にいれない。
バカみたいに騒げない。
なんとなく、そんな気がする。

初めて出来た友達。
初めて出来た親友。
初めて出来た仲間。

この9ヶ月間は本当に、今までの記憶が色褪せるぐらいに素晴らしかった。
これほど楽しかった日々は知らない。
アリー、フィオナ、クリスと同じくらい輝かしく思っている日々。
それを宝物に詰めて、頑張ろうって思ったけど。
仲間が認めてくれるわけもない。
そうすることが当然のように出てきて。
そうすることが当たり前のように動いて。

わたしを護ろうとしてくれる。

当然だった。
自分だってそうする。
間違いなく、同じことをする。
だから「やめて」とは。
言えない。

◇　　◇

「ラグだったら……か」

先ほどのココの言葉が繰り返し、ベッドで横になっているラグの頭の中に響く。

「此度の婚姻は絶対に逃せない」

あれほど契約者と縁のある相手なのだ。
逃せるわけもない。
けれどマゴスが相手で、優斗が許すとは思えない。
ならば、と考えてしまう。

「私なら……」

優斗は考えを直してくれるのではないか、と。

「……ははっ」

自嘲する。
何を真に受けているのだと。
あんなのはおべっかに決まっている。

「……」

けれど。
初めて彼女を見た瞬間。
見惚れてしまった。
ああ、まさしく一目惚れだ。
“可憐”という言葉がそこにあったのだから。

「……」

そんな彼女のことを僅かな可能性でも貰い受けられる可能性があるのなら。
自分は動くべきではないだろうか。

「……ユウト様はすごいな」

彼女の友人は彼女の幸せのために動いている。
思い悩む様子もなく。
素直に敬意を示すほかない。

「……本当に」

父に頭を下げられて、あれほどオロオロしていた人物。

威張るような人物でもないだろうし、契約者だというのに傲慢にもならない。
むしろ小市民の矜持しか持っていない感じだ。
また、ココを慰める様子からも本当に優しそうに思える。
おおよそ問題を起こすような人物には見えないのに、先ほどは父に真っ正面から言い放っていた。
それは間違いなくココのためで。
純粋に彼女の幸せを願った行動で。
それでココから嫌われようとも構わない、といった様子で。
どれほど彼にとって……いや、彼女が言っている“仲間”にとって、ココが大切な人なのかということを教えられた。

「……っ！」

起き上がる。
無意識に歩き始めていた。
気付けば目的地まで早歩きで歩く。

「……」

決めた。
決意をすれば簡単だった。
ドアを二度、ノックする。

「父上、お話があるのですがよろしいでしょうか？」

◇　◇

翌日、森に行くメンバーが集まっていた。
とりあえずは3人。
優斗とココと、

「ココ、ユウト様。昨日のユウト様の提案を父上はお受けになり、私が一緒に参ることになりました」

ラグがそこにいた。

「……ラグ、どうしてです？」

驚くような表情でココが訊いた。

「私は大精霊、ウンディーネ様を召喚できます。また王族の血族ゆえ、ミラージュの森の制約もありません」

話を聞けばラグは精霊術士らしく基本４属性の精霊をある程度扱え、水の大精霊を召喚できるとのこと。
けれど優斗の関心は別にあった。

「へぇ、名前で呼び合うようになったんだ」

「――――！？」

優斗が言ったことにビクっとするラグ。
けれどココは何でもないように、

「そうなんです。昨日、ユウがパーティーで囲まれてるときにそうなっちゃいました」

「そうなんだ」

優斗が面白そうな表情を浮かべた。

「ユ、ユウト様！　ユウト様もぜひ、私のことをラグとお呼びください！」

優斗の様子になぜか焦った感じのラグ。
少し後ろめたいとでも思っているのだろうか。

「いえいえ、王族の方を呼び捨てにするなど恐れ多いです」

「なに言ってるんです？　リルとかアリーのこと、呼び捨てだったり愛称で呼んでるのに」

「あれは身内だからね」

と、ここで優斗は試すように、

「ラグフォード様はそれでも僕に呼び捨てを望みますか？」

「……あっ……えっと……」

逡巡する様子を見せるラグ。
だが、頭を一度振ると、

「……はい。大魔法士様に“様”付けされるなど、恐れ多いです」

「そうですか」

今の答えはどのように取ればいいのか、優斗は少し判断が付かない。
けれども今の話を聞いてなお、望んだところは評価できる。

「分かりました。では僕もこれからはラグと呼びます」

「……ありがとうございます」

ほっとしたラグ。

「それで今回の中心人物であるマゴス様はまだでしょうか？」

今は集合時間ちょうど。
しかしマゴスの姿は見えない。

「先ほど会った際には時間に遅れるなと口酸っぱく申したのですが……。申し訳ありません」

「ラグが悪いわけじゃないでしょう」

「そうです」

何かにつけて謝るラグ。
本人が悪いわけではないため、ここまでくると不憫に思える。
と、ここで優斗が切り替えるように言った。

「まだ来る気配はなさそうですから、時間つぶしがてらラグの実力

を把握しましょう」

「どうやってです？　まさか手合わせとか？」

「いやいや。手合わせしなくても、訊くのに丁度良い存在がいるから」

優斗の言っていること、とりあえずラグには何が言いたいか分かった。

だが、

「その……私が実際に呼び出せということでしょうか？」

「いえ、それではラグの魔力も減ってしまうでしょう？　ですから僕が呼びます」

優斗は軽く左手を振るう。

「ウンディーネ」

そして名を呼ぶ。

瞬間、優斗の目の前に魔方陣が現れ、そこから水の大精霊が現れる。

「結婚式ぶりだね。元気だった？」

気軽に優斗が訊くと、ウンディーネは頷く。

ココは大精霊の姿を間近で見るのは初めてのため、ウンディーネの美しさと神々しさにうっとりとしている。

ラグは、

「……はっ？」

呆けていた。

「……ユウ……ト……様？　あの、今……」

目の前のことが信じられないように驚くラグ。

新鮮だった。

こういう反応、間近で見るのは久々だなと思いながら、

「これでも契約者ですから。大精霊を詠唱なしで呼ぶなんて、お手の物です」

優斗は苦笑する。

「それで彼のこと、分かる？」

ラグを示すと、ウンディーネは頷いた。

「君のこと、どれくらい使役できる？」

問うと、ウンディーネの意思が優斗に伝わってくる。

「……あら。結構凄いんだ」

またウンディーネがこくん、と頷く。

「分かった、ありがとう。この後、もしかしたら彼が君を呼ぶかもしれないから、その時はよろしくね」

優斗が頼むと、ウンディーネは微笑む。
そして姿をだんだんと薄くしながら消えていった。

「ユウ。どうだったんです？」

「結構な使い手って言ってたよ」

吃驚した。
優斗が考えていた以上の精霊術士だ。

「さすがはマティスの血族ってところかな」

「血の力っていうよりラグの才能が凄いんじゃないです？」

「そうだね」

ココの反論に優斗は素直に頷く。
一方で、ようやくラグも驚きから落ち着く。

「さ、さすがはユウト様。お見それしました」

さらっと大精霊を召喚するなど。
と、ここでようやく本日の主役がやってきた。
見た目は重装備だが、意気揚々と歩いているところを見ると軽い素材でできているのだろう。
防御力も高そうだ。

「では出発するぞ！」

婚姻相手や契約者どころか、兄すらも待たせているのに謝りもせず

森へと歩いて行くマゴス。
待って貰うのが当然という態度は、一種の清々しさを覚える。

「……マゴ――」

さすがにラグが叱ろうとしたが、優斗が止めた。

「気にしなくて大丈夫です」

「しかしココとユウト様を待たせておいて、あの態度は……」

「けれど、それが『彼』なのでしょう？」

「……それは……そうですが」

「なら気にしなくて大丈夫です」

小さく笑って、優斗も歩き出す。
次いでココとラグも歩き出した。

◇　◇

「結局のところ、ミラージュの森ってどれくらいの制約が掛かるんですか？」

森の中に入ったが、倦怠感というものはない。
身体に作用することはないらしい。

「魔法ならば軒並み、威力が落ちます。熟練の魔法士ならばそれでも上級魔法は使えるでそうが……威力は通常時の3分の2といったところでしょうか。精霊術も同様です」

「案外、削られるんですね」

「ユウト様ほどの方だと、上級魔法までなら多少威力が減るぐらいで問題なく使えるとは思いますが……神話魔法クラスを使うのは駄目です」

「なぜでしょうか？」

「制約は森を包む結界が作用しているのです。ユウト様はマクスウェル様以外にも独自詠唱の神話魔法の使い手。さらには実力から考えて、制約下でも威力は落ちたところで神話魔法を使えるでしょうが……使ったら最後、死んでしまいます」

「神話魔法そのものが使えないということでしょうか？」

「いえ、神話魔法を使った余波で結界が壊れてしまったら壊した当人に代償が向かうことになり死んでしまう、ということです」

基本的にぶっ放し系の高い威力を出す神話魔法ではあるが、今回は不利に働く。

「そういうことですか」

なんとも面倒なことだ。
というか結界を壊した代償とか、そんなもの存在するなんて初めて知った。

「となると、使えるのは……完全版の神滅斬だけか。大精霊も魔力供給ミスったらヤバイから無理っぽい」

あまり手を出す気は無いが、シャレにならない事態に陥った場合は手詰まりだ。
今度はココが尋ねる。

「ラグ、魔物のランクとしてはどれくらいです？」

「過去は最高ランクでAランクがいた、と聞いているが……基本はE，F，Gランクの魔物が精々だ」

「目的は神木の枝、です？」

「その通り。ただ、神木には守護しているライガーがいるから、それを退治して神木の枝を得ることになるだろうな」

「ライガーのランクはどれくらいです？」

「Cランクだ」

ラグが言うと、なぜか優斗が少しだけ安堵したような、そして驚いたような表情になる。

「……そうですか」

優斗の表情にココが気付く。

「ユウ、もしかして今……ランク低いな、とか思ってません？」

「いや、まあ『王族の試練』っていうぐらいだから、ちょっと低いんじゃないかとは思ったけど」

最低でもBランクが出てくるだろうと踏んではいた。

「いいです？　ユウとかシュウとかみんなが相手をしてるのが馬鹿みたいに強いだけで、普通はCランクでも十分すぎるほど強敵なんです」

ギルドの討伐や国での退治などでは、絶対にパーティーを組んで当たらないといけない強さだ。

なのに優斗たち……というか優斗と修はCランクどころかSランクでもあっさりと倒すから性質が悪い。

ラグが二人の話を聞いて、恐る恐る尋ねる。

「その、Cランクというのは……低いのか？」

ラグ的には十分すぎるほどの強敵だ。

「訊いたら負けです。みんな、相手してるのがBランクとかAランクとかの魔物ばっかりなんです」

「……どういう人たちなのだ、それは？」

「そういう人たちなんです。だって実力で考えたら、わたし下から

数えたほうが早いです。上級魔法2つも使えるのに」

重宝される上級魔法の使い手である自分が、下から数えたほうが早いというは周囲から見れば意味が分からないだろう。

「本当にどういう人たちなのだ……」

最早、呆れるほかない。

◇　◇

最初は意気揚々と歩いていたマゴスだが、絶対的に体力がない。故に普段よりも体力の使う森を15分ほど歩いただけで、いつの間にか優斗たちに遅れるようになってきた。

「兄様～！　疲れた、休憩しようよ～！」

「……マゴス。あと20、30分は歩かなければならないのだぞ。あと5分歩いたら休憩にしてやるから、そこまで頑張れ」

「やだ～！　休憩がいいんだ！　休憩！　休憩！」

駄々をこねるマゴス。

こうなってはラグが何と言っても言うことは聞かない。

ラグはため息をついて、

「……ココ、ユウト様。休憩でよろしいですか？」

「構いませんよ」

「わたしもそれでいいです」

ラグに賛同して、全員で腰を下ろす。

そして始まるはラグの説教。

「マゴス。お前は『王族の試練』を受けているという自覚があるのか？」

「もちろん。だって『王族の試練』の乗り越えたら、可愛い子ちゃんをたくさんお嫁にできるって聞いたんだから」

聞いた瞬間、ラグの額にピキッと怒りの筋が浮かぶ。

「……マゴス。リライトは一夫一妻制だ」

「じゃあ、妾がたくさんできるってことだ」

さらに怒りマークがラグに浮かぶ。

「……お前は妻を大事にしようという考えがないのか？」

「だってちんちくりんが婚姻相手なんだし。それにぼくは王族だからね、相応しいボンキュッボンな美女がいいんだ！」

ラグの顔が真っ赤どころか怒りの余り、青くなってきている。
優斗とココは逆に苦笑した。

「フィオとかアリーとか見られたら、大変だったかもしれないです」

「確かに美人だしスタイル良いしね」

マゴスが喜びそうな気がする。
だから、

「……なんだって？」

彼らの会話をマゴスが聞き逃すわけがない。

「おい、ちんちくりんに嘘つき！　今のアリーとフィオというのは誰だ！？」

がっちり食いついた。
しょうがないので、優斗が返答する。

「アリーもフィオも我々の仲間です。アリーというのはリライトの王女、アリシア＝フォン＝リライト様です。フィオというのはフィオナ＝フィーア＝ミヤガワ。公爵の家系であり、私の妻でもあります」

優斗の説明を聞くと、マゴスがあからさまにがっかりした。

「なんだ、ちんちくりんと嘘つきの知り合いか。どうせたいしたことないんだろう？」

マゴスのぞんざいな言葉青くなったラグの顔が青ざめる。

「馬鹿を言うな、マゴス！　アリシア様はリライトの宝石と呼ばれる美姫だぞ！　そしてユウト様の妻であられるフィオナ様は大魔法士様――ユウト様の寵愛を一身に受けておられる、それは美しいお方であると聞いている！」

特にアリシアはかなりの有名人である。
まあ、マゴスは他国とのパーティーに出せるような人物でもないので、他国の状況に疎いのは分かるしミラージュとてリライトとあまり関わりがあるほうではないが、それでもなぜ王子のお前が知らない、とラグは頭が痛くなる。
けれどマゴスはラグの説明を聞いて嬉しそうな顔をした。

「それならぼく、その二人が欲しい！！」

そして優斗を見て、

「お前の妻をぼくにくれ！」

とんでもないことを言った。
いつもならキレたであろう優斗も、さすがに唖然とした。

「……えっ？」

「だからお前の妻をくれと言っているのだ！　ついでにアリシア様もぼくの妾になるよう手配しろ！」

ふふん、と鼻を鳴らすマゴス。

「……えっと……」

逆に優斗は困る。

相手が馬鹿なだけに、真っ当な説明は無理。

というか、仲間を傷つけられたりしてキレた優斗以上に感情で動いているマゴスに、何か言っても意味がない。

どうするべきかと考える。

だが、優斗が何かする前にラグが全力で拳をマゴスの頭に落とした。

「何をふざけたことを抜かしているのだお前は！！」

素晴らしい威力のゲンコツが入った。

「――ッ！　い、痛いぞ兄様！」

「たわけたことを抜かすな馬鹿者！　お前ごときが大魔法士様の妻であられるフィオナ様をくれだと！？　アリシア様を妾にするだと！？　『王族の試練』をやり終えたところで永遠に無理だ、このド戯けが！！」

「だって美人だって言ってるじゃないか！！　ぼくは美人でボンキュッボンが欲しいんだ！！」

「大国の王女をお前ごときの妾にできるわけがあるか！　フィオナ様に至っては世界で二人目となるマクスウェル様の契約者になられたお方の妻だぞ！！　アリシア様以上に不可能に決まっている！！」

「えぇ～？　だってそいつ、嘘つきの契約者じゃん」

「そんなわけがあるか！！」

最後にもう一度、鉄拳をかましてラグは大きく息を吐く。
そしてすぐに優斗とココに土下座。

「まことに申し訳ございません！　度重なる愚弟の愚かな言動、兄である私が平に頭を伏せさせますので、是非ともご容赦のほどを！！」

「いえいえ、僕は何も気にしていません」

「わたしもです」

なんかもう、呆れるしかないのだから。

「それに……」

優斗は視線をラグから外し、草むらを見る。

「魔物が来たので、マゴス様は頑張ったほうがよろしいかと」

言った瞬間、かさりと草むらから音が鳴った。

「――ッ！？」

慌ててラグは身体を起こして戦闘態勢を取った。
ココはさっと立ち上がり、優斗はゆっくりと立つ。
マゴスは意味が分からないのか立ち上がらない。
草をかき分けて魔物が姿を現すと、マゴスはようやく慌てて立ち上がった。

「……これは……」

「可愛いです」

緊張の面持ちのラグとは逆に、ココは現れた魔物に喜ぶ。

「ユウ、これってクラゲンですよね？」

目の前にいるのはクラゲの形をした魔物。
ランクはFランク。
触手を足にして、器用に立っている。

「そうだね。ペット用、食用に飼育されることもある魔物だね」

「うわ～、みんながギルドで請け負った依頼を手伝ったりしてますけど、クラゲンって見たことなかったから嬉しいです」

「……あの、お二方？　魔物を前にして、緊張感がないのもどうかと……」

平然としている優斗とココにとりあえず言ってみるラグ。

「だってこれ、可愛いです」

「僕は特に何かするわけでもないですから」

言いながらクラゲンを面白そうに見る二人。
いくらランクが低くても魔物は魔物だ。
普通は緊張する。
だが、そんな彼らの様子を見て、ラグはやっぱりココも優斗の仲間

なのだなと実感する。
公爵家令嬢であるココが魔物を目の前にして平然としているなど、普通はありえない。
ただ、４月から過ごしてきた日々が全くもって貴族として普通じゃないため、平然としていられる。
とりあえずラグはマゴスに訊く。

「マゴス、どうするのだ？」

「ふふん。こんな魔物、ぼくが倒してやる」

無駄に煌びやかなナイフを抜いて、意気揚々と向かっていく。
そして、

「てい！」

ナイフを振るう。
が、振るっている右手をクラゲンの触手でペチっと叩かれる。

「いたっ！」

カラン、とナイフを落とす。

「い、痛いぞ！　痛い、痛い！」

慌てて下がって手荷物の中から道具を取り出す。

「……霊薬？」

優斗が取り出したものを確認した。

死者すらも蘇らせるという霊薬。
それをあろうことか、マゴスはがぶ飲みし始める。

「……なんであれだけで？」

確かに鎧からはみ出た素手の部分を叩かれたけれど。
ダメージなんて数字で見れば3くらいしか喰らってない。
というか明らかにさっきのラグのゲンコツのほうが痛かったはずだが。

「無駄に頭だけ防御力が高いってことかな？」

ゲンコツ喰らってもすぐに言い返したり、土下座した王様にガンガン頭を地面にぶつけられても普通にしていたし。

「ラグ、どうするんですか？」

「……私がやるしかないでしょう」

優斗の問いかけに、ラグは諦めたように手をかざす。
そして彼の眼前に魔方陣が生まれ、

「頼むぞ、水の精霊」

そこから大量の水が現れた。
そして水をクラゲンに向け、質量で遠方へと押し流していく。
別に敵意がありそうなわけでもなかったので、倒しはせずに終わらせた。

「……ふぅ」

「お見事」

「凄いです、ラグ」

優斗とココが拍手する。

「いえ、まだ若輩の身ですから」

ラグが謙遜する。

「とりあえず進みましょう。無駄に騒いでマゴスが魔物を呼び寄せそうな気がしますから」

「そうですね」

「分かりました」

◇　◇

そのあとも疲れた、と言っているマゴスをどうにか引き連れて歩く。
そして最後の休憩を終わらせ、神木間近という場所。

「そろそろライガーの出番……ですね」

「おそらくは」

「僕とココは下がっていますので、僕らのことは気にしないでください」

「分かりました」

ラグが頷く。

「マゴス、準備はいいか？」

「バッチリだぞ、兄様！」

手に袋を持ちながらマゴスが自信満々に頷く。

「……マゴス。それは何だ？」

「ふふん、これは兄様にも教えられないぞ。ぼくを勇者に変えてくれるものだからな」

「どういうことだ？」

「見てのお楽しみだぞ」

なぜだろう。

優斗は自信満々のマゴスに不安を抱く。

この手のパターンはよくある。

大抵、最悪な状況に陥る。

特にマゴスのような馬鹿だけに、やばい。

「あの、マゴス様――」

優斗が声を掛けようとしたが……遅い。

「――ッ！！」

雄叫びが聞こえた。

だんだんと四つ足の獣の姿が見える。

「来たか」

ラグが戦闘態勢を取った。

ココが後ろに下がる。

マゴスは、

「ふっふっふ」

笑って袋を開ける。

「さあ、僕を勇者にしろ！！」

そして袋の中にある粉を全身に振りかけた。

大切な……

案外、面白い人で。
凄く格好いいのに、そのギャップがさらに笑える。
最初からこの人だったら、優斗だって自分だって文句はなかった。

――なんでだろう？

４月から楽しいことばかりだったのに。
年末の今は嫌なことばかり。
優斗とフィオナみたいに紆余曲折あっても最後はハッピーエンド、ではなくて。
自分の場合はエンディングも続いていく人生までもバッドエンド。
けれど家族と自分の考えはベストエンド。
人生が上手くいく人と上手くいかない人で分けたら、絶対に自分は後者だ。

――ほんと。

ラグが婚姻相手であればよかったな、と。
ハッピーエンドであってほしかったな、と。
心底、思う。

――でも。

それは仲間がいなかったらの話。

彼らは自分が不幸になるのを許してくれない。
無理矢理にでもハッピーエンドにねじ曲げてくれる人たちだ。
――特にユウなんて。
わたし達の中で一番、ハッピーエンド至上主義なんだから。

◇　◇

「……あれ？」
粉を身に振りかけたマゴスが首を捻る。
「何も起こらないじゃないか！」
格好良く変身すると思っていたマゴスは憤る。
が、優斗は悠長に考えていられない。
「……今の粉、何だか分かる人……いる？」
「あの、おそらくですが」
ラグが恐る恐る発言した。

「魔物を呼び寄せる粉ではないかと……」

「効果は？」

「周辺の魔物を呼び寄せます」

「継続時間は？」

「ありません。粉をふるった場所から半径５００メートルほどの魔物を呼び寄せるだけです。一度呼び寄せたら、それでお終いになります」

つまり継続的に魔物を呼び寄せるというわけじゃない。

「……その点を考えるとゲームよりは楽だけど……」

長期戦にならないだけいい。

「ただ、逃げても無駄……か」

ふるった場所、とラグは言っていた。

ということはマゴスがその場所にあたる。

「……来た」

優斗はすかさず魔方陣を出して布都御魂を創り出す。

姿形は見えるだけで１０体。

さすがに見たことのない魔物もいるので全部は把握できないが、おそらくランク的にはＡランクからＥランクまでいる。

強そうなのはそのうち４体。

あくまで優斗の知識と感覚頼りなので、そこらへんは信用しきれない。

――これは……かなり不味いかな。

普段なら問題ないと思えるが、今回は制約がある。

優斗が知っている神話魔法は神滅斬以外は全部ぶっ放し系なので、基本は上級魔法のみで相手取らないといけない。

優斗は覚悟を決める。

「ココ、この二人を守って」

「……ユウは？」

「倒してくる」

優斗の言葉にココが反論する。

「む、無理に決まってます！　だってユウ、神話魔法を使え――」

「――それでも」

遮って優斗はココに伝える。

「この状況でココを助けるには、そうするしかないから」

制約があろうと何だろうと、助けるためにはそれ以外に方法はない。

「わ、私も一緒に！」

「わたしも！」

ラグとココが名乗り上げる。

だが、

「悪いけどフォローするほど余裕はない」

１０体もいるから守りきれる自信はない。

いくらココでもこの状況下では無事でいることなど不可能だ。

どうやったって無理。

フォローするにしても、優斗の手が届く範囲を超えている。

乱戦は不確定要素が多すぎるからだ。

さらにラグは優斗よりもココよりも戦うことに慣れていない。

しかも王族を死なせるわけにもいかない。

だから応援に来て貰うわけにもいかない。

「求めるは聖護、聖光の守り」

優斗が詠唱を紡ぐ。

すると、円形の光の守護壁が生まれる。

「卓也や修じゃないから、これぐらいの魔法しか張れないけど……」

大抵の攻撃は防げるはずだ。

「ちょ、ちょっとユウ！」

ココが止めようとして足を踏み出す。

が、優斗が止める。

「絶対にそこから出るな」

軽く脅すような声音でココを押し止めた。
そして優斗はすぐに視線を魔物たちへと戻して布都御魂を振りかぶった。

「……さて、と」

正直、死ぬかもしれないけれど。
頑張れば死なないはず。
死ぬ気で動けば倒せるはず。

――どっちにしても。

ココ達に被害は及ばせない。
優斗は足を一歩踏み出す。

「行こうか」

◇　　◇

「なんだよ！　勇者なんてなれないじゃないか！」

マゴスは優斗の守護壁の中でぶつくさと文句を言っていた。

「しかも魔物を呼び寄せるなんて聞いてないぞ！」

などとマゴスは言うものの、あれは本来、呼び寄せた魔物を全て打ち倒したものを勇者と称えることができるだけで。
あの粉自体には人間に対してなんら効力を持たない。

「マゴス、お前はっ！！」

あまりにも救いようがない弟にラグが雷を落とそうとする……よりも先に。
ラグの前を動いた影があった。

「――ッ！」

ココは右の手のひらを一閃、マゴスの頬に叩き込む。
パン、と乾いた音がした。
驚いた表情をしたマゴスだが、ビンタした相手がココと知った瞬間に憤る。

「な、殴ったな！　ぼ、ぼくはお前の夫となる男なんだぞ！！」

「だから何です！？　誰のせいでユウが戦ってると思ってるんです！？」

ココは怒り心頭だった。
普段の優斗なら心配だってしない。
けれど今の彼には厳しいはずだ。
そう、厳しいはずなのに彼は戦いに赴いている。
一体、誰のせいだ。

「貴方のせいじゃないですか！！」

目の前の馬鹿が馬鹿なことをやって優斗が割を喰っている。

「なんで……なんでユウが戦わないといけないんです！？」

一番、関わる必要がない人間が。

どうして戦っている。

「……本当に……馬鹿なことばっかり」

マゴスに関わってから良いことがない。

仲間は貶されるし、現在進行形で優斗が戦わされている。

「わたしの家が望む婚姻？　わたしの立場が願う婚姻？　そのせいで誰に迷惑が掛かってるんです？」

自分か？

いや、違う。

優斗だ。

「……わたしがこんな男と、それでも婚姻を望むなんて言ったから……」

せめて最後に、と。

少しは相手に挽回させるチャンスをあげようと。

そう考えたのかもしれない。

「馬鹿らしい」

本当に。
自分自身にも腹が立つ。

「き、貴様！　無礼だぞ、ぼくは王族なんだぞ！」

「無礼なら無礼で構わないです」

もういい。
どんなことを言われても構わない。
だって目の前にいる男は。

――わたしの婚姻相手じゃないんだから。

仲間を貶すような奴が。
友人を脅かすような奴が。
自分の婚姻相手であってたまるか。

「こんな男との婚姻、わたしは絶対に望みません」

突きつけるように言い放って、ココはラグのほうに振り向く。

「ラグ、わたしは行きます」

告げながら横を通り過ぎて、優斗の張った防御魔法を抜けようとする。
が、手を取られた。
間違いなくラグだ。

「……行かせるわけにはいかない」

ラグだって魔物の強さがどれくらいかは少しぐらい把握できているつもりだ。

「むざむざと君を死なせてなるものか！！」

そんな魔物たちが集まっている場所にココを行かせるわけにはいかない。

「じゃあラグはユウだったらいいんです？」

「……それは……」

突然にココから問われた言葉。

思わず答えるのに詰まる。

「気持ちは分かります。ラグにとってユウは凄い人なんだと思います。契約者ですし、独自の神話魔法をたくさん使いますし、正直に言って化け物です」

これが同年代なんて常識的じゃなくても考えたくない。

「でもわたしにとっては大切な仲間なんです」

初めて出来た友達の一人。

「知ってます？　ユウってフィオを抱きしめるだけで顔を真っ赤にするんです。それにユウってフィオと付き合うまでぐだぐだしてて

……本当にヘタレなんです」

何が化け物だ。
何が契約者だ。
自分が知っている優斗はただのヘタレで臆病で奥手な小心者だ。

「わたしにとっては、そんな人なんです」

だから、と防御魔法の外に出ようとした瞬間だった。

「ユウ！？」

「……あ……ぐっ……！」

優斗が吹き飛ばされた姿が見えた。
かろうじて左手で防いだように見えたが、無事ではないはずだ。

「手をどけてください！」

「……できない……っ！」

「どけて！！」

ココが怒鳴る。

「できないっ！！　一目で心奪われた相手を行かせられるわけがないだろう！？」

ラグから思わず本音が出る。
だが、ココは“そんなこと”に構っていられない。

「……友人が……」

友達が。

「親友の大切な人が……」

フィオナの大切な恋人が。

「わたしの仲間が戦ってるのに見てるだけなんて……そんなのできない！」

無理矢理にでもラグの手を外そうとする。

「ユウを死なせたくない！」

大切な友達だから。

「死なせたくないの！！」

最後は絶叫とも言うべき声量だった。

これで言うことを聞いてくれないなら、魔法でもぶち当てる。

だがラグはほんの数秒逡巡したあとに手を離した。

けれど代わりに決める。

「なら私も行く。ココだけ行かせるわけにはいかない」

ラグは剣を抜きながら前へと出る。

「そんな自分を許せるはずがない」

「下手したら死んでしまいますよ?」
問いかけるココにラグは真剣に頷く。
「承知の上だ」
一目惚れの相手が戦いに向かうのに残るなんて、王族である以上に男としての名折れ。
「ココを守るために命を散らすことになるのなら本望だ」
◇　◇
多対一において一番重要なのは、まず数を減らすこと。
優斗は集まってきた１０体の魔物のうち、すぐさま3体を斬り殺す。
さらに前後左右から襲いかかってくる魔物に持ち前の運動神経と反射神経でかわしながらさらに2体。
本当なら、どうにか2対1ぐらいに持ち込むところなのだが、距離を置いたりするとココ達に向かいそうなので迂闊に距離も取れない。
だからこその近距離乱闘。
しかし、瞬間芸で殺せるのにも数は限られている。
1体に踏み込んで倒しに向かうのも有りだが、1体に取りかかって他に気を抜くなど愚の骨頂。

かといって今の場合だと浅い傷を与えられても致命傷に至らせることはできない。

「――フッ！」

また1体の魔物を斬り殺す。

が、そこからだ。

背後から一つ目の巨人、サイクロスが豪腕をアッパーのように唸らせる。

優斗は返す刀で魔物の拳と刀を相対させる。

しかしそれが優斗の判断ミス。

拳は刀が食い込みながらも優斗を打倒せんと振り抜こうとしている。

下から上に向かっている拳。

拳に食い込んだ刀を持っている優斗の身体が少し浮いた。

次の瞬間、真横にはサイクロスの上位存在であるサイクロプスの拳が迫ってきた。

移動すべき地はない。

魔法も精霊術も使う時間はない。

半ば反射的に左腕を拳との間に滑り込ませる。

「……あ……ぐっ……！」

嫌な音が耳を響かせながら15メートルは吹き飛ばされた。

無理に滑り込ませた左腕に激痛が走る。

さらに肋骨にも痛みがある。

――左腕と左側の肋骨が何本か……折れたな。

着地しながら優斗はダメージを受けた場所を把握し始める。

下手しなくても左腕は複雑骨折だろう。

ただ、内臓関係に違和感がないのは幸いだ。
おそらくは左足の上部もヒビくらい入っているかもしれない。
上手く動かない。
残っているのは4体。
サイクロプスとサイクロス。
ライガーと木の形をした魔物――ツリースト。

――どうする？

正直な話、勝ち目がない。
特にサイクロプスとサイクロスは現時点の魔法も精霊術も効かない。
完全版の神滅斬なら殺せるだろうが、あれは初動も動きも遅い。
その間にライガーに攻撃されるだろうし、ツリーストの枝も面倒だ。
しかも今の自分はかなりの手負い。
痛みは気合いで意識から除外できるが、仮に1対1になったとしても右足一本の機動力で勝てる可能性は少ない。

――結構、詰んでるな。

最悪、大精霊を呼んで魔力供給をミスらないで頑張るしかない。
ジリジリとにじり寄ってくる魔物たちにどう対応するか考えている優斗。
だが、その場にあってほしくない姿が現れた。

「ユウ！！」

ココとラグが駆け寄ってくる。
そして優斗の前に立つ。
思わず魔物も止まった。

「……バカ。なんで来た」

「来ないとでも思ってます？」

「だから“バカ”って言ったんだよ」

来たいのは分かっていたからこそ、少し脅した感じで言ったのに全て台無しだ。

「ユウがかなり数を減らしたから出てきたって言ったらどうです？」

「……それなら納得してあげるよ」

どうせ今、考えついた言い訳だろうけど。

――でも、まあ……。

けれど確かに今の状況ならココに背中を預けることはできる。

例え魔物にAランクがいようとも、その絶対の信頼は変わらない。

優斗が問題にしていたのは乱戦によって起こる、不測な事態。

優斗でさえも防げない状況。

しかし今なら数は減っているし、予測不可能な状況は確実に減っている。

――それなら。

この状況下で優斗は認識を変える。

ココを“守るだけ”の存在から“戦友”へと変える。

「ユウ、今から時間を稼ぎます。その間にユウは……」

視線が優斗の瞳へと向かった。
そこにあるのは優斗がココに向けるのと同様、絶対の信頼。

「ユウは新しい神話魔法を創ってください」

「……変なこと言うなって。創ったことなんてない」

「大丈夫。できるはずです」

否定する優斗だが、ココは軽く受け流した。

「だってユウの魔法はこの世界ではまさしく、新しく創造された魔法なんだから」

出来ない、なんてことはない。

「向こう世界の“げーむ”や“あにめ”からイメージを持ってきたのだとしても、この世界には関係ありません。まさしくユウがやっているのは、新しく創った神話魔法です」

だとしたら出来るはずだ。

「イメージを固めて詠唱を言霊とし、神話魔法とするぐらい……ユウには簡単です。それに詠唱は創ったことあるんですし、あとはイメージを創造するだけで終了です」

極大消滅呪文をアレンジして本当に独自の詠唱を創った優斗だ。
無理なはずない。
と、ここでココはからかうように笑った。

「これぐらいやってくれないと、妹分としてはお兄ちゃんを尊敬できませんよ？」

「……普段は尊敬してないの？」

「ヘタレ返上したら考えます」

魔物を前だというのに、互いに吹き出した。

「分かったよ。やってやる」

優斗の返事にココは嬉しそうに頷いて、魔物を見据える。

「ラグ」

代わりに優斗は魔物に視線を据えていたラグの名前を呼ぶ。
ラグが視線を優斗に向けた。

「いいか？　今の状況でココを守ろうなんて思うな。まずは自分の役割に集中しろ」

「だが……」

ココは女性だ。
守らなければならない。
しかし、

「舐めるな。ココは僕らの仲間だ」

その考えは捨てろ、と優斗は言う。
優斗だって基本的にはラグと同様の考えを持っているが、それだって状況次第だ。
今のココは頼るべき仲間。
大切な戦友。
それだけだ。

「彼女を守りたいと思うのなら、まず彼女を信じることから始めろ。そして知るんだ」

ココ＝カル＝フィグナは守られるだけの存在なのか？
いや、違う。
その部分をラグは知らないといけない。

「ココはお前に守られるだけの弱い奴じゃないってことを」

ココを守らないといけない状況と場所を考えろ。
ラグにとって“今”は無理だが、いずれは出来る。
ラグには出来るはずだから、と。
優斗は無言で示す。

「……分かった」

少し戸惑った様子を浮かべたラグだが、優斗の断言に意を決したように頷いた。

「３０秒だけ稼いでくれ。それまでは二人のこと信じて、考えに没頭するよ」

「はい」

「了解」

◇　◇

目を閉じて考える。
放出系は論外。
爆発系も駄目。
それなら、大丈夫なのは何だろうか。
優斗は頭を空にして考えてみる。

――なら、範囲指定で内側に威力を向けたもの。

これだ。
色々とありそうなものだが、優斗のストックには出てこない。
というよりも、あるかもしれないけれどこの状況下で思い出せるわけもない。
だからまさしく一から魔法を“創る”しかない。

――内側に向けたもの。

でもそれは指定範囲から出られたら意味がない。

――なら、魔物を出さなければいい。

出さないなら、それは何だ？

――檻。

そうだ。

まさしくそれだ。

最初の家が自分に取って牢獄だったように、檻というのは出られることはない。

そして優斗に取って檻とは最低最悪の場所。

故に願うのは死、のみ。

魔法に対するイメージが思い浮かぶ。

――ああ、まさしく僕らしい。

自分らしい魔法だ。

――なら、詠唱は？

どういう言葉がいい？

どんな言葉が一番しっくり来るだろうか。

少し考え、そして……小さく笑う。

――なんかもう、厨二まっしぐらな言葉だ。

痛々しいし、自分が考えたとなると恥ずかしい。

――でも、やっぱりこれが一番だ。

僕らしい、と。

再び優斗は思う。

「ユウ！！」

ココの呼ぶ声が聞こえた。

一度だけ大きく深呼吸をして、眼を開く。

――始めよう。

正真正銘、宮川優斗が自分で考えて創り出した神話魔法を。

◇　◇

時間が過ぎるのが遅いと感じる。

３０秒というのは、これほどまで長いのだろうか。

ラグは生死を分かつ場で、初めてそれを実感した。

「……う……ぬっ……」

息をつかせる暇も無い。

真正面からだけではなく、後方にもいる。

どちらにも気を配らないといけないのは精神がどんどん削られていく。

――ユウト様は制約下で、魔物は１０体もいたのに。

６体も倒すとか、最早人間業じゃない。

前後に水の精霊術を撃ち放つ。

運良く、両方に当たり距離が開いた。

『清廉より出でし水煙の乙女よ。ラグフォードの名において願う』

すぐさま、詠唱を紡ぐ。

『出でよ！　ウンディーネ！！』

瞬時に水の大精霊を呼び寄せる。

――あと……１０秒！

約束の３０秒まであと１０秒。

それなら全力で使役しても魔力は足りる。

「ウンディーネ！　この２体を近付けさせないでくれ！」

こくりと水の大精霊が頷いた。

もうこれで約束の時間までは倒せずとも近付けさせることはない。

――あと５秒。

ラグの意識は別の場所へと向かう。

――ココは！？

視線をココへと向ける。

「……なっ……あ……」

ラグが驚きの声をあげた。
そこには軽やかなステップを踏みながら避けるココがいて、

「求めるは水の旋律、流水の破断」

制約下なのに水の上級魔法を放ち、２体の魔物を切りつけ、

「求めるは岩鬼、質なる圧壊」

地の上級魔法を使って魔物の真上から大岩を落としている姿があった。

「ユウ！！」

魔物から視線をずらさずにココが声を張り上げる。
約束の時間。
３０秒が経った。
優斗はココの声に反応したかのように閉じていた眼を開ける。
そしてゆったりとした声音で……紡ぐ。

『囲え、囲え、囲え』

瞬間、動いている3体の魔物をそれぞれ、囲う光の檻が現れる。

『囲いの中、出ること能わず、逃げること能わず、動くこと能わず』

まるで鉄格子のような構造の檻。

魔物が出ようとするも、格子だけでダメージを与えられるのか、触れた瞬間に弾かれる。

『なればこそ永久なる苦痛、永遠なる悪意、全てを身に受けろ』

光の格子の光量が増した。

『故に告げよう――』

優斗が右手を軽く、断罪するように振るった。

『――メメント・モリ』

瞬間、縦横１６本。計３２本の格子から光の一閃が格子の内側へと放たれる。

そして問答無用に全ての魔物を切り裂き、焼き付くし、向かいの格子へと収まった。

優斗は魔物を全滅させたことを確認してから魔法を解く。

ぐったりと座り込んだ。

左腕の痛みがぶり返す。

息をする度に肋骨が痛む。

やたら無闇に歩けない。

「……疲れたし痛い」

「お疲れです、ユウ」

ココが隣に座って治療を始める。

「あのバカから霊薬かっぱらってこれない？」

「どうでしょう？　ラグなら……」

視線をマゴスのほうへと向ける。

すると、そちらからラグが瓶を持ってやって来た。

なぜかマゴスはいない。

「ユウト様。霊薬だ」

「助かるよ」

戦闘最中のタメ口のせいか、終わったあともタメ口が続く優斗とラグ。

そこに優斗もラグも気付くこともなく、優斗は霊薬を飲み干す。

「あ～、生き返る」

なんか風呂に入った壮年の男性みたいなことを言う優斗にココが笑う。

「おじさんです？」

「くたびれ具合は似たようなものだよ」

とりあえず痛みが和らぎ始めた。
あと１０分もすれば完全回復するはずだ。

「っていうかバカは？」

マゴスがいないからだろうか。
それとも身体がボロボロになるぐらいの仕打ちを受けたからだろうか。
優斗のマゴスに対する扱いが酷くなった。

「霊薬を私が奪い取ったら、止める間もなく逃げていった」

「……ヤバくない？」

「大丈夫だ。私が風の精霊に頼んで守護している。何か問題があったら知らせてくる手はずだ」

「そっか」

優斗は寝転がる。

「正直、助かったよ。特にサイクロプスは短期戦なら神話魔法じゃないと倒せないから」

「いや、ユウト様が魔物を４体まで減らしてくれたおかげだ」

「そうです」

ラグとココが優斗を賞賛する。

「けど、まあ……」

ココは姿形すらない魔物のことを思う。

「ずいぶん凄い神話魔法です」

いかつい、というか怖いほどの魔法だった。

「しかしこの場合、ユウト様がライガーを倒してしまったとなると『王族の試練』は失敗か」

「ん？　いや、違う違う」

ラグの少し悔やんだ表情に優斗は軽く手を横に振る。

「はっ？」

「えっ？」

ラグとココが同時に驚いた。

「だって僕が指定した魔物は3体。サイクロス、サイクロプス、木の魔物。ライガーは指定外」

「えっ？　どうしてライガーは指定しなかったんです？」

「すでに倒されてた」

優斗は離れた場所を示す。

木や草むらに隠れて見えないが、そこにライガーが倒れている。

「つまり、えっと……どういうことです？」

「バカに付き添ってきたラグが倒したんだから『王族の試練』は達成。神木の枝を得ることは問題ないってこと」

優斗の説明に少し呆けた様子のココとラグ。

「けどわたし、もうマゴス様に婚姻解消突きつけたんですけど」

「そこは僕に判断を委ねられてもね。ラグに任せるよ」

「私か？」

「いや、だってココの婚姻を認めるか認めないかと『王族の試練』は別物だし」

訊かれたところで困る。

ラグは少し考えるが、

「……よし」

意を決したように神木へと歩いて行き、小枝を折った。

「ユウト様が回復次第、戻ろう」

婚姻相手決定

優斗たちは王城へと戻り、そのまま直接に謁見の間まで向かう。

「おお、大魔法士様にフィグナ様、そしてラグフォードよ。戻ったか」

「はい、父上」

椅子に座っているミラージュ王の横にはすでにマゴスがいる。

「兄様！　小枝は取ってきたのか？」

しかも自分がやったことを忘れているのか何なのか、意気揚々と訊いてくる。

ラグはマゴスを無視してミラージュ王へと小枝を見せる。

「父上、この通りです。ライガーは私一人が倒し、神木の小枝を手に入れることができました」

「それは真か？」

「はい。ユウト様とフィグナ様が証人となられます」

「そうか」

少し……不可思議なやり取りがラグとミラージュ王との間で行われた。
それに気付いたのは優斗だけで、マゴスとは逆に控えている大臣は喜びを表す。

「だ、大魔法士様！　これでマゴス様とフィグナ様の婚姻は認めて――」

「そんなわけないでしょう」

口早に言った大臣を優斗はぶった切る。

「私がなんでボロボロなのか分かりますか？」

制服は所々やぶけている。

「マゴス様が魔物を呼び寄せる粉を振りまき、その対処に追われたからです」

ちらりとマゴスを見るが、彼は素知らぬ顔だ。

「冗談抜きで死にかけました。ラグフォード様がマゴス様より霊薬を取っていただけなければ今、この場にはいなかったでしょう」

優斗がここまで言うと、マゴスはあることに気付いたのか、

「あっ、そうだ！　兄様、勝手にぼくの霊薬を取らないでよ！　あんな嘘つきが怪我したって別にいいじゃないか！　ぼくのものだぞ！」

「バカを言うな。お前が馬鹿なことをやったせいでユウト様は上位ランクもいる魔物１０体と戦うことになったのだぞ。森の制約下にあるというのに。こうして私達が無事な姿であるのは全てユウト様のおかげなのだ。なればこそ、原因であるお前から霊薬を取ったところで問題なぞない」

ラグの説明にミラージュ王と大臣の顔が青くなっていく。
前者はとんでもないことをしたマゴスに対して。
後者はマゴスのしでかしたことによる結果に関して。

「ラグフォード様が説明してくださいましたが、そのようなことをする輩とココ＝カル＝フィグナとの婚姻を認めろと？」

優斗が問いかける。
問いかけに対して大臣は色々と言い訳を考えているようだが、ミラージュ王は見切りをつけてラグに視線を移した。

「……父上」

ラグが一歩前に出て、小枝を渡す。

「ああ、確かに神木の小枝は預かった」

そして一拍置いた後、宣言した。

「これにてラグフォードを『王族の試練』達成者として認めよう」

ミラージュ王の言葉に大臣、マゴス、ココが驚いた顔をさせた。

「なっ！？　と、父様！？」

「お、王よ！　これはこういうことでしょうか！？」

マゴスと大臣が問い詰めるが、ミラージュ王は素知らぬふりをする。

けれど優斗が、

「どういうことでしょうか？」

そう問いかけると、ミラージュ王は説明を始めた。

「昨晩、ラグフォードから提案があったのです」

丁寧に語る。

「もしラグフォード一人の力で神木の小枝を取ることが出来たのなら、その際には――」

ミラージュ王はココを見る。

「フィグナ様の婚姻相手をマゴスではなく自分にしてくれ、と」

「えっ？」

ココが再度、驚いた。

「大魔法士様。これは無理を承知での提案とさせていただきます」

そしてミラージュ王は昨日と同様、優斗に頭を下げる。

「大魔法士様はマゴスを婚姻相手として認めない。それは間違いありませんか？」

「はい」

「では、ラグフォードではいかがですか？　これでも『王族の試練』を達成した者。フィグナ様の婚姻相手として相応しい人物と思います」

「……」

優斗は少しだけ押し黙る。
緊張の空気が謁見の間に張り詰めた。
が、それをまず破ったのは大臣。
次いでマゴス。

「た、確かに大魔法士様との繋がりは最重要とも言えることですが、ラグフォード様ほどの傑物をリライトの公爵家など――ましてあんな小娘の相手なぞに……！」

「なに、ぼくはちんちくりんと結婚しなくていいのか！」

大臣はどうにかやめさせようとする。
どうやら大臣はラグフォードほどの者ならもっと上流――おそらくは三大国の王族とも婚姻を結べる可能性があると考えているらしい。
だからこそ否定する。
逆にマゴスは大喜び。
優斗は嘆息する。

「ミラージュ王。最低の相手で押し通せなかったから別の相手にす

る。正直、そういった提案には反吐が出ます。どこぞの大臣の考えもココ＝カル＝フィグナを舐めているとしか思えません」

「分かっております」

重々、ミラージュ王も承知している。

「ですが」

優斗はふわりと笑う。

「私と致しましては相手がラグフォード様だというのなら、決めるのは当人同士に任せようと思います」

別に優斗がどうこう言う相手ではない。

もとより、そこまで介入するつもりもない。

マゴスは最悪だから優斗は認めないだけであって、別の人物でいいですか？　と問われたとしても、変更した相手が問題ないのなら決めるのはココ自身だ。

何か言いたげな大臣については優斗が睨みつける。

さすがに先ほどの言動から自分が優斗の機嫌を損ねているのには気付いたのだろう。

すぐに押し黙った。

――さて、と。

これでお膳立ては済んだ。

優斗はラグを軽く促す。

ラグはこくり、と頷いて一歩ずつ歩みを進めた。

「ココ」

ラグはココの前に立ち、膝を折る。

「私の婚姻相手になってはくれないか？」

そして誠心誠意、想いを言葉に込める。

「可憐な君に私は心奪われた」

右手を差し伸べるラグ。

そんな彼にココは、少しだけ戸惑った表情を浮かべたが、

「……わたし、理想って結構高いんです」

ぽつり、とラグに言葉を届ける。

「……えっ……？」

「ユウぐらい優しくて、シュウぐらい面白くて、タクぐらい一生懸命で、ズミさんくらい愉快な変さを持ってて、クリスぐらい格好いい人で」

何よりも、

「わたしの心をちゃんと見てくれる人じゃないと嫌です」

そこから考えるとマゴスは最悪だった。

自分の心なんて何も見てくれない。

「努力する」

「努力だけです？」

「いや、絶対に成し遂げてみせる」

「案外どころか、かなりの無茶ぶりだって分かってます？」

「……そうなのか？」

「そうですよ」

くすくす、とココは笑う。
仲間たちを見たら、絶対に絶句する。

「けれど頑張るから。どうか私の婚姻相手になってくれ」

再度、右手にラグが力を込める。
そして顔を伏せる。
絶対に引かない、と決意の現れ。
ココは小さく笑った。

――まだ愛なんて芽生えてないけれど。

どうせ政略的な婚姻なのだけれど。
これほどまでに手を伸ばしてくれる、というのは本当に嬉しい。
今までのどの告白よりも喜びがあった。

――この人となら。

愛を紡いでいけるだろうか。
優斗とフィオナに負けないぐらいの物語を。
――できると……いいな。
そう願う。
だからココは左手をゆっくりとラグの右手に重ねる。
「喜んで」
この瞬間、新しく一つの婚姻が生まれた。

「これにて一件落着、かな？」
優斗が安堵したように息を吐いた。
「はい。わたしも家の考えと立場を潰さずに済みました」
「こちらとしても、ユウト様と関係の深い相手との婚姻を結ぶことができたのは僥倖だ。もちろんココをないがしろにしてなどしないが」
「最後は大団円で良かったね」

「というより、ユウってラグを色々と試してませんでした？」

「そりゃね。だってココ見て『可憐』とか『美しい』とか言ってるし、なんかもう見た感じで誠実そうだったから」

「つまり？」

「ココの立場も家の考えもミラージュ聖国の思惑も、全てまるく収めるならラグが名乗り出るしかなかったから、ちょっと突っついてみた」

「……バレてたのか」

まあ、あれで気付くなというほうが無理だが。

「ラグが名乗りでなかったらどうしたんです？」

「潰して終了」

あっさりと言う優斗。

本当に自分が名乗り出てよかったとラグは思う。

「あっ、そうだ」

と、ここで優斗はわざとらしく声を発すると、

「そこの大臣と第３王子は喋らないでください」

先ほど睨んで黙らせたというのに、まだ何か言おうとしている大臣

とココと結婚しなくて済んだあまりに余計なことしか言いそうにないマゴスに忠告する。

「せっかくのハッピーエンドに水を差されたらたまりません」

軽く睨みを利かせる。

「で、ですが……っ！」

「嘘つきのくせに生意気だ！」

優斗が忠告したのにも関わらず二人は言葉を発する。

「……ミラージュ王。二人をご退場させていただいてもよろしいですか？」

この状況だと、またココにあれやこれやと言ってくるだろう。

「ココを貶されるのが私にとって耐えがたいことであるということをお二方はご理解していない様子です」

先ほどの言動もイラっと来たのは確かだ。

「特に大臣？　昨日に王女が私の所へ来たこと。貴方の仕業であるのならばこれ以上、心証を悪くする言動はよしておいたほうがいいですよ。貴方は大魔法士である私に『ミラージュ聖国は最悪だった』という気持ちを抱かせたいのですか？」

優斗の言葉に大臣の顔がさらに青ざめる。

どうやらビンゴらしい。

そしてこれぐらいに脅せば、さすがに大臣は黙った。
マゴスは優斗に色々と言っているようだが、ミラージュ王は優斗の言うとおり早急に二人を退出させた。

「ありがとうございます」

「いえ、大魔法士様の命とあらば」

何でも言うことを聞く、という意味なのだろうか。
正直、優斗としてはこうまで言われると気持ち悪い。
自分の立ち位置がさらに分からなくなる。
が、明日には帰ることだし、優斗は頭を振って切り換える。

「ではラグフォード様、ココ＝カル＝フィグナが婚姻相手と相成ったことを祝して、少しばかり祝いを送りたいと思います」

優斗は未だに手を取り合っているココとラグに笑みを向ける。

「何をするんです？」

「見てのお楽しみだよ」

言いながら優斗は軽く左手を振るった。

「セルシウス、ヴォルト、四大、二極。そして――」

優斗は詠唱を紡ぎ、

「マクスウェル」

大精霊９体の名を呼び、

「来い」

瞬間。

優斗の背後に大精霊９体が控えた。

その圧倒的な存在感。

まさしくミラージュ聖国が崇拝している精霊の在り方。

大精霊たちは一様にココとラグに笑みを浮かべると、マクスウェルを中心に回り始めた。

そして天井近くまで上昇し、あと少しでぶつかる……となった瞬間に全ての大精霊が各々の属性を基調とした光の粒子へと成り代わった。

その粒子がゆっくりと謁見の間、全体に降り注ぐ。

「わぁっ、すごいです！」

幻想的な光景にココが感嘆の声をあげる。

「……すごい」

ラグも驚く以上に目の前の情景にただ、感動する。

ミラージュ王は感動以上の何かを感じているようだ。

「……本物のマクスウェル様」

しかとミラージュ王の目に映った。

「マティス様より早１０００年。ようやく我が国にマクスウェル様が現れてくださった」

身震いまでし始めた。

「大魔法士様。各属性の大精霊様に精霊の主――マクスウェル様を我が息子とフィグナ様のために呼び出してくださったこと、大精霊様のお姿を拝見させていただいたこと。感謝の言葉しかありません」

そして始めて会ったときと同じように膝立ちで手を合わせた。
優斗は心の中で昨日と同様に勘弁してほしい、という気持ちで満載だが、この状況では言い辛かった。
だから努めて平然としたフリをした。

「気にしないでください。これが私なりのお祝いです」

しんしんと降ってくる光の粒子。
ココやラグが呆けるように見とれた光景も、その最後の一粒が地面に落ちて消える。

「さて」

全てが消え、ミラージュ王が立ち上がると優斗は明るい声を出した。

「この後は二人でのんびり、話してきなよ。今日も夜にパーティーあるらしいけど、それまではごゆっくり」

◇　◇

翌日、優斗とココは王城の入り口の前にいた。
昨夜は昨夜で婚姻相手が変更になったことをパーティーで発表したり優斗が謁見の間でマクスウェルを召喚したことを言ったりなんだりと大変ではあったが、特に大きな問題が起こることもなく終わった。
今はミラージュ王を始め、またたくさんの人たちが見送りに参列している。

「ラグは？」

「忙しいんじゃないです？」

「ああ、そうかもしれないね」

急に婚姻相手になったものだから、何かと大変なのかもしれない。
と、思っていたのだが、

「あれ？」

「ラグです」

なぜか少量の荷物を持ってラグが優斗たちのところへ向かってきた。

「ココ、私も一緒に向かっていいか？」

「ラグ？」

「婿入りする身なれば、ココのご両親に挨拶に向かわねばなるまい。いや、むしろしなければならない」

それが当然というものだ。

「でも、ラグって忙しいですよね？」

王子なのだし、忙しいのではないだろうか。

「都合上、明日には戻らなければなるまいが……やはり、こういうことはきっちりとやったほうがいい」

そしてラグはミラージュ王へと身体を向け、

「父上。そういうわけですから、今よりリライトに向かいます」

「いいだろう。粗相は働くな」

「分かっております」

渋るとか止めるとかなく、あっさりと決まった。

優斗がココに耳打ちする。

「……なんかミラージュ王って物わかり良すぎない？」

「だから“優王”なんて言われてるんです。民にも息子にも優しく甘いって」

「……なるほど、だからラグみたいな凄いのとマゴスみたいな馬鹿な子供がいるのか」

◇　◇

そして夕暮れ。
リライト領内へと入った馬車は、

「……ココの実家に向かうのではなかったのか？」

トラスティ家の前に止まって、優斗……だけでなくココとラグも降りることとなった。

「いえ、やっぱり最初はここです。たぶん、今日帰るの知ってるから、何人かはいると思いますし」

「なんかさ、本当に溜まり場になってるよね」

「そうですね」

優斗の苦笑にココが笑う。
３人して門を通って家に入り、広間へと向かう。

「ただいま」

「戻りましたよ～！」

優斗とココが広間へ入ると、４人と赤ん坊がソファーを囲んで談笑していた。

「優斗さん、お帰りなさい」

「あーいっ！」

「おかえりー」

「帰ってきたか」

「お帰りなさいですわ」

フィオナ、マリカ、リル、卓也、アリーが出迎える。

「義母さんと義父さんは？」

「テラスで王様とお酒飲んでます」

また来たのか、と優斗は呆れる。

「まだ夕方だよ？」

「仕事が早く終わったらしくて」

「……そうなんだ」

「たぶん、最終的には全員が巻き込まれるんじゃないですか？」

「まあ、そうだろうけど……。なんかもう、行く手間が省けたっていうか」

すぐに登城する必要がなくなったのは楽だが。

「それでココはどうなったの？」

リルが尋ねる。

「婚姻を結ぶことになりました」

「へぇ～」

それはそうよね、とリルが納得して頷いているあいだに、アリーが優斗とココの後ろにいる存在に気付く。

「後ろのお方は？」

アリーが尋ねると、今まで乗り遅れていたラグが全員に頭を下げた。

「わ、私はココの婚姻相手となるラグフォードと申します。皆様、どうぞよろしくお願いいたします」

緊張しているのか、ずいぶんと律儀な挨拶だった。

「左からアリー、リルさん、タク、フィオとマリちゃんです」

「どういう人たちかというとリライト王族、リステル王族、一般人、公爵令嬢、龍神」

一人だけ扱いが酷かった。

「おい」

「事実だよ」

優斗がツッコミを笑ってかわす。
が、ラグには最後のところが引っかかる。
リライト王族とリステル王族もおかしいのだが、それ以上におかしいのがあった。

「……龍……神？」

ギギギ、とゼンマイで動いているかのようにラグが首を優斗に向ける。

「僕の娘にして龍神の赤子であるマリカです」

「あいっ！」

元気よくマリカが返事した。
瞬間、ラグが平服した。

「こ、これは龍神様！　私はミラージュ聖国第二王子ラグフォード＝キリル＝ミラージュと申します！　この度は龍神様を拝見させていただくなど光栄の至りであります！」

長ったらしく色々と言った。

「……あう？」

まあ、マリカに理解できるはずもないが。

「優斗、こいつはどうしたんだ？」

「信仰している神様を目の前にしたらこうなるんじゃない？」

「そうか」

優斗の説明に卓也だけでなく全員が納得する。

と、ここで階段を下りる音が聞こえた。

そして広間にもう一人現れる。

「ユウト、戻ったらしいな」

上機嫌で王様が姿を見せた。

が、一人平服している状況を見て、

「……これは何だ？」

「ココの婚姻相手です。ただいま、龍神様を絶賛崇拝中です」

優斗が王様に状況を説明する。

と、新しく現れた存在にラグが気付き、それがリライトの王様だということで今度はそっちに平服する。

「こ、これはリライト王！　私は此度、貴国の公爵令嬢と婚姻を結ばせていただくミラージュ聖国第二王子の――」

「ああ、よいよい。ここは謁見の間ではないし公式の場でもない。気楽にしろ」

酒を飲んで楽にしている場を重苦しくしたところで何の意味もない。

「はっ！　ありがたきお言葉、感謝いたします」

そう言って、ラグフォードはキビキビと立ち上がった。

「なんだ。触れ書き通りの男らしいな」

「いえ、触れ書きの相手は噂通りの駄目王子でしたよ。これはお兄さんのラグフォード王子です」

「相手が変わったのか？」

「ええ。触れ書きの相手のままだったらココの婚姻、潰してました」

「そうか」

ただそれだけを言って、王様はまたテラスへと上がっていく。

どうやら婚姻がどうなったのかだけ聞きに来たらしい。

詳しい話は後日、ということだろう。

「何？　なんか色々とあったみたいね」

興味津々でリルが訊いてきた。

そのほか、全員が同じように頷いている。

「とりあえず大変だった」

「ユウは軽く死にかけてましたし」

「ココは最初の相手に泣かされるし」

「ユウはミラージュ聖国の大臣とか王様に喧嘩売るし」

「ココは婚姻相手が変わるし」

「ユウは完全オリジナルの神話魔法創るし」

「ココは創れって無茶ぶりしてくるし」

矢継ぎ早に出てくる出来事だが、時系列がめちゃくちゃなので意味が通らない。
代表して卓也が言った。

「……優斗、ココ。とりあえず最初から説明してくれ」

◇　　◇

「へぇ～、それで相手がラグフォード王子になったのね」

「そうです」

ソファーに全員座る。
最初から話を聞くと、ずいぶんと凄いことになっていたことが分かる。

「ユウトさんも大変でしょうが……これからはそういったこともあるということを理解できてよかったですわね」

「……いや、あれは本気で勘弁してほしいんだけど」

「無理ですわ。わたくし達どころかマティス出自の国であるミラージュ王にまで大魔法士の再来と認識されてしまったのですから。こうなってしまったら父様もどこまで抑えきれるか分かったものではありません」

「……うわぁ……」

優斗は今になっても凄く後悔する。
さらには隣に座っているフィオナが優斗の左腕に触れる。

「優斗さん、あまり無理はしないでください。すごく心配しますから」

「ごめんね。けどあれは予想外だったんだ」

まさか魔物を呼び寄せるなんて誰が予想付くだろうか。

「ラグはさっきから、何をチラチラとフィオを見てるんです？」

さっきから落ち着きなくラグが視線を移ろわせているが、その中で

も一番視線を向けているのはフィオナだ。

「美人過ぎてビックリしました？」

「そ、そうではない。確かにフィオナ様はユウト様に相応しいほどの見目麗しい方だが、私はユウト様の奥方にどのような挨拶をすればいいか考えているだけで……」

「別に普通でいいんじゃないの？」

気軽にリルが言う。

「リル王女、それは無理な話というものだ。大魔法士様の奥方にして龍神様の母君なのだぞ。この『セリアール』において唯一無二と言っていいほどの女性なのだから言葉を選ばなければならないのは当然だ」

だからこそ言葉を考えているのだが……。

当の本人であるフィオナは少し困った表情を浮かべる。

「私、いつの間にか凄い人になってませんか？」

「僕はミラージュ聖国に行って実感したよ」

マクスウェルの契約者がどういう立場なのか知らされた。

フィオナはその契約者の奥さんだと触れ回っているので、やはり特別扱いにはなるのだろう。

と、ここで卓也が疑問を浮かべる。

「リルとココの婚約者は知り合いなのか？」

「一応ね。何度かパーティーで顔会わせたことがあるくらい。これだけイケメンなら印象に残るわよ」

「そうなのか」

卓也の問いに答えるリルだが、すぐにニヤっとした。

「なに？　もしかして妬いてる？」

「いや、別に。修やクリスがいるんだ。新しくイケメンが出てきたからといって妬く必要性はないだろ。彼に妬くならとっくに妬いてる」

「それもそうね」

あまり期待していなかったのか、リルもさっと流す。

「ラグもあまり畏まらないほうがいいです。フィオはユウの奥さんだからって威張る人じゃないですよ」

「それはユウト様の奥方なのだから分かるが……緊張するものは仕方がなかろう」

せっかく優斗とは良い間柄を築けているのだ。

奥方に粗相を働いてしまっては、と思うと緊張するのも当然。

「あの、優斗さんやまーちゃんは分かりますが、私は夫や娘と違って特別な存在ではないので」

謙遜するフィオナ。
だが、リルが突っ込む。
「旦那も娘もとんでもない時点でフィオナも普通じゃないことに気付きなさいよ」
「ちょっと待って。僕が一番の一般人なん――」
「世界で二人目の契約者のくせに一般人とか、どの口がほざくのよ」
「……すみません」
まるで決まり切ったコントのようなやり取り。
だが、ラグだけはその光景にハラハラしていた。
「リ、リル王女？　少し言い過ぎでは？」
「そう？」
「いつも通りだろ。ちょっとしたじゃれ合いだ」
「そうだね」
ズバっと言われた優斗もケロっとしている。
「王子はあれか？　すぐにココの家を継ぐのか？」
「い、いや、なにぶん急な話になってしまったので私の仕事を末の弟に教え込まなければならないし、私でなければいけない仕事もある。他にも仕事の引き渡しは星の数ほどある。まだまだやるべきこ

とはたくさんあるので婚姻を結ぶとはいえ、すぐにこちらに来れるわけではない」

「それじゃ、時々こっちに来るってことか？」

「そうなる」

「だったらゆっくりでいいから慣れておけ、このやり取り。今日はまだマシなほうだ」

「……マシ？」

「馬鹿二人がいないからな」

「シュウとズミさんがいたら、さらに混沌と化すんです」

ココが説明する。

ラグは少し、乾いた笑いを浮かべたが……、

「……努力する」

「はい。頑張ってください」

◇　◇

そのあと、ココとラグは早々に引き上げて実家に挨拶をしにいった。
残ったメンバーは王様に巻き込まれて当然のこと、お酒を飲むことになる。
フィオナは酒を飲まなかったので唯一潰されたのは卓也だけだが、リルが責任を持って引き連れて帰った。
王様とアリーも意気揚々と帰る。
優斗は一人、テラスにいて酒で火照った身体を冷ましていた。
そこにマリカを寝かしつけたフィオナがやってくる。

「寒くないですか？」

「いや、ちょうどいいよ」

「他国まで行った帰りなんですから、疲れているだろうし早めに寝たほうがいいですよ？」

「うん、分かってる」

頷く優斗。
フィオナが優斗の隣にちょこんと座った。

「大変でしたか？」

「そうだね。大変じゃなかったとは口が裂けても言えないよ。国賓待遇なんて疲れるだけだし、王様からはココの婚姻を判断しろなんて言われてたし、あげくに戦闘だからね」

苦笑する優斗。
フィオナはぎゅっと優斗の左腕にしがみついた。

「……ん？」

少し違和感が優斗に生まれる。

なんとなく、腕を組みたいから組んでいるのではなくて、“逃がさないように”腕を掴んでいると優斗は感じた。

「どうしたの？」

「……少し、優斗さんが遠く感じます」

「どうして？」

「他国の王様にもマティスの再来だって認められて、国賓待遇まで受けて。なんとなく、不安になりました」

「僕自身は何も変わってないよ」

「分かってますし、信じてます。優斗さんはここにいてくれて、私の隣からいなくならないって」

信じ切ってはいる。

「でも、優斗さんはとても凄い人だから……。いつか手の届かないところに行ってしまうんじゃないか、と思ってしまって」

だからしっかりしがみついておかないといけない、と。

……なぜか、そう思ってしまった。

優斗はフィオナの言葉に、安心させるような笑みを浮かべる。

「ぼくはどこに行くにしても、フィオナを置いてけぼりにはしない」

だってそうだ。

「僕の居場所は君の隣。もし僕を遠く感じたとしても気のせい。だって僕は君が離さない限り、この手を離すつもりはないから」

優斗はぎゅっとしがみついているフィオナの右手に、自らの右手を重ねる。

「私は絶対に離しません」

「じゃあ、問題ないね」

「はい」

安堵させるような優斗の声音に、フィオナの心にあったモヤモヤが晴れていく。

だが、それが無くなると今度は別のことが気になる。

「あと、やっぱりミラージュ聖国に行ったら女性からも人気あったんですよね？」

「どこぞの大臣に王女様を刺客として向かわされたりはしたけどね」

「やっぱり……」

浮気云々は考えていないが、心配ではある。

これからもこういうことが多々、あるのではないかという心配が。

「ただ残念なことに皆様、僕の好みから外れてるから」

おどけるような感じで優斗が言う。

と、ここでフィオナは気になったことを訊いてみる。

「そういえば、優斗さんの好みってどんな感じなんですか？」

今まで知らなかった。

優斗の女性の好みなんて。

「知ってどうするの？」

「精進します」

冗談なく真剣に言ったフィオナに、優斗が少し吹き出した。

「け、結構本気なんですよ！」

「そっかそっか」

優斗は返事しながらも、くつくつと笑い声を漏らす。

「まずは名前からかな」

「名前？」

「僕は名前にもうるさくてね。『フィオナ』って名前が好みなんだ」

「えっ？」

ビックリするフィオナ。
優斗は笑いながら続ける。

「あとは黒髪ロングのストレートで、大和撫子な雰囲気を漂わせてるんだけど結構嫉妬深くて、美人過ぎてこっちが心配になるぐらいの女性が好み」

優斗の言葉にフィオナは未だ、呆ける。

「つまり」

重ね合わせていた右手をそっと離して、優斗はフィオナの額をツン、と押す。

「フィオナは僕にとって１００点なので精進する必要はありません」

年の瀬

大晦日、日付が変わるまであと3時間といったところ。
ココの婚姻騒動も一段落し、優斗は年の瀬を家でゆっくりとくつろいでいた。

「ユウト。明日から1泊2日でスキーに行くらしいけど、大丈夫なの？」

広間のソファーでくつろいでいる優斗に向かいで紅茶を飲んでいるエリスが訊いてくる。

「準備は終わってますよ」

すでに荷物は詰め終わっている。

「シュウくんも凄いわよね。スキーに行くって決めたの3日前でしょう？」

「元々はもっと前に計画してたらしいんですが僕とココのせいで日程ずれたらしくて。気合いで決めたって言ってましたけど、みんなの日程調整とか泊まる場所とか僅か数日でどうやったのか謎です。一応、貴族とか王族とかいるのに」

「都合よくシュウくんの思う通りに進んでるんじゃないの？　けどまあ、あのバイタリティは素直に尊敬するわ」

二人してくすくすと笑う。

「新年早々大変そうね」

「慣れてますよ」

「今年一年は似たようなことばかりだったから？」

エリスが苦笑する。

優斗もつられて苦笑いになった。

「今年……というか正直、時系列的には無茶苦茶な1年にはなりましたけど……」

12月の末から3月末まで吹っ飛ばされているので、なんとも言うことの出来ない1年ではある。

「ただ、二度とできない経験をした1年、といったところでしょうか。義父も義母も娘もできましたから。フィオナなんて恋人兼婚約者兼他国向けには妻ですし」

これ以上の経験は絶対にないだろう。

「義母さんは？」

「ユウトと同じよ。無口だった娘の性格がすごく変わったし、義息子できるし、孫なんて龍神。これ以上の経験はないわね」

変化がありすぎた1年だ。

「しかも義息子は最近、大魔法士の再来なんて言われるし」
マルスの周囲もにわかに騒がしくなっていると聞いている。
「まあ、正直そこらへんはどうでもいいけど」
だから何だという話だ。
「ただ、ユウトが義息子になったことは私にとって今年一番の幸せね」
そう言いながらエリスは隣に座って優斗を抱きしめる。
「あの、義母さん？」
「なに？」
「なぜに抱きしめてくるのでしょうか？」
「ユウトがここにいてくれる幸せを表現しようと思って」
「そうですか」
別に嫌じゃないのでいいが。
と、ここでマルスも帰宅してきた。
そして優斗とエリスの状況を見て、一言。
「何をやっているんだい？」
どういう状況になったら妻が母性爆発させながら、義息子を抱きし

めているのかが分からなくて訊いてみる。

「ユウトが義息子であることの幸せを表現中なのよ」

「そうか」

マルスは一つ、頷く。

年の瀬だからこの1年で「優斗が義息子になって幸せだ」とでも話していたのだろう。

「まあ、私のほうがユウト君を義息子にできて幸せに感じていたと思うが」

「……なんですって？」

マルスの一言にエリスが食いついた。

「だってそうじゃないか。私は長年の夢が叶ったんだ。ユウト君と飲み交わすのがどれほどの幸福であるか君は知らないだろう？」

「何言ってるのよ。私だって男の子、欲しかったんだから。それにユウトは私にすごく優しくしてくれるし、母としてこれほど嬉しいことはないのよ」

「馬鹿を言うな。私のほうが幸せだ」

「私よ」

なぜか変なにらみ合いに発展した。

――これ、どうしたらいいんだろう？

優斗としても言ってくれていることはとても嬉しい。
けれど争っている内容がアホらしすぎる。

「何をしてるんですか？」

と、ここでマリカを寝かし終わったフィオナがやってくる。

「ユウトがいてくれて、どっちが幸せになったか議論してるのよ」

エリスが何とも馬鹿らしいことを言う。
が、そこはマルスとエリスの血を引いているフィオナ。

「何を言ってるんですか。優斗さんがいてくれて、一番幸せなのは私です」

ばっちりと参戦してきた。

「私なんて優斗さんがいるから恋人で婚約者で妻になれたんですから。しかも優斗さんのおかげでまーちゃんのママにもなれましたし、これほど幸せを与えてもらった私が一番です」

そして少し母を睨むフィオナ。

「というより、いつまで優斗さんを抱きしめてるつもりなんですか？」

軽い嫉妬の様相を呈する。
エリスはフィオナに対して勝ち誇ったように、

「義母の特権よ」

「なら私は妻の特権で優斗さんに抱きしめられたいので離れてください」

「それならば私は義父の特権でユウト君の頭を撫でようと思う」

フィオナをマルスも優斗たちのところへと近寄ってきた。

優斗はもう、なすがまま。

と、そこに来客がやってきた。

「ちわっす！」

「年越し蕎麦、食いたいと思うだろうから持ってきてやった。おばさん、厨房借りるよ」

「やはり日本人といえばこれだろう」

修、卓也、和泉が大荷物を持って広間へと入ってくる。

けれど、広間ではなぜか優斗の争奪戦とも言えるべき状況。

「どういう状況なのだ？」

「……僕が一番訊きたい」

◇　◇

「ユウトたちの世界じゃ年を越す前にお蕎麦を食べるのね」

蕎麦を啜りながらエリスが物珍しく言った。

「あれ？　フィオナの家って日本の血も入ってんじゃないっけ？」

ふと修が疑問に思う。

「ばっちり入ってるわよ。まあ、その人もこっちの世界に来た頃は食べてたかもしれないけど、私が生まれた頃は高齢だったしね。年の瀬を一緒に過ごすこともなかったから知らないわ」

「へぇ～、そうなんすか」

言いながら修はがつがつと蕎麦を食べる。

「そういえば3人……というか修は明日の準備は大丈夫なの？」

「問題ねーよ。馬車乗るまでここにいる予定だったから準備は完璧にしてあんだよ」

修が大荷物を指差す。

「ちゃんとオレが修と和泉の分を確認したから大丈夫だ」

厨房から顔を出して卓也が安心させるように言う。

「なら大丈夫だね」

なんだかんだで修は計画立てても、準備に関してはギリギリまでやらない。

けれど卓也が確認したとなればバタバタすることはないだろう。

と、ここで来客が増える。

「こんばんは！」

「来たわよ！」

リルとココがやって来た。

彼女たちも大荷物を持っている。

「あら？　あんた達、何を食べてるの？」

「年越し蕎麦。俺らの世界じゃ年の瀬にこれ食べるのが普通なんだよ」

「ふ～ん。外が寒かったから温かいもの欲しかったのよね。あたしの分もある？」

「あっ、わたしも欲しいです」

ココも手を挙げる。

「厨房に卓也がいるからもらってこいよ」

「分かったわ」

「は～い」

いそいそと二人は厨房に向かう。

と、そこでリルとココに少しだけ遅れて、さらに来客。

「どうせ集まっているだろうと思っていましたが、やっぱりですね」

「夜分に失礼します」

クリスとクレアもやって来た。

「なんだ、やはりお前らも来たのか？」

和泉が当然のように訊いてきた。

「家にいたところで暇ですから。明日からスキーに行くので、どこぞのパーティーに出る気も起きません」

「そうか」

「それで皆さんは何を食べているのですか？」

「年越し蕎麦だ。お前らはどうする？」

「いただきましょう。クレアはどうします？」

「わ、わたくしもよろしければ」

「分かった。少し待っていろ、卓也に言ってくる」

和泉が立ち上がろうとするが厨房から卓也の声がする。

「聞こえてるよ！　つーか誰か手伝え！　いや、誰かっていうか優斗かフィオナかクリスのうち、一人でいいから手伝ってくれ」

今いるメンバーでは、あとは総じて役に立たない。

「私が手伝ってきますね」

「うん、お願い」

苦笑しながら優斗が頷き、フィオナが厨房へと向かう。
少ししてリルとココが器を持って広間に戻ってきた。
そして蕎麦をすする。

「おいしいです」

「そうね」

寒い中、ここまで来たので温かいものが身に染みる。
その姿を見て和泉が優斗に耳打ちした。

「婚約者に頼めない状況が悲しみを誘うな」

「まあ、王女様だし尻に敷かれてるし。というか王女様に料理を手伝わせるのを求めたら駄目じゃない？　料理できるクリスとかフィオナが貴族としても変なんだから」

「それもそうか」

話しながら、優斗と和泉の視線がリルに向かう。

「……なによ？」

「いや、なんでもない」

「なんでもないよ」

◇　◇

日付が変わるまであと3分。

マルスとエリスは若いのは若いの同士で、と言ってテラスでお酒を飲んでいる。

優斗とフィオナが火の精霊に頼んでテラスの空気を暖かくしているので、防寒は完璧らしい。

若いのは広間でまったり。

「あと3分で日付が変わるのな」

「僕たちにとってはこの世界で初めての年越しだね」

「なんとなく感慨深いものがあるな」

「確かに」

4人でそれぞれ、頷く。
と、ここで騒がしい音が玄関から聞こえてくる。
そして勢いよく二人が入ってきた。

「ま、間に合いました！？」

「おそらくな」

アリーが息を切らせて、レイナが軽く息を弾ませながら広間に登場。
大きく深呼吸をしながら息を整える。

「ふぅ～……よかったですわ。どうせ皆、ここにいると思ってましたから」

「そうだな」

まさかの日付の変わるギリギリでの登場に他のメンバーは少し驚く。

「公務あるって言ってなかったか？」

「シュウ様、そんなもの速攻で終わらせましたわ」

「会長はどうした？」

「アリーの護衛を買って出た」

だからアリーと一緒だったということだ。

「そうか。ならお前達もこれを持て」

和泉がアリーとレイナにも“ある物”を渡す。

「……クラッカーか？」

「そうだ。日付が変わったと同時に引け」

「了解だ」

レイナが頷く。

アリーも続いて頷いた。

「一応、集合は明日の朝ってことなんだけど、なんだかんだで全員集まっちまったな」

「それはまあ、僕らは初めての異世界の年越しだし、アリー達は友人が出来てから初めての年越しだからじゃない？」

このイベントはある意味、どちらとも初めてなのでこうなったのも当然だろう。

「そんじゃまあ、せっかく集まったんだから俺ら『チーム』の来年の抱負としては、だ」

修が全員の顔を見る。

「今年以上に大暴れするぞ」

「却下」

「なぜだ!?」

決め台詞を優斗に瞬殺された。

「お前、今年以上って……」

「……自分、胃に穴が空きますね」

卓也とクリスが勘弁してほしい、といった感じで修を見る。

「しゃーないな。そんじゃ、今年以上に楽しく遊ぶってことでいいか?」

「最初からそれにしろよ」

「そうだね」

頷く優斗に修と和泉以外が全員、苦笑する。

「つーわけで、あと何秒だ?」

「３０秒だよ」

「ちょうどいいな。みんな、クラッカーを持ってくれ」

修の合図で全員、クラッカーを引っ張る体勢になる。

「……思ったんだが、この音でマリカが起きるんじゃないか?」

クラッカーを持ってきた張本人、和泉がふと気になったことを言う。

「大丈夫ですよ。まーちゃんは寝ちゃったら、騒いでもほとんど起きませんから。それに念のため、風の精霊にもお願いして音は通さないようにしておきますし」

「それなら安心だ」

あらためて和泉もクラッカーを構える。

「うし、5秒前からカウントダウン行くぞ」

全員で秒針を見つめる。

あと少しというところで修が右手を広げて前に出した。

「せーのっ！」

全員が時計から修の指折り時計に注目する。

「ごおっ！」

「よんっ！」

「さんっ！」

「にっ！」

「いちっ！」

クラッカーの紐を引っ張る。

パン、パパン、と不揃いなタイミングではあるが、クラッカーが鳴り響く。
微妙に合わなかった音に全員から笑みが零れる。
けれど、だ。
続く新年最初の言葉。
これだけは全員が同じ言葉を、同じタイミングで言うことができた。

『あけましておめでとう！！』

リベンジ・スキー旅行

馬車に朝一で乗ってスキー場へと向かう。
二台に分けて向かって片方には優斗、フィオナ、マリカ、卓也、リル。
御者台には和泉とレイナ。
もう片方にはクリス、クレア、ココ。
そこの御者台は修とアリーが乗っている。

「これ、去年のリベンジだよな」

馬車の中で卓也がしみじみと言う。

「そうだね」

唯一、意味の分かる優斗が頷いた。
初めての泊まりの旅行で、まさかの展開だった。

「どういうことよ？」

リルは意味が分からずに問いかける。

「オレら、スキー旅行に行こうとしてたら召喚に巻き込まれてこっち来たんだよ」

「そうなの？」

「そうなんだ」

今でも強烈な印象として残っている。

「まあ、修に感謝だな。あいつがいなかったらオレら死んでたし」

「修様々だよね」

うんうん、と優斗が首を縦に振る。

「修も去年のことがあったから、ことさらスキー旅行は拘ってたみたいだ」

「やっぱり拘ってたんだね」

「じゃないとこんな日程で旅行しようなんて思わないだろ。優斗たちが他国行くはめになって一回はポシャった計画を練り直して、しかも数日前に成立させるなんてさ」

「それもそうだね」

修の願いが上手く反映されて、今回の旅行になったと言ってもいいかもしれない。

◇

◇

スキー場に着いた。
とりあえずは荷物を預け、マリカも託児所に預ける。
そしてウェアを着てスキー道具をレンタルし、全員が集合した。
人々を山の上に持って行くものも、リフトの似たようなものだ。
おそらくは魔法科学で動かしている一種。
和泉に訊けば詳しいことは分かりそうなものだが、長くなりそうなので却下。
というわけで優斗はまず、

「この中でスキーの経験者、手を挙げてくれる？」

経験者と初心者を分けることにした。
手を挙げたのは、

「僕とクリスとアリーとレイナさんにココか」

なら、このメンバーを今日は先生にしよう。

――これならマンツーマンで教えることができるし。

優斗は考えを纏める。

「今日のうちは経験者組は初心者組を教えることにしようか。先生――生徒の組み合わせとしては僕とフィオナ、クリスとクレアさん、レイナさんと和泉、ココと卓也、アリーとリル。これでいい？」

「あいつはいいの？」

唯一、名前を呼ばれなかった修をリルが指差す。

「いいよ。どうせ言うこと聞かないし、勝手に滑らせておけば2，3時間でパラレルターンまで出来るようになってるから」

教えようとすると手間なのだから、いっそ教えなければいい。

「相変わらずの信頼関係ですわね」

アリーが苦笑する。

ある意味、最強の信頼関係を結んでいるのは優斗と修だろう。

◇　　◇

「そうそう。ストックの先を持ってる方の手と逆の手に持っていって、それを握る。そして身体の前に握ったストックを真っ直ぐ突き出す。あとは曲がりたい方向に握ったストックを向けるんだよ。そうすれば勝手に曲がってくれるから」

優斗が後ろ向きに滑りながらフィオナに教える。

「は、はい」

「うん、上手いよ」

「はいっ！」

優斗に褒められたことで、フィオナの気が少し緩む。
すると、

「あ、あわわっ」

左足が流れて転んでしまった。

「う～、油断しました」

「だいじょうぶ？」

「も、問題ありません」

気を取り直すフィオナ。

「じゃあ、頑張って一人で立ってみようか。それも練習だよ」

「はいっ」

「クレア、落ち着いてくださいね」

「は、はい」

頷くものの、クレアはおっかなびっくりリフトに乗る。

一度は転ばずに降りてこられたものの、緊張しなくなるとは言えない。

「す、すみません。クリス様のお手数を掛けてしまって」

自分がスキーをしっかりと出来ていれば、とクレアが言う。

けれどクリスは軽く笑んで答えた。

「気にしなくていいのですよ。ゆったりやりましょう。別に上手くなる必要なんてないんですから」

「違う！　何度も言っているだろう！　力配分を間違えるな！　曲がる際には内側の足を少し前に出せ！」

また別の場所では、和泉が大量に雪を被って倒れていた。

「……会長。男子メンバーの中で一番、運動神経のない俺に最初からパラレルターンを教えるとかどういうことなんだ？」

基本を教えろ。

基本を。

「気合いがあれば出来る！」

「できるわけがないだろう」

「タク、うっかり滑ってしまってスピード出そうになったら素直に転んでください。止まるにはそれがベストです」

「分かった」

ココの言うことに卓也が真面目に頷く。
その態度にココがよかった、と安堵した。

「今更ながらに思いますけど、タクが相手で楽です」

「まあ、修や和泉に比べたら楽だろうけど」

運動神経は普通だし、真面目に話を聞く気もある。

「ただ、習う側としてはレイナは嫌だな」

「どうしてです？」

「絶対にスパルタだぞ、あいつ。最初からパラレルターンとか教え込むタイプだ」

卓也の言うことがあまりにも簡単に想像できて、ココが吹き出す。

「そうですね」

「なんでタクヤのやつは滑れないのよ」

王女コンビの片割れがグチグチと文句を言いながら滑る。

「こっちの世界に来るまで旅行をしたことがないって言ってましたわ。ですからスキーだって当然、初めてですわね」

「というか、どうしてタクヤとココなのよ」

「まあ、タクヤさんの家庭教師がココですから」

そのあともぶつくさと言うリルにアリーがからかうような笑みを浮かべた。

「嫉妬ですか？」

「違うわよっ！」

フィオナがボーゲンを出来るようになると、彼女をココに託して優

斗は託児所からマリカを引き取る。
そして皆が帰ってくる残り30分ほどをマリカと遊ぶのに費やす。
雪を触らせ雪だるまを作って、

「じゃあ、行くよ?」

「あい」

最後に優斗はソリに乗り、自らの足の間にマリカを挟み込む。
坂を段々とスピードを付けて下っていく。

「案外、はやっ!」

「た〜〜〜いっ!」

優斗は下りきると足でブレーキを掛けてソリを止める。

「あうっ! あうっ!」

マリカが大はしゃぎする。

「もう一回、やる?」

「あいっ!」

マリカが頷いたので、優斗はマリカの手を引きながら緩やかな坂を上る。

「あっ、マリカ見て。みんな、滑ってるよ」

ふとゲレンデを見た優斗が指差す。
その中でも一人、凄いスピードで降りてくるのがいた。

「ゆー？」

「そうだね、修だよ」

物の見事にターンしながら修は優斗たちのところへ降りてくる。

「さすがだね」

「当然だろ」

修はゴーグルを上げてスキー板を外す。

「マリカはパパと遊んで楽しかったか？」

「あいっ！」

「そっか。良かったな」

にっ、と修が笑う。

「あと少しで全員が戻ってくるし、もう一回ぐらいソリで滑ろうと思ってるんだけど……そうだ！　修、ちょっと手伝って」

「あん？　別にいいけど」

「サンキュ。それじゃ、まずは俯せに寝そべって」

突飛な発言が優斗から出てきた。

「はっ？」

「俯せに寝そべってと言ったんだよ」

どうやら修の聞き間違えではなかったらしい。
とりあえず、言われた通りに雪の上で俯せになる。

「そんで、次は？」

「マリカ。修に乗っていいよ。それでぎゅ～っと修の首元を掴んでてね」

「あい」

念のため風の精霊に、マリカが落ちないように姿勢補助を頼む。
そして坂の下で優斗は左腕を突き出してスタンバイ。

「おい、お前まさか……」

嫌な予感がする修。

「そのまさか」

優斗がニヤリと笑って、突き出した左腕を引く。
瞬間、

「お……おおおぉぉっ！？」

「あう〜〜っ！」

修が前触れなくゆったりと坂を下りだした。
段々と加速していく。

「ちょ、予想外に速え！！」

「た〜〜〜っ！」

そして無事、マリカは優斗のところへたどり着く。
ソリ代わりの修は顔面が雪まみれになった。

「お帰り、マリカ」

「あいっ」

「修もお疲れ」

「結構ビビったわ」

優斗と修の目が合う。
雪まみれの修の顔に優斗が笑った。
つられて修も吹き出す。

「あはははははっ！」

◇　　◇

夕食も食べ終え、団欒も終わり、男女別れて互いの部屋へと入っていった。
そして就寝前、前回と同様に修学旅行のようなお話タイム。

「とりあえず気になったのだが、クリスはこっち来て良かったのか？」

「ここで変に気を遣われるほうが嫌ですよ」

「それもそうか」

「でも、前にこうやった時と違う点がたくさんありますね」

クリスがしみじみと思う。

「優斗はやっとフィオナとくっついたことか？」

「卓也だって婚約者が出来たじゃねーか」

「クリスも妻帯者になったのだしな」

後半二人――修と和泉に優斗と卓也、クリスが顔を付き合わせる。

「……この二人ってどうなの？」

「シュウは論外ではありませんか？」

「ああ、ないな」

「じゃあ和泉は？」

「……レイナさんとの関係性がいまいち分かりません」

「オレも。付き合ってるわけじゃないんだろ？」

「そうみたいだけど……」

3人そろってじっくりと修と和泉の顔を見る。

「なんだよ？」

「どうした？」

「……いえ、今年は進めばよいですね、と」

「進展あったらあいつらも浮かばれるな、と」

「見ていて可哀想なのが一人いるから、どうにかしてあげたいな、と」

◇　◇

「それでフィオはどうなんです？」

女性陣も男性陣と同様、お話タイム。

「どう、とは？」

「ユウとのことに決まってます」

「えっと……。あまり前と変わりませんよ」

「そうなの？」

「ええ。だって私と優斗さんですし。ただ私が少しだけ積極的になったと思います」

でないと優斗がネガティブになりそうだから。

……自分が彼にくっつきたいのも多分にあるが。

「まあ、あんたらは前からあんだけラブラブだったんだから、これ以上ラブラブしてもらってもこっちが困るわ」

「そうですか？」

「……理解してないのが性質悪いわね」

「しかしユウトとフィオナらしいな」

ため息をつくリルと納得するレイナ。

「クレアさんはどうなのですか？」

続いてアリーが話題をクレアに振る。

「わ、わたくしですか？」

「クリスさんは優しくしてくれますか？」

優しくアリーが訊く。

「は、はい。クリス様がわたくしの夫だなんて、今でも恐れ多いです。未だに少しばかり緊張してしまいます」

「顔は完璧に王子様だもんね」

気持ちはリルとて分からなくもない。

と、ココが不意に笑い出した。

「ふっふっふ。わたしの婚姻相手はまさしく王子です」

勝ち誇ったような表情を浮かべる。

「あれほどのイケメンをよくもまあ、婚姻まで持っていったわね」

「だってラグはわたしのこと可憐だって言ってくれますし、これほど美しい方は見たことがない、とも言ってくれます」

ココの発言にクレア以外は首を捻る。

「……可憐？」

「ロリコンなの？」

レイナとリルが酷いことを言う。

「えっ、なっ！？　ち、違います！」

「いや、でも……ねぇ」

リルが皆に同意を求める。

「わ、わたくし、ココ様は可愛らしいと思います」

「そうですね。美しいより可愛いです」

「ココを可憐って言う剛胆な方は初めてですわね」

「私としてはココは小さくて可愛い、なのだが……可憐？」

なんだかんだで誰も同意しない。

ココが自棄になる。

「い、いいですいいです。どうせわたしは小さいんです。フィオとかアリーみたいにボンキュッボンじゃないですし、レナさんみたいにモデル体型じゃありません！」

どうせ“可憐”なんていう言葉はフィオナとかアリーが似合っているに決まってる。

「っていうかわたしより問題児が3人いるじゃないですか！」

ココは話を逸らすためにまず、レイナを指差した。

「レナさんはズミさんとどうなんです？」

「私とイズミか？」

話題を持ってこられたレイナが少し驚く。

「……う～ん」

しばし考える。

だが、どういう関係なのかと問われると言い難い。

「何とも言えんな。別に恋仲というわけではないが、あいつに誰か好きな奴がいると考えると妙な気持ちになるのも確かだ」

嫉妬というわけでもないだろうが、なんなのだろう。

「ただ、おそらくは“相棒”という言葉が一番しっくり来る」

今の関係を示すには、これが一番だ。

「そうやって悠長に構えてるから、いつか誰かに……」

と、ココが言おうとするが、

「ないと思いますよ」

「ないですわ」

「ないわね」

「……言っておいてどうかと思うけど、ないにわたしも一票です」

あんな人物はレイナ以外、相手にできない。

「リルさんはタクヤさんとどうなのですか？」

アリーが今度はリルに振った。

「あ、あたしは別に……」

ごにょごにょと言い淀むリル。

「ユウとフィオみたいにラブラブしてるわけでもないですし、大丈夫です？」

「なんだかんだで3ヶ月くらい一緒にいるのに、何もないのか？今度、タクヤを婚約者としてパーティーに連れて行くと聞いているが」

優斗とフィオナの時とは違って最初から本当の婚約者なのだが大丈夫なのだろうか。

「……大丈夫じゃないわよ。あのバカ、本当に何もしてこないのよ。キスどころか手を触れることさえしてこないんだから」

リルが言う。

だが、女性のことを慮るなど“あの男性陣”に求めるほうが間違っている。
まともなのはクリス。
愛した女性に対しては少し間違えた方向なのが優斗。
卓也は通常よりもちょっと下。
あとは論外だ。

「これ、どっちが重傷なんです？」

「どっちもどっちだろう」

「あ、あたしはこれでもアピールしてるのよ！　一緒に帰ってるときは少しずつ距離を縮めてるし、みんなといるときだって基本的にはタクヤの隣にいるようにしてるし、それにタクヤがおいしそうに食べてるものはいっつもチェックしてるし、それに、それに――」

リルがあれこれと話す。

「一番最初が一番積極的だったな」

頬にキスまでしたというのに。

「リルさんがもっとガツンといかないと駄目だと思いますわ」

「というか最初のインパクトが凄くて知らなかったんですが、実はリルさんって純情キャラだったんです？」

「わ、わたくしは可愛らしいと思います」

とりあえずクレアが取り繕う。

「どうやったら、その……手を繋いだり……じゃなくて、えっと……触れたりできると思う？」

軽い相談めいたことをリルが訊いてきた。

その問いに答えたのはフィオナ。

「タクヤさんは料理好きですし、一緒に料理でもすれば触れ合う機会はいくらでもあると思いますよ」

「……そうなの？」

「ええ。分担作業じゃなくて共同作業をすれば必然です。私が料理作ってるとき、時々優斗さんが手伝ってくれますが、肩が触れたり食材を渡すときに手が触れたり、たくさんありますから」

あれはあれで幸せな一時だ。

「特に優斗さんたちは私たちと感性が違いますから。料理作れる女の子にぐっと来るって言ってましたよ。婚約者のリルさんが手伝ってくれるなら、タクヤさんだって感動してくれます」

距離もどんどん近寄るはず。

「が、頑張ってみる！」

リルが気合いを入れた。

けれどレイナが問いかける。

「しかし、料理が下手なのは致命的じゃないか？」

「大丈夫ですよ、手伝ってくれるのが嬉しいんですから。それに私だって優斗さんより料理するの下手です」

「そうなのか？」

「とりあえず、物によっては私の家で料理を作る家政婦よりは上手いと思いますよ」

おそらく、ではあるが。

「……何かもう無駄な感じがして聞きたくないんですけど、ユウって何が出来ないんです？」

「あいつは努力家で、しかも初体験のものでも今までの経験を踏まえて上手くこなすからな。そして経験値が異常だからこそ、何でも出来るように思える」

「しかもシュウ様たちと出会って変な方向にまで努力するものですから、余計に性質が悪くなったのだと思いますわ」

「利き手と逆なのにお箸を器用に使えるのが、聞いた中では変な努力です。訊き出せばもっと変なの出てきそうです」

というか絶対に出てくる。

「そういうところはシュウ様とは違いますわね」

「あいつは努力と経験じゃなく、スペックが違うからな」

基本性能が異常だ。

「ユウトも元々のスペックは高いのだろうが、それ以上に経験値が凄い。逆にシュウは経験値がなくともスペックが高すぎる。だからこそあの二人は対等なんだろう」

ライバルとして成り立っている。

「そんなシュウとはアリー、どうなんです？」

「……聞きます？」

「ごめんなさい」

気軽にココが訊いてみるが、思った以上にテンションの低い返しに申し訳なくなる。

「そもそもあいつ、女に興味があるのか？」

レイナがもっともなことを訊く。

「……」

誰しもそれは疑問になっていたので、一瞬押し黙った。

その沈黙をどう捕らえたのか、クレアがある意味で言ってはいけないことを言った。

「その、シュウ様というのは……男色家なのですか？」

「……否定できます？」

ココが尋ねる。

「違うと思いたいですわ」

「そう願うだけだ」

「ユウトとなんか、特にそうよね。なんかもう、心が通じ合ってるっていうか無条件の信頼っていうか……」

「見ていると、軽く腹立ちますよね」

◇　◇

翌日。

皆、朝から滑り始めた。

初級者組は固まって和気藹々と。

上級者組――優斗、修、クリス、レイナ、アリーも固まって難易度の高いコースを滑る。

「そういえば、大丈夫なのか？」

「何が？」

頂上から眼下を眺めていると、ふとレイナが言ってきた。

「初心者組を守る奴が誰か必要じゃないか？　ということだ」

「どういうこった？」

「こっちにはユウトにシュウに私にクリス。アリーにナンパが現れたところで何一つ問題はない。だが初心者組は大丈夫かと思ってな」

「……いや、レイナさんも一応女の子でしょうが」

なぜに守る側に自分を数えているのだろう。

「一般人程度なら話にならないから大丈夫じゃねぇ？」

「まあ、なんだかんだでフィオナさんも他人にはキツいので大丈夫なのでは？」

「ただ、下にいるメンバーに手を出したお馬鹿さんたちをここにいるメンバーが見たら、地獄絵図が始まるのは間違いないですわね」

◇　　◇

「大変申し訳ありませんが、私は人妻なので」

「わたくしも人妻ですし」

「あたしは婚約者いるから」

「わたしも婚姻相手がいます」

そして上級者組が懸念した通り、リフトの近くでスキー板を外して少し休憩していると馬鹿なナンパ二人組がやって来ていた。

「お前ら、悪いことは言わないから帰れ」

「後悔するのはお前達だ」

卓也と和泉としては、別に彼らがナンパするのはいい。手を出すのは構わないのだが、ここにいるメンバーだけは駄目だ。相手が悪すぎる。

「えっ？　別にいーじゃん！　そっち男二人だろ？　だったらオレらもいれてくれたってさ。それで４対４だし」

ニタニタと輪の中に入ろうとするナンパ二人組。

そろそろフィオナが問答無用で精霊術でも使いそうな雰囲気になる。

と、そこに新たな男性が現れた。

「お前ら、私の婚姻相手をナンパするとは良い度胸だ」

ココの前に男性が庇うように立った。

「ココ、大丈夫か？」

男性の顔がココの目に映る。
ココは驚く。

「ラグっ！？」

唐突に現れた婚姻相手に驚きを隠せない。

「どうしてここにいるんです！？」

「ココが手紙でスキーに行くと言っていただろう。急いで来たのだ」

そのままココを筆頭に女性陣をラグが守る。
和泉が卓也の耳に顔を寄せる。

「誰だ？」

「ココの婚姻相手の王子様」

「ああ。こいつがそうなのか」

超絶イケメンがやってきて何事かと思った。
相手もラグの顔面偏差値に少し怯んだが、

「オレ、一応男爵の三男なんだぜ？」

「オレだって男爵の次男なんだよ」

これならば、というアドバンテージを開け明かした。
けれど全員が「だから？」みたいな表情をする。

「私は公爵令嬢ですが」

「わたくしはレグル公爵子息の妻です」

「あたしはリステル国第４王女よ」

「わたしも公爵令嬢です」

「私はミラージュ聖国第２王子だが」

「オレも一応、子爵だけど」

「俺もだ」

アドバンテージどころか、圧倒的に立場が悪い。

「冗談……」

「残念ながら違うんだよ。だから問題になる前に帰っとけ」

まあ、ここにいる面子でいざこざ起こしても問題になるが、上にいるメンバーが来る前に終わらせておいたほうがいい。

もっと面倒になる。

「……はい」

ナンパ二人がスゴスゴと離れていく。

ココは自分の前に立っているラグの姿に未だ、驚きを隠せない。

「ラグ、ビックリしました」

「私はココと少しでも共有した思い出が欲しかったからな。頑張って時間を作ったのだ」

まさしく凄まじいほどの勢いで仕事を終わらせてきた。

ラグの視線は続いてクレアと和泉を捕らえる。

「そちらのお二方はお目に掛かるには初めてだな。私はココの婚姻相手でラグフォードという。ラグと呼んでくれ」

「和泉だ」

「クリスト＝ファー＝レグルの妻、クレアと申します」

互いに握手を交換する。

「しかしこれがココの相手とはな」

「どうです？　かっこいいです？」

自慢するようにココが言う。

「予想以上のイケメンだ。よく捕まえたな」

「凄いでしょう」

誇るようなココ。

和泉はラグを見ると、直球に訊いてきた。

「ラグだったか。お前はロリコンなのか？」

「……」

直球過ぎて周りが固まった。

「ココを望んで婚姻相手にしたということは、ロリコンで間違いないのか？」

「……い、いや、私はココが可憐であり、美しいと思っているだけで……」

「つまりロリコンなのだろう？」

「ち、違っ……」

「別に否定することはない。世の中には多種多様の人間がいる。好みも人それぞれだ。故にラグはロリコンであった、と。そしてココに惚れた。そういうことだろう」

和泉はラグとココの肩を叩いた。

「いいか、ココ。ラグがロリコンならば、大きいというのは悪になりかねない。つまりちんまりとした姿も貧乳であるということもそれはココの自慢すべきステータスだ。誇るがいい」

ラグと出会った最初からアクセル全開の和泉。

卓也はとりあえず、フィオナとリルと視線でやり取りする。

「と・り・あ・え・ず」

卓也が和泉の前に立ち、フィオナとリルが左右を陣取る。
そして、

「黙れ！」

かけ声一つ、フィオナとリルが和泉の頭をチョップして、卓也が蹴りをかます。
雪の上を滑るように和泉が遠ざかっていく。

「悪いな。事故に遭ったとでも思って忘れてくれ」

「あ、ああ」

困惑しながらもラグが頷く。
けれど次いでココが訊いてきた。

「……ラグはやっぱりロリコンだからわたしが好きなんです？」

「ち、違う！　私はココのことを好きになった。それでロリコンと言われるならば仕方がない」

「じゃあ、わたしがフィオみたいにボンキュッボンになっても好きです？」

全員の視線がフィオナに向く。
そしてまた、ココに戻る。

「まず、フィオナみたいなスタイルなんてココには無理じゃないの？」

「無理だろ」

「お、お二方とも。ココ様も頑張れば……」

なんとか頑張ってクレアがフォローする。

ラグは一瞬、言葉に詰まったがすぐに返事をした。

「……も、もちろんだ！」

「少し間があったのは気のせいです？」

「気のせいだ！」

「……なんか疑わしいけど、信じてあげます」

ココが納得してくれたのでラグはほっと胸をなで下ろす。

◇　　◇

そのあとラグは修やレイナ、クリスとも遭遇し挨拶をする。

そしてココと一緒に短い間ではあるが、スキーを楽しんだ。

充分に楽しんだ後、ラグはミラージュ聖国に向かう馬車へ。

優斗たちも帰りの馬車に乗る。

片方は修とレイナ。
もう片方は優斗とクリスが御者台に乗る。
他は全員、馬車の中でスキーの疲れでぐっすりだ。

「そういえば、何も問題が起こりませんでしたね」

クリスがある意味、ビックリする。
ナンパなんていうものもあったが、とりわけ大きい出来事はなかった。

「そうだね」

「珍しくありませんか？」

「珍しいよ」

「そういうこともある、ということでしょうか？」

「ん～、今回は特別だったからじゃないかな」

「……特別？」

どういう意味だろうか。
クリスには分からない。

「ほら、僕たち異世界組にとっては前の世界で出来なかったことだから」

たぶん。
唯一、向こうの世界でやり残した出来事だったと思う。

「初めての泊まり旅行だった。修も卓也も和泉も初めてのスキーだった。全員が生まれてから一番、楽しみにしてた出来事だった」

自分たち、４人組が本当に望んでいた旅行。

「けれどそれは異世界召喚っていうとんでもないことが起こって、行くことができなかった」

そこまで言って、優斗は「違うか……」と否定する。

「正確には“もう一度、スキー旅行をするチャンスをもらえた”っていうのが正しいね」

召喚されなくてもスキー旅行には行けなかった。

なぜなら本当はあそこで、自分たちは死ぬはずだったから。

けれど修に巻き込まれて自分たちは、生き延びている。

「去年のリベンジ。絶対に楽しみたい旅行。そこに“予定外のトラブル”なんて入り込ませたくない」

と、ここで優斗は小さく笑う。

「普段だって望んでるわけじゃないけどね。けれどトラブルはやって来るんだよ」

それはきっと、どうしようもないこと。

そういう“巡り”なんだ。

「けれど今回だけは、何事もなく終わらせたかった」

この大切な旅行を。
何一つ問題なく終わってほしい、と。

「誰よりも強く修が願った」

“今回だけは”
心から願ったことだろう。

「シュウが？」

「言ったかな？　僕らが召喚されたスキー旅行、計画を立てたのは修なんだ」

「それは、まあ……何となく分かります」

修はそういうのが大好きだ。

「“問題が起こって無くなってしまったスキー旅行”だから、修は“問題が絶対に起こらないスキー旅行”を願ったんだと思う。それはもちろん僕も卓也も和泉も同じ気持ちだったけど、想いの強さは修が一番だ」

誰よりも強く願った。

「こんなこと言うのは変かもしれないし、ほとんど冗談みたいなことなんだけどさ……」

優斗は空を見上げる。

「あいつの心からの願いはきっと、天に届くんだよ」

「……シュウの願いは叶うということですか？」

「うん。あいつはきっと、そういう冗談みたいな力を持ってるよ。僕とココが他国に行ったことでズレた日程。なのにあいつは何も問題ないとばかりに旅行を成立させた。普通は貴族、王族、大人数が入り乱れてるのにこんな短期間で旅行を成立させられるわけない」

修がやると違和感はない。

けれど普通に考えたら異常なことでもある。

「もしかしたら、最初の日程は何かトラブルが起こるかもしれないからズレたのかもしれない」

そんな疑いさえ浮かぶ。

「なんとなく言いたいことは分かります」

クリスは頷いた。

修なら、そんなことさえ出来そうな気がする。

「僕らがあいつを主人公キャラだっていう理由はそこだよ。変にトラブルを引き寄せる体質なのもそうだけど、それ以上にあいつはしっかりとトラブルを解決する。そして何が起こっても最後は丸く収まる。仲間の誰も傷つかない」

まるで物語の主人公としか思えない。

事件が起こったとしても、最終的には修の望むように世界が動く。

「でもユウトも似たような感じだと思いますけど？」

トラブルをしっかりきっちり収める。

無理矢理にでも大団円にする。

「僕の場合は強引にねじ伏せてるだけだから」

結果は似てるようでも、やっぱり違う。

「それに僕はあいつほど強く、純粋には願えない」

叶う叶わないの問題ではなく。

あれほどの純粋な願いを持つことができない。

「ああいう魂の持ち主が、やっぱりご都合主義の権化――主人公キャラなんだなって思うよ」

修ほど綺麗になれない自分にとっては。

少しだけ羨むほどの魂。

「なんだかんだ言って、優斗は修のことを高く評価してますよね」

「普段は馬鹿なだけに何とも言えないのが本音だけど」

「そうですね」

互いに笑みを零し、二人して空を見上げる。

「今年は誰がくっ付きますかね？」

「どうだろう？　もし誰かくっ付くなら、僕らが振り回されなければいいけど」

「無理でしょう」

「だよね」

「特にシュウの場合は総出で事に当たらないといけないと思いますよ」

「確かに」

もう一度、二人は顔を見合わせて笑う。
去年は色々としてもらった二人だからこそ。
今年はきっと……もっと皆のために頑張らないといけない。
そう思う。

まさかの成長

3学期が始まり、始業式では優斗たちが闘技大会で優勝した功績も伝えられた。
5年ぶりの優勝に誰も彼もが優斗たちを称えた……のだけれど、

「闘技大会優勝って結構なことだったんだね」

「私も少し驚いた」

「……レイナ先輩？　オレはどうして連れてこられたんですか？」

優勝メンバー3人は生徒会室に逃げ込んでいた。

「お前は余計なことを言いそうだったからな。釘を刺すために連れてきた」

「オレだって分かってますよ。こいつがやったことは口外しない。箝口令だって出てますし、それを破ったら禁固刑になるんでしょう？」

「その通りだが、それでもうっかり口が滑りそうなのがお前だからだ」

「……まあ、確かに色々と突っ込まれて困りはしましたが……」

昼前のホームルーム終了と同時に机を囲まれた。
そこにレイナが颯爽と現れてラスターをかっさらい、生徒会室まで連れ出す。
優斗はクラスメートに囲まれて愛想笑いしているところをレイナが引っ張り出した。

「悪いがユウトの状況が大会終わったときより悪化していてな。うっかりでも伝わってしまえば大変になる。特にお前は間近で見た当事者だからな、念を押すに越したことはない。ユウト、少しくらいお前の状況を話しても問題はないだろう？」

「まあ、ラスターにならね」

「……レイナ先輩、どういうことですか？」

レイナは説明を始める。

「今のところ、アリスト王の手回しで周辺諸国の王族だけにユウトが契約者であり、独自詠唱の神話魔法の使い手であることは知られている。その中にミラージュ聖国があるのだが……」

「あれですよね。大魔法士マティスが作った国」

レイナは頷く。

「その国から『大魔法士マティスの再来』として認められてな。名実共にやばい人物になった」

レイナが告げたことにラスターは顎が外れそうになる。

「な、なんでそんなことに？」

「ユウトがマティスと同じ事をやっているからだ。契約者であり神話魔法の使い手であるからな」

「つ、つまり？」

「マティスを祖とする国がユウトを『マティスの再来』と認めたことで余計に箔が付いた」

よりにもよってマティスが作った国がいの一番に認めてしまったからこそ、性質が悪い。

「笑える話ではあるが、目の前にいるこいつは世界重要人物ランキングのトップランカーだ」

レイナの視線と呆然としたラスターの視線が優斗に集まる。

「だからラスター、うっかりするとシャレにならない」

「わ、わかりました」

さすがのラスターとしても、これは冗談などとは言えない。

事実、マクスウェルを召喚して神話魔法を使っていたのだから。

「まあ、僕が学生身分だからそういう措置を取ってくれてるだけだし、できれば言わないでほしいってだけだから」

軽く笑う優斗。

「しかし貴様……。どうやってマクスウェルと契約したというのだ。少し調べたが１０００年間、契約者が現れなかっただろう？」

珍しく真っ当な疑問をラスターが投げかけた。

「そういえばユウトはどうやってマクスウェルと契約したんだ？」

レイナもいきさつは聞いてなかったので尋ねる。

「８月に大精霊を召喚したでしょ？」

「ああ」

「案外便利だと思ってね。少しばかり調べて、フィオナに精霊術を教える過程で使えるものを実体験してたんだよ。その中で古くてうさんくさい本にマクスウェル召喚の詠唱があって、とりあえず詠唱するだけしてみようと思ったんだけど……」

ちょっとした冗談のつもりだった。

「まさか本物の詠唱だとは思わなくて。そしたらあの好々爺が出てきて、いきなり『それじゃ、やろうかの』とか言って結界張ってきてバトル」

あの時は冗談抜きで焦った。

「契約したということは倒せたのだろう？」

「倒したけどね。普通は無理だよ、あんなの」

「貴様は馬鹿か。倒したのだから無理なはずないだろう」

「ラスター。“普通は無理”とユウトは言ったぞ」

レイナのツッコミに優斗は苦笑する。

「前に話したときは濁したけど、まず上級魔法とか論外。大精霊でさえ召喚して一撃かましたら二撃目お願いする前に強制的にマクスウェルに徴用される」

「上級魔法が論外……だと？」

「まあ、前に聞いたが精霊を強制的に従える精霊の主だし納得できることではあるな」

「要するに上級魔法で牽制して神話魔法をぶっ放す方法しか勝ち目がないんだよ」

こんなの“普通は無理”に決まっている。

「しかも一撃じゃ勝負つかなくて、神話魔法を6個ぐらい使ってようやく戦い終わったからね」

最後の最後、マクスウェルが張った結界すらも破壊する神話魔法を使って、ようやく決着がついた。

「冗談みたいな勝負だな」

「去年最大規模のバトル、絶対にこれだよ」

黒竜を相手したときより、ライカールの馬鹿を相手にしたときより、ミラージュで１０体の魔物を相手にしたときより規模としては大きい。

「ラスター、こんなのに勝てるか？」

「か、勝てます！」

とはいうものの、

「たぶん……いつかは」

あのラスターとしても優斗の強さは認めてしまった以上、勝てるとは断言し辛い。

けれどハッ、と思い出す。

「だが、剣技ではまだ負けていない！」

「悪いがこの化け物は先日、ミラージュで上位ランクも存在している魔物１０体に囲まれたところを剣技だけで６体殺してるぞ。私でも同じことができるかは分からない」

「いや、軽く死にかけたし」

「そういう問題じゃない」

レイナが優斗の頭を軽く小突く。

ラスターはレイナが言った話を事実と捉えて、少し考える。
つまりはなんだ。
自分が以前に好きだったフィオナが愛しているという男性は『大魔法士マティスの再来』と呼ばれるほど魔法も精霊術も優れた人物であり、尚且つ自分が尊敬しているレイナとも対等に剣技を交わせるかもしれない人物である、と。

「これほどの男でなければフィオナ先輩は惚れないということか」

勝てなかったのも無理はない。
そう呟いたラスター。
けれどそれを聞いた優斗とレイナは苦笑する。

「いや、全然そんなことはないよ」

「フィオナはこのような付加価値、どうでもいいと思っている」

「え？　だったらどうしてこいつにフィオナ先輩は惚れたんですか？　付加価値を除いたら価値ないですよ」

酷い言い様だが、確かに……と優斗は納得する。

「まあ、そうだな。ユウトはイケメンというわけではないし、血筋としても子爵ではあるが公爵と釣り合うわけもない」

その点では釣り合っていない。

「だがな、こいつは優しいんだ」

この一点。

今は限りないほどに理由はあれど、フィオナが最初に惚れた理由はこれだろう。

「別に博愛主義的な優しさじゃない。誰も彼も平等にする優しさじゃない。誰かに勘違いされるような優しさじゃない」

一般的な優しさじゃない。
皆が好きになりそうな優しさじゃない。
それじゃフィオナには届かない。

「フィオナのために頑張った優しさ。フィオナだけに送った優しさ。フィオナだけを想った優しさ。フィオナの心に響いた優しさ。それをこいつは持っているんだ」

もちろん仲間にだって優斗は優しい。
けれどやっぱりフィオナにだけは、特別な優しさを見せている。

「フィオナだけしか受けられなかった『優斗の優しさ』に惚れたんだ。他の誰かじゃ無理だろう」

「そうなんですか」

そういえば、とラスターは思い出す。
『貴方の言葉は私の心に響きません』と言われた。
ということは優斗の優しさはフィオナの心に響いているのだろう。

「もちろん、今のフィオナに訊いたら理由なんて腐るほど出てくるだろうがな」

それは別に聞きたくない。

胸焼けを起こすだろうから。

「あと言っておくが、フィオナも存外に特殊な人間だぞ。普通の人間じゃ手に余る」

「……えっ……？」

「だってそうだろう。いくら公爵家とはいえ、あれほどの美少女であるフィオナが誰の手にもつかず、尚且つユウト達と出会う前まで一人ぼっちだったんだ。フィオナ自身に問題がある」

「無口だったし愛想悪かったらしいから。高飛車とでも思われてたんじゃないかな」

「本当なのか？」

「マジだよ」

今のフィオナしか知らないラスターは信じられないだろうが、出会った当初はそうだった。

「あれこれ理由は言ったがな。結論としてフィオナはユウト以外じゃ無理だ。ユウト以外、恋愛対象になれない」

お互い、出会うべくして出会ったとしか思えない。

「無論、ラスターも正義感は強いし良い物件ではあるのだがな。一年の間ではモテていると聞いている」

「あ～、なんかフラグ乱立しそうな優しさと正義感持ってるよね」

与太話に花を咲かせる。
と、ここでノックがされた。

「誰だ？」

「フィオナです。優斗さんはいますか？」

「ああ、いるぞ」

レイナは席を立って鍵を開ける。
フィオナは中に入るや優斗のことをじと～、と見る。

「なに？」

「人気でしたね。幾人か、女性の方からも話しかけられていました」

少し不満げな表情のフィオナ。

「クラスメートだし、闘技大会の優勝メンバーなら『おめでとう』ぐらい言ってくれるものだよ」

「嬉しそうでした」

「愛想笑いぐらいはするって」

いきなり始まったやり取りに、レイナは嘆息してフィオナの頭をチョップする。

「レ、レイナさん？」

「そういうことは家でやれ」
空気が甘ったるくて胸焼けしそうだ。

◇　◇

さらにくだらない話を続け、少しはほとぼりも冷めただろうと思い、
4人で帰る……はずだった。

「……レイナさん」

呆れたように優斗が“修練場”の中でため息をついた。

「普通……巻き込む？」

「向こうは大会メンバーを所望していたからな」

レイナの視線の先には3人組。
帰る途中に勝負を挑んできた相手だ。
もちろん、レイナは言われた瞬間に即決で承諾した。

「少しは考えようよ」

ということで、現在の状況が生まれたわけだ。

「レイナさんは別にいいよ、戦闘狂だし。ラスターだって戦うの好きだと思う。けど明らかに僕だけ巻き添えくらった形だよね？」

「別に時間が掛かるわけでもなし、問題はないだろう？」

「……まあ、そうだけど」

優斗も相手を見る。

全員が２年生。

挑んできたからには、学院内でもそこそこ強いはず。

まあ、あくまで学院内という話だが。

成績的にも優斗よりは下の連中なはず。

「ラスター、１０秒だ」

レイナがラスターに耳打ちする。

「何がですか？」

「お前がタイマンをやれる時間が、だ。一人で倒したいなら１０秒以内に倒せ」

笑ってレイナは剣を抜く。

本当に楽しそうだ。

「それでは始めてください」

フィオナの開始宣言と同時、レイナとラスターが左右に飛び出す。

優斗はその場で待機。
にらみ合いを始める。
そのまま４秒、５秒、６秒と経過して、７秒を数えようとした瞬間、

「あがっ！！」

優斗の相手は真横から攻撃を喰らった。
不意の一撃でそのままノックダウン。
レイナは意気揚々とラスターの敵にも向かっていった。
優斗が左を見れば、レイナと相対していた男はすでに蹲っている。
続いて右を見る。
ラスターはそこそこ押していたものの、倒すには至らずにレイナが参戦。
ものの数秒で撃破。
トータルで掛かった時間。
およそ１５秒といったところだろう。

「お疲れ」

「お前、何もしなかったな」

「意気揚々と僕の相手をかっさらっていった人がいるからね」

「レイナ先輩！　もうちょっと待ってくださいよ！」

「１０秒と言っただろうが」

全員が傷一つ付かずに勝負が終わった。

「さすがは闘技大会優勝メンバーといったところでしょうか」

「ラスターは大会で見せ場、無かったがな」

「そこは……まあ、精進しますが」

むしろ決勝のレイナと優斗を見れば、他の誰が見せ場を作ったところで絶対に霞む。

和気藹々と話しながらレイナは倒した3人のところへと向かう。

そして回復魔法を掛け、ある程度動けるようになったところで隣接してある救護室へと促した。

優斗は鞄を持ち、

「これで帰れ――」

「おいコラ!!　生徒会長っ!!　ユウト・ミヤガワはどれだっ!!」

帰ろうとして無理だった。

マイティーのリーダーハゲよりもたくましいハゲが修練場に乗り込んできた。

「……誰？」

「硬派気取りのバカだ。周りには番長と呼ばせている」

レイナが呆れたように教えてくれる。

「今、名指しされなかった？」

「されたな」

ラスターが頷く。
優斗は嘆息しながら対応する。
「あの、ユウト・ミヤガワは僕ですが」
番長の視線が優斗を捉える。
「貴様か。大会で特に活躍もしてない足手まといなのに優勝メンバーだというだけで粋がっているという輩は」
「……はっ？」
よく分からないことを言ってきた。
「女連れでチャラチャラしておったらしいな！」
「……なんのことでしょうか？」
「儂の手下が言っておったわ！　貴様は下種だとな」
今にも殴りかかってきそうな番長。
レイナがとりあえず番長に近付く。
「貴様は何度勘違いしたら気が済む。毎度、貴様の手下のくだらない妄言に騙されているだろうが」
一本気で良い奴ではあるのだが、直情的すぎるのが傷だ。
手下だと思っている傲慢貴族にいい様に扱われている。

「貴様の手下は2年だったろう？　どうせユウトが2年の代表で気に食わなかったとか、フィオナがいつも側にいるのを妬んだだけだ」

「儂の手下をバカにするのか！？」

「貴様の理解力のなさと学習能力のなさを馬鹿にしている。それに足手まといがいたら大会など勝ち抜けるわけがない。むしろユウトがいなければ勝ち抜けていない」

「生徒会長がいれば勝てる大会だったのだろう！？」

「馬鹿か。無理に決まっている」

レイナと同格の奴さえいるのに、どうやって彼女一人で勝てる大会だというのだろうか。

「とりあえずお前はユウトの実力が分かれば納得するのだろう？」

「生徒会長の言っている通りの男なら納得してやろう」

その言葉を引き出すと、レイナは笑んだ。

「そういうことだ、ユウト」

「……さっき戦わなかったからってやらせる？」

「疲れてないだろう？」

「……そうだけどね」

とはいえ、レイナがこうしたのは戦うことが一番早い解決方法なのだろう。

「優斗さん……」

フィオナが優斗に近付いた。
すると、番長が睨み付ける。

「チャラチャラしていたというのは本当のようだな」

そして優斗たちに近づき、

「失せろ！　場を弁えていない女など邪魔だ！」

フィオナの肩を突いた。
少しだけフィオナが後ろに蹈鞴を踏む。

「……しょうもないくらいに馬鹿だな」

レイナが額に手を当てた。
瞬間、優斗がショートソードを番長の首筋に突きつけていた。
過程を視認できたのはレイナだけ。
ラスターも番長も気付いた時点で、現在の優斗の姿を確認したにすぎない。

「……なにっ！？」

首筋に当たる冷たい感覚に番長が驚く。
優斗は無表情のまま、剣柄を握りしめた。
レイナが否定など許さぬ論調で話す。

「今のユウトの動きが分からなかった時点でユウトの実力は分かるだろう？」

「……そのようだな」

案外、簡単に番長は引き下がった。
確かに番長は馬鹿で直情的でどうしようもないくらいに阿呆だが、しっかりと見せつけられれば理解できるほどの脳みそはあった。
故に事実を見せつけられれば納得も早かった。

「すまなかったな。儂の勘違いのようだ」

しかも律儀に謝ってきた。

「そこの女も申し訳なかった」

フィオナにも同様に謝る。
どうやら優斗が動いた理由も悟ったらしい。
優斗の膨れあがったモノも、それですぐに収まった。

「邪魔をした」

踵を返して修練場から番長が出て行く。

「間違えは間違えだと認められるのはあいつの良いところではあるな」

それだけは褒められる。
何度も同じことをする奴なので、そこは直してほしいが。

と、ここでレイナはラスターに話題を振る。

「それはそうとして、ラスター。今のユウトの動き、見えたか？」

「ば、馬鹿にしないでください！　動いたのは分かりました！」

「ショートソードを抜いた瞬間は？」

「……いえ、見せませんでした」

「あれがユウトの速度だ。見えるようにならないと上のレベルにはいけないぞ」

というか、怒り補正で前に副長との勝負で見た抜刀もどきよりも速かった。

「フィオナ、大丈夫？」

優斗はショートソードを収めてフィオナに近寄る。

「平気ですよ」

突かれただけで痛みはない。

「よかった」

優斗が笑みを浮かべる。

「ユウトにしては珍しかったな。フィオナに手を出されるとは」

「殺気とか敵意だと反応できるんだけど、今のはそういうの無くてね。その分、反応が遅れた」

相手としては邪魔だからどけた、という感覚だったのだろう。

「けれどラスターだったら僕に文句の一つでも言ってくると思ったんだけど、何も言わないね」

「オレも反応できなかったというのもある。それに今更フィオナ先輩を好きだということもないからな。無駄にどうこう言おうとは思わん。もちろん、フィオナ先輩が超絶に美人だということは今でも思っているし、貴様が死ぬほど羨ましいのは変わらんが」

なんか大人っぽいことをラスターが言った。

「……ラスターが成長したよ」

「驚きですね」

「大丈夫か？」

三者三様、酷いことを言う。

「フィオナ先輩と貴様があんな大勢の前でキスをすれば、１００年の恋とて冷めるぞ」

「な、何の話ですか！？」

酔っ払って覚えていないフィオナが顔を赤くする。

「フィオナ先輩、覚えてないんですか？」

「あれほど酔っ払ったら、記憶を無くすんだよ」

だから恥ずかしい思いをするのは優斗だけ。

「ユウトにとっては羞恥プレイでしかないな」

「……言わないでよ」

「だ、だから何の話なんですか！？」

一人だけ事情の分からないフィオナ。

慌てふためき、顔を真っ赤にさせている彼女の叫び声が修練場に響いた。

守るから

1月の2週目。
リステルで行われる週末のパーティーで、卓也はリルの婚約相手として堂々と名乗ることになる。
そのパーティーに追随していくメンバーは優斗、フィオナ、クリス、クレア、ココ、そしてミラージュ聖国よりやってくるラグ。

「ユウト、少し質問があるのですが」

学院からの帰り際、クリスが優斗に尋ねる。

「なに？」

「週末のパーティーのことです。自分はクレアが社交の場において公爵家長子の妻であるという立場に慣らすために行きますし、ココとラグは数少ない逢瀬の場です。けれどユウトも行くというのは少し驚いたのですが……」

あまり向かう理由がないように思える。

「王様からの頼まれ事でね。護衛だよ」

「護衛？」

「前回行ったときにあったんだけど、卓也を殺そうとする奴がいないとも限らない。前に行ったときは偶々、卓也を殺そうとした奴の矛先が僕――というかにマリカに移った。向こうも警戒しているだろうけど念のため、リステルに行ったことのある僕が護衛として行

くことになったんだ」

卓也とリルの婚姻は両国にとって重要なことであることは間違いない。
かといって信用を置いているリステルに大人数の護衛を連れて行くことも憚られる。
というわけで、最小で最大戦力の優斗が出番というわけだ。

「一応、パーティーには招待されてるしね」

王様とリステル王が何かしら、したのだろう。
ちゃんとした招待状を王様から持たされた。

◇　◇

馬車2台が高速でリステルに向かう。
片方には卓也、リル、ココ、ラグが乗っている。
けれどリルとラグの表情がやや、険しい。

「なんていうか、あれだな。半年ぐらい前までは一番一緒にいたのに、そいつが婚姻相手を連れてパーティーに向かってる姿って妙な感じだ」

「そっくりそのままタクに言葉を返します」

「普通はあれだろ？　あれだけ一緒にいたなら優斗とフィオナみたいにくっ付くのが相場だよな」

「タクは無理です」

「オレもココは無理だ」

「ユウとタクは特に、です。ただのお兄ちゃんですし」

「そんなこと言ったらオレだってココはただの妹だし」

「お姉ちゃんでもいいですよ？」

「身長が伸びたら考えてやるよ」

「むっ。今の発言、ムカって来ました」

「そこらへんが妹なんだって」

卓也とココがじゃれ合う。

と、ここでリルとラグの視線に卓也が気付いた。

「どうしたんだ？」

「ま、前から思ってたけど仲良いわよね」

「家庭教師と生徒のコンビだしな」

相応に仲良くはなる。

「妹に教えて貰う兄ってなかなかシュールな光景です」

「そこは異世界から来たこと考慮してくれよ」

ペシっとココにデコピンをする卓也。

「た、確かにユウト様と同様にタクヤもココと仲が良いな」

ラグが優斗に抱いた不安が、卓也にも浮かぶ。

「安心していい。お兄ちゃんとしては妹の相手が素晴らしくて嬉しいよ」

「タクは一歩間違えたらお母さんになるから気をつけたほうがいいです」

「馬鹿2人とかに言ってくれ。あとは世話をやかせるお前らもだ」

世話焼きな性格なのは自分でも自覚しているが、仲間の連中は大抵が何かしら抜けているメンバーなので、殊更に卓也が世話を焼くことになる。

と、ここで窓から見える景色が変わった。

「それにしても、あとちょっとでパーティーか」

馬鹿話をしている間にリステルの敷地内に入った。

否応なく卓也の胸に緊張がせり上がってくる。

「緊張してるの？」

「当たり前だろ。オレの精神は優斗みたいな合金製じゃないし、修みたいに緊張を感じない構造もしてないし、和泉のようなぶっ飛んだ形もしていない」

仲間の中で一番一般的で庶民的な精神だ。

「前回みたいにタクヤを狙うことはないと思うわよ。警備だって反省を踏まえて増やしてるだろうし」

会場の中には優斗もいるのだから、そういった心配はない。

「問題なのはあたしの元婚約者候補たちが、うざったい言葉を投げかけてくるかもしれない懸念だけよ」

「……それが凄い嫌なんだよな。逃げたくなる」

冗談めいたように言うけれども思いの外、表情が真剣な卓也。

「……タク？」

その違和感に気付いたのは付き合いの長いココ。

卓也はココに気付かれ、パッと変える。

「いや、何でもないよ」

ココに笑いかける卓也。

なんとなく、思い出してしまっただけだ。

暴力を振るわれ、暴言を吐かれていた日々。

逃げたくなる思い出を。

◇　◇

会場に着き、それぞれ別れた。
卓也とリルは代わる代わるやってくる人たちを相手にしている。
クリスとクレアは、クリスが緊張するクレアの手を優しく引いて色々なことを教えている。
ココとラグは時折どちらかの知人と話しながらパーティーを楽しんでいる。
優斗は壁際でゆっくりしていた。

「久しぶりだ」

優斗に話しかけてきた人物がいた。
フィオナが今、離れているのでパーティー会場のさらに隅にまで寄っていた優斗。
その場所に見知った顔がやってきて少し驚く。

「……えっと……イアン様？」

黒竜の時やマリカをリステルに来させた時、数度しか顔を合わせていないので少し薄れがちだが、リルの兄であり『リステルの勇者』であるイアンだ。

「覚えていてくれたか」
笑みを浮かべるイアン。
「色々と話は聞いている。ミラージュ聖国から『大魔法士の再来』として国賓待遇を受けたらしいな」
周りに配慮しながらイアンが話す。
「大げさなんです」
「マクスウェルを召喚するほうが大げさだろう？」
「そうですか？」
「そうだとも」
少しだけの世間話。
イアンはそれで久方ぶりの挨拶は終わったとばかりに真面目な表情を作った。
「今のところ、タクヤの命を狙うといった輩は見られない」
「……そうですか」
「けれどリルの婚約を納得していない者はいる」
「数は多いですか？」
「そうだな。どうしようもない連中はそれでも、まだ婚約なのだか

らと諦めていないだろう。そういった手合いがタクヤとリルに下劣な言葉を投げかけるのは大いにある」

二人して卓也とリルの姿を見る。

今のところは問題なく、緊張している卓也をリルがフォローしている姿が微笑ましく映った。

「卓也がキレたりして暴言を吐いたら不味いですか？」

「タクヤに手を出す免罪符……のようなものは生まれる。彼らはリステルでも上位に位置する貴族だからな」

「そうですか」

今更ながらに思うが、どうして暴言を吐かれただけで貴族は『殺そう』などと思うのだろうか。

というより貴族に暴言を吐いたら殺しても免罪符が付く、というのがやはり感覚のズレとしてある。

しかも相手はリライトの子爵であり、王族の相手だというのに。

まあ、今更だ。

やはり権力というのは何でもやっていいものなのだろう、と無理矢理に自分を納得させる。

「他国からも幾人か来ていると窺いましたが」

「大抵はリルを祝福してくれているのだが……」

イアンが少し言葉に詰まる。

「問題児がいる、と」

「ああ」

イアンは嘆息する。

「ライカール国の第2王女、ナディア。ユウトは知っているな？」

イアンが口にした名前に優斗が少しだけ驚きを表した。

「ほんの数週間前に相手取りましたから。よく覚えています」

「彼女が来る」

「……また面倒なのが来ますね」

「彼女の傍若無人な具合は有名だ」

「そうでしょうとも」

どうしてそんなのを呼んでしまったのか。

何かしらの政治的なものがあったのだろうか。

よくは分からないが、どっちにしろ心配の種が増えた。

◇　◇

「なあなあ、一人？」

フィオナが化粧室から出てきて、優斗のところへ戻ろうとした時だった。

なんとなく見たことのある人物に話しかけられた。

――この方は確か……。

闘技大会でライカールのメンバーだったジェガン……だったはずだ。

優斗にボコボコにされて精霊術まで使えなくさせられた人物だが、

なぜかフィオナに意気揚々と話しかけてきた。

「君みたいな美人が一人だと可哀想だろ？　オレが一緒にいてやるよ」

「申し訳ありませんが夫と一緒に来ていますので」

言ってフィオナは指輪を見せる。

そして通り過ぎようとしたのだが、

「……これって龍神の指輪？」

間近で指輪を見たジェガンはフィオナの嵌めている指輪が何の指輪なのか気付いた。

「ってことはあれか。リライトにいる龍神の親って君なんだ！　うわっ、マジで！？　すごいじゃん！」

そして糸口を見つけたとばかりにまくし立てる。

「知ってる？　龍神の指輪って精霊を扱えるんだってこと」

「……夫が待っていますので」

「まあ、いーじゃん。もうちょっとくらい話そうぜ」

無理矢理にジェガンがフィオナを引き留める。

「オレ、これでも『学生最強の精霊術士』って呼ばれててさ。精霊の扱い方、教えてやるからちょっとパーティー抜けようぜ」

どうやらフィオナを手込めにしようとしているらしい。
下卑た感情が見て取れる。
けれどフィオナは意に介さない。

「私も少しは精霊術を扱えるので結構です」

「それじゃあ、もっと上手く使えるようにしてやるから」

「貴方に教えて貰うことはありません」

「まあ、そんなこと言わずにさ」

ジェガンがフィオナの手を取ろうとする。
けれどフィオナは後ろに下がって回避した。
その行動にジェガンがイラっとする。

「んだよ。せっかくこのオレが教えてやるって言ってんだから、素直に来ればいいんだよ」

「ついて行くわけがありません。私はもっと素晴らしい方に精霊術を教えてもらっていますし、貴方の精霊を殺すような精霊術を認めていませんから」

フィオナの行動にイラついていたジェガンが眉をひそめる。

「オレのことを知ってんのか？」

「先日のリスタルで行われた闘技大会。私も予備メンバーとしていました。ですから、貴方が精霊術を使えなくさせられたことも知っています」

「ハッ、だからなんだっつーんだよ。オレが契約するはずだったマクスウェルをあいつが先取りしただけじゃねーか。それにオレより凄え精霊術士なんてリライトごときにいるわけねーだろ！」

傲慢不遜な言い草。

明らかに彼は自分の考えに愚かな点があることに気付いていない。

「……気付いていないのですか？」

「何がだよ」

「少なくとも一人、いるではないですか。マクスウェルと契約した精霊術の使い手が」

「……っ！　だから何だってんだ！」

「私はその方から精霊術を教えてもらっています。そして、その方

は私の夫でもあります」

淡々と事実を述べるフィオナ。
ジェガンは彼女の話を聞いて、一つの事実にたどり着く。

「お前の夫って、まさか……！」

思い出したくもない存在。
恐怖の代名詞とも呼べる人物。
フィオナは“それ”を口にした。

「私の夫の名前はユウト＝フィーア＝ミヤガワ。マクスウェルを召喚し、貴方に精霊術を使えなくさせた方です」

◇　◇

同時刻。
卓也とリルのところに、ついに懸念していた連中がやって来た。
人数は３人。
どれも良いところの貴族らしいが、故に碌でもない。
先ほどから延々と辛辣な言葉ばかり述べてくる。

「そんな男と結婚したところで何のメリットもないでしょう？」

「逆にあたしがあんた達と結婚したほうがメリットないわよ」
卓也との結婚は何の利点もないと言われ、リルが反論する。
「少なくともあんた達よりタクヤと結婚したほうが余程、メリットがあるわ。リライトとの関係強化に繋がるもの」
「だったら相応の男を選ぶ必要があると思いませんか？　そんな、たかが子爵の家柄である男など釣り合わない。私と結婚したほうがよろしいでしょう」
「ふざけんじゃないわよ。絶対に嫌」
リルが卓也を庇うように言い放つ。
先ほどから卓也は黙ったままだ。
けれど時々、卓也の表情が辛くなる。
――キツいな。
思い出しそうになる。
昔の日々のことを。
言葉で、力で、蹂躙されていた日々。
刃向かうこともせず、逃げることしか出来なかった。
その時の思い出が胸の内からせり上がってくる。
――その点、あいつらは凄いよな。
優斗はどれだけ自分のことを言われても平然としている。
あいつが苛立ち、辛そうになるのは仲間のことだけだ。
修だって苛立ちはするだろうけど、自分のことでは絶対に耐える。

和泉の場合はある意味、そういうことに関して不感症だ。
だから自分が一番、弱い。

「あら？　リル王女じゃない」

さらに面倒なのが加わる。
騎士を側に控えさせながらナディアがやって来た。

「そんな雑魚と婚約するなんて、本当に落ちぶれているわね」

いたぶる対象を見つけた喜びからか、ナディアが不遜に笑む。

「タクヤは雑魚じゃないわ」

「だって、たかが子爵程度の男と婚姻するなんて……」

ゴミでも見るような目つきでナディアが卓也を見る。

「顔も悪いし家柄も悪い。何があるというの？　そんな男に」

何一つとして利点がない。

「家畜でも愛でる趣味があるのかしら？」

「貴女にタクヤの良さは分からないわ」

「雑魚に良さなんてあるわけないでしょう？」

嘲笑する。

「それにさっきから黙っているじゃない、貴女の婚約者は。本当に雑魚で屑で家畜なのね。死ねばリル王女も結婚しなくて済むんだから死ねばいいのに」

さらに苛烈さを増した言葉。

「――ッ！」

それが卓也の足を……下がらせた。

そうしたらもう、最後。

一気に振り返って卓也はその場から離れた。

「タ、タクヤ！」

リルの声が卓也に向かう。

けれど、彼の耳には……届かなかった。

◇　◇

「どうして向かわないんだ？」

「今は行く必要がありません」

卓也とリルに問題児たちが集まった瞬間、イアンが向かおうとした。
けれど優斗が止めたのだ。

「あの程度の問題、卓也がどうにかできないわけがないです」

「……タクヤはリルを置いて逃げたんだぞ」

「すぐに戻ってきます」

今は一旦、逃げてしまっただけ。
けれどそれは卓也が誰よりも弱いというわけじゃない。
卓也の本当の格好良さが分かるのは、この後。

「少しだけ待ってください。そうすれば格好良い卓也になって帰ってきますから」

◇　　◇

驚愕しているジェガンの後ろから、声を掛けた存在がいた。

「契約者の妻に手を出そうとするなど正気ですか？」

丁寧だが険を含ませた言葉がジェガンとフィオナの耳に届く。
思わずジェガンが振り返った。

「てめえは……っ！」

「前はお世話になりましたね」

クリスとクレア、ココとラグがそこにいた。

４人はフィオナの前に立つ。

「手を出すというのなら、相応の覚悟をしたほうがよろしいのではないでしょうか？　ユウトは彼女のことになると過激です」

闘技大会の比ではない。

「まあ、それ以前に大精霊を召喚できなかった貴方が召喚できる彼女をどうこうできるとは思いませんが」

つまりは精霊術を使えていた時でさえフィオナのほうが格上だ。

それなのに上から目線で見るというのは愚か以外にない。

「……チッ！」

舌打ちしてジェガンが遠ざかっていく。

４人もいては、事を荒立てるにしても問題が多すぎる。

何よりも自分は『力』の部分を根こそぎ持って行かれたのだから。

「大丈夫でしたか？」

ジェガンが見えなくなってから、クリスがフィオナの安否を気遣う。

「はい。皆さん、ありがとうございます」

フィオナが微笑む。
クリス、クレア、ココは笑みを返したのだが、一人ラグだけが目を丸くしていた。

「フィ、フィオナ様も精霊術をお使いになられるのか？」

「ええ、そうですけど」

「大精霊様まで召喚されると言われていたが……」

「優斗さんのおかげで召喚できるようになりました」

「わ、私もウンディーネ様を召喚できるのだが、フィオナ様はどの大精霊様を召喚できるのですか？」

「四大とセルシウスとレムです」

事も無げに言ったフィオナ。
けれど、ラグは聞こえた数に耳を疑った。

「……6体？」

「そうですね」

さらに驚くラグ。

「ラグの顎が外れそうです」

「だ、だって仕方ないだろう！？　ミラージュにいる最高位の精霊

術士とて召喚できる数は3体が限度なのだぞ！」

「ユウの奥さんなんですよ。普通なわけないです」

「そうですね」

クリスとココがラグの反応に笑う。

と、その時だった。

「……タク？」

足早に会場を離れて行く卓也の姿が見えた。

表情は固く、険しい。

それだけで何かあったのだと分かる。

ココが卓也の後を追おうとした。

「待ってください。自分が行きます」

ココを止めて、代わりにクリスが名乗る。

「こういうのは男同士のほうがいいものですよ」

言いながらクリスは歩み出す。

「ラグは皆さんのことをよろしくお願いします」

女性陣のことをラグに任せる。

そしてクリスは卓也のことを追いかけた。

少しして、長い椅子に座って項垂れている卓也の姿を見つける。

クリスは卓也に近付いていき、隣に座る。

「どうしました？」

いつものように話しかけるクリス。

声でクリスだと分かったのか、卓也は俯いたまま答える。

「分かっていたことではあったけどさ。相応しくないとか、釣り合わないとか言われたんだよ」

両手で顔を覆う。

「案外、辛いもんだな」

予想はしていたけれど。

予想以上に辛かった。

「嫌なことを思いだしたよ」

卓也の言う『嫌なこと』。

何のことかと思ったが、すぐにクリスは気付く。

「……まさか、昔の？」

「軽いトラウマなんだ」

あの日々は。

「今回は暴力とか振るわれてないけど、暴言ばっかり言われてさ。逃げ出したんだよ、オレ」

本当に弱々しい。
心が弱い。
けれどクリスは弱々しい卓也を見て、告げる。

「タクヤが辛いのは分かります」

かなり酷い言葉を使われたのだろう。
そういうことを平気で言える人たちなのだろう。

「けれど、自分は辛いであろうタクヤにこう言います」

それでも、と。
クリスは言わなければいけない。
なぜなら卓也は“一人”じゃないのだから。
パン、と卓也の背中を叩く。

「頑張ってください」

自分の想いが言葉から、背にある手から届くように願う。

「タクヤが頑張らなければ辛いのはリルさんだけです」

だって卓也が頑張らなければ、彼女は一人で彼らの言葉を身に受けなければならない。

「彼女は良くも悪くも真っ直ぐです。けれどこういう場において、真っ直ぐな彼女は傷つきやすいんですよ」

誰に対しても真っ直ぐであるということは、親しい間柄の人とも嫌いな相手とも同じ態度になるということ。

つまり、

「心に壁を作っていないから、彼女は傷つきやすいんです」

真っ直ぐな彼女は人一倍、傷つきやすい。

「だから……守ってあげてください」

そんな真っ直ぐなリルを。

「自分たちはリルさんを助けてあげられます。フォローしてあげられます。庇ってあげられます」

仲間としてやってあげられることなら、何だってやってあげられる。

「けれど守れるのはタクヤだけなんです」

卓也以外、いない。

「相応しくないから何だと言うんです。他人が決めることじゃありません。釣り合わないから何だと言うんです。そいつらだってリルさんが決めた相手に口を出せるほど彼女と釣り合いが取れているわけでもありません」

そんなどうでもいい連中に何を言われようが気にするな。

「だけど……事実だろ？」

まだ弱い言葉を吐く卓也にクリスが一喝する。

「勝手に己を下に見るのをやめてください！　自分の親友は間違いなくリルさんに相応しい！」

あまりにも肯定しきった言葉。
何が何でも信じ切っている言葉。
思わず、卓也が顔を上げた。

「これはレグル公爵家の長子であるクリスト＝ファー＝レグルの言葉ではなく、タクヤの親友である『クリス』としての言葉です」

余計な肩書きなどいらない。
『親友』という事実だけあればいい。

「前にタクヤは言っていましたね。リルさんと愛ある生活を望むから『頑張る』と」

予想以上に何もしていなかったけれど、それでも彼女のことを目で追って知ろうとしている姿をクリスは見てきている。
根気強く、ゆっくりとリルを知ろうとしてきた卓也をクリスは知っている。
なればこそ、前に訊いたことは言わない。
『好きなのですか？』とは問わない。

「今はもう、リルさんが好きなんでしょう？」

だから辛い。
だから逃げたくなる。
好きな相手に相応しくないと言われたからこそ。

「だったら今こそ、頑張ってください」

男を見せる時だ。

「誰よりも今、タクヤの頑張りを待っているのはリルさんです！」

卓也と一緒にいないリルはきっと、会場で未だに彼らに傷つきながら立ち向かっていることだろう。

どうして？　なんて問う必要性もない。

「だってそうじゃないですか」

戻ってきてくれると信じているから。

守ってくれると思っているから。

他の誰でもない、卓也が。

「リルさんが今、隣にいてほしいと願っているのは自分でもユウトでもありません！」

求めているのは、たった一人の婚約者。

「タクヤですよ！」

そこまで言ってクリスは優しく笑う。

「ユウトたちが言ってました。タクヤが一番、格好良い瞬間は……一生懸命のときだって」

頑張っている姿が格好良いのだと。

「自分にも見せてください。タクヤが一番格好良い瞬間を」

それができると何の疑いもなく信じている。
再度、クリスは卓也の背中を強く押した。

「……」

卓也はクリスの言葉を聞いて、背中から伝わってくる熱を感じて、

「……ホント、お前らは要求がきついよな」

小さく笑った。

「過剰な信頼はしていないつもりです」

「わかったよ」

クリスと顔を見合わせて、もう一度だけ笑う。

「そこまでバカみたいに信じてくれるなら、頑張るしかないだろ」

立ち上がる。
先ほどまでの陰鬱な気分はなくなっていた。

「格好良いところを見せてくれたら、あとは任せてください。そのために自分たちはいるのですから」

会場へと向かっている卓也にクリスが安心させるように言葉を投げかけた。
卓也は右手を上げて答える。

「サンキュ、クリス」

だんだんと卓也の姿が小さくなっていく。
彼の後ろ姿に安堵の笑みを浮かべながら、クリスもフィオナ達のところへと戻った。

◇　◇

本音を言えば、まだ少し疑っていることがある。
先ほどの反論の際にあった言葉。
リルが自分と婚約したのはメリットがあるから、だと。

――けどな。

卓也は今までのことを思い出す。
彼女はいつも側にいてくれた。
帰り際の二人の距離が前より、少しずつ狭くなっている。
気付けば隣にいる。
よく自分と目が合う。
少しは意識してくれているのだと思う。

――良い印象はあると思うんだ。

恋愛感情なのかどうかは知らないけれど、それだけは確かなこと。

そして、それだけがあればいい。
頑張れる。

「……いた」

会場の中でリルの姿が見えた。
彼女の前には先ほどの４人が未だに存在する。

「本当に最低の雑魚ね。婚約解消しちゃったら？」

「あたしはタクヤを信じてる！」

やっぱり、彼女は闘っていた。
ドレスの裾を握りしめながら、必至に反論していた。

「リルっ！」

名前を呼ぶ。
振り向いた彼女は必至で悔しそうな表情から……卓也の姿を見て安堵した表情に変わった。

「タクヤっ！」

「待たせて悪かったな」

卓也はリルに近付き、庇うように前に立った。

「なに？　今さらやってきてどうするの？」

「王女の婚約者が貴様というのは最低だな」

「ああ、相応しくない」

「釣り合わないですね」

多々、罵詈雑言が卓也に向かう。
けれど卓也は臆することなく言い返した。

「オレは弱っちくて臆病者だよ。だけど、それがどうした？」

リルだって知っている。

「お前らがどれほど言ったところで、リルの婚約者に相応しくないなんてことはない。決めるのはこいつだ」

リル以外に決めてほしくもない。

「それにな、前に言ったんだ」

背にある存在を強く感じながら、卓也は言い放つ。

「リルを守るって言ったんだ」

あの言葉は今でも卓也の中で有効だ。

「こいつを守るのはオレの役目なんだよ」

睨み付けるように４人を見る。
けれどその中で、ナディアは嘲るように言った。

「身の程を弁えなさい」

彼女に次いで他の3人も、

「逃げた奴が何を言っている」

「そうだ」

「リル王女の相手に貴方如きが務まるわけがありません」

さらに蔑む視線を卓也に向けるナディア。

「雑魚が吠えないでほしいわね。下賤な存在である貴方が高貴な私と会話していること自体、感謝しなさい」

けれど卓也も引かない。

「雑魚が吠えちゃいけないってことはない！　大切なものを守るためなら相手がどれほど強大でも噛み付かないといけないんだよ！」

言い返す。

――ふざけんなよ。

先ほどから言われていること。

全ての言葉に通じるのは『リルと婚約を解消しろ』ということ。

未だに文句を言ってくる彼らはつまり、彼女に手を出すためにそう言っている。

「つーか、さ」

外野は黙ってろ。
リルはお前ら如きに見合う女じゃない。
声を張り上げろ。
宣言しろ。
気持ちの全てを込めて怒りを叩き付けろ。

「テメーらさっきから、うだうだと五月蠅えんだよっ！　オレが惚れた女に手を出そうとしてるんじゃねぇ！！」

響き渡る怒声が会場を貫く。
一瞬にして会場が静かになった。
４人を睨み付ける卓也と、卓也を睨み付ける４人。
静寂を破ったのはナディアだった。

「下賤な雑魚の分際でよくも言ってくれたわね」

ナディアが側にいる騎士――ラファエロを促す。

「貴様のような奴が侯爵である俺を侮辱するだとっ！」

「死んでも文句は言えない」

「死にたいようですね」

険呑な雰囲気が生まれる――その時だった。
拍手が会場に響いた。

「さすが卓也。よく言ったね」

「見せて貰いましたよ、格好良いところを」

「タク、格好良かったです」

優斗とクリス、ココが卓也に拍手をしながら卓也たちの前に立った。
3人とも、卓也とリルに笑顔を見せる。

「……お前ら」

自分がこうするのを分かっていて、今まで出てくるのを待っていたのだろう。
途端に照れ臭くなった。

「あとは僕たちに任せて」

「パーティー、楽しんでください」

「わたし達からの婚約祝いです」

しっしっ、と追い払うように卓也とリルを遠ざける仕草をした。
二人は苦笑しながらも感謝して、場所を移動する。
そこでフィオナ、クレアと合流することになった。

「さて、と」

優斗はナディアを睨み付ける。
それだけで彼女は脅えた。
庇うようにラファエロが前に出る。
けれど表情は優れない。
ナディアたちの豹変に困惑の様子を隠せない貴族3人組。

「僕のことを覚えているか？」

優斗の問いかけにナディアはすぐに首肯した。

「話は全て聞いた。身の程を弁えろ……か」

よくもまあ、そんなことを言えるものだ。

「お前こそが身の程を弁えろよ」

一体、どこの誰に対して罵詈雑言を言ったと思っているんだ。

「なあ、王女様？」

あまりにも冷ややかな声音に、ナディアは闘技大会の時の恐怖が蘇る。

「イアン様」

「どうした？」

優斗の呼びかけに、ラグと共に後ろで行く末を見守っていたイアンが出てくる。

「ここでは迷惑が掛かりますから、別室に行かせていただいてもよろしいですか？」

◇　◇

イアンに連れられて、会場より離れた一室にナディアたち一行は連れてこられた。
ナディアは優斗に逆らえるわけもなく、他はイアンに逆らえるわけもない。
全員が素直に部屋の中にいる。
仲間の連中は男性陣が部屋に入り、女性陣は卓也とリルのフォローに回った。
優斗はまず、３人組に視線を向ける。

「そこのお前ら、リルに歯牙も掛けられない連中が今更になってぐだぐだとほざくなよ。見苦しいにも程がある」

「リライトでは貴族より上である『異世界の客人』に対して、よくもまあ無礼な言葉を使えたものです」

クリスも腹が立っているのだろう。
優斗に続いた。

「なっ！？」

驚く3人組。

さらにイアンがトドメを刺すように告げる。

「貴様らは頭が悪い。父が認めた男だ。何の取り柄もない子爵にリルをやるわけがない」

ただでさえ異世界人、というアドバンテージがある。

今はそれに加えて優斗の親友というオプションまで付いた。

リルにとって十分すぎるほどの相手だ。

「言いたいことがあったら聞いてやる」

優斗が尋ねる。

けれど、何も言えない。

隣で尋常じゃなく脅えているナディアの姿が、反論することを躊躇わせる。

「何もないのなら今後一切、余計なことは言うな」

それだけ言って優斗はナディアを見る。

矛先が自分に向いたことで彼女は身体も震え始めた。

「何か言い残すことはあるか？」

まるで遺言を尋ねているように感じる。

その場にいる全員が緊張で息苦しさを覚えた。

「前に言ったよな？　二度目はない、と」

「し、知りませんでした！　あの方が貴方様の御友人だなんて――ッ！」

「知らなかったで済ますのか？」

「申し訳ありません！！」

ナディアは膝を着き、土下座した。
ラファエロも彼女に倣って同様の行動を示した。
クリス以外は彼女たちの行動が信じられない。
仮にも王族であるナディアが、目の前の男に土下座しているという現状に。

「一体、どこの誰が身の程を弁えてなかったんだ？」

「……わ……たし……です」

「雑魚に下賤な存在に屑に家畜……だったか。僕の親友に罵詈雑言を言ったのは誰だ？」

“親友”というキーワードにナディアが恐怖する。
思わず声が出なかった。

「……」

「誰だと訊いている」

けれど優斗は許さない。
答えを要求する。

「……わたし……です」

「つまりお前は誰に喧嘩を売ったんだ？」

「……それは……その……御友人に……」

「違うだろう？　卓也には嫌みったらしく罵詈雑言を言っただけだ。けれど結果、お前のやったことは誰に喧嘩を売ったのか訊いている」

「……貴方様……です……」

声を震わせながら答えるナディア。
優斗はさらに駄目押しをする。
後ろにいるラグに視線を向けた。

「ミラージュ聖国第2王子、ラグフォード。僕は誰だ？」

普段と違う呼び名に少し驚くラグ。
けれども優斗の真意に気付くと、ラグは優斗に傅いた。

「精霊の主、マクスウェル様の契約者であり神話魔法の使い手。そして伝説の大魔法士マティス様が建国したミラージュからは、マティス様の再来――大魔法士様と呼ばれる御方です」

ナディアとラファエロがさらに顔を強ばらせた。

「僕がそう呼ばれることになったのはお前達が原因だ。忘れているわけはないよな？」

「……はい」

「つまりお前は、またしても大魔法士に喧嘩を売ったということだ」

「ち、ちが……っ！」

ナディアは否定しようとする。

「違う？　何が違うというんだ」

何も違わない。

「……どう……したら……許してもらえますか？」

懇願するナディア。

目にはすでに大粒の涙が溢れている。

それを見て、優斗はようやく逃げ道を用意することにした。

「本当なら、この場を設けずに殺されていたことは理解しているな？」

「……はい」

「けれど僕は今、気分が良い。お前のせいとはいえ、親友の格好良い姿を見れたからな」

その点だけは評価してやる。

「だからチャンスを与えよう。今からお前が考え得るかぎり、最大の謝罪をお前が一番迷惑かけた人物にやってこい。正解なら命は見

逃してやる」

優斗がそう言うとナディアは安堵したような表情を浮かべ、ラファエロを連れて部屋を出て行った。
様子を見に行かなくても問題はないだろう。
向こうにはフィオナもいるし、手を出したところで末路は彼女が一番理解している。
ということで優斗はもう一度、3人組を見る。

「今の話、どうしてお前達にも聞かせたか分かるか？」

矛先が自分たちに戻されて3人組がビクリと身体を震わせた。

「次に卓也とリルに何かしたら、お前らがああなることを教えてやろうと思ったからだ」

無表情で3人を見つめる。

「ガリア侯爵のようになりたくないだろう？」

そう告げた瞬間、彼らの頭にはハテナマークが灯る。
けれどガリア侯爵が何をして、結果……どうなったか。
それを思い出して一斉に青ざめた。

「ここで起こったことは胸の内に秘めておけ。喋ったら最後、投獄だ」

3人組が必至に首を縦に振った。

「分かったら、行け」

優斗の許可と同時、３人組は脱兎の如く部屋から出て行った。
完全に姿も足音も無くなって、優斗は大きく深呼吸した。
クリスが声を掛ける。

「相も変わらず、素晴らしい演技力ですね」

「３分の１くらいは本気だよ？」

クリスと共に優斗が笑う。

「闘技大会の時じゃないんだから、殺すとか言っても問題大有りなのにね」

「いや、ユウトはそんなの関係なくやりそうだから向こうも怖がっているんですよ」

というかたぶん、フィオナやマリカの場合だったらやる。

「いきなりラグフォードと呼ばれた時は焦った」

「けれど、ちゃんと理解してやってくれたから助かったよ。説明するのに一番説得力があるのはラグだから」

「大魔法士と呼ばれたくなかったのでは？」

「脅すだけの価値あるんだから使うよ」

確実に効果があった。
和気藹々と話す３人。

その姿を見てイアンは呆れたように笑う。

「……何だかんだで、ユウトは世話を焼いているな」

この程度の問題、などと言っていた優斗なのに。

卓也が頑張ったところを見せたら、あとの面倒事は全部引き受けていった。

これで3人組も二度とリルに手を出すことはないだろう。

「リルは良い仲間を持ったな」

多々、問題のある面々ではあるけれど。

リルのことを想ってくれているのは確かだ。

◇　◇

優斗たちがいなくなって10分ほど経ったくらいだろうか。

ようやくざわめきの収まっていた会場でナディアが土下座したことでまた会場がざわつくものの、すぐに静まる。

そしてパーティーがまた、再開した。

フィオナ達は頃合いを見計らって優斗たちと合流して、卓也とリルを二人にする。

すると、卓也とリルに寄ってきた人たちがしきりに二人のことを心配した。

演技なのも本気で心配してくれた人たちもいたが、二人はその全てに感謝しながら応対をしていた。

「……疲れたな」

「そうね」

パーティーも終盤、本日の主役みたいなものだというにも関わらず、二人はバルコニーに出てきていた。
暖かい室内にいたせいか、肌寒さが今は心地良い。

「あのライカールの王女が土下座してきた時には焦ったな」

「絶対にユウトが何かしたのよね」

「そうだろうな」

くすくすと笑い合う二人。

「世話焼きな奴らだよ、本当に」

「嬉しかったけどね」

「ああ」

「けど、あの登場の仕方って絶対にタイミング図ってたわよね？」

「そう思うと笑えてくるな」

今度は声を大きくして笑う。

一頻り笑うとリルは手すりまで歩いて行って、夜景を見ながら婚約者の名を呼んだ。

「ねえ、タクヤ」

「どうした？」

卓也も隣に立って同じ夜景を見る。

リルは何となく嬉しくなった。

今なら、と。

スキー旅行で提案してもらったことを言ってみる。

「あたし、タクヤと一緒に料理したい」

リルの言葉に卓也は一瞬、目を丸くする。

けれどすぐに苦笑した。

「無理はしなくていいって」

「無理じゃない」

そんな風に思っていない。

「ただ、あたしはタクヤと一緒にいたいだけ」

お互いに夜景を見ていたはずだが、気付けば互いの瞳が相手を捉える。

「なあ、リル」

無意識だった。
卓也はリルの右手を取ると、引き寄せた。
そのまま自分の腕の中に収める。

「タクヤ？」

嬉しいけれど突然どうしたのだろうか。

「お前は、さ」

卓也は問いかけるリルに少し逡巡したようだが、意を決したように訊いた。

「オレのこと、好きか？」

緊張の様相を呈した声音。
リルは小さく笑って答える。

「……好きよ」

初めて守ってくれた時から、ずっと。

「だから一緒に料理をしたいと思ったの。タクヤと一緒にいれるなら、タクヤがあたしのことをもっと好きになってくれるなら……」

卓也が喜んでくれるなら。

「あたしは王女じゃないことだってやってみせるわ」

「……そっか」

嬉しさがこみ上げる。

「ありがとう、そう言ってくれて」

本当に嬉しい。

卓也は微笑んで……すぐに申し訳なさそうな顔をした。

リルがそう言ってくれるからこそ、余計に言わなければいけないことがある。

「……ごめんな」

「えっ？」

突然謝られて、卓也の腕の中にいるリルがビクっとした。

「さっき、逃げたこと」

謝って済む問題じゃないと思う。

けれど言わないと進めない。

「……」

謝られたリルは先ほどのことを思い出す。

その時の気持ちも、追随してきた。

ぎゅうっと卓也の胸元にある自らの手を握る。

「……バカ……」

力強く、縋るように卓也の服を握りしめた。

「……バカ」

思わず、震える声が出る。

「バカバカ！　遅いのよ！　一人ですごく怖かったんだから！」

顔も卓也の胸元に押しつける。
涙が溢れそうになった。

「すごく辛くて、すごく嫌だった！　けど、タクヤのことを言われるのだけはもっと嫌だったの！　だからあたし、頑張ったの！」

「ごめん」

「言ってくれたじゃない！　守ってくれるって！！」

「ごめん」

卓也も力一杯リルを抱きしめる。

「約束する。ずっとリルのこと、守るから」

もう二度と、逃げ出さない。
この気持ちがリルに伝わればいいと。
願うほどに抱きしめる。

「……ほんとう？」

「本当だ」

卓也が断言する。
すると、リルから嬉しそうな返事がやってきた。
「うん。じゃあ、やくそく」
卓也には見えないが、リルは本当に幸せそうな笑みを浮かべている。
「あのさ」
「なに？」
「このペンダントって大切なものだったりするのか？」
卓也はリルの身体を離して、胸元にあるペンダントを見せる。
“誓いの言葉”の際に貰ったものだ。
「お母様から最初に貰ったペンダントなの」
「そんな大切なものだったのか……」
「後悔はしてないわよ。だって渡したのがタクヤだもの。それにいつも付けてくれてるじゃない」
卓也が大事にしてくれているのが分かるから、特に文句はない。
「けれど突然、どうしたの？」
「ん？　いや、まあ、その……な」

照れたような顔をすると、卓也はポケットからケースを取り出した。

「代わりってわけにはいかないけど……」

開いて中身を見せる。

ペンダントがそこにあった。

卓也はそれを取り出すと、リルに着ける。

「……似合う？」

「当たり前だろ。似合うと思ったら買ったんだ」

見立て通りだ。

卓也は大きく深呼吸をすると、リルの肩を掴んだ。

「いいか、一回しか言わないからよく聞けよ？」

真っ直ぐ卓也はリルの目を見る。

そして告げた。

「これより、リルを生涯の隣人とすることを誓います。彼の者にいかなる困難があろうとも、側に寄り添い支えることを誓います。彼の者がいかなる災厄になろうとも、信じ続けることを誓います。彼の者にいかなる不幸が降りかかろうとも、助け続けることを誓います」

卓也は言い終わると、リルの口唇に優しくキスをする。

ビックリしたのか、キスが終わって顔を離してもリルは驚いた表情のまま。

「……タク……ヤ……？　今のって……」

“誓いの言葉”だった。
リステルの王女である自分が聞き間違えるはずがない。
卓也は照れた表情のまま、答える。

「オレはリライトの人間……っていうより、この世界の人間じゃないけどさ」

それでも、

「女の子は憧れるだろ？　自分の国の言葉で告白されるの」

これは万国共通だと思う。
どこかしら誇ったような笑みを浮かべる卓也。

「……バカ」

思わずリルは言ってしまうが、表情は緩んでいる。
嬉しさを携えたまま、リルは卓也に抱きついた。

「あのね」

どうやったらこの気持ちを全部、卓也に伝えられるか分からない。
けれど伝わる分は全部、この言葉に込めて伝えてしまおう。

「あたしも卓也のことが大好きよ」

未来を考える

優斗と修と和泉とレイナ、４人はギルドの依頼をこなした後、近くの喫茶店でお茶をしていた。

「なあ、ユウト」

「なに？」

その時、話の一つとしてレイナがこんなことを訊いてきた。

「生徒会長に立候補する気はないか？」

「ないよ」

「シュウは……いや、なんでもない」

「どうした？」

突然の話のフリに和泉が尋ねる。

「来月に代替わりでな。生徒会選挙が行われるんだ。私としては次の生徒会長にユウトが良いと思ったんだ。こんな面倒な奴らの面倒を見ているし、成績的にも問題はない。人格的にも私の次代として

納得できるのでな」

「ただでさえ余計なことをやっちゃって面倒事が多いのに、これでさらに生徒会長までやれと？　娘も育てないといけないし……」

「それもそうだな」

現在、一番面倒な立場にいる優斗に頼むのも厳しいものがあった。

「アリーはどうなのだ？」

「ただでさえ王族だ。余計なことはやらせるべきではないだろう」

「そんじゃあ、クリスは？」

「ユウトと同じくらいに適任だとは思うが……。あいつも騒がれるのは苦手だろうしな」

それにクリスが生徒会長になったら、ファンクラブでも出来そうな気がする。

「他は前に出る性格でもないだろう」

「この二人は論外だもんね」

優斗が修と和泉を指すと、レイナが苦笑した。

「まあ、なるようになるか」

変な人物が生徒会長にならなければいい。

「けれど、もうそんな時期ってことはそろそろレイナさんも卒業だね。レイナさんって卒業したら、結局どこに行くことになったの？」

「近衛騎士団だ。内定は出ているしな」

「……内定とかあるの？」

「あるぞ」

「裏口か？」

修がからかう。

「馬鹿言うな。これでも内定に達するラインはある。学業、実技共に上位５％。上位魔法を一つは使えること。学生闘技大会ベスト４以上……などなど。私はそれをクリアしたからな」

「普通は？」

「リライトの兵士になるには、希望する所属部署ごとに試験を受けることになる。所属したい部署が求めている基準を学業、実技共に越えていたら試験は無くなり、面接だけで済む。ほとんど内々定だとは思うが」

詳しくはレイナとて知らない。

「お前らはどうするんだ？　もう来年のことだぞ」

「俺は『リライトの勇者』だしな。他の道はねーから」

その責任から逃れるつもりもない。

「俺は武具の開発関係の職に就ければいいと思っている」

「僕は――」

未来を考えたことがない。

けれどもしかしたら、そろそろ未来を考えてもいい頃なんじゃないか、と。

『今』だけじゃなくて、その先を。

「ユウトが一番、選ぶ道がたくさんあるな」

「アリーは『外交官をやってほしいですわ』とか言ってたぞ」

「冗談じゃないの？」

「いや、あの目は案外マジだった」

「優斗はギルドパーティーからもたくさん誘われていたのだろう？」

「みたい」

「っていうか、普通に考えたら公爵家の跡継ぎじゃね？　ギルドは無理だろ」

「義父さんからは卒業後に宮廷魔法士の地位を与えるとか冗談交じりに言われたけど……」

「いや、たぶんそれ、冗談じゃない」

レイナが真剣に言う。

それほどの地位を与えられる人物だ、優斗は。

「クリスも公爵の跡取りだし、卒業すれば政治に関わるだろう」

「タクヤはどうだ？」

「あいつが一番、謎じゃね？」

「卓也は一応、リステルの王女を嫁に迎えるわけだが……」

「戦うって柄じゃねーし、政治なんてもっと無理だろ」

全員で少し考える。

「……宮廷料理人？」

ポツリと言った優斗に全員が笑う。

「確かに！　あいつはゆったりレストランでも開いてるのが似合ってるわ」

◇　◇

「――という話になったんですけど……」

今日あったことをテラスで飲みながらマルスに話す。

「こちらは本気で言っているよ」

「そうなんですか？」

「むしろ、このまま行けばほとんど決定ルートだろうね。最低でその地位だよ」

「何でですか？」

「君がリライトの所属だという確固たる証を与えたい」

マルスはさらに続ける。

「一応、今のところリライトの貴族ではあるんだが、神話魔法の使い手とマクスウェルの契約者という『名称』の前には霞むだろう？　さらには龍神の親だ」

「そうですね」

「君は“リライトにいる”のではなくて“リライトに所属している”という風に見せたいのが国の考えだ。今はまだ、学生ということで王様が出来るかぎり学生の生活をできるように配慮している。だからこそ、その名を与えることはしないのが現状だよ」

もちろん、今のうちに与えてしまえという案も出てはいる。
けれど優斗のことを考えてしていない。

「他国から国を通さずに直接、ユウト君にちょっかいを出されないかという心配があるがね」

「そこは自分でどうにかしますよ」

優斗の言ったことにマルスは「そうか」と笑う。

「それにアリシア様が言っているのも半ば本気だと思う」

「外交官は向いてないですよ」

「そうかい？」

「僕一人なら何とでもなりますけど、あれって……何かしらのイベント事だと女性同伴の時とかありますよね？」

「そうだね」

「フィオナに手を出されたら絶対にキレます。それって外交官として最悪でしょう？」

論外すぎる。

「それに僕の持っている『名称』があるからアリーは僕を推したんでしょうけど、それによって女性から言い寄られるのも嫌ですから」

とりわけ他国の歓待などは受けたくない。

「最近、何かされてキレるのがパターン化しているのは自分でも思ってるんですけど……直せなくて。だから外交云々は厳しいですね」

「……まあ、歓待は絶対に受けることになると思うよ」

卒業してしまえば、絶対に。

「分かりました」

そこは優斗も諦めて頷く。

するとマルスが少し真面目な表情になった。

「けれど君はそれでいいのかい？」

「どういうことですか？」

「元来、君は予期せぬ『異世界の客人』だ。こちらのミスで召喚してしまった以上、国として責任は持つが、君がどこかに行きたいと言えば無理矢理に止めることは出来ない」

拘束する権利はない。

「言ってしまえば国として必須なのは『リライトの勇者』だけなのだからね」

もしも優斗がマクスウェルと契約をしていなければ。

神話魔法を使えていなければ。

これほどまでに優斗を留めようなどとは考えない。

「君は我々の思惑を越えた予想外の客人だ。だからこそ国としてはいて欲しいと願うのだが……強制はできない」

してはならない。
ただでさえ負い目のあることなのだ。

「ただ、私としてはリライトの発展の為にもいてくれることを望むがね」

けれどもどこかに行きたいと願うのなら。
何かをしたいと思うなら。
やればいいと思う。
優斗はマルスのそんな考えを聞いて……ため息をついた。

「義父さん」

「なんだい？」

「僕は誰の子供ですか？」

「無論、私とエリスの子供だ」

当たり前のようにマルスが返す。

「それなら結論は出てますよ」

マルスの言ったことが答えだ。

「帰り道で少し考えました。別の国に行くのも、ギルドでパーティ

ーを組んで働くことも考えました」

初めて将来について真面目に考えてみた。

「でもね、そんな未来はありません」

たくさんの将来？

そんなもの、あるわけがない。

「僕は確かに『異世界の客人』である宮川優斗です。けれど“その前”に義父さん――マルス＝アイン＝トラスティの義息子なんです」

これが現実だ。

「フィオナに兄弟がいれば、まだ先ほどの考えは有りだったと思いますけどね。いない以上、国を出るという考えはありません」

フィオナと離れることは考えていない。

ということはつまり、

「このままいけば、僕は間違いなく公爵の地位を引き継ぎます。それなのに他国に行くとかギルドで働くとか論外でしょう？」

あり得ない。

選択肢にすら入らない。

「私は君を縛るために義息子と呼んだつもりはない」

「僕だって縛られるために義息子になったつもりはありません」

一度だってそんなつもりはない。

「けれど責任は持っているつもりです。フィオナの婚約者としている以上、義父さんの義息子としている以上ね」

その責任を捨てることなど出来ない。

「義父さんが僕を義息子と思ってくれているなら、その責任は義息子として持たないといけないものです。それに義父さんは最初、言ってくれたでしょう？　遠慮するな……と」

初対面の時に言ってくれた。

だからマリカをこの家で育てることにした。

ここに住むと決めた。

「だったら義父さんも遠慮しないでください。これは義父さんの義息子でありフィオナの婚約者であるからこそ必要な責任です」

「しかしだね……」

「それに先ほどは『ｉｆ』の話をしただけで、勘違いしないでください」

一言もリライトに残ることを嫌だなんて言っていない。

「好きなんですよ、この国が」

嫌いな世界から救い出してくれたのが、この国なのだから。

「義父と義母がいる――大切な家族のいるリライトが好きです。だ

からこそ持たなければならない責任を僕は全うするんですよ」

優斗は断言する。

その姿にマルスは呆けたあと……笑った。

「……義父さん？」

「いや、私の義息子は本当に最高だと思ってね」

「当たり前じゃない」

すると、後ろからいきなりエリスが現れた。

こっそりと話を聞いていたらしい。

優斗に抱きつきながらエリスはマルスの言ったことを肯定する。

「あなた、知らなかったの？」

「知ってはいたがね」

「ユウトは私とあなたのことを考えずに自分勝手な考えをする子じゃないわ」

「そうだが、フィオナと婚約をしているとしても自分の道を行ってもらいたいと考えるのは親として普通だろう？」

「だったらユウトが私達の義息子として後を継ごうと考えたのも普通のことね」

「そうですよ」

エリスに賛同する優斗。

「ただ、義母さん？」

「なに？」

「すぐに抱きつくのやめません？」

「いやよ」

即答された。

行く先は誰がために

「護衛任務……ねぇ」

1月の終わり、優斗と和泉とレイナはある場所に向かっていた。

「父上が騎士になるというのに正式な護衛をしたことがないことを気にしてな。やって来いと言われたんだ」

「それで僕と和泉がパーティメンバーに選ばれた、と」

「本当はシュウも連れて行こうと思ったんだが」

「あいつは『リライトの勇者』だしね。意外かもしれないけど、あいつは僕がどうしようもない時以外は国内にいるつもりだよ」

何だかんだで律儀な男だ。

「そうか」

「それで護衛で向かう場所は？」

「ミエスタ。魔法科学が発展している国だ」

「そうなんだ。それで、護衛は僕ら3人だけ？」

「いや、私達以外にも2人いる」

「年輩？」

「いや、若いと聞いている」

話しながら依頼主と合流する場所に歩く。
すると、依頼主ではない人物が二人ほどいた。
近付いて姿形が見えてくると、優斗たちも相手方も驚いた。

「レイナ……先輩？」

「ラスター、どうしてお前がここにいる」

なぜかラスターがそこにいた。

「オレはギルドで護衛任務の依頼を受理したんです」

「……同じ依頼を受けたのか」

ラスターもギルドで依頼をこなしているのは知っていたが、偶然とは面白いものだ。

「隣は誰だ？」

「学院1年で女子トップのキリアっていいます」

ラスターが紹介する。

金髪のショートカットが優斗たちを向いた。

「見知った顔が多いが、とりあえず自己紹介といこうか」

レイナはまず、ラスターを促す。

「ラスター・オルグランスだ」

「キリア・フィオーレよ」

「レイナ＝ヴァイ＝アクライトだ」

「イズミ・トヨダ」

「ユウト・ミヤガワだよ」

優斗たちはキリアという少女以外見知った顔なので、どちらかと言えばキリアという少女に自己紹介した形になる。

「リーダーは誰がやる？」

レイナが４人に訊いてみる。

するとキリアが発言した。

「わたしでもラスター君でもどっちでもいいけど？」

まさかの発言にキリア以外が軽く驚きの表情をさせた。

けれどレイナはすぐに笑ってラスターを見る。

「どうする、ラスター？　やってみるか？」

「……勘弁してください。レイナ先輩の前でリーダーやる自信はありません」

無茶ぶりもいいところだ。

けれど、普段と違う様子のラスターをキリアがいぶかしむ。

「どうしたの？」

「オレが主導権を握れるメンバーじゃない」

「どうして？　これでも学院１年の男子じゃトップじゃない」

「この人、生徒会長と言えば分かるか？」

ラスターがレイナを指し示す。

「生徒会長って……学院最強って言われてる人だっけ？」

「その通りだ」

「でも、それってわたしと勝負してないから一番なのよね」

さらっと大胆なことをキリアが言う。

慌ててラスターが謝った。

「す、すみませんレイナ先輩！」

「いや、いい。こういう勝ち気な人物は嫌いではない」

くつくつとレイナが笑う。
こういう手合いはむしろ好ましい。

「まあ、でも年功序列で考えたら生徒会長がリーダーよね」

そしてキリアは優斗と和泉を見る。

「そっちの二人はそれでいい？」

「それでいいよ」

「問題ない」

１０分ほどした後、今回の依頼人が馬車に乗ってやって来た。
レイナと、レイナに促されて優斗が依頼人の元へと向かう。

「ずいぶんと若いのだね」

御者台には初老に差し掛かっているだろう男性と女性の二人がいた。
微笑ましい雰囲気を醸し出していて、話しやすそうだ。

「安心してください。確かに若いですが、実力は確かなのが私と彼

といます。私は近衛騎士団に内定が決まっていますし、こちらのミヤガワは私を軽く凌駕する実力の持ち主です」

さらに依頼人を安心させるべくレイナは話を続ける。

「依頼人は先日行われた世界闘技大会の学生の部で優勝したチームをご存じですか？」

「ああ、確かリライトの学生が優勝したんだったね」

「その時の出場メンバーが全員揃っています」

「そうなのかい？」

男性が目を丸くした。

「はい。私と彼、そして向こうにいる男子。この3人で大会を制覇しました。つまりは若い中で最高のメンバーが揃っています。ご安心ください」

どうやらレイナの話は功を奏したらしい。

男性の表情が安堵した。

「そうかい。では道中、お願いするよ」

「畏まりました」

頭を下げてから優斗とレイナは3人がいる場所へと向かう。

「そういえば誘っておいてどうかとは思うが、フィオナとマリカは

大丈夫なのか？」

「2，3週間に一度はどっか他国やら何やらに行かされてる身分だけどね。その分、休みの時は目一杯サービスしてるよ」

「パパは大変だな」

「パパだから仕方ないよ。それにお金を貰ってばっかりっていうのも嫌だしね。娘にあげる物ぐらいはちゃんと稼いでプレゼントしたいんだよ」

だからこうやって依頼を頑張って受けているんだ。

◇　◇

てっきり徒歩で向かうと思っていたのだが、依頼人の温情で荷台の空いたスペースに乗らせてもらえた。
周囲を警戒しながらも話をする。

「貴方たち二人はどっちが強いの？」

キリアが優斗と和泉に訊いてきた。

「僕のほうが強いかな」

「だったら順番的にはわたしとラスター君が同じくらい強いから、その下に貴方で一番下にそっちの人がいるのね」

平然とキリアが言う。

だが、ラスターが焦る。

「その……だな。そこの二人は一応、先輩に当たるのだから横柄な態度はどうかと思うが」

「わたし、自分より弱い人は認めない性質なの」

ズバっとした言い草に優斗と和泉、レイナは小さく笑う。

「それにしても、よくお前達はこの依頼を受けられたな。Bランクに位置する依頼だぞ？」

「オレもキリアもギルドランクはDランクなんです」

「ほう、頑張っているな。まあ、どっちか片方がDランクに達していれば受けられる依頼とはいえ、両方ともDランクとは驚いた」

1年としては上出来なランクだろう。

「そっちの3人はどうなの？」

キリアとしてはレイナぐらいは自分たちと同じくらいだろうと思って訊いてみる。

「俺はEランク」

和泉の返答はキリアの予想通り。
けれど、続いた二人のランクは予想外。

「私はAランクだ」

「僕はBランクだよ」

キリアよりも2つも3つも高いランクを言われた。

「貴方がBランク！？」

特に優斗のランクに驚く。

「どうやってなったの？」

「普通にギルドの依頼をこなしてたらなったけど……」

優斗の“普通”は明らかに普通じゃない。
それは和泉とレイナはおろかラスターにだって分かる。

「ふ～ん。貴方みたいなのでもBランクってことは、量をこなせばランクは上がるのね」

そういうことなのだろう。

「でも、わたしはパーティを組んでる人たちから声を掛けられるぐらいだから、ギルドランクで実力を計って欲しくないわ」

自信満々にキリアが言う。

思わず、ラスターが優斗とレイナに顔を近付けた。

「……貴様も色々と声を掛けられた、という話を聞いたが？」

「６０通くらい書状で届いたらしいよ」

「……キリアが自慢しているのが空しくなってくるな」

「お前もこの間まではそうだったんだぞ？」

「い、言わないでくださいよ！」

今になって思えば、かなり恥ずかしい。

「何をこそこそ話してるのよ？」

「いや、なに。先月にあった闘技大会メンバーだからな。昔話に花を咲かせていたんだ」

「闘技大会メンバー？」

キリアが首を捻る。

「オレとミヤガワ、レイナ先輩は闘技大会メンバーだぞ」

「あれ、わたしも出たかったんだけど出れなかったのよね」

「ラスターはこれでも上級魔法を一つ、使えるからな」

「わたしは４属性の中級魔法使えるのに……」

つまりは学院生として上等なラインにいる。

「あとわたし、精霊術も少し使えるのよ」

自慢げにキリアが言った。

「魔法も使えて精霊術も使える。結構稀少よね、わたしって」

そう言う彼女に対して、レイナと和泉とラスターは思わず優斗を見る。

キリアが稀少ならこいつは何なのだろうか。

魔法は神話魔法まで、精霊術はマクスウェルまで。

もう稀少というか論外。

「なに？」

「昔のオレは本当に恥ずかしいと思っていた」

「気にするな。あの時は私も気付かなかったが、普通に考えたらお前の考えは正常だったと思うぞ」

「そうだ」

◇　◇

今回の護衛の行程としては3日ほどある。
ミエスタに行くにも荷物があるため、今日と明日の二日を掛けて向かう。
帰りは高速馬車で帰るため、向こうで一泊してから帰ることにしている。
そして今は1回目の休憩。
キリアと和泉は監視。
優斗とレイナとラスターは相談事。

「実際、キリア以外は実力も動きも把握しているが彼女はどうなんだ？」

「メインは魔法になります。剣技はオレより劣っていますが、それでも捌くぐらいは使えます」

「ということは、基本的に前衛は私とラスター。中衛にユウト、後衛にキリアとイズミか」

「そういうことですね」

「彼女は性格的に言うこと聞くタイプ？」

「……聞かないだろうな」

「つまりは昔のラスターだと思えばいいということか」

「うぐっ！　ま、まあ、そうですけど」

「了解。僕は全体のフォローに回るよ」

「頼んだ」

「ルート的に魔物は出てくる？」

「弱いのは出てくるだろう。ランクの高い魔物は……そうだな、一応予期しておいたほうがいい」

「Aランク単体だったら大精霊も神話魔法も使わないけど、SランクないしAランクが2体以上来たら使うからね」

「ちょっと待て。Aランクが出ても使わないのか？」

「いや、だってレイナさん倒せるし。それに僕が何でもかんでもぶっ飛ばしたらレイナさんが訓練にならないって怒る」

「ラスター、こういう本番だからこそ実力を伸ばす機会だ。それに最低ラインはユウトが設定してくれている。存分に力を振るって実力を伸ばせ」

「分かりました」

ラスターが頷く。

その瞬間だった。

「――ッ！」

優斗とレイナが一斉に構えた。

「どうしました？」

「さて、早速だがお客さんだ」

レイナは叫ぶ。

「イズミ！　キリア！　構えろ！！」

同時に気配で数を察する。

「ユウト、6体で合ってるか？」

「合ってるよ」

「左右に3体ずつ。ラスター、お前は左側だ。私は右側を相手する」

「分かりました」

「イズミは私の支援をしろ！　キリアはラスターの支援だ！」

レイナの号令に各々が散らばる。

「ユウトはどっちかが危なくなったら手伝ってくれ」

「了解」

優斗は頷くと、まずは馬車に防御魔法を掛ける。

そして魔物が姿を現わした。

「なんだっけ、これ」

ライガーの小型な奴が現れた。

「イシュライガーだ。ランクはEランク！」

レイナが答えながら1体、切り倒す。
他のイシュライガーは和泉が牽制していた。
とりあえずレイナ達は心配いらない。
優斗はラスター達を見る。
少し苦戦していた。
3体いるからか、全てに対応しようとして踏み込めていない。

「ラスター！　1体だけを追えばいい！　他はキリアさんに任せて！」

「分かっている！」

「キリアさんは2体をラスターに近付けさせないようにして！」

「わ、分かってるわよ！」

そう言うが、どうにか倒そうとするキリア。
二人だけでも十分、どうにか出来るのに出来ていない。
優斗はため息をつくと、ラスターの隣に躍り出た。

「ラスターは真ん中、相手にして。僕は右。キリアさんは左」

優斗はショートソードを抜き、そのまま逆袈裟で切り捨てる。
ラスターも1体だけを相手にすれば、優斗に少し遅れて撃破。
キリアもラスターからさらに遅れて倒した。

「大丈夫か？」

レイナが駆け寄ってくる。

「あれぐらい問題ないわ」

「心配しないでください、レイナ先輩！」

1年生コンビは意気揚々と答える。

けれど優斗はバッサリと切り捨てた。

「全然、駄目。これじゃ危ないよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5883t/

巻き込まれ異世界召喚記

2012年1月4日09時01分発行